

ソードアート・オンライン～焔の剣聖～

ほにやー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アインクラッドに一人の剣士がいた。

炎の様な赤いコートを身に纏い、手には赤く透き通るような輝きを放つ刀があった。

その剣士の一振りは、焔を幻視し、熱を感じると言われている。故に、その剣士はこう呼ばれる。

《焔の剣聖》と

※この作品は、劇場版ソードアート・オンライン プログレッツシブ 星なき夜のアリアに登場するオリジナルキャラがヒロインとなっております。多少の映画のネタバレもあるのでご注意ください。

また作者は原作キャラに、自身が作ったオリジナルキャラをくつつけることが大好きなので、その辺りもご注意ください。

なお、キリアスは健在です。

劇場版を見て一目でミトに惚れました。

目次

番外編

攻略組プレイヤー人気投票 | 1

バレンタイン編 | 8

コラボ回 《蒼の道化師は笑う。》

道化師との邂逅 | 21

再会を願うカイ | 30

仮想世界にまで来る迷子 with 愉快的仲間たち | 37

剣聖となる者の帰還 | 44

剣聖と道化師 | 52

コラボ回 《ソードアート・オンライン ボンド・アンド・デイスペア》

とある日に出会った少年 | 66

不思議なプレイヤー | 73

一時の再会、永劫の別れ | 81

アインクラッド編

プロローグ | 91

第1話 剣の世界へ | 94

第2話 最悪な誕生日と誕生日の日 | 103

第3話 《森の秘薬》クエスト | 110

第4話 金策と再会 | 118

第5話 懐かしい名前 | 122

第6話 攻略会議 | 128

第7話 風呂場での作戦会議 | 136

第8話 確信 | 142

第9話 ボス攻略戦 | 149

第10話	フロアボス討伐	159
第11話	ビーター	163
第12話	果たされる約束	169
第13話	月夜の黒猫団	175
第14話	本音	181
第15話	サボりで昼寝	189
第16話	圏内PK	196
第17話	事件捜査	201
第18話	罪のイバラ	207
第19話	黄金林檎	215
第20話	事件捜査②	224
第21話	第二の事件	230
第22話	涙	235
第23話	カイの過去	241
第24話	謎の解明	249
第25話	《笑う棺桶》	253
第26話	謎解きは黒幕登場のあとで	259
第27話	事件解決	266
第28話	《笑う棺桶》討伐作戦会議	275
第29話	壊れ行く心	279
第30話	黒と紅の激突、そして死	283
第31話	確固たる意志	288
第32話	見るもの	296
第33話	風に消えた言葉	302
第34話	護衛	306

第35話	ミトの料理	312
第36話	決闘	316
第37話	迷宮区での休息	324
第38話	青眼の悪魔	330
第39話	ユニークスキル	338
第40話	《神聖剣》との対面	344
第41話	聖騎士VS黒の剣士&焰の剣聖	349
第42話	歪んだ愛情	355
第43話	純粹な愛情	363
第44話	独身最後のパーティー	371
第45話	ビーストタイマーになる少女と剣聖の弟子になる少年	379
第46話	剣士と剣豪との出会い	388
第47話	流麗の涙	398
第48話	決意と自覚	409
第49話	鍛冶師のパーティー	422
第50話	落下	430
第51話	かつての恩人	435
第52話	良い所	448
第53話	出逢うのは……	451
第54話	ノア	458
第55話	《はじまりの街》へ	461
第56話	救出作戦	473
第57話	《MHCP》と《ASMAP》	481
第58話	ノアの心	495

第59話 釣り大会、そして…… | 505

第60話 骸骨の刈り手 | 511

第61話 終焉の時 | 520

エピローグ | 530

フェアリー・ダンス編

プロローグ | 536

第1話 未帰還の閃光 | 539

第2話 妖精の国へ | 546

第3話 妖精との戦い | 552

第4話 翡翠の街《スイルベーン》 | 561

第5話 意味あるものに | 571

第5・5話 ノアとユイ | 576

第6話 現実でのジークとリーファ、ついでにレコン | 578

第7話 旅立ち | 582

第8話 一緒に生きたかった | 591

第9話 囚われの閃光 | 596

第10話 《ルグルー回廊》での戦闘 | 600

第11話 相棒ならきつと…… | 609

第12話 黒の剣士VS猛炎の将 | 616

第13話 同盟調印 | 623

第13・5話 動き出す者たち | 631

第14話 《央都アルン》と世界樹の中 | 634

第15話 後悔と贖罪 | 640

第16話 病院での出会い | 643

第17話 再会と正体 | 648

第18話	本音で	655
第19話	集結	659
第20話	突入	672
第21話	罪人の妖精王	677
第22話	堕ちた英雄	686
第23話	英雄	692
第24話	天魔失墜	699
第25話	蘇り	709
第26話	最終決戦	715
第27話	鍛冶師VS骸骨の刈り手&魔王VS魔王	719
第28話	一家団結	725
第29話	業火刀	731
第30話	再会	741
エピローグ		751
フロントム・バレット編		
プロローグ		765
第1話	喫茶店での会話	773
第2話	花言葉	780
第3話	アパートの隣人	785
第4話	GGOへ	790
第5話	《Untouchable!》	799
第6話	予選開始	804
第7話	GGOでの戦闘	812
第8話	忘れてた記憶	819
第9話	予選決勝戦	826

第10話	予選決勝戦《カイVSキリト》	834
第11話	BOB本戦前	838
第12話	本戦開始前	846
第13話	死銃	852
第13・5話	帰りを待つ者たち	859
第14話	死銃追跡	865
第15話	《JB》と《スノウ》、そして《リヒター》	869
第16話	狙撃手のプライド	877
第17話	エゴ	888
第18話	真相	894
第19話	礼	900
第20話	3人の所へ	904
第21話	軍事工場跡地	909
第22話	それぞれの戦い	911

番外編

攻略組プレイヤー人気投票

「攻略組プレイヤー人気投票？」

「なんだそれ？」

2024年9月23日

最前線72層主街区《オズモルト》の街外れにあるオープンカフェで、カイとキリトはクラインと共に3時のオヤツついでに情報交換をしていた。

その際に、クラインからその事を聞かされた。

「おうよ。今日から転移門広場門に投票箱が設置されるらしいぜ。そんで、今日のこの新聞に投票券が付いてるんだ」

そう言い、クラインは手にした新聞《アインクラッド週報》を机に置く。

アインクラッドにはこの様な新聞の体を取ってるメディアが三つある。

1つは、アルゴが発行してる攻略情報紙、毎週水曜日発売《ウィークリー・アルゴ》。

2つ目が、小説やコラムをメインに載せた娯楽誌、毎週金曜日発売《週刊ストーリーーズ》。

そして、最後が最大のボリュームを誇る総合情報誌、毎週月曜日発売《アインクラッド週報》。

こう言う物は作るのに、NPCの印刷所に頼んで発行して貰うのだが、発行するだけでもかなりの金額になる。

更に、《ウィークリー》は2000コル、《ストーリーーズ》は3000コル、《週報》は5000コルもする。

攻略組なら大した出費ではないが、ミドルゾーンのプレイヤーや、《はじまりの街》にいる待機組にはかなりの出費。

その為、回し読みが行われる。

SAO内では、意図的に破壊しようとしないう限り、武器防具以外は

触った程度では汚れたり破れたりしない。

だからこそ、少しでも出費を抑えたい者は回し読みをする。

カイとキリトも、コンビニを組んでるのに態々同じものを1つずつ買うのも勿体ないので、『ウィークリー』と『週報』を折半で、定期購読してる。

ただ、カイは『ストーリーズ』の方も読みたいので、こっちはカイ個人で定期購読してる。

「『週報』はページ数も多くて採算ラインも厳しいだろうに、なんでこんなコストのかかる催しするんだがな」

「全くだな。案外、何か裏の事情があったりしてな」

「何他人事みたいにしてんだよ。おめえらもノミネートされてるんだぞ」

「はあ？」

クラインに言われ、2人は慌てて『週報』を開く。

真ん中の見開きページに、何十人も攻略組メンバーがずらりと、顔写真付きで掲載されていた。

そして、一覧表の力行の所に、『カイ(焔の剣聖)』、『キリト(黒の剣士)』と名前があり、名前の上に顔写真がある。

ただ、キリトのはどつかの攻略会議の写真からトリミングしただけの後姿で、おまけに画像も荒いのでキリトはほっとする。

対してカイの写真も遠距離からの隠し撮りではあるが、こちらはしっかりと正面からとらえてあり、画像が荒くとも見る人が見ればカイと一目でわかる。

そんな一覧を眺めていると、カイとキリトはある人物もノミネートされているのに気づく。

それはミトとアスナだった。

『アスナ(血盟騎士団第一副団長・閃光)』、『ミト(血盟騎士団第二副団長・死線)』と長い肩書きが掛かれており、この2人もまた隠し撮りだ。

だが、ミトもアスナも、多少画像が荒くとも、その美貌はなんら失われていないのが、カイとキリトの感想だった。

「なあ、これ結果は分かり切ってるじゃないか？」

「言えてるな。出来レースって訳じゃないだろうが、誰に投票が集まるか分かり切ってるな」

「そうか？それにしても、俺も何かカッコいい2つ名が欲しいなあ。うーん、おめえらは《黒の剣士》に《焰の剣聖》だろ？なら俺は《剣豪》か？なあ、カイ、《剣豪》の名前、貰ってもいいか？」

《剣豪》がカイのかつての2つ名の為、クラインはカイに使用許可を求めめる。

「別に俺が名乗った訳じゃないし、好きに使えよ」

「ま、剣豪のクラインには悪いけど、どう考えても1位はこの人だろう」

「だろいな」

そう言い、キリトはアスナを、カイはミトを指差す。

「え？キリト（カイ）そっちなのか？」

意見が分かれ、2人の間に何とも言えない空気が流れる。

「おいおい、珍しく惚気てくれるじゃねえの」

「い、いや、俺は客観的情報から客観的推測しただけで！」

「鼻屑目なしに見ても、ミトは美人だろ」

「お、おう、キリの字はともかく、カイは平然としてるんだな……………」

「事実を言ってるだけだ」

「へっ、そうかい」

そう言い、クラインが立ち上がる。

「そんじゃ、トップは無理でも、トップ10入りぐらいはしたいし、夜も頑張るとするかね。そんじゃあな！」

片手を軽く上げ、店を出て行くクラインを見送りカイも立ち上がる。

「俺も、この後ミトと会う約束してるし行くわ。キリト、また後でな」
「おう、気を付けてな」

カフェを出て、カイはミトとの待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所の店には、既にミトが着いており、カイは足早に駆け寄る。

「ミト、待たせたか？」

「ううん、今来た所よ」

カイはミトの前の席に座り、飲み物を注文する。

運ばれてきた飲み物を飲みつつ、2人は他愛のない話をし、時間が過ぎてゆく。

1時間ぐらい話していると、カイはふと人気投票の事を思い出した。

「そう言えば、攻略組プレイヤーの人気投票あるよな」

「ああ、アレね」

「あんなの誰が1位になるか分かり切ってる様なもんだよな。まあ、キリトはアスナが1位になると思ってるみたいだけど」

「なら、カイは違う人が1位になると思ってるの？」

「ああ。俺はミトが1位になると思ってるぞ」

「うくん、カイにそう言われるのは素直に嬉しいけど、私もアスナも1位になりたくないのよね」

ミトは困ったように笑って言う。

「何かあったのか？」

「うん…………ウチのギルドの経理担当のダイゼンと、物資担当のハボックの2人がね、私かアスナのどちらかが1位に、あるいは1位、2位を独占したら写真集出すって言い出して」

「じゃ、写真集!?!」

カイは思わず大声を上げて驚く。

「ちよつと大きな声出さないでよ!結構恥ずかしいんだから…………」

「わ、悪い…………でも、どうしてそんな話に?」

「新人採用についてよ」

ミトの所属する《血盟騎士団》は、アインクラッド三大ギルドの1つと呼ばれ、攻略の主戦力でもある。

そんなギルドでも、メンバー不足は否めない。

これまでは、志願者を厳しく審査するだけだったが、最近では有能なプレイヤーをスカウトしたり、他のギルドから引き抜いたりしているらしい。

「ディアベルの所から来る志願者もいるけど、やっぱり即戦力が欲しいのよ。それで、ギルドの知名度と好感度アップを狙って、そんなこと言いだしたのよ。全く、私もアスナもギルドの広告塔じゃないのよ」

ミトはぶつぶつと文句を言つて、紅茶を飲む。

「まあ、ミトやアスナの意志を無視してるのはどうかと思うけど、考え方としては理に適ってるな」

そう言い、カイもコーヒーを飲む。

「……………あのさ、カイ」

「ん？」

「もし、もしもだけど……………私の写真集が出たら、カイは買う？」

「……………は？」

ミトの口から出た驚きの言葉に、カイは一瞬固まる。

ミトも、何を聞いてるんだろうと恥ずかしくなり、思わず顔を両手で覆つて机に突っ伏す。

一方でカイは、ミトの写真集を想像する。

普段の戦闘服に私服、なんならマニア受け狙いで制服やコスプレ、更には水着なんてのもある。

それに、ただ衣装を変えて写真を撮るだけでないはずだ。

きっと色んな角度やポーズで撮り、挙句にが過激なポーズなんかもあり得る。

そして、カイはそこまで想像してその妄想を振り払った。

「あー、そうだな……………素直に言うくと、欲しい。けど」

「……………え？」

「ミトのそう言う姿を、写真とは言え……………他の誰かに見られたくないって気持ちはある……………」

そう言い、カイは顔を真っ赤にして覆った。

（俺は何言ってるんだ……………！ミトは別に俺の物でもないのに、あんな独占欲みたいなのだして……………！）

「ふーん、そっか……………」

カイが自己嫌悪していると、ミトは何処か嬉しそうにする。

「ま、まあ、安心してよ。私もアスナも、そんなことになったら意地でも突つ張つて拒否するから」

「あ、ああ、そうだな。それがいい」

「……………それにさ」

ミトはそう言い、席を立ち、カイに近寄る。

そして、カイの耳元に近付き、囁く様に言った。

「私も、そう言う格好はカイにだけ見て欲しいな」

完全に無防備な所への不意打ち。

その攻撃に、カイは過去一番に顔を赤くする。

見ると、ミトも今まで以上に顔を真っ赤にしていた。

「じゃ、じゃあ、私帰るから！またね！」

「お、おう。気を付けてな……………」

慌てて帰って行くミトを見送り、カイは未だに耳に残っているミトの囁き声を思い出す。

「つたく……………ああいうのは卑怯だろ……………」

そう呟き、カイはここに来る時に買った《アインクラッド週報》を取り出す。

ミトの前で、ミトを少しからかってやろうと思いついた物だが、今の話でその気持ちは変わった。

「焼け石に水かまだけど、ミトの写真集を誰にも見せたくないからな」

そう呟き、カイは投票券をタップし、用紙から切り離す。

羽ペンを取り出す。

「悪いな、キリト。大人しく犠牲になれ」

そう言い、投票券にキリトの名を記入した。

「どうかミトが1番に、それと、アスナとのワンツーファイニッシュになりませんように」

そう願いを込めて、カイは投票しに向かった。

2024年9月30日

攻略組プレイヤー人気投票の結果発表の日。

その結果は、カイも、キリトも、クラインも、そして、イベント企画した者たちも、誰もが予想してなかったことが起きた。

第1層《はじまりの街》を拠点とし、かつて攻略ギルド《アインクラッド解放隊》、今は《アインクラッド解放軍》と言う名に変えた大規模ギルドは、《血盟騎士団》と似た考えを持っていた。

組織力に物を言わせ、投票券付きの新聞を大量購入。

そして、一応大規模ギルドの攻略責任者と言う事からノミネートされていたプレイヤーに大量投票しまくり、見事1位になった。

その男の名は

《攻略組プレイヤー人気投票 結果発表 第1位 《キバオウ（アインクラッド解放軍・攻略責任者）》

「なんでや!!」

その結果を見たカイとキリトは、同時にそう叫んだ。

ちなみに、第2位は僅差で《ティアアベル（希望の騎士団・ギルドリーダー）》だった。

バレンタイン編

「明日奈……どうしよう………」

ミトが絶望した表情で、アスナに泣きそうになりながら問いかける。

だが、アスナは答えられなかった。

難しい表情をしながら、目の前のソレを見る。

「私、知らなかった………」

思わず顔を手で覆い、ミトは声を震わせる。

「こんな……こんな！」

とうとう涙声になり、ミトはしやがみ込んだ。

「チョコ作りが難しいなんて、知らなかった！」

今日は2月13日。

所謂、バレンタインデー前日。

ミトは恋人であるカイに手作りチョコを渡そうと考えた。

それを聞いたアスナはと言うと

(え？大丈夫かな?)

っと思った。

手作りチョコなんて、チョコを溶かして、型に入れて固めれば出来る、と思われがちだが、それは間違いだ。

チョコを溶かす時点から難しいともいえる。

一般的に、チョコを溶かす時は湯煎をして溶かす。

この時に、チョコの中に水分が入ったり、溶かすチョコが少なかったり、チョコの温度が上がり過ぎたりすると、コンクリートのような硬さのチョコが出来てしまう。

更に、型に入れる際にも、肝心の型が綺麗じゃないと、表面が綺麗に仕上がらない原因にもなる。

加えて、市販のチョコは加工には向いていない。

市販のチョコはそのままおいしく食べられるように作られており、カカオ以外にも香料や植物油脂など、多くの原料が含まれている。

その為、チョコ菓子を作る時は、調理前提で作られていて、尚且つ加工し易い、製菓用チョコを買わないといけない。

ただ溶かして固めるだけではない。

その工程だけでもかなりの技術を要するのだ。

料理が得意なアスナは、そのことを危惧してミトが一人でチョコ作りできるのか不安だった。

だが、最近ではミトの料理の腕は成長しており、レシピ通りにやれば大丈夫だと思い、温かい声援を送った。

その結果、ミトはバレンタイン前日になってアスナに泣きついた。

「深澄、まだ1日あるから頑張ろう。私も手伝うから」

「あ、りがと、う、う！」

涙声になりながら、ミトはアスナに感謝した。

「とりあえず、何で失敗したのか確認したいし、1回、深澄のやり方を見せて」

「うん、分かった」

ミトの家に集合し、アスナとミトはエプロン姿で台所に立つ。

「じゃあ、まずチョコを溶かすわね」

そう言い、ミトは製菓用のチョコを取り出す。

（あ、よかった。ちゃんと製菓用だ）

アスナはミトがちゃんと製菓用のチョコを使っていることに、ホッとした。

だが、次の瞬間思わず絶句した。

何故なら、ミトはフライパンを取り出し、火にかけた。

「……………え?」

まさかの行動に、アスナは思わず唾然とする。

そんなアスナを無視し、ミトは温めたフライパンに、製菓用チョコをそのまま入れた。

「ちよつとおおおおお!!?」

アスナの声が裏返った。

チョコを直接フライパンに入れたことに、驚いたからだ。

「ど、どうしたの明日奈?いきなり大きな声で叫んで……」

声を上げたアスナに、ミトは驚くも、アスナは急いでコンロの火を消し、ミトの頭を叩いた。

「いったあ!な、何すんのよ!」

「何すんのよじゃないでしょ!チョコを直火で溶かしたら、美味しくなくなるから!」

「ええ!?そうなの!?!」

ミトは本気で驚いた。

アスナは頭を抱えて、ため息をつく。

「はあ……。あのね、深澄。普通は温めたボウルの中にチョコを入れて、溶かすんだよ?チョコに直接火をかけるなんてしないの!」

「そ、そうなんだ……知らなかった……」

ミトは心底落ち込んだ様子を見せた。

「とにかく、一番の失敗理由が分かった気がするし、ここから頑張ろう!」

「うん、ありがとう明日奈!」

こうして、アスナの指導の元、ミトは再びチョコ作りを始めた。

お湯を張ったボウルに、刻んだ製菓用チョコを入れたボウルを付けてゆっくりと溶かしていく。

「チョコは温度が30度以上になると味が落ちちゃうから、こうしてゆっくりと溶かしていくの。だから、直火に掛けるのなんて以ての外。論外。分かった?」

「はい……すみませんでした……」

アスナに叱られ、ミトは縮こまる。

「で、こうして溶け終わったら、次はテンパリングするよ」

「テンパリング？」

「チョコの温度調整をする作業だよ。ただ溶かしたチョコを、冷やして固めるとツヤがなくて見栄えも悪いし、口溶けも悪くなるの。そこで、チョコの温度を調節して、仕上げる。それがテンパリング」

「へー。そんなことまでやるんだ」

「溶かしたチョコを、水を張ったボウルで冷まして、冷まし終えたら、また湯煎で温度を上げる。この時に、チョコの温度が低すぎたり、高すぎたりしたらダメ。かなり繊細な作業だし、どこかの段階で温度調整を失敗すると固まらないから、気をつけてね」

「は、はい……」

アスナの厳しい指導の元、ミトはチョコ作りを続ける。

そして、テンパリングを終え、いよいよ最後の工程。

型にチョコを流し込み、冷蔵庫で固めるだけだ。

「良い、深澄。ただ型に流すだけだと思わないでね。チョコを固める型が、少しでも濡れてたりするとアウトだから。埃だってNG。事前に型がしっかり洗って、乾燥させておくこと。さらに、無水タイプのアルコールをガーゼか布巾にしみ込ませて、拭けば更に良い」

「は、はい……」

アスナの指示通り、チョコを型に流し終え、ミト達は冷蔵庫に入れた。

「これで終わり。後は待つだけだよ」

「やったー！ やつと出来たー！」

喜びを爆発させ、ミトはガッツポーズをした。

その姿を見て、アスナも微笑む。

「良かったね、深澄」

「うん！ 明日奈のおかげだよ！」

「そんなことないよ。深澄が頑張った結果だよ」

「ううん。明日奈がいなかったら、私多分、この工程で失敗していたと

思う。本当にありがとう」

「そうだね。チョコを直火で溶かそうとする時点で、大問題だもん」
「うっ……」

アスナはジト目でミトを見る。

ミトは何も言い返せなかった。

「さてと、じゃあ、もう帰るね。深澄、また明日ね」

「うん！今日はありがとう！」

そう言つて、アスナはミトの家を出た。

(ふう……。とりあえず、一安心かな?)

アスナを見送り、ミトは一息つく。

「しかし、チョコ作り悔つてたなあ」

そう呟きながら、ミトは台所の片付けを始める。

「あんなに難しいなんて、思わなかった。けど、ちゃんと作れてよかった」

ミトは嬉しそうに笑みを浮かべながら、後片づけを続けた。

だが、そこでふとあることが思い浮かんだ。

「…………でも、あのチョコつて、私が作つたつて言えるのかな？」

ミトは少し不安になった。

アスナに教えてもらい、なんとか完成したが、アスナがいなきや完成しなかっただろう。

なんなら、湯煎からテンパリングまでアスナが手伝ってくれた。

ミト自身がしたことは、チョコを刻むことと、型に入れて冷蔵庫に入れること。

「…………なんか、自分で作つた実感がない…………」

ミトは複雑な気持ちを抱いた。

だが、すぐに首を横に振る。

「ううん。私が作つたら、変な味になっちゃうし、見た目も悪くなる。伊緒には美味しいチョコ上げたいから、これでいいのよ！」

自分に言い聞かせるように、ミトは叫んだ。

翌日、ミトは作ったチョコを鞆に入れ、通学した。
教室に着くと、アスナがさっそく声を掛けてくる。

「深澄、おはよう」

「おはよう、明日奈」

挨拶を交わした後、アスナはミトに尋ねる。

「ねえ、伊緒君にはいつ渡すの?」

「うん、今日のお昼にいつもの所で会うからその時に渡すつもり」

「そっか。うまくいくといいね」

「うん。ありがと」

アスナの言葉を聞き、ミトは何処かぎこちない笑顔で返した。

そして、昼休みの時間。

ミトは、鞆を手にカイとの集合場所に向かおうとした。

その途中、階段で屯している男子生徒の会話が耳に入った。

「なあ、お前らさ、チョコ貰うなら誰から貰いたい?」

「それって、うちの学校でか?」

「ああ」

「俺は結城さんから欲しいな」

「俺も!」

「分かるなあ。結城さん、美人だし料理も上手って評判だからなあ」

その声に、ミトは聞き覚えがあった。

その男子生徒たちは、ミトとアスナのクラスメイトだ。

だが、ミトもアスナもそこまで親しい訳ではなく、授業の関係で少し話をした程度の関係だ。

「俺は綾野ちゃんかなあ。俺、SAOに居た頃から竜使いのファンで
や」

「おいおい、ここではSAOの話は禁句だろ?」

「ああ、そうだった。悪い」

「まあ、でも、確かに綾野ちゃんも可愛いし、あんな子からチョコ貰ったら嬉しいよな」

「だよなあ」

「俺は、篠崎かな」

「篠崎ってマジ？あいつ、俺苦手なんだよな」

「いや、でもアイツ、意外と人気あるんだぜ？物怖じしない性格で、そこが良いって奴が多いんだよ」

「つまり、お前もそこが良いってタイプなのか」

「うるせえ」

そんなやり取りを耳にしたミトは、出て行き辛くなった。

アスナもシリカもリズも、ミトの友人。

その友人が話題の中心なので、なんだか気まずかった。

「なあ、兎沢はどう思う？」

すると、1人の男子生徒がそう言った。

自分の名前が出るとは思わず、ミトは驚く。

「兎沢かあ」

「アイツ、結城さんとは違った系統で美人だよな」

「わかるわー。スラッとしてるし、大人っぽい感じがするよな」

「結城さんが可愛い寄りの美人なら、兎沢はカッコいい寄りの美人だな」

「胸も意外と大きいし」

「顔は整っているし、スタイルもいいからチョコ欲しがる男は多そうだな」

男子生徒たちは、わいわいと話が盛り上がり始める。

「でも、今言ったメンツ、全員彼氏持ちなんだよな……………」

「それな」

「あーあ、羨ましいよなあ」

1人がため息混じりに言うのと、他の面々は同意するかのようによくため息をついた。

「きつと、手作りチョコとか貰ってんだぜ」

「俺も、人生で一度でいいから女子からの手作りチョコが欲しい」
「やっぱり本命チョコは違うんだろうな」

「そりやそうだろ。男なら、一度は憧れるシチュエーションだし」
「だよなあ」

「けど、現実は厳しいよな」

「全く持ってその通り。世の中、不公平過ぎる」

男子生徒たちは肩を落としながら、深いため息をつく。

（やっぱり男って、バレンタインにはチョコが欲しいもんなんだ。なら、伊緒も喜んでくれるよね）

話を聞きながら、ミトはカイにチョコを、それも手作りチョコを渡すのは間違いではないと確信し、少しだけ胸の中にあつた不安を拭えられた。

「でもさ、この間、調理実習あつたじゃん」

すると、1人の男子がそう言いだした。

「ああ、あつたな」

「俺さ、兎沢の隣の班だったんだけど、兎沢の作った料理、お世辞にも美味そうには見えなかつたんだよ」

「は？どういうことだ？」

「いや、別に味が酷いとかさ、見た目が悪いわけじゃないんだ。ただ、なんかこう……。パツとしないと言うか……」

「なんだそりや」

「でさ、試しに俺の所の班と、料理交換したんだけど、案の定って言うか微妙だつたんだ」

「そうなのか？」

「ああ。だから、もし兎沢から手作りチョコを貰っても、あんまり期待出来ないかもなって思うんだよ」

男子生徒の言葉に、ミトはショックを隠せなかつた。

「いや、でも、頑張って作ってくれたことは嬉しいだろ？不味くても、微妙でも、自分の為に一生懸命作ってくれたってのは最高の付加価値だろ？」

「そりや、1回や2回なら嬉しいけど、それが毎年続くって思うと結構

憂鬱じゃね?」

「うーん……それはそうかもしれないな……」

「不味いチョコを毎年貰うぐらいなら、市販の方がマシだって思っちゃ
まうかも」

「そうか……。確かに、一理ある」

男子生徒の言葉に、ミトは悔しそうに唇を噛み締めた。

そして、男子たちの前に堂々と姿を出す。

ミトの登場に、男子たちは驚く。

「ごめん、そこ通りたいんだけどどいてくれる?」

ミトは階段を使いたいことを伝える。

「お、おお、悪いな」

男子たちは慌てて道を開けると、ミトはそのまま階段を下つてい
く。

(……なあ、さっきの話聞かれてたかな?)

(いや、多分大丈夫だろ。兔沢普通にしてるし)

(そうだよな。聞こえてたら、あんなに平然としてる訳ないか)

(それもそっか。なら、大丈夫か)

男子たちは小声で話しながら、ミトが通り過ぎるのを見送る。

男子たちを通り過ぎ、ミトは男子たちを振り返ると、笑顔で口を開
く。

「そうだ。良いこと教えてあげるわね」

「お、おう。何?」

ミトの口調が変わったことに戸惑いながら、男子は返事をする。

「貴方達がそんなこと心配しなくても、貴方たちがチョコを貰えるこ
となんて一生無いから安心して」

良い笑顔でそう言い放ち、男子たちは心を言葉のナイフで突き刺
され、しばらくその場に立ち尽くしていた。

ミトは、そんな男子たちに一矢報いると、急ぎ足でカイとの待ち合
わせ場所の部屋に向かう。

3回ノックし、一拍間をおいて、再度3回ノック。

すると、ガチャツと鍵が開き、扉が開かれる。

「遅かったな、深澄。なにかあったか?」

「う、うん、ちよつとね。まあ、大したことじゃないから」

ミトはカイの質問に答えると、カイと一緒に部屋に入る。

いつものようにソファアームに座り、カイと隣り合わせになる。

いつものように2人で弁当を食べ、他愛のない話をする。

そして、最後にミトはカイにチョコを渡すことにした。

「ねえ、伊緒。今日がバレンタインなのは知ってるよね?」

「ああ、そうだな。それで、深澄は俺にチョコをくれるのか?」

「うん。そのつもり」

ミトは鞆から小さな包みを取り出し、カイに渡す。

「はい。私から伊緒へのチョコ。受け取ってね」

「ありがとう。開けても?」

「うん。いいよ」

カイは丁寧にラッピングを解き、中身を取り出す。

「おお、これは美味そうだな」

「うん、味は大丈夫だと思うよ」

「さつそく食べてもいいのか?」

「もちろん!」

カイはチョコを一つ取り出し、口に運ぶ。

「どう?美味しい?」

「ああ、凄く美味いぞ」

「よかったあ」

ミトはホツとした表情を浮かべ、笑みをこぼす。

「けど、これ深澄が作ったのじゃないよな?」

「え!」

ミトはギクリとする。

まさかバレるとは思ってもいなかったからだ。

「どうして分かったの?」

「どれだけ深澄の料理食ってると思ってるんだ?お前が作ったかそうじゃないかなんてすぐに分かるっての。大方、明日奈に手伝ってもらった感じだろ?」

「……正解」

ミトは観念したように、素直に白状した。

「ごめん、確かに料理の腕は上がってるけど、まだお菓子作りができるほどじゃなくて……」

「別に謝るなって。深澄からチョコが貰えただけで嬉しいからさ」

「……ホント？」

「ああ、本当だ」

「……そっか」

カイの優しい声色に、ミトは頬を赤く染める。

「でも、もし来年もあるなら来年は深澄が1人で作ったのくれると嬉しいけどな」

「……実はさ。もう1つあるの、チョコ」

すると、ミトはそう言っただけからもう1つのチョコを出す。

「……はい！これ、私の気持ちだから受け取って!!」

恥ずかしさを誤魔化すかのように大きな声で叫ぶと、手に持っていた箱を差し出す。

差し出された箱を見て、カイは驚きながらも受け取る。

「これって、もしかして……」

カイは恐る恐る尋ねる。

すると、ミトは顔を真っ赤にしながらも答えた。

「うん、そうだよ。伊緒の為に、私が1人で作った手作りチョコ」

そう言っていると、ミトは視線を外す。

「最初はさ、自分で作ったの上げようと思ったの。でも、失敗して明日奈に泣きついて、なんとか美味しく出来たけど、殆ど明日奈にやっってもらってそれって自分の手作りって言えるのかなって思ったらさ、なんか自信無くしちゃって」

ミトは申し訳なさそうに語る。

「それで、もう一度最初から1人で作ったんだけど……あまり上手く出来なくて……」

ミトにそう言われ、カイは箱を開ける。

そこには、不格好な形のチョコがあった。

形は歪で、表面が白くなっていた。

「味見したら、硬いし、くちどけ悪いし、舌触りも悪いし、香りも風味も悪いしで、驚くほど美味しくなくて……………ごめん！やっぱ、それなし！」

ミトはそう言うと、チョコを取り返そうとする。

だが、カイはチョコを取られまいと、ミトから遠ざける。

「ダメだ。このチョコは絶対に渡さない」

「なんでよ!!そんな不味いチョコ要らないでしょ!?!」

「誰が不味いつて言った？俺はまだ食ってないぞ」

「ダメ!こんなの絶対不味いつて!」

「深澄が作ってくれたんだろ?だったら、不味いわけがない」

カイはそう断言すると、チョコを口に入れる。

ミトはその様子を黙って見ていた。

すると、カイは顔をしかめ、首を傾げる。

「やっぱり不味いんじゃない!」

「まあ…………上手くはないな」

「ほらね?だからさ、無理して食べなくたって…………」

「でもな、俺は好きだ」

カイの言葉に、ミトは驚いたような顔を見せる。

「え?だって、不味いんでしょ?」

「いや、確かに味は不味い。だけど、深澄が一生懸命作ってくれたんだろ?」

「う、うん」

「だったら、美味いとか、美味くないとか関係ない。深澄が作ったチョコなんだからな」

「で、でも…………」

「それに、ここで諦める深澄じゃないだろ?」

カイはニヤツと笑い、もう一口チョコを齧る。

すると、ミトは暫く唾然とするも、カイと同じようにニヤツと笑う。

「当たり前でしょ?来年は、最高に美味しいチョコ作ってあげるから」

「ああ、期待してるよ」

そう言いながら、ミトとカイはお互いに笑い合った。

コラボ回 《蒼の道化師は笑う。》 道化師との邂逅

「カイ、まだかな……………」

いつもの公園のベンチ、ミトはカイが来るのを待っていた。

いつもカイが来る時間はまだ先なのだが、ミトはカイが来るのを心待ちにしていた。

手持無沙汰になり。手にした携帯ゲーム機でゲームをする。

「おい」

「……………な、なに？」

突然のカイとは違う少年からの呼び掛けにミトは俯いていた顔を上げる。

目の前に立つのは青いメッシュ入りの黒髪を無造作に掻き乱す少年の姿。

若干の不信感是否めないが不思議と彼は信用できそうだと、ミトは感じた

「一人でゲームか？ガキはガキらしく、元気に遊べ」

「君も子どもじゃない」

「俺をそこいらのガキと同じにすんな。こー見えても、カラーギャングのリーダーやってんだ。その辺の奴らとは、鍛え方が違いえんだよ」

「カラー……………ギャング…？」

聞きなれない言葉にミトは首を傾げた。

よく見ると目の前の少年はクラスメイトの男子達とは異なり、妙な逞しさを感じる

生傷だらけの体に、冷めた瞳、着古したGジャン。

その出立ちに、ミトの瞳には、彼がまるで、別世界からきた異邦人の様に映った

「言ってみりゃ、悪さばっかしてる社会から炙れたガキの集まりだ。

この前なんか、俺らのことを社会のクズとか言ったおっさんをボコボ

「にやってやった」

「悪いことは駄目だよ。いつか、きっと後悔する日が来るよ」

「……だとしても、俺たちはそういうやり方しか知らねえんだよ」

「……でも良くないよ、やっぱり。それで君の気分が晴れるなら、私は何も言わないけど。違うよね？だって……今の君は寂しそうに見える」

「……寂しそうねえ。だとしても、さっきも言ったが俺はそういうやり方しか知らねえんだよ。気に食わないことに対して、怒りを打つけることしか出来ねえんだよ。確かに間違ってるかもしれないねえがよ。でもな、俺はそうやって生きてきたんだ、だからこれからもその生き方を曲げるつもりはねえ。まあ……少しだけなら、お前の意見を尊重してやってもいいけどよ、あくまでも少しだからな？」

少年の問いにミトは顔を上げ、頷いた。

「そういえば……君はこんなところでなにしてるの？」

「実はよ、ダチと一緒に逃げてただけだよ。ドーも……俺だけが逸れちまったみたいでな。入間市はどっちだ？」

「ここは、所沢市だよ？どれだけ迷子なの？バカなの？キミは」

「俺は迷子じゃない。其れにバカさんは、迷子になってるあのバカたちだ」

「やっぱり迷子だよね」

「違う。迷子じゃない」

「いや迷子だね」

「迷子って言うヤツが迷子だ」

「なるほど、迷子なんだね。えっと……迷子くんって呼べばいい？迷子くんはどうして迷子になったの？」

「やめろ、迷子を連発するな。それだと俺が迷子みたいだろ。あと、俺には蒼井天哉あおいてんやって、名前があんだよ。迷子くんとか呼ぶな」

迷子呼ばわりされたのが余程、不服だったのか少年もとい天哉は自らの名をミトに告げる

「それと、俺は名前を名乗ったんだ。お前も名乗るのが礼儀だろ」

「そうね、私は兎沢深澄だよ。気軽にミトって呼んでね」

「ミトか、なら俺のことはテンで良い、よろしくな…ミト」

「わかった。よろしくね、テン」

「よし…じゃあ、行くか。ミト」

「え…何処に？」

咄嗟に腕を掴まれ、深澄は困惑した表情を見せる。

「ダチ探し。そのダチの中に、ゲームが得意な奴が居るんだけどよ。アイツ、ゲームだと容赦なくて、俺たちだと相手にならねえんだ。で、たまにはその鼻をへし折ってやりたい訳だ。協力してくれるか？」

ミトとしては、テンの友人探しに付き合ってもいいと思っていたが、まだカイが来ていない為、その場を離れることを渋った。

「待って、私、友達と待ち合わせしてて、その子が来るまで少し待ってくれない？」

「なんだよ、お前ダチいたのかよ。こんな公園で一人でゲームしてるから、ボツチかと思っただぜ」

そう言い、テンは友人の黒髪のゲームとパスタが大好きなボツチを思い浮かべる。

その時、腕を掴まれる感覚が、テンを襲う。

そこそこの痛みに、テンは「なんだ？」と、思いながら腕を見る。

見ると、ミトの手を掴んでいる腕を別の者の手が掴んでいた。

「おい、お前。ミトに何してる？」

天の腕を掴んでいるのは、カイだった。

「か、カイ、待って！この人は」

「おい、なんで俺の腕掴んでやがる？放せよ」

ミトの言葉を遮る様に、テンがそう言った。

「お前、その青メッシュの入った黒髪、噂で聞く悪さをしてる小学生の不良集団の1人だな」

意外にも、カイはテンの事を知っており、テンは一瞬驚くも、すぐに忌々しそうな顔をする。

「悪さじゃねえ。俺らの事を馬鹿にする連中にし返してるんだ。それと、俺たちはカラーギャングだ」

「同じだろ。人様に迷惑を掛けてる時点で、ギャングも不良も同じだ」

カイの何処かテンを見下したような発言に、テンは苛立ちを覚える。

本来のカイなら、相手が不良だろうとカラーギャングだろうと、見下すような真似はしないし、このような物言いはしない。

だが、今はミトが絡んでいた為、カイは何処か冷静じゃなかった。

「……気に要らねえな。その目、俺達を社会の屑呼ばわりする大人と同じだ」

そう言つて、テンはミトの手を離し、カイの腕を振り払う。

「今日は珍しく喧嘩のない日かと思つたが、いつも通り喧嘩の日だ」

テンは、カイに向けて拳を握る。

「ミト、下がつてろ」

「ちよ、だから話をー」

ミトが誤解を解こうとするも、カイにもテンにも言葉を届かず、2人は喧嘩をする態勢に入る。

その時、公園の傍を車が通った。

それに驚き、公園に居たハトが空を飛ぶ。

それを合図に、2人の喧嘩が始まった。

殴つて、殴られ、ぶつかり合う。

ミトは、カイが喧嘩が出来ることを知らなかった為、驚く。

そして、そのカイに負けず劣らずの攻防をテンは繰り出す。

互いの頬には痣が出来、唇の端は切れて血を流し、鼻血も流す。

そんな2人の喧嘩は、テンの友人の桐ヶ谷和人ことカズ、灰沢純平、

緋泉彩葉、緑川菊丸の4人によって止められた。

何時まで経つても、帰つて来ないテンを心配し、迷子捜索に乗り出し、前に市を跨いでたことを思い出し、隣の所沢市まで探しに来た。

4人の介入により、テンは抑えられ、カイもミトがしっかりと誤解を解いた為、全部自身の早とちりだったと言うことを知る。

「その、すまなかった。てつきり、噂の不良集団がミトに絡んでると思つてあんな態度を取った。本当にすまなかった」

あつさり自身の否を認め、謝るカイに、テンは思わず毒気を抜かれる。

「あー、いや、その、なんだ………最初に突つかかったのは俺の方だし……悪かった」

テンもカイに対して謝罪をする。
すると、そんなテンにカズたちが驚く。

「あのテンが謝っただど!?俺は夢でも見てるのか!?!」

「何か悪い物でも拾い食いしたんじゃない?」

「きつとピーナッツバターでも拾い食いしたんでしょう。何せ、頭の大半がピーナッツバターで埋め尽くされてる変人ですから」

「バナナ食ったら治るんじゃないか?」

「お前ら!好き勝手言うんじゃないやねえ!てか、例えピーナッツバターだったとしても拾い食いなんかするか!」

「「え?マジ?」」

「俺を何だと思ってるんだ!」

「「ピーナッツバター狂いの迷子常習犯」」

「息ピッタリだな、おい!」

唐突にやって来た友人たちとコントを繰り広げるテンに、カイとミトは思わず笑った。

カイとミトの2人が、テンたちカラーギャングと打ち解け、メンバー入りするのに時間は掛からなかった。

カイはテンたちカラーギャングの中で最年長であり、自然と彼らの相談役の様な立場になった。

気に食わないことに対して、怒りを打つけることしか出来ないテンたちは、そのまま進んでいけば、何れはそこら辺に居る不良集団と変わらない存在になっていただろう。

だが、そんな彼らをカイとミトの2人は何時も隣で制し、時には言葉で、時には拳で語り合い、全員が間違った道へ進まない様にした。

その甲斐もあって、テンたちカラーギャングは、他のカラーギャングや不良集団から人を守る自警団の様な立場となり、徐々にではあるがその存在を認められるようになった。

そんなある日。

カイとミトが出会って、そして、テンたちと知り合って1年程経過

するかと言う時、テンはある所へと走っていた。

いつもたまり場としている錆びれたゲームセンター。

カイから話があると聞かされ、テンはゲームセンターに向かうと、そこにカイの姿はなく、1通の置手紙をテンは見つけた。

そこには、カイの字でこう書かれていた。

『チームを抜ける。世話になった』

それを見た瞬間、テンは飛び出し、カイを探しに向かった。

カイが何処にいるかは分からなかった。

だが、テンは無意識のうちにカイが向かうなら、あそこかもしれないと思った。

テンが向かったのは、ミト、そしてカイと出会った公園だった。

そこに向かう道中、迷子にならなかったのは奇跡だった。

「テン……どうしてここに……」

「なんでだろうな……お前なら、ここに来るかもと思ったしまった……」

「よく迷子にならなかったな。迷子癖治ったか？」

「ふざけるのも大概にしろ」

そう言って、テンはカイの置手紙を見せつける。

「どういうことだ、これは……冗談にしては質が悪いぞ……」

「……冗談じゃない。俺はチームを抜ける」

「理由はなんだ？」

「……県外に引越すんだ。中学も、引越し先で進学する」

「その程度で、チームを抜けるのかよ？俺らは仲間だよ」

「何とでも言えばいい。もう決めた事だ」

カイはそう言い、公園を出て行くこうとする。

「ミトはどうするんだよ!？」

テンがそう叫んだ。

ミトの名に、カイはその足を止めた。

「ミトを置いて行くのかよ！何も言わず、消えるのがカッコいいとか思ってるのか！」

「ミトなら、俺が居なくなっても大丈夫だ。お前たちが居る。なあ、テ

ン、ミトの事」

「頼む」、そう言おうとした瞬間、テンの拳がカイの頬に当たる。

カイはそのまま吹き飛び、地面に倒れる。

「チツ……藪から棒に何だよ！」

「惚れた女を、他人に預けようとかどんな神経してるんだよ。それもカラーギャングのリーダーに……お前、そこまで馬鹿だったか？」

「惚れた女の為なら、足を洗うぐらいの事すると思ったんだがな……」

殴られた頬を抑え、カイは立ちあがる。

「それに、疲れたんだよ……誰かと一緒にいるって事にな。どうやら、俺は一人で居ることが性に合ってるみたいだ。その点、お前は平気だろ？和人や順平、彩葉に菊丸の様な濃いメンツと一緒に居られるぐらいだ。ミトを受け入れる懐はあるだろ、リーダー」

「どうやら、お互いにテメエが惚れた女一人幸せにする度胸も無い腑抜けだって自覚はあるみたいだな」

そう言い、テンはカイと出会った時と同様の態勢に入る。

「だが、お互いミトを支えられんのは目の前の腰抜けしかいねえと思ってる。なら！」

テンは走り出し、拳を振るう。

「こいつが早えよな！」

カイは拳を受け止め、カウンターをテンに当てる。

テンは、カイの拳を食らいながらもカイを見続ける。

「チームを抜けることにとかやくは言わねえ！だが、俺が勝ったらミトに告白してもらおうぞ！遠距離恋愛でもしてろ、馬鹿カイ！」

カイの防御を突破し、カイに再び攻撃を当てる。

「告白の押し付け合いかよ！そんなこと、ミトに知られたら拳骨ですまねえぞ！そんなことも分からなくなったか、可哀想テン！だが！」

カイは、テンの攻撃を食らいながら、足蹴りを放つ。

足蹴りによって、テンとの距離が離れる。

「お前が、ミトに告白する所は見てみたいな！」

「もう勝った気でいるのかよ！」

「決着なんて、出会った時に付いてるんだよ！」

「昔の話だろうが！」

テンは、カイに負ける気はなかった。

いや、負ける訳にはいかなかった。

テンは、ミトに惚れている。

普段は見向きもしない癖に、一度でも道を踏み外せば、社会のクズ呼ばわりされるそんな世界をテンは嫌っていた。

誰からも相手にされず、只管に怒りを打つける毎日。

繰り返される日々に、テンの世界は、白と黒の二色の景色を映していた。

そんな世界に、最初にミトが新しい色をくれた。

惚れないわけがなかった。

だが、それと同じぐらいテンはカイが好きだった。

今の自分たちがあるのは、カイとミトのお陰。

そんな2人には、幸せになってほしい。

そう思っていた。

(それに……ずっと近くで見続けていたからこそ分かつちまうんだよ

……ミトが、誰に惚れてるかぐらい………だから！)

「負ける訳にはいかねえんだよ！」

気付けば夕日が、公園全体を紅く染め、その中央にはカイが仰向けで倒れていた。

そんなカイを、テンは見ていた。

息を切らし、体をボロボロにしながらカイへと背を向ける。

「俺の勝ちだ……告白に、期限は付けないで置いてやるよ……」

ボロボロの身体を引き摺り、公園の出口へと向かっていた。

「それと、アイツらにはチーム抜けた事、適当な理由で誤魔化しといてやる……だから」

出口に差し掛かると、テンはカイの方を見る。

「いつでも帰って来い……ダチ公」

テンは、普段ではしない優しい笑みを浮かべ、カイにそう言う。

それだけ言い残し、テンは公園を去って行く。

そして、これがテンとカイの最後の会話だった。

そのままカイは音信不通となり、カズたちはテンにカイがチームを抜けた理由を尋ねた。

その際に、テンは、「カイの奴、マヨネーズ王国を探す旅に出るってよ」と言った。

幾らカズ達でも、その理由が嘘だと言うのは分かった。

だが、テンの目がそれ以上何も聞くなと語っており、表面上はそう言う事でカイの脱退を受け入れた。

ミトはと言うとカイが居なくなっただけなのに、最初こそ泣いた物のテ
ンたちの支えもあり、立ち直ることが出来た。

そして、数年後、彼らは再び再開することとなった。

ゲームでの死が現実の物となる恐ろしきデスゲーム、VRMMOR
PG《ソードアート・オンライン》の中で……

再会を願うカイ

カイがテンたちの元を離れて数年が経った。

カイは生まれ故郷へと戻って来たが、テンたちの所へ戻ろうとはしなかった。

「あいつら……元気にしてるかな……」

カイとミトが、テンたちのチームに加入した時に取った写真を眺め、カイは呟く。

「伊緒、入ってもいいか？」

部屋の扉をノックされ、カイは写真を机に仕舞う

「伯父さん、いいよ」

扉が開き、伊緒の伯父である神里耕哉が現れる。

「伊緒、今日が何の日か覚えてるか？」

「え？今日……なんだっけ？」

「やれやれ、また忘れたのか」

そう言つて、耕哉は紙の包を取り出す。

「伊緒、16歳の誕生日、おめでとう」

「え？……あ、そっか。今日、誕生日か」

カレンダーの日付を確認し、今日が自分の誕生日であることを思い出す。

「まったく、去年もそんな調子だっただろう」

「あはは……ありがとう、伯父さん」

困つたように笑い、プレゼントを受け取る。

「ところで伯父さん、これって？」

「聞いて驚けよ……《ソードアート・オンライン》だ」

「え!？」

耕哉の言葉に驚き、慌てながら包を開ける。

そこにあつたのは、今話題のVRMMORPG《ソードアート・オンライン》だった

「凄い！これ、一人限定の初回ロットなのに！」

「ふふん、俺は運がいい男だからな」

耕哉はそう言って笑う。

「俺は今から出掛けるけど、あまり遊び過ぎるなよ。今日は誕生日だから大目に見るが、何事も程々だぞ」

「わかってるよ！ありがとう、伯父さん！」

出かける伯父を見送り、カイはすぐにベッドの傍に置いてあるナーヴギアを被り、ソフトをスロットに入れる。

時刻は12:59

もうすぐでSAOサービス開始が始まる。

「よし……………リンクスタート！」

そう唱えると、暗闇の世界に飛んだ。

『《ソードアート・オンライン》の世界へようこそ。まずはプレイヤーネームを入れてください』

「じゃあ、k a iで」

親しみのある名前を入力し、その後にアバターの設定画面に映る。特にこだわりがなかったため、デフォルト設定に髪型や目の形を少し弄るだけですませた。

『それではゲームをお楽しみください』

アナウンスが終わると共に、虹色のリングをくぐり、カイは地面に立っている感覚に襲われる。

ゆっくり目を開けると、そこはPVで見た、SAOの世界だった。

「おお、ここがSAOか……………βテストの抽選も落ちて、ソフトの発売も平日だから諦めてたけど……………伯父さんには感謝だな」

そう言い、カイは伯父に感謝の念を飛ばす。

「さて、まずは武器屋だな」

マップを頼りに、武器屋に向かい、カイは武器屋に入る。

「ハンマーはあんのか？俺的にはモンスターの頭をかち割れるヤツが欲しいんだが」

「初期からある訳ないだろ、そんな高火力なヤツが」

「槍って、使い方とかあんのか？足で蹴る以外に」

「足で蹴るを前提の選択肢に入れるな。普通に手を使え、手を」

「手裏剣ない？キリトさん」

「剣の世界ってコンセプトだからな。ブーメランとかはあるかもしれないけど…手裏剣は流石にな」

「すみませんが店主。金の斧または銀の斧はありますか？できれば、出来損ないの斧があると非常に嬉しいのですが。ああ、泉があっても落としてはしませんよ。この世界での武器は大変貴重ですからね」

「ヴェルデ、御伽噺をしたいなら店の外でやるといいぞ。というか真面に武器を探すつもりはあるのか？お前たちは」

武器屋には、既に5人の客がいるらしく、黒髪のプレイヤーが仲間と思しき4人にあれこれと説明をしていた。

(騒がしい連中だな……でも、楽し気だな)

カイは、楽しそうに騒ぐ5人に、テンたちを思い出した。

カイは店で初期所持金で買える範囲の武器で、曲刀を購入した。

そして、すぐさまフィールドに出て、SAOの目玉システムと言えるソードスキルを練習し、直ぐに物にした。

「こうして体を動かすってのがいいな」

初期モンスターを新たに葬り、カイは言う。

「本当にいい時代になったな………アイツらと、一緒ならどれだけ

楽しかっただろうか……」

自ら、テンたちとの絆を切って置きながら、カイはテンたちとS A Oに居る自身を空想する。

「ま、もう俺には関係ないか」

悲しそうに笑い、カイは狩りを再開する。

かなりの数のモンスターを狩り、時刻は17時13分になっていた。

「そろそろ帰るか」

曲刀を仕舞い、カイはログアウトしようとメニューウィンドウを操作する。

「あれ？ログアウトボタンが無い？」

幾らメニュー画面を探しても、ログアウトの口の字も見当たらず、カイは徐々に焦り始める。

「なんだこれ？バグか？」

そんなことを考えていると、突然鐘のような音が鳴り響いた。

突然のことに驚いていると、カイの体が鮮やかなブルーの光に包まれた。

光が収まると、三人は《始まりの町》にいた。

他にも、たくさんの方のプレイヤーたちが集まっており、全てのプレイヤーが集まっているのではと思う数だ。

数秒経ち、周りがざわつき始めた。

徐々にそれが苛立ち変わり始めた頃、空に「System Announcement」の文字が浮かびあがった。

ようやく、運営側からのアナウンスが始まる。

全員がほっとし、肩の力を抜いた。

しかし、夕焼けに染まった空の一部がどろりと垂れ下がり、空中でとどまった。

そして、そのどろりとした塊が形を変え20メートルはある人間の形になった。

形はS A Oに出てくるGMの恰好をしている。

だが、そのGMのローブの中に顔は無く、袖の中には腕も無い。

肉体自体がない。

とりあえずGMのアバターの恰好だけを用意しただけみたいな姿だった。

GMの両手がゆっくりと揚がり言葉が放たれた。

『プレイヤーの諸君。私の世界へようこそ。私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

茅場明彦の名に、カイは驚く。

SAOを作った天才ゲームデザイナーで量子物理学者、そして、ナーヴギアの基礎設計者でもある。

『プレイヤー諸君は、既にメインメニューからログアウトボタンが無いことに気づいていると思う。それは、不具合ではなく《ソードアート・オンライン》本来の仕様である。諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームからログアウトすることはできない。また、外部の人間によってナーヴギアの停止、解除を試みられた場合、ナーヴギアが諸君の脳を破壊する』

そのセリフを聞き、カイの表情が強張った。

『10分間の外部電源切断、2時間のネットワーク回路切断、ナーヴギア本体のロック解除、または分解、破壊のいずれかによって脳破壊シークエンスが実行される。現時点で、警告を無視しナーヴギアの強制除装を試み、すでに、213名のプレイヤーがアインクラッドおよび現実世界から永久退場している』

213名と言う、人数の命が失われたと言うことに、カイは、今度は恐怖を感じた。

だが、それを面には出さず、平然を装い、茅場の言葉を待った。

『今、ありとあらゆる情報メディアによってこの状況は報道されている。ナーヴギアを装着したまま、2時間の回路切断猶予時間のうちに病院、施設に搬送される。現実の肉体は、厳重な介護体制のもとにおかれる。諸君には、安心してゲーム攻略に励んでほしい。さらに、《ソードアート・オンライン》はもうただのゲームではない。もう一つの現実だ。今後、ありとあらゆる蘇生手段は機能しない。HPがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、ナーヴギアによって

脳を破壊される』

突きつけられた現実には、プレイヤーたちはどよめき出す。

『このゲームから解放される条件はただ一つ。アインクラッドの最上部、第100層に辿り着き最終ボスを倒すことだ。そうすれば、生き残ったプレイヤーは、全員、安全にログアウトされることを保証しよう』

プレイヤー達がどよめいていると茅場はまた口を開いた。

『最後に諸君にこれが現実である証拠を見せよう。アイテムストレージに私からのプレゼントがある。確認してくれたまえ』

カイがアイテムストレージを開くとそこに一つのアイテムがあった。

アイテム名：手鏡

《手鏡》と言う、茅場がプレゼントと言ったアイテムが気になり、カイはそれを調べた。

オブジェクト化し鏡を覗くと、そこにはカイが作った顔があった。首を傾げていると、急に体を白い光が包んだ。

2. 3秒経ち光が消えた。

何が起きたのか分からないでいると、周りが突如騒ぎ出した。

「お前女だったのか!?!」「学生って嘘だろ!?!」「お前誰だよ!?!」「そっちこそ誰だよ!」等々、その様な言葉が飛び交い、カイはあることに気づき、手鏡で自身の顔を確認する。

そこには、自身で現実での顔があった。

『諸君は、今なぜこのようなことをしたのか、と思っているだろう。大規模なテロでも身代金目的でもない。私の目的はすでに達成してる。この状況こそが私の最終目的なのだ。∴以上で《ソードアート・オンライン》正式チュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る』

そう言って茅場の姿は空に同化していくように消えた。

しばしの静寂の後、広場に絶叫が響いた。

全員が口々に罵詈雑言を言い、騒ぎ立てる。

そんな中、移動を始めるプレイヤーがおり、その中にはカイも居た。

(MMORPGで得られるリソースは限られる。効率よく強くなるには、次の街を目指す……だよな、ミト、カズ)

かつての友人、ミトとカズが言っていた事を思い出し、カイは次の街を目指す。

(俺は、死にたくない)

街を目指すながら、カイはそう呟く。

(勝手に自分から縁を切って、勝手に居なくなったのに……俺は、もう一度アイツらに会いたい)

テンたちを思い出し、カイは走り続ける。

死を目前にして、もう一生会う事は無いだろうと思っていたにもかかわらず、カイはもう一度テンたちに会いたいと願う。

(せめて、アイツらに謝ってから死にたい……だから！)

「まだ死ねないんだよ！」

カイはそう叫んだ。

友人達との再会を願い、カイはゲームをクリアすることを選んだ。

仮想世界にまで来る迷子 with 愉快的仲間たち

デスゲーム開始から1ヶ月。

現在、SAOは第1層をクリアできないでいた。

クリアの目的が立たない現状に、本当に第100層まで辿り着けるのだろうか、全員が不安になる。

そんな中、2022年12月4日。

ある転機が訪れた。

「ボス部屋が見つかったって？本当か、ディアベル？」

「ああ！本当だ！この目で確かめたんだから、間違いない！」

宿屋の一室で、青い髪の騎士風装備をしたプレイヤー「ディアベル」が言う。

ディアベルとは、カイが迷宮区を単独で攻略してる際に知り合い、ディアベルはカイの腕を見込んで自身の仲間に誘っていた。

「そこで、今日の16時に攻略会議を行うんだ！無論、カイも来るだろう？」

「ああ、勿論だ」

攻略会議場所は「ツールバーナ」の劇場で行われ、開始時刻が迫る中、40人ぐらいのプレイヤーが集まっていた。

「結構集まったな」

「いや、これでも少ない方さ」

カイの眩きに、ディアベルがそう言う。

「1パーティーにつき組める人数は6人、フロアボス攻略なら6人パーティーを8つ用意したレイドパーティーを組まないといけない。そして、フロアボスを死人0でクリアするなら、そのレイドパーティーが2つは必要だ」

「つまり、ボス攻略するには物足りないって事か」

「それでも、来てくれるだけ感謝さ。後は、俺の説得次第だ」

そう言つて、ディアベルは壇上に向かう。

「はい！それじゃあ、そろそろ始めさせてもらいます！」

ディアベルは、後ろのプレイヤーたちにも聞こえるように声を張り上げ、そして、騎士スマイルを浮かべる。

「皆！今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！俺の名はディアベル！職業は、気持ち的に騎士ナイトやつてます！」

カイと初めて会った時と同じ自己紹介をし、カイは思わず笑う。

「騎士ナイトだつてよ。んなジョブあつたか？つーか、このゲームにジョブシステムあつたか？」

「ないわね。だから、あの人は気持ち的にはそういう立ち位置だつて主張したのよ」

「なるほど。どうやら、彼はユーモアセンスに相当な自信があるようですね。負けてられませんね？リーダー」

「あ？俺はユーモアとか言ったことねえぞ？生まれてから一度も」

「冗談はその凶悪面だけにしろよな、テン。お前以上のユーモアの塊を俺は見たことないぜ」

「ぼっちだからだろ」

「誰がぼっちだ！ぐべっ！」

「会議の邪魔になるから騒がない」

(……………なんだろう、今、凄く懐かしく、そして、嫌なやり取りが聞こえたぞ……………)

カイは嫌な予感を感じ取りながら、そのやり取りが聞こえた方を見る。

「ぶっ!？」

そして、盛大に吹いた。

「ん？今、誰が吹かなかったか？」

「気の所為では？」

「いや、気の所為じゃねえ。明らかに、馬鹿にされてる感じだ」

「んだとお!?!誰がバカだつて!?!」

「静かにしてよ 그리스さん、只でさえ馬鹿と思われてるのに、 그리스さんの所為で余計に馬鹿に思われるから」

「むしろ、 그리스さんの所為で馬鹿に思われてるのでは？」

「俺の何処か馬鹿だつて!?!」

「はいはい、 그리스が馬鹿でもゴリラでも何でもいいから、落ち着け」

「ほら、バナナやるから落ち着け、馬鹿ゴリラ」

「おっ！マジで？サンキューな」

「だ・か・ら、騒がない！」

「ぐもっ！なんで俺だけ……………!」

(馬鹿で助かった……………)

カイはそう心の中で呟き、着ていたフードトローブのフードを被り、顔を隠してその場を離れる。

「なんでここにいるんだよ……………テン！」

あそこになっていた馬鹿集団は、テンとその愉快的仲間たちだった。

「現実世界での迷子に飽き足らず、仮想世界にまで迷子しに来たのかよ！だから、お前は可哀想テンなんだよ、可哀想テン！」

一通り、テンに対し文句を言うとカイは自然と笑っていた。

「でも……………皆元氣そうだったな。相変わらず、騒がしいけどな」

一目見ただけ、それも一方的な再会であつたにもかかわらずカイは嬉しそうにする。

「……………誰も死なせやしないぞ」

そう決意を決め、カイはフードを被り直し、会議へと戻る。

「ワイはキバオウつてもんや！会議を始める前に、こん中に死んでつた2000人に、詫び入れなあかん奴がおるはずや！」

カイが戻ると、キバオウと名乗ったプレイヤーが、そう騒ぎ立てていた。

「β上がり共は、自分らだけうまい狩り場やボロいクエストでかつぱり儲けとる。そんでもって、9000人のビギナーは知らんぷりや。あいつらのはなから情報やアイテム、金を分けとつたら2000人は死なんかつたし、今頃、2層、3層、突破できとつたはずや！せやから、ため込んだ金とアイテム、全部出して謝罪と賠償せい！」

勝手な物言いに、カイはイラつきキバオウに一言言おうと近寄る。「おい、キバオウさんとやら、悪いが俺は元βテスターへの賠償請求に反対だ」

「なんやと?」

「持つてるアイテムやコルを全部出して賠償しろ……つまり、間接的に元βテスターは弱くなれって言ってるんだぞ。そんなことして、元βテスターが死んだりしたら、アンタは責任が取れるのか?」

カイがそう言うと、キバオウは言葉を詰まらせる。

「そもそも、この場合はボス攻略会議の場だ。そう言うみつももない真似は、ここ以外でしてくれ」

カイがそう言うと、キバオウは悔しそうな顔をするが、直ぐに表情を変えた。

「そうか、分かったで。お前も、β上りやろ」

「は?」

「β上りを庇ったり話をすり替えたり、β上りの証拠や!自分らの都合が良い事ばっか言って責任逃れしとるんや!」

あまりにも勝手な物言いにカイは本格的にイラつき始めた。

「お前、いい加減に「こないな奴の言葉なんか、信じ取つたらあかんで!こいつも、所詮薄汚いβ上りの屑や!」

キバオウのカイへの罵詈雑言は止まらず、広場に居るプレイヤーの何人かも、カイを元βテスターとして吊し上げようと賛同する。

「さっさと土下座して、ため込んだ金やアイテム、吐き出さなさい!」
流星に、この事態をディアベルは見過ごせない為、全員を宥めようと動き出す。

「へえ?そいつは素敵な提案だな。……俺は反対だ」

だが、ディアベルより先にテンが立ち上がった。

「誰や。お前は」

「俺か？俺は通りすがりの風呂屋だ。気にすんな」

「そうか、風呂屋か……って！こないなとこに風呂屋がおるわけないやろー！」

「ちつ…勘のいいサボテン頭だ。まあ、話を戻すがお前の言い分だとβテスターはゼロの状態で冒険をスタートしろと言ってるようなもんだ。其れは……死ぬと言ってるのと同じ同意義だつて理解してる上で発言なんだろうな？サボテンオウさんよオ」

「キバオウや！キバオウ！さつきも言うたが失った2000人の命に詫びを入れろつてワイは言うてるんや！」

「おいおい、そいつは偽善つてもんだぜ？責任つてのは自分が取れて、初めて成り立つんだ。考えてみる…逆の立場なら、アンタは同じことを言われて、素直に従うか？」

「ぐっ……そ、それは……」

「よく言った、アンタの言う通りだ。兄ちゃん」

テンの最も意見を聞き、立ち上がったのは身長が190cmほどある、スキンヘッドが特徴的な黒人のプレイヤーだ

「俺の名はエギルだ。キバオウさん、金やアイテムはともかく、情報ならあつた」

そう言うと、エギルは懐に忍ばせていた手の平サイズのハンドブックを取り出す

「コイツだ。このガイドブックは道具屋で無料配布されていたやつだ。新しい村や町に行く时必须置いてあつた。情報が早すぎるとは思わないか？」

「だ、だからなんや!!」

「俺は、コイツに載ってるモンスターやマップのデータを提供したのは、元βテスター以外にあり得ないと思ってる」

「だ、だけど、死んだ2000人の中には他のMMOじゃトップ張つてるベテランも居ったんやぞ！それは、どう説明するんや！」

「ベテランだったからこそ死んだんだろう。SAOを他のMMOと同じように計り、引き際を誤つた。だが、今はそのことを追及する暇は

無いと俺は思うんだが？」

エギルの強い目力に、キバオウは気圧されたのか静かになった。するとディアベルが手を叩き、場の空気を仕切りなおす

「キバオウさん、君の気持ちはよくわかるよ。でも、今は前を見るのが先だ。それに、元βテスターがボス攻略に力を貸してくれるなら、これほど頼もしいことはないと思う。君も……えつと」

「ソウテン」

「ソウテンさんも其れで納得してくれないか？」

「ああ。話の腰を折って、悪かったな。でも、これだけは言わせてくれねえか？」

「なんだい？」

戻ろうとする背中にディアベルは問う。

風が吹き、青いマフラーが怪しげに柵引く

「俺は……いや、俺たちは友達を傷付けるヤツを絶対に許さない」

その瞳には確かな灯が宿っていた。

彼の先に座る仲間たちも同じように睨みを効かせている

「了解した、その言葉は確かに俺の胸に刻ませてもらったよ。ともかく、今は第1層のボス攻略会議が先だ。それじゃあ、2人も席に戻ってくれ」

「……ええわ。今だけはナイトはんに従うといたる。せやけど、ボス戦が終わったらキツチリ白黒つけさせてもらうわ。ソウテンとか言うたな？ 覚えたで」

「男に覚えられても嬉しくねえよ。バキオウさん」

「キバオウや！」

「はいはい……ぐもっ!? 2度目!？」

席に戻り、何事もなかったかのように座り直すとソウテンの頭に鎌が振り下ろされた

そして、そのまま仲間から袋叩きに会っていた。

「カイ、大丈夫か？」

「ああ、すまない。会議の場を、余計ややこしくしちゃった」

「いや、俺の方こそすぐに助けを出せすまない。騎士として、不甲斐

ない……！このお詫びは、いつか極上のバームクーヘンで返そう！
バームクーヘン職人として誓う！」

「騎士だったり、バームクーヘン職人だったり忙しい奴だな………」

その後、6人パーティーが7つ、そして、テンたち7人を分けた3人パーティーが1つ、4人パーティーが1つ出来上がり、重装甲の壁部隊が2つ、高機動高火力の攻撃部隊が3つ。

そして、長モノ装備の支援部隊2つ。

最後に攻撃支援部隊2つだ。

その攻撃支援部隊にはテンたちのパーティー2つが当てられた。

「これで攻略会議を終了する！明日は朝8時にここに集合。全員揃ってボス部屋へと移動する。それじゃあ、解散！」

ディアベルが最後に、会議はお開きになった。

いよいよ、明日はボス攻略戦……

剣聖となる者の帰還

午後12時半、迷宮区最上階到着。

ここまで来るのに死者が一人も出ずに済んだ。

何度が危ない場面に遭遇したりしたが、ディアベルの的確な指揮で何とか切り抜けた。

そして、今、プレイヤーたちは獣頭人身の型が彫られた扉の前にいる。

そこで、最終チェックが行われた。

チェックが終わるとディアベルが、自分の剣を抜き、空いてる左手を扉に添えた。

「さあ、行こう……！」

短く叫び扉を押した。

最初にヒーターシールドを持った戦槌使いのプレイヤーが率いるA隊が突入し、次にエギル率いるB隊が左斜め後方から突入。

右からディアベルが率いるC隊（カイ含む）と両手剣使いがリーダーのD隊。

その後ろにキバオウの遊撃用E隊と長柄武器装備のF隊、G隊が3パーティーで並走する。

最後にテンたち4人と3人パーティーが突入。

20mほど進むと巨大なシルエットが空中で一回転しながら地響きとともに着地した。

青灰色の毛皮に、2mは超える体躯、赤金色に輝く眼。

右手に骨斧、左手に革盾、腰に湾刀^{タルワール}。

獣人の王《イルフアング・ザ・コボルドロード》が雄たけびを上げ、挑戦者を出迎えた。

その雄たけびに、誰もが一瞬委縮し、体が強張った。

雄たけびに呼応し、《ルインコボルド・センチネル》も3体召喚される。

「主武装は骨斧！副武装は湾刀^{タルワール}！《番兵センチネル》3体！情報通り！」

そんな中、ディアベルは声を張り上げ、前に出る。

「行けるぞー！俺に続け！」

走り出すディアベルに続き、コボルドロードを相手する本隊が突撃する。

カイも本隊の1人として、自身の武器《アニールシミター》を抜き放ち続く。

コボルドロードとの戦いは予想を遥かに上回る形で進行していた。

1本目のHPバーはディアベル率いるC隊が、2本目をD隊が、そして、長柄武装のF隊、G隊が現在は3本目のHPバーを半分まで

削った。

危ない場面と言えば、壁役のA隊、B隊のHPが半減したが危険域にまで落ちてはいない。

味方同士のHPの管理もできているし、キバオウのE隊とテンたちも余裕をもってセンチネルの相手が出ていた。

問題はなかった。

その時だった。

コボルドロードが一際けたたましい雄たけびを上げた。

そして、持っていた骨斧とバツクラーを投げ捨て、腰の武器に手を伸ばした。

「副武装の湾刀タルワールに変わるぞ！スキル変化は憶えているな！基本は変わらない！《武器を打ち払い喉元を撃つ》だ！」

ディアベルが指示を出し、武器を構える。

「次で決めるぞ！C隊、前へ！」

C隊がラストアタックを仕掛ける。

その瞬間、コボルドロードは手にした武器を抜いた。

湾刀タルワールとは、刀剣の一種で、インドやパキスタン、バングラデシュ、アフガニスタンに見られる大きく曲がった細身の片刃刀。

だが、コボルドロードが抜いた武器は、刃が曲がってはいなかった。

「待て、ディアベル！湾刀タルワールにしては武器が妙だ！」

カイは、武器の様子がおかしいことに気づき、ディアベルに言う。

「何?！」

カイに言われ、ディアベルが武器に注目する。

緩く反った刃、鍛えられ、砥ぎ上げられた鋼鉄の色合い。

β時代、多くのプレイヤーを苦しめたその武器の名は刀。

「まずい！」

武器が違うことに気づき、ディアベルが防御指示を出そうとする。

だが、間に合わずコボルドロードはスキルを発動した。

刀専用ソードスキル 重範囲技《旋車ツムグルマ》。

攻撃を食らったC隊のHPは、半分まで減った。

さらに加えて、バットステータス《一時行動不能タス》。

コボルドロードは、動けなくなったプレイヤーに向け、刀を振り上げる。

そして、その刃が振り下ろされた。

「うおおおおおおおっ！」

だが、そのプレイヤーを庇うようにディアベルが、攻撃を防いだ。ディアベルは寸前で、防御が間に合ったため、《一時行動不能^{スタ}》にならずに済んだ。

だが、HPは半分まで減っており、後数発攻撃を食らえば終わる状態だった。

コボルドロードは再び刀を構え、刀スキル《浮舟》を使う。

ディアベルは防ごうと、盾を構える。

「ダメだー！」

何処からか誰かが叫んだ。

何故なら、ディアベルの持つ盾はヒビが入り、耐久値が残りわずかしかないのが分かる。

そんな盾で攻撃を受け止めれば、ダメージを受け止めきれず残り半分しかないディアベルのHPは無くなる。

コボルドロードの一撃がディアベルを攻撃する。

「うおおおおおおおっ！！！」

だが、それより早くカイがコボルドロードに攻撃を仕掛けた。

発動直前のソードスキルはソードスキルで打ち消せる。

亜人型Mobと戦う時、ディアベルに教えられた方法を使い、カイはディアベルを助けようとした。

最初の《旋車》には間に合わなかったが、2撃目の《浮舟》には間に合い、何とかソードスキルをコボルドロードの刀にぶつけるが、アシスト任せに放った技ではスキルキャンセルできなかった。

(やっぱり、ぶつつけ本番じゃ無理か！)

カイは心の中で悪態を吐く。

だが、次にカイが見たのは、自分に刀を向けるコボルドロードの姿だった。

《浮舟》はスキルコンボの開始技で、そこから上下からの連撃に、一拍

置いて突きを放つ《緋扇》が放たれる。

そして、β時代はこのコンボによって倒れるβテスターは後を絶たなかった。

「まずっ!？」

スキル発動後の為、硬直で動けないカイは防御態勢もとれない。

そのまま《緋扇》の上下からの連撃を食らいHPが危険域レッドにまで落ちる。

次に来る突きを食らえば終わり。

(くそっ……!ここで終わりか……!)

覚悟を決め、カイは思わず目を閉じた。

「グリスー!吹っ飛ばせ!!」

「あいよー!リーダー!!」

その言葉と共にコボルトロードの腹部に強烈な突き技が命中。

視線を向けると、其処にはハンマーを射出台カタバルトのように構えた灰沢純

平ことグリスが佇んでいる。

「お前はこっちだ」

すると、カイは腹部に衝撃を感じる。

カイの腹部に抱き付くように、後ろへと下がらせたのはテンだった。

「お前らー!少しの間、そのデカブツを任せるぞー!」

「二了解、リーダー!」

桐ヶ谷和人ことキリト、緋泉彩葉ことヒイロ、緑川菊丸ことヴェルデ、そしてグリスの4人は景気良く返事をし、コボルトロードへと向かって行く。

後に下がるとテンは既に下がらせたディアベル、そして、連れて来たカイの口にポーシオンを突っ込む。

「お前、どうして……」

ポーシオンを飲み終え、カイはフードの下からテンに尋ねる。

「あん? テメーのダチ助けるのに、一々理由が居るのかよ……カイ」

「お前……!」

「気づいてないと思ったか? お生憎様、バレバレだよ。キリトにヒイ

ロ、ヴェルデも気づいてる。グリスは……………多分気づいて無いな」
「……………純平か、アイツらしいな」

カイはフードの下で僅かに笑うと、回復していくHPを見ながらテ
ンを見る。

「テン、俺はお前に、いや、お前たちに謝らないと……………」

カイはテンへ謝罪を口にしようとした。

だが、テンは何も言わず、持っていた槍をカイの曲刀へと軽く当て
る。

軽く響く金属音に、俯いていたカイが顔を上げる。

カイは久々にテンの顔を正面から見た。

あの時、テンが最後に見せた優しい笑みがそこにはあった。

何も言わずともテンは、分かっていた。

分かっただうえで、カイにチームに戻れと語っていた。

カイは、ふと前に視線を向ける。

そこにはキリト、ヒイロ、ヴェルデの3人がこちらを見ながら戦っ
ていた。

3人も戻って来いと目で語っていた。

グリスは戦いに集中しており、こちらを見てないがなんとなくグ
リスも戻って来いと言ってると思えた。

「……………いいのか、こんな俺を……………勝手にお前らとの絆を断とう
とした俺を、お前らは許してくれるのか？」

「絆ってのはよ、お互いが絶たない限り永遠に繋がってるもんだ。お
前がいくら俺らとの絆を断とうと、俺らが断とうと思わない限り、何
度でも繋ぎ直してやる。何度でも結び直してやる。俺らはまだ、繋
がってる」

テンはそう言い、手を差し出す。

「お前にその気があるなら、戻って来いよ……………ダチ公」

「しまっ!？」

最前線で戦っていたキリトが声を上げた。

コボルドロードが《幻月》を使ったのだ。

《幻月》は上下ランダムに発動する技で読みが外れることがある。

キリトは片手剣スキル《バーチカル》の発動をキャンセルして《ア
ニールブレード》を引き戻し、防御した。

だが、それでもキリトのHPは3割以上減った。

「キリト君ーくっ……このっ!」

キリトが膝をついたのを見て、ミトの友人と一緒にパーティーを汲
んでいたアスナがコボルドロードの脇腹目掛け《リニアー》を放つ。

だが、同時にコボルドロードが《緋扇》の構えを取った。

「アスナ、ダメー!」

声を出すも、もう間に合わない。

既にスキルは発動し、《リニアー》が放たれる。

1週間前のリトルネペントに襲われた時のことが、ミトの頭に過
ぎった。

(守るんだ……今度こそ、アスナを!)

ミトはアスナを庇おうと走り出す。

自分の身体を盾にしても、アスナを守る。

ミトはなんとかコボルドロードとアスナの間に割って入ることが
出来た。

コボルドロードの持つ刀が、ミトへと迫る。

(ここまでか………最期に、カイトに逢いたかったな………)

逢えなくなつた大好きな人の事を思い出し、ミトは目を閉じた。
だが、次の瞬間、強烈な金属音が響いた。

「え？」

ミトは目を開けた。

ミトの視界に入ったのは、フリーデットマントを被った1人のプレイヤーだった。

そのプレイヤーは手にした《アニールシミター》でコボルドロードの刀を防いでいた。

防ぐ際に、マントは斬り裂かれたらしく耐久値は全損し、消滅する。

その姿を見たミトは、目から一筋の涙を流した。

そして、ミトを守つたその何者かの姿を見たキリト、ヒイロ、ヴェルデはニヤツと笑う。

グリスだけはその姿に目を見開き驚いていた。

「随分と待たせちまつたな、皆………勝手に勝手に勝手を重ねるけど、もう一度、一緒に戦わせてくれ」

そう言いカイトは、再びチームへと戻つた。

劍聖と道化師

「ぶっ飛べー！」

カイは受け止めていたコボルドロードの刀を弾き返し、そのままコボルトロードとの距離を取る。

「やっとなり帰って来たな、馬鹿カイ」

「馬鹿な相談役の復活だね」

「ですが、そこで驚いてる馬鹿ゴリラよりはマシな馬鹿ですよ」

「「違うない」」

「ちよつと待て！馬鹿なゴリラってなんだ!?俺は馬鹿でもゴリラでもない！ちよつと頭の弱い、バナナが大好きな人間だ！」

「「え？人間だったの？」」

「そんな反応するな！」

こんな時でもコントをするキリト達に、カイは困ったように笑う。

「懐かしいだろ？」

そんなカイに、テンが槍を担いで隣に立つ。

「ああ、涙が出そうなくらいにな。それで、こっからどうする？」

《「アニールシミター」》を抜き、カイはコボルドロードを見る。

コボルドロードは、カイ達を睨みつけ、咆哮を上げる。

レイドパーティーメンバーのHPの回復は殆ど終わっているが、士気が絶望的だった。

前情報と違うボスの使用武器、更に新たに出現した番兵^{センチネル}、そして、指揮官のディアベル一時離脱。

それにより、前線は崩壊寸前。

数十秒もたてば、完全に崩壊し、死亡者が出る。

「このままじゃまずい。なんとかして立て直さないと」

「でも、どうしたら……」

生半可な指示では、余計に混乱させることになる。

その為、何か短く、強烈な一言を言わなければならない。

その時だった。

「全員、ちゅううううううううううもおおおおおおおおおく!!」

ディアベルが、ボス部屋全体に響き渡る声を出した。

その声にも全員が驚き、混乱する声が消える。

どう言うわけか、コボルドロードも驚き、動きが止まったように見える。

「これより、第一層フロアボス討伐作戦、最後の指示を伝える！」

そう言うと、ディアベルはゆっくりとした足取りで、キリトの隣に立ち、キリトの肩に手を置いた。

「現時刻をもつて、前線指揮を俺から彼に移行する！彼の指示の下、ボスを倒せ！」

ディアベルが出した指示に、周りは一瞬困惑する。

ここまでボスと戦ってこれたのは、ディアベルの指示があったからだ。

その指揮権を急にキリトに任せられる。

不安が出ないのがおかしかった。

「俺は従うぞー！」

最初に賛成の声を上げたのは、エギルだった。

「それに、彼にはボスのスキルの知識がある！ディアベルがそう言うなら、それに従うまでだ！」

エギルが賛同した事で、他のプレイヤーたちの不安は一気に消え、消えかけていた士気は再び盛り返した。

「キリトさん、ここからは貴方に全てを任せる。指揮、頼めるか？」

「……………この状態で断れると思ってるのか？」

キリトは乾いた声で笑い、立ち上がる。

「奴を包囲すると、範囲攻撃が来る！B隊は無理にスキルを迎え撃たないで、防御に徹しろ！」

「了解！」

指示をもらったエギルはB隊のメンバーを引き連れ、コボルドロードの攻撃を防ぐ。

「D隊はB隊に向かおうとする番兵センチネルを引き離してくれ！引き離したら、E隊と協力し撃破！F隊は、D隊、E隊の支援！A隊はB隊のリカバリーができるように、ボスのパターンをよく見てくれ！」

C隊は合図と共に全力攻撃！合図はディアベルに一任する！ディアベル、行けると思ったら全力でソードスキルを叩きこんでくれ！G隊はC隊の支援に！茅場晶彦クソ運営に目にももの見せてやれ！」

「二「運営ザマア!!」二」

キリトの指示に、全員が従い、着実にコボルドロードにダメージを与えていく。

その時、コボルドロードのHPが赤くなった瞬間、一人のプレイヤーが足をもつらせてコボルドロードを囲む形になってしまった。

「まずい！範囲攻撃が来るぞ！」

キリトが叫ぶも、既にコボルドロードが《旋車》を使おうと動作に入ろうとした。

「間に合え！」

キリトが飛び出し、《ソニックリープ》を使い、コボルドロードが《旋車》を出すのを妨害した。

そして、コボルドロードは、人型モンスター特有のバットステータスの《転倒》状態になった。

「今だ！C隊、全力攻撃！」

ディアベルの合図でC隊全員が、ほぼ同時に縦斬り系のソードスキルを放つ。

コボルドロードのHPががりがり削られた。

後一回当てれば倒せるのにコボルドロードは立ち上がり、攻撃の動作に入った。

「くっ、削り切れなかった！」

ディアベルは悔しそうに歯ぎしりする。

硬直により、C隊は動かなかった。

「テンーミット！グリス！ヴェルデー！ヒロ！それにアスナ！今日は全員カイをサポートだ！カイの復帰祝いだ！」

「とか言っつて、ちやっかりとラストアタックL A ボーナスを手に入れるつもりでしよ」

「し、しないよ！そんなこと！」

「やりかねえな。キリトなら」

「やりかねませんね」

「とうかやるだろうね」

「やりそうよね。キリトくんって空気読めないところあるし」

「アスナまで!？」

「ま、日頃の行いだな、キリト」

「久々の再会なのにカイも酷い!？」

カイとアスナにまで言われるとは思っていなかったらしく、キリトは驚きを隠せない。

相変わらぬのやり取りをしながらもコボルトロードの猛攻を躲し、全員は応戦し続ける

「ちっ……さすがに固い……!こうなりや、とっておきを披露してやらあー!」

「タンクは任せとけ!」

「行くよ!テン!カイ!」

「あいよ!」

「ああ!」

グリスが刀を抑え、アスナとヴェルデが《リニア》で攻撃。キリトが《ソニック・リープ》を放ち、ヒイロが《リーバー》で真上から斬りかかる

「今だっ!」

ミトが叫ぶと同時に彼女が鎌を振り被り、その先にいたテンとカイが風圧で前に押し出される

「おりやああああああ!」

「うおおおおおおお!」

《アニールランス》と《アニールシミター》が光り輝き、コボルトロードに攻撃を叩き込む。

槍スキル《ヘリカル・トワイス》

曲刀スキル《トレブルサイズ》

同時に回転攻撃を叩き込み、最後に槍と曲刀を振り被り、ありったけの力を込め、叩き付ける。

それでも、コボルトロードのHPはまだ僅かに残っていた。

「行け、キリト！」

「復帰祝いはまだ今度でいいから、決めて来い！」

「任せろ！」

最後にキリトが飛び出し、片手剣縦二連撃の《バーチカル・アーク》でトドメを指す。コボルトロードはポリゴンとなり、バリント！と碎け散った。

同時に後方の番兵も碎け散り、長い初陣に終止符が打たれた。

コボルトロードが消え、周りには静寂が漂った。

誰もが緊張に包まれた。

もしかしたら、βテストの時と違うところがあるかもしれない。

だが、何も起こらない。

そしたら、急に目の前に獲得経験値と分配されたコルが表示された。

それを見て確信した。

勝った。

まわりもそれを見たらしく歓声を上げた。

「よし、キリト。第2層へ行ったら、直ぐにL A ラストアタック ボーナスをコルに換

金しようぜ」

「するかっ！」

「なにつ！お前ら！こいつ、手柄を独り占めにする気だ！」

「なんだとっ!?キリトのくせに上等じゃねえか！表に出ろ！」

「グリスさん、今は外ですから既に表ですよ。それはそうとキリトさん、独り占めはよくありませんね。どうでしょう?ここは僕が先ず、預かるというのは」

「預かってどうするつもりなんだ?」

「無論、最後は売ります」

「結局は売るんじゃないか!!」

「大丈夫、あとで似たようなヤツを買っておけばいい。キリトさんはバカだから、気付かない」

「ヒイロくーん?本人がいるのによくもまあ、ぬけぬけとそういうことが言えるよなあ?お前は」

「…………居たんだ」

「居たわっ!!」

「どんまい、元気出せよ。キリト」

「慰めるなっ！バカテン!!」

漫才にも似た相変わらなやり取りを続ける面々。

しかし、その楽しい雰囲気も長くは続かなかった

「なんでやー!」

「キバオウ…………?」

「どうしたんだ?急に」

「急にもへつたくれもあるかい!お前らは見てへんかったんか!こいつらは、ボスの使うスキルのこと知ってたんやぞ!?おかしい思わへんのか!」

「い、言われてみれば…」

「まさか!アイツら、全員がβテスターなのか!」

「βテスターでパーティーを組んでたのか!?卑怯だぞ!」

キバオウの発言に周りが騒めき出す。

彼が何故、今のような事を言ったのか理解出来ないキリト達であったが背後に佇むソウテンだけは不敵に笑っていた

そんなテンを見て、カイは先程キバオウとテンが何やらコソコソと話をしていたのを思い出す。

「…………テン。まさか、お前の仕事か?」

「さあ、なんのことやら。ただまあ?この場を平和的に収めたいんなら…………どうするかは分かるよな?キリト」

「…………まったく、相変わらずだな。うちのリーダーは。仕方ないから、その策略にまんまと嵌ってやるよ」

「さっすが。おめえさんのそういうところ、嫌いじゃないぜ?」

「うわっ…:出た。相変わらず、自が出ると胡散臭さを増すな、お前は」
「うっせ」

ソウテンとキリトの会話を聞き、ミト達も全てを理解したらしく、二人が口を開くのを黙って待つ。

しかし、アスナは違った

「ちよつと待って！β時代の情報は私達も攻略本で得ていたわ。あのボスの情報について大きな差はなかったはず。ただβ時代と同じだと思い込んだ私達が窮地に陥りそうになった時、彼はもつと先で得ていた知識を応用して教えてくれた。そう考えるのが自然じゃない？」

「俺もそう思う。それに、攻略本には情報はあくまでβ時代の物で、正式版とは差異があると注意もあつた。俺たちは、その注意を忘れ、偵察戦を怠つた。彼等に感謝こそすれ、批難するのは違うだろ」

「いいや違うね、アルゴとかいう情報屋とそいつはグルだったんだ。元βテスター同士共謀して、善意のふりをして俺達を騙して、自分たちだけ美味しいところを掠め取つていこうとしたんだ」

ディアベルのパーティーメンバーのシミター使い《リンド》がアスナ、エギルに物申す。

自分の仲間が恩人を悪く言うのを許せず、ディアベルは彼に歩み寄る

「待ってくれ！彼等は悪くない！俺だ！俺が悪いんだ！だから、責めるなら俺を！俺を責めてくれ！」

「ディアベルはん。すまんけど…邪魔させへんで」

だが、キバオウがディアベルを抑えた

「ぐっ……いき、キバオウさん…な、なにを…」

「ソウテンはんと約束や。あんさんを悪者には出来ひん、許してや」

キバオウがディアベルの口をふさぐ、其れが合図だったのか、ソウテンがキリトの肩を叩く

「あつはつはつはつはつはつはつはつはつはつはつはつはつは!!」

突如、響く笑い声。全員がキリトの方に視線を向けた

「元βテスターだって？俺をあんな素人連中と一緒にしないで貰おうか。いいか。SAOのCクローズドベータテストB Tはとんでもない倍率の抽選だったんだぜ。受かつた1000人のプレイヤーで何人、本物のMMOゲーマーがいたと思う？殆どが、レベリングも知らない初心者だった。あんたの方が100倍マシだぜ。だが、俺は……いや、俺たちは違う」

「βテスターの時に誰も到達出来なかつた層まで到達したキリトさんから事前に刀スキルのことを聞き、対策を立てていた。いやあ…実に

滑稽でしたよ。情報に踊らされる貴方たちは」

「全くだぜ、思わず笑いそうになっちまった。どいつもこいつも何でも鵜呑みにしちまうんだからよお」

「ホントだね。それでもゲーマーなの？ 笑いを通り越して、欠伸が出そうだよ。特にディアベル…だっけ？ 君は面白かったよ、ボスに襲われた時なんか最高だった」

「ここだけの話、私たちの狙いは最初からLABラストアタックボーナスだったのよ。茶番に付き合ってくれてありがとう、ビギナーのみなさん」

キリト、ヴェルデ、グリス、ヒロ、ミトの順に元βテスターへの矛先が自分たちへ向くように誘導していく

今回の作戦は攻略を最優先とするチームを作り上げ、テスターへの怒り全てを彼等が背負うというモノだ。ディアベルは知らなかったがキバオウには事前にソウテンが取り引きの対価として、要求していた。故に最初、彼が叫んだのは芝居であった

「ふざけるな！ やっぱり、お前らが悪いんじゃないか！」

「最低な奴らだな！ 揃いも揃って！」

「俺たちはお前らの操り人形じゃないぞ！ そこでへらへらしてる奴もグルか!? この道化野郎！」

「道化…いいね、その響き。なら、俺は今から、こう名乗ろう」
道化。

その単語に反応したソウテンが笑みが更に不敵で軽薄な微笑に変わる

アイテムストレージを開き、現れた仮面を顔の上半分に冠る

「我々は彩りの道化、リーダーを務めますは槍使いにして、道化師クラウンの名を冠する、ソウテンにございます」

「同じく片手剣使いのキリト。βテスターにしてチーター、略してピーターとでも名乗ろうか。これからは、元βテスターと一緒にしないでらおうか」

「同じくハンマー使いのグリスだぜ！ 誰からの喧嘩でも買ってやる！ まあ、振り返ちにしてやるがな！」

「同じくヴェルデ。我が武器は細剣、それと情報。貴方たちの行く末が我々の旅路の邪魔にならぬ事を深くお祈り致しております」

「同じく曲刀使いのヒーロ。我等がリーダーの命に従い、今をもって、アンタらは単なるプレイヤーからビギナーへ格上げだ。良かったね」
「同じく鎌使いのミト。金輪際、私たちに関わらないことをオススメしておくわ。そうそう…言い忘れてたけど、私もβテスターよ」

テンたちがそう言い終えると、テンはストレージから同様の仮面を取り出し、カイへと向ける。

カイはその仮面を受け取ろうとしたが、一瞬躊躇する。

（本当に、今の俺がこれを受け取ってもいいのか？ 一方的にこいつらを遠ざけていたのに……………）

カイは思わず、テンを見た。

そんなカイの心情を察してか、テンは仮面の下でほくそ笑む。

「ダチの所に戻るのに理由なんて、帰りたい、それだけで十分じゃねえか？」

テンに言われ、カイは目を見開き、そして笑い、仮面を受け取った。

「最後に、曲刀使いのカイ。リーダーの命により、これより彩りの道化カラース・クラウンへと復帰する。ディアベルとその仲間よ、楽しかったぞ、お前らとの友達ゴッコはな」

ディアベルの仲間たちは、ここまで一緒にやって来たカイが、テンたちの仲間だったことを知り、ショックを受けていた。

そんなことを意に返さず、カイはテンたちの隣に立つ。

「如何でしょう？ この錚々たるメンバーそうそう。其れでは今回はこの辺りで幕引きと致しましょう。ご静聴とご歓声に感謝を申し上げます、観客の皆様たち」

テンを中心に深々と御辞儀する面々、全員が全てをまるで嘲笑うかのような表情を浮かべている

「第2層の転移門は俺たちが有効化アクティベートしといてやる。精々、ゆつくりと来るんだな」

「あつ、でも初見のModとかに殺されないようにね。そうなくても私たち、助けてあげないから」

「じゃ、そういう訳で」

第2層へと続く階段を上がっていくソウテン達。

その後姿に誰も何も言わなかった

それはまるで彼等の誕生を祝うかのように

道化の仮面を冠った、六人を見送るかのように

カラーズ・クラウン
彩りの道化。

後々にアインクラッドで名を轟かせる小規模ギルド、これはその一団が誕生した記念すべき日

「で……有効化^{アクティブ}ってなに？」

「知らずに言ってたのかよっ!？」

「やっぱり、テンは可哀想な頭ね。だから、可哀ソウテンなのよ」

「やめろ！へんな造語を作るな！定着したら、どうする！」

「安心しろよ、俺たちはお前がどんなに可哀想でもリーダーだと思ってるからよ。おとぼけソウテン」

「全くです。例え、可哀想で馬鹿野郎だとしても僕たちのリーダーは貴方だけですよ。おバカリーダー」

「そうだよ。誰が何と言おうがリーダーはリーダーだよ、迷子しか取り柄がないけど」

「お前ら、バカにしてるだろ!？」

ワイワイギャーギャーと騒ぐそんな彼らを、カイは眺めながら笑う。

「ねえ、カイ」

そんなカイに、ミトが声を掛ける。

「ミト……すまなかつたな。今まで連絡の一つもしないで……」
「……ううん、カイとまた逢えた……それだけで十分だよ」

そう言うとミトはカイに抱き付く。

カイもミトを抱きしめ返す。

そんな2人をテンたちが見る。

「後は若いお2人に任せるとしますか」

「邪魔者は退散だな」

「馬に蹴られたくないしね」

「貴方も行きますよ。グリスさん」

「え？どういふことだ？あ、ちよつと！首根っこを掴むなって！」
騒ぎながら去って行くテンたち。

すると、テンは最後に振り返った。

「カイ、例の奴。期限なしって言ったけど、やっぱ期限付けるわ」
「は？」

「期限は今日だ。じゃ、そう言う事で」

「あ、おい！」

カイはテンを呼び止めるも、テンはそそくさと去って行く。

「カイ、例の奴って？」

「えつと、だな……………はあく……………あのかな、ミト。俺、お前の事が――」

その先の言葉は、カイとミトしか知らない。

だが、ミトは顔を真っ赤にし、両手で口を押え、数秒震えた後、カイへと思いつきり抱き付いた。

その様子を、どこかのネズミの情報屋が見ていたそうだ。

「良かったのか、テン」

第2層へと向かう途中の階段で、キリトがテンに聞く。

「なにがだ？」

「ミトさんの事ですすよ」

「リーダーだってミトさんの事好きなのに、良かったの？」

「なにつ!? テン、お前、ミトが好きだったのか!？」

グリスを除き、全員がテンがミトに対して好意を持っていることに気づいていた。

そのテンが自分の気持ちを押し殺して、ミトをカイに譲った。

確かにミトはカイの事が好きだし、カイもミトを好きでいる。

そして、キリト達もカイの事を好いているし、カイとミトの2人が
そう言う関係になるのに文句はない。

しかし、今日までミトを支えていたのは、間違いなくテンだった。

だが、それではあまりにもテンが可哀想過ぎる。

それがキリト達の想いだった。

「いいんだよ。確かに、俺はミトが好きだ。でも、それと同じぐらいカイが好きなんだよ」

そう言つて、テンはキリト達より一歩前に出て振り向く。

「俺は、アイツらに幸せになつてほしいんだ。なら、あの2人が付き合うのはこれ以上ないぐらいいい事だ。そう思わないか？」

テンの台詞に、キリト達はほかーんとし、そして、笑った。

「全くお前らしいな、テン」

「今回ばかりは、慰めてあげますよ」

「リーダー、後で焼き鳥上げる」

「よく分かんねえけど、この次があるつてテン！」

三者三様の慰めを貰い、テンは笑う。

「別に慰めなんていらねえよ。てか、大変なのはここからだぞ」

「「は?」「」」

「カイが戻つて来たつて事は、アレも復活する」

「あ、アレだと!？」

「冗談ですよね!？」

「冗談じゃない。ミト考案のカイの大好きな鍋、マヨネーズ鍋がな!」
マヨネーズ鍋。

鍋に大量のマヨネーズを入れ、それを人肌に温めた物の中に、あらゆる具材を投入し作るテンたちの一番嫌いな鍋だ。

「あんな犬の餌が復活するなんて……………」

「この世で一番の兵器だぞ、あれは!？」

「鼻に来るマヨネーズ臭に、マヨネーズの味しかしない具材……………
思い出すだけで胃の中がぐるぐるする……………」

「カイが居なくなってから、月1で出されたよな……………」

「食べたくなかったけど、あの時のミトさんの表情を見ると……………」

「残せませんかね」

「パスタに絡めてもマヨネーズ味だったな。アレ……………」

「これからは週1で出されるな」

今後の食卓への不安を抱えつつ、全員がカイの復帰を喜んでいるのには違いは無かった。

「あり得たかもしれない、もしもの世界線に於ける出会いと再会の物語。…お楽しみいただけましたか？其れでは、今宵の舞台は……此れにて、幕引きと致しましょう」

コラボ回 《ソードアート・オンライン ボンド・ア
ド・デイスペア》

とある日に出会った少年

「なあ、キリト。少し不思議な話してもいいか？」

「なんだ？」

ある日のALOで、カイとキリトは拠点としてる宿屋の1階で3時
のオヤツを食べていた。

食べていると、カイはふとあることを思い出し、キリトにある話を
した。

「《討伐作戦》の事、憶えてるか？」

《討伐作戦》の言葉に、キリトは思わず手を止めた。

その言葉で、キリトが思いつくことは1つしかない。

《笑う棺桶討伐作戦》

オンライン・オンライン

あまり思い出さたくないことだ。

「それが、どうかしたのか？」

「いや、あの事はあまり関係ないんだけど、作戦の後、俺、カルマ業回復ク
エスト受けただろ？」

「ああ、そうだな」

「その時にな、ちよつと不思議な子とあつたんだよ」

「これでようやく終わるな。すまないな、ミト」

「ううん、私がしたくてしたことだし気にしないでよ」

「それにしても、本当に長かったな」

ここまでの道のりを思い出し、カイは呟く。

自身が犯した罪の為、どれだけ時間が掛かろうともカイは業回復
クエストを完遂するつもりでいた。

だが、それにミトを付き合わせたことは別だ。

カイは申し訳なさで一杯だった。

「ミト、これが終わったら少し出掛けないか？」

「ん？なにかやりたいクエストでもあった？」

「いや、クエストとかじゃなくてさ。ミトには色々と迷惑掛けたしさ、
お詫びとお礼を兼て……デートしないか？」

「遊び」「出掛ける」などの言葉を使おうとしたが、カイは何故かその
言葉で濁すような真似をしたくないと思い、直球に「デート」と言う
単語を使った。

一方で、ミトは「デート」と言う単語に顔を真っ赤にした。

「あーえっと、うん、そうね。私はいいわよ」

しどろもどろに言うミトに、カイは笑う。

「じゃあ、早速クエストを終わらせよう」

「え、ええー！」

ミトは何処か嬉しそうに歩き出し、カイもその後に行く。

最後の業回復クエストの内容は、シンプルにモンスター退治だっ
た。

それなりに数が多いが、レベル的に大したことなく、10分程度でクエストは終わった。

「これで、終わりだな」

「なら、後は報告して終わりね。早く、教会に戻りましょう」

ミトはそう言い、鎌を背負い直す。

「ああ」

カイも刀を鞘に収めようとする、クエストとは関係のないモンスターが現れるのが、カイの視界に入る。

そして、そのモンスターはミトを狙った。

「ミトー！」

カイは走り出し、ミトを押しつけて、攻撃を受け止める。

「きゃっ!?!」

ミトは行き成りの事に驚き、その場に倒れる。

カイは、一瞬でモンスターを斬り倒すとミトの方を振り返る。

「ミト！大丈夫か!?!すまない、咄嗟の事だついでミトを突き飛ばしちゃった」

「う、うん、大丈夫。ごめん、助かったわ」

ミトはそう言い、立ち上がろうとする。

カイはミトに手を差し出そうとする。

その時、カイは背後から殺気を感じた。

殆ど無意識だった。

ミトを背にし、防御態勢を取った瞬間、金属音が響く。

カイが受け止めたものの、2本の剣だった。

赤黒い片刃剣と青白い片刃剣。

そして、それを手にする白髪の少年。

「子供!?!」

カイは、自身に斬りかかって来たのが自分よりも年下と思われる少年だったことに驚く。

だが、カイの驚きを無視し、少年は逆手に持った赤黒い片刃剣でカイの首を狙う。

カイはその攻撃を躲すと、そのまま押しつけるようにして少年と距

離を取る。

「おい！君、何をする!?!」

「うるさい」

少年は、カイに対し冷たい言葉を吐く。

そして、再度カイに攻撃を仕掛ける。

少年の攻撃は、端的に言えば殺すための攻撃だった。

一挙手一投足、全てが相手を殺そうとする攻撃で、おまけに速さも
あり、カイが一步でも気を抜けば、容易くカイの命は奪われる。

「おい！少しはこつちの話を聞いてくれ！」

「お前たちの話なんて聞く時間なんてない。お前が人を殺そうとして
た。お前を殺すには十分な理由だ」

「俺が人を殺す!?!」

少年の口から放たれた言葉に、カイは驚く。

そして、気づいた。

(まさか、倒れたミトを起こそうとした俺を、ミトを殺そうとしてたつ
て勘違いしてる!?!)

実際、その通りだった。

あの時の構図は、尻餅を付いてるミトに対し、カイは刀を抜いたま
ま手を差し伸ばしていた。

おまけに、カイのプレイヤーカーソルはオレンジ、犯罪者を意味し
ていた。

見る人によっては、ミトを殺そうとしている殺人者^{レド}プレイヤーに見え
るだろう。

カイは少年の攻撃を躲し、受け止めつつ、そう判断する。

(とりあえず、話を聞いて貰う為にも今は、倒すしかないか!)

カイは覚悟を決め、攻撃に転じた。

少年は片方の剣で、カイの攻撃を受けつつ、もう片方の剣でカイを
攻撃する。

だが、カイはそれを紙一重で躲し続ける。

一進一退の攻防は、互いを疲弊させていく。

その時、カイは体を捻り、体で隠す様に刀を構える。

(何をするつもりか知らないが……遅い。このまま斬る)

少年は、今の自身の距離とカイの距離からなら、どのような攻撃を放つても、自分の攻撃が当たるのは分かっていた。

だからこそ、防御と言う手段を取らずに、攻撃をした。

だが、少年は知らなかった。

目の前にいるプレイヤーは、《攻略組》のトッププレイヤーの1人で、《黒の剣士》キリトの相棒。

そのステータスは、キリトと同等である。

カイは目にも止まらぬスピードで、右手を振った。

(なっ!?!速い!?)

少年は、カイの速さに驚くも、すぐに防御態勢に入った。

しかし、何の衝撃も来なかった。

何故なら、カイの右手に刀はなかった。

「なっ!?!」

少年は、思わず驚きの声を上げる。

そして、次の瞬間に、カイの左手に握られた刀が見えた。

(フェイントか!だが、まだだ!)

少年は、フェイントを掛けられたことを知っても尚、まだ受けきれると判断し、カイの左手に注意する。

だからこそ、見えなかった。

カイの右足がライトエフェクトを纏っているのを。

「ふっ!」

カイは右脚で体術スキル《弦月》を発動する。

下からの蹴り上げに、左手からの攻撃が来ると思っていた少年は、意表を突かれたことで、手にした剣を弾き飛ばされる。

そして、カイの刀の切っ先が向けられる。

「勝負ありだ!」

カイはそう言い放つ。

「取り敢えず、こっちの話さ」

話を聞いて貰おうと、カイが口を開く。

すると、少年はカイへとタツクルを仕掛ける。

「ぐおっ!？」

予想外の出来事に、カイは反応できずに倒れる。

カイに馬乗りになった少年は、コートに手を入れ、3枚刃のブーメランを取り出し、カイを直接刺そうとした。

「ちよっ!ストップ!」

だが、カイに刺さる直前でミトが少年の手を止めた。

「君、勘違いしてるから!・カイは殺人者^レじゃ^ドないわ!」

「……………え?」

ミトの言葉に、少年はようやく動きを止めた。

「ふう、取り敢えず話聞いてくれないか?」

「その、ごめんなさい」

あの後、カイとミトから現状の説明をし、誤解を解くと少年はさっ

きと打って変わり、殺気を消してカイに謝罪した。

「いや、ミトを助けようと思つて襲い掛かったんだろ。勘違いとは言え、悪い事じゃない。むしろ、あの状況じゃ誰だってそう思うさ」

カイは、少年をフォローしそう言う。

「取り敢えず、名前教えてくれるか？俺はカイ。《攻略組》だ。で、こつちは」

カイはミトを紹介しようとする、小さく「あ」と呟いて右手を持ち上げる。

「鎌使いのお姉さんだ。えーと……ミトさん、だっけ？」

不意に名前を呼ばれ、ミトは驚いた。隣のカイも、わずかに目を丸くする。

「ミト、知り合いなのか？」

「え、えつと……」

手をおとがいに当てて、必死に記憶を辿りながら、うんうん唸るミトに、少年は長めの白髪をくいくいと引っ張りながら言った。

「あー、髪の色イジつたから、ちよつと解りづらかったか。25層、無限湧きバグつて言えば思い出せる？」

「25層……無限湧きバグ……ごめん、ちよつと分からないかも」

ミトは申し訳なさそうに謝る。

「憶えて無いの？結構、衝撃的な出来事だと思うけど」

「本当にごめん。でも、本当に心当たりがないのよ」

ミトと少年は揃って、困惑顔になる。

「まあ、ミトは有名人だし、何かの拍子で記憶の人物とすり替わってるかもしれないだろ？」

カイがそう言うと、少年は「おかしいなあ」と呟く。

「じゃあ、改めまして。おれはマエト、よろしく」

そう言つてマエトは、のんびりとした表情を浮かべた。

不思議なプレイヤー

「取り敢えず、今日は遅いしここでキャンプするか」
辺りを見渡しカイが言う。

マエトとの戦闘と説明に時間を食い、日が暮れてしまい、もうすぐ夜になる。

今からでは、どう頑張っても日が沈むまでに教会に辿り着くのは難しく、また夜はモンスターが活性化する。

その為、カイは今いる場所でキャンプすることを提案する。

「そうね。私は賛成よ」

「マエトもいいか？」

カイはマエトに確認を取る。

「あー、うん、いいよ」

マエトからも了承を得て、3人はキャンプを張る。

こう言ったフィールドでキャンプするのにカイは慣れており、その備えはしつかりとしていた。

こんな風に野宿することはキリトと組んでる時に何度かあった所為だ。

モンスター除けの焚火を起こし、簡易的な安全地帯を作る。

その後は、ミトの持っていた調理セットで簡単な夕食が作られた。

「はい、どうぞぞ」

ミトが作ったのはシチューだった。

「ミトさん、料理作れるんだ」

シチューを受け取り、マエトが言う。

「本当は《料理》スキルを取る気はなかったんだけど、ちよつと訳合つてね」

「そうだったのか？どんな訳だ？」

シチューを食べつつ、カイが尋ねる。

「内緒よ」

「なんだよ、教えてくれないんじゃないか？」

「ダメ。その時が来たら、教えてあげるから」

仲睦まじく話をする、カイとミト。
そんな2人を、マエトは少し寂しそうに見つめ、シチューを平らげた。

「ねえ、先に寝ちやっついていいの?」

「いいに決まってるだろ。そもそも、俺が付き合せてる身なんだ。ゆっくり寝てくれ」

「じゃあ、先に寝るね。三時間経ったら起こしてよ」

「そう言い、ミトは毛布を被って眠り出す。」

ミトはものの数分で寝息を立て始め、カイはそんなミトに優しく笑みを向ける。

「ねえ、カイさん」

「そんなカイに、マエトが声を掛けた。」

「ん? どうした?」

「カイさんってミトさんと付き合ってるの?」

「それは……恋人同士かって事か?」

「そーだよ」

「……残念だけど、付き合ってるじゃないよ。それ処か、迷惑かけっぱなしだ。俺なんて、本来ならこうしてミトの傍に居ることも、ミトの寝顔を見る事だって許されないはずだ」

「そう言い、カイはミトの頭を優しく撫でる。」

「でも、ミトがさ、傍に居てくれって言ったんだ。そんなこと言われた

ら、男は嬉しいもんだよな」

カイはマエトに笑って言う。

「だから、周りが何と言おうとミトが嫌がらない限りはミトの傍にいるつもりだ………って、これじゃあ惚気みたいだな、忘れてくれ」

カイは照れたように笑い、言う。

「そう言えば、マエトって凄く強いよな」

「うん？そーかな？」

「ああ。でも、《攻略組》って訳じゃないんだろ？」

「まあね。おれ、対人専門だから」

「対人？てことは、デュエルか」

「いんや、おれはデュエルなんかしてないよ」

「は？でも、SAOで対人戦って言ったらデュエルのことじゃ………まさか！」

マエトの言葉に、カイはある一つの推測が浮かんだ。

「そのまさかだよ。おれがしてるのは………殺し合いだよ」

《殺し合い》

その言葉に、カイはマエトに対して警戒の目を向けた。

だが、それはほんの一瞬だった。

ここまでのマエトの言動、マエトのプレイヤーカーソルカラー、それらを考えカイはある答えに辿り着いた。

「………まさかとは思うがマエト、お前、《PKK》なのか？」

《プレイヤーキラーキラー》、通称《PKK》。

つまりはプレイヤーキラーを殺すキラーだ。

事実、アインクラッドでも一時期に相手が《殺人者》なら、殺してもいいと言う思想が出回った。

だが、いくら相手が《殺人者》とは言え、人を殺す事を躊躇う者が多くその思想はいつの間にか消えていた。

「《PKK》………そう言えばそんな呼び方もあったけ？おれは、《悪魔プレイヤー》って呼んでるけど。軽蔑した？」

哀愁を漂わせてそう言うマエト。

そんなマエトに、カイは暫し無言でいた。

「……理由、聞いてもいいか？」

暫しの無言の後、カイはマエトにそう聞いた。

その事にマエトは驚いた。

マエトは、カイの名前を知らなかった。

一応《攻略組》の有名なプレイヤーなら名前は知ってるし、特にトツプクラスのプレイヤーともなれば顔だって知ってる。

だが、カイの名前は初耳だった。

その事に関しては、マエト自身知らない人が居ても無理ないか、と1人で納得した。

初耳のプレイヤーとは言え、《攻略組》のプレイヤーともなれば、自分のしたことに対して咎めて来ると思っていたマエトは、咎めるのではなく理由を聞いてきたカイに少しだけ驚いた。

「……友達が、居たんだ」

マエトは、初対面のカイに親友とも言うべき彼、《ベルフェゴール》の事を話した。

コンビを組んでいたこと、現実に戻っても友達でいようと約束した事、そして、ベルが殺された事。

「こんなことに意味などないかも知れない。ただの自己満足に過ぎないし、それで死ぬかも知れない。でも、それでもいい。おれはただ、殺人者を殺したいだけだから……」

そこまで語り、マエトはカイを見た。

カイは終始無言で聞いていた。

「その気持ち……分からなくてもいいぞ」

「え？」

「俺も同じだ。いや、ある意味、俺はマエトよりも質が悪い。俺は……ミトを殺したんだ」

その言葉に、マエトは驚き、顔を上げた。

「でも、ミトさんはそこに……」

「キリトのお陰だ。俺がミトを殺しちまった時、アイツが復活アイテムを使ってミトを助けてくれたんだ……俺はな、マエト……家族を殺されたんだ」

カイはマエト自身の過去を話した。

過去を話し終えると、この間の《討伐作戦》で自身が嫌悪する殺人をした事、自暴自棄になって殺人を行った事、まだ殺しもしてない下っ端も殺そうとした事、それを止めようとしたキリトと殺し合いをした事、そして、それを止めようとしたミトを殺した事。

全て包み隠さず、マエトに話した。

「マエトみたいに、自ら決めて手を血に染め様とした訳でもない。暴走して八つ当たりの様に殺し、拳句、大事な人も手に掛けた。キリトが居なかつたら、俺はきつと……………」

カイは自分の掌を見つめ、ギユツときつく握り、マエトを見る。

「マエト、お前の決めた道だろうから俺は否定しない。でも、もしお前が助けを必要とするって言うならいくらでも力になる。だから、一人で背負うなよ」

そう言つて、カイは手を差し伸べた。

「……………ありがとう、カイさん」

マエトはカイの手を取り、握手を交わした。

「《悪魔^{ブラック}プレイヤー》か。そんな子が居たなんてな」

「歳のには、レオやシリカと同じぐらいだと思う。そんな子が、俺以上に暗い闇を抱えてる。そんなの見てたら、どうしても力になってやりたくてさ」

「カイらしいな。それで、そのマエトって子はその後、どうしたんだ？」

「ああ、それな。不思議な話ってのはここからなんだよ」

「ここからが本題らしく、カイは話を続ける。」

「マエトとは、その後フレンド登録したんだ。で、朝になるとマエトは自分の拠点の宿に帰るって言って別れたんだ。で、俺もミトを連れて教会にクエストの完了報告に向かった。そっから、マエトと連絡を取る事は無かったんだけど、ある時に、レオやシリカと会わせてやろうって思ったんだよ」

「ああ、歳が近いから友達になれるとか思ったんだな」

「で、フレンドリスト開いたら、消えてたんだよ。《Maeto》の名前が」

その言葉に、キリトは言葉を失った。

「ま、まさか、そのマエトって子……………」

「俺もそう思って、《黒鉄宮》の《剣士の碑》で確認した。そしたら、《Maeto》って名前はなかったんだよ」

「……………は？」

「だから、名前自体が無かったんだ。SAOに《Maeto》ってプレイヤーは存在しないんだ」

「…み、見落としてたんじゃないか？…………フレンドリストに名前が無かったのもフレンド登録し忘れとか？」

「それはない。確かに、あの時、俺のフレンドリストにマエトは追加されてた。しかも、ミトに聞いてもそんな子、覚えがないってさ」

「じゃ、じゃあ、その子って一体……………」

「な？不思議だよな」

「いや、不思議以前に怖いだろ!!」

キリトの絶叫が、宿中に響いた。

「ん〜……やっぱ不思議だなー」

「とー君、どうしたの？」

「ユウちゃん……いやね、SAOで不思議な人と会ったことを思い出してさ」

「不思議な人？」

「そ。めちゃんこ強いのに、《攻略組》の誰も知らない人なんだ」

「とー君やキリトよりも強いのか？」

「うん。おれなんかよりめっちゃ強い。キリトさんとは、多分同等かな？」

「へー。それで、その人の何が不思議なの？」

「訳合って、その人とフレンド登録したんだけど気が付いたら消えてたんだ」

「え？それってSAOでの話だよ、ならまさか……！」

「うん、俺もまさかと思ったよ。でも、確認するのが怖くてさ。だから、この前キリトさんに聞いたんだよ、そのプレイヤーの事」

「キリトに？」

「キリトさんと仲良いみたいだったから、知ってると思ったんだよ。そしたら、キリトさん、そんなプレイヤーは知らないって」

「え？」

「後、アスナさんの友達のミトさんと仲良さげだったから、ミトさんにも聞いたんだけど、ミトさんも知らないって言うんだ。不思議だよ」

」

「(不思議って言うか怖いよ!) い、一応聞くけど、その人なんて名前？」

「カイだよ。カイさん、赤いコートと赤い刀が印象的だったかな」

一時の再会、永劫の別れ

「しかし、本当にマエトは何者だったんだ？」

カイはアルンの街を歩きながら、そんなことを呟く。

「確かにフレンド登録したのに、フレンドリストから消えて、そもそもマエトってプレイヤーは存在しなかった。ヒースクリフに聞くべきだったな」

そんなことを思いながら歩いているとカイはあることに気づいた。

「ここは………何処だ？」

周りの建物はアルンにある建物だが、周りを囲う雰囲気何か違うと察し、カイは警戒する。

そして、無意識に腰の刀に手を伸ばし、警戒する。

その時、近くの建物の影から人の気配を感じた。

カイは咄嗟に抜刀し、刀を向ける。

すると、建物の影から現れたその人物も、素早く剣を抜き、カイへと向ける。

互いの剣が、互いの首へと向けられる。

だが、剣が振るわれる事は無かった。

カイは、現れた相手の顔を見て動きを止めた。

そして、相手もカイを見て動きを止めた。

「マエト!?!」

「カイさんじゃん」

その人物は、あの日SAOで出会った不思議な少年、マエトだった。

「久しぶりだな、マエト」

「カイさんも元気そうだね」

ベンチに座り、マエトと話をした。

「あの後から連絡が取れなくて、心配してたけど元気そうで何よりだ」
「それはおれもかな、いくらでも力になるって言ってくれたのにいざ連絡しようと思ったら連絡取れないんだもん」

「うっ……それは、すまん」

「なんて冗談だよ。あの後、カイさんに助けて貰おうって思ったことなんてないし、カイさんの名前がフレンドリストから消えてたのも偶然気づいただけだし」

マエトは、変わらないのんびりとした笑みで言う。

(ん？なんかマエトの奴、少し変わったか?)

カイは、マエトの笑みに前の様な暗い部分が見えないことに気づき、そう思った。

「あ、それよりさ、おれカイさんにあったらお願いしたいことあったんだ」

「ん？なんだ？」

「カイさん、おれと戦って」

真剣な表情と目で、マエトはカイにそう言う。

「それって決闘デュエルの事か？」

「うん。あの時はさ、おれカイさんの事殺人者レツトだと思ってたし、不意打

ちみたいなことしたじゃん？だから、正々堂々と戦いたいんだ」

「……………ああ、いいぞ。俺で良ければ喜んで」

カイはマエトからの申し出を快く受け入れ、決闘デュエルをすることになった。

「《全損決着》でいいよな？」

「いいよー。あ、でも、魔法や空中戦は無しでいい？」

「いいけど、どうしてだ？」

「あの時の仕切り直しのつもりでやりたいからかな？」

「なるほどな。俺はいいぞ」

そう言つて、カイは《全損決着》を指定し、マエトに決闘申請デュエルを送る。

マエトはそれを早々に受諾すると、2人の間で10秒のカウントダウンが始まった。

マエトは鞘から片手剣を引き抜き、脱力して両腕をだらりと下げた。

対してカイは両足を前後に開いて腰を落とし、居合いの構えをとつた。

（あれ？そう言えば……………）

減つていくカウントダウンを見つめながら、カイは気付いた。

（なんで誰も通り掛からないんだ？）

いつもなら多くのプレイヤーで賑わっているALO。

なのに、今はプレイヤーの姿は誰一人見えなかった。

いくら、通りから外れた路地裏と言え、誰も通りかからないのはおかしかった。

その瞬間、カウントが0になり、決着デュエルが開始した。

人が居ないことに気づいたカイは、僅かに反応が遅れた。

それは致命的なミスだった。

マエトは動き出し、恐ろしいスピードでカイへと接近した。

カイが気付いた時には、既にマエトは跳躍し、カイの頭上を取つていた。

右手に握られた淡い紫色の刀身の片手剣、《ストラグラ》がカイのア

バターの心臓部を、肩口から叩き斬る。

意識をマエトから外し、その隙を突かれた一撃。

躲すことも、防御も不可能。

そのはずだった。

「ふっ！」

カイは、刀の柄を持つ手を離し、握りしめる。

そして、マエトの剣が当たる寸前で拳を放った。

《体術》スキルだ。

元々、カイはSAOでは《体術》を組み込んだ戦いを得意としており、どんな体勢からでも《体術》スキルを使うことが出来る。

これにより、先に決闘^{デュエル}の先手を取れたのはカイだった。

カイは素早く刀を振るい、連撃を繰り出す。

だが、マエトはカイの猛攻をするりと躲していた。

(凄いな、アスナほどじゃないにしろ、速さにはそれなりに自信があったんだがな)

カイは、マエトの防御要らずの回避に驚くと同時に感心する。

(完全に隙を突けたと思ったのに、切り替えが速いな)

カイの攻撃を躲しながら、マエトは減った自身のHPを見る。

(対応が遅れながらも、あの反応速度……キリトさんやゆうちゃん程じゃないにしろ凄いや……………)

マエトも、カイの反応速度に驚きと感心する。

カイとマエトは互いに見つめ合い、笑う。

それを合図に同時に走り出し、鏢競り合う。

マエトは《ストラグラ》と《シャドウリッパー》を交差させ、カイの刀《紅蓮》を受け止める。

だが、筋力値で優っているカイに圧される。

そこで、マエトは敢えて後ろに下がり、カイのバランスを崩すことにした。

「うおっ!？」

バランスを崩したカイは驚きを見せるも、そのまま一歩踏み出し、至近距離で突きを放つ。

(バランスを崩されながらも攻撃!?)

マエトもまた、カイに驚くもなんとか突きを受け流す。

カイは、突きを放った態勢のままマエトの後ろを取り、距離を取る。「対人戦をしていただけあって、戦いなれてるな。マエト」

「カイさんも流石は《攻略組》。こんなに強い人と戦うのは、おれも久々だよ」

互いに笑い合いながらも、腹の内を探り合う。

互いに走り出し、打ち合う。

マエトは速さを生かし、また建物の壁も足場にし、全方位から高速かつ不規則に飛び回ってカイを死角から攻撃する。

だが、カイはその全ての攻撃に対応し、《体術》を織り交ぜた攻撃でマエトを攻撃する。

(《体術》を織り交ぜた攻撃、それに動き1つ1つから分かる。カイさんの戦い方は、対人戦法だ。でも、カイさんの性格から考えると、対人って言うよりは亜人型Modを想定した戦法かな?)

マエトの予想は正しく、実際、カイはSAOで戦っていたころは亜人型Modとの戦闘を得意としていた。

ほんの数分程度の打ち合いで、マエトはそれを理解した。

そこで、マエトはソードスキルを発動する。

《バーチカル》が発動し、カイの攻撃を弾く。

「うをつ!?!」

「ふっ!」

カイが大勢を一瞬崩し、そこを狙って《スネークバイト》を使う。速度特化の左から右、右から左の水平2連撃技に、カイは思わず驚く。

が、逆に自身も刀スキル《弧月》を使い、弾く。

互いにノックバックし、距離を取る。

(今のも見切るか……やっぱ一筋縄じゃないかね)

(スゲー速さだな。2本の剣が左右両側から同時に攻撃したように見えたな……)

2人は、互いに相手の実力に感心した。

「そろそろ本気で行くよ！カイさん!!」
「俺も、ここからは全力だ!!マエト!!!」

二人は、再び全速力で駆け出す。

カイは《紅蓮》を腰だめに構える。

そして、地面スレスレの超低空姿勢になり、まるで弾丸のようにマエトへと接近する。

それに対し、マエトは剣を交差させ、防御の姿勢に入る。

カイは、その防御の上から、更に《体術》スキルの蹴りを放つ。

それにより、マエトは空中へと打ち上げられる。

しかし、マエトは空中で体勢を立て直すと、カイに向けて《シャドウリッパ》を投げ付ける。

「何!？」

突然の事に、カイは驚きつつも《紅蓮》で防ぐ。

だが、それこそがマエトの狙いだった。

マエトは、左手に持った《シャドウリッパ》を囮にし、カイが防いでる間に頭上から急接近した。

右手に握った《ストラグラ》で斬りかかり、カイの目を狙う。

(貫った!!)

マエトの攻撃を、カイは体を捻ることで何とか避けた。

(危なかった……)

カイが安堵するのも束の間、マエトはカイの目の前まで来ており、上空でキヤツチした《シャドウリッパ》を振り下ろした。

カイは、咄嗟の判断でその場を飛び退くことで回避する。

だが、マエトは振り下ろされた《シャドウリッパ》を、そのまま横に薙ぎ払う。

カイ後ろに下がると同時にしやがみ、それをやり過ぎす。

マエトは、カイに向かって三枚刃ブローメランを投げる。

「はあっ!!」

カイは、《紅蓮》を縦に振るい、マエトの攻撃を弾いた。

そして、マエトに近付き、袈裟懸けに斬ろうとする。

だが、そこにマエトの姿は無かった。

(どこに行つた!?)

マエトを探すカイの背後にマエトが現れ、無防備な背中に攻撃を放つ。

「くっ!?!」

カイは、なんとか反応して《紅蓮》でガードするも、完全な不意打ちの為、無理な体勢でしか受け止めれず、体勢を崩す。

(その状態からなら、反撃は不可能！)

カイの武器は、パレイされ跳ね上がっている。

完全に無防備となつたカイの心臓目掛け、マエトはとどめの一撃を放つ。

が、次の瞬間、マエトの頭部に衝撃が走る。

カイは刀で斬るのは無理と判断し、刀の柄頭でマエトの頭を殴りつけた。

ダメージ判定はないが、それでも時間を稼ぐには十分だった。

カイの刀がライトエフェクトを纏い、ソードスキルを放つ。

刀最上位剣技《散華》

これが決まれば、カイの勝ち。

しかし、マエトは頭を殴られながらもこの時を待っていたと言わんばかりの眼差しをカイへと向けていた。

そして、マエトの剣もライトエフェクトを纏い、カイへと攻撃した。

上から下へ斬り降ろし、下から上へ斬り上げ、左上から右下へ斬り降ろし、右下から左上へ斬り上げ、左下から右上へ斬り上げ、右上か

ら左下への斬り降ろし、最後に1回転して6撃目と同じ軌道での

斬り降ろし。

自身のスキルを打ち消され、さらに強烈な斬撃を刀へと叩き込まれる。

(なんだ、このスキル!?)

カイは見たことないスキルに驚きを隠せなかった。

だが、すぐにそれがなんなのか分かった。

(そうか！OSSSか！)

OSSS 《テアリング・バイト》

マエトが編み出した、《オリジナル・ソードスキル》にカイは驚愕する。

もつとも、《テアリング・バイト》は戦闘用と言うより武器破壊に特化している。

本来は、相手の武器の耐久値をそこそこ消耗させた後、わざと隙を見せてソードスキルを誘い、技の出始めもしくは出終わりの状態の武器を狙って叩き込むのが本来の使い方だ。

カイの刀はかなりの業物で、耐久値も高く、この決闘^{デュエル}ではあまり耐久値を削れず、破壊にまでは至らなかったが、それでもかなりのダメージを与えることが出来た。

「これでおれの勝ちー！」

マエトは勝利を確信し、最後の一撃を放つべく距離を詰める。しかし、その表情はすぐに凍り付いた。

カイの瞳は闘志で燃えており、まだ勝負を諦めていなかった。

カイの左手がライトエフエクトを纏う。

《体術》スキル!?!いや、おれのHP残量から考えて、《体術》スキル程度で削り切れる量じゃない。いける!」

カイの左手とマエトの剣が交差し、マエトの剣の剣先が、カイの胸に刺さる。

(獲った!)

マエトは勝利を確信し、このまま心臓を一気に貫こうとする。が、次の瞬間、自身の胸に衝撃を感じ動きを止める。

(なっ!?!体が……!)

急に動かなくなったことに、マエトは驚きを見せる。

見ると、カイの拳はマエトの胸の中心を捕らえていた。

カイはそのまま、マエトを吹き飛ばし、《紫電一閃》を放つ。

刀が赤い一筋の光となり、マエトの心臓を貫く。

そして、マエトのHPは底を尽いた。

「はあく、なんか凄いの見た」

決闘^{デュエル}を終えて、マエトは地面に大の字になって、そう呟く。決闘^{デュエル}は、カイの勝ちだった。

「これでも元《攻略組》だし、《焰の剣聖》なんて大層な二つ名も付けられたんだ。意地でも負けられないさ」

「《焰の剣聖》か………確かにあの攻撃見たら、その二つ名も領けるねー」

マエトはそう言い、立ち上がる。

「最後のアレって何？」

「《拳術》スキルだよ」

《拳術》スキルとは、土妖精族領の修練場で習得できるスキルで、《体術》スキルとは違い、ダメージとスタン効果を与えることが出来るスキルだ。

ダメージに関しては専用装備がないと与えられないが、スタン効果は魅力的なのでカイは《拳術》スキルを習得した。

「そう言えば、そんなスキルあったっけ」

「最後の一撃、《体術》と思って油断しただろ？」

「うん、思いつきり《体術》だと思ってた。だまし討ちとかハツタリは、おれの十八番だと思ってたんだけどなあ」

「戦いにおいて、だまし討ち・ハツタリ・ブラフは戦況を有利にするのに使えるからな」

カイは笑って答える。

「ありがとう、カイさん。お陰で、おれの心残りは無くなったよ」

「そうか。俺の方こそ、今のお前を見て良かったよ。それに、あの頃と変わって表情が少し明るくなったな」

「ん？そうかな？」

「ああ、そうだよ」

「自分じゃよく分からないけど、カイさんがそう言うならそうなんだろうね。じゃあ、おれもう行くね」

マエトはカイにそう言って、路地裏から出て行くようにする。

「あ、マエトー！」

カイはもう一度マエトとフレンド登録をしようとメニューウィンドウを開く。

が、フレンド申請を送ろうとした指の動きが止まる。

数秒程、黙考するとカイはフレンド申請を送るのを止めた。

マエトは、カイの行動に首を傾げる。

「元気でな」

「……うん、カイさんもねー!」

マエトはカイに手を振って、歩き出す。

カイも、そんなマエトに手を振って、マエトとは逆方向に歩き出した。

(なんとなくだけど……マエトとはもう会えないだろうな)

カイはそんなことを思いながら、出口に向かう。

不思議と、どう行けば大通りに出られるか分かった。

(死ぬとか、ゲームの引退とか、そうじゃない。多分、俺とマエトが出会えたのは、茅場ですら予想できない奇跡に近い何かなんだろう)

マエトと会えないことに、寂しさを感じるが、その顔は笑っていた。

(まあ、元氣そうならそれでいいよな)

路地裏を出ると、変わらずそこは多くのプレイヤーで溢れていた。

まるで、先程の路地裏での静けさが嘘のように思える程だ。

「カイ!」

名前を呼ばれ振り返ると、そこにミトが居た。

「ミト、どうした?」

「どうしたじゃないわよ! ログイン状態なのに急にフレンド機能の追跡が使えなくなつて、皆で探したのよ!」

「悪かつたよ。ちよつと野暮用でさ」

「野暮用?」

「ああ、一度しか会えなかつた友人とのな」

そう言い、カイは後ろを振り返りふつと笑う。

「キリト達の所に戻るか、ミト」

「あ、ちよつと! もう!」

詳しい事を教えないカイに、ミトは少し怒る。

そして、カイが見た方を見る。

そこには、反対側の大通りに繋がる狭い一本道しかなかった。

アインクラッド編 プロローグ

『なあ、それってモンスタートレジャーだよな?』

外で一人寂しくゲームをしてる少女に、一人の少年が声を掛ける。

『……そうだけど』

『やっぱりそうか!なあ、俺もそれやってるんだよ!一緒にやらないか?』

少年は手にしたゲーム機を見せながらそう言う。

少年の言葉に少女は「いいよ」と答えたかった。

だが、少女は先程、友達に言われた言葉が忘れられず、胸に突き刺さるように残ってた。

『私なんかとやってても、つまんないよ』

『え?なんでだよ?』

『私、上手過ぎるから一緒にやりたくないんだって。私と一緒にだと……楽しくないって』

悲しそうに俯いて少女は言う。

『それがどうしたんだよ?』

しかし、少年はそう言った。

『それはそいつらが楽しくないだけだろ?俺は強い奴大歓迎だ!』

そう言って少年は、少女の腰かけているベンチに座る。

『集会場作るから入って来いよ。P A S Sは「※※※※※※※※※※」な』

そう言われ、少女は恐る恐る集会場へと入る。

『入って来たな。じゃあ、フレンド申請つと』

送られてきた申請メッセージに、少女は困惑しながらもOKのボタンを選択する。

今まで真っ白だったフレンド一覧に名前が現れる。

『えっと……k a i?カイって読むの?』

『ああ、そっちの名前は……m i t o……ミトか!よろしくな、ミト!』

そして、出会ってからと言うものの、カイとミトの二人は毎日一緒に遊んだ。

カイのゲームの腕はミトですら感心する腕前で、ミトは一瞬でカイのことを気に入った。

そこから、ミトとカイの仲が深まるのは早かった。

学校が終われば、公園で待ち合わせし夕方までゲームし、休日でもお互いに予定がない限りは一緒にゲームをしていた。

カイとゲームをしている時間は、ミトにとって大切な時間だった。失いたくない程に。

だが、現実残酷だった。

二人が出会ってから一年が経とうとした春。

ミトはいつも通り公園でカイのことを待っていた。

だが、30分待ってもカイは現れなかった。

『カイ……………遅いなあ……………』

そして、その日、カイは現れなかった。

それから毎日、ミトは公園でカイを待ち続けた。

だが、カイは一向に現れなかった。

一度、カイの家に行こうかと思っただけ、ミトはカイの家が何処にあるのか知らなかった。

さらに言うと、カイの本名も知らなかった。

一年近く一緒にいながら、カイの本名や住んでる場所を聞かなかった事に、ミトは腹を立てる。

『もう……………会えないのかな……………』

そう呟くミトの手にあるゲーム機には、最初に二人でやったゲーム“モンスターレジャー”のソフトが入っており、画面には《通信待機中》の文字があった。

しかし、カイのキャラが入って来ることはなかった。

もうカイとは会えない。

そのことをようやく理解したミトは、涙を流した。

目から落ちる涙が、ゲームの画面に落ちる。

こうして、カイとミトの二人は会うことがなくなった。

だが、この二人は後に再会することになる。
ゲームでの死が現実の物となる恐ろしきデスゲーム、VRMMOR
PG《ソードアート・オンライン》の中で……………

第1話 剣の世界へ

2022年11月6日

都内にある一軒家で一人の少年がいた。

少年の名は、神里伊緒。

今年高校一年生になったばかりだ。

「伊緒、入ってもいいか？」

「伯父さん？いいよ」

扉が開き、伊緒の伯父である神里耕哉が現れる。

「伊緒、今日が何の日か覚えてるか？」

「え？今日………なんだっけ？」

「やれやれ、また忘れたのか」

そう言って、耕哉は紙の包を取り出す。

「伊緒、16歳の誕生日、おめでとう」

「え？………あ、そっか。今日、誕生日か」

カレンダーの日付を確認し、今日が自分の誕生日であることを思い出す。

「まったく、去年もそんな調子だっただろう」

「あはは………ありがとう、伯父さん」

困ったように笑い、プレゼントを受け取る。

「ところで伯父さん、これって？」

「聞いて驚けよ………《ソードアート・オンライン》だ」

「え!？」

耕哉の言葉に驚き、慌てながら包を開ける。

そこにあっただのは、今話題のVRMMORPG《ソードアート・オンライン》だった。

「凄い！これ、万人限定の初回ロットなの！」

「ふふん、俺は運がいい男だからな」

耕哉はそう言って笑う。

「俺は今から出掛けるけど、あまり遊び過ぎるなよ。今日は誕生日だから大目に見るが、何事も程々だぞ」

「わかってるよ！ありがとう、伯父さん！」

出かける伯父を見送り、伊緒はすぐにベッドの傍に置いてあるナーヴギアを被り、ソフトをスロットに入れる。

時刻は12:59

もうすぐでSAOサービス開始が始まる。

「よし……………リンクスタート！」

伊緒がそう唱えると、暗闇の世界に飛んだ。

『《ソードアート・オンライン》の世界へようこそ。まずはプレイヤーネームを入れてください』

「じゃあ、k a iで」

伊緒にとって親しみのある名前を入力し、その後にアバターの設定画面に映る。

伊緒は特にこだわりがなかったため、デフォルト設定に髪型や目の形を少し弄るだけですませた。

『それではゲームをお楽しみください』

アナウンスが終わると共に、虹色のリングをくぐり、伊緒は地面に立っている感覚に襲われる。

ゆっくり目を開けると、そこはPVで見た、SAOの世界だった。

「おお、ここがSAOか……………βテストの抽選も落ちて、ソフトの発売も平日だから諦めてたけど……………伯父さんには感謝だな」

そう言い、神里伊緒改めカイは伯父に感謝の念を飛ばす。

「さて、まずは何をするかだな……………」

辺りを見渡しながらそう言っていると、自分の横を走り抜ける一人のプレイヤーを見かける。

「今のって……………まさか」

案内NPCの話も聞かず、迷いなく走り出す姿にカイはもしやと思いを追う。

後を追いつ、路地裏に入ったところで、カイは声を掛けた。

「なあ、その人ー」「おおい、その兄ちゃん！」

すると、カイと同時に好青年といった感じのプレイヤーが声を掛けた。

「え？」

行き成り二人から同時に呼び止められ、黒髪のプレイヤーが困惑する。

「あ、すまない」

「いやいや、俺の方こそすまない」

カイと青年が互いに謝る。

「てか、もしかしてだけとアンタもレクチャーを頼もうとした口か？」

「てことは、オメーもか」

「えつと、俺に何か用か？」

二人して納得していると、黒髪のプレイヤーが声を掛ける。

「ああ、悪い！ところで、兄ちゃんさ！あんた、もしかしてβテスター

じゃないか？」

「え……何故それを」

「案内役のNPCを無視して走ってただろ？それに、迷いなくこんな路地裏に入った。なら、この世界のことを知ってる奴だって思うのが普通だろ？」

「なるほどな……それで、用は？」

「それなんだが、俺に戦い方をレクチャーしてくんねえーかな？頼む！この通りだ！」

「俺からも頼む。どうせなら、経験者から教わりたい」

手を合わせて頼んでくる青年とカイに、黒髪のプレイヤーは笑った。

「ああ、いいぜ」

「本当か!?助かるぜ！俺はクライン！よろしくな！」

「俺はカイだ。よろしく」

「俺はキリトだ」

「うおおおおおつ!!?」

キリトおススメの武器屋で武器を購入すると、三人は町を出てすぐのフィールドに向かった。

クラインはフレンジー・ボアと言う、雑魚モンスターに突進され、仰向けに倒れる。

「ま……股座が……!」

股間を抑え、蹲るクラインにキリトは呆れたように笑う。

「痛みはないはずだぞ」

「……あ、そっか」

立ち上がったクラインは、キリトにどう戦えば良いのかと尋ねる。

「大事なのはモーシヨン。モーシヨンを起こしてソードスキルを発動、後はシステムが命中させてくれるって」

そう言うときリトは、早くも手に入れた《投擲》スキルを使い、足元の小石をフレンジー・ボアにぶつける。

すると、フレンジー・ボアはキリトに狙いを定め、突進してくる。

その攻撃をキリトは片手剣で受け止めつつ、躲す。

「モーシヨンか……!」

「そうだな……グツと力を込めて、そのあとスパンツで打ち込む感じだ!」

そう言い、フレンジー・ボアを蹴って、クラインの方に向かわせる。

クラインは言われたことをつぶやきながら、曲刀を抜き、構えを取ると、システムがスキルを認証し、ソードスキルが発動する。

《曲刀》スキルの《リーバー》がフレンジー・ボアの身体を切り裂き、HPを大幅に削る。

「おっ!やった!」

「気を抜くなよ!奴はまだ健在だ!」

隙だらけになったクラインの背中に、フレンジー・ボアが突進をし

ようとする。

すると、その間に割ってカイが立つ。

「貰ったぜ！」

クラインと同じ曲刀を手に、《リーパー》を使い、フレンジー・ボアに一閃。

フレンジー・ボアは残りのHPが消し飛び、ガラスの割れる様な音と共にポリゴンの欠片となって消える。

そして、三人に経験値とコル（SAO内での通貨）、そして、今の戦闘で手に入れたアイテムが目の前に現れたウインドウに表示される。

「悪いな、クライン。美味しい所はもらったぜ」

クラインに向け、カイはにやつと笑う。

「ちえ、ズリイぞ、カイ」

「隙だらけなお前が悪い」

「凄いな、カイは。もうソードスキルを物にしてるのか」

「慣れると簡単なものだったよ」

そう言い、カイはもう一度ソードスキルを発動し、空を斬る。

「それにしても……フレンジー・ボア程度に苦戦したらこの先やっていけないぞ、クライン。アレ、RPGで言うと、スライムクラスのスモンスターだからな」

「スライムクラス!?俺はてつきり中ボスぐらいかと……」

「どこの世界に、中ボスを序盤の街を出た所に配置すんだよ」

三人で笑いながら、クラインの「誰が一番多くモンスターを狩れるか勝負と行こうぜ!」の発言に乗り、三人は狩りを始めた。

その後、夕方になるまで三人はモンスターを狩りまくり、気が付けば、時刻は17時13分になっていた。

「しっかし、信じらんねえよな。ここがゲームの世界だなんてよ」

クラインが夕焼けの空を見て言う。

「マジこの時代に生まれて良かったよ」

「大げさな奴だな」

「だって初のフルダイブ体験だぜ！」

「てことは、ナーヴギア用のゲームもS A Oが初めてなのか？」

「どっちかって言うと、S A Oの為にナーヴギアも揃えたって感じかな。一万人限定の初回ロットを手に入れたのは、我ながらにラツキーだった。ま、そんな中でも、βテストに当選したキリトはその十倍ラツキーだけだな」

「俺は伯父さんの運の良さで手に入ったからなあ。伯父さんに感謝しかないよ」

「そうだ、キリト。βテストの時はどこまで行けたんだ？」

クラインの質問に、キリトは上空、もといアインクラッド城を見上げて言う。

「二ヶ月で10層。でも、今度は一ヶ月も掛けない。一週間で第1層をクリアしてやるさ」

キリトはそう言って、笑う。

「テメー……相当ハマってたんな」

「正直、βテスト期間は、寝ても覚めてもS A Oのことばかり考えてた。この世界は仮想だけど、現実よりもずっと生きてるって感じがする。この剣一本でどこまで行けるような気がしてな……さて、狩りを続けるか？」

「俺は構わないぞ。今日は誕生日で、伯父さんから大目に見てもらえるからな」

「おうよ……って言いたいところだけど、腹が減ってな……一度落ちるわ。実は、17時30分にピザの配達予約してた。じゃ、また後でな」

クラインはそう言って立ち上がる。

「そうだ！この後、別のゲームで知り合った奴等と会う約束してたんだけど、よかつたら会わないか？」

「本当か？邪魔にならないなら喜んで」

クラインがそう言うのでカイは喜んで承諾する。

しかし、キリトは少し暗い表情をした。

「あ……いや、別に無理にとは言わねえよ。その内、紹介する機会もあるだろうしさ」

そんなキリトの心情を察したのか、クラインはフォローする。

「ああ……すまない」

「謝ることはねえって！レクチャーしてくれてありがとうとよ！このお礼は、いつか精神的にな」

キリトの肩を叩き、クラインは手を差し出す。

「これからもよろしくな」

「……ああ」

「そんじや、カイ！また後でメッセージ飛ばすからよ、そんな時にな！」

「ああ、よろしくな！」

拳を軽くぶつけ合い、クラインは右腕を振り、ログアウトをしようとする。

「あれ？」

「ん？どうした？」

「いや……ログアウトボタンがねえーんだよ」

「は？何言ってるんだ？ちゃんと底の方に……」

キリトもウィンドウを操作し、確認するが、その手を止める。

カイもまさかと思い、調べるが、確かにメニューの中に《ログアウト》のボタンがなかった。

「バグか？いや、ログアウトが出来ないなんて、今後の運営に関わるぞ……クライン、GMコールしてみてくれ」

「もうしてるって！だけど、全然反応がねえんだよ。他にログアウトできる方法ってあったっけ？」

「………いや、ない。プレイヤーがログアウトするには、メニューを操作する以外には」

「そうだ！ナーヴギアを頭から外しちゃえば！」

「無理だ。俺達は現実の体は動かせない。ナーヴギアが、身体を動か

す信号を全て、遮断してる。外に居る誰かが、外さない限りは……」
「そんな！俺一人暮らしただぜ！誰もいねえよ！カイ、キリト、お前たちは？」

「俺は伯父さんと暮らしてるから大丈夫だと思う」

「俺は、母さんと妹がいるから、晩飯の時には気付いてもらえるだろうけど……おかしいと思わないか？」

「変って、そりゃバグなんだし、変に決まってるだろ？」

「いや、バグにしたって、これは異常だ。こんなの、今後の運営に支障を来たすぞ」

「…言われてみりゃ確かに」

「普通ならサーバーを一時停止して、プレイヤーを全員ログアウトさせるはずなのに……運営からのアナウンス一つ無いなんて」

キリトがそう言った瞬間、突然鐘のような音が鳴り響いた。

突然のことに驚いていると、3人の体が鮮やかなブルーの光に包まれた。

光が収まると、三人は《始まりの町》にいた。

他にも、たくさんのプレイヤーたちが集まっており、全てのプレイヤーが集まっているのではと思う数だ。

数秒経ち、周りがざわつき始めた。

徐々にそれが苛立ち変わり始めた頃、空に「System Announcement」の文字が浮かびあがった。

ようやく、運営側からのアナウンスが始まる。

全員がほっとし、肩の力を抜いた。

しかし、夕焼けに染まった空の一部がどろりと垂れ下がり、空中でとどまった。

そして、そのどろりとした塊が形を変え20メートルはある人間の形になった。

形はSAOに出てくるGMの恰好をしている。

だか、そのGMのローブの中に顔は無く、袖の中には腕も無い。肉体自体がない。

とりあえずGMのアバターの恰好だけを用意しただけみたいな姿

だった。

GMの両手がゆっくりと揚がり言葉が放たれた。

『プレイヤーの諸君。私の世界へようこそ』

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

第2話 最悪な誕生日と誕生の日

茅場晶彦

その名は、子供でも知っている人物だった。

SAOを作った天才ゲームデザイナーで量子物理学者、そして、ナーヴギアの基礎設計者でもある。

『プレイヤー諸君は、既にメインメニューからログアウトボタンが無いことに気づいていると思う。それは、不具合ではなく《ソードアート・オンライン》本来の仕様である。諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームからログアウトすることはできない。また、外部の人間によってナーヴギアの停止、解除を試みられた場合、ナーヴギアが諸君の脳を破壊する』

「そ、そんなことできるわけがないよな……?」

「……おい、キリト。アイツが茅場晶彦本人かどうかはともかくとして、脳の破壊は可能か?」

「……可能だ。最新技術であっても原理は電子レンジと同じ。出力さえあれば脳を蒸し焼きにすることもできる」

「で、でも、電源コードをいきなり抜けば……」

「ナーヴギアの重さの3割はバッテリーセルだ。コードを抜いても無駄だ」

「そ、そんな……」

『10分間の外部電源切断、2時間のネットワーク回路切断、ナーヴギア本体のロック解除、または分解、破壊のいずれかによって脳破壊シークエンスが実行される。現時点で、警告を無視しナーヴギアの強制除装を試み、すでに、213名のプレイヤーがアインクラッドおよび現実世界から永久退場している』

213名と言う、人数の命が失われたと言うことに、カイは恐怖を感じた。

だが、それを面には出さず、平然を装い、茅場の言葉を待った。

『今、ありとあらゆる情報メディアによってこの状況は報道されている。ナーヴギアを装着したまま、2時間の回路切断猶予時間のうちに

病院、施設に搬送される。現実の肉体は、嚴重な介護体制のもとにおかれる。諸君には、安心してゲーム攻略に励んでほしい。さらに、《ソードアート・オンライン》はもうただのゲームではない。もう一つの現実だ。今後、ありとあらゆる蘇生手段は機能しない。HPがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、ナーヴギアによって脳を破壊される』

突きつけられた現実に、プレイヤーたちはどよめき出す。

『このゲームから解放される条件はただ一つ。アインクラッドの最上部、第100層に辿り着き最終ボスを倒すことだ。そうすれば、生き残ったプレイヤーは、全員、安全にログアウトされることを保証しよう』

プレイヤー達がどよめいていると茅場はまた口を開いた。

『最後に諸君にこれが現実である証拠を見せよう。アイテムストレージに私からのプレゼントがある。確認してくれたまえ』

カイがアイテムストレージを開くとそこに一つのアイテムがあった。

アイテム名：手鏡

《手鏡》と言う、茅場がプレゼントと言ったアイテムが気になり、カイはそれを調べた。

オブジェクト化し鏡を覗くと、そこにはカイが作った顔があった。首をかしげていると、急に体を白い光が包んだ。

2. 3秒経ち光が消えた。

何が起きたのか確認しようと、キリトに尋ねようとした瞬間、クラインが声を上げる。

「おめえ、キリトか!？」

「お前、クラインか!？」

キリトとクラインの言葉に振り向くと、そこには見たことないキリトの顔と、見たことないクラインの顔があった。

『諸君は、今なぜこのようなことをしたのか、と思っているだろう。大規模なテロでも身代金目的でもない。私の目的はすでに達成してる。この状況こそが私の最終目的なのだ。：以上で《ソードアート・オン

ライン』正式チュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る』

そう言つて茅場の姿は空に同化していくように消えた。しばしの静寂の後、広場に絶叫が響いた。

全員が口々に罵詈雑言を言い、騒ぎ立てる。

「クライン、こっちだ！カイもこっちに来い！」

キリトと呼ばれ、カイたちは路地裏に移動する。

「もし、茅場の言葉が本当なら、この街を出ないといけない。俺は次の村へと向かう。カイ、クライン、お前たちも来い」

「え？」

「この世界で生き残るには、ひたすら自分を強化しなければならぬ。VRMMOが提供するリソース、つまり俺達が得られる金や経験値には限りがある。『はじまりの街』周辺のフィールドはすぐに狩りつくされるだろう。効率よく進めるには、拠点を次の村に移した方がいい。俺は安全な道も危険なポイントも全て知ってるから、レベル1だったとしても、安全に辿り着ける」

「なるほどな。わかった、俺はキリトに従うぜ」

「で、でもよお……………俺、このゲーム、他のゲームでダチになった連中と徹夜して買ったんだ。そのダチ達、多分まだあの広場にいるんだ。置いては行けねえ」

クラインの言葉に、キリトは何も言えなくなった。

クラインはVRゲーム初心者。

カイはVRゲーム経験はあるものの、SAOは初心者。

カイとクラインの二人だけなら、キリト一人でもフォローができたが、そこに、さらにクラインの友たちも加わるとなると、キリト一人では守り切るのが難しい。

「キリト、これ以上おめえに世話になるのはいけねえよな。だから、俺の事は気にせず、次の村へ行ってくれ」

「クライン……………」

「それでも、前のゲームじゃギルドリーダーだったんだ。教わったテクでなんとかやってやるさ」

「……そうか。なら、ここでお別れだな。何かあったらメッセージ飛ばしてくれ」

「おうー」

「……じゃあな。カイ、行こう」

「ああ。クライン、すまない。無事でいろよな」

カイはキリトに付いて行くと決め、クラインに謝罪する。

キリトとカイは、クラインに別れを告げ、町の出口へと向かおうとする。

「……キリト！カイ！」

すると、クラインが二人を呼び止め、二人は振り向く。

「キリト、お前って、案外かわいい顔してるんだな！結構好みだぜ！カイもアバターの方より、ずっとイケメンじゃねえかよ、羨ましいぜ！」

クラインは親指を立てて、二人に笑い掛ける。

「お前こそ、その野武士ツラの方がずっと似合ってるよ！」

「お前の顔も、最高にイカしてるよ！」

キリトとカイも、笑顔でそう返し、そして、走り出した。

後ろを振り返らず。

キリトはクラインを置いてったことに罪悪感を感じた。

自分が生き残るために、誰かを犠牲にした。

そんな気持ち、心の中に残っていた。

「キリト！敵が来たぞ！」

カイの目の先には、モンスターがポップする前兆のポリゴン塊が出ている。

キリトは素早く剣を抜く。

キリトは飛び出し、向かってくる狼型のモンスターにソードスキルを放つ。

モンスターはそれにやられ、四散する。

が、もう一体のモンスターはカイを狙った。

「カイー！そっちに行つたぞー！」

「任せろー！」

カイもソードスキルを発動し、モンスターに攻撃を仕掛ける。

だが、放った《リーパー》をモンスターは躲した。
「なっ!？」

躲されたことにカイは驚き、さらに、ソードスキル発動後の硬直で動けなかった。

モンスターはそんなカイの首に噛み付く。

「ぐあっ!？」

そのまま押し倒され、その拍子に曲刀も落としてしまう。

「こ、この離れろ!」

手を使い、なんとか押しのけようとするも上手くいかず、カイのHPはじりじりと減っていく。

(まずい! HPがもう……………!)

HPがレッドになった瞬間、カイは恐怖した。

『HPがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、ナーヴギアによって脳を破壊される』

茅場の声が何度も頭の中で再生する。

(嫌だ! 死にたくない!)

「離れろおおおおお!!」

悲鳴に近い叫びをあげる。

「カイ!」

もう少しでHPが0になる瞬間、キリトの応援が間に合い、モンスターが消滅する。

「カイ! 大丈夫か!？」

「あ、ああ……………なんとか……………」

カイは数ドットしか残っていないHPを見つめ、震えた。

(俺は……………今、死に近づいていた……………! 嘘だろ……………!)

「カイ! しっかりしろ! ポーションだ! 回復をしろ!」

「あ、ああ……………」

キリトからHP回復ポーションを渡され、勢いよく飲む。

HPがじわじわと回復し、HPバーの色がグリーンになったのを見て、カイは安堵の溜息を吐く。

「カイ……………本当大丈夫か?」

キリトは不安そうにカイに尋ねる。

「ああ……大丈夫、だと思おう。ポーシヨン、ありがとうな」

カイはふらふらと立ち上がり、自身の武器を回収する。

「……………カイ、無理して付いてこなくてもいいんだぞ」

「……………キリト？」

「今ので分かったと思うけど、圏外フィールドは危険が伴うんだ。今は幸い、俺の攻撃が間に合ったからいいけど、次も間に合う保証はない」

キリトは申し訳なさそうに言う。

「だから、始まりの町に残っても」

「ふざけんなよ」

キリトの言葉に、カイは静かに怒る。

「確かに、俺は今死にかけたさ。本気で怖かった。生まれて初めて、死を感じた。本音を言えば、戦いたくなんてない。でも、お前は戦い続けるんだろ」

カイはキリトを真つすぐ見つめて言う。

「お前だけに背負わせて、俺一人のうのと生きるなんて、そんなの認められるかよ！それにな、この世界でできた最初の友達を見捨てるなんて俺にはできねえ！」

「カイ……………」

「戦うぜ、キリト。俺は戦う。お前と一緒に、このくそつたれなゲーム終わらせて、茅場の奴をぶん殴る！よくも人様の誕生日を最悪な日にしてくれたなってな！」

先程の恐怖の色は消え失せ、快活にニヤツと笑うカイ。

そんなカイに、キリトも思わず笑みを浮かべた。

「ああ、そうだな。俺も、気持ちちは同じだ。一緒にゲームクリアして、茅場を殴ろう！」

「おうよー」

そう言うと、キリトはウインドウを出し、カイにパーティーの申請をする。

「カイ、それを受け入れたら俺たちはパーティーだ。一緒に戦う覚悟、

あるか？」

「もちろんだ！」

カイはそう言い、パーティー申請を承認する。

「よし、行くぞカイ！」

「ああ、行こうぜキリト！」

そう言い、二人は再び走り出した。

こうして、神里伊緒の誕生日は最悪な日となり、カイと言う一人の剣士が生まれたのであった。

第3話 《森の秘薬》クエスト

デスゲーム初日の夜。

カイとキリトの二人は《ホルンカ》と言う村へと到着していた。そこでキリトはあるクエストを受けようとしており、現在パートナーであるカイはそれに協力することになった。

そのクエストとは、《森の秘薬》と言い、ホルンカの西の森にいる《リトルネペン》と呼ばれるモンスターからドロップする《胚珠》を持っていくというもので、持っていくと報酬で第3層の終盤まで使える剣と交換して貰える。

「しかし、正式版で報酬が増えるとはな」

キリトの言う通り、このクエストで得られる報酬は《アニールブレード》と呼ばれる片手剣なのだが、正式版になるに伴って報酬武器が選べるようになっていた。

その中に、《アニールシミター》と言う名の、曲刀があった。

「いいじゃねえか。俺もキリトも武装の強化ができるなら、それに越したことはないだろ？」

「それはそうなんだが、少し厳しくなるぞ」

「そうなのか？」

「まあ、どの道、俺もカイも序盤の武器だとこの先キツイから、それに性能のいい武器に変える必要があったしちようどいいと思うか」

二人で村の道具屋に向かい、HP回復ポーションや解毒ポーションを買い込み、それを分けてから、二人は西の森へと向かった。

「カイ、いいか？《胚珠》をドロップするのは花付きの《リトルネペン》だ。出現率は1%以下だが、通常のを倒し続けることで出現率が上がる」

「レベル上げにも打ってつけてわけか」

「ああ。でも、一番気を付けてほしいことがある。実付きの《リトルネペン》は攻撃しないでくれ」

「どうしてだ？」

「実付きを倒すと、実が割れて、嫌な臭いのする煙をまき散らすんだ。

毒性とかはないんだけど、その煙は周囲の《リトルネペント》を引き寄せるんだ」

「マジかよ」

キリトの説明に、カイは戦慄する。

「ああ。β時代は、それを知らずに実付きを狩って、煙をまき散らしてしまつて、周囲の敵が集まつたんだ。そして、レベル2と3の4人パーティーが全滅した。だから、実付きへの攻撃はダメだ。一応、実を割らないようにする戦い方もあるが、それより戦わない方が楽だ」

「あ、ああ、分かった」

カイは頷き言う。

「でも、そこまで脅威でもないから安心してくれ。亜人型Mobと違ってソードスキルは使わないし、能力面も攻撃寄りだから防御が薄い。数を狩るには打って付けだ」

「なるほど。なら、気を付けるのは実付きだけだな」

「そういうことだ」

西の森に到着すると、早速二人の視界に《リトルネペント》が現れる。

「よし、行くぞ。奴の攻撃方法はツルでの薙ぎ払いに突き。それと口からの溶解液だ。モーシヨンに注意してくれ」

「了解」

最後の確認を終え、二人は武器を構え走り出した。

「なあキリト」

「ん？どうした？」

「俺の見間違いないかなければ、奥のアレ、花付きじゃないか？」

「なに!？」

カイに言われ、キリトは奥の方を見つめる。

そこには確かに花付きがいた。

「花付きだ！幸先いいぞー！」

「よしーなら、早速狩るぞー！」

「ああー！」

カイとキリトは同時に走り出し、キリトは《スラント》を使い、《リ

トルネペント』のHPを二割削る。

そこにすかさず、カイが《リーパー》で斬り裂く。

それで《リトルネペント》のHPは残り5割以下になる。

「はあああああああ！」

最後に、キリトが《ホリゾンダル》でトドメを刺し、《リトルネペント》倒す。

そのまま二人で、花付きにも取り掛かり、速攻で倒した。

「よし！《胚珠》ドロップ！」

花付きからドロップした《胚珠》を手にキリトが声を上げる。

「これで後は1つだな」

「この調子なら残り1個もすぐだな」

「よし、ガンガン行こうぜ！」

「出ないな」

「驚くほどにな」

最初に花付きの《リトルネペント》が出てから20分近く戦い続け、《リトルネペント》を20体ほど倒すも、花付きの《リトルネペント》は1体も出なかった。

それでも経験値は溜まるので二人は狩り続けた。

そして、21匹目を倒した瞬間、二人の聴覚にファンファーレが聞こえた。

「お、レベル上がった」

「やったな」

「お互いにな」

互いに笑い合い、手に入れたスキルポイントを振る。

キリトは筋力に1、敏捷に2振り、カイは筋力に2、敏捷に1振る。

「さて、続きと行くか」

「いや、それよりカイ。この《胚珠》を持って、《アニールシミター》と交換して来い」

「そう言い、キリトはアイテムストレージから《胚珠》を取り出す。「どうしてだ？」」

「このまま戦い続けても時間がかかる。なら、武器を性能のいいのにして狩りの効率を上げるんだ」

「なら、俺よりキリトの方がいいんじゃないか？」

「最初に花付きを見つけたのはカイだろ。俺はまだいいから」

「そう言っただけでキリトは、強引に《胚珠》をカイの手に握らせる。

「そうか。なら、お言葉に甘えるよ」

「ああ。でも、なるべく急いでくれよな。俺はこの辺りで狩り続けるから、座標忘れるなよ」

「分かってるよ、ありがとうな」

カイはキリトに礼を言い、《胚珠》を手に《ホルンカ》へと戻った。

キリトと別れた後、カイは20分掛けて《ホルンカ》へと戻った。「戻るのに時間が掛かったな。キリトは無事か？」

左上隅にあるキリトのHPバーを確認すると、多少の減りはあるものの、HPはまだグリーンだった。

「まだ大丈夫だな。早く武器をもらうか」

最初にキリトと共に訪れた民家に行き、扉を開ける。

頭上に！がある女性NPCに近寄り、カイは声を掛ける。

「持ってきました。《胚珠》です」

ストレージから《胚珠》を取り差し出す。

すると、NPCは喜び、感謝し、《胚珠》を受け取る。

そして、それと同時にカイの前にメッセージウインドウが現れる。
『報酬の武器を選択してください』

- ・アニールブレード
- ・アニールシミター
- ・アニールサイス
- ・アニールランス

報酬として提示されてる武器の中から、カイは迷わず《アニールシミター》を選択する。

選択すると、NPCは部屋にある大きなチェストから赤鞆に収められた剣を持つてくる。

「ありがとうございます」

カイはお礼を言い、民家を後にする。

早速、手に入れた《アニールシミター》を装備する。

「おお……感じが全然違う」

ちよつとした感動を覚え、カイは数秒無言になる。

「つて、こんなことしてる場合じゃない！早くキリトの所に向かわないといー」

《アニールシミター》を鞆に戻し、速足で東の森へと向かう。

森に入り10分が経過した。

「あれ？キリトは何処だ？」

カイはキリトと別れた座標まで来たものの、キリトの姿は見えず辺りを見渡す。

「座標間違えたか？」

メモしていた座標と現在地を確認するも、間違っではない。

「何処に行ったんだ？」

パアアアン！

その時、凄まじい破裂音が森に響く。

「今のは!?」

カイは嫌な予感がしつつも、破裂音が聞こえた方へと向かう。すると、そこには30を超える数の《リトルネペント》に囲まれるキリトがいた。

キリトは自身の筋力値を使ってソードスキルの威力を上げるシテム外スキルを使い、《ホリゾンタル》で《リトルネペント》を一撃で倒していた。

だが、それでも限界があった。

とうとう背後を取られ、《リトルネペント》のツタがキリトの背中を狙う。

「キリトオオオ!!」

カイはすぐさま《アニールシミター》を抜き、《リーパー》を発動する。

《アニールシミター》は《リトルネペント》のツタを斬る。

「うおおおおおっ!!」

そして、すかさず《フェル・クレセント》を発動し、《リトルネペント》を倒す。

「すまない、キリト！遅くなった！」

「カイ！来てくれて良かった！」

「一体何があったんだ！お前に限って、実付きを攻撃するとは思えないぞー！」

「訳は後で話す！今はこの状況を切り抜ける！手貸してくれ！」

「了解だ！」

互いの死角となってる部分をカバーしつつ、ソードスキル発動後の硬直を補い合い、カイとキリトの二人は夥しい数の《リトルネペント》を倒した。

「……倒し切ったか」

「………みたいだな」

お互いに疲労が見え隠れし、思わずその場に座り込む。

「それで……何があったんだ？」

「……………ちよつとこつちに来てくれ」

カイがキリトに案内されたのは、近くの茂みだった。

そして、そこには《スモールソード》と《円形盾》^{バックラー}が落ちていた。

「コペルの物だ」

「コペル？」

「お前と別れた後、出会ったんだ」

そこからキリトは話し始めた。

コペルとは、お互いに素性を明かしてはいないが、お互いが元βテスターであるのは分かっており、《胚珠》ドロップの為に一緒に《リトルネペント》を狩ろうと言われ、その提案にキリトは乗った。

そして、30分ほど狩りまわって、ようやく花付きが現れるも、近くに実付きもいた。

そこで、コペルが実付きのタゲを取り、キリトが花付きを倒すことになった。

作戦は首尾よく生き、キリトは見事《胚珠》をゲットした。

その直後、コペルはわざと実付きの実を割り、大量の《リトルネペント》を誘き寄せた。

「な、なんでそんなことを……………！」

「俺が手に入れた《胚珠》が欲しかったんだと思う。装備してるアイテムや、ポーチに入れたアイテムはプレイヤーが死ぬとその場に残るか
らな」

キリトの言葉に、カイは驚き何も言えなかった。

HPが0になったら現実でも死ぬかもしれないこの世界で、その様な暴挙に出る者がいるとは思いたくなかったからだ。

「コペルは、《リトルネペント》に俺を殺させ、残った《胚珠》を手にくエストをクリアしようとしたんだ。……………でも、あいつは一つ
ミスを犯した」

「ミス？」

^{ハイディング}
「隠蔽スキルだ」

^{ハイディング}
隠蔽スキルは、自身の姿を消し、プレイヤーやモンスターから隠れ

ることができるスキル。

コペルはそのスキルを使って、『リトルネペント』をやり過ぎそうと
していた。

「キリト、その隠蔽ハイディングスキルの何がミスなんだ？」

「隠蔽ハイディングスキルは万能なスキルじゃない。視覚以外の感覚を持つてる
モンスターには効果が薄いんだ、『リトルネペント』とかがそうだ」

「……………そういうことか」

キリトの言ってたミスを理解し、カイは落ちてる剣と盾を見る。

「生き残ってたかったんだろうな……………」

「おそろくな」

そう言い、キリトはコペルの剣を、近くの木の根元に差し、先程の
『リトルネペント』の大軍を倒した際にドロップした『胚珠』を取り出
す。

「お前の取り分だ、コペル」

そう言い、キリトは立ち上がる。

「行こう、カイ」

「……………ああ」

二人は無言で森を抜け、民家へと戻った。

民家に入って数分後、キリトが戻ってくる。

「カイ」

「ん？」

民家から出てきたキリトは、カイの方を真っすぐ見つめる。

「絶対にクリアするぞ」

「……………ああ、勿論だ」

改めて、ゲームクリアを決意し、カイとキリトは『ホルンカ』を後
にした。

第4話 金策と再会

SAOがデスゲームとなって3週間が経った。

その日、迷宮区近くの町の宿屋でカイとキリトの2人は頭を抱えていた。

「キリト、どうする?」

「どうするって……………言われてもなあ」

2人は今、ある問題に直面している。

その問題とは……………

「コル、どうするかあ」

金だった。

「調子に乗って強化しすぎたな」

「だが、お陰でこの層を攻略するには十分な性能にはなったぞ」

《アニールシミター》と《アニールブレード》を手に入れた2人は、クエストやモンスターを倒して手に入れたコルの殆どを、武器の強化に費やした。

カイの《アニールシミター》は+5になっており、キリトの《アニールブレード》は+6。

内訳はカイは鋭さ3、正確さ2、キリトのは鋭さ3、丈夫さ3となっている。

強化が成功した時は、2人して喜んだが、後になってコルが底を尽きかけているのに気づき、2人は一気にブルーな気持ちになった。

「地道にモンスターを狩って稼ぐか?」

「それも限界があるな。第1層じゃ、モンスター1匹当たりの稼ぎは微々たる物だし、俺とカイで乱獲すればなんとかなるとは思うけど、そんなリソースを独占するような真似はなあ」

「だよなあ……………」

2人して頭を抱え悩んでいると、カイはふとあることを思いついた。

「なあ、キリト。《アニールブレード》の買取価格っていくらだった?」

「え?確か…………未強化で15000コルだったな……………お前、まさ

か……」

「そのままかだ」

カイの考えとはこうだ。

まず、《ホルンカ》に行き、再び《森の秘薬》クエストを受け、《胚珠》と《アニールブレード》を交換する。

そして、その《アニールブレード》をNPCショップに売り、金にする。

「カイ……お前……」

「あ、やっぱり流石にダメか?」

「天才だな」

キリトはカイのアイディアに乗った。

こうして、二人は金策へと出掛けた。

鎌を持った女性プレイヤー、ミトは絶望していた。

彼女は、現実でも友人である結城明日奈ことアスナとパーティーを組み、デスゲームに挑んでいた。

元βテスターとしてアスナを守り、絶対にデスゲームを生き抜く。そう誓っていた。

だが、ミトは今、アスナと離れ離れになってしまっていた。

二人で《リトルネペント》を狩りに出かけ、そこでレアモンスター《スプリー・シュルーマン》が現れ、ミトはそのモンスターからのドロップ品を狙い、その場をアスナ一人に任せて、自分は《スプリー・シュルーマン》を追った。

無事《スプリー・シユルーマン》を倒し、戻ると、アスナは殆どの《リトルネペント》を倒し、最後の一体を倒そうと細剣スキル《リニア―》を使おうとしていた。

だが、運悪くその《リトルネペント》の背後に、実付きの《リトルネペント》がいた。

ミトが慌てて制止するも、すでにソードスキルは発動してしまい、アスナの一撃はそのまま《リトルネペント》を倒し、背後にいた実付きの《リトルネペント》までも倒してしまった。

それにより、実が割れ、煙をまき散らし、大量の《リトルネペント》に囲まれて窮地に陥ってしまった。

更に畳み掛けるかのように、ミトは崖でトラップに引っかって転落、アスナと離れ離れになった拳句に転落による大ダメージを受けてしまう。

ミトはなんとかアスナと合流しようと走り出すも、そこで見たのは大量の《リトルネペント》によって埋め尽くされた山道だった。

それでも己を奮い立たせ《リトルネペント》を蹴散らしながら、アスナのところへと向かった。

だが、大量の《リトルネペント》相手に一人で戦うのは限界があった。

既にHP回復ポジションは底を尽き、HPはレッドにまで落ちていた。

そして、視界の左上に映るアスナのHPもレッドに落ちていた。

迫る自身の死、大切な友人の死の瞬間を目撃することへの恐怖。

そして、アスナとの約束を守れない自分。

それらを目の当たりにしたくなくミトは眼を閉じた。

その瞬間だった。

「はああああああ!!」

何者かの声が聞こえ、それと同時にガラスが砕け散るような音が数回響く。

「えっ」

そこでミトは眼を開けた。

そこには、男性プレイヤーの背中があつた。

目の前の《リトルネペント》から目を離さず、右手に装備した《ア
ニールシミター》を構える。

「アンタ、大丈夫か？」

そう言つて、カイは《リトルネペント》からミトを守る様に立つて
いた。

第5話 懐かしい名前

「キリト、そっちはどうだ?」

「いや、出ない。カイはどうだ?」

「同じくだ」

カイとキリトが《リトルネペント》金策なるものを初めて数時間が経つ。

朝から行っているにしては《胚珠》の集まりは中々に悪かった。

そもそも花付きの《リトルネペント》自体遭遇率が低いので、集まりが悪いのは必然だった。

「朝から始めて二個か」

「これで300000コル」

「なあ、キリト。これ、地道にモンスター狩る方が効率いいんじゃない?」

「それ言ったら、ここまでの苦労が台無しだろ」

互いに溜息を吐き、武器を仕舞う。

「今日はもう帰るか」

「そうだな」

町へ帰ろうと森から出ようとしたその時だった。

グオオオオオ!!!

何処からか巨大な叫び声が聞こえ、二人は驚く。

「キリト、今の声は!?!」

「あつちからだ!」

二人で声が出した方に向かうと、そこでは細剣を持つ女性プレイヤー、アスナが中型のモンスター相手に一人で戦っていた。

《ジャイアント・アンソロソー》だ!」

「なんだそのモンスター!?!」

「1層の森で偶に現れる中型モンスターだ。獰猛で、好戦的なんだよ!」

「なら、助けるぞ!」

カイがそう言って飛び出し、キリトも続いて飛び出す。

「ふっ！」

キリトの《ソニックリープ》が《ジャイアント・アンスロソー》の右目を切り裂く。

《ジャイアント・アンスロソー》は悲鳴を上げ、暴れる。

そして、すかさずカイが《フェル・クレセント》を叩きこむ。

「その人、大丈夫か？」

カイは《ジャイアント・アンスロソー》から距離を取りつつ、アスナの近くに立つ。

「HPは大丈夫か？危ないならポジションで回復を」

キリトも近くに立ち、そう言う。

「HP……そうだ！ミトが！」

すると、アスナは思い出したように声を上げる。

「ど、どうした？」

「わ、私、友達と一緒に！でも、私の所為でその子が《リトルネペント》の集団に襲われていて！しかも崖から落ちて！HPも残り僅かで！」

「落ち着け！」

取り乱すアスナに、カイは大声で落ち着かせる。

「その友達は、何処から落ちたんだ？」

「そ、その崖から……」

アスナが指をさす方をカイは見て、頷く。

「キリト！俺はこの人の友達って人を助けてくる！そいつを任せても大丈夫か？」

「ああ、任せろ」

キリトはそう言い、《アニールブレイド》を一回転させ、《ジャイアント・アンスロソー》に向かっていく。

カイはそのまま崖から飛び降り下へと向かう。

途中、岩壁に飾られている棺桶を足場にして降りたので、HPが減ることはなく無事、下まで降りる。

「上への道は……あっちか！」

走ってそこに向かうと、鎌を持った紫色の髪を結んだプレイヤー、ミトが《リトルネペント》の集団に苦戦しているのが見えた。

「はああああああ!!」

カイは《アニールシミター》構え、《リーパー》で一直線上に攻撃する。

レベルの差も結構あり、4体の《リトルネペント》はあつさりと碎け散った。

「え?」

「アンタ、大丈夫か?」

カイは目の前の《リトルネペント》から視線を外さず、尋ねる。

「あ、貴方……どうして……」

「取り敢えず回復した方がいいだろ。ポジションはあるか?」

カイの問いにミトは首を横に振る。

「なら、これ使ってくれ」

そう言い、カイはポーチからHP回復ポジションを取り出し、ミトに投げ渡す。

「それじゃ、俺はこっちの相手しとくか」

ミトがHPを回復するのを確認し、カイは《リトルネペント》に向かつていく。

数が多いと言っても、その数は十数体しかおらず、カイのレベルは既に9はあり、《リトルネペント》は敵ですらなかった。

実付きの実を割らないように、的確に弱点だけを攻撃しカイはノーダメージで《リトルネペント》を撃破した。

全ての《リトルネペント》を倒し終わると、カイはミトに話しかける。

「一応この辺の《リトルネペント》は倒したと思うけど、大丈夫だったか?」

「ええ、助かったわ。でも、ごめん!急いでるの!」

ミトはそう言い鎌を手に走り出す。

「あ、ちよつと待って!急いでるのはアンタの友達のことだろ!」

そう言うと、ミトは立ち止まって振り返る。

「俺はその子に頼まれてアンタを助けに来たんだ。多分、その子、俺の相棒と一緒にさっきの所で待ってるはずだから案内する。ついて来

てくれ」

カイはそう言つて先頭に立ち、ミトを案内する。

速足で先程の場所に向かうと、落ち着かない様子のアスナとポーシオンを飲んで一息入れてるキリトがいた。

「アスナ！」

ミトはアスナの姿を見ると、涙を流して駆け出す。

「ミト！」

アスナも駆け出し、二人は抱き合つた。

「良かった！本当に良かった！ミトが無事で！」

「アスナ！ごめん！私、貴女を守るって言ったのに守れなくて！本当にごめん！」

泣きながら謝り合う二人に、カイとキリトは気まずさを感じながらその様子を見守つた。

「とりあえず、今日は町まで帰つた方がいい。送るよ」

「精神的にも疲れただろうしな」

二人がようやく落ち着くと、カイとキリトは、二人を連れて町まで向かつた。

「ここまで来ればあとはもう大丈夫だろう」

「それじゃあ、俺たちはここで」

カイとキリトは町の入り口でミトとアスナの二人と別れようとした。

「あ、待って！」

そんな二人をミトが呼び止める。

「アスナを助けてくれてありがとう。貴方達が来なかったら、私たち……」

「私からも言わせて。ミトを助けてくれて本当にありがとう」

「いいよ、気にすんなって」

「別に大したことしたつもりはないよ」

「だとしても、私たちの命の恩人よ。こんなお礼しかできないけど」

そう言つてミトはコルを渡そうとするが、カイは手で制する。

「本当にいいって。この先、何が起きるかわからないんだ。コルは

取っておけて」

「で、でも……………」

「俺たちは大丈夫だから」

そう言い、カイはキリトと宿屋に戻ろうとする。

「じゃあ、せめて名前を教えて!」

「え?」

「今じゃなくても、いつかお礼するから!」

そう言われ、カイとキリトも名前ぐらいならと思い、自身の名前を教えた。

「俺はキリトだ」

「俺はカイ。じゃあな」

そう告げて、二人は去って言った。

「俺はカイ」

「え?」

カイが自分の名前を名乗った瞬間、ミトは驚いた。

その名前はよく知ってる。

昔、1年間だけ毎日一緒に遊んだ少年が使っていたプレイヤーネーム。

それを使っていることにミトは驚いた。

「じゃあな」

「あ!ちよつ!」

ミトが呼び止める間もなく、カイはキリトと共に消えるように去っていた。

「ミト、どうかしたの?」

ミトの様子がおかしいことにアスナは気づき、声を掛ける。
「……………ううん、なんでもない。多分、気のせいだから」
そう言っつてミトは伸ばしかけた手を下ろす。

(カイなんて名前、珍しくもないか……………)

そう言い聞かせ、ミトはアスナと共に宿屋へと戻った。

「ミト、か」

その日の夜、宿屋のベッドに寝転がりカイはぼつりと呟く。

「どうした？」

そんなカイに、隣のベッドでメニューウインドウを操作しながらキリトが尋ねる。

「いや、あの鎌使いのプレイヤー、ミトって名前だったなって」

「知り合いだったのか？」

「いや、そうじゃないよ。ただ同じ名前だなって思っつてさ」

「同じ名前？」

「ああ。昔、小学生ぐらいの時に一年ぐらい毎日一緒にゲームしてた友達が使っつてたプレイヤーネームがミトだったんだよ。だから、ちよつと懐かしくてさ」

そう言いカイは、布団を被り眠りにつく。

(ま、ミトなんてよくある名前だよな。……………今も元気にしてるのかな、アイツ……………もしまた会えたなら、謝らないとな……………)

そんなことを思いながら、カイは眠りについた。

第6話 攻略会議

デスゲーム開始から一ヶ月。

その間に、約2000人のプレイヤーが命を落とした。

そんな中、とあるプレイヤーがゲームクリアを目指すプレイヤーたちを集めていると情報があった。

集めている理由は、第1層フロアボス攻略会議開催の為だった。

「一ヶ月で未だに第1層突破が出来てない……この状況ってやっぱり最悪か？」

「そうだな。最悪とまでは言わないが、あまりいい状況じゃない」

迷宮区から程近くにある町、《トールバーナ》の中を歩きながらカイとキリトは話をする。

「このままだと、全体の士気にも影響が出る。何か突破口がないと辛いな」

「今日行う会議で、何か進展があるといいんだけどな」

そう言い、二人は《トールバーナ》の劇場へと向かった。

そこにはすでに多くのプレイヤーが集まり、会議の開始を待っていた。

「結構、いるもんだな」

「いや、これでも少ない方だ」

カイの感想に、キリトが口を挟む。

「1パーティーにつき組める人数は6人、フロアボス攻略なら6人パーティーを8つ用意したレイドパーティーを組まないといけない。そして、フロアボスを死人0でクリアするなら、そのレイドパーティーが2つは必要だ」

キリトはそう言い、辺りを見渡す。

「ざっと40人ぐらいだな。これじゃ、レイドパーティー1つの条件も満たせてない」

「その通りね」

聞き覚えのある声に二人が振り向く。

「久しぶりね、お二人さん」

「久しぶり、キリト君、カイ君」

そこに居たのはミトとアスナの二人だった。

「なっ!?!どうしてここに!?!」

「まさか、二人もボス攻略会議に参加するつもりなのか?」

ミトとアスナの登場に、二人は驚く。

「ええ、勿論よ。その為にここにいるんだから」

「私はミトが放っておけないのと心配で……………」

そう言っつて二人は腰掛ける。

それに倣い、カイとキリトも腰を掛ける。

「それにしても、レイドパーティー1つ分を満たしてないとは言え、よくこれだけの人数が来たよな」

「確かに……………初めてのボスマンスター戦で、全滅するかもしれないのに」

「それは……………どうかな」

「全員が全員、自己犠牲の精神で来てるわけじゃないわ」

カイとアスナの疑問に、キリトとミトが答える。

「そういう連中がいらないとは言わないけど、大多数は遅れるのが怖くて来てると思う」

「遅れるって、何にだ?」

「最前線によ」

「全滅するのは怖いけど、自分の知らないところでボスが倒される。それも怖いんだよ」

キリトとミトの言葉は、一応ゲーマーであるカイには理解できたが、ネットゲームビギナーであるアスナには到底理解できないものと思われた。

「それって、偏差値70以上キープしたいとか、学年10位以下には落ちたくないとかと同じモチベーション?」

だが、アスナは今の言葉を自分なりに解釈し、尋ねる。

「なるほど……………」

「えつと……………まあ、似たようなもんかな?」

「なんて言うか、偏差値とか学年順位に例えるあたり、アスナらしい

わ

キリトは苦笑いし、ミトは呆れた様に笑う。

「はーいーそれじゃあ、そろそろ始めさせてもらいますー！」

人数があらかた集まると、青い髪にブロンズ系の防具、大振りの片手直剣にカイトシールドを装備した青年が登場した。

「皆！今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！俺の名はディアベル！職業は、気持ち的に騎士ナイトやってますー！」

SAOでは生産系スキルを所有している人のことを《料理人》《鍛冶屋》などと呼ばれるが、《勇者》や《騎士》などというジョブシステムは無い。

ディアベルなりに、会場の空気を和ませようとした発言で、狙い通り、周りから笑い声やヤジを飛ばす声が聞こえるがピリピリした空気が少しばかり和んだ。

会場の雰囲気がよくなるのを感じると、ディアベルは手を上げ、制した。

「今日、俺たちのパーティーが迷宮区の最上階で、ボスの部屋を発見した」

その言葉に、会場のプレイヤーたちが息を？んだ。

「俺たちはボスを倒し、第2層に進む。そして、《はじまりの町》で待ってる皆にこのゲームがクリアできるつてことを伝えるべきなんだ。それが、ここにいる俺たちの義務だ。そうは思わないか？」

ディアベルの言葉に皆賛同するかのように拍手が起こった。

そんな時だった。

「ちよお待ってんか、ナイトはん」

サボテンの様なヘアースタイルをしたプレイヤーが立ち上がり、ディアベルの元まで行く。

「仲間ごっこする前に、こいつだけは言わしてもらわんと気が済まんのや」

「こいつと言うのは何かな？まあ、なんにせよ積極的な意見は大歓迎だ。でも、発言するなら、まずは名乗ってもらおうか？」

「ふん………ワイはキバオウや。会議を始める前に、こん中に何人が

詫び入れんとアカン奴がおるはずや」

その言葉に、周りがざわつく。

「キバオウさん、詫びと言うのは誰にだい？」

「決まってるやろ！死んでった2000人にや！それもこれも、全部β上がり共の所為や！」

キバオウの発言に、広場に居る何人かのプレイヤーが反応した。

その何人かには、キリトとミトも含まれていた。

「β上がり共は、自分らだけうまい狩り場やボロいクエストでかつぼり儲けとる。そんでもって、9000人のビギナーは知らんぷりや。あいつらがはなから情報やアイテム、金を分けとつたら2000人は死なんかつたし、今頃、2層、3層、突破できとつたはずや！せやから、ため込んだ金とアイテム、全部出して謝罪と賠償せい！」

キバオウの発言に、広場に居たプレイヤーから何人か賛同する声上がる。

そんな中、カイは思わず立ち上がった。

「ちよつと待ってくれ！」

隣にいたキリトはカイを止めようと手を伸ばすが、キリトがカイを掴むよりもカイはさささとキバオウの近くへと向かう。

「なんや、お前？」

「俺はカイ。あんたにどうしても一言言いたくてな。俺は元βテストターへの賠償請求に反対だ」

「なんやと？」

「持つてるアイテムやコルを全部出して賠償しろ……つまり、間接的に元βテストターは弱くなれって言ってるんだぞ。そんなことで、元βテストターが死んだりしたら、アンタは責任が取れるのか？」

カイがそう言うと、キバオウは言葉を詰まらせる。

「自分は責任が取れないのに、元βテストターには責任を取らせる。はつきり言って、どうかしてる。ましてや、元βテストターがビギナーを見殺しにしたってのも間違いだ」

「その兄ちゃんの言う通りだ」

すると、近くに座っていた男性プレイヤーが立ち上がる。

身長が190cmほどある、スキンヘッドが特徴的な黒人だった。

「俺の名はエギルだ。キバオウさん、金やアイテムはともかく、情報ならあった」

そう言い、エギルは手の平サイズのハンドブックを出す。

「コイツだ。このガイドブックは道具屋で無料配布されていたやつだ。新しい村や町に行くとき必ず置いてあった。情報が早すぎるとは思わないか?」

「だ、だからなんや!!」

「俺は、コイツに載ってるモンスターやマップのデータを提供したのは、元βテスター以外にあり得ないと思ってる」

「だ、だけど、死んだ2000人の中には他のMMOじゃトップ張つとるベテランも居ったんやぞ!それは、どう説明するんや!」

「ベテランだったからこそ死んだんだろう。SAOを他のMMOと同じように計り、引き際を誤った。だが、今はそのことを追及する暇は無いと俺は思うんだが?」

エギルの強い目力に、キバオウは気圧される。

そんな中、ディアベルは手を叩いて、仕切りなおす。

「キバオウさん、君の気持ちはよくわかるよ。でも、今は前を見るのが先だ。それに、元βテスターがボス攻略に力を貸してくれるなら、これほど頼もしいことはないと思う。君もそう思ったからこそ、元βテスターの賠償に反対だったんだろ?」

ディアベルはそう言って、カイを見る。

「ああ、元βテスターは俺たちとは比べ物にならないぐらいの経験がある。その経験は、今回だけじゃなくこの先でも役に立つはずだ。だからこそ、力を削ぐより、協力する方がいいと思う。それに……………」

カイはそこで一拍置き、話す。

「俺は強い奴大歓迎だ!強い奴と一緒に居れば、自分も強くなっていけるしな!」

「なるほど、一理ある。力有る者が力無き者を助け、強くする。育成も、今後の攻略においては課題になりそうだ」

カイの言葉に、ディアベルは納得し頷く。

「ともかく、今は第1層のボス攻略会議が先だ。カイさん、君の意見は今後も会議で話し合うとするよ。それじゃあ、皆、席に戻ってくれ」
「…………ええわ。今だけはナイトはんに従うといたる。せやけど、ボス戦が終わったらキツチリ白黒つけさせてもらうわ」

キバオウはそう言い、引き下がる。

カイとエギルももとの席に戻り、会議の進行を見守ることにした。

「カイ、この馬鹿野郎！あんな庇う様なこととして、変な因縁つけられたらどうするんだよ！」

「そうよ！カイ君が元βテスターって疑われたりしても仕方なかったんだよ！」

戻って来るなり、キリトとアスナはカイの身を案じて説教をする。

「悪い…………でも、我慢が出来なくて…………」

バツが悪そうにカイは頭を掻きながら謝る。

「もおう、ミトからも何か言っただけよ！」

アスナは隣のミトにそう言う。

「え…………あ、ああ、そうね…………あまり無茶するのはよくないわよ、カイ」

どこか上の空気に言うミト。

そんなミトにアスナは不思議そうにする。

「それじゃあ、改めて攻略会議を始める！」

ディアベルが会議を再開し始めたので、アスナは一先ずミトのことは置いておいて、会議に集中する。

「まず、6人のパーティーを組んでくれ」

ディアベルがそう言い、周りのプレイヤーたちはパーティーを作り始める。

殆どが知り合いで固まっていたらしくパーティーは次第に作られていき、そんな中、カイ、キリト、ミト、アスナの四人は余っていた。「とりあえず、余り者同士、組まないか？」

キリトが恐る恐る三人に聞く。

「何言ってるんだよ。てか、そんなこと言われなくても当たり前だった

ての」

「私も構わないわ。ミトもいいよね?」

「あ、え、ええ」

アスナとミトからも了承があり、無事4人はパーティーを組む。

出来たパーティーは6人パーティーが7つと4人パーティーが1つ。

重装甲の壁部隊が2つ、高機動高火力の攻撃部隊が3つ。

そして、長モノ装備の支援部隊2つ。

その後の会議では、第1層ボスの情報についての説明があった。

ボスの名は《イルフアング・ザ・コボルドロード》で武器は骨斧と革盾で、HPバーが4つあり最後の1つになると腰の曲刀カテゴリーの武器《湾刀》タルワールに変え、使ってくるスキルも変わる。

取り巻きには、《ルインコボルド・センチネル》が3匹現れ、HPバーが1つ減るたびにポップされる。

作戦は、壁部隊2つがボスを交互に受け持ち、攻撃部隊の2つがボスに、1つが取り巻きに、支援部隊はデイレイススキルをメインに使いボスと取り巻きの攻撃を阻害する。

そして、カイ達4人パーティーは取り巻きを相手にする攻撃部隊のサポートをすることになった。

「これで攻略会議を終了する!明日は朝8時にここに集合。全員揃ってボス部屋へと移動する。それじゃあ、解散!」

デИАベルが最後に、会議はお開きになった。

「とりあえず、改めて自己紹介しとこうぜ」

会議がお開きになった後、カイが三人にそう言う。

「この前言ったけど、俺はカイ。武器は曲刀だ」

「俺はキリト。武器は片手剣を使う」

「改めてなるけど、この間は助けてくれてありがとう。私はアスナ。武器は細剣レイピアを使うわ」

「ミトよ。武器は見ての通り鎌。私からも、この間は本当にありがとう」

改めて、軽く自己紹介を終えるとキリトの提案で連携をとる練習をすることになり、四人は近くのフィールドへと向かうことになった。

ミトは、先頭を歩くカイの背中を見ていた。

『俺は強い奴大歓迎だ!』

あの時、カイの言ったセリフがずっと頭にあった。

(カイのあのセリフ……昔会ったカイが言ったのと同じだった……まさか本人……いや、ただ同じセリフを言ったのとプレイヤースキームが同じってだけで決めつけるのはよくないか……でも、なんでだろう……彼を見ると、すごく懐かしくて……胸が苦しい……)

「ねえ、ミト聞いてる?」

急に、ミトの視界にアスナの顔が現れ、ミトはぎよつとする。

「あ、ごめん……ちよつと、考え事してた……」

「なんか、今日のミト変だよ?何か悩んでる?」

「別にそんなこと……そうだね。あとで話すから、相談に乗ってよ、アスナ」

「うん、いいよ」

アスナにそう言い、ミトは前を見る。

(もし……もし、カイがあのカイだったとしたら、知りたい……あの日以来なかった理由と居なくなった理由……)

第7話 風呂場での作戦会議

「ミト、スイッチー！」

「はああああー！」

《トールバーナ》の街からさほど離れていないフィールドで、カイはモンスターの攻撃をいなしカウンター攻撃をする。

それによって態勢が崩れたモンスターにミトが鎌で斬りかかる。

それによりモンスターは絶叫を上げ消滅する。

「ナイス、ミト」

「カイもね」

互いにハイタッチをして、労う。

「アスナ、スイッチー！」

「やああああああー！」

キリトとアスナもスイッチの練習を行い、モンスターを倒す。

「ナイス《リニア》だ。でも、今のはオーバーキルだ」

「オーバーキル？」

「敵のHPの残量に対して与ダメージが多すぎるって事さ」

「多いと、何か問題なの？」

「デメリットがあるわけじゃないけど、ソードスキルは集中力が必要だ。使いすぎると、精神的な消耗が激しいし、何よりもし攻撃をかわされたりしたら、スキル発動後の硬直で身動きが取れず、その隙に攻撃をくらう。だから、敵の残りHPが少しなら、通常攻撃で十分倒せる」

キリトの説明に、アスナは「なるほど」っと呟き、ミトは「そう言えば、その辺の説明とかしてなかった」と言い、カイは「オーバーキルはダメね、了解了解」と言った。

「さて、連携の方は大体いいだろ。あとは本番になるが、この調子なら大丈夫だ」

キリトが剣を戻しそう言い、全員が武器を仕舞う。

「ねえ、仮にも明日は互いの命を預け合う仲間なんだし、一緒に食事しない？」

すると、ミトがカイとキリトを食事に誘った。

「この前助けてもらったお札に奢るわ」

「いや、でもそれは……………」

「お礼はいつかするって言ったでしょ。こうしてパーティー組めたのも何かの縁だし、行きましよう」

アスナからもそう言われ、カイとキリトは顔を見合う。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「ご馳走になるよ」

4人で食事することになり、街へ戻る。

「それにしても、久々にお風呂入りたいなく」

街は戻る道中、アスナが突然そんなことを呟いた。

「アスナ…………それは言わない約束でしょ?」

するとミトはうんざりしたように言う。

「そうだけど、もう一ヶ月なんだよ? 仮想のお湯でもいいから、頭から爪先まで温まりたい」

「それ言われると、こつちまで入りたくなるじゃん」

そう言つて、ミトとアスナの2人は溜息を吐く。

「風呂入りたいのか?」

そんな二人に、カイがそう尋ねる。

「仮想世界だからお風呂に入らなくても大丈夫つてのは分かるけど、気分的にね」

「死ぬつもりはないけど、もし死ぬとしてもひとつ風呂浴びたいって気持ちはあるわ」

風呂が恋しいらしく、二人はまた溜息を吐く。

「風呂ならあるぞ」

「……………え?」

カイの言葉に、二人は聞き返す。

「俺とキリトで、借りてる部屋に風呂あるんだよ」

「ちよ、ちよつと待つてー! どういうこと!」

「この町の三軒の宿屋に、そんなものなかったけど!」

ミトとアスナは興奮気味に訪ねてくる。

「えつとだな、INNってのは最安値で泊まれるって意味なんだよ、低層フロアだと。だから、探せばコルを払って借りれる部屋は割とあるんだ」

キリトは押され気味に言う。

「……………して」

「え？」

「お風呂貸して!!」

ミトとアスナの二人は、大声でカイとキリトにそう言った。

「凄い……………本当にお風呂だ……………」

「部屋も広いし、これで私たちの借りてた宿屋と30コル差って安過ぎる……………」

カイとキリトが借りてる、二階建ての農家の母屋で、一回にはNP C農家の一家がおり、二人は二階を使わせてもらっている。

一ヶ月ぶりに見る浴槽に、ミトもアスナも目が釘付けだった。

「えつと、それじゃあごゆっくり」

「逆上せない様に気を付けてな」

カイとキリトはその場を去り、浴室のドアを閉める。

「あ、ミト。この扉ってカギは……………」

「あー、無理じゃないかな？この部屋借りてるのはあの二人だし」
試しにミトがドアノブをタップするも鍵がかかった様な気配はなかった。

「まあ、貸してもらってる身分なんだし、ここはあの二人を信じましょう」

「そうだね。それにしても……一カ月ぶりのお風呂だあ！」

久々のお風呂にアスナは歓喜し、いそいそと装備を外していく。

「はしやぎ過ぎだったの」

アスナを落ち着かせるように言うミトだが、ミトも内心は一カ月ぶりの入浴に内心ワクワクしていた。

装備をすべて外し、完全な無防備状態になった二人は、すぐにでも湯船に浸かりたい衝動を抑え、体をお湯で流す。

お湯が肌を流れるのを感じ、二人はそのまま湯船へと浸かる。

「ああ……この感じ、懐かしくて涙出そう……」

「今なら泣いてもいいよ……」

「泣かないよ……」

一カ月ぶりの入浴に、二人は完全にリラックスし、お湯を堪能する。

「ねえ、ミト」

「ん？何？」

「相談したいことって、何？」

連携の練習前に言っていたことを思い出し、ミトは少し間を置き話始める。

「昔さ、小学生の時、一年ぐらい毎日一緒に遊んでた友達がいたの」

「そうだったの？」

「ええ。その子も、すごくゲームが上手くて、すぐに仲良くなれた。休みの日も、お互いに予定がなければ遊んでた。本当に……大切な友達だったんだ……」

「その子は今、どうしてるの？」

「分かんない。ある日急に公園に来なくなってそれっきり。その子の名前も家の場所も聞いてないから、逢いに行くこともできないでさ……」

「名前も知らなかったの?」

「うん。殆どプレイヤーネームで呼び合ってたからね。……………その子のプレイヤーネーム……《カイ》って言うの」

「カイって、まさかその子って!」

「分からない……居なくなつたカイとSAO^あで出会つたカイが同一人物なのか。でも、なんとなくだけでももしかしたら同じカイなんじゃないかって思ってる」

「だったら聞いた方がいいんじゃない?間違つてたら間違つてたで済むことだし。それに、もし同じカイ君なら良かったじゃない」

アスナの言うことはもつともだった。

別人だったとしても、間違いだつたで済む話。

そう、別人ならそれだけで済む話だつた。

「もし……もしカイだつたら?」

「え?」

「もし、彼が本当にカイで、あの日、来なかつた理由が……居なくなつた理由が……私の所為だつたら……」

もし、カイがカイ本人だつたらミトはあの日カイが来なかつた理由を聞きたいと思つている。

だが、もしその理由が自分の所為だつたらと思うと怖かつた。

「昔の友達に言われたの。私はゲームが上手いから、下手な人の気持ち分からないんだつて。だから、一緒にゲームしたくない、楽しくないつて。もし、カイもそう思つて私の前から居なくなつたんだとしたら……怖くて、聞けないよ……」

普段のミトからは想像できない程に弱気になっており、アスナは驚いた。

「なんか……驚いたな」

「え?何が?」

「ミトにも女の子らしい悩みがあるんだつて」

「……それ、どういう意味?」

ジト目で見つめてくるミトに、アスナは嘖き出す。

「ごめんごめん、悪気があるわけじゃないから」

そう前置きをし、アスナは優しい目でミトを見る。

「大丈夫だと思うよ。もしカイ君が、ミトの言うカイ君だったとしてもミトと居るのが詰まらないから会わなくなった訳じゃないと思うから」

「……………なんでそう思うの？」

「だって、今日の連携の練習で、カイ君とミト、凄く息が合ってたよ？」

「あれは……………カイが、私が戦い易い様に立ち回ってくれたからで」

「会って間もないのにそこまで考えてくれるのは優しい人だよ、きつと」

有無も言わさないアスナの言葉に、ミトは思わず押し黙った。

「それに、こう見えて人を見る目はあるって自信があるんだ。だからさ、信じてよ、私の事と、カイ君の事を」

「……………そうね、分かった。信じてあげる」

「それじゃあ、お風呂から上がったたら早速聞きなさい」

「え、いや、それはちよつと……………心の準備が……………」

「大丈夫、私にいい考えがあるから」

アスナは楽しそうな笑みを浮かべ、ミトに作戦を話した。

第8話 確信

コン、コココン。

ミトとアスナが風呂に入って数分後、ドアをノックする音が部屋に響く。

特徴的な叩き方にカイはすぐさまドアを開ける。

「よお、アルゴ」

「よッ！カー坊、邪魔するヨ」

ノックの人物は、アルゴだった。

アルゴは元βテスターで、売れる情報は何でも売るといふスタンスの情報屋をやっている。

情報屋としては優秀で、良識も持ち合わせている。

デスゲーム開始直後には自らベータテスターであることを明かし、自分の持つ情報をガイドブックに纏めてプレイヤーたちに無料配布しました。

「やッ！キー坊」

「アルゴ、お前から来るなんて珍しいな」

「まあネ。どうしても今日中に返事をもらって来いって言うからサ」

そう言い、アルゴは空いてる椅子に座る。

「早速、本題に行くけど、例のキー坊の剣を買いたいって話、今日中なら3万9800コルで買い取るってサ」

「なっ!?!」

第1層にしては、あまりにも巨大な金額にキリトは驚く。

「ちよ、ちよっと待ってくれ、アルゴ」

その話に、カイは思わず待ったを掛けた。

「いくらなんでも、それはおかしくないか？だって、未強化の《アニーブルレード》で大体1万5000コルだろ？それに、2万コル出せばキリトのと同等の性能の物にはなるだろ？」

「ああ、俺もカイと同じ意見だ。それなのに、4万コル近くも払うのは明らかにおかしすぎるだろ？」

「オレっちも、依頼人にそう説明したサ。それも三回もナ。でも、構わ

ないの一点張りだ」

あまりにも不可解な依頼人に、三人は首を傾げる。

「アルゴ、1500コル出す。だから、依頼人の名前を教えてください」

「あいヨ。ちよつと待ってナ」

そう言い、アルゴは依頼人に確認のメールをする。

すると一分も掛からずに返信が来た。

その内容に、アルゴは片眉を動かし、大きく肩をすくめる。

「教えても構わない、そうダ」

依頼人は自身の素性を隠す気がないらしく、キリトもカイも驚いた。

「ほらよ」

キリトは「訳が分からん」と言いたげに、アルゴにコルを渡す。

「毎度。で、名前だけ……実はキー坊も知ってる相手サ」

「俺が知ってる?」

「ああ、なんせ、昼間、大騒ぎした奴だからナ」

「昼間って……まさかキバオウか?」

キリトがそう尋ねると、アルゴは無言で頷いた。

「取り敢えず、今回も取引は不成立って事でいいんだナ?」

「ああ」

「それじゃ。オレっちはこれで失礼するヨ」

「あ、そうだ。アルゴ、一つ頼みがあるんだけど」

席を立ち、帰ろうとするアルゴをカイが呼び止めた。

「ン?なんだい、カー坊?」

「仕事を頼めるか?」

カイはアイテムウインドウを操作し、ある物を出す。

「まあ、仕事って言うよりおつかいが正しいかな?」

そう言い、その取り出したある物と、料金のコルを渡す。

ミトとアスナが風呂に入って20分程が経過した頃、風呂場の扉が開いた。

出てきたのは湯上りのミトだった。

「おお、ミト。風呂はもういいのか？」

そんなミトを出迎えたのは、ミルクを飲んだるカイとガイドブックを読んだるキリトだった。

「うん、貸してくれてありがとう」

「アスナは？」

「もう少し入ってるって」

「そっか」

そう言い、カイは残りのミルクを飲み干す。

「飲むか？ここのミルク、飲み放題だぞ」

「風呂付で、部屋も広くて、ミルク飲み放題とかいい所ね」

「まあな。ここ選んだのも、ミルクが飲み放題つてのが気に入ったからだ」

そう言い、カイは新しいコップにミルクを注ぐ。

「ほい」

「ん、ありがとう」

カイからミルクを受け取り、一口飲む。

「あ、美味しい」

「だろ？」

「瓶詰めて売ったら儲かりそうね」

「俺も思ったが、残念なことに部屋から持ち出すと5分で耐久値が全損するんだ。おまけに、消えるんじゃないかってマズイ液体になるんだよ」

「なるほど。ただより怖いものはないってことね」

「そう言い一気に飲み干す。

「……………よし」

そこでミトは何かを決意し、カイに話しかける。

「ねえ、ちよつと話したいことがあるんだけど、付き合ってもらっていい？」

「今だ、スイッチ！」

「ふっ！」

ミトはカイを連れて、フィールドに出ていた。

「しつかし、なんで外なんだ？話なら、家の中でもいいだろ？」

「あまり他の人には聞かれたくなかったし、それに明日はボス戦だしできる限りのことはしておきたいって思ってね」

アスナから言われたのは、カイを外に連れ出し、後は星空を見ながら話でもすれば、自然といい雰囲気になって、話したいことも話せると言うものだった。

だが、ミトはいい雰囲気の作り方が分からず、勢い余ってフィールドにまで出てしまい、そのまま戦闘になっていた。

「まあ、練習なんてやってもやり足りないぐらいだからな」

そう言い、カイは自身の武器《アニールシミター》を見つめる。

「そう言えば、カイのその武器、私見たことないけどどこで手に入れたの？」

「ん？《ホルンカ》って村の、《森の秘薬》ってクエストで手に入れたんだよ」

「あれ？それって確か報酬、《アニールブレイド》って言う片手剣じゃなかった？」

「キリトが言うには、恐らくβ版から正式版に移るにあたって、報酬が追加されたんじゃないかってさ……あ、そう言えば、ミトも元βテスターなのか？」

まるで、ついさつき思い出したと言わんばかりにそう尋ねる。

その言葉に、ミトは驚く。

「ど、どうして?」

「そりゃ、初めてにしては鎌の扱いが手慣れてたし、それにキバオウが攻略会議で騒いでた時さ、ちよつと怯えてただろ?あのタイミングで怯えるなんて、元βテスター以外にはいなくなつて」

「凄い観察眼ね。その通り、元βテスターよ。まあ、その時とは容姿が違うからキリトには気付かれなかつたけど」

ミトはそう言い、少し不安顔をする。

「もしかして、キバオウの言葉を気にしてるのか?」

心の内を見透かされたように言われ、ミトはまたしても驚く。

「違う……とは言い切れないかな。実際、私は他のプレイヤーを見捨てて、アスナの手だけ取つた」

ミトは自身の手の平を見つめ、言う。

「自分はβテスターだからSAOをよく知ってる。だから、アスナを守る。そう誓つたのに、あの時、私はアスナを危険な目に合わせた」
リトルネペントの集団に襲われたことを思い出し、ミトは拳を強く握る。

「あの時、私、アスナが死ぬのを見たくなくて逃げようとしてた………カイとキリトが来なかつたら、私はきつと今頃アスナを見捨てて………!」

いつの間にか、あの日のことを思い出し、口調が強くなる。

「ミト」

そんなミトに、カイは優しく声を掛け、ミトが強く握りしめてる手を握つた。

「少し落ち着けて。ほら、深呼吸」

カイに言われ、ミトは驚きながらも深呼吸をした。

「落ち着いたか?」

「うん……ありがとう」

「よし。と言うか、そんなの『もしも』の話だろ？結果を言えば、ミトはアスナを見捨てなかったし、見殺しにもしてない。それどころか、ボス戦に参加できるまでに助けてきたじゃないか。そんな、俺やキリトが来なかつたらなんて『もしも』を話しても、結果は変わらない……だろ？」

言いくるめられるように言われ、ミトはポカンとする。

「それにな、キバオウの奴の言葉なんて忘れろ。あんなの、ただの言い掛かり、嫉妬だよ」

「嫉妬？」

「そう。自分よりゲームが上手い奴らに対するな。今日の会議で言ってた元βテスターに謝罪と賠償の請求つてのも、どうせ自分が強くなって、元βテスターにマウント取られたくないから、言い出しただけに決まってる。ああいう奴ほど、将来破滅するんだよ」

何故か確信を持って言うカイの様子がおかしく、ミトは思わず笑った。

「おいおい、笑うことはないんじゃないか？」

「ごめん……なんか、カイ見ると悩んでた自分が馬鹿みたいね」

「それって誉め言葉か？」

「さあ？どっちかしらね？」

「……誉め言葉として受け取っておくよ」

少し不満そうな顔をして、カイは《アニールシミター》を鞘に戻す。

「あ、そう言えば、話したいことってなんだ？」

「あ……それは……」

正直、雰囲気としては悪くない状態だった。

今の状態なら、昔のことを聞けるだろうと、ミトは思った。

「ううん、やっぱりいいわ」

だが、ミトは聞かなかった。

「は？なんだそれ？」

「明日……明日のフロアボス攻略戦が終わってから言う。だから、明日はお互い、必ず生き残りましょ」

「……分かった。必ず無事に終わらせて、話を聞かせてもらおうよ」
「じゃあ、戻りましょ。多分、もうアスナも風呂から上がってるだろうし」

そう言い、ミトは先程より軽い足取りで来た道に戻る。

その心の内に、何やら確信めいた何かがあるのはミトしか知らない。

第9話 ボス攻略戦

翌朝、トールバーナの噴水広場に集まったプレイヤーは46人だった。

レイドパーティーの上限を満たしていない。

それなのに、広場は活気に溢れている。

武器やアイテムのチェックをして時間を潰していると、ディアベルが現れ、声を上げた。

「みんな!!いきなりだけどありがとう!!誰一人欠けることなく46人が集まった。本当にありがとう!!」

広場にいるプレイヤー全員に、ディアベルはそう言った。

「俺から言うことはもう一つだけだ。皆……勝とうぜ!!」

午後12時半、迷宮区最上階到着。

ここまで来るのに死者が一人も出ずに済んだ。

何度か危ない場面に遭遇したりしたが、ディアベルの的確な指揮で何とか切り抜けた。

そして今、プレイヤーたちは獣頭人身の型が彫られた扉の前にいる。

そこで、最終チェックが行われた。

「うーん、やっぱり間に合わなかったか」

そんな中、カイは辺りを見渡し肩を竦める。

「どうしたの?」

そんなカイの様子を不思議に思い、ミトが声を掛ける。

「いや、大したことじゃないけどアルゴにおつかい頼んでたんだよ」

「おつかい？」

「ああ。できれば、ボス戦までにつて頼んだんだけど、流石に無理だったか」

そう言い、カイは頭を掻く。

「ま、それよりも昨日の言葉、忘れるなよ」

「ええ、分かっている。ここを生き残れたら、ちゃんと話す」

「ならよし」

カイはその言葉に笑い、ミトも笑い返す。

そこで、ディアベルが自分の剣を抜き、空いてる左手を扉に添えた。

「さあ、行こう……！」

短く叫び扉を押し開いた。

最初にヒーターシールドを持った戦槌使いの人が率いるA隊が突入し、次にエギル率いるB隊が左斜め後方から突入。

右からディアベルが率いるC隊と両手剣使いがリーダーのD隊。

その後ろにキバオウの遊撃用E隊と長柄武器装備のF隊、G隊が3パーティーで並走する。

最後にカイたち4人パーティーが突入。

20mほど進むと巨大なシルエットが空中で一回転しながら地響きとともに着地した。

青灰色の毛皮に、2mは超える体躯、赤金色に輝く眼。

右手に骨斧、左手に革盾、腰に湾刀^{タルワール}。

獣人の王《イルファング・ザ・コボルドロード》が雄たけびを上げ、46人の挑戦者を出迎えた。

その雄たけびに、誰もが一瞬委縮し、体が強張った。

雄たけびに呼応し《ルインコボルド・センチネル》も3体召喚される。

「主武装は骨斧！副武装は湾刀^{タルワール}！《番兵^{センチネル}》3体！情報通り！」

そんな中、ディアベルは声を張り上げ、前に出る。

「行けるぞ！俺に続け！」

走り出すディアベルに続き、コボルドロードを相手する本隊が突撃する。

コボルドロードとの戦いはキリトやミトの予想を遥かに上回る形で進行していた。

一本目のHPバーはディアベル率いるC隊が、二本目をD隊が、そして、長柄武装のF隊、G隊が現在は三本目のHPバーを半分まで削った。

危ない場面と言えば、壁役のA隊、B隊のHPが半減したが危険域にまで落ちてはいない。

味方同士のHPの管理もできているし、キバオウのE隊とカイ、キリト、ミト、アスナの4人組も余裕をもってセンチネルの相手が出ていた。

問題はなかった。

その時だった。

コボルドロードが一際けたたましい雄たけびを上げた。

そして、持っていた骨斧とバックラーを投げ捨て、腰の武器に手を伸ばした。

「副武装の湾刀タルワールに変わるぞ！スキル変化は憶えているな！基本は変わらない！《武器を打ち払い喉元を撃つ》だ！」

ディアベルが指示を出し、武器を構える。

「次で決めるぞ！C隊、前へ！」

C隊がラストアタックを仕掛ける。

その瞬間、コボルドロードは手にした武器を抜いた。

湾刀タルワールとは、刀剣の一種で、インドやパキスタン、バングラデシュ、ア

フガニスタンに見られる大きく曲がった細身の片刃刀。

だが、コボルドロードが抜いた武器は、刃が曲がってはいなかった。緩く反った刃、鍛えられ、砥ぎ上げられた鋼鉄の色合い。

β時代、多くのプレイヤーを苦しめたその武器の名は刀。

「ダメだー！」

そのことに気づいたキリトは声を上げ、コボルドロードに向かつていくC隊へと走り出す。

「そうはさせへんで！」

だが、そこにキバオウの邪魔が入った。

「何を!？」

「決まってるやろー!」ラストアタック L A 取りに行く、汚いβ上がりの邪魔やー!」

ラストアタック L Aとは、ボスクラスのモンスターに対し、とどめの一撃を与えることで、そのとどめの一撃を与えたプレイヤーには、ラストアタックボーナス L A Bが与えられ、それで得られるアイテムは唯一無二の性能の為、β時代ではこぞつて多くのプレイヤーが狙った。

「L Aはディアベルはんのもんや!」ラストアタック

くだらないことを言うキバオウに、キリトはキレる。

「そんなこと言ってる場合か!どけ、武器がβの時と違うんだ!」

「な、なんやと!?!」

事の重大さに気づき、キバオウがディアベルの方を振り向く。

その隙に、キリトはキバオウの横を走り抜ける。

だが、もう遅かった。

既に、C隊はコボルドロードの攻撃範囲に入っていた。

刀専用ソードスキル 重範囲技《ツムシグルマ旋車》。

攻撃を食らったC隊のHPは、半分まで減った。

さらに加えて、バットステータス《タス一時行動不能》。

コボルドロードは、動けなくなったプレイヤーに向け、刀を振り上げる。

そして、その刃が振り下ろされた。

「うおおおおおおおっ!」

だが、そのプレイヤーを庇うように一人のプレイヤーが、攻撃を防

いだ。

それはディアベルだった。

ディアベルは寸前で、コボルドロードの武器が違ふことに気づき、防御態勢に入ったため、《一時行動不能》^{タメ}にならずに済んだ。

だが、HPは半分まで減っており、後数発攻撃を食らえば終わる状態だった。

コボルドロードは再び刀を構え、刀スキル《浮舟》を使う。

ディアベルは防ごうと、盾を構える。

「ダメだ！」

キリトが叫んだ。

何故なら、ディアベルの持つ盾はヒビが入り、耐久値が残りわずかしかないのが分かる。

そんな盾で攻撃を受け止めれば、ダメージを受け止めきれず残り半分しかないディアベルのHPは無くなる。

コボルドロードの一撃がディアベルを攻撃する。

「うおおおおおおおっ!!」

だが、それより早く一人のプレイヤーがコボルドロードに攻撃を仕掛けた。

それはカイだった。

カイはコボルドロードが刀を抜いた瞬間、^{タルワール}湾刀でないと瞬時に見抜き、キリトよりも早く走り出し、ソードスキルを発動した。

発動直前のソードスキルはソードスキルで打ち消せる。

亜人型Mobと戦う時、キリトに教えられた方法を使い、カイはディアベルたちを助けようとした。

最初の《旋車》には間に合わなかったが、二撃目の《浮舟》には間に合い、何とかソードスキルをコボルドロードの刀にぶつけるが、アシスト任せに放った技ではスキルキャンセルできなかった。

(やっぱり、ぶっつけ本番じゃ無理か!)

カイは心の中で悪態を吐く。

だが、次にカイが見たのは、自分に刀を向けるコボルドロードの姿だった。

《浮舟》はスキルコンボの開始技で、そこから上下からの連撃に、一拍置いて突きを放つ《緋扇》が放たれる。

そして、β時代はこのコンボによって倒れるβテスターは後を絶たなかった。

「まづっ!?!」

スキル発動後の為、硬直で動けないカイは防御態勢もとれない。

そのまま《緋扇》の上下からの連撃を食らいHPが危険域にまで落ちる。

次に来る突きを食らえば終わり。

(くそっ……!……ここで終わりか……!……!)

覚悟を決め、カイは思わず目を閉じた。

次の瞬間、ガキインツ!と金属音が鳴り響いた。

目を開けると、カイの目には、最後の突きを《アイアンサイズ》で受け止めるミトがいた。

「はああああああああ!!」

そして、続く形でキリトとアスナもやってきて、ミトが受け止めるコボルドロードの刀を弾く。

「ミト!それに、キリトとアスナ!」

「早く回復して!それまで私たちがタゲ取るから!」

「カイ、ディアベルと下がれ!」

「ここは私たちが!」

ミトは、キリトとアスナと共にコボルドロードへと向かう。

「すまない……!」

三人にそう言い、カイはディアベルを連れて下がる。

他のC隊のメンバーは既に、エギル達B隊によって避難しており、回復を始めていた。

カイは、前線より少し後ろに下がるとポーチからHP回復ポーションを二つ取り出し、一つをディアベルへと渡す。

「すまない……俺の所為で……!」

「気にすんなって。こういう時はお互い様だ」

「………違うんだ」

「え？」

「俺は……君たちを騙してたんだ……！」

ディアベルが絞り出すように言った言葉に、カイは驚く。

「騙したって……何をだ……？」

「俺は……元βテスタターなんだ……第1層のフロアボスの

ラストアタックボーンナス

L A B……それが目当てだったんだ……！」

ラストアタックボーンナス

ディアベルにはある目的があつて、L A Bを手に入れようとしていた。

だが、その所為で多くの仲間を危険にさらし、更に自分を助けるためにカイが死にかけた。

ディアベルは申し訳なきで、言い訳もできなかつた。

「俺は……アンタが悪い人間とは思えない」

「……え？」

「少なくとも、ここまでの指揮の取り方や戦い方、それに今俺に向けてるその感情からアンタが利己的な奴とは思えないんだよ」

ポーションを飲み干し、空の瓶を捨て、カイは言う。

「しっかりしろよ、騎士様^{ナイト}。この先の攻略で、アンタは絶対に必要な人間だ。だから、こんな所でくたばるなよ」

ディアベルに笑いかけ、カイは言う。

その時、背後でバリントゥ！つとガラスが碎ける音がした。

それは、三人がコボルドロードと戦っている場所から聞こえた。

「今の音？」

一瞬、嫌な予感がしたが、三人のHPは警戒域^{イエロー}にまで落ちてるが、まだ大丈夫だった。

なら、何が碎けた音なのか。

振り向くと、それはミトの武器《アイアンサイズ》が碎けた音だった。

「ミトー！」

武器を失って、戦えないミトを見てカイは走り出そうとした。

「来ないでー！」

そんなカイをミトは止めた。

「まだ回復しきってないでしょ！私は大丈夫だから。回復を優先して！」

武器を失いつつも、ミトは投げナイフを取り、応戦する。

実際、カイのHPは、漸く危険域^{レッド}を脱した程度でボスと一勝負するには心許なかった。

「くそっ！」

肝心な時に動けない自分が腹立たしく、悪態を吐く。

「おい、カー坊」

その時、近くの柱の陰から、聞き覚えのある声が聞こえる。

「アルゴか!？」

「そうダ。悪いけど、俺たちはそこまで硬くないから、変にボスモンスターにタゲられるのはゴメンだから、《^{ハイディング}隠蔽》のまま失礼するゾ」

そう言うと、アルゴはアイテムウインドウからある物を取り出す。

「ホラ、おつかいの品だヨ」

「くそ………予想以上に耐久値削られてたか………!」

ミトはコボルドロードの攻撃を回避しつつ、タゲを切らさない様に投擲スキルで投げナイフを投げつつ応戦する。

カイを庇う為にコボルドロードの刀を受け止めたのが致命傷だった為、武器は数合打ち合っただけで壊れてしまった。

幸い、キリトやアスナが、コボルドロードの猛攻からミトを守りながら戦っている為、まだ武器なしでも戦えていた。

「しまっ!？」

その時、キリトが声を上げた。

コボルドロードが《幻月》を使ったのだ。

《幻月》は上下ランダムに発動する技で読みが外れることがある。

キリトは片手剣スキル《バーチカル》の発動をキャンセルして《ア
ニールブレード》を引き戻し、防御した。

だが、それでもキリトのHPは3割以上減った。

「キリト君ーくっ……このっ！」

キリトが膝をついたのを見て、アスナがコボルドロードの脇腹目掛
け《リニア》を放つ。

だが、同時にコボルドロードが《緋扇》の構えを取った。

「アスナ、ダメー！」

声を出すも、もう間に合わない。

既にスキルは発動し、《リニア》が放たれる。

1週間前のリトルネペントに襲われた時のことが、ミトの頭に過
ぎった。

(守るんだ……！今度こそ、アスナを！)

ミトはアスナを庇おうと走り出す。

自分の身体を盾にしても、アスナを守る。

そのつもりだった。

「ミトー！」

その時、カイが自分の名前を呼ぶのを聞いた。

見ると、カイがこちらに向かって走ってきてるのが見えた。

だが、カイのHPはまだ警戒域^{イエロー}だった。

『来ないで！』

ミトはそう叫ぼうとした、だが、それより早く、カイは投げナイフ
を取り出し、コボルドロードの目に向け投げる。

投げナイフはコボルドロードの目に刺さり、コボルドロードの攻撃
が止まる。

「ミトー受け取れー！」

その隙を逃さず、カイは手にした何かを全力でミトに向かって投げ
た。

回転しながら飛んでくるその何かをミトは反射的にキャッチし、そしてキャッチした時のスピードを殺さず一回転する。

「はああああああ!!」

手にしたそれは光り輝き、コボルドロードを攻撃する。

両手鎌スキル《グレイブロード》。

目にも止まらぬ速さで四連撃するスキルが、コボルドロードの身体を切り刻む。

ミトの手には武器があった。

その武器の名は、《アニールサイズ》。

SAO正式版から《森の秘薬》クエストで追加された報酬の一つだ。

第10話 フロアボス討伐

ミトは新しい武器《アニールサイズ》によって、コボルドロードは動きを止めた。

さらに、カイが投げた投げナイフで片目も負傷し、数秒は視界が封じられている。

「間に合ってよかった」

カイはようやく回復しきったHPを見つめ、三人と合流する。

「無茶にも程があるんじゃないのか？」

キリトはHP回復ポーションを飲み言う。

「と言うより、武器を投げ飛ばすとか何考えてるの？もう少しで私に当たるところだったし」

アスナは先程のカイの行動に少しご立腹だった。

「ちゃんと当たらないように考えて投げたよ」

「だとしても危険よ。一歩間違えれば、カイも危険なのに」

ミトは新しい鎌を手にカイに忠告する。

「悪かった。次からは気を付ける……。それで、こっからどうする？」

《アニールシミター》を抜き、カイはコボルドロードを見る。

コボルドロードは復活し、カイ達を睨みつけ、咆哮を上げる。

レイドパーティーメンバーのHPの回復は殆ど終わっているが、士気が絶望的だった。

前情報と違うボスの使用武器、更に新たに出現した番兵^{センチネル}、そして、指揮官のディアベル一時離脱。

それにより、前線は崩壊寸前。

数十秒もたてば、完全に崩壊し、死亡者が出る。

「このままじゃまずい。なんとかして立て直さないと」

「でも、どうしたら……」

生半可な指示では、余計に混乱させることになる。

その為、何か短く、強烈な一言を言わなければならない。

その時だった。

「全員、ちゅううううううううもおおおおおおおおく!!」
ディアベルが、ボス部屋全体に響き渡る声を出した。

その声に全員が驚き、混乱する声が消える。

どう言うわけか、コボルドロードも驚き、動きが止まったように見える。

「これより、第1層フロアボス討伐作戦、最後の指示を伝える!」

そう言うと、ディアベルはゆっくりとした足取りで、キリトの隣に立ち、キリトの肩に手を置いた。

「現時刻をもつて、前線指揮を俺から彼に移行する!彼の指示の下、ボスを倒せ!」

ディアベルが出した指示に、周りは一瞬困惑する。

ここまでボスと戦ってこれたのは、ディアベルの指示があつたからだ。

その指揮権を急にキリトに任せられる。

不安が出ないのがおかしかった。

「俺は従うぞ!」

最初に賛成の声を上げたのは、エギルだった。

「それに、彼にはボスのスキルの知識がある!ディアベルがそう言うなら、それに従うまで!」

エギルが賛同した事で、他のプレイヤーたちの不安は一気に消え、消えかけていた士気は再び盛り返した。

「キリトさん、ここからは貴方に全てを任せる。指揮、頼めるか?」

「……………この状態で断れると思ってるのか?」

キリトは乾いた声で笑い、立ち上がる。

「奴を包囲すると、範囲攻撃が来る!B隊は無理にスキルを迎え撃たないで、防御に徹しろ!」

「了解!」

指示をもらったエギルはB隊のメンバーを引き連れ、コボルドロードの攻撃を防ぐ。

「D隊はB隊に向かおうとする番兵^{センチネル}を引き離してくれ!引き離したら、E隊と協力し撃破!F隊は、D隊、E隊の支援!A隊はB隊のり

カバリーができるように、ボスのパターンをよく見てくれ！C隊は合図と共に全力攻撃！合図はディアベルに一任する！ディアベル、行けると思ったら全力でソードスキルを叩きこんでくれ！G隊はC隊の支援に！クソ運営茅場晶彦に目にももの見せてやれ！」

「「「運営ザマア!!」「」」」

キリトの指示に全員が従い、着実にコボルドロードにダメージを与えていく。

その時、コボルドロードのHPが赤くなった瞬間、一人のプレイヤーが足をもつれさせてコボルドロードを囲む形になってしまった。「まずい！範囲攻撃が来るぞー！」

キリトが叫ぶも、既にコボルドロードが《旋車》を使おうと動作に入ろうとした。

「間に合えー！」

キリトが飛び出し、《ソニックリープ》を使い、コボルドロードが《旋車》を出すのを妨害した。

そして、コボルドロードは、人型モンスター特有のバットステータスの《転倒》状態になった。

「今だー！C隊、全力攻撃ー！」

ディアベルの合図でC隊全員が、ほぼ同時に縦斬り系のソードスキルを放つ。

コボルドロードのHPががりがり削られた。

後一回当てれば倒せるのにコボルドロードは立ち上がり、攻撃の動作に入った。

「くっ、削り切れなかったー！」

ディアベルは悔しそうに歯ぎしりする。

硬直により、C隊は動けなかった。

「アスナ、カイ、ミト!!」一気に行くぞ!!」

キリトの掛け声で、4人は一気に駆け出した。

キリトとカイの二人が同時にソードスキル《スラント》と《リーパー》を発動し、コボルドロードの武器を跳ね上げる。

そこにミトとアスナが、渾身のソードスキルをコボルドロードの無

防備な左脇腹に、突き刺した。

コボルドロードの残り僅かなHPはみるみるとなくなり、1ドット残った。

コボルドロードは口端から涎を垂らし、獰猛な笑みをミトとアスナに向ける。

ミトとアスナは戦慄した。

そして、二人に向け刀が振り下ろされる。

アスナは思わず目を瞑り、ミトはアスナを守ろうと防御態勢に入る。

だが、ミトが攻撃を受け止めるよりも早く、カイとキリトが互いの剣を重ね合らし、攻撃を防いだ。

「おい、獣、何処見てんだ？」

「うちのお嬢様方に！」

同時に剣を跳ね上げ、弾く。

「二色目使ってんじゃねえ!!」

カイの《フェル・クレセント》とキリトの《バーチカルアーク》が炸裂する。

ほぼ同時に当たられた攻撃は、コボルドロードの僅か1ドットのHPを削るには過剰過ぎた。

だが、ミトとアスナを狙ったコボルドロードをカイとキリトは許さず、渾身の一撃をもってコボルドロードを葬った。

HPが0になり、コボルドロードは顔を天井に向けて高く吠え、両手から刀を落とした。

そして、イルフアング・ザ・コボルドロードは幾千のガラス片のようにならなくなった。

後方にいたセンチネルも儂く四散した。

こうしてデスゲーム開始から1カ月、アインクラッド第1層が攻略された。

第11話 ビーター

コボルドロードが消え、周りには静寂が漂った。
誰もが緊張に包まれた。

もしかしたら、βテストの時と違うところがあるかもしれない。
だが、何も起こらない。

そしたら、急に目の前に獲得経験値と分配されたコルが表示された。
た。

それを見て確信した。
勝った。

まわりもそれを見たらしく歓声を上げた。

「お疲れ様」

カイの横にいたミトがそう言ってきた。

「ああ、ミトもな」

そう言い、二人は拳をぶつけ合う。

「ん？なんだこれ？」

その時、カイは自身のメッセージウインドウに書かれたある物に目が言った。

「どうしたの？」

「いや、なんか変なものが……《アシストボーナス》？」

メッセージウインドウには、カイが取得した経験値と、自動分配されたコル、獲得アイテムが記入されており、その一番下に《Assist Bonus》と書かれ、その下に《コート・オブ・スカーレット》と言う名のアイテムがあった。

「ああ、それはL^{ラストアタック}Aを取ったプレイヤーに貢献したプレイヤーに与えられるボーナスよ。大体はL^{ラストアタック}Aを取ったプレイヤーの前にボスにダメージを与えたプレイヤーに贈られるわ」

「なるほど。つまり、俺はキリトがL^{ラストアタック}Aを取れるようにお膳立てしたって訳か」

メッセージウインドウを消すと同時に、ディアベルがカイの下にやってきた。

「カイさん、お陰でボスを討伐できた。ありがとう」

「礼ならキリトに頼む。一番頑張ったのはアイツだ。それにディアベル、ナイス指揮だった。特に最後キリトに指揮権を渡したところかな」

ラストアタック

「L Aに拘ってはいけない。そう思ったんだ。それに……彼になら今後の攻略組を任せられると思ってな」

「攻略組?」

「ああ、今考えた。今後も全プレイヤーの先頭に立ち、率先してフロア攻略をする者たち、《攻略組》……いい名だろう?」

ディアベルは得意の騎士スマイルでそう言う。

「なるほど、いい名前だ。……でも、任せられるってどういう事だ?」

「……これから、俺の本当の作戦を行うんだ。カイさん、それに、ミトさん」

ディアベルはカイとミトの二人を見て、最後にエギルたちB隊にもみくちやにされてるキリトとそれを見て笑ってるアスナを見て、まだ背後で勝利の余韻に浸る攻略組を見る。

「君たちと共に戦えたことは、俺の一生の誇りだ。ありがとう」

意味が分からず、カイもミトも首を傾げる。

その時だった。

「なんでだよ!」

誰かが叫んだ。

叫んだのはディアベルのパーティーメンバーのシミター使い《リンド》だった。

「なんで……なんでディアベルさんのことを見殺しにしようとしたんだ!」

そう叫ぶリンドの後ろには、他のパーティーメンバーがおり、その残りのパーティーメンバーもキリトに対し憎悪を向けていた。

「見殺しだって?」

何のことかわからず、キリトは尋ね返した。

「そうだろ! 攻略本と情報が違ってたのに、アンタはボスが使うスキ

ルのことを知ってた！それを、ディアベルさんに伝えてたら危険な目にあうこともなかった！」

その叫びに、周りのプレイヤーたちも次々と疑問の声を上げ始めた。

ラストアタック
「L A、それによるボーナスアイテムが狙いだっただ。アンタはソレが欲しくて、ディアベルさんにボスのスキルを隠してた。そうだと、元βテスターさん」

何処からかそんな言葉が聞こえた。

元βテスターの言葉に、周りがさらに騒ぎ出す。

「ちよつと待って！」

そんな中、アスナが声を上げた。

「β時代の情報は私達も攻略本で得ていたわ。あのボスの情報について大きな差はなかったはず。ただβ時代と同じだと思ひ込んだ私達が窮地に陥りそうになった時、彼はもつと先で得ていた知識を応用して教えてくれた。そう考えるのが自然じゃない？」

「俺もそう思う。それに、攻略本には情報はあくまでβ時代の物で、正式版とは差異があると注意もあった。俺たちはその注意を忘れ、偵察戦を怠った。彼に感謝こそすれ、批難するのは違うだろ」

エギルも声を上げ、エギルのパーティーメンバーも賛同する。

「いいや違うね、アルゴとかいう情報屋とそいつはグルだったんだ。元βテスター同士共謀して、善意のふりをして俺達を騙して、自分たちだけ美味しいところを掠め取っていいこうとしたんだ」

話が悪い流れになっていく。

そんな中、ディアベルはカイに言葉を掛けた。

「これが俺の最後の作戦だ。カイさん、それじゃあ」

カイに別れを告げ、ディアベルが前に出た。

「皆、待ってくれ！」

ディアベルの登場に全員が静かになる。

「キリトさんは何も悪くないんだ！悪いのは、全部俺なんだ！」

「な、なに言ってるんだよディアベルさん！ディアベルさんは何も悪くないだろ！悪いのは、情報を隠していたその元βテスターで！」

「違うんだ。悪いのは俺だ。俺は……………」

ディアベルの口から自身が元βテスターであると明かされそうになる。

「あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

その時、笑い声が響きわたった。

「元βテスターだって？俺をあんな素人連中と一緒にしないで貰おうか。いいか。SAOのCクローズドベータテストB Tはとんでもない倍率の抽選だったんだぜ。受かった1000人のプレイヤーで何人、本物のMMOゲーマーがいたと思う？殆どが、レベリングも知らない初心者だった。あんたの方が100倍マシだぜ。だが、俺は違う」

キリトの言葉に皆が驚きを隠せなかった。

「俺はβテストの時、誰も到達できなかった層まで到達し、刀スキルのことを知った。」

他にもいろんな情報を知っている。アルゴなんか話にならないくらいにな」

そう言い、キリトはディアベルを見る。

「ディアベル、お前は良く働いてくれたよ。元βテスターである俺の言葉を全部鵜？みにしてくれたことで俺は無事ラストアタックL Aが取れた。でも、もう茶番はおしまいだ。精々死なない様に頑張ってくれ、ビギナーさん」

キリトがこうまでして、自身への憎悪値ヘイトを稼ぐのは、元βテスターを守るためだった。

このまま行けば、元βテスターの吊し上げが始まる。

そうなれば、攻略組は元βテスター達とビギナー達で二つに分かれ、攻略処では無くなる。

だからこそ、キリトは情報を独占する悪の元βテスターを演じることにした。

そして、キリトの作戦は、奇しくもディアベルが行おうとしたことだった。

「ふざけるな！やっぱりお前が悪いんじゃないか！」

「この最低野郎！」

「そんなのチートじゃねーかよ!!」

「そうだ!βテストターのチーターだからビーターだ!」

「……ビーターか。いいな、それ。使わしてもらおう。俺は《ビーター》だ。これからは、元βテストターと一緒にしないでもらおうか」

キリトはL ラストアタックボーナス A Bのアイテム、《コート・オブ・ミッドナイト》と言う黒い裾の長いコートを身に纏う。

「第2層の転移門は俺が有効化しアクティブといてやるよ。町までフィールドを少し歩くからな。初見のModに殺される覚悟があるなら、つけてもいいぜ」

そう言つてキリトは踵を返して、第2層へ続く階段へと向かう。

「それじゃあ、行くとするか」

すると、カイは平然とキリトの隣へと向かい、一緒に第2層へと向かおうとする。

「なっ!？」

カイの行動に、キリトは思わず驚く。

「お、おい!お前、何してるんだよ!」

すると、リンドがまたしても叫ぶ。

「何って、自分の相棒が第2層に向かうんだから、一緒に行くのは当たり前前だろ?」

「分かってるのか!そいつはビーターなんだぞ!最低の屑野郎だぞ!」

「……………それがどうした?」

カイは獰猛な笑みを浮かべ、リンドを見る。

「こいつが薄汚い、最低の屑野郎だったとしても、強いことには変わらない。言っただろ?俺は強い奴は大歓迎なんだよ」

そう言い、カイはA アシストボーナス Bで手に入れた《コート・オブ・スカーレット》を身に纏った。

「な……………なんだよ……………それ……………!」

《コート・オブ・スカーレット》……………今の戦闘で手に入れた……………

アシストボーナス
A Bでな」

「ア、・アシスト、ボーナス……………?」

ラストアタック
「L Aを取ったプレイヤーに貢献したプレイヤーに与えられるボーナス。俺は、最初からコレが目当てでにコイツに近寄ったんだよ」
カイの言葉に、その場の全員が驚く。

「それじゃあ……お前も、ボスが刀スキルを使うこと知ってたのか！」

「自分が強くなりたいからって、俺たちに黙ってたのかよ！」

「悪いな……俺は、強くなりたいんだ。強くなるには、強い奴の傍にいるのが一番手っ取り早いからな」

キリトに向けられていた憎悪が、今度はカイにも向けられる。

「行こうぜ、ビーターさんよ」

「あ、ああ、そうだな」

キリトの肩を軽く叩いて、カイは先に歩き出し、キリトも隣に並ぶように歩き出す。

第12話 果たされる約束

去っていくカイとキリトの背中を見つめ、ディアベルは俯き、悔しそうに顔を歪める。

「ディアベルさん！あんな奴、放っておきましょう！」

「そうですねよ！あんな自分勝手な連中、どうせ何処かでくたばりますよ！」

周りは今のディアベルの様子を、騙された悔しさで顔を歪めていると思ひ込んでいた。

ディアベルは大声で叫びたかった。

二人は薄汚くなんかない。

それどころか、ここに居る誰よりも優しい人なのだ。

だが、二人がどんな思いで悪役を買って出たのかも理解できた。

「皆！言いたいことはあるかもしれないが、今はこの勝利を喜ぼう！これから第1層に戻り、フロアボス討伐成功の旨を、《はじまりの街》で待つ皆に伝えるんだ！そして、必ずこのデスゲームをクリアできることを！」

ディアベルの言葉により、他のプレイヤーたちは声を上げ、次々とボス部屋を出ていく。

残ったのは、ディアベルとエギル、キバオウにミトとアスナだった。

「なあ……あいつ等のアレが本心じゃないってことは……」

「……分かってます」

「分かってるわ」

「そうか……なら、伝言頼めるか？」

「俺からもいいだろうか？こんな事、頼める立場じゃないのは分かっているが……」

エギルとディアベルの頼みを、ミトとアスナは笑って受ける。

「ちよい待ちい」

すると、キバオウも声を掛ける。

「………伝言、ワイからも頼むわ」

第2層へと続く階段を上る途中で、キリトはカイに声を掛けた。

「なんのつもりだったんだ、カイ」

「何がだよ？」

「お前まで、汚れ役を引き受ける必要はなかった。俺一人で十分だったのに……………」

「馬鹿野郎」

カイはそこで立ち止まり、キリトを見る。

「それだと、お前が一人になっちまうだろ？これから先、ずっと一人で戦っていくつもりか？」

「俺は元々ソロでやってくつもりだったんだ。だから、何も問題はなかった」

「普段ならソロでもいいかもしれないけど、ボス戦はどうするんだよ？あんな事すれば、何処のパーティーにも入れてもらえないだろ？なら、最初から二人で嫌われ者になって、二人でやってく方がマシさ」
そう言い、カイはまた歩き出す。

「そう言うわけだから、これからもよろしく頼むぞ、相棒」

「……………なんて言うか、お前には敵いそうにもないな」

キリトは困った様な笑みを浮かべ、頭を掻き、カイの後を追う。

階段を昇り終え、第2層へ続く扉が出現する。

それを手で押し、開くと第2層の風景が現れる。

様々な地形が複合していた第1層と異なり、テーブル上の岩山が連

なり、山の上部は草に覆われ、大型の野牛系モンスターが闊歩する。

その光景に、カイは思わず溜息を吐いた。

「本当に第1層をクリアできたんだな」

「まだ信じられなかったのか？」

「実際に、第2層を見るまではな」

「なら、もう少し景色を堪能するか」

「そうだな。転移門の開放を待ち侘びてる連中には悪いけど、少しぐらいなら罰も当たらんだろう」

笑い合い、二人は岩肌から延びるテラスに腰を掛ける。

数分程、そうしていると再び扉が開き、そこからミトとアスナが顔を出した。

「来るなって言わなかったか？」

「死ぬ覚悟があるなら来いって言ったのはそっちでしょ」

「……………それで、何の用だ？」

「うん。3人から伝言を頼まれたの」

「伝言？」

「エギルさんから『2層のボス攻略も一緒にやろう』って。それからディアベルさんからは、『嫌われ役を買って貰って本当にすまない。何か困ったことがあればいつでも言ってくれ。全力で手を貸そう』だって」

「最後の一人はキバオウから『今回はジブンらに助けられたし、ディアベルはんも死なずに済んだ。だから礼は言う。でも、やっぱあないなやり方は認められん。ワイはワイのやり方でクリアを目指す』ってさ」

「……………そうか」

キリトがそう呟き、四人はしばし無言になる。

次に口を開いたのはカイだった。

「そろそろ戻ったらどうだ？薄汚い最低屑野郎のビーターと、その腰巾着プレイヤーなんかと一緒に居たら、仲間と思われるぞ」

「戻りたくても戻れない理由があるのよ」

ミトはそう言うと、カイに近寄る。

「約束、忘れてないでしょうね?」

「約束?.....あ!」

昨夜にした約束のことをすっかり忘れていた。

「全く.....自分から忘れるなよって言っておきながら、自分が忘れてたらダメじゃない」

「すまない.....で、話ってなんだ?」

「あ.....それは.....」

ミトは頬を掻きながら困り顔をし、アスナをチラツツと見る。

そんなミトの様子に気づいたアスナは、キリトに近付く。

「ねえ、キリト君。転移門の有効化アクティブに行くんだよね?なら、早く行かないと。案内してよ」

そう言い、キリトの腕を掴んで立ち上がらせる。

「え?ちよつなんで!」

「じゃあ、ミト、カイ君。また後でね」

「ちよつアスナさん!自分で歩けるから手を放して!」

ずりずりと引き摺られていくキリトとキリトを引き摺るアスナを見送り、カイとミトだけが残った。

「もしかして、キリトやアスナには聞かれない話なのか?」

「えっと。まあ、そうかも」

そう言い、ミトはカイの隣に座った。

「あのさ、カイのリアルに関する質問になっちゃうんだけど、カイってさ、昔、小学生ぐらいの頃に一年ぐらい女の子と毎日ゲームして遊んでなかった?」

ミトがそう尋ねると、カイは驚いたようにミトを見る。

「でき、その女の子のプレイヤーネームってミトじゃない?」

「ちよ、ちよつと待ってくれ!それってつまり.....そういう事なのか.....?」

カイは一人でぶつぶつと呟き、そして、ミトを見る。

「ミト.....なのか?」

「やっぱりカイだったんだ」

「あ、ああ.....なんて言うか、久しぶりだな」

「ええ、久しぶり」

そう言うと、お互い無言になった。

数分そうしていると、再びミトから話し出した。

「ねえ、あの日……どうして公園に来なかったの？」

「そ、それは……」

「私と遊ぶのが嫌になったとか、楽しくなくなったとかでも全然いいの。ただ、居なくなった理由が知りたくて」

「そんなことない！」

カイは立ち上がって、大声で言う。

「ミトと遊ぶのが嫌になったとか、楽しくなくなったとか有り得ない

！俺は今だって、ミトと一緒にゲームやってた時の事思い出すんだぞ

！俺にとつて、あの一年間は本当に楽しかったんだ！」

怒ったように言うカイに、ミトは驚きポカンとした表情を晒した。

「急に居なくなったのは……！……！……！」

そこでカイは口を噤み、俯く。

「悪い、理由は言えない。俺個人の問題なんだ。今、それが言えるほど心の整理がついてない。すまない」

本当に申し訳なさそうに謝るカイに、ミトは優しく声を掛けた。

「気にしないで、その言葉だけで十分だから」

「ミト……」

「嫌われてなかったって分かっただけでも良かったよ」

そう言い、ミトは立ち上がる。

「アスナたちを追いましょう。折角なんだし、誰もいない主街区を拝むのも悪くないから」

「……ああ」

カイがミトの隣に並び、二人は歩き出す。

「ねえ、カイ」

「なんだ？」

「……いつかは、話してくれる？居なくなった理由」

「……そうだな。いつかは話すよ。絶対に」

「……そっか。待ってる」

(…………ごめん、ありがとう、ミト)

ミトのその言葉にカイは、心の中で謝罪と感謝をし、キリトたちの後を追った。

第13話 月夜の黒猫団

2023年4月8日 第11層《タフト》

そこにある酒場である一団が集まっていた。

「それでは、我ら《月夜の黒猫団》に乾杯！」

『乾杯！』

「そして、命の恩人キリトさんとカイさんに、乾杯！」

『乾杯！』

「えっと……乾杯……」

「おう、乾杯」

おずおずとグラスを差し出すキリトに対し、カイは普段と変わらぬ様子でグラスを差し出す。

何故キリトとカイが、最前線から離れたこの場所で、彼ら《月夜の黒猫団》と一緒にいるのかと言うと、武器の素材となるアイテム収集の為だった。

二時間ほどで必要なアイテムの収集を終えた二人は、最前線に戻ろうとした時、このギルドに出会った。

パーティー構成が槍使い2人に棍使いが1人、短剣使い1人、メイス使い1人で前衛ができるのが1人しかいなかった。

おまけに、モンスター達に囲まれていて危険な状態だった。

そんな中、カイは真っ先に飛び出し、彼らを守った。

カイに続いてキリトも飛び出し、剣を抜いた。

相手はつい先ほどまで戦っていた武装したゴブリンの集団で、カイとキリトの実力なら、全力でソードスキルを放てば簡単に倒せるレベルだった。

だが、キリトは後ろにいる彼らの視線が怖かった。

ハイレベルプレイヤーが下層の狩場を荒らすのは決して褒められることではない。

一応必要アイテムの収集の為と言う理由があるが、物事は人の捉え方にもよって変わる。

もし、彼らが二人を非マナープレイヤーとして上層ギルドに報告さ

れば吊し上げられ、新聞の非マナープレイヤーリストに名前が載っ
てしまう。

それを避ける為にも、キリトは本来の実力を隠し、下位ソードスキ
ルだけで対処しようとした。

だが、カイは違った。

カイは即座に上位ソードスキルを使い、ゴブリンを蹴散らした。

その光景に、キリトは背後の視線を気にしつつも上位ソードスキル
を使って、カイのフォローに回った。

ゴブリンを蹴散らした後、彼らはお礼を言ってきた。

その後、出口まで一緒に着いて行き、更にはお礼に食事をご馳走す
るとまで言われ、こうして同じテーブルで食事を取っている。

「今日は助けてくれてありがとうな」

「サンキュー」

「ありがとう。本当にありがとう」

お礼の言葉を言われて少し照れ臭くなっていると、ギルドのリー
ダーである棍使いのケイタが話しかける。

「あの人、キリトさん、カイさん。失礼ですかレベルの方はいくつぐら
いなんですか?」

その質問に、キリトは言い淀む。

「レベルなら、俺が39でキリトは40だ」

あつさりと自身のレベルを、そして、キリトのレベルを話すカイに、
キリトは驚く。

「39に40!?まさか、お二人は攻略組の方なんですか!?!」

「ああ、一応な。後、敬語使わなくてもいいぞ。見た感じ歳も近そうだ
しな」

「あ、そうでs……そうか。じゃあ、カイ、キリト、物は相談なんだ
けど、戦闘のコーチを頼めないか?」

「コーチ?」

ケイタの頼みに二人は聞き返す。

「僕たちのパーティー、前衛ができるのがメイス使いのテツオだけで、
前衛が危ないんだよ。それで、コイツ」

そう言つてケイタは、ギルドの紅一点の少女を前に出す。

「サチつていうんだけど槍から盾持ちの片手剣に変更させようと思つてるんだ。でも、勝手がわからなくてさ。だから、サチに片手剣の使い方や俺たちに戦闘のレクチャーして欲しいんだ。報酬も払うし、どうかな?」

「俺は構わないぞ」

「ちよっカイ!」

あつさり引き受けようとするカイに、キリトは慌てる。

「ただその前に、お前たちに言つておくことがある」

カイの言葉に全員が首を傾げる。

「俺とキリトは、《ビーター》だ。正しくは、キリトが《ビーター》で、俺はそれに付き纏う《寄生者》だ」

《寄生者》とは、カイに付けられた渾名で、《ビーター》にくっついて美味しい思いをしてると言うことから付けられた。

「《ビーター》って、あの《ビーター》か?」

「情報屋も知らない情報を独占してるって言うあの?」

《寄生者》も聞いたことある。《ビーター》にくっついて美味しい思いしてる屑野郎だつて」

「ああ、そうだ。俺たちから教えを乞うつてのは、お前たち全員《ビーター》と《寄生虫》の弟子になるつてことも同じだ。それでもいいのか? 悪評つてのは広まるのが早いぞ」

カイがそう言うと、ケイタたちは静かになった。

キリトは罵倒されると思い、身構えた。

「なんて言うか……驚いたな」

「そうだな」

「あまりいい噂聞かないから、どんなに酷い奴らなのかって思ったけど、全然普通じゃないか」

「むしろ良い人たちだな。俺たちのこと助けてくれたし」

「噂つて宛にならないつて言うけど本当だね」

ワイワイと口々にそう言い出すケイタたちにキリトは驚く。

「えつと、俺が言うのも変だけど、そう簡単に信じてもいいのか? 君ら

を騙すために演技してるのかもしれないぞ?」

キリトは恐る恐るそう言う。

「まあ、確かにその可能性もあるかもしれないけど、僕たちが二人に助けられたのは事実だし………何より僕たちは噂より、実際に見て感じたことの方を信じるよ」

ケイタの言葉に、他のメンバーも頷く。

「だつてさ。キリト、どうする?俺は構わないぞ」

「………それじゃあ。コーチの件、引き受けるよ」

そして、彼ら《月夜の黒猫団》は二人を喜んで迎えてくれた。

それから約1カ月がたった。

《月夜の黒猫団》は徐々に力を上げ最前線の7層分下でも十分に戦えるまでになった。

「ふうん、じゃあ、1ヶ月あまり最前線に顔出して無かったのもそのギルドの人たちに戦闘のレクチャーしてたからだだったのね」

「ああ、凄い連中だよ。もしかしたら、近いうちに《攻略組》の一員として戦いに参加するかもな」

カイはミトと久々に会い、最前線から離れた第2層の主街区《ウルバス》にある隠れた店に居た。

「それにしても、態々ミトと会うためにこんな所まで来ないといけな
いとほな」

「だから、私は別に気にしないって」

「ミトが良くても、周りが良くないだろ?なんせ、あの名高い《血盟騎士団》の第二副団長なんだからな。そんな人が《寄生者》パラサイトなんかと居

たらどんな噂されるか」

そう言い、カイはミトの服装を見る。

ミトの服装は、最初の頃と変わり白と赤を基調とした制服の上から白のマントを羽織っている。

《血盟騎士団》とは、25層のボス戦で突如現れた新興ギルドの名で、圧倒的な力を持っており《アインクラッド解放軍》、通称《ALF》を壊滅させたボスを初参加ながら犠牲者を一人も出さずに攻略した。

《血盟騎士団》団長の《ヒースクリフ》は、《神聖剣》と言う発現方法が分からず、取得者も彼以外にいないスキル、《ユニークスキル》を有しており、その圧倒的な防御力と攻撃力により、全プレイヤー中最強とまで言われている。

そんなギルドの第二副団長のミトは、元々の容姿も相まってアインクラッド内では有名人となっている。

そして、第一副団長のアスナもまた同様の理由で有名人となっている。

更にはアスナには《閃光》、ミトには《死線》と言う二つ名がある。そんな有名人と《寄生者》^{パラサイト}が密会しているとなれば、一大スキャンダルになる。

ミトの今後も考え、カイはミトと会う時は最前線から離れたこの場所まで待ち合わせをしている。

「カイのことをそう言う人なんて攻略組にはもう殆どいないでしょ。言うのは、《聖竜連合》のリンクドや古参メンバーぐらいじゃない」

「だとしても、火種は少ない方がいい」

そう言い、カイは注文したコーヒーを飲む。

「ふくん……………そう言っつて、また私から離れるんだ」

「ぶっ!?!」

その言葉にカイは思わずコーヒーを吹き出す。

「折角再会できたのに、カイはあの手この手で私のこと避けるし……………やっぱり私の事嫌いなんだ……………」

俯き、涙声になるミト。

「ち、違うーミトの事を嫌いになるわけないだろ！俺はただミトにあ

らぬ噂が立って肩身の狭い思いをさせたくないだけで！」

カイが必死に弁明するも、ミトは俯いたまま肩を震わせる。

「くっ……くっ……くっ……！」

そして、俯くミトから笑い声が聞こえた。

「……………ミト、お前」

「ぷっ！あはははははははははは！また引っ掛かった！相変わらず、カイは？泣きに弱いわね！」

「お前……………」

目の前で爆笑するミトに、カイは怒りが沸き拳を握る。

「大丈夫。カイが何を考えてるかぐらい分かっているから」

「……………ったく！マジ嘘泣きとか止めろよ」

「ごめんごめん、お詫びに奢るから《トレンブル・ショートケーキ》食べましょう」

「あんなバカ高いケーキ、奢らせられるか。割り勘でいい」

そう言い、二人は《トレンブル・ショートケーキ》を二等分にして食し、互いの相方の愚痴や最近の出来事など、取り留めのない話をした。

第14話 本音

「皆聞いてくれ」

ある日の夜。

いつも通りの戦闘訓練と狩りを終え、宿屋に帰るとケイタが全員を一つの部屋に集めた。

その中には、カイとキリトもいた。

「実は、今日の狩りでなんと20万コル貯まった。それで、僕たちのギルドホームを買おうと思うんだが、どうだ？」

「おお、いいじゃねーか!!」

「いいね！いいね！」

家を買う話で皆は大いに盛り上がった。

「なあ、サチの装備を整えるのは？」

すると、ササマルがそう提案してきた。

「え？別にいいよ」

「遠慮すんなって」

「いつまでもテツオ一人に前衛は任せられないだろう？今は、キリトやカイがいてくれるけど、二人は《攻略組》だ。いずれは最前線に戻る。それまでに、少しでも強くなりたいと」

「でも……」

そういうサチの顔は明らかに曇っていた。

話し合いの末、結局ギルドホームを買うことになった。

その日の夜、カイとキリトは最前線へと向かい、レベリングしていた。

攻略に参加してなくともレベリングを怠れば、その分後が辛くなる。

二人は昼間は《月夜の黒猫団》達の戦闘訓練をし、夜は自身の強化のために最前線へと赴いていた。

「なあ、キリト。この間、28層が突破されて、今は第29層。流石にもう攻略に戻るべきだと思う」

「それは分かってる。でも……」

「ケイタ達が……いや、サチが心配か？」

「……ああ」

キリトは、サチが本音では前衛をやりたくないと思っ
ているのでは
と思っ
ている。

さらに言うと、前衛が戦闘すらしたくないと思っ
ていると、思っ
ている。

レベルは安全マージンをしっかり取り、スキル熟練度も上がり、そ
う簡単には死ななくなった。

それでも、人は恐怖を感じる。

サチはその恐怖から、戦闘をしたくない。

それがキリトが思っていることだった。

「確かに、俺から見てもサチは戦いに向いている性格じゃない。数字だ
け見るなら《攻略組》に来るのも夢じゃない。だけど……」

カイも分かっていたらしく、困った顔をする。

「取り敢えず、明日、ケイタがギルドホーム買いに行くって言っ
たし、その後でサチのこと伝えてみるか」

「そうだな……」

迷宮区でのレベリングを終え、現在の宿となってる20層へと向か
う。

戻った時、ケイタからメッセージが届いた。

『サチが宿から居なくなった。僕たちは迷宮区の方を探してみる。キ
リトとカイも探して見てくれ』

ケイタからのメッセージを見て、索敵スキルから《追跡》を発動し、
サチを探した。

サチは町の中に居た。

最近手に入れた隠蔽能力付きのマントを羽織り、蹲っていた。

「サチ」

「こんな夜中に何してるんだ？」

「キリト!? カイ!? ど、どうしてここが?」

「《索敵》スキルの派生スキル、《追跡》だ」

「フレンド登録してるプレイヤーなら、余程の時間が経っていなけれ

ば後を追えるんだ」

「そうなんだ……流石は《攻略組》だね」

「隣……いいか？」

サチに聞くとサチは頷いた。

サチとの間にかなりの距離は開けるも、二人は近くに座り話しかけた。

「一緒に戻ろう。皆、心配してる」

「今なら謝れば許してくれるぞ、きつと」

二人の言葉にサチは何も言わない。

1分か2分そうしているとサチが口を開いた。

「私ね……逃げたいの」

「………逃げるって何から？」

「モンスターから、ギルドの皆から………この世界から」

その言葉に、二人は冷や汗を流す。

「それって、死ぬって事か？」

「………それもいいかもね。………ゴメン、嘘。死ぬ覚悟があるならここにいないよ。………最近、死ぬのが怖くて寝れないんだ。どうして、こうなっちゃったのかな？…なんで、ゲームで死ななくちゃいけないの？…こんなことに何の意味があるの？」

「サチ、ゴメン。苦しんでいたのに、怯えていたのに………ゴメン。」

キリトはサチに謝罪をした。

サチは驚いた顔をしてキリトを見る。

「キリトが謝る必要は無いよ。私の方こそゴメン。宿から抜け出して、皆に迷惑かけて、こんな愚痴みたいなこと言っただけ。聞いてくれてありがとう。戻ろう」

未だに暗い表情のサチは、無理して笑顔を作り立ち上がる。

「逃げちゃえばいいだろ」

そんなサチに、カイはそう言った。

「え？」

「戦うのが怖いんだろ？…なら、逃げればいい。逃げるのは、卑怯な事じゃないんだ」

「で、でも……………ギルドの皆が……………」

「ケイタ達は仲間だろ？なら、自分の思ってること素直に言うんだ。あいつらは、優しい連中だ。サチが嫌だと言えば、無理強いはいしないさ」

そう言い、カイは立ち上がり、キリトの傍まで行く。

「それで何か言われた時は、俺とキリトも一緒になって謝ってやるよ。な、キリト」

「全く、お前って奴は……………でも、そうだな。一度、ケイタ達と話し合ってみたらどうだ？戦闘職じゃなくても、この世界で生き抜く方法は沢山あるんだ」

その後、サチを連れてカイとキリトはケイタ達の所に戻った。

「サチ！無事だったか！」

「良かった！何かあったんじゃないかって心配してたんだ！」

「どこかに行くなら、書き置きぐらい頼むぜ」

「でも、本当に良かった」

ケイタ達はサチが無事だったことに安堵し、喜んでいた。

「皆、サチから皆に言いたいことがあるんだ」

キリトはそう言っつて、サチに話をすることを進める。

「その……………あのね、私……………前衛したくないんだ」

サチの言葉に、ケイタ達は固まった。

「本当は、戦いもしたくない。死ぬのが……………怖い……………でも、皆《攻略組》を目指してるから、こんなこと言ったら、皆の気持ちに水を差すようで怖くて言えなくて……………だから、頑張ろうって思ってた

けど、やっぱり怖いの……………!」

振り絞る様にサチの口から言葉が出てくる。

いつの間にか、涙が零れ始め、涙声交じりに言う。

ケイタ達が無言になった。

数分の沈黙が続くと、ケイタが口を開いた。

「サチ……………すまなかった」

ケイタは頭を下げ、そう言った。

「俺たち……………いや、俺はサチが何も言わないのを良いことに、サチも同じ気持ちだなんて思って、勝手なこと言ってた。すまない!」

「ケイタだけの所為じゃねえよ!俺たちだって、一度もサチの気持ちを聞こうとしなかったんだ!俺らだって同罪だよ!」

「ごめん、サチ。お前がそんな気持ちだったなんて考えたこともなかった……………すまない!」

「それなのに、僕たちだけ目指せ《攻略組》なんて言って、盛り上がって……………本当にごめん!」

ダツカーとササマル、テツオの順に頭を下げる。

「皆……………」

「サチ、今までごめん。今日からは、サチのやりたいことをやってくれ」

ケイタは優しくサチにそう言う。

「……………私、生産職がやりたい」

サチがそう言った。

その言葉に、またしてもケイタ達は驚く。

「子供の頃から、何か作るってことしかかったんだけど私不器用だから諦めてたんだ。でも、やっぱり諦めきれなくて……………だから、この世界で何か作りたい……………」

サチが自分の本音を打ち明けた。

「いいじゃねえか!」

そう言ってダツカーが声を上げる。

「生産職とかスゲー楽しそうじゃん!」

「《月夜の黒猫団》ブランドとか立ち上げるのも面白そうだな!」

「サチが作って、僕らが材料集めとか！」

「おっ！いい役割分担だな！」

「ここら、お前ら落ち着けて！まずはサチが何を作るか話し合わないとー！」

ワイワイと騒ぎ出すケイタ達に、サチはぽかんとする。

「皆……いいの？」

「いいもなにも、サチがやりたいんだろ？なら、それをやろう」

「どうせなら、みんながやりたいことやるのが一番だしな！」

「ブランド立ち上げて、アインクラッド中を盛り上げるのも悪くないだろー！」

「《攻略組》のプレイヤーが僕らの作ったものを持っているとか考えると、ワクワクするよ！」

「皆……ごめん……ありがとう！」

その日の夜、宿屋の一室から明かりが消えることはなく、ずっと騒ぐ声が聞こえた。

それから一週間後。

カイとキリト、そして、《月夜の黒猫団》は転移門広場まで集まっていた。

「それじゃ、俺とキリトはもう行くな」

「皆、これから頑張ってくれ」

カイとキリトは今日、最前線へと戻り攻略を再開することになった。

ケイタ達はその見送りをしに来ている。

「キリト、カイ。いずれ僕たちはアインクラッドを騒がせるブランド

を立ち上げる。その時は、よろしく頼むよ」

「《攻略組》のプレイヤー達に宣伝よろしくな！」

「友達価格でお買い得にしてやるよ」

「その時が来たらお得意様になってくれな」

ケイタ、ダツカー、ササマル、テツオが二人に握手をして別れの挨拶をする。

「キリト、カイ。二人にこれ」

最後にサチが、そう言つて、二人にある物を差し出した。

「この間、取つたばかりの《装飾》スキルで作つたブローチ。まだスキル熟練度低くて、不格好な形だけど、私の初めての作品、二人に受け取つてほしいの」

サチの手には赤い宝石のブローチと、黒い宝石のブローチがあった。

荒削りの様なカットが目立つブローチだったが、カイとキリトは嬉しかった。

カイは黒い宝石のブローチを、キリトは赤い宝石のブローチを受け取り、それを装備画面のアクセサリーにセットする。

来ているコートの胸元に、ブローチが付けられる。

「どうだ？」

「似合つてるか？」

「ああ、よく似合つてる」

「初めての作品にしては上出来だな！」

「キリトの黒いコートに赤い宝石が映えるな」

「カイの赤いコートに黒い宝石も映えるね」

「もつと上手くなつたら、新しいのプレゼントするね」

「その時は、コルを払うよ」

「これでも十分な出来なのに、それ以上の物をタダで貰うのは申し訳ないからな」

「そう言い、全員が笑う。」

「じゃあな、皆！」

「また会おうな！」

「ありがとう、キリト、カイ！」

「お前たちとの1ヶ月楽しかったぞ！」

「いつでも遊びに来いよな！」

「待ってるよ！」

「キリト、カイ！ほんとうにありがとう！私、頑張るから！」

5人に見送られ、カイとキリトは目頭が熱くなるのを感じ、転移門を潜る。

「キリト、絶対クリアしないとな」

転移門を潜り、最前線に來るとカイはキリトの方を見ずに言う。

「ああ、そうだな……………」

キリトもカイの方を見ずにそう言う。

互いに、同時に鼻を啜り、笑い合う。

「よし、行こう！相棒！」

「ああ！」

二人は胸元のブローチを輝かせ、最前線へと繰り出した。

第15話 サボりで昼寝

2024年4月11日 第59層《ダナク》

現在、最前線となっているここでは日夜、多くの《攻略組》が迷宮区の攻略に勤しんでいる。

にも関わらず、カイとキリトのコンビは迷宮区には籠っていないかった。

かと言って、何かしらのクエストをやっているわけではない。

二人は、転移門広場に続く道の低い丘で、キリトは芝生に寝転がって昼寝をし、カイは近くの木陰でのんびりとSAO内で誰かが趣味で書いた小説を読んでいる。

「皆が頑張って攻略してる中、サボって何読んでるのよ、不良プレイヤー君」

頭上から声を掛けられ、上を見上げるとそこにはミトがいた。

「ミトか。アインクラッド内で売られてる小説だよ。誰が書いたか知らないけど結構面白くてな」

「ふーん、で、キリトは何してるの?」

今度は日向ぼっこしながら眠りこけているキリトを見る。

「キリト曰く、『今日の気象設定は一年の中で最高。こんな日に暗い迷宮区に潜ってたら勿体ない』だとき」

「なるほどね」

空を見上げて、ミトはそう言う。

「カイは寝ないの?」

「睡眠PKとかの危険もある以上、俺まで寝たらダメだろ」

《アンチクリミナルコード有効圏内》、通称《圏内》において、プレイヤーは他のプレイヤーにダメージを与えることは基本的にできない。

どんなにプレイヤーにソードスキルを叩き込もうとしてもシステムによって阻まれて終わる。

だが、デュエル中はダメージが通る。

それを利用して寝ている相手の指を動かして、《完全決着モード》のデュエルを受けさせ、鬨り殺しにする。

それが睡眠PK。

カイはその危険性を考え、自身は眠らずキリトの護衛をしていた。

「でも、眠そうよ」

「……分かるか？」

「そりゃカイのことだからね」

恥ずかしいセリフを臆面もなく言うミトに、カイは少し照れる。

ミトはそのままカイの隣に座る。

「私が見ててあげるから、カイも寝たら？」

「何度も言うけど俺なんかと居るとお前の立場がな」

「《攻略組》で1、2を争うダメージディーラーを睡眠PKから護衛する。それならある程度、面目が立つんじゃない？」

「……………はいはい、分かったよ」

とうとうカイは折れ、背後の木に凭れ掛かる。

「じゃ、お言葉に甘えさせてもらうな」

「はい、おやすみ」

「おやすみ」

そう言い、瞼を閉じるカイ。

そして、数秒後には静かに寝息を立て始めた。

「本当に疲れてるのね」

そう呟き、ミトはカイを見つめる。

「いつ、話してくれるんだろ……………」

ミトは少し悲しそうな表情をする。

第1層攻略後、カイはいつかミトに、居なくなった理由を話すと
言った。

だが、今日までその話が出てきたのはあの時だけだった。

「言い辛いことなんだろうけど……………やっぱ、私には言えない事なの
かな……………」

理由が何であれ、それを話してくれないという事実がミトは悲し
かった。

「む……………なんで私かもやまやしないといけないのよ」

自分の気も知らず、静かに寝入るカイに段々と腹が立ってきたミト

は、カイの頬を突つつく。

突つつく程度では、《アンチクリミナルコード》には引つ掛からないらしく、ミトの指はカイの頬に触れる。

「柔らかいわね……ただ単にデータの的にそう感じるだけ？それとも、実際の肌の質感までも再現してるのかしら？」

試しにミトは自分の頬を触り、カイの頬と比較してみる。

「ん〜……よく分からない」

イマイチ違いが分からず、ミトは頬を触るのを止める。

その時、カイが少し動いた。

(ヤバッ！起こしちゃったかな……！)

起こしてしまったのではと思い、ミトは慌てる。

その時、カイの身体が横に倒れ、偶然にもミトに寄り掛かる形になった。

「ちよっカイ!？」

ミトは驚き、カイに呼び掛けるもカイは寝息を立てたままだった。(つて寝てるのか。流石にこの体勢は言い逃れ出来なさそうだけど……ま、いつか)

ミトは、カイは疲れてるんだと納得し、何も言わず肩を貸した。

十分程、ミトは肩にカイの重みを感じながら、道行く《攻略組》を眺める。

そんなところに、一人のプレイヤーがやって来た。

「ミト、何してるの？」

声色から、不機嫌なのが取って分かる。

「やつほ、アスナ。見ての通り、サボリ」

「サボりって、ギルドの副団長がサボってどうするのよ!？」

「アスナだって副団長じゃない。それに、偶にはいいでしょ。根詰めて攻略したっていいことないんだし。それと、大きな声出さないで。カイが起きるから」

「カイ君？」

アスナは更に近くにより、ミトの隣を見る。

ミトに寄り掛かって眠るカイを見て、アスナは思わず溜息を吐く。

「ミトに続いてカイ君もサボりとか………《攻略組》のトッププレイヤーの一員としての自覚がないの？」

「そう言わないの。それに、サボってるのは私たちだけじゃないから。そう言い、ミトは寝転がってるキリトを指差す。

「あの人まで！」

キリトの姿に、アスナはあからさまに不機嫌になりキリトに近寄る。

アスナが近づいてきた事に気づき、キリトは目を覚ます。

「なんだ、アンタか。こんな所で何してるんだ？」

「アナタこそ、こんな所で何してるのよ？こんな所でサボって、少しは真面目に攻略に取り掛かったらどうなの！」

「今日のアイコンクラッドは、最高の季節に最高の気象設定。そんな日に、迷宮区に潜るなんて勿体ない」

「アナタね！こんなことしてる間にも、現実での私たちの時間はどんどん失われていくのよ！」

「それでも、今はここが俺たちにとつての現実だ。俺たちが生きてるのは、ここ《アイコンクラッド》だ」

キリトのそのセリフに、アスナは思わず黙る。

その時、風が吹き、アスナの頬を撫でる。

「ほら、良い風に、良い日差し。……最高だ」

「………天気なんて、いつも一緒でしょ」

「アンタも寝て見ればわかるよ」

その言葉を最後に、キリトは再び寝息を立てる。

(アスナの負けだねえ……)

木陰の隙間から差す日差しを眺めるアスナを見て、ミトはそう心の中で呟く。

そして、アスナはその場に横になり目を閉じた。

すると、ものの数分でアスナも眠った。

「お守りが増えた」

暢気に眠る三人を見て、ミトは笑った。

それから数時間後。

正午近くの時刻になったぐらいに、キリトは目を覚ました。

そして、近くで寝ているアスナに驚き、距離を取った。

「お目覚めね、キリト」

そんなキリトにミトは声を掛けた。

「目が覚めたら、隣に美少女がいるのはどんな気分？」

「ミト……何してるんだ？」

「敢えて言うなら、カイの枕中かしら？」

カイに寄り掛かれたまま、ミトは笑う。

そんなミトを横目に、キリトはアスナを見る。

「疲れてるん……だろうな」

「まあね。自分のレベル上げだけじゃなくて、他の団員のレベル上げの面倒も見てる。自分の寝る間も惜しんで深夜までレベリングよ。こっちもそれに付き合ってるから、軽く寝不足ね。そう言う訳だから、私も寝る。護衛はよろしくね」

そう言うと、ミトは欠伸を一つして、カイに寄り掛かって眠り出す。「やれやれ……まあ、起きるまで護衛してくれてたし、アスナにも寝たらどうだって言ったのは俺だしな」

キリトは長時間の護衛になると覚悟を決め、アイテムストレージから飲み物を取り出し、芝生に座り直す。

「くしゅんー!」

夕日が差し始めた頃、アスナは小さくしやみをして起きた。

「……うにゅ……」

そして、謎の言語を呟き、覚醒しきってない頭で辺りを見渡す。

最初に見たのは夕日だった。

次に見たのは、ミトとカイが互いに寄り掛かって眠る姿。

そして、低い石垣に座り、こちらをみるキリトだった。

「よお、よく眠れたか?」

キリトは寝起きのアスナにそう声を掛ける。

暫しの沈黙の後、アスナは今の現状に気づき、顔を羞恥で真っ赤に染め、そして苦慮に青ざめ、最終的に激怒で真っ赤になった。

その瞬間、腰の細剣に手を伸ばし、柄を握む。

「なっ!?」

その光景にキリトは驚き、石垣に隠れる。

だが、攻撃は飛んで来ず、キリトは石垣から顔を出す。

そこには、アスナがぎりぎり歯を食いしばっていた。

「……………一回」

「……………え?」

「ご飯、一回だけなんでも好きな物いくらでも奢る。それでチャラ。どう?」

アスナは、キリトが自分の、自分たちの傍を離れなかったのは睡眠PKによる殺害を防ぐ為の護衛をしていたと分かった。

更には日ごろの精神疲労を回復させるために、好きなだけ寝させていたことも。

だからこそ、寝起きの顔を見られたという羞恥と激怒を抑え込み、そう提案した。

「57層の主街区に、いいレストランがある。NPCの店にしてはそこそこイケるんだ」

「なら、そこに行きましょ」

夕食を摂る店が決まり、キリトは寝ているカイを起こす。

「ほら、カイ。起きろ」

「ん？もう夕方か？」

目が覚めたカイは、目を擦り、周りを見る。

そして、隣で眠るミトに気づいた。

「寄り掛かってたか。悪いことしたな」

そう思い、カイはミトを起こす。

「ミト、起きろ」

「んぐ……まだ眠い………」

寝足りないらしく、ミトは駄駄を捏ねる。

「今なら、アスナが夕飯奢ってくれるってさ」

「本当!？」

キリトの言葉に、ミトは勢いよく起きる。

「奢るのは彼だけ!」

アスナは大声でキリトを指差しそう言う。

そして、四人は57層へと向かった。

第16話 圈内PK

《血盟騎士団》の第一副団長《閃光》のアスナ。

そして、《血盟騎士団》の第二副団長《死線》のミト。

二人はとにかく有名だ

その有名具合は、ファンクラブが出来るほどだ。

だからこそ、迷宮区攻略を終え食事しに来た《攻略組》、夕食の為に下の層からやって来た《中層プレイヤー》は二人の姿を見かけると思わず立ち止まったり、振り返ったりする。

そして、そんな彼女たちの隣を歩く黒いコートを着た胡散臭いプレイヤー《黒の剣士》キリトと、赤いコートを着た同じく胡散臭いプレイヤー《紅蓮の剣豪》カイを見て、目を剥く。

明らかに目立っているこの状況にアスナは一刻も早く目的の店に向かいたいが、その店を知っているのはキリトとカイのみの為、おとなしく二人に着いて行く外ない。

一方でミトはと言うと、あまり気にしてないのか平然と隣にいるカイと世間話をしている。

ようやく辿り着いた店に入っても、店の中にいたプレイヤーからの視線が集まり、外では平然としていた流石のキリトも、気疲れを見せる。

にも関わらずカイとミトの二人はと言うと、どこ吹く風と言った具合にスルーしていた。

NPCのウエイトレスに案内され、四人は席に着き一息入れる。

「……………ありがとう」

注文を終え、運ばれてきたお冷を呑んでいると可聴域ギリギリのボリュウムでアスナがそう言った。

「護衛してくれて」

「あ、いや、まあどういたしまして」

普段、攻略会議であーだこーだと言いつているので、キリトは思わず囁んだ。

そんなキリトにアスナはくすりと笑う。

「あんなにたつぷり寝たの久々かも。最近では三時間ぐらいで目が覚めちゃうし」

「それって、アラームとかじゃなくて?」

「うん。……団員のレベリングの事とか、フィールドボスやフロアボスの偵察戦・攻略戦とか、攻略会議の進行とか色々あって寝たくても頭が寝ようとしなくて言うのかな。不安があって寝れないんだ」

「……そうなのか?」

カイはアスナたちに聞こえない様に、向かいの席にいるミトにこっそり尋ねる。

「そうみたい。はつきり言って、《血盟騎士団》で一番働いてるのはアスナよ。手伝うって言うのに、「これは私の仕事だから」って言って手伝わせてくれないし」

「ミトは平気そうだな。同じ副団長なのに」

「まあ、慣れれば簡単だし」

そう言うミトに、カイは流石だなっと思った。

「あー……なんだ……また外で昼寝したくなったら言えよ。護衛なら、いつでもしてやるから」

照れ臭そうに言うキリト。

「そうね。また今日みたいな日には、お願いしようかな」

そんなキリトに、アスナはまた笑いそう言った。

「……ま、大丈夫そうだな」

「みたいね」

そんなアスナを見て、カイとミトは少し安堵する。

そこで、NPCウエイトレスがサラダを運んでくる。

卓上に置かれたサラダボウルから謎の野菜たちを掴み、各々の皿に取り、仕上げに謎のスパイスを振り掛け、頬張る。

「思うんだが、栄養とか関係ないのになんで生野菜食べてるんだ?」

味のする謎の野菜を食していると、キリトはフォークに刺した野菜を見ながら言う。

「美味しいじゃない」

アスナはフォークに刺したレタスっぽい何かを上品に食べながら

言う。

「まずいとは言わないけど……マヨネーズが欲しい」

「あー、それは確かにね。私もサラダにはドレッシング掛けたいかも」

「そう言えば、SAOって調味料の種類が乏しいよな。色々あると食事の楽しみも増えるんだけどな」

「欲しいとなると、ソースとか……ケチャップとか……」

「あーあとはアレだな！醤油！」

「「それだ」」

キリトの発した醤油のワードに、カイ、ミト、アスナは同時にキリトを指差し同意した。

その光景が何故か面白く思え、四人は同時に吹き出した。

そして、そのまま笑い合う………と思われた。

「きゃあああああああ!!」

外から女性の悲鳴が聞こえた。

その瞬間、先程まで和み合っていた四人は、一瞬で険しい顔つきとなり席を立ち上がる。

そして、四の五の言わずレストランを飛び出した。

悲鳴が聞こえたと思われる広場に着くと、四人は信じ難い光景を目の当たりにした。

広場では何人ものプレイヤーが教会を見上げ、恐怖に慄いていた。

教会の二階中央の飾り窓から、フルプレート・アーマーを着込み、頭には大型のヘルメットを被った男性プレイヤーがロープに吊るされ

ていた。

しかし、プレイヤーたちが恐怖していたのは男が首を吊っていることにはない。

SAOではロープアイテムによる窒息はない。

プレイヤーたちが恐怖しているのは、その男の胸に刺さった短槍ショートスピアだった。

《圈内》ではデュエル以外にHPを減らす方法はない。

故に《圈内》ではHPが全損し、死ぬことはないし、そもそも《圈内》ではどんな攻撃もシステムによって阻まれる。

にも関わらず、その男の胸には短槍ショートスピアが刺さっており、そこから赤いエフェクトが噴き出る血の様に明滅を繰り返す。

そのことから、短槍ショートスピアには刺さったまま相手にダメージを与え続ける《貫通継続ダメージ》効果があると分かり、その男のHPは今も尚、減っていることが分かる。

「何してる！早く抜け！」

キリトがそう言うも、筋力値が足りないのか、恐怖で力が入らないのか、短槍ショートスピアが抜ける気配はなかった。

「ミト！アスナ！教会へ行ってくれ！もしPKなら、犯人はまだそこに居るはずだ！」

カイはミトとアスナにそう言う。

最初の悲鳴が聞こえてから、まだそれほど時間は経っていない。

もし、これがPKなら今、教会に向かえば犯人と鉢合わうことになると考え、カイは二人に教会へ行くように言った。

「分かったわ！」

「こつちよ、ミト！」

二人はすぐに教会の中に入る。

「キリト！俺が縄を斬る！下で受け止めてくれ！受け止めたら、回復を！」

「了解！」

カイが走り出すと同時に、キリトは回復結晶を手に取り出す。

カイは、筋力値と敏捷値に物を言わせたシステム外スキル《壁走りウォールラン》

を使い、教会の壁を昇る。

腰の刀に手を伸ばし、男を吊るしている縄を斬ろうとする。

「……………っ!!」

その瞬間、男の目が、強く見開く。

そして、教会の鐘が鳴り、男は何かを呟いた。

それと同時に、無数のガラスが砕け散るような音とポリゴンの欠片たちが爆散した。

カイは刀を抜かないまま、そのまま地面に降り立った。

「……………間に合わなかった……………俺は……………また間に合わなかったのか……………!」

誰にも聞こえない様な震える声で、カイはそう呟いた。

その呟きは、誰にも聞こえなかった。

第17話 事件捜査

カイはフルプレート・アーマーのプレイヤーを助けられなかったことに歯ぎしりする。

拳を握り、怒りを露わにしていた。

だが、カイはすぐに気持ちを切り替え、辺りを見渡す。

もし、男の死の原因がデュエルによるPKなら、近くに《デュエル勝利宣言メッセージ》が現れる。

それを見つけることが出来れば、PKしたプレイヤーを見つけることができる。

だが、《デュエル勝利宣言メッセージ》は現れてから、30秒で消滅するため30秒以内に探さないといけなかった。

「皆！デュエルのウィナー表示を探してくれ！」

近くにいたキリトは大声でそう叫び、周りのプレイヤーもその意図を察し、辺りを見渡す。

だが、誰からも発見の音が上がらなかった。

「建物の中には誰もいないわ！今、ミトが他の場所も探してる！」

「アスナ！ウィナー表示はあるか!？」

二階に到着したアスナがそう言い、キリトはアスナにウィナー表示の有無を聞く。

アスナは辺りを見渡すも首を横に振る。

「ダメ！ウィナー表示もシステムウィンドウもない！」

「……なんでだ……」

その後、30秒が経過し、キリトは周りのプレイヤーたちにその場を動かないように指示し、教会へと入る。

カイがその場に残り、見張りをする。

「カイ……」

見張りをしていると、ミトが教会の中から出てくる。

「ミト……他の部屋はどうだった？」

カイの質問に、ミトは首を横に振って答える。

「念の為、《索敵》スキルで隈なく探したけど、誰もいなかった。いたのは、NPCのシスターと神父だけ」

「NPCじゃ事情聴取も無理か……くそっ！」

カイは苛立ち、寄り掛かっていた壁を殴る。

そこで、キリトとアスナも教会から出てくる。

「ミト、カイ君。私とキリト君は、この事件が解決するまで迷宮区の攻略は一旦止めるわ」

「もし圏内でのPKが可能なら、放って置くのは危険過ぎる。方法を調べて対策を取らないと」

「なるほどね。分かった、私も協力するわ」

「俺もだ。《圏内PK》なんて……放って置けるかよ」

「……カイ。大丈夫か？」

「何がだ？安心しろ、俺は……大丈夫だ」

「……そうか。ならいいんだ」

キリトはそう言うと、広場に残っているプレイヤーの方を見る。

「すまない、さっきの一件を最初から見てた人、いたら話を聞かせてほしいー」

キリトがそう呼び掛けると、一人の女性プレイヤーが怯えながら前に出た。

そんな女性に、アスナが優しく声を掛ける。

「ごめんね、怖い思いしたばかりなのに。あなた、お名前は？」

「あ……あの、私、《ヨルコ》っていいいます」

「もしかして、最初の悲鳴は君か？」

キリトがそう尋ねると、ヨルコは頷く。

「は、はい……………私、さつき、殺された人と……………一緒にいたんです。彼の名前は《カインズ》。昔、同じギルドに所属していて、今でも結構仲がよくて、今日も晩ご飯と一緒に食べるはずだったんですけど、見失っちゃって……………。それで、辺りを見渡してたら、この窓からカインズが落ちてきて、宙吊りに……………。しかも、胸に槍が刺さって……………！」

「そのとき、誰かを見なかった？」

「……………一瞬でしたけど、後ろに誰か……………いたような気が、しました……………」

「その人影に、見覚えは？」

ヨルコは首を横に振る。

「その、嫌なことを聞くようだけど……………心当たりはあるかな……………？ 彼が、誰かに狙われる理由に……………」

キリトのその問いにも、ヨルコは首を横に振った。

「そうか、ごめん」

そこで、事情聴取を終わりにし、「一人で下層に戻るのが怖い」と言うヨルコを宿屋まで送り届けた後、カイ達は現場に戻った。

現場には攻略組を主なメンツとした、二十人弱が残っており、一連の出来事を細かく伝えた。

これが未知のPKの可能性があると言うことも伝えた。

「そんな訳だから当面は十分警戒してくれ。それと、この情報を中層・下層のプレイヤーたちにも広めて、警告してほしい」

「分かった。情報に関しては情報屋のペーパーに載せてもらう様に手配する」

現段階でできることをし、その場は解散となった。

「さて……………次はどうする？」

「手持ちの情報を当たるべきだと思っわ」

ミトの意見に、全員が頷く。

「今、俺たちの手元にある情報は、このロープとスピアの二つだけ」
「調べるとなると《鑑定》スキルがいるな。俺とカイはそんなスキル

取ってないし……アスナとミトは？」

「上げてないわ」

「同じく」

「なら、知り合いに誰かいないか？」

「友達で、武器屋の子がいるけど、今の時間は忙しいからすぐには無理かも……」

「なら、エギルに頼むか」

「そう言い、キリトはボス戦の際にはカイ共々パーティーに入れてもらってる斧使いの戦士にして、商人でもあるエギルに鑑定を頼もうとする。」

「キリト、今の時間は商人も忙しい時間だろ。頼むなら、アイツがいい」

「えー、アイツう？俺、アイツ苦手なだけど……」

「ぐだぐだ言うな」

カイはそう言い、メッセージウインドウを開き、メッセージを送る。

「えつと……構わないってよ」

「なら、俺はパスだ。あいつの所に行くと、武器見せろだの、俺が鍛えなおすだの言ってくるし、下手したら無理やり愛剣をインゴットにしようだし」

「じゃ、代わりに《黒鉄宮》まで行って、カインズの死亡日と原因、時間の確認頼む」

「あいよ」

キリトから証拠品のスピアとロープを預かり、カイはそれをストレージ内に仕舞う。

「ミトとアスナはキリトと一緒に《黒鉄宮》に行ってくれ。最近、1層を拠点にしてる《ALF》の連中の行動が常軌を逸してるって噂があるしな。こんな時間にキリト一人歩かせたら、カツアゲでもされそうだし」

「悪かったな。万年不審者みたいな黒服着てて。じゃあ、俺たちは《黒鉄宮》に行こう」

「そう言うときリトはアスナとミトに呼び掛ける。」

「待つて」

それに、ミトが待つたを掛けた。

「私はカイと行くわ」

「え? どうして?」

「分からないの? 今のアナタ、事件の証拠品を持ち歩いてる。犯人に襲われる可能性があるのよ。それに、圈内PKのやり方も不明な今、一人で行動させれない」

「……………確かに。なら、ミトは俺と一緒に来てくれ」

「じゃあ、キリト。アスナをよろしく」

「ああ。ミト……………カイをよろしくな」

キリトとアスナを見送り、カイとミトもカイの知り合いの所へと移動する。

(カイ……………どうしたんだろう……………なんか、凄い怒ってる……………)

ミトがカイに着いて行くと言ったのは、先ほど言った理由もあるがそれは半分程度。

残りはカイが心配だったからだ。

(隠してるけど言葉の端端にPKに対する……………と言うより殺人に対する怒りがある……………)

ミトの予想は当たっており、キリトもそれには感づいていたからこそミトにカイを任せた。

「ミト、着いたぞ」

「え?」

考え事をしていた所為で目的地に着いたことに気づかず、ミトは辺りを見渡す。

そこは48層の主街区からかなりはなれた場所にある森の中で、ここには日本家屋の様な一軒家がポツンとあった。

「こんな所に、人がいるの?」

「ああ。ちよつと変わり者の………と言うより変人な鍛冶師だけど、腕はいいからさ」

「変人とは随分とご挨拶じゃねえか、カイ」

すると、扉が開き中から着物を着た男が現れた。

「キリトの野郎と一緒にと思えば、《死線》の副団長様と同伴とはな。それで、何の用だ?」

男の名は ``トバル``

48層の主街区《リンダース》の郊外の森の中に住む、カイ曰く最高クラスの鍛冶職人だ。

第18話 罪のイバラ

「それで、こんな時間に《死線》の副団長様と何してるんだ？デートか？」

「デートでこんな場所に来る奴がいるかよ」

カイはアイテムストレージからロープとスピアを取り出す。

「コイツは？」

「とある事件の証拠品だ。コイツの鑑定をお前に頼みたいんだ」

「……………詳しく聞かせろ」

トバルは鋭い目つきになり、カイに事情を尋ねる。

カイは、起きた事の全てを話した。

「圏内でHPが0に……………本当にデュエルじゃなかったのか？」

「少なくとも俺たちはそう思ってる。ウィナー表示が見えなかったし、何より飯を食いに来ただけでデュエルを、それも《完全決着モード》を受諾するなんてありえないだろ」

「確かにな。いいだろう」

そう言い、トバルはロープを手取る。

「……………こりやただの汎用品だな。そこらのNPCショップで普通に買える物だ。ランクも高くないし、耐久値は半分を切ってる」

「そりや、フルプレート・アーマーのプレイヤーを吊るしてたんだからそれぐらいは減るだろうさ。ま、そっちには期待はしてない。本命は……………コツチだ」

カイはそう言い、カインズの胸に刺さっていたスピアを見る。

トバルは、暫しの沈黙の後スピアを手に取り、鑑定をする。

「こりや……………プレイヤーメイドだ」

その言葉に、カイとミトは驚きの声を上げた。

「本当か!？」

「誰が作ったの!？」

「製作者は《グリムロック》綴りは《Grimlock》だ」

「トバル、知ってる奴か？」

「いや、それなりに売れてる奴なら記憶にあるが、コイツは知らない。」

一線級の鍛冶師じゃないのは確かだ。ま、自分の為や、身内の為にスキルを上げてるって奴もいるしこのグリムロックって奴もそう言った類の奴だろう」

そう言いトバルはスピアをカイに返す。

「でも、名前が分かっただけでも一歩前進ね。このクラスの武器を作るのに、ソロで鍛冶スキルを上げるのは限界がある。中層で聞き込みをすれば、パーティーを組んだことのある人はいるかもしれない」

「しかし、ソイツがどういう人物にしろ……少なくとも、ソイツはその武器がどういう用途で使われるのかは知ってたはずだ。知らないきや、《貫通継続ダメージ》効果付きの武器なんて作りやしねえからな」

トバルの言う通り、普通の鍛冶師ならどれだけのコルを積まれて、頼まれても《貫通継続ダメージ》効果付きの武器は作らない。

何故なら、アインクラッド内のモンスターには意味がないからだ。

Mobはアルゴリズムによって動くので、恐怖を感じない。

《貫通継続ダメージ》効果付きの武器で刺しても、刺した次の瞬間には武器を引っこ抜き、そのままどこかに放り捨てる。

故に《貫通継続ダメージ》が意味あるのは、対人戦だ。

対人使用が目的で武器を作るとなれば、その理由は十中八九PKの可能性が高い。

「殺しに対する倫理観が薄いのか、それともグリムロック自身殺人ギルドに所属する鍛冶師なのか……どちらにしろ、一筋縄でいかないのは確かだな」

「そうね。接触の際には、細心の注意を払わないと」

カイとミトは互いに頷き合い、再びトバルを見る。

「トバル、ついでに武器の固有名も教えてもらえるか？」

「槍の名前は《ギルティソーン》………意味的には罪のイバラってところだな」

「罪のイバラ………か」

鑑定を終えた槍《ギルティソーン》を手にカイは暫く何かを考える。

そして、何を思ったのか《ギルティソーン》を逆手で持ち、そのま

ま自身の手の平に向け刺そうとした。

「何してるのよー」

だが、手に刺さる直前にミトがカイの腕を掴んだおかげで、槍はカイに刺さらずに済んだ。

「この武器に圈内でもダメージを与える効果があるかもしれないだろ。それを試そうとしたんだ」

「それはねえ。俺の《鑑定》スキルで調べたんだ。間違いねえ」

「隠されてるかもしれないだろ」

「もし本当にそんな効果があつたらどうするのよーそれに、《アンチクリミナルコード》の無力化だけならまだしも、《即死》とかの効果まであつたら………」

ミトは今にも泣きだしそうな表情でカイにそう言う。

「………分かったよ。すまなかつた」

ミトの表情を見てカイは謝り、大人しくスピアをストレージに戻し立ち上がる。

「助かった、トバル。これは礼だ」

「ああ」

スピアの鑑定が終わり、カイはトバルにいくらかのコルを支払う。

「そうだ。副団長さんよ、ちよつと話いいか？」

トバルはミトを呼び止め、ミトは呼び止められたことを疑問に思うも、カイに外で待つように言った。

「それで、私に何か用？」

「いや、大したことじゃねえさ。その………」

トバルは少し悩んだように頭を掻き、そして、溜息を吐く。

「………今のカイの奴は危ない。普段のアイツは、咄嗟に今自分が何をすべきなのか、どんな行動が最善なのか瞬時に判断できる奴だ。だが、今日のアイツは、何処か焦ってる様に見える」

トバルはカイのことを、案じてそう言う。

「今のアイツは、一人にすると何処かに行っちまいそうだ。アイツの友人として、アイツの刀を打った者としてそれは見過ごせねえ。かと言って、俺も自分の仕事がある。四六時中、アイツを見張るなんて真

似もできねえ。だから、これは俺からの依頼と想ってくれていい」

「そう言い、トバルはミトに頭を下げた。」

「頼む。アイツの傍に居てやってくれ」

トバルが真剣に友人であるカイの事を想つての頼みに、ミトは優しい笑みを浮かべた。

「依頼なんて必要ないわ。私はね、カイが大切なもの。一度離れ離れになったからこそ、カイの傍から離れるつもりはない。頼まれなかったって、アイツの手を離したりしないわよ」

「そうか……それなら安心だな」

トバルも安堵の笑みを浮かべる。

「それにしても、カイの彼女が《血盟騎士団》の第二副団長様とは驚いたぜ。ま、アンタなら信頼できそうだ。カイの事、頼んだぜ」

「ええ、勿r……ん？」

「勿論」と返事しそうになったミトは、今のトバルの言葉に気になる場所があるのに気づいた。

（この人、今、私の事なんて言った？カイの彼女？誰が？ああ、私か）
そして、数秒の沈黙。

「はああああああああ!!」

ミトはその日一番の大声を上げた。

「誰が彼女よ!」

「え?違うのか?」

「当たり前でしょ!」

ミトは思わず顔が赤くなり否定した。

「そうだったのか。カイがあああの槍で自分を刺そうとした時、凄く心配してたから俺はてっきりそう言う関係だとばかり……」

「違うわよ!私とカイはまだそう言う関係じゃない!変に勘繰らないで!」

顔だけでなく耳まで真っ赤になったミトは、足音を立てながら扉に手を掛ける。

「とにかく!《鑑定》の件は助かったわ!協力ありがとう!」

「そう言い、ミトは家を出る。」

「やれやれ、凄いお嬢さんだったな。でも………まだか。いずれはそう言う関係につてか」

トバルは去って言ったミトを先程の顔を思い浮かべ、ニヤツと笑った。

「ミト、遅かったな。何の話だったんだって大丈夫か？顔が赤いぞ？」
「いいから、何も言わずにそっとして」

トバルの家から顔を真っ赤にして出てきたミトに、カイは不審に思いながらも「そつか」と言う。

「それより、キリトから連絡が来た。《黒鉄宮》での確認は終わったぞうだ」

「……どうだった？」

ミトはその報告に、瞬時に気持ちを切り替え尋ねる。

「カインズは本当に死んだ。死亡日、死亡時間、死亡原因。すべてが一致だ」

「じゃあ、本当に………」

「ああ。あの時、カインズは俺たちの目の前で死んだ。誰が、どんな方法で、やったのかはまだだが絶対に許さない」

拳を握り、怒りを露わにするカイにミトは先程のトバルの言葉なんかも忘れ、カイを心配する。

「グリムロックの方の確認も取れた。グリムロックは生きてる。今日は遅いし探すのは明日にしよう」

「……………そうね」

「キリトから明日は朝9時に57層の転移門前に集合って来た。そこで、互いの得た情報を整理して、ヨルコさんに調査の報告。それから、捜査の再開だ」

「分かったわ」

二人は転移門広場まで向かうと、突如二人は数人のプレイヤーに取り囲まれた。

カイとミトは咄嗟に武器に手を掛けるも、そのプレイヤーたちの服装を見て、すぐに手を離れた。

「《聖竜連合》がこんな夜中に何の用だ？」

《聖竜連合》とは、《血盟騎士団》と肩を並べる攻略組の大ギルドで、元々は《ドラゴンナイト・ブリゲード》と言う、ディアベルの元仲間のリンドが立ち上げたギルドが巨大化したギルドだ。

「聞きたいことがある」

リーダー格と思しきプレイヤーが一步前に出て、カイに言う。

そのプレイヤーにカイは見覚えがあった。

そのプレイヤーの名前は《シユミット》。

《聖竜連合》の守^{デイフェンダー} 備隊のリーダーで、ボス攻略戦では何度か顔を合わせたことがある。

「話を聞きに来ただけにしては物々しいな。それで……………何が聞きたい？」

「今日の夕方、57層で起きた事件の事だ。デュエルじゃなかったのは本当か？」

シユミットは、僅かに声を震わせ聞いてくる。

「ああ、少なくともあの場にいた人たちでウイナー表示を見た人はいなかった」

「殺されたプレイヤーの名前は……………《カインズ》だと言うのは間違いないか？」

「ええ。事件の直前まで一緒にいた友人からの確認も取れてる。アス

ナとキリトの二人が《黒鉄宮》まで行って確認もした。日付も時間も、原因も一致してたわ」

シュミットは表情を強張らさせ、喉をゴクリと鳴らす。

その様子から、二人が知り合いだったのではとカイとミトは思った。

「カインズとは知り合いだったのか？」

「……アンタには関係ないだろ」

「おいおい、そっちの質問には答えたのに、こっちの質問に答えないのは流石にフェアじゃないだろ？知り合いがどうかぐらい教えてくれたって「アンタらには関係ないだろ！警察でもないのに、どうしてそんなこと話さないといけない！」

突如、大声を出したシュミットに周りのギルドメンバーも驚きの表情を浮かべる。

（なるほど……この行動は《聖竜連合》からの指示じゃなくて、シュミット個人の行動か。周りは、詳しい話もされず、連れてこられたって所か）

そう思っていると、シュミットはカイの前に立ち右手を差し出す。

「アンタがPKに使われたとされる武器を、現場から持ち出したことは分かってる。そいつを渡してもらおう」

「ちよつと何言ってるのよ！」

シュミットの横暴とも言えるマナー違反行為にミトが声を上げる。

「あの槍は人を殺したかもしれない武器なのよ！それをよこせて何を考えてるの！第一、システム上は、もう既にあの武器はカイの物！それをタダでよこせなんて、罷り通るとでも思ってるの！」

「いっよ、ミト」

怒鳴るミトの肩に触れ制すると、カイはシュミットの方を見る。

「どうせ、もう調べ終わった物だ。それに、俺は警察でも何でもないからな。事件の証拠品を持っておくのも筋違いだったのは思ってる。なら、アインクラッドきつての大ギルドの隊長格のあんたが持つておくのがいいだろうさ」

そう言い、アイテムストレージから《ギルティソーン》を取り出す。

禍々しいデザインの槍を取り出し、それを勢いよく地面に突き立てる様に出す。

ギャリイン！と勢いよく金属音が鳴り、火花が散る。

その光景にシュミットは半歩下がる。

カイはそのまま槍の持ち手をシュミットへと向ける。

「ついでに教えてやるよ。この槍の名前は《ギルティソーン》、罪のイバラだ。そして、作った鍛冶師の名は……………《グリムロック》」

シュミットは、今度は明確に動揺した。

目を見開き、口を半開きにして噎れた喘ぎ声を漏らす。

そして、震える手で槍を受け取ると、乱暴にアイテムストレージへと押し込んだ。

「あまりコソコソと嗅ぎまわらない事だな。行くぞ！」

シュミットは足早に転移門へと向かい、ギルド本部へと帰って行く。

周りの部下と思しきプレイヤーたちも転移門から帰って行く。

「カイ、今のシュミットの様子……………」

「ああ。カインズとグリムロック、この二人をシュミットは知ってる。少なくとも、事件に何かしらの形で関与してるのは間違いないだろうな」

第19話 黄金林檎

翌日の23日。

カイとキリトは朝9時に57層の転移門前に行くと、既にミトとアスナの二人が待っていた。

二人は私用の為か、《血盟騎士団》の制服ではなく私服を着ており、その姿にカイもキリトも思わず見惚れた。

アスナは、ピンクとグレーのストライプ柄のシャツに黒のレザーベストを着て、下はレースのフリルの付いた黒のミニスカート、脚にはグレータイツで、靴はピンクのエナメルに、同色のベレー帽を被っていた

そして、ミトは白のシャツに紺色のレザーベスト、下はベージュのショートパンツに濃い黒のタイツに、白のレースアップブーツを履いている。

そんな二人に見惚れていると、カイとキリトは互いの服を確認する。

キリトは紺色のジーンズに黒のシャツ、そして、お気に入りのダークグレーのレザーコート。

カイはキリトと同じ紺色のジーンズに白のシャツ、そしてお気に入りのファイアレッドのレザーコート。

「なあ、カイ。俺たち今から、あの美少女たちと一緒に行動するの？」

「こんなことなら、日ごろからもうちよつと私服に気を使うべきだったな」

そんなことを話しながら、せめてものお洒落としてキリトは赤い宝石のブローチを、カイは黒い宝石のブローチをコートの胸元に付ける。

合流した後、近くのカフェテラスで朝食兼情報整理を行うことになった。

「《聖竜連合》が？」

カイとミトは、昨夜の《聖竜連合》との一件について、話をした。

「ああ、^{ディフェンダー}守 備隊の隊長《シユミット》って奴だ。死亡したカインズと、槍の製作者のグリムロック。この二人の名前に、酷く動揺してた」
「槍を受け取る時も、酷く怯えてたわね。いかにも、自分何か知ってますよアピールしてたわ」

カイとミトは注文したコーヒを飲みつつ言う。

「そのシユミットさんが犯人ってセンはないの？」

アスナがカフェオレを飲みつつ聞いてくる。

「いや、それはないだろ」

キリトもコーヒを啜って言う。

「もしシユミットが犯人なら、態々凶器を回収に来る理由はない。足が付くことを恐れてたとしても、それなら最初から現場に凶器を残すような真似はしない。むしろあの槍はメッセージだ」

「俺もそう思う。槍の名前が《ギルティソーン》、罪のイバラって辺り、犯人からのメッセージなんだろう」

「そうね。今思えば、カインズの殺し方も処刑染みてたわ」

「じゃあ、この事件はただのPKじゃなくて、何者かによるカインズさんへの復讐……ううん、制裁ってことだね。過去に、カインズさんは何か罪を犯して、それに対する罰として何者かに殺された」

「そうなるよ、昨夜のシユミットの様子は犯人側と言うより狙われる側の反応ね。過去にカインズとシユミットは何かしらの犯罪を犯し、その制裁としてカインズが殺された」

「現場に残された槍も、残ったシユミットへのメッセージ。さしずめ、

《次はお前だ》って所か」

一通りの情報整理を終え、四人はヨルコの元へ向かう。

宿屋から出てきたヨルコはあまり眠れなかったらしく、疲労しているのが目に見えて分かった。

「ごめんなさい、お友達が亡くなったばかりなのに……」

「いえ、大丈夫ですから……」

アスナが言葉と共に一礼し、ミトも一礼する。

それに倣ってカイとキリトも一礼した。

その時、アスナとミトの二人を見たヨルコの眼が外見の年齢に相応しい輝きを持った。

「うわあ、アスナさんとミトさんすごいですね。その服全部、アシュレイさんのオーダーメイド品じゃないですか」

「アシュレイ？」

「誰だ？」

お洒落に無頓着の二人は思わずそう尋ねた。

「知らないんですか!? アイソクラッドで最初に《裁縫》スキルを完全習得した人で、カリスマお針子として有名なんです! しかも、最高級素材持参じゃないと作ってもらえないってことでも有名で中々作ってもらえないんですよ!」

年相応のはしやぎ方をするヨルコに、四人は少しだけは気が紛れてよかったと思った。

すると、今度はカイとキリトの服装、正確にはコートに注目した。「カイさんとキリトさんのそのコートって、もしかして《黒猫ブランド》の奴じゃないですか?」

《黒猫ブランド》のワードに、カイとキリトは反応し思わず笑みが零れた。

「ああ、その通りだ」

「《黒猫ブランド》も有名になったな」

《黒猫ブランド》とは、中層ギルド《月夜の黒猫団》が立ち上げたブランドで、現在アイソクラッドでは若い人を中心に人気を集めている。

制作係のサチは、《装飾》スキル以外に《裁縫》スキルも習得し、現在はメキメキと腕を上げている。

作られた服やコート、アクセサリーには黒猫のマークが施され《黒猫ブランド》と呼ばれている。

「実は《月夜の黒猫団》とは知り合いです」

「試作品の服とかアクセサリーとか格安で譲って貰ってるんだ」

「そうなんですか。あれ？そのコート、作りが他の物と違う様な……」

「実はこのコート、俺達のためにつけて作ってくれたオーダーメイドなんだ」

「ま、お気に入り一品だな」

まるで我が事のように誇るカイとキリトの姿に、ミトとアスナは優しい笑みを浮かべる。

ちなみに、カイとキリトにとって今着てるレザーコートはお気に入りだが、一番のお気に入りにはサチの最初の作品のブローチだったりする。

ヨルコの気分が少し晴れた後、五人は昨夜のレストランまで移動し、調査の報告をした。

「まず報告だけど、カインズは死んだ。死亡日に死亡時間、それと死亡原因。全てが一致してた」

「……………そうですか。すみません、あんな遠い場所まで確認しに行ってもらって。一人で確認するのが怖くて……………」

ヨルコは悲しそうに下を俯いて、お礼を言う。

「それで、早速で悪いんだが、ヨルコさん。《シユミット》と《グリムロック》。この二人の名前に聞き覚えはないか？」

「《シユミット》は槍使いで、《グリムロック》は恐らく鍛冶師だと思うんだけど」

「……………知ってます。二人共、私が前に所属してたギルドの仲間です」ヨルコのその言葉に、四人はやはりそうかと思った。

「ヨルコさん、俺たちは今回の事件は《復讐》あるいは《制裁》によるものだと思うてる。そして、事件が起きたのはそのギルドで起きた何

かしらの問題だとも思ってる。昨日も聞いたけど、よく思い出してほしい。何か、心当たりはないか？」

「……………」つあります。すみません、昨日お話出来なくて。あまり思い出したくない事だったし、無関係だと思いたかったので……………」
でも、お話しします」

そこからヨルコは、ギルドで起きた事件の話をはじめた。

ヨルコとカインズ、そしてシユミット、グリムロックが所属していたギルドの名は《黄金林檎》。

ゲーム攻略を目的としたギルドではなく、この世界で生きることを目的とした小さなギルドだ。

人数も八人で、互いに協力しないながら一日一日を生きていた。

リーダーの名は《グリセルダ》。

とても強く、賢く、美人な女性だったとヨルコは語った。

半年前、《黄金林檎》は中層にあるサブダンジョンで見たことないモンスターと遭遇し、それを倒したらある指輪をドロップした。

その指輪は一見地味な物だが、装備したプレイヤーの敏捷値を20も上げるレアアイテムで、現在の最前線でもドロップすることはない代物だった。

その指輪がギルドの崩壊の原因となった。

最初、ギルド内でドロップしたそのレアアイテムの指輪をどうするかで揉めた。

ギルドの為に使うか、売却して得たコルを皆で分配するか。

喧嘩に近い話し合いの末、多数決を行い、結果は3対5で指輪は売却することになった。

そして、リーダーのグリセルダが、最前線の競売屋に委託するため最前線の主街区へと向かい一泊の予定で出掛けた。

だが、グリセルダは帰って来ず、嫌な予感がしたメンバーは黒鉄宮まで確認に行き、グリセルダの死亡を知った。

「死亡時刻はグリセルダさんが指輪をもって最前線の層に上がった日の夜中、1時過ぎでした。死亡原因は……………《貫通継続ダメージ》」

「そんなレアアイテムをもって《圏外》に出るとは考えにく……………《睡

眠PK』か」

「半年前なら、手口も広まる前だし、街の公共スペースパブリックで野宿するプレイヤーもいた頃だわ」

「偶然……じゃないな。グリセルダさんが狙われたのは、指輪を持っていたから。そして、その事を知っていたのは……」

「はい、私たち7人のみです。でも、グリセルダさんが殺された時刻、誰が何をしていたのか調べませんでした。仲間を……疑いたくなくなかったから……でも、結局みんな疑心暗鬼になって。ギルドはそのまま崩壊しました」

ヨルコの話に、四人は何も言えずにいた。

だが、事件の真相を確かめるにはどうしても聞かねばならないので、キリトが思い切って尋ねた。

「ヨルコさん、辛いことを何度も話してもらう様で済まないんだが、教えてほしい。指輪の売却に反対した三人、それは誰だ？」

「カインズとシュミット、それから……私です。反対した理由は二人とは違いましたけど」

「その理由、聞いてもいいか？」

「カインズとシュミットは前衛として自分で使いたいという気持ちがあったからです。私は当時、カインズと付き合っていて、彼の気持ちを優先したんです」

「そうか……それじゃあ、辛かっただろうな」

カイがふとそんな言葉を漏らした。

「いえ、カインズとはギルドが解散してから、関係は自然消滅したんです。一緒にいると、事件のことを思い出しちゃいますし。偶にあって、近況報告を少しするぐらいで、昨日も本当にご飯だけのつもりで……」

「例えそうだとしても、ギルドに居た頃、カインズとアンタが愛し合っていたのは事実だ。シヨックなのは変わらないはずだ」

カイは悲しそうな表情を浮かべ、俯く。

その様子に、ミトだけでなくキリトとアスナも、そしてヨルコも不思議そうにする。

「続けて辛いことを聞くようだが、グリムロックはどういう人なんだ？」

「グリムロックさんは、ギルドのサブリーダーでグリセルダさんの旦那さんでした。いつもニコニコしていて、優しい鍛冶師だったんです。でも、グリセルダさんが殺されてから、荒んでしまつて……ギルド解散後からは誰とも連絡を取ってないんです」

「そうか……何度も質問してすまない。でも、最後に一つ答えてくれ。カインズを殺したあの槍はグリムロックが作った物だった。まだ断定はできないが、グリムロックがカインズを殺す、その可能性はあると思うか？」

その質問は、カインズがグリセルダ殺しの犯人だと言つてるのも同じだった。

ヨルコは長い沈黙をし、そして頷いた。

「その可能性があるとしたら、グリムロックさんは指輪の売却に反対した私たち三人を殺すつもりなのかもしれない……」

そこで、ヨルコへの事情聴取を終え、四人はヨルコを宿屋へと送り、カフェテリアに集まり、話し合いをすることにした。

「それにしても、ミトもお洒落とかするんだな」

カフェテリアへの移動中、カイは隣のミトにそう言った。

「なにそれ？私にお洒落は似合わないって言う遠回しな嫌味？」

「違うよ。なんて言うか。ミトってそう言うのにあまり興味なさそうな気がしてさ」

「まあ、実際そうなんだけど。アスナが折角だから一緒に作つてもらおうって言うからさ」

そう言つてミトは困つた様な笑みを浮かべる。

「なるほどね」

カイは納得し、ミトの服装をじっくりと見る。

「……ちよつと、見過ぎなんだけど」

「あ、悪い」

「……その、どうかかな？」

「え？」

「だから……この服、似合ってる?」

ミトは恥ずかしそうにカイにそう尋ねた。

「そうだな。本当なら、朝の時に言うべきだったな」

カイは申し訳なさそうに頭を掻きながら、ミトを見る。

「ああ、凄く似合ってるぞ」

「………そっか」

カイの言葉にミトは機嫌を良くし、思わず鼻歌を歌う。

「えっと………その、よく、似合ってますよ、それ」

「うー!そーゆーのはね!最初にあつた時に言いなさい!」

なお、カイとミトのやり取りを見ていたキリトは、アスナの服装を褒めるも不機嫌となったアスナに怒鳴られていた。

「それで、これからどうする?」

カフエテリアに着くと、アスナがそう切り出し、キリトが考えを話した。

「取り敢えず、三つの選択肢があるな。一つはグリムロックを探してあの槍を作った理由、あるいは依頼したのは誰かを聞く。二つ目は残りの《黄金林檎》のメンバーに接触してヨルコさんの話の裏付けを取る。最後はカインズ殺害の手口の検証だ」

「なら、一つ目は無理だな。俺たち四人でグリムロックを探すのは効率が悪いし、もしグリムロックが犯人なら何処かに隠れてるだろう」
「二つ目も同じね。ヨルコさんやシユミットの反応からして、あの事件についてはできるだけ触れたくないみたいだし、仮にヨルコさんと矛盾する話を聞けたとしても、どっちが真実なのか私たちには断定できる材料がない」

「となると、三つ目の殺害の手口の検証か………知識がある奴の情報

が欲しいな」

キリトがそう呟くも、それをアスナは止めた。

「でも、無暗に情報をバラ撒くのはヨルコさんに迷惑を掛けるわ」

「そうなると思頼出来て、かつSAOのシステムに詳しい人の助けがいるわね」

「そんな都合のいい奴いるわけ」

「あ」

その時、キリトが声を上げた。

「いるじゃん。信頼出来て、俺たち以上にSAOのシステムにも詳しく
それで、尚且つ口の硬そうな奴が」

「誰？」

アスナに言われ、キリトがそのプレイヤーの名前を言う。

言った瞬間、アスナは眼を見開いて驚いた。

第20話 事件捜査②

その男の名は《ヒースクリフ》

攻略組最強ギルド《血盟騎士団》ギルドリーダーにして、ユニークスキル《神聖剣》の使い手、アインクラッド最強の剣士だ。

キリトはヒースクリフの知恵を借り、事件解決のための糸口を探すことにした。

キリトはヒースクリフへの相談を提案した当事者の為ヒースクリフと会い、そして、連絡はアスナが行ったためアスナも同行することになった。

一方でカイはミトと共に、別方面から事件を捜査することになった。

「それで、私たちはどうするの?」

「ああ。シユミットを当たろうと思う」

「シユミットを?」

ミトは昨夜の怯え切ったシユミットの顔を思い出す。

「今の所、《圈内事件》もといカインズ殺害の関係者と言えるのはヨルコさんや、行方知れずのグリムロック以外だとアイツ以外にはいない」

「確かに。でも、今の時間だと《聖竜連合》も狩りや迷宮区攻略をしてるんじゃない?」

「いや、指輪売却に反対だったカインズが殺された今、シユミットも次は自分が殺されるのではと思ってるはずだ。なら、殺されやすい《圏外》に行く理由はない」

「なるほどね。なら、宿屋に引き籠ってるか。あるいは……………」

「大勢の攻略組プレイヤーがいる安全な場所、《聖竜連合》本部での籠城だ」

「でも、どうやってシュミットと会うの？」

《聖竜連合》の本部がある56層に着き、《ホーム》と言うより《城》キャッスルと言う感じのギルドホームを見上げミトが尋ねる。

「昨日の今日で、シュミットが俺たちに会ってくれるかと言うと微妙な所だな」

顎に手をやり、カイは考える。

「よし、アイツの手を借りるか」

カイはメッセージウィンドウを開き、《フレンド・メッセージ》を送る。

ちなみに《フレンド・メッセージ》とはフレンド登録してあるプレイヤー、或いはギルドメンバーのプレイヤー、結婚相手のプレイヤーに送れるメッセージで、瞬時に連絡が取れる優れモノだ。

一応名前だけで送れる《インスタント・メッセージ》もあるが、これは相手と同じ層に居ないとメッセージは届かないし、届いたのかどうかも分からないのであまり活用はされない。

カイがメッセージを送って十分後、一人のプレイヤーがカイ達の前に現れた。

「カイ！ミト！久しぶりだな！」

騎士風の装備をした青髪の盾持ち片手剣士は、二人を見るや否や手を振って駆け寄る。

「ああ、久しぶり。ディアアベル」

久々の再会に、カイはディアアベルとハイタッチをする。

「カイから連絡が来た時は驚いたよ。基本的に、連絡を取るのは僕からだからね」

「アインクラッドきつての育成ギルドのリーダーとそう簡単に慣れ合えないだろ」

ディアアベルは第1層攻略後、キバオウが立ち上げた《アインクラッド解放軍》の前身となった《アインクラッド解放戦線》、そして、リン

ドの立ち上げた《聖竜連合》の前身となった《ドラゴンナイツ》、両方のギルドから加入要請があった。

当時のディアベルは、攻略組に置いてはカリスマ的な存在だった。そんなディアベルが所属しているギルドとなれば、そのギルドには箔が付く。

だが、そのことで片方のギルドが力をつけ、攻略組のバランスが崩壊することを恐れたディアベルはどちらのギルドにも所属しない、第三のギルドを立ち上げた。

それが、主に攻略組以外のプレイヤーを育成するギルド《希望の騎士団》ナイツ・オブ・ホープだ。

ディアベルのギルドで育ったプレイヤーはその後、《アインクラッド解放軍》や《聖竜連合》に加入したり（今では解放軍に加入を希望するプレイヤーはいないが）、自身で攻略ギルドを立ち上げたり、あるいは中層で自身のギルドを立ち上げた者など多くいる。

最近では《血盟騎士団》にも加入した者もあり、アインクラッドでは欠かせない存在となっている。

「だからって、毎月膨大なコルをどんっと寄付して去っていくのはどうかと思うぞ。ウチのギルドの運営資金の三割はカイとキリトの二人の寄付じゃないか」

「どうせコルなんて余らせてるからな。後進の育成の為なら惜しまないよ」

「全く……ウチのメンバーも二人にお礼を言いたいって言ってるんだ。次の寄付を持つてくる時は、お茶ぐらいは飲んでいってくれよ」

呆れた笑みを浮かべた後で、カイはミトを見る。

「ミトも久しぶり。この間、《血盟騎士団》への入団希望者を連れて本部に行った時以来だな」

「ええ。あの三人、ギルドでも大活躍中よ。いい人材ありがとう」

ディアベルとミトが互いに握手をし、再会を喜ぶ。

「それにしても、二人が一緒とはね。もしかして、デート中だったかな？」

騎士にしてはあるまじきニヤニヤとした笑みを浮かべ、ディアベル

は二人を見る。

デートのワードに、ミトは顔を赤くしそっぽを向く。

「デート中に、他の男呼ぶ奴が居るかよ。頼みがあるんだ」

カイは《圈内事件》の事をディアベルに話し、どうしてもシュミットから話を聞きたいと言う。

「シュミットさんか。確か、彼は半年前ぐらいにウチに来て《攻略組》入りしたって言ってたな」

「本当か？」

「ああ。レベルやスキル熟練度は中層プレイヤーではそこそこ上つて感じだったし、装備に関しては《攻略組》クラスの代物を持っていたから、ウチで訓練してた時期は短かったけど、よく覚えてるよ」

「なら、話は早い。シュミットを呼び出してもらえないか？」

「ああ、待っててくれ」

ディアベルはメッセージウィンドウから《フレンド・メッセージ》を開き、シュミットにメッセージを送る。

ちなみに、ディアベルの人の好きさと面倒見の良さもありディアベルの所で育ったプレイヤーの殆どは、ディアベルとフレンド登録している。

その為、アインクラッドでのディアベルは、フレンド数が多く、人脈も広い。

「ダメだな。今日は誰とも会わないと決めてるって言ってる。会ってはくれなさそうだな」

シュミットからの返事を読み上げ、ディアベルがそう言う。

「なら、こう伝えてくれるか。『指輪の件での話があるんだ』と」

カイに言われたことを伝えると、ものの数分でシュミットは《聖竜連合》本部から飛び出し、カイ達に近付く。

「お前たちだったのか……………」

酷く怯えた様子のシュミットは、カイとミトの姿を見て安心するもすぐに「場所を変えてくれ」と言ってくる。

「ディアベル、呼び出し助かった」

「これぐらいいいさ。それじゃあ、俺はこれで。カイ、今度は寄付以外

でも来てくれよな。ミトもぜひ来てくれ。いつでも大歓迎だから」
そう言い残し、ディアベルは帰って行く。

ディアベルを見送り、カイとミトはシュミットと共に裏路地に入る。

「誰から聞いた？」

「え？」

「指輪の事……誰から聞いた？」

シュミットが顔を青ざめて聞いてくる。

「元《黄金林檎》のメンバーからだ」

そう言うと、シュミットは更に顔を青ざめる。

「……………名前は？」

カイは一瞬言ってもいいのか悩んだが、隣にいるミトが頷いたので名前を伝えることを決めた。

「ヨルコさんだ」

「ヨルコ？……そうか、そうだったのか」

ヨルコの名前を出すと、シュミットは安心したように顔色が元に戻り、息を吐く。

「その様子だと、ヨルコさんも指輪の売却に反対していたってのは知ってたみたいだな」

「あ、ああ……………」

「だからこそ、同じ売却反対派だったカインズが殺されたと知って自分も殺されるんじゃないかと思ってたんだな」

そう言うと、シュミットは再び顔を青ざめさせる。

「一応言っておくけど、私たちは《黄金林檎》のリーダー、グリセルダさんを殺した人を探してるわけじゃない。昨日の事件起こした人……もつと言えば、その手口を突き止めたいの。《圈内》の安全を今ままで通りに保つために」

「シュミット、グリムロックは何処にいる？仮にグリムロックが犯人じゃなかったとしても、あの槍を作ったプレイヤーである以上、どうしても彼から話を聞きたい」

「し、知らない！」

シュミットは大声で言う。

「本当に知らないんだ！《黄金林檎》が解散してから、一度も連絡は取ってない！昨日まで生きているのかどうかも知らなかったんだ！」
「なら、心当たりでもいい。グリムロックが行きそうな場所やお気に入りのカフェ、当時の情報でもいいから教えてくれ」

カイがそう言つて、シュミットは俯く。

「……………当時、グリムロックが気に入っていたNPCレストランがある」

シュミットが俯いたまま、ぼそぼそつと話し出す。

「毎日のように行つてたから、もしかしたら今でも……………」

「その店の名前は？」

「店の名前と場所は教える。ただ、条件がある！」

俯いていたシュミットが顔を上げ言う。

「彼女と……………ヨルコと合わせてくれ」

第21話 第二の事件

シュミットの出した条件に、カイとミトはどうするか悩んだ。少なくとも、シュミットは今回の事件の犯人ではない。

それがカイとミトの出した結論だ。

だが、これはあくまでカイとミトの二人が、シュミットと会ってその反応から出した結論に過ぎない。

「もしこれでシュミットが犯人だったら、大した演技力だな」

「ヨルコさんの確認は取れたわ。向こうは会っても良いそうよ」

ヨルコから送られてきた返事のメッセージを見て、ミトが言う。

「情報を得る為にも、シュミットの条件を呑むか」

「でも、もしそれで犯人だったら……」

「互いに武器を装備させず、一定の距離を保ってもらえば大丈夫だろう。武器を装備させなければ、例え《クイツクチェンジ》のスキルを使ったとしても、装備して、ソードスキルを使うのに数秒は掛かる。俺たちで見張ってれば、変なことはしないだろうし、仮にしたとしても止めることができる」

「……………そうね。それじゃあ、場所はヨルコさんのいる宿屋でいいわね。まだ外に出すのは危険そうだし」

キリトとアスナと合流し、四人はシュミットを連れて、ヨルコが泊っている宿屋へと向かう。

部屋に入ると、カイとキリトは椅子を二つ用意し、念の為に椅子同士の距離を取り、互いの手が届かないようにする

そのうちの一つの椅子にヨルコを座らせ、カイは言う。

「ヨルコさん、武器は装備してないな」

「はい、言われた通り武器は仕舞いました」

「よし。それじゃあ、話し合いには俺たちも同席するから心配はいらない。安心してくれ」

そう言って、カイはキリトに合図を出す。

キリトは頷き、部屋の扉を開ける。

そして、最初にアスナが入り、次にシュミット、最後にミトが入り、部屋の扉を閉める。

「念のためにもう一度言う。話し合いはこの椅子に座って行う。互いに武器は装備せず、ストレージ内に収納。少しでも不審な動きを見せたりしたら、話し合いはそこで終了。いいな?」

「はい」

「あ、ああ」

「それじゃあ、座れシュミット」

シュミットに座ることを促し、シュミットが椅子に座る。

シュミットは扉のある北側の椅子に座り、ヨルコ窓側のある南側の椅子に座っている。

「……久しぶり、シュミット」

「あ、ああ。もう二度と会わないだろうと思ってたけどな」

二人が話し始めたのを見て、カイ達はそれぞれの位置に着く。

ヨルコのストレスにならない様にと、一番高い部屋を借りたので、部屋にプレイヤーが6人居てもそれなりの広さを確保できている。

ドアをロックした以上、ギルドメンバーやパーティーメンバー以外にはロックを解除できないが、万が一とすることもあるのでアスナとミトは入り口の傍に立ち、カイとキリトは東側と西側の壁に寄り掛かる様に立つ。

「シュミットは今《聖竜連合》にいるんだよね。凄いね、攻略組でもトップギルドに所属するなんて」

「どういう意味だ？不自然だとしても言うのか？」

「まさか。ギルドが解散した後、私もカインズも、レベル上げに挫けて、上に行くことを諦めちゃったのに、シュミットは頑張ったんだなって。偉いよ」

「まあ、ディアベルさんの所で鍛えてもらったからな」

怯えているシュミットとは対照的に、ヨルコは平然を装っているが、ヨルコもシュミットも気が気でないのが分かった。

シュミットは武器こそ装備してないが、防具はしっかりと着込んでいるし、ヨルコも防具は着ていないが服を着込んで、肩にはシヨールを掛けている。

「それより、聞きたいのはカインズの事だ！」

シュミットはヨルコに会いたいと言ったわけをここで明かした。

「どうして今になってカインズが殺される!?まさか、半年前の指輪事件、リーダーを殺して指輪を奪ったのはカインズだったのか!？」

「そんなわけない。私もカインズも、グリセルダさんのことを尊敬していた。指輪の売却に反対したのは、コルに変えて無駄遣いするより、ギルドの戦力として有効利用すべきと思ったからよ」

「俺だってそうさ、俺も売却には反対だったからな。大体、俺たち以外にも指輪を奪おうとする動機はある！売却賛成派の奴らの中に、指輪の売り上げを独占したいと思った奴もいるはずだ！」

シュミットは鎧をガシャンと音を鳴らし言う。

「それなのに、どうしてグリムロックはカインズを……!売却に反対した俺たちを殺すつもりなのか!?!グリムロックは、俺たちを狙っているのか!?!」

「グリムロックさんの仕事とは限らないわ。グリムロックさんに頼んで槍を作ってもらった他の賛成派の誰かの仕事かもしれないし……もしかしたら、グリセルダさん自身の復讐なのかも」

半狂乱になり始めてるシュミットとは対照的に、ヨルコは平然と言う。

だが、その瞳には狂気の色が見えていた。

「よ、ヨルコ?お前、何を言って……」

「私、昨日寝ないで考えたの。だってそうでしょ、圏内で人を殺すなんて、そんなこと普通のプレイヤーにはできないんだもの」

そう言い、ヨルコは椅子から立ち上がる。

咄嗟にキリトがシュミットの傍に移動し、ヨルコを牽制するように、背中の剣の柄に手を掛ける。

「ヨルコさん、話し合いは椅子に座って行うって言っただろ？大人しく椅子に座ってくれ」

カイが宥める様にヨルコに近付きながら言う。

だが、ヨルコはカイの制止も聞かず、話し続ける。

「結局のところ、グリセルダさんを殺したのは、ギルメンの誰かであるのと同時に、全員なのよ。指輪がドロップした時、判断をグリセルダさんに任せるべきだったんだわ！ううん、いつそグリセルダさんが使うべきだった！だって、ギルドで一番強いのはあの人だったんだもの！なのに、私たちは自分の欲が捨てられず、それを言い出せなかった！いつかは攻略組にと言いつつも、本心は自分が強くなりたいだけだったのよ！」

よたよたと後ろ向きで歩くヨルコは、開いていた窓の窓枠に寄り掛かる様に立つ。

「でも、唯一人、グリムロックさんだけは違かった。グリムロックさんは、判断をグリセルダさんに任せてた。あの人だけは、自分の欲を捨ててギルド全体の事を考えていた。もし、グリセルダさん以外に復讐を望む人がいるなら、それはグリムロックさんよ。あの人には、私たち全員を殺す資格がある……………」

「……………冗談じゃない……………冗談じゃないぞ！」

とうとうシュミットも椅子から立ち上がり、叫ぶ。

「おい、シュミット！落ち着け！座るんだ！」

キリトがシュミットの身体を抑え、座らせようとする。

「なんで半年経って今更……………！お前はそれでいいのかよ、ヨルコ！今まで頑張って生きてきたのに、こんな訳の分からない方法で殺されて!？」

シュミットが叫んだその瞬間だった。

ドツ！

鈍い何かの音が響いた。

全員はその音が聞こえた方を見る。

それはヨルコの方から聞こえた。

ヨルコは目を見開き、口を開けていた。

そして、窓枠に手を付いた。

その時、ヨルコの背中が見えた。

全員が言葉を失った。

ヨルコの背中には、《ギルティソーン》と同じデザインスロウイング・ダガーの投げ短剣が突き刺さり、赤いエフエクトが噴き出る血の様に明滅を繰り返していた。

ヨルコの身体は左右に揺れ、そのまま窓の外へと傾いた。

カイは走り出し、ヨルコの腕を掴もうとする。

だが、カイの腕はヨルコを掴むことなく、ヨルコはそのまま落下した。

「ヨルコさん！」

カイは窓から乗り出す様に、下を覗き込む。

ヨルコの身体は、石畳の上に落ち、バウンド。

そして、無数のガラスが砕け散るような音とポリゴンの欠片たちとなつてヨルコの身体は爆散した。

第22話 涙

ヨルコの身体が砕け散るのを見て、カイは怒りを露わにした表情で外を確認する。

開いていた窓、そしてヨルコの背中に刺さっていたスロウイング・ダガー投げナイフ。

その事から、外から攻撃を仕掛けられたのは分かった。

そして、宿屋の向かい側にある建物の屋根にフーデッドローブを纏った襲撃者、プレイヤーが居た。

そのプレイヤーはカイに姿を見られると、屋根を伝って逃げ出す。

「逃がすか！」

「ちよーカイ、待てー！」

キリトが呼び止めるもカイには聞こえず、カイは一気に跳躍して向かいの屋根に飛び移る。

「くそっ！アスナ、ミト！シユミットを頼む！」

キリトは背後の二人にそう伝え、カイ同様向かいの屋根に飛び移る。

そして、襲撃者と、それを追うカイを追った。

「カイー！一旦落ち着くんだ！スロウイング・ダガー投げナイフで、ヨルコさんのHPは全損した！どう考えてもあり得ない！もしかしたら、《圈内の無効》以外にも《即死》の効果もある可能性がある！もし一撃でも食らえば………！」

「それがどうした！ようやく犯人を見つけたんだぞ！命を惜しんでる場合か！」

冷静さが欠けているカイは大声で怒鳴る。

それと同時に、襲撃者は懐からある物を出す。

それは転移結晶だった。

「転移する気か！させるかよー！」

カイは腰のベルトから投擲アイテムのピックを三本抜き、襲撃者に投げる。

しかし、カイのピックはすべてが紫色のシステムタグに阻まれ、襲撃者に当たらなかった。

キリトはせめて転移先を聞き逃さまいと聴覚を研ぎ澄ます。

だが、その瞬間、教会の鐘が鳴り、襲撃者が最低限の音量で発した声は掻き消された。

「逃がすかー!」

カイは刀を抜刀し、襲撃者を背後から襲い掛かる。

が、カイの刀の刃が当たる瞬間、襲撃者は転移し、刀はそのまま襲撃者が立っていた場所に振りおろされる。

「っ……………くそっ!」

襲撃者を捕らえられなかったカイは、キリトと共に屋根を降り、宿屋まで歩いて戻った。

宿屋に着くと、キリトはヨルコの命を奪った投げナイフスロウイング・ダガーを回収する。

「キリト、そいつを俺によこせ」

「……………断る」

「トバルの奴に鑑定してもらうだけだ」

「俺はまだ何も言っていないぞ」

そう言い、キリトは投げナイフスロウイング・ダガーを自身のアイテムストレージに入れ、カイを見る。

「試す気なんだろ?このダガーが、本当に圏内で、それも一撃でHPを全損させるのかを」

キリトがそう言うと、カイは不機嫌そうに舌打ちをする。

「悪いが、今のカイに渡しておけない。俺が預かる」

そう言い、キリトは宿屋へと入っていく。
その後が続いて、カイも宿屋へと入る。

部屋のロックを解除し、中に入るとミトとアスナの二人は武器を構えていた。

「馬鹿っ！無茶して！」

「それで……………どうだった？」

アスナから怒られ、ミトから襲撃者の事を聞かれる。

キリトは首を小さく振って答える。

「逃げられた。転移結晶で何処かの層に転移したんだ。転移場所を聞こうにも、教会の鐘の音に掻き消されて男か女かも分からない……………グリムロックなら男かもしれないが……………」

「違う」

シュミットが頭を抱え、顔を青ざめさせながら言う。

「グリムロックは、背が高かった……………それに、あのフリーデッドローブ……………間違いない、アレはグリセルダの物だ。彼女は、街に行く時はいつもあんな地味な格好をしていた……………指輪を売りに出たあの日も……………！さっきのあれは彼女だ……………はは、そうだよな、幽霊ならなんでもアリだよな。《圈内》で人を殺すのも、楽勝だよな」
乾いた笑いをし、シュミットがそう言う。

その瞬間、カイはシュミットの胸倉を掴み引き寄せる。

「おい、シュミット。今すぐ教えろ」

「な、なにを……………！」

「グリムロックの行きつけの店、そう言う条件だろ」

カイの荒々しい態度にアスナは驚いた。

キリトはそんなカイを止めようとした瞬間、ミトがさきき動いた。

「ちよつとカイ！落ち着いて！」

カイの手を掴み、シュミットを解放させるとミトはカイに問い掛ける。
る。

「ヨルコさんを殺されて、犯人も捕らえれなくて悔しい気持ちは分かるけど、今こそ冷静にならないと」

「……………冷静？冷静なんかになれる訳ないだろ！」

とうとうカイはミトに向かつて怒鳴り出した。

「目の前でヨルコさんが殺されたんだぞ！カインズの時とは状況が違う！守れる位置に居たんだ！あの時、俺は誰よりもヨルコさんの近くに居た！なのに守れなかったんだ！俺は間に合わなかったんだ！」

そう言い、カイはシュミットを見る。

「早く教えろ。グリムロックの、行きつけの店を！」

怯えるシュミットは、言葉を震わせながらその店の名を言う。

店の名を聞いたカイが振り向くと、キリトが入り口の前で陣取って居た。

「何のつもりだ、キリト」

「それはこっちのセリフだ。何するつもりだ、カイ」

「店の前で張るんだよ、グリムロックが現れるまで」

「グリムロックの顔も知らないのに、どうやるんだ？」

「襲撃者を追ってる時に、それなりの距離で近付いた。背丈と体格で判断すればどうにかなる」

「その後は？プレイヤーに視線をフォーカスしても、初対面の相手じゃ名前まで分からないぞ」

「グリムロックらしき人物を見つけたら、デュエルを仕掛ける。そうすれば、名前の確認はできるだろ」

「ちよつと待って、カイ君！」

カイのやり方に、アスナが声を上げた。

「それは明らかかなノーマナー行為よ！そんなことしたら君の立場が！」

「それ以外に方法なんてないだろ。いいからどけ、キリト」

「それを聞いて退くと思うのか？悪いけど、今のお前を行かせるわけにはいかない。相棒としても、友としても」

「そうか……どかないなら勝手にしろ。方法は、いくらでもあるからな」

そう言い、カイは転移結晶を取り出す。

「お前!？」

「俺は、この事件の犯人を絶対に許せないんだよ、キリト」

カイはそう言い、グリムロックの行きつけの店があると言う20層の主街区の名を言おうとした。

だが、カイは主街区の名を言わず固まった。

「……………ミト、離れろ」

転移しなかったのは、ミトの所為だった。

ミトはカイに正面から、強く抱き付いていた。

転移結晶は一つに付き一人までしか転移が出来ない。

もし、転移結晶を使う時に他のプレイヤーに接触されているとエラー反応となり、使用が出来ない。

「嫌だ」

カイに離れろと言われても、ミトは離れようとしなかった。

「いいから離れろ。これじゃあ転移できない」

「嫌だ!」

今度は大きな声で拒否をした。

「ミト! いい加げ!」

「いい加減にしろ」、そう言おうとしたカイだったが、言葉が出なかった。

何故ならカイを見上げるミトの両目からは涙が零れていた。

「ミト……………どうして……………」

何故ミトが泣いているのか分からないカイは、思わずそう尋ねる。

「だって……………カイがまた何処かに行きそうで、私……………!」

カイに縋り付く様にして泣くミトは、話し出す。

「昨日からカイがずっと様子が変で……………そんなカイ見てたら不安が押し寄せて来て……………カイがカイじゃなくなりそうだから……………!」

ミトの涙を見た時点でカイの頭の血は下がっていたが、ミトの話を聞きカイは自分が冷静でなかったことを悟り、そしてどれだけの不安をミトに与えていたのかを自覚した。

そんなカイの様子を見てキリトは「はあく」っと息を吐く。

「流石に泣いてる女の子相手を振り解く程、カイは悪い奴じゃないよな」

カイに近付きキリトは言う。

「なあ、カイ。俺やアスナにはともかく、ミトには説明してやる必要があるんじゃないか？」

「……………そうだな。ミト、話すよ全部」

カイはそう言つて、ミトを抱きしめる。

「俺がどうしてここまで殺人に対して冷静で居られないのか。その理由は……………あの日、お前の所に行かなかった理由にも繋がるんだ」

カイの言葉に、ミトは驚きカイを見上げる。

「キリト、アスナ。この際、お前たちにも聞いて欲しい。大切な友人として、俺の過去を」

第23話 カイの過去

あの後、怯え切ったシュミットをキリトとアスナの二人は《聖竜連合》の本部まで届けた後、宿屋へと戻った。

宿屋では、カイとミトの二人が待っていた。

二人はベッドに座り、ミトはまだ不安なのかカイの手を握ったまま離れようとしなかった。

「ああ、戻ったか」

「待たせて悪いな」

そう言い、キリトは二人分の椅子をベッドの近くまで持って行き、座る。

「ねえ、カイ君。言うのが辛いんだったら無理して言わなくてもいいんだよ？」

アスナが椅子に座りながら、カイに優しくそう言う。

「ありがとうな、アスナ。もう決めたことだからさ。でも、何から話したらいいか……………」

困ったようにカイは笑い、頭を掻く。

「取り敢えず、俺には家族が居たんだ」

カイには家族が居た。

フリージャーナリストの父親と、専業主婦の母親。

そして、幼稚園に通う妹の四人家族だった。

裕福とも貧乏とも言えない、何処にでもいる普通であるも幸せな家庭。

それがカイの家族だった。

だが、そんな幸せは一瞬で崩れた。

カイはいつもなら学校が終わると真つすぐ公園に行き、ミトと遊んでいた。

しかし、あの日だけは手荷物が多くあり一旦自宅によってから公園へと向かった。

その時、カイは一人の大人に声を掛けられた。

その男は柔和な笑みを浮かべ、カイと目線を合わせこう尋ねた。

「君、神里さんの息子さんかな？家に、お父さんはいるかい？」

カイの父親はフリージャーナリストと言うこともあり、あまり自宅にすることが少なかった。

だが、その日は新聞社に持って行く記事の編集作業をしていた為、家に居た。

カイは、その男が父の知り合いなんだと思い、正直に父の在宅を話した。

男はカイにお礼を言い、何処かへと去り、カイは公園へと向かった。遊び終え、ミトと別れた時は既に夕日が差しており、カイは足早に帰宅した。

そして、カイは自宅で死んでいる父と母、妹の三人を見た。

そこからの記憶はカイは憶えて無く、気づいた時にはカイは病院に居り、伯父の耕哉が心配そうに付き添っていた。

父と母はナイフのような鋭利な刃物で殺害され、妹は首を絞めて殺されていたらしく、更に父の部屋からパソコンや資料の束が盗まれていたことから、カイの父親は何かしらの事件を調べていて、調べられると困る何者かによって口封じで殺され、母と妹も犯行がバレない様に殺された可能性が高いと警察は言っていた。

だが、当時小学5年生だったカイには理解が出来ず、事件は迷宮入りとなった。

カイがそこまで語ると、全員が暗い表情をしていた。

「伯父さんに引き取られた後、伯父さんが俺には心の療養が必要だつて言つて田舎に引越したんだ。色んなことがあり過ぎて、精神的に余裕がなかったし、伯父さんは俺が毎日ミトと遊んでたことを知らなかったから、何も言わずにミトの元から去つたんだ。……………これが理由だ。すまなかつた、ミト」

「そんな……………謝らないで。私の方こそ、何も知らなくて……………カイがそんな辛い思いしてたなんて……………!」

泣きながら言うミトに、カイは優しく頭を撫でる。

「ミトは優しいな。ありがとうな、俺のために泣いてくれて……………当時の俺は、事件の事とか詳しく理解はできなかったけど、子供なりに家族が誰かに殺されたんだつてのは理解できた。そして、俺の所為で殺されたつてのも」

「そんなの、カイ君は悪くないじゃない。カイ君はただ質問に正直に答えただけで」

「だとしても、俺が父さんは家にいるなんて言つたせいで、父さんは殺された。それどころか、母さんも妹も……………俺がもつと気を付けていれば、あんなことには……………」

「それは違うだろ!」

すると、キリトは椅子から立ち上がりそう叫んだ。

「悪いのはカイの家族を殺した奴で、カイは悪くない!それなのに、なんで自分が悪いみたいなの言方するんだよ!」

いつの間にかキリトまで涙を流していた。

「……………なんでお前まで泣いてんだよ、キリト」

「お前が涙一つも流さないで、辛い過去話してるからだろ……………お前

の代わりに泣いてやってるんだよ……………馬鹿相棒」

そう言い、キリトは椅子に座り直す。

「全く、ミトに続いてお前も優しい奴だな。ありがとう、キリト」

カイは困った様に、それでいて嬉しそうに笑う。

「流石にアスナは泣かないか」

「その言い方、まるで私が薄情者みたいじゃない」

アスナは優しい笑みを浮かべ、ミトとキリトにハンカチを渡しつつ言う。

「ミトもキリト君も泣いて、私まで泣いたら收拾かなくなるでしょ」
そう言うアスナの目じりからはわずかに涙が零れているのに、カイは気付く。

「ああ、分かってるよ。ありがとうな、アスナ」

アスナにもお礼を言い、カイは話を続ける。

「その事件の所為か、俺は殺人に対して強烈な憎悪を抱くようになったんだよ。医者が言うには、精神的なストレスによるものだって。アニメや小説とか、創作物ならある程度は耐えられるけど、ニュースや新聞で殺人事件に関する物を見ただけでも俺は憎悪を抱くんだ」

キリト、アスナ、ミトの順に顔を見て、カイはあることを決意し言うおうとする。

「だから、俺は「ダメだぞ、カイ」

だが、その言葉をキリトが遮った。

「お前、俺とのコンビを解消する気だろ？」

カイは驚き、キリトを見る。

「それだけじゃない、ミトともアスナとも、それに攻略組や自分のフレンドたちとも関りを絶つ気だろ？」

「……………よくわかったな。その通りだ。俺は目の前でカインズが死んだのを見て、暴走し掛けて、ヨルコさんの死でどうとう冷静さを失った。下手したら事件解決のために殺人以外ならどんな手も使っただろう。今でこそ落ち着いてるが、もしまた同じような事が起きればどうなるか分からない。下手したら、殺人を止めるために殺人を行う危険もある。そうなれば、キリトやアスナ、ミトに迷惑を掛けることに

なるし、攻略組にとつても不安材料になる。俺は、そんなことしたくない。そんなことするぐらいなら、いつそのこと……………」

「カイ……………第1層のフロアボスを倒した後の事、憶えてるか?」

突如、キリトがそんなことを言い出した。

「俺は元βテスターとビギナー達の不和を消すために、『ビーター』を名乗って、ソロで活動していいこうと思つた。だけど、お前は様々な誹りを受ける覚悟で、俺と一緒に進むって言ってくれた。あの時は言わなかったけど、俺凄く嬉しかったんだよ。だから、言わせてもらう」

キリトはカイに指を突き付け、宣言するように笑顔で言う。

「俺はお前とのコンビを解消する気なんてサラサラないからな!」

「私も同じ気持ちだよ」

アスナはキリトとは対照的に落ち着いた、優しい声でカイに言う。「そんな話を聞いて、放っておける訳ないもの。軽々しく大丈夫とか言えないけど、何かあつた時ぐらい頼ってくれていいんだからね。それに、君のような人材を見す見す攻略組から脱退させるわけないでしょ?」

笑顔で自分を見てくるキリトとアスナに、カイは呆気にとられた表情になる。

「カイ」

最後に、ミトがさつきとは違って優しくカイの手を両手で包む。

「私は嫌だよ。6年ぶりに再会して、また「さよなら」なんてそんなの嫌。もうカイの手を放したくない。ずっと傍に居て欲しい!もしまたカイが暴走するって言ふなら、その度に私が止める!だから……………居なくならないで」

ミトの言葉を聞き、カイは数秒沈黙した。

「……………はあ、本当にお前たちはもう」

カイは頭を掻き、溜息を吐く。

「本当にいいんだな?後悔しても知らないぞ?」

「俺を相棒に選んだ時点で諦めるんだな」

「私にカイ君の過去を話した時点でもね」

「私と再会した時点でも」

三人にそう言われ、カイは笑った。

「やれやれ、とんでもない奴らと友達になっちまったな、俺は………
ありがたいな」

カイがお礼を言い、四人はまた笑顔になった。

「それじゃあ、今後の捜査方針を考えようぜ」

「それはいいが、カイ、大丈夫なのか？」

カイの心を案じ、キリトが尋ねる。

「ああ。お前たちに過去を話して少し落ち着いた。それに………」

そこまで言い、カイは横目で隣のミトを見る。

「ん？どうかした？」

カイの視線に気づき、ミトが聞いてくる。

「………いや、なんでもない。とにかく、大丈夫だ」

「わかった。とりあえず………シユミットから聞いたグリムロックの
行きつけの店、そこを当たろう」

「でも、昨日の今日で行くとは思えないわ」

「だろうな。でも、他に手掛かりはない。今日はもう遅いし、明日店を
見張ろう」

「ああ、俺も賛成だ」

「同じくね」

一先ずの方針を決めると、突如キリトの腹が鳴った。

「あ、悪い」

「そう言えば、もう夕飯の時間か」

カイはこの前と同じレストランで食事でもとるかと考えていると、
アスナがストレージから何かのアイテムを四つオブジェクト化して
出す。

そして、その内の一つをキリトに差し出した。

「くれるのか？」

差し出されたそれを受け取り、キリトが尋ねる。

「この状況でそれ以外になにがあるの？見せびらかしてるとでも？」

そう言い、アスナはミトとカイにも渡す。

「俺の分まで？」

「こんなこともあるのかと、四人分作ってたの。そろそろ耐久値も切れそうだしどうぞ」

「悪いな」

カイはアスナに礼を言つて、包を剥がす。

そこには、カリッと焼かれたパンに、野菜や肉が挟まれたサンドイッチがあった。

「おっ、うまいなー」

早速一口齧ったキリトが、感嘆の声を出す。

その言葉に、カイも一口食べる。

「おお、確かに」

「流石はアスナの料理ね。うん、本当に美味しい」

カイの隣でミトもご満悦で食べる。

「ん？アスナのって、もしかしてアスナの手料理なのか？」

ミトの言葉に、カイが尋ねる。

「ええ、そうよ。ちなみに、私も《料理》スキル取ってるけど、アスナにはまだまだ及ばないけどね」

そう言い、ミトは残りを一気に食べだす。

「あ、えっと……………」

キリトはアスナに気の利いた一言を言おうとするが、思い浮かばず狼狽する。

「い、いっそのこと《アルゲート》の市場で売り出したら、大儲けできそうだなハハハ……………」

キリトがそう言った瞬間、アスナはキリトの座っている椅子を蹴る。

「あっー！」

衝撃で、キリトは持っていたサンドイッチを手放してしまい、サンドイッチが床に落ちる。

その瞬間、耐久値が全損しサンドイッチが砕け散った。

「あ……………」

まだ二口程度しか食べれてなかった為、キリトは呆然とサンドイッチが落ちた床を見つめる。

だが、次の瞬間何かに気づき目を見開いた。

「まさか!」

声を上げ、ストレージから小さな羊皮紙を取り出し、食い入るように見る。

「アスナ、あれは?」

「シユミットさんに書いてもらった、残りの《黄金林檎》メンバーの名前。だけど、どうしたの?」

アスナの問いに、キリトは答える余裕がないのか何も言わない。

「そうか……そうだったのか!」

キリトが大声を上げ、椅子から立ち上がる。

「俺は……俺たちは見ているつもりで、違うものを見ていたんだ! 《圈内殺人》、そんなものを実現する武器もスキルも、ロジックも最初から存在してなかったんだ!」

第24話 謎の解明

「キリト、それはどういう意味だ？」

突如、《圈内事件》を実現する武器もスキルもロジックも存在しないと言いだしたキリトにカイが尋ねた。

「全部説明する。とりあえず、まだるっこしいのは嫌いだから単刀直入に言う」

椅子に座り直したキリトが確信めいた目で口を開く。

「まず、カインズとヨルコさん。この二人は生きている」

キリトの口から語られた言葉に、三人は驚く。

「ちよ、ちよつと待って！」

すると、アスナが待ったを掛けた。

「でも、夕べ私たちは確かに見たわ！教会から吊るされたカインズさんが槍に貫かれて死ぬ所を！」

「それに、カインズの身体から赤いエフェクトが噴き出た。《貫通継続ダメージ》が発生したのは確実だろ」

「いいや、あの時、槍に貫かれていたカインズのHPは1ドットも減ってない。減っていたのは、着ていたフルプレート・アーマーの耐久値だ」

「た、耐久値ですって？」

「ああ。《圈内》ではプレイヤーのHPは減ることはない。でも、耐久値は減る。さっきのサンドイッチみたいにな」

キリトの言葉に三人はハツとする。

「そうか。フルプレート・アーマーの耐久値が無くなって爆散エフェクトと同時に転移結晶で転移する」

「そうすれば傍から見るとHPが無くなって死亡したように見える」

「転移コマンドも、教会の鐘の音と同時に言うことで誤魔化せる」

「でも待ってくれ。カインズの死はキリトとアスナで確認しただろ。

《黒鉄宮》の《生命の碑》で、カインズの名前には横線が引かれていて、死亡時刻と死亡原因に間違いはないって」

「それはコイツを見てくれ」

先程の羊皮紙を取り出し、三人に見せる。

「これがどうした？」

「念のため、カインズ、ヨルコさん、グリムロック、グリセルダさんの名前も記入してもらった。俺たちがカインズの名前の綴りを教えてもらった時、綴りは《K a i n s》だとヨルコさんに教えられ、それを信じた。でも、カインズの本名の綴りは《C a y n z》だ」

キリトが指さす名前の先には、《C a y n z》とあった。

「ちよつと待って！それじゃあ、Cの方のカインズさんが偽装死亡をした時、同じタイミングでKの方のカインズさんも死んだって事!？」
「そんなの偶然にしては出来過ぎてる……まさか!」

ミトとアスナの二人が声を上げる。

「いや、それはない」

だが、それをカイが否定した。

「確かに、《生命の碑》には死亡時刻が刻まれる。でも、刻まれるのは月日だけで、何年かまでは刻まれない」

「そうだ。この世界で4月22日を迎えるのは昨日で2回目。つまり、Kの方のカインズが死んだのは昨日じゃなくて、1年前の4月22日だ」

キリトの推理によると、恐らくカインズとヨルコは《生命の碑》を訪れた時に、Kの方のカインズの死亡を知った。

最初は、偶然同じ名前の人が死んだ、話の種程度のつもりだったのかもしれないが、ある時、二人のどちらかがこの偶然を利用すれば偽装死亡を装えることに気づき、今回の事件もとい芝居を起こした。

理由は指輪事件の犯人を捜し出す為。

その結果、生み出されたのは《圈内》でもプレイヤーをPKすることのできる死神だった。

そして、恐怖に駆られて動いたのは、シュミットだった。

「多分、シュミットの事はある程度疑っていたんだろう。中堅ギルドから一気に《攻略組》最大ギルドに所属して、隊長格にまでなったんだからな。急激なレベルアップか、急激な装備の更新、それこそ最前線クラスの物が必要だ」

「そう言えばディアベルが、シュミットが最初に来た時、装備は当時の攻略組クラスの代物を持ってたって言ったな」

「じゃあ、グリセルダさんを殺して指輪を奪ったのはシュミット?」

「それは判らない。そこまで判断するには材料が足らなすぎる。だけど、あの心底怯えて、ギルド本部までの護衛を頼んだ男がレッドプレイヤーとは思えない。少なくとも、何かしらの形で関与してるのは間違いないと思う」

キリトのその言葉に、3人も同感と言わんばかりに頷く。

「でも、こつからヨルコさんとカインズはどう動くのかしら? 元々シュミットのことを疑っていて、今回の一軒で指輪事件に関与してるってのは二人も分かっただろうし」

「まさか……………復讐したりとか……………」

「いや、それはないだろう。アスナ、ミト、二人はヨルコさんとフレンド登録してただろ? フレンド登録解除のログを見てないなら、まだ登録されたままのはずだ」

キリトに言われ、二人はフレンドリストの確認をする。

「確かに登録されたままね」

「でも、どうして登録してくれたのかしら? 今回は。私もミトも騙されたから気づかなかったけど、もしリストの確認でもされたりしたらすぐにでもバレルのに……………」

「多分、俺たちを騙すことへの謝罪と、俺たちを信じてくれたからじゃないかな」

「俺たちが事件の真相に気づいたとしても、シュミットを誘き出す邪魔はしないって思ったのか」

「恐らくな。アスナ、今、ヨルコさんは何処にいる?」

「えっと……………19層のフィールドね。主街区から少し離れた小さい丘の上」

「もし俺がシュミットの立場ならグリセルダさんの墓まで行って許しを請うと思う。恐らく、そこにグリセルダさんの墓があるんだろう。きつと今頃、カインズと二人で、シュミットが現れるのを待ってるはずだ」

「でも、もし逆のことが起きたら？ シュミットが口封じのために、二人を殺そうとでもしたら……」

まだ不安の尽きないアスナがキリトにそう尋ねる。

「それも無いんじゃないかな？ シュミットが事件に関与してると言っても、直接手を下すようなことはして無いと思う。それに、もし殺したりでもしたら俺たちにそのことはバレる。アイツは犯罪者^{オレンジ}、いや殺人者^{レッド}になって《攻略組》から放逐されるのに耐えられないだろう。だから、互いに殺し合うなんてことにはならないだろう」

結局のところ、良い様に踊らされてる4人だったが、その表情は明るかった。

「とにかく、誰も死んでないってことが分かって良かった。本当に、良かった」

カイは心底安心しきった笑みを浮かべ、胸を撫で下ろした。

第25話 《笑う棺桶》

キリトの推理通り、ギルド本部に送ってもらった後、シュミットは恐怖に怯えていた。

死にたくないがために構成したビルドと装備、そして数多の防御スキル。

その全てを無力化する死神に恐怖し、怯えていた。

もし、本当にグリセルダの幽霊が自分を殺しに来るのならシュミットが出来ることは一つ。

彼女の墓の前で赦しを請うことだけだった。

悩みに悩んだ結果、シュミットは時刻が22時を超える頃転移結晶を使い、19層へと転移した。

主街区を出て、20分程歩くと小さな丘へと辿り着いた。

そこには捻じれた低木があり、その下には石の墓標がある。

《黄金林檎》のリーダー、グリセルダの墓だ。

元々は樹も墓碑もデザイナーがさしたる意味もなく配置したオブジェクトだったが、グリセルダが亡くなった数日後、残った7人のメンバーで、そこをグリセルダの墓とし彼女の愛剣を埋めた。

すでに、剣の耐久値は全損し消滅しているだろうし、グリセルダの遺体がある訳でもない。

それでも、シュミットは謝罪をするならその場所しかないと思った。

墓碑を前にし、その場に跪く。

「すまない……悪かった、赦してくれグリセルダ！あんなことになるなんて思わなかったんだ！アンタが死ぬなんて………これっぽちも予想してなかったんだ！」

『ほんとうか？』

突如、奇妙なエコー掛かった女の声が聞こえる。

シュミットは恐る恐る顔を上げると、樹の陰からフリーデッドローブを着た女性プレイヤーが立っているのに気づいた。

シュミットは恐怖に慄きながらも、頷く。

「本当だ！俺は何も聞かされてなかったんだ、グリセルダ！俺は……俺は言われるがままに従っただけなんだ！」

『なにをしたの？シユミット……あなたは、なにをしたの？』

「指輪の売却が決まったあの日、いつの間にか俺のベルトポートの中にメモと回廊結晶があつて……アンタが泊る宿まで後をつけて、食事のために外にでも出たら部屋に入つて、場所を回廊結晶に登録して、それをギルド共通ストレージに容れるとあつた……俺がやったのはそれだけだったんだ！」

『誰の指示だ？』

今度は男の声が聞こえ、その男も女性プレイヤーと同じフリーデッドローブを着ていた。

「ぐ、グリムロック……！お前も、死んでいたのか……！」

男をグリムロックだと思い、シユミットは更に体を震わせる。

『誰からの指示なんだ……シユミット……』

「だ、誰の指示かは知らない！俺は、グリセルダが寝てる間に、グリセルダの指を勝手に動かして、指輪をトレードするだけだと聞いてたんだ！本当に、本当だ！赦してくれ、グリセルダ、グリムロック！俺は殺しの手伝いをする気なんて、なかったんだ！」

甲高い悲鳴交じりの声を絞り出し、シユミットは額を地面に擦り付ける勢いで謝罪をする。

「全部録音したわよ、シユミット」

すると、先程のエコー掛かった声ではなく、はつきりとした女性の声が響いた。

その声に聞き覚えのあつたシユミットは、顔を上げた。

そこには、フードを取ったヨルコが立ち、手には録音結晶があつた。

「……………ヨルコ？」

シユミットはそう呟き、ヨルコの隣にいる男性プレイヤーへと視線を移す。

男がローブを取ると、そこには見知った顔があつた。

「カインズ？」

男はカインズだった。

「お前たちどうして……………死んだはずじゃ……………そうか、そういう事だったのか……………」

二人の死が偽装されたもので、全ては指輪事件の犯人を捜すものと理解したシュミットは、思わず安堵の息が漏れた。

騙された怒りはなく、只々二人のリーダーを想う気持ちと、犯人を捜そうとした執念に驚嘆だけ感じた。

「お前たち、そこまでリーダーの事を……………」

「シュミットだってそうだろう」

「え？」

「別にリーダーの事を憎んでた訳じゃなかった。指輪への執着はあっても、殺意まではなかった。だろ？」

カインズの言葉に、シュミットは何度も首肯する。

「本当だ、信じてくれ！」

シュミットはヨルコの持つ、録音結晶がまだ起動中なのを承知で話始める。

「俺がやったのは宿屋の、グリセルダが泊っている部屋に忍び込んで、その位置を回廊結晶に登録しただけなんだ。そりゃ、指輪の売却値段の半額を受け取って、買った武器とレア装備のお陰で《聖竜連合》の入団基準をクリアできたのは確かだけど……………」

「本当に、メモの差出人に心当たりはないんだな？」

「ああ、俺とカインズ、ヨルコにグリムロック、そしてグリセルダを除いた3人の内誰かだとは思うが……………あれ以来一度も連絡は取っていないし……………お前たち、目星は付いてないのか？」

「他の3人も調べたけど、3人ともギルド解散後に同じ規模の中堅ギルドに入っけていても、家を買ったり、装備を買った人はいなかった。いきなりステツプアップしたのは貴方だけよ、シュミット」

「……………なら、おかしくないか？コルを使わないなら、どうしてグリセルダを殺してまで指輪を奪ったんだ？」

シュミットは、グリセルダが殺された翌日、自身の部屋に置かれていた大量のコルが入った皮袋に罪悪感と恐怖を感じたが、コルの誘惑に勝てずオークションハウスに出品されてるレア装備を買った。

シユミットに払われた半額の残りもかなりの額なのは確かだ。にも関わらず、それを使わずにいる。

並大抵の精神力じゃない。

「まさか……あのメモの差出人は………」

シユミットは頭を回転させ、ある一つの推測を口に出そうとした。

その所為で、背後の気配に気づかなかった。

何かが肩に刺さり、刺さったと認識した直後、身体が倒れた。

「シユミット!？」

シユミットが倒れたことに、カインズとヨルコは駆け寄ろうとした。

だが、それを阻むものが居た。

「ワーン、ダーウン」

少年のような無邪気の声と共に、ナイフを持ち、頭陀袋を被った黒づくめのプレイヤーがシユミットの傍に立つ。

そして、ヨルコとカインズの傍には、ボロ布を纏い、手には針剣エストックを持ち、顔に髑髏の仮面を付けた赤い目と赤い髪が特徴なプレイヤーが居た。

そして、二人のプレイヤーカーソルはオレンジ。

その二人の事をシユミットは良く知っていた。

頭陀袋の男の名は《ジョニー・ブラック》、髑髏仮面の男は《赤目のザザ》。

殺人ギルド《笑う棺桶ラフィン・コフィン》所属のレッドプレイヤーだった。

「Wow……こりゃ大物だな。《聖竜連合》の守備隊ディフェンダーの隊長様とはな………」

そして最後に現れたのは、長軀を膝上までのポンチョで身を包み、フードを目深にかぶっている男、手に持つはモンスタードロップにして魔剣クラスのレア武器《友切包丁メイト・チョッパー》。

殺人ギルド《笑う棺桶ラフィン・コフィン》のリーダー、《POH》。

《血盟騎士団》団長のヒースクリフと対局な魅力を秘めている、レッドプレイヤーのカリスマだ。

「さて、It's show time……と行きたいが、どうやって

遊んだもんかね」

「アレ！アレやろうよ、ヘッド！《殺し合って、生き残った奴だけ逃がしてやるぜゲーム》！」

「ジョニー・ブラックが子供の様にはしやぎながらそう言う。

「そう言って、お前この間生き残った奴も殺したじゃねえか」

「あつー！それ言ったらゲームにならないっすよお、ヘッドオー！」

緊張感のない、恐ろしいやり取りにシュミットたちが戦慄する中、ザザは笑っている。

「くっ……………おおおおお!!」

僅かな隙だった。

その隙について、シュミットは何とか立ち上がりザザへと突進した。

突進を食らったザザは武器を手ばさなかったものの、地面を転がる様に倒れた。

シュミットは麻痺毒でしびれる身体を何とか動かし、カインズとヨルコを庇う様に立つ。

「ほう、まさかジョニーの毒を食らって動けるとはな……………」

「これでも……………《聖竜連合》の守^{デیفエンダー} 備隊の隊長だ……………《対毒》スキルは習得してる……………もつともディアベルさんの教えの賜物だが……………」

シュミットは痺れながらウィンドウを操作し、愛槍を取り出す。

「二人共……………俺が時間を稼ぐ……………その間に逃げろ……………」

「シュミット……………」

「お前、何言って……………」

「俺がここで死ぬのなら、それはグリセルダの殺しに加担した罰だ……………！甘んじて受け入れる……………だが、お前たちは違うだろ……………グリセルダを殺した犯人を暴くため頑張ったお前たちを死なせたら、俺は本当にグリセルダに……………リーダーに合わせる顔がない……………！」

完全に麻痺毒から回復しきれてない状態に加え、《攻略組》にも劣らないステータスを持つ《笑う棺桶》^{ラフィン・コフィン}の幹部二人とリーダー。

いくら《攻略組》内でも最堅固と言っても過言じゃないシユミットでも一溜りも無いのは明白だった。

シユミットは死ぬ覚悟で二人を守ろうとした。

「ヒュー、カッコいいじゃねえか……なら、お望み通りカッコよく死なせてやるよ」

「俺が、やる」

シユミットに吹き飛ばされたザザが針剣エストックを手に、シユミットに近寄る。

「舐めた真似を、じわじわと、死ぬ」

言葉を区切って話す特徴的な話し方をしながら、ザザは手にした針剣エストックをシユミットに向け刺突する。

その時だった。

シユミットに向けられた針剣エストックの切っ先が弾かれた。

そして、ザザの攻撃を弾いた何者かは、そのまま手にした刀でザザを斬る。

ザザは素早く針剣エストックを引き戻して防御し、後ろに下がる。

「まさか、お前が、来るとはな、《紅蓮の剣豪》」

「よお、《赤目のザザ》。その赤のカスタマイズ止めろって俺言わなかったっけ？」

カイは不敵な笑みを浮かべてザザに言い、殺人を平然と行うPOHたち3人に憎悪を抱きながら刀を強く握りしめて立つ。

第26話 謎解きは黒幕登場の後で

「これはこれは、《紅蓮の剣豪》様じゃねえか」

カイの登場に、POHは殺意を込めて面白そうに言う。

「よお、出来ることならアンタらとは会いたくなかったけど、そうもいかないみたいだな」

「ふっ、冷静を装っているが分かるぞ。お前から、俺らに向ける殺意にも似た憎悪がな」

POHの言葉に、カイはますます刀を握り締める手の力を強める。

「これ以上、お前と話す言葉なんて持ち合わせてない。早く消え失せろ」

「シの野郎……！余裕かましてんじゃねえぞ！状況分かってんのか！」

ジョニー・ブラックがナイフを振り回し騒ぎ出すが、POHが片手で制する。

「獲物を前にしてお預けとは釣れないな。お前を殺して、後ろの3人を殺すこともできるぜ。いくらお前が相手でも、俺たち3人相手に勝てると思ってるのか？」

「思ってねえさ。だが、対毒ポーションは飲んだし、《対毒》スキルもある。回復結晶も溜め込んであるし、10分間は抑える自信はある。それに、1人じゃないしな」

突如、蹄の音が聞こえる。

その音はどんどん近づきカイ達の近くまで来ると、馬が後ろ脚だけで立ち上がり、鋭く嘶いた。

騎手は、馬上から振り落とされて「いてっ！」と毒つきながら尻餅をついた。

その騎手は立ち上がるとカイ達を見回して、手綱を引いて馬の頭を来た方向に向けさせると、その尻を軽く叩いた。

それでレンタルが解除され、黒馬は走り去っていく。

騎手はキリトだった。

「よう、POH。久しぶりだな。まだその趣味悪い格好してんのか」

「……………貴様に言われたくねえな」

挨拶代わりに、POHを挑発するキリトに、POHは殺意を込めて言葉を返す。

「遅いぞ、キリト」

「しようがないだろ。この世界の馬って操作が難しいんだから」

そう言い、キリトは背中 of 剣を抜いて構える。

「さて、これでこっちは2人。キリトも条件は同じだ。これで、20分は耐えられる。それだけの時間があれば、《攻略組》の応援が駆けつけるには十分だな」

「《攻略組》30人を、3人で相手できるか？」

「……………Suck」

POHは舌打ちをし、《友斬包丁》メイド・チョップを仕舞う。

「……………《黒の剣士》、《紅蓮の剣豪》。貴様らだけは、いつか必ず地面を這わせてやる。大事なお仲間の血の海で転げさせてやるから、期待しといてくれよ」

そう言い残し、POHはジョニー・ブラックとザザに撤退の合図をし、去って行った。

去る直前、カイの傍を通ったザザは通り際に、カイに向けて囁いた。

「次、合う時まで、そのコートを、脱いでおけ、お前を、お前の仲間の血で、染めてやる」

「やってみやがれ。その時は、返り討ちにしてやるよ」

互いに殺気をぶつけ合い、ザザはPOHたちの後を追った。

「さて、また会えてうれしいよ、ヨルクさん」

「カインズとは一応初対面になるな。初めまして」

2人にそう言うと、ヨルクは申し訳なきように頭を下げた。

「すみません、全てが終わったら皆さんには改めて謝罪に向かうつもりでした。信じてもらえないでしょうけど……………」

「信じるさ。だからこそ、フレンド登録をしてくれたんだろ？」

カイはそう言い、シュミットに近寄る。

「麻痺はもう大丈夫そうか？」

「ああ、なんとか……………カイ、それにキリト。助けてくれたことは礼

を言う。だが、どうして奴らがここに来ると分かったんだ？」

「分かったって言うより、あり得ると推測したんだよ。ヨルコさん、カインスさん。2人ははグリムロックに武器を作ってもらった時、今回の計画の事を全部話したんじゃないか？」

カイに尋ねると、二人は頷いた。

「最初、グリムロックさんは気が進まない様でした。もう彼女を安らかに眠らせてあげたいって」

「でも、僕らが必死に頼み込んだら、ようやくあの武器を作ってくれました。届いたのは、僕じゃない方のカインスさんが亡くなった日の、3日前です」

「残念だけど、アンタたちの計画に反対したのはグリセルダさんの為じゃない。《圈内PK》なんて派手な事件を演出し、大勢の注目を集めたら、いずれ誰かか気づいてしまうと思っただけなんだ。結婚によるストレージ共通化が、離婚ではなく死別で解消された時……その中のアイテムがどうなるか」

およそ30分前。

《圈内PK》の手口も分かり、これ以上は自分たちが首を突っ込む必要はないと判断した4人は、例のレストランへと向かい、夕食を食べようとしていた。

「ねえ、キリト君とカイ君は、レアアイテムがドロップした時はどうしてる？」

注文して料理を待っていると、アスナがそんなことを二人に着てきた。

「そうだな……俺はそう言うのが嫌でソロでやって行こうと思ってたからな。カイとコンビを組んでる今だと、カイの戦闘スタイルに合ってる奴なら、カイに譲ってるな」

「俺もキリトが使えそうな奴ならキリトに譲ってるぞ。それ以外なら自分の物にしてる」

そう言い、カイはミトとアスナに尋ねる。

「ちなみに、『血盟騎士団』ではどうしてるんだ？」

「うちはドロップした人の物って決めてるわ」

「SAOには戦闘経過記録とかないから、誰がどんなアイテムをドロップしたかは自己申告でしょ？ 隠匿とかのトラブルを避けるにはその方がいいしね。それに……そう言うシステムだからこそ、この世界での結婚には重みが出るのよ」

アスナの言葉に、キリトとカイ、ミトはアスナを見る。

「結婚したら、二人のアイテムストレージは共通化されるでしょ。それまで隠そうと思ったことが、結婚したことで隠せなくなる。ストレージ共通化って凄くプラグマチックだけど、同時にロマンチックだと私は思うわ」

「プラグマチック？」

聞きなれない単語に、カイとキリトは思わず聞き返す。

「実際のって意味よ」

そんな二人に、ミトが答える。

「実際の？ SAOでの結婚が？」

「だってそうでしょ？ ある意味、身も蓋もないじゃない。ストレージ共通化なんて」

「なるほどな……なあ、離婚したらストレージ内のアイテムってどうなるんだ？」

ふと、キリトがそのようなことを言い出した。

「えっと……確か、色々オプションがあるのよ。自動分配とか、交互にアイテムを選択するとか……他にも色々……」

「ちよつと気になるな。ヒースクリフに聞いてみてくれよ」

キリトに言われ、アスナがヒースクリフにメッセージを送る。

すると、1分程度で返信が来た。

内容は、アスナが言ったように自動等価分配、交互選択分配などに加え、パーセンテージで偏らせた自動分配もできるとのことだった。『ちなみに、どうしても離婚がしたい時に無条件で離婚する方法もある。取り分が自分が0%、相手が100%に設定した時のみ可能となる。その時、離婚成立時、相手のストレージ内に収まりきらないアイテムは全て床にドロップされる。キリト君、そしてカイ君。もし一方的に離婚されそうになったら、宿屋の個室に待避しておくことをお勧めするよ』

ヒースクリフからの返信の最後にそのような一文が残されており、キリトはその部分が気になるのか何度も繰り返し言う。

「自分0、相手100……自分0、相手100……ああああ!!」

突如大声を上げ、キリトが立ち上がる。

「きゅ、急にどうしたのよ!？」

「ある……自分100で相手0にする方法がある」

「「え?」」

「死別だ。結婚相手が死んだ瞬間、ストレージ共通化は無くなって、本来のストレージ要領になる。そうなると、持ち切れない分は床にドロップされる。つまり……」

一拍置き、キリトが続きを言う。

「『黄金林檎』のリーダー、グリセルダさんが何者かに殺された時、グリセルダさんのストレージ内にあったレア指輪は、グリムロックのストレージに残るか、足元にドロップされる」

「それって……!」

「指輪は誰にも奪われていない……!」

「いや、ある意味奪われてる。グリムロックは、自身のストレージ内の指輪をグリセルダさんの死を使って奪ったんだ……!」

「グリセルダさんのストレージは、同時にグリムロックのストレージでもあった。だから、グリセルダさんを殺したとしても、指輪は手に入らない。グリセルダさんを殺した時点で、グリセルダさんが装着していた物以外は、全部グリムロックの物になるからだ」

キリトの語った話に、全員が息を呑む。

「シュミット、お前は計画の片棒を担いだ報酬で、指輪売却の時に得たコルの半分を貰った。そんなことが出来るのは指輪を手に入れたグリムロックだけだ」

「じゃあ、あのメモの差出人はグリムロックなのか……まさか、グリセルダを殺したのも……!」

「いや、殺害は汚れ仕事専門の殺人者レックドに頼んだんだろう。自身でやって、もし圏外に運んでる途中に、グリセルダさんが目を覚ましたら取り繕えなくなるからな」

「でも、グリムロックさんが犯人なら、どうして私たちの計画に載ってくれたの?」

「計画を全部話したんだろ? なら、それを利用して、今度こそ指輪事件を闇に葬るつもりだったんだ」

「そうか……だから殺人ギルドの連中がここに……」

「でも、どうして……! どうしてグリムロックさんがグリセルダさんを殺そうとするの……! あの二人はいつも一緒に……グリムロックさんはいつもニコニコしてて……なのはどうして!」

「それは……本人から直接聞こう」

「見つけたわ」

「ほら、キリキリ歩きなさい」

そこで、アスナとミトの二人に武器を突き付けられ、一人の男が現れた。

「やあ、シュミット君、久しぶりだね。カインズ君とヨルコ君は、私にあの武器の作成を頼みに来た以来かな?」

鍔の広い帽子を被り、銀縁の丸眼鏡を掛けた男、その名は《グリム
ロック》。

ギルド《黄金林檎》のサブリーダーで、《グリセルダ》の夫だった。

第27話 事件解決

「グリムロック……さん……まさか本当に……!!」

グリムロックの登場に、ヨルコは驚きながらも問い詰めようとした。

だが、ヨルコよりも先にグリムロックが口を開く。

「違うよ、ヨルコ君。私はただ、誤解を解きたくてこの場に現れたんだ」

グリムロックは微笑を絶やさず、口を開く。

「私は武器を作った者として、『黄金林檎』の元サブリーダーとして、そして、グリセルダの夫として、事の顛末を見届ける責任と義務があると思つてこの場に來たんだ。後ろの怖い御嬢さん方の脅迫に素直に従つたのも、誤解を正したかつたからさ」

「嘘言わないで！あなた、隠蔽してたじゃない」

「私たちが看破しなかつたら、そのまま隠れてるつもりだつたんでしょ」

アスナとミトに問い詰められるも、グリムロックは穏やかに言い返す。

「私はしががない鍛冶師だ。この通り丸腰なんだよ。その状態で、あの恐ろしい殺人者たちの前に飛び出していけなかつたからと言つて責められるのかい？」

口調を崩さないその姿勢に、筋の通つた言い分にヨルコとカインズ、シユミットはいまだに信じられないと言つた表情で、グリムロックを見る。

そんな中、カイが前に出た。

「グリムロック、アンタとは初めてになるな。俺はカイ、そこにいるキリトとはコンビを組んでる『攻略組』プレイヤーだ。確かに、アンタが『笑う棺桶』の連中に情報を流して、その三人の殺害を依頼した証拠はない。だが、少なくとも半年前の指輪事件。つまり、アンタの奥さんであるグリセルダさんの死に関して関与、いや、主導していたことは確実だ」

「アンタとグリセルダさんは結婚していてアイテムストレージは共有化されていた。彼女が死亡すると同時に、全てのアイテムはアンタの物となり、ストレージ内に入りきらない物は全てその場にドロップする。だから、ストレージ内にあるはずの指輪もアンタの物になった。アンタはその真実を誰にも話さず、その指輪を売却し、半分をシュミットに渡した。これは犯人にしかできない事だ。そして、アンタは指輪事件の犯人を捜そうとするカインズさんとヨルコさん、そして、片棒を担がせたシュミット。その三人を殺し、今度こそ事件を闇に葬ろうとした。違うか？」

キリトの推理を聞き、グリムロックは暫し沈黙する。

「ふむ、なるほど。確かに、推理として筋は通っている。でも、残念ながらその推理には一つ穴がある」

「何？」

グリムロックは反射的に問い返したキリトに、黒い笑みを見せ話す。

「確かに、私と彼女のストレージは共有されていたし、彼女が殺された時ストレージ内のアイテムは全て私の物となり、入りきらない物は足元にドロップした。だが、その中に例の指輪はなかったよ」

「なっ!?!」

グリムロックのその返しに、キリトは声を漏らした。

「私の推理はこうだ。グリセルダは指輪を売却する前に、一度その指輪の力を試してみたかった。彼女は、スピード型の剣士だからね。敏捷値が20も上がるアイテムは魅力的だったはずさ。そして、彼女が殺された時、彼女はまだ指輪を付けていた。だから、私の元に指輪が来ることはなかった。どうかな、探偵君？」

勝ち誇った笑みを浮かべるグリムロックに対して、その主張を論破する材料を四人は持っていなかった。

もし、グリムロックの主張を論破できるとしたら、殺害を実行したラフィン・コライン《笑う棺桶》のメンバーぐらい。

だが、連中に話をして素直に話してくれるとは到底あり得ない事だ。

「それでは、私は失礼するよ。グリセルダを殺した者は見つからなかったが、シュミット君の懺悔が聞けただけでも良しとしよう。きつとグリセルダの魂も、一時ではあるが安らぎを得られるだろう」
「そう言い残し、グリムロックが去ろうとする。」

「待て」

だが、そんなグリムロックをカイが止めた。

「まだ何か？」

「アンタのその主張、本当だって証拠はあるのか？」

「証拠と言われてもね、なんせもう半年前のことだし、何よりあの時、私は一人だった。証明しようがない」

「なら、アンタが嘘をついている可能性もあるよな？」

「だが、私の主張に証拠がない様に、君たちの推理にも確たる証拠はない」

「アンタの身体に直接聞いてもいいんだぞ？」

カイは思わず、腰の刀の鯉口を切る。

グリムロックから真実を聞き出す為なら、自身が犯罪者オレンジになっても構わない勢いだった。

「待ちなさい、グリムロック！」

だが、突然ヨルコが声を上げ、グリムロックはヨルコの方を向く。

「まだ何かあるのかな？無根拠かつ感情的な糾弾なら、遠慮してもらいたい。ここは、私にとっても神聖な場所なんだ」

「グリムロック、貴方こう言ったわね。リーダーが例の指輪を装備していて、装備したまま殺されたから指輪はストレージ内に無かったって。でも、それはあり得ないの」

ヨルコは確信を持った目でグリムロックを真っすぐに見つめる。

「指輪をどうするか話し合ったあの日、指輪売却反対派だった私、カインズ、シュミットは指輪はギルドの戦力に使うべきだと主張したわ。その時、カインズとシュミットは本当は自分が使いたかったけど、リーダーを立ててこう言ったわ。指輪はギルドで一番強いリーダーは使うべきだって」

ヨルコがそう言うと、カインズとシュミットは頷く。

「でも、グリセルダさんはこう言ったわ。指輪アイテムは片手に一つずつしか装備出来ない。右手にはギルドリーダーの証の印章が、左手には結婚指輪がある。どちらも外せないから、私は使わないって。だから、グリセルダさんがどちらかを解除して、あの指輪を装備するのはあり得ないの！」

「あり得ない？それなら、私はこう言おう。……私が彼女を殺すなんてあり得ないとね。君のそれは、先ほど言った無根拠で感情的な糾弾だ。そんなもの、聞きたくない」

そう言い、グリムロックは今度こそ去ろうとする。

「根拠ならあるわ！」

層言つてヨルコはある物を取り出す。

「それって……《永久保存トリンケット》？」

取り出された小さな箱《永久保存トリンケット》とは、マスターラスの細工師だけが製作できる《耐久値無限》の保存箱で、その中に容れた物は、耐久値の自然減少による消滅から守ってくれる。

「この中にはある物が入ってるわ。それは、グリセルダさんが死んだ場所で見つかった物。発見してくれた人は、偶然にもグリセルダさんの知り合いだったから、その人はギルドホームにその遺品を届けてくれたの」

そう言い、蓋を開け中の物を取り出す。

それは銀色の大型の指輪で、平らになってる天頂部にはリンゴのマークが彫られていた。

「一つはグリセルダさんがいつも右手の中指に嵌めていたギルドリーダーの証の印章^{シギル}。彫られているのは《黄金林檎》のギルドマーク。調べればすぐ分かる。そして」

最後に取り出したのは、金色に輝く細身の指輪だった。

「グリセルダさんがいつも左手の薬指に嵌めていた結婚指輪。内側に、貴方の名前が彫ってあるわ、グリムロック。この2つが、グリセルダさんが殺された現場に落ちていたってことは、グリセルダさんは殺されたその瞬間まで両手にこれらを装備していた証拠よ！違うなら、反論してみなさい、グリムロック！」

ヨルコの涙交じりの絶叫に、グリムロックは何も答えなかった。数秒、沈黙が続く、とうとうグリムロックが口を開いた。

「その指輪、確か彼女の葬式の時、君が私にどうするか聞いて来たね。あの時は、彼女の剣と共に自然に任せると答えたが……………こんなことなら、あの時欲しいと言わなきゃよかったな」

そのセリフは、自身が黒幕であると明かしているも同然だった。

「……………どうして……………どうしてなの、グリムロック！どうして自分の奥さんを……………そこまでして大金が欲しかったの!？」

「……………金？金だつて？」

ヨルコの叫びを嘲笑するように笑い、グリムロックはメニューウインドウを操作し、ある物をオブジェクト化して取り出す。

それはやや大きめの皮袋だった。

それを地面に投げ捨てるように置き、中からチャリツと音が聞こえる。

それだけで、皮袋の中身が金貨だと分かった。

「それは。例の指輪を売却して得た代金の残り半分だ。金貨1枚分だつて使つてはいない」

グリムロックの言葉に全員が驚く。

シユミットが皮袋を拾い、中身を確認する。

「……………確かに、中身の金額は俺が渡された金額の半分程だ」

それにより、グリムロックが嘘をついてないことも分かり、カイ達はまずまずグリムロックの動機が分からなくなった。

「私は……………私はどうしても彼女を殺さなければいけなかった。彼女が、私の妻であるうちに」

グリムロックはゆっくりと語り始めた。

「《グリムロック》に《グリセルダ》。頭の音が同じなのは偶然ではない。その名は、SAO以前にプレイしていた様々なネットゲームで、私と彼女が使っていた名だ。そして、システムの可能であれば私たちは夫婦になっていた。なぜなら……………彼女は現実でも私の妻だったからだ」

現実でも夫婦。

その発言に、誰もが息を呑み、驚愕する。

「私にとって彼女は、一切の不満も無い理想的な妻だった。夫唱婦随とはまさしく彼女のためにある言葉とさえ思えた。可愛らしく、従順で一度の夫婦喧嘩すらしたことがなかった。だが、この世界に囚われて彼女は変わってしまった」

グリムロツクは顔を左右に振り、短い溜息を吐く。

「強要されたデスゲームに怯え、恐れ、竦んだのは私だけだった。だが、彼女は現実世界に居た時より遥かに生き生きとし、充実した様子だった。あの彼女の何処にそんな才能が隠されていたのか、戦闘力も状況判断力も、全て私を上回っていた。そして、いつしか私の反対を押し切ってギルドを立ち上げ、仲間を募り、鍛え上げた。その様子を間近で見っていた、私はようやく認めた。私の愛した妻《ユウコ》は消えてしまった。もう永遠に戻っては来ないのだと」

グリムロツクは体を小刻みに震わせ、囁く様に語り続ける。

「私の畏れが理解できるか？もし現実世界に戻った時、ユウコに離婚を切り出されたりでもしたら……その屈辱が！私には耐えることができない！ならば、この合法殺人が許されるこの世界にいる間に、ユウコが私の妻でいる間に、彼女を永遠の思い出として私の中に封じ込めたいと言う私の願いを……誰が責められると言うのだ？」

グリムロツクの動機はあまりにも自分勝手に、歪んだ愛情の様なものだった。

もしかしたら、彼の考えが理解できる者もいるかもしれないが、少なくともこの場にいる誰もが理解はできなかった。

「ふざけるな！」

すると、カイが声を荒げグリムロツクに詰め寄った。

そして、胸倉を掴み怒鳴る。

「そんなの、お前自身が奥さんの隠れていた一面を受け入れたくなかっただけの話だろ！何が合法殺人だ！殺人に合法も違法もねえ！あるのは、殺人を犯す奴のエゴだけだ！」

カイの叫びに、グリムロツクは驚き固まっていた。

「自分の愛した妻は消えた？永遠に戻ってこない？その通りだよ！だ

がな、彼女を殺したのはS A Oでも、殺人者プレイヤーでもない！他ならないアンタ自身が、彼女を殺したんだ！」

カイの言葉に、僅かにグリムロックの瞳が揺れた。

叫び終え、静寂が辺りを覆い、カイの荒い呼吸音だけが響き渡る。

「カイ君」

その静寂を破ったのはアスナだった。

アスナは優しくカイの手を握り、グリムロックの胸倉から手を離させる。

そして、アスナはグリムロックの方を見る。

「グリムロックさん、私は結婚もしてないから貴方の気持ちは理解出来ません。でも、一つだけ分かることがあります」

アスナはグリムロックを強いまなざしで見つめ、言い放つ。

「貴方がグリセルダさんに抱いていたのは愛情じゃない。ただの所有欲だわ」

その言葉が決め手となり、グリムロックはその顔を絶望と喪失の感情に歪め膝をついた。

そんなグリムロックにカインズとシュミットが近寄る。

「キリト、カイ。この男の処遇、俺たちに任せてもらえないか？もちろん、私刑に掛けたりはしない。だが、必ず償いはする」

「ああ、任せた」

「……頼む」

カインズとシュミットはグリムロックの腕を掴み、立ち上がらせ歩かせる。

「アスナさん、キリトさん、それにカイさんにミトさん。本当にありがとうございました。皆さんが来て下さらなかつたら、今頃私たちは殺されていました。それにグリムロックの犯罪も暴いて下さって……今回の一件で私たちは多くの人を不安にさせました。後日にはなりますが、改めて謝罪に行きます。本当に、ありがとうございます」

最後にヨルコがそう言って、後を追う。

ヨルコたちの姿が見えなくなるのと同時に、朝日が昇り始める。

その瞬間、カイの身体はぐらりと傾き、倒れそうになる。

「カイ！」

ミトが咄嗟に動き、カイを受け止めた。

「悪い……ミト、少し立ち眩みがした………」

「………無理もないわよ。今回の事、カイには大変だっただろうし」

そう言い、ミトはカイをしつかりと立たせると、肩を貸した

「アスナ、悪いけどカイを街の宿屋まで送って来るわ。こんな状態のままこの場所に居させるのもね」

「なら、俺が「そうね、それじゃあお願いね」

キリトが何かを言おうとするが、それをアスナが止める。

ミトはカイに肩を貸したままフィールドを歩き、宿屋へと向かった。

「悪いな、ミト。助かる」

「お礼はいいわよ。気にしないで」

カイはミトに身体を預けたまま歩く。

主街区に着き、近くの宿屋へ向かう。

「取り敢えず、今日一日は休んでなさい」

ミトはカイをベッドに下ろし、横にさせる。

「ああ、そうさせてもらうよ。少し楽になった」

「なにか飲み物買ってくるから、少し待ってて」

そう言い残し、ミトが部屋を出て行こうとした。

すると、カイは出て行こうとするミトの腕を掴んでいた。

「えつと……どうかした？」

「あ、いや………」

カイに止められたことに驚くミトだったが、カイ自身もミトを止めたことに驚いていた。

「(しまった、無意識に止めちゃった)あのさ………今は何もいらなからさ、傍に居てくれないか？」

カイの口から出た言葉に、ミトは内心驚いた。

「眠るまでの間でいいからさ、傍に居て欲しい………ダメか？」

「………いいわよ。それに、傍に居てって最初に言ったのは私なんだ

から」

ミトはカイが横になっているベッドに腰掛け、左手をカイの目を覆うように乗せる。

「ほら、目閉じて……………おやすみ」

「ああ……………ありがとう、おやすみ」

ミトにお礼を言い、カイはミトの手の下で瞼を閉じる。

その数秒後には、静かに寝息を立てていた。

そんなカイを、ミトは大切な宝物を眺める子供のような眼差しで見ていた。

第28話 《笑う棺桶》 討伐作戦会議

2024年 8月某日

この日、カイとキリトは56層にある《聖竜連合》のギルドホームに向かっていた。

「なあ、キリト。どうして《聖竜連合》が俺らを呼ぶんだ？」

「さあ。俺も詳しいことは聞いてない」

「ま、行けば分かるか」

暢気に街を歩き、《聖竜連合》のギルドホームのに着くと、そこにはカイ達以外に攻略ギルドやトッププレイヤーパーティー、《血盟騎士団》のメンバーも来ており、その中にはミトとアスナの姿もあった。「ミト、アスナ。2人も来てたんだな」

カイは2人に近寄り、挨拶をする。

「カイ!? どうして……って、カイもトッププレイヤーだから呼ばれるのは当たり前か」

ミトはカイの姿を見て驚くも、呼ばれた理由を察する。

「どういうことだ? 確かに、此処に呼ばれてるのは全員攻略組でもトップクラスのプレイヤーばかりだけど」

そう言いカイが辺りを見渡す。

その中にはクラインとその仲間、ギルド《風林火山》もいた。

《はじまりの街》で別れた後、クラインは仲間たちと合流し、キリトから教わったことを生かして仲間たちと共に鍛え、ゲーム攻略のスタートダツシユには遅れたが、現在では立派な攻略ギルドの一員だ。

「ちよつとこつちにきて!」

すると、ミトはカイの手を引っ張り人気のない場所まで移動する。

「カイ、今すぐ帰りなさい!」

「は? どういうことだよ?」

「いいから! 何も聞かずに帰って!」

ミトの言葉にカイが混乱していると、誰かが手を叩き注目を集めた。

「全員揃ったな! これより、ラフィン・コフィン《笑う棺桶》討伐作戦会議を始める!」

「《笑う棺桶》の……討伐作戦……！」

《聖竜連合》の幹部プレイヤーが放ったその言葉に、カイは驚き、目を見開いた。

「遅かった……」

ミトはこの集まりが何のためなのか知っていたらしく、悔しそうに俯いた。

「まず、《笑う棺桶》の主要メンバーについて説明する。《笑う棺桶》のリーダーのPOH。武器はモンスタードロップの《友切包丁》。本人のステータス、武器の性能も相当なものだが、奴自身の戦闘技術も高い。戦闘になった際は最低でも三人一組で戦え」

ボードを出し、長躯を膝上までのポンチョで身を包み、フードを目深にかぶっている男、POHの写真が貼られる。

「次はザザ。またの名を《赤目のザザ》。針剣使いだ。そして、ジョニー・ブラック。ザザの相棒で毒ナイフの使い手だ。この二人は組んで行動することが多い。2人で10人を超えるプレイヤーを殺害している。POH程の脅威はないが、間違いなく攻略組のトッププレイヤーに引けを取らないステータスを持つてる」

赤い髪に赤い目、そして、髑髏の仮面を付けたザザ、そして、頭陀袋を被り黒い服を着たジョニー・ブラックの写真が貼られる。

「恐らく、今回の作戦に当たって、脅威となるのはこの3人だろう。だが、他の殺人者が危険でないと言うわけではない。油断はするな。続いて、作戦内容について話す。今から配布する紙に詳細を記載しているから見てくれ」

そう言い、部下である《聖竜連合》のプレイヤーが集まったプレイヤーたちに作戦用紙を配る。

「《笑う棺桶》は下層にある洞窟ダンジョンの安全地帯を根城にしている。明朝、奴らが寝静まっている時を狙い、周囲を包囲し無血投降を呼びかける。だが、奴らがそれに大人しく従うとは思わん。十中八九戦闘になるのは間違いない。戦力を削ぎつつ、捕縛する。それが主な作戦内容だ」

作戦会議はそれで終了のはずだった。

しかし、そこで「だが」と付け加えられ、暫く静寂が部屋を包んだ。「物事が予定通りに進まないのは世の常だ。もし、奴らがHPをレツドに落としても戦闘を続行する意思を見せてきた時、そして、自分や仲間を殺そうとした時……躊躇うな。その時が来たら、迷わず行動しろ。いいな？」

幹部プレイヤーはそう言い、最後に作戦開始時刻を伝え、去って行く。

そこから、集まったプレイヤーたちは討伐作戦に備え、装備を整えたり消耗品の補充に向かっていた。

「なあ、カイ。大丈夫なのか？」

キリトはカイに近寄り、そう聞く。

「……ああ、大丈夫だ」

「アスナが無理して参加する必要はないって」

「後で礼を言っておくよ。でも、本当に大丈夫だ」

カイは笑ってそう言うが、その笑みに僅かに陰が差しているのにキリトは気付いた。

キリトの本音としては、カイを今回の作戦に参加させたくはなかった。

殺人に対して強い憎悪を抱くカイが殺人者プレイヤーを前にすればどうなるのか。

およそ四ヶ月前に起きた《圈内事件》、その際に出会ったPOHたち《笑う棺桶》のトップ3に逢った時、カイは3人に斬り掛かろうとした衝動を抑え、シユミットたちを守る事を優先した。

今回はあの時より殺人者プレイヤーの数は多い。

目的は殺人者プレイヤー捕縛だが、戦闘になるのは確実だった。

その中で、もしカイが殺人者プレイヤーを殺害したら。

もし、殺人者プレイヤーに、相棒であるキリトや友達のアスナにクライン、そして、ミトが殺されたりでもしたら。

その時、カイがどうなってしまうのか、キリトには想像がつかなかった。

「ねえ、カイ。今からでも間に合う。今回の作戦は辞退して」

「他のメンバーは私たちの方で説得する。だから」

「それで、俺一人安全な場所で居ろって言うのか？」

カイを止めようとする3人に、カイはそう言った。

「悪いが、今回ばかりは絶対に聞けない。お前たちにもしものことがあつたら、俺は絶対に後悔する。どこまで自分を抑えられるかは分からないし、俺自身どうなるか分からなくて怖いけど……それ以上に、お前たちを失うことが一番怖いんだ。だから……許してくれ」
カイは困ったように笑って言う。

その後、カイは武器のメンテナンスをしてくると言い《聖竜連合》のギルドホームを出て行った。

「……なあ、ミト。頼みがある」

去って行くカイを見送り、キリトはミトを見る。

「今回の作戦、カイの傍に居てやってくれないか？」

「え？」

「いざって言う時、カイを止められるのはミトだけだと思う。《圈内事件》の時、冷静じゃなくなつたカイを止めたのは、間違いなくミトのお陰だ。いや、ミトだからこそカイを止めれた。だから、頼む」
頭を下げて、キリトがミトに頼む。

「分かった、カイの事は私に任せて。だから、キリト。貴方は貴方で絶対に死なないで。カイの為にも」

「ああ、分かってる」

「アスナ、うちのギルドの指揮なんだけど」

「うん、分かった。そっちは私に任せて。ミトはカイ君の事を考えてあげて」

「ありがとう。アスナ、貴女も気を付けてね」

互いに絶対死なない事を約束し合い、ミトはカイの後を追う。

そして、それぞれが仮眠を取って数時間。

攻略組50名による《ラフィン・コフィン笑う棺桶》討伐作戦が開始した。

第29話 壊れ行く心

「全員揃ったな。これより《笑う棺桶》ラフィン・コフィン討伐作戦を開始する！」

作戦結構時間になり、《聖竜連合》の幹部プレイヤーが声を上げる。
《笑う棺桶》ラフィン・コフィンのアジトがあるダンジョンまで回廊結晶を使う！」

そして、ポーチの中から濃紺色の結晶を取り出す。

回廊結晶とは転移結晶と違い『任意の地点』を登録することでその地点を出口に設定できるアイテムで、また、NPCシヨップでは売られてなくボス級モンスターからのドロップかトレジャーボックスでしか手に入れることの出来ないレアアイテムでもある。

更に転移結晶は1人しか使えないが回廊結晶はゲートが開いている間は何人でも転移できる。

「コリドー・オープン！」

回廊結晶を掲げて叫ぶと結晶は砕けてゲートを開く。

「よし、全員、いくぞ！」

最初に《聖竜連合》が入り、次にアスナを筆頭に《血盟騎士団》が続く。

次にキリトが入り、《風林火山》や高レベルプレイヤーによるパーティーが続く。

カイはミトと共に、殿として最後に入る。

「ミト、どうしてお前も俺と同じ配置なんだ？最初の予定だと、アスナと一緒にギルドメンバーの指揮を執るはずじゃ……………」

「1カ所にハイレベルのプレイヤーを固めると戦力に傾きが出るでしょ。それに、万が一奇襲でもされたら危険だし、なるべくハイプレイヤーはバラけさせる必要があるの。特に殿は一番危険だから、私とカイで守ることになったのよ」

もつともらしい理由を述べると、カイは「なるほどな」と言う。

《笑う棺桶》ラフィン・コフィンが根城にしている低層のダンジョンに着くと、全員が緊張した面持ちをしている

計画通りに、迅速に周囲を取り囲み、《笑う棺桶》ラフィン・コフィンへ投降を要求。

それに応じなければ武力による討伐を行い、再度、投降を要求。

(大丈夫だ……落ち着け、冷静になるんだ……！)

殺人者^{レド}の存在が何度も脳裏を過ぎり、カイは右手が震えていた。

その震えを無理矢理抑えようと、左手で掴む。

それでもまだ震えは治まらなかった。

その時、右手が何者かに握られた。

握ったのはミトだった。

「大丈夫だよ、カイ」

ミトの方を向くと、ミトはカイの目を真つすぐと見つめていた。

不思議と、カイはその瞳を見ていると落ち着ついて行き、そして、右手の震えは止まった。

「……そうだな、ありがとう」

無意識にミトの手を握り返し、カイは笑う。

その時だった。

突如、周囲の雰囲気が変わり、カイとミトは自身の武器を構え、背中合わせになる。

「ミト、気づいてるか？」

「ええ、この感じ……来るわ！」

ミトがそう叫ぶと、突如周囲の物陰から大人数のプレイヤーカーソルがオレンジ色の殺人者^{レド}プレイヤーが現れた。

「ラフコフだ！ラフコフが現れたぞ！」

「なんでラフコフが!？」

「まさか、作戦が漏れていたのか！」

突然の奇襲に、討伐部隊は混乱し何とか武器を構えるも圧されていた。

「陣形を崩すな！自身の命を最優先で戦え！」

「正面の殺人者^{レド}は《血盟騎士団》で対応します！」

「側面は《聖竜連合》で受け持つ！他の者は後方の殺人者^{レド}を！」

そんな中、キリト、アスナ、討伐作戦指揮官の声が響き渡る。

「ミト！俺とお前で後方の連中を相手するぞ！」

「了解！」

後方から数人の殺人者^{レド}が迫り、カイはその内の一人と刃を交えた。

最初の一撃を弾いて距離を取り、相手の体勢が崩れたところでカイは殺人者の両腕を斬り飛ばした。

倒れた殺人者に、この日のために用意された最前線で手に入る麻痺毒を塗付したピックを刺して行動を封じる。

その後、背後から奇襲するように殺人者の剣が振り下ろされる。

右足を軸にその場で回転し、ソードスキルを発動する。

ソードスキルのスピードも合わせり、回転と同時に殺人者の攻撃を防ぎ、武器も破壊する。

武器を破壊され殺人者は呆然とする。

「武器は破壊した！大人しく投稿しろ！」

「……………キヒッ！」

カイの言葉に、男は薄気味悪い笑みを浮かべる。

「キヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

けたたましい笑い声と共に、男は隠し持っていた剣を取り出し、襲い掛かる。

カイは咄嗟にカウンターで反撃した。

そして、カイの刀は、その殺人者の首に当たり、そのまま斬り飛ばした。

「しまっ!？」

カイは自分の仕出かした行動に驚き、殺人者へと手を伸ばした。

殺人者のHPは見る見る減って行き、0になった。

殺人者は死ぬ寸前まで、狂った笑みを浮かべカイを見つめていた。

殺人者の身体が砕け散る様を見て、カイは震えた。

（違う……………そんなつもりはなかった……………俺はただ反撃しただけで……………!）

プレイヤーを、人を殺めてしまったことにカイは震えた。

手にした刀が落ち、その場に転がる。

ただの案山子状態であるカイは、殺人者にとっては獲物だった。

殺人者の凶刃が、カイに向かって襲い掛かる。

（俺は……………殺人をした……………人を殺したんだ……………俺も同じだ……………父さんと母さん、文音を殺した奴と同じだ……………同じなら

……………モウ、ドウデモイイヤ)

その瞬間、カイは体術スキルを放った。

体術スキル零距离技《エンブレイサー》が殺人者^{レド}の喉元に刺さる。

そして、足で落としたりした刀を跳ね上げ手に取り、そのまま頭上から殺人者^{レド}の身体を一刀両断する。

「……………ハハ」

HPを0にし、体が砕け散った殺人者^{レド}を見て、カイは乾いた笑い声を出す。

「ヒトラコロスノツテ……………カンタンダナ」

第30話 黒と紅の激突、そして死

笑う棺桶ラフィン・コフィンのプレイヤーを躊躇いなく殺したカイに、ミトは啞然とした。

「か、カイ……？」

殺人者レッドを殺して、全く動きのないカイにミトは声を掛けた。

その瞬間、カイが振り向き、刀の切っ先をミトへと向ける。

「え？」

ミトが驚いていると、カイの刀はミトの横を通り背後から迫っていた殺人者レッドの喉に突き刺さる。

そして、そのまま横に振り頭を斬り飛ばす。

「……………コロサナイト」

カイはそう呟き、光を失った瞳で前方の、殺人者レッドと討伐隊が混戦している場所を見つめ、駆け出した。

「待って、カイ！」

ミトはカイを呼び止めるも、聞こえてないのかカイはそのまま走り去る。

カイは殺人者レッドに情け容赦なく刃を振るい続けた。

四肢を斬り落とし、身動きを取れなくし、心臓に刃を突き刺す。

胴を一刀両断にする。

首を斬り飛ばす。

SAOはゲームであるため血が噴き出ることはないが、もし血が吹き出ていればカイの身体は返り血で、血塗れになっているだろう。

そんなカイに、1人のプレイヤーは恐怖を感じた。

そのプレイヤーはプレイヤーカーソルはグリーンだったが、笑う棺桶ラフィン・コフィンの一員で、POHの悪としてのカリスマに魅了されたプレイヤーだった。

元々現実の世界に嫌気を差しており、世の中に対し不満を持っていた彼にとって、SAO内で悪の限りを尽くすPOHやザザ、ジヨニー・ブラックは憧れの対象だった。

自身もそんな最高の悪になりたという思いから、笑う棺桶ラフィン・コフィンの門を

叩いた。

だが、自分の行いがどれだけ軽率で、愚かだったのかを理解した。目の前でどんどん殺されていく仲間たちに、彼は何もできず体を震わせることしかできなかった。

そして、目の前で新たに一人の仲間が殺される。

殺人者を殺すと、カイはゆっくりと顔を上げ、男を見た。

「ひい!!」

男はカイの目を見て戦意を喪失し、武器を放り捨て両手を上げた。

「と、投降する!だからお願いだ!命だけは!」

「……ソウイツテ、オマエハナンニンコロシタ?」

腹の底から恐怖を感じる様な声が、男の心臓を掴む。

「ヒトノイノチヲ、サンザンウバッタオマエタチニ、イキルケンリハ、ナイ!」

そして、カイは男の両脚を斬り落とした。

「うわああああああああ!!」

男の両脚を斬ったことで、カイのカーソルはオレンジとなる。

だが、カイにはその程度関係なかった。

「シネ」

カイの刀が男の首を撥ねる。

その瞬間だった。

鋭い金属音が響き、カイの刀は男に届かなかった。

カイの刀を受け止めたのは、黒い剣の刃だった。

そして、その剣の持ち主はカイの相棒、キリトだった。

「カイ止せ!相手は投降の意志を示してるんだぞ!殺すな!」

「キリト……?」

キリトの姿を見た瞬間、カイの心が揺れ、僅かに憎悪が薄れた。

「……投降してもそいつは笑う棺桶ラフィン・コライン。始末するべきだ」

「コイツはグリーンだ!まだ殺人をしていない下っ端だぞ!ソイツまで殺すのは間違ってる!」

キリトの言う通り、男は笑う棺桶内でも圈内で情報収集したり、獲物を待ち伏せ場所まで誘導するのが主な役割で人を手に掛けたこと

はまだなかった。

だが、そんなことは今のカイには関係がなかった。

「笑う棺桶に所属してる以上、ソイツも殺人者だ！カーソルの色なんか関係ない！」

「……………そんなに殺したいのか？コイツを」

「……………俺はもう6人殺した。もう後戻りは出来ないんだよ。なら、人殺しは人殺しなりの道を歩むだけだ」

「そうか……………なら、止めてやるよ！」

そう言い、キリトは勢いよくカイの刀を弾き返した。

「来いよ、カイ。お前が人殺しの道を歩むって言うなら、俺は全力でそれを止める。それが、相棒としてお前にしてやれる俺なりの行動だ」

「……………そうかよ。なら俺とお前の仲は、今日限りだ！」

カイは一気にキリトとの距離を詰める。

キリトも迎え撃つ覚悟で、カイの刀を受け止める。

二年近くコンビを組んでいたこともあり、互いの癖や戦法を知り尽くしていたこともあり、二人は数合打ち合う。

「そんな……………」

カイに追いついたミトは、カイとキリトが刃を交えているのにショックを受けた。

「……………どうしよう……………私の所為だ……………」

ミトは今にも泣き出しそうな表情で、二人を見る。

「……………カイを止めれなかった……………近くに居たのに……………私が動けていれば、こんなことには……………！」

カイの暴走は自分の所為だとミトは責め続けた。

「そこを……………退け！」

「退かない！」

一進一退の攻防を繰り返して、互いに鏝競り合う。

「いい加減にしろよ！俺はもう戻れないんだ！戻れないなら、せめて誰も死なずに済むようにしたいんだよ、俺は！」

「それで全部一人で抱え込むのかよ！お前が一人で苦しんで抱え込むうってしてるのに、俺たちだけ笑って暮らしてろって言うのか！そん

なの、認められるか！」

キリトの左手の拳が赤いライトエフェクトを纏い、カイに向けられる。

「いいからー！」

右手一本で、剣を操りカイの刀を受け流し、カイの態勢を崩す

「いつものカイに戻りやがれ！馬鹿野郎！」

体術スキル《閃打》がカイの腹部に当たる。

「がっ!？」

キリトの放った一撃でカイのHPは3割削られる。

「この……舐めるな！」

カイは体勢を崩されたまま、キリトに向かって体術スキル《弦月》を使い、蹴り飛ばす。

「がっ!？」

そして、カイは刀スキル《紫電一閃》を放つ。

(!?しまったー！)

そこでカイは自身の過ちに気づく。

体術スキル《弦月》からの刀スキル《紫電一閃》のコンボは、カイが得意とする戦法で亜人型Mobによく使っている手だ。

暴走し、冷静でなかったカイはそのコンボをキリトに使ってしまった。

幾らキリトと言えども、このコンボを食らえば一溜りもなく、もし、頭や心臓に当たればHP全損は免れない。

「避ける!!」

カイが叫ぶ。

しかし、キリトが立ち上がるうとした瞬間には剣先はキリトの心臓を捕らえていた。

ドスッ！

カイの刀が胸元を貫く。

だが、貫いたのはキリトの心臓ではなかった。

カイの持つ刀《紅雪》の赤い刀身が貫いたのは、ミトだった。

「ミト………ト?」

「良かった………今度は、止められた………」

「あ、ああ………ミト、そんな………」

「ごめんね………もっと早く止めてれば………カイを苦しめずに済んだのに………」

「黙ってろ！」

カイは慌てて刀を抜き、急いでポーチから回復結晶を取り出しミトのHPを回復させようとする。

「ヒール！」

だが、エラー反応によりミトのHPは回復しなかった。

それはミトのHPが全損していることを示していた。

「そんな………ミト………俺の所為で………」

「気にしないで、カイ」

ミトはカイを優しく抱きしめ、語り掛ける。

「大丈夫、だから」

いつもの笑顔でミトはそう言った。

そして、ミトのHPは底を尽き、ポリゴンの欠片となって消えた。

第31話 確固たる意志

「そんな、ミト……………！俺は、俺はなんてことを！」

誤ってミトを殺してしまったことに、カイは膝を付く。

そして、無意識に手にした刀を自身の首へと持って行こうとした。

「カイ、早まるな！」

キリトが大声でそう叫び、ある物を取り出す。

手の平で握れるサイズの大きさの、七色に輝く宝石だった。

「蘇生！ミト！」

キリトの手にしたそれは、砕け散りポリゴンの欠片になる。

そして、散らばった欠片は再び集まり、人の形を形成する。

それはミトだった。

「……………ミト？」

「……………ん？あれ？私……………助かったの？」

辺りを見渡し、ミトは自分が助かったことに気づく。

「良かった……………本当に、良かった……………！」

ミトが助かったことに、カイは安堵し涙を流す。

「ふう、間に合って良かったよ」

キリトは立ち上がり、カイとミトに近寄る。

「キリト、もしかして貴方が？」

「ああ。持っていて助かったよ」

キリトが使ったのは《還魂の聖晶石》と言うアイテムで、SAOに唯一存在する蘇生アイテムだ。

このアイテムはメニュー画面から使用を選択するか、手に持った「蘇生+《プレイヤー名》」を言うことで、対象プレイヤーが死亡してから10秒間以内なら対象プレイヤーを復活させることができる。

このアイテムは、2023年の12月24日に、キリトとカイ、そしてクライン達《風林火山》とディアベルたち《希望の騎士団^H》のパーティーでクリスマス限定のモンスターを討伐し、キリトがドロップしていた。

クラインやディアベルも、キリトとカイはコンビだから二人が持つ

のがいいとのことで、キリトはその言葉に甘えて、《還魂の聖晶石》を貰っていた。

「まさか、こんなタイミングで使うとは思ってもなかったけどな」

「……………キリト、俺……………すまなかった」

「たつく。本当に世話の焼ける相棒だよ、お前は」

キリトは困った様な、安堵した笑みを浮かべカイを見る。

「それで？折角の感動のシーンなのに、のぞき見とは随分悪趣味だな」

そう言い、キリトは背後にいる何者かに声を掛ける。

「覗かれたくなかったら、こんな戦場のど真ん中で青春劇繰り広げらんじゃねえよ！」

「……………」

現れたのは愉快そうに笑っているジョニー・ブラックと、不愉快そうに無言でいるザザだった。

「見えていてもスルーするのが常識じゃないか？ま、お前たちに常識を説いた所で無駄か」

キリトは溜息を吐き、愛剣《エリュシデータ》を構える。

「ミト、カイを連れて下がってくれ」

「ちよっ何言ってるのよ！相手はジョニー・ブラックとザザよ！一人で戦える相手じゃ！」

「今のカイを一人にはできないだろ。頼む、数分ぐらいなら俺一人でもやれる」

「……………分かったわ」

ミトはそう言うと、カイの手を取り後ろへと下がった。

「ミト待て！キリトが……………キリト！」

後ろへと連れて行かれるカイを見送り、キリトはジョニー・ブラックとザザの二人と対峙する。

「しっかし、面白いものがみれたぜ。殺人嫌いが殺人を犯すとか、最高のエンターテイメントだなあ、ザザ！」

「くだらない……………俺は……………奴を……………殺したかった……………だが……………今の……………アイツは……………殺す……………価値が……………無い」

「ま。ザザはそうだろうけどさ。俺としては傑作も傑作、大傑作！見

て見たかったぜ、アイツがぶっ壊れた時の顔がよお！態々殺されに行くように部下の一人を喉けた甲斐があったぜ！」

ジョニー・ブラックのその言葉に、キリトは反応した。

「おい、ジョニー・ブラック。それはどういう意味だ？」

「あ？どうもこうも、言葉通りさ！《紅蓮の剣豪》が忌み嫌う殺人を《紅蓮の剣豪》自らが行う！最高に面白いだろ？」

「なんでそんなことをした？」

「ハッ！理由なんてねえよ、ただ気になったから試した。それだけさ」

「……………そうかよ」

そう言い、キリトは素早くメニューウインドウを操作する。

そして、キリトの背中に新たな剣が現れ、キリトはそれを抜く。

その白銀の剣の名は、《ダークリパルサー》。

《エリユシデータ》とは別の、キリトのもう一つの愛剣だ。

「お前らだけは、俺が倒す」

キリトは2人、特にジョニー・ブラックに対して静かに怒気に向け、剣を振るう。

ミトに連れられ、カイは後方に下がる。

《笑う棺桶》との戦闘は殆ど鎮静しており、後はまだ抵抗を続けているプレイヤー相手に戦っている。

「ミト！何があったの！」

すると、指揮を執っていたアスナがやって来る。

「ミトのHPが無くなって驚いてたのに、急にまたHPが現れてもう

何がなんだが……………」

「そのことは後で説明するから。それより、今キリトが奥でジヨニー・ブラックとザザ相手に一人で戦ってる。すぐに向かわないと」

「キリト君が!?なら急がないと!」

「アスナ。アスナはこのままここに残ってて、私が助けに行くから」

「え!?で、でも!」

「お願い。今のカイを一人にはできない」

ミトはそう言い、カイを見る。

「カイ」

座り込んでいるカイと目線を合わせ、ミトは言う。

「カイはもう戦わなくていいよ」

「え?」

「カイは、ずっと苦しんでたよね。それでも、攻略組の一員として頑張って戦ってきた。今回だってそう。本当は人を殺す事になるかもしれないのに、私達を死なせたくないからって参加した。でも……………カイが苦しむぐらいなら、もう戦わなくていい。私が、カイの分まで戦う。だから、もういいんだよ」

「……………ミト」

「アスナ!カイをお願い!」

「ちよつミト!」

走り去っていくミトを追い掛けようにも、カイの様子がおかしい事と、カイのプレイヤーカーソルがオレンジになっている事が気になりアスナは動けなかった。

「カイ君、大丈夫?」

「……………アスナ、ごめん。俺の所為だ」

謝るカイに、アスナは何かを感じ取りミト同様目線を合わせる。

「カイ君、何があったの?」

「キリト！」

ミトは二振りの片手剣を巧みに操り、ジョニー・ブラックとザザ相手に激戦を繰り広げるキリトの元に辿り着く。

キリトはミトが来たことに気づき、大ぶりの攻撃を放ち、ジョニー・ブラックとザザの二人を自分から遠ざける。

「ミト！カイは？」

「アスナに任せて来た！そっちは大丈夫？」

「ああ、なんとかかな！とりあえず、ザザの相手を任せていいか？ジョニー・ブラックは俺が相手する！」

「構わないけど、大丈夫なの？」

ジョニー・ブラックとザザ。

この二人の実力はほぼ同じぐらいだが、ジョニー・ブラックは毒を使ってくるため、少しでも攻撃を食らえば戦闘不能になり殺される。

その危険は、キリトも承知だった。

「コイツだけは、絶対に許せないんだ！こいつは、俺が必ず倒す！《対毒》スキルはあるし、対毒ポーションも飲んである！心配するな！」

「分かった！なら、こっちは任せて！」

ミトは愛鎌を手に、ザザへと攻撃を繰り出す。

ザザは針剣エストックを手に、ミトの攻撃を受け止める。

「《死線》か……お前を殺せば……《紅蓮》は……本気になるか……試して……やろう……」

「それはどういう意味？」

「貴様に……語る理由は……無い……ただ……俺は……戦いたい……ただだ……本気の殺意を……ぶつけてくる……奴と」

「あつそ。でも、お生憎様。カイはアンタとは戦わないし、アンタはここで終わるの。この後、牢獄に行くからね！」

ザザの針剣^{エストック}を弾き、ソードスキルを放つ。

ザザは後ろに飛び退き躲す。

そして、連続突きのソードスキルでミトに攻撃を仕掛ける。

ミトは武器防御スキルを発動し、ザザの攻撃を防ぐ。

ザザは接近しミトに攻撃を仕掛けるも、ミトはザザと一定の距離を保ち続けながら戦闘をする。

ザザの武器、針剣^{エストック}は、攻撃力は高くはないもののスピードがあり、また急所に当て、クリティカルを発生させることで一撃の威力を高めることができる。

対してミトの武器、両手鎌は攻撃範囲が広く、攻撃力が高いが、その分小回りが利かず、懐に潜り込まれると反撃が難しいため、ミトは一定の距離を保って戦う必要があった。

「本当に……アイツは……来ないんだな……」

数分程戦っていると、ザザは突然そう言い出した。

「だから何？アンタには関係ないでしょ」

「関係は……無い……だが……残念だ」

落胆の声を発すザザに、ミトは怒りを覚える。

「人1人……殺すだけで……暴走して……正気になったかと……思えば……戦いを放棄する……本当に……残念だ……殺して……やりたかったのに……あんな臆病者だった……とはな」

「いい加減にしなさいよー」

ミトがザザに対し怒鳴る。

「カイの事、何も知らないくせに好き勝手言うんじゃないわよ！カイが、今までどれだけ苦しんでいたのか……苦しみの中でどれだけ頑張ってたか……それも知らずに、カイを臆病者呼ばわりするな！」

ミトは渾身の一撃、両手鎌スキル《グリムゾンロード》を放つ。

現時点での、ミトが使える上級のソードスキルだった。

《グリムゾンロード》は、単発で頭上から大きく振り被った一撃を放つだが、発動動作が分かり易いという欠点がある。

だがミトは、自身のレベルやステータスの補正、加えて敏捷値や筋力値を利用したシステム外スキル《スキルブースト》を使えば、躲す

ことはできないのが分かっていた。

「ふっ……掛ったな……!」

ザザはそう呟き、エストック針剣を構える。

そして、ソードスキルの《スピカ・キャリバー》が放たれる。

5連撃の突きの内、三連撃がミトの鎌にぶつかり、発動直前だったミトのソードスキルは打ち消された。

「しまっ!」

そして、無防備となったミトに残りの三連撃の突きが当たる。

「がっ!」

2連撃の突きは、ミトの鎌を弾き飛ばし、ミトは衝撃でその場に倒れる。

「ふっ!」

さらに、ザザが追撃としてミトの両目を斬りつける。

「ぐっ!」

「視界を……封じた……これで……お前は……戦えない……」

(やられた……! 武器は! 武器は何処……!)

見えない状態で手探りで愛鎌を探すも、近くにはないらしく手は何も掴まなかった。

武器を探すのは諦め、投げナイフを抜くもザザが何処にいるのかは、分からなかった。

「ミト! 気を付けろ! ザザはお前の「おっとさせねえよ!」

キリトがザザの位置を教えようとするも、ジョニー・ブラックが横入りし、邪魔をする。

ザザはミトの背後に立っていた。

「お前が死ねば……アイツも……本気を出すかもな……!」

ザザの一撃がミトに振り下ろされる。

ミトは背後の気配を感じ取り振り向く。

だが、既に遅くザザのエストック針剣はミトの首を狙った。
キンッ!

金属音が響いた。

「お前は……!」

ザザが驚きの声を上げる。

しかし、その言葉には僅かに喜びを帯びていた。

「ミトに……手え出すんじやねえ！」

ザザの針剣^{エストツク}を受け止めたプレイヤーは、刀を一閃し、ザザの武器を弾くと同時に、ザザを後退させる。

「やつとききたな……《紅蓮の劍豪》カイ……！」

ザザは、ようやく表れたカイを前にそう声を上げた。

カイは先程と打って変わって、確固たる意志を持った目でザザを睨み、ミトを守るため立っていた。

第32話 見るもの

「カイ君、何があったの?」

ミトが去った後、アスナはカイと視線を合わせカイに尋ねた。

「……………ミトを、殺したんだ」

カイは包み隠さず、アスナに全てを話した。

弾みで殺人者^{レド}を手に掛けた事を。

自棄になり更に殺人者^{レド}を殺したことを。

拳句、まだグリーンだったプレイヤーを殺そうとした事を。

それをキリトに止められ、そのままキリトと斬り合い、殺しそうになつた事を。

そして、キリトを殺そうとした自分を止めようとミトが死んだことを。

「笑えるよな……………殺人嫌いの俺が殺人を犯して、自棄になって殺しまわり、拳句相棒まで殺そうとした。……………そして、ミトも殺した。お前たちの言う通りだった……………俺は今回の作戦に参加すべきじゃなかったんだ。いや……………そもそも攻略組として戦うことも、お前たちと関わること自体、するべきじゃなかったんだ」

涙を流し、俯き言うカイにアスナはカイの頬を両手で挟んで無理矢理顔を上げさせた。

「しっかりとしなさい!!」

大きな声で言われ、カイは驚き涙が引つ込んだ。

「私もキリト君も、ミトも貴方が心配で今回の作戦に参加するべきじゃないって言ったわ!でも、それはカイ君の心が壊れたりしないかが心配で言ったの!だけど、貴方は私たちを失うことが一番怖いから今回の戦いにも参加したんでしょ!男の子なら、最後までその言葉に責任持ちなさい!」

「……………でも、俺はミトをこの手で……………」

「でも、まだ失っていないでしょ」

アスナはミトが走って行った方を指差し言う。

「ミトはまだ生きてる。失ってなんかいない。キリト君だってまだ無

事よ。カイ君は、まだ失っていない。戦う意思だつて失つてない」
アスナの言葉に、カイは右手に握り締められている愛刀「紅雪」を見る

「ミトの言う通り、カイ君がもう戦いたくないならそれでもいいよ。でも、まだ戦うなら……ううん、ミトを守りたいなら立ちなさい！今自分が何をしたいのか、何を見るべきなのか！ここではつきりさせなさい！」

アスナの言葉に、カイは刀を握り直し立ち上がった。

「すまなかつた、ありがとう、アスナ」

アスナにそう言い残し、カイはミトの後を追った。

「……………気を付けてね」

カイを見送り、アスナは再び戦場へと戻った。

「カイ……………なの？」

カイの声にミトはそう尋ねた。

「……………ああ」

カイは暫しの沈黙を以て、短く答えた。

「どう……………して……………」

再び戦場に戻つて来たカイに、ミトは驚きを隠せなかった。

「……………その話は後だ。今は、こつちが先だ」

カイはミトの方を振り向かず、ザザを見たままそう言う。

「カイ！」

キリトはジョニー・ブラックを引き剥がし、ミトを間に挟む形でカイと背中合わせになる。

「大丈夫なのか！」

「……ああ。キリト」

「なんだ？」

「ザザの相手は俺に任せてくれ」

「……いいのか？」

「あんなこととして、俺を信じれないだろう。でも、信じてくれなくていい。こいつは、一方的な頼み事だからな」

「……変なこと言うな、カイは」

キリトは「エリユシデータ」を持った右手で器用に額を搔き言う。

「俺とお前の間に、信じる信じないなんてものがあると思ってるのかよ、相棒？」

キリトはそう言い、再びジョニー・ブラックへと攻撃を仕掛けた。

「……ありがとう、キリト」

小さな声で礼を言い、カイはザザに刀を向ける。

「……………はあ」

ザザは小さく溜息を吐いた。

「随分と詰まらなさそうだな。お望み通り、相手してやるつてのに」
穏やかな口調のカイに、ザザは更に詰まらなさそうにする。

「俺は……あのお前と……戦いたかった……俺たちに……炎の様な……憎悪を……向ける……お前と……今の……お前は……ただの残り火だ」

「……そりや期待に沿えなくて悪いな。だがな、残り火だって放置すりゃデカくなるぞ」

「なら……俺が……消してやる……！」

ザザが飛び出し、^{エストック}針剣で攻撃を仕掛ける。

「ミト、そこから動かないでくれ！」

カイはミトにそう呼び掛け、ザザと剣を交える。

ザザの素早い刺突を全て往なし、カイはザザの腕や足を狙い、刀を振る。

先程の戦いと違い、敵の機動力や戦闘力を奪う戦い方。

その姿には、あの自棄になり人の命を奪う戦い方は微塵も感じられなかった。

(なんだ……この戦い方は……)

そんなカイの戦い方に、ザザは不満を抱いた。

ザザが、カイと剣を交え合うのは、これが初めてじゃない。

自身が、〃赤目のザザ〃として名を馳せた時から、幾度なくカイとザザは戦い合った。

その時のカイは、一心にザザ達殺人者に憎悪を向け刃を振るっていた。

そんなカイに、ザザは心が躍っていた。

ザザの現実^{リアル}は、ザザにとって息苦しかった。

総合病院のオーナーをしている医者^ドの家に長男として生まれるも、虚弱体質で後継ぎとしては頼りないとされ、その後^ドに生まれた弟ばかりに期待を寄せる父親が嫌いだった。

それ以上に、誰も自分を見てくれない現状、まるで存在しないように扱われる現状が辛かった。

だが、SAOは違った。

SAOなら現実の虚弱体質関係なしに動け、そして、殺人のセンスを見出し自身を必要としたP.O.H、ウザいながらも相棒として隣にいるジョニー・ブラック。

そして、自分を見てくれるカイ。

いつしかザザは、カイが自分に憎悪を向けている時に生を感じていた。

そんなカイと殺し合い、自分が殺せば、自分は更に生を感じられる。

自分の存在を証明できるのだと。

だが、今のカイにはそんな憎悪は感じられなかった。

ミトを殺そうとして、カイが底いに来た時、ザザはカイが再びあの憎悪を向けてくれるのではと喜んでいた。

しかし、カイから憎悪は感じられなかった。

(向けるよ……あの皮膚が……焼け付くような……！強い憎悪を……！向ける！)

とうとう不満は爆発し、ザザは《リニア》を放った。

下級のソードスキルではあるが、ザザのレベルとシステム外スキル

《スキルブースト》を以ってすれば、それは光速にも匹敵する速さとなる、が、カイは《リニアー》を躲した。

だが、ザザの狙いはカイではなかった。

カイの腕前ならザザ程度のリニアーを躲すのは容易い。

無論、それはザザも分かっていた。

ザザが狙っていたのはミトだった。

ミトはザザの攻撃が深く、視力がまだ回復しきっていないなかった。

ザザは《リニアー》を使えば、カイが躲すと分かっていた。

そして、《リニアー》のスピードで一気にカイとの距離を取り、ミトへと向かう。

(この女だ……この女を殺せば……アイツは……もう一度あの憎悪を……!あの燃える様な……憎悪と殺意を……向けてくれる!だから……死ぬ……女!)

ザザの刃がミトの心臓目掛け放たれる。

「おい」

その瞬間、ザザは背後で熱を感じた。

S A O内ではダンジョン内で熱を感じるのとは二つのパターンがある。

1つは松明とかの照明アイテム。

もう1つはM o bのブレス系の攻撃。

だが、照明アイテムは洞窟ダンジョンと言った暗いダンジョンで使用するもので、ザザ達《ラフィン・コフィン笑う棺桶》が根城にしているダンジョンは当てはまらない。

そして、ブレス系の攻撃をするM o bも中型く大型と言った物だけ。

こんな低層ダンジョンでは、まず出現はしない。

だが、ザザは間違いなく熱を感じた。

ザザは思わず振り返った。

そこにはカイが居た。

「お前の事なんて、お見通しなんだよ。お前なら、あの時点で《リニアー》を使う選択なんて取らない。なら使う理由は俺との距離を取る

ため。そして、距離を取るのはミトを殺す為、だろ？」

そう言い、カイはザザへと刃を向ける。

ザザは確かに見た。

カイの刀身に炎が纏わり付くのを。

だが、S A Oに魔法は存在しない、無論属性を付与させる付与魔法エンチャントもない（一部例外あり）。

それでも、ザザは炎を見た。

そして、カイのその瞳も。

カイは自分に刃を向けている。

だが、憎悪も殺意も無かった。

カイの瞳は、ザザを見ていなかった。

カイは、護るミトべき者だけを見ていた。

「くっ……俺を……俺を見る…… 《紅蓮の剣豪》！」

「……悪いが、俺はもう見る者を間違えない。今の俺にはな……」

カイは優しい眼差しで、ザザの背後のミトを見つめる。

「ミト以外、何も見えてないんだよ」

その言葉を最後に、カイの一撃はザザの身体を斬った。

第33話 風に消えた言葉

「くっ……そ………」

カイの攻撃を食らったザザはダンジョンの壁に叩き付けられ、そのまま座り込むように倒れた。

そんなザザに、カイは麻痺毒を塗付したピックを刺した。

「ぐっー」

ザザは苦しそうに短く悲鳴を上げる。

そんなザザを無視し、カイはアイテムストレージからロープを出し、ザザを拘束した。

「………カイ」

名前を呼ばれ、振り返るとミトが後ろに立っていた。

ザザに斬られた両目は回復し、その両目でカイを見ていた。

「………ミト」

カイはそう言うと、ミトを抱きしめた。

「ちよっカイ!?!」

行き成り抱きしめられ、ミトは慌てるもカイの身体が震えているのに気づいた。

「赦してくれとは言わない。助かったとはいえ、俺はお前を殺した。どんな償いでもする。だから………今だけは」

「………うん、いいよ」

ミトはそう返し、カイを抱きしめ返した。

カイは何も言わずミトを抱きしめ、ミトも何も言わずカイを抱きしめた。

「すまない、ミト」

十数秒程、抱きしめ合っていると、カイはそう言いミトを離れた。

「別にいいわ。もう大丈夫?」

「ああ、お陰様で」

「そう………よかった」

「カイ!ミト!」

「ミト!カイ君!」

二人が離れたタイミングで、キリトとアスナの二人が現れ、カイとミトはそつちを見る。

「ミト、良かった。無事だったんだね」

「無事とは少し言い難いかもだけど、結果だけ見れば無事よ」

「キリト、ジョニー・ブラックは？」

「ああ、問題ない。もう倒した。拘束して、今頃牢獄に収監されてるはずだ」

互いに無事を確認し合い、キリトは拘束されているザザを見る。

「ザザか」

「ああ。麻痺毒でまだ動けないだろうし、武器も奪ってある。脅威はもうないだろう」

「そうか」

「キリト、悪いがザザを頼めるか？俺、犯罪者オレンジになっちまったから、カルマ回復クエストを受けて来る」

カーソルが一般人から犯罪者オレンジになった時、カーソルの色を戻す方法はカルマ回復クエストと言う、罪を犯し、カーソルがオレンジになったプレイヤーがカーソルをグリーンに戻すために受けるクエストを受けないといけないが、その手順がかなり七面倒なクエストだ。

後は暫く放置することでカーソルがグリーンに戻るが、その場合だとカーソルがグリーンに戻るまで主街区や街に立ち寄ることが出来なくなる。

「本当は、俺の罰だからグリーンに戻るまで待とうと思ったけど、最前線を長く空ける訳にも行かないからな。手取り早くクエストを受けて来る」

カイがそう言うのと、キリトとアスナは驚いた顔をした。

「なんだよ、その顔は？」

「いや、カイの事だからまた責任取って攻略組を抜けるとか言うと思っただから」

「うん、私もそう言うと思ってた」

「ぶつちやけると、どうやってカイを引き留めるか考えてた」

そう言うキリトとアスナに、カイは乾いた笑いをする。

「まあ、確かにそうするつもりはあったよ。でも、そんなことしても俺の自己満足に過ぎないからな。それに、アスナも言っただろ？男の子なら、自分の言葉に責任を持ってって」

カイはアスナを見て、そして、キリトを見る。

「キリト、俺とお前がコンビを組んだ日に俺が言ったこと覚えてるか？」

「……ああ。このくそつたれなゲーム終わらせて、茅場の奴をぶん殴る、だろ？」

「ああ。その発言にも責任取らないと行けないからな」

そう言い笑うカイに、キリトも笑った。

「早く戻って来いよ。お前が居ないと、戦い辛いんだからな」

「ああ、分かっているさ。相棒」

拳をぶつけ合い、カイは転移結晶でカルマ回復クエストが受けられる第1層の街へと向かった。

「アスナ、私もさ」

「いいよ、行ってきて」

ミトが何か言う前に、アスナはミトにそう言った。

「手伝いたいんでしょ？団長には私から報告しておくから、ミトはカイ君の傍に行つて上げて」

「アスナ……うん、ありがとう！」

ミトはそう言い、カイの後を追う様に転移した。

『神もきつと、貴方の罪をお赦しになるでしょう』

NPCの神父にそう言われ、カイとミトは頭を下げ教会を後にする。

「これで五つ目。この調子なら、明日には終わりそうね」

「ああ。それにしても、カルマ回復クエスト初めて受けたけど、こんなにも面倒なんだな」

カルマ回復クエストは第1層のフィールド内にある教会を巡り、そこで起きるクエストをクリアし、それを七つの教会で行い全てを終わらせると罪が許され、カーソルがグリーンに戻る。

「なあ、ミト。本当に良かったのか？これは俺の罰だから、ミトと一緒にやる必要はないんだぞ？」

「気にしないでいいってば。私がやりたいからやってるだけよ。それに、もし軍の連中に見つかって、難癖付けられたら大変でしょ？」

「だけど……………」

ミトに対し負い目があるカイは、申し訳なさそうな顔をする。

「……………あのさ、どんな償いでもするって言ったよね？」

「あ、ああ」

「じゃあさ……………ずっと傍に居てよ」

「……………え？」

突如吹いた風に掻き消されるかのように言われた言葉に、カイは思わず聞き返した。

一方でミトは、自分の言った言葉に恥ずかしさを感じ、驚くほど顔を真っ赤にしていた。

「や、やっぱり今のなし！忘れて！」

そう言い、ミトは次の教会に向けて足早に歩き出す。

「あ、待ってくれよ！」

そんなミトをカイは慌てて追いかけた。

（何言ってるのよ私は！あの後じゃ、カイに拒否権なんてないじゃん！私の馬鹿！）

（忘れてくれ、か……………別に俺はミトが相手なら……………いいんだけどな……………）

第34話 護衛

《笑う棺桶討伐作戦》から二ヶ月近く経過した。

最前線は74層となり、アインクラッド全体の4分の3近くまで攻略が進んでいた。

「スイッチー！」

「はあああああ!!」

74層迷宮区で、カイとキリトは迷宮区攻略とレベリングに勤しんでいた。

「キリト、そろそろ帰ろうぜ」

時間も丁度良くカイは新しい愛刀『焰群』を鞘に収めつつ、キリトに言う。

「そうだな。帰るか」

キリトも『エリユシデータ』を背中の鞆に戻し賛成する。

「この調子なら、今週中には74層は突破できそうだな」

「できれば今年中に、80層までは到達したいけど……」

「75層、クォーターポイントか」

「ああ。25層、50層同様強力なボスモンスターが配置されてるはずだ」

二人して攻略のことを話しながら、迷宮区を出ると近くの茂みで何か動くのにキリトが気付く。

キリトは立ち止まり、無言でカイに目配せする。

カイは頷き、ピックを取り出す。

キリトもピックを抜き、そのまま投擲スキル《シングルシュート》を茂みに向けて放つ。

すると、茂みの中から何かが飛び出し、その姿を露わにする。

その瞬間、待ち構えていたカイが同様に《シングルシュート》を打ち、ピックはその何かを仕留めた。

「おい、キリト！カイ！なんだよこれは!？」

50層《アルゲート》にあるエギルの店で、本日の取得アイテムの売買をしてもらおうと手に入れたアイテム一覧をエギルに見せると、エギルはそう声を上げた。

「S級のレア食材、《ラグー・ラビットの肉》じゃねえか！それも2つも！どんな幸運^{Luck}してんだよ！」

茂みから飛び出したのは《ラグー・ラビット》と呼ばれる滅多に遭遇しないレアモンスターで、倒すとS級食材アイテム《ラグー・ラビットの肉》をドロップする。

キリトとカイはそれを見事倒し、更には本来は1つしかドロップしないS級食材を2つもドロップした。

食べたことのないS級食材に、最初はカイもキリトも大喜びするもよくよく考えて二人共《料理》スキルを持っていない為、こうしてエギルの店で換金することにした。

「売っちゃまっていいのか？お前ら、金には困ってないだろ？自分らで食おうとは思わなかったのか？」

「そりゃ思ってたさ」

「この先、また食えるかどうかも分からないしな」

「でも、俺もカイも《料理》スキルなんて取ってないし、それにS級食材を扱える程スキルを上げてる奴も心当たりが……」

「キリト君、カイ君」

その時。2人の背後から声が聞こえた。

振り向くと、そこにはアスナが居た。

アスナを見るなり、キリトはアスナの手を掴みこう言った。

「シェフ捕獲」

「な……なによ」

訝しげな顔になって後ずさるアスナだが、少し嬉しそうだ。

それが面白くないのかアスナの後ろに居る長髪を後ろで束ねた痩せた男が、キリトに殺気に満ちた視線を向けている。

「アスナ、確か《料理》スキル持ってたよな？今、いくつだ？」

「《料理》スキル？それなら、先週完全習得したけど？」

「なっ!?」

非戦闘系スキルを完全習得したと言うアスナに、カイもキリトも驚きを隠せずに居た。

それもそのはず、スキルの熟練度はスキルを使うことで遅々とした速度で上昇する。

戦闘職のプレイヤーなら、メインで使う武器の熟練度を完全習得していてもおかしくはない。

だが、アスナは戦闘職のプレイヤーでありながら、非戦闘系スキルを完全習得した。

それには途轍もない時間と情熱を費やしているのだ。

「その腕を見込んで頼みがある」

そう言うと、キリトはアスナにアイテムウインドウにある《ラグー・ラビットの肉》を見せる。

「え！《ラグー・ラビットの肉》!? S級のレア食材じゃない！」

「取引しないか？こいつの調理をしてくれたら、一口「は・ん・ぶ・ん！」……分かったよ、取引成立。というワケだ。エギル、取引は中止だ」

「い、いいけどよ。なあ、キリト、俺達ダチだよな？俺にも味見ぐらい……」

「感想を800字以内で書いてきてやるよ」

「そ、そりゃあないだろ！」

嘆くエギルを他所に、カイ達は店を出る。

「なあ、アスナ。今日、ミトは一緒じゃないのか？」

「うん。今日は、迷宮区で新人のレベリングに付き合ってるの。多分

そろそろ終わるはずだけど……」

「そうか。キリト、俺ちよつとミトに用事あるから《ラグー・ラビツトの肉》は2人で食ってくれ」

「え? いいのか?」

「俺はまたの機会に頼むよ。それじゃあアスナ」

カイはアスナに近寄り、こつそり耳打ちする。

「お膳立てしてやったんだから、少しは距離縮めろよ」

「なっ!?!」

「それじゃあキリト、また後でな」

キリトとアスナに別れを告げ、カイは迷宮区へと再び向かった。

迷宮区に着くと、ちよつと《血盟騎士団》のパーティーが迷宮区から出てくるのが見えその先頭には見慣れた紫髪の鎌使いの姿があった。

「あ、カイ!」

ミトはカイの姿を見つけると嬉しそうに小走りで駆け寄ってくる。

「こんなところで会うなんて偶然ね。どうしたのよ?」

「ちよつとミトに用があつてな」

「私に?」

「ああ、実は……」

そこまで話し、カイはまだ他の《血盟騎士団》の団員がいることを思い出す。

ミトも気づき、カイに少し待つように言つて団員の方を振り返す。

「今日のレベリングは終了よ! 各自解散! ポーションや結晶アイテムの使用数の報告は忘れない様に!」

ミトの指示に、団員たちは返事をし帰って行く。

「コユキ、貴女も帰つていいわよ」

ミトは、最後に残つた少女にもそう言った。

「ダメですよ、ミト様! ミト様を《圏外》に! それも、素性の知らない不審者なんかと一緒に置いて行けません!」

コユキと呼ばれた少女は、カイを睨みつけそう言う。

「大丈夫よ。彼は私の友人だから。彼と二人で話があるから、今日の

護衛はもういいわ」

「駄目ですよ！友人だからと油断したら最後、ミト様が男の毒牙に掛かってしまいます！それに、もしモンスターにでも襲われたらどうするんですか！」

「それなら大丈夫よ。カイは私よりもレベル高いし」

「なっ!?こんな男が、ミト様よりレベルが上!?そんなの信じられません！てか、貴方……よく見れば《寄生者》パラサイト野郎じゃないですか！」

コユキはカイを指差しそう言う。

「ミト様、こんな奴と一緒に居たらミト様の経歴に傷がついてしまいます！こんな《ビーター》の腰巾着なんかとの関わってはいけません！いくらレベルが高く経って、実力が伴ってなきや意味なんて「コユキ」

捲し立ててカイを侮辱するコユキに、ミトは静かに怒気を露わにする。

「それ以上の侮辱は許さないわよ。それに、私のプライベートにまで口を出す権利はないでしょ。分かったらもう帰りなさい。これは副団長命令よ」

「う……………分かりました……………」

ミトに怒られ、コユキはしゅんと小さくなり歩き出す。

「……………この寄生虫野郎が。ミト様に手を出したら、私が殺してやりますからね」

カイの横を通り過ぎる際に小声でそう言い、コユキは去って行った。

「ごめんね、カイ。嫌な思いさせて」

「いや、気にしないさ。それより、彼女は？」

「言った通り、私の護衛。アスナが少し前に、1人の時に嫌なことが何度も起きたって話を参謀職の耳に入ってたね。それで、ギルドの幹部全員に護衛を一人付けることになったのよ。で、コユキは私の護衛に志願してきたの」

「そうだったのか。随分と慕われてるんだな」

「慕われるのはいいけど、ちよっと行き過ぎなのよ。正直な話、少し

「参ってるのよ」

「大変そうだな。じゃ、うまいものでも食おうぜ」

ようやく本題に入り、カイは笑う。

「今日、キリトとラグー・ラビットを見つけて肉が2つ手に入ったんだ」

「え!? 《ラグー・ラビットの肉》が! S級のレア食材じゃない! それが2つだなんて……!」

「ラッキーだろう? それで、ミトも《料理》スキル持ってただろ? 半分食べてもいいから、料理してもらおうかなって」

「任して! ついこの間、《料理》スキル完全習得したから!」

「アスナに続いて、ミトも完全習得してたのかよ」

「まあね。それじゃあ、私の家に行こうか。どうせ、カイが拠点にする宿じゃ、ちゃんとした調理場所なんてないでしょ?」

「ぐもつとも」

二人で笑い合い、カイはミトの案内の元、ミトの家へと向かった。

第35話 ミトの料理

ミトに案内され、カイが来たのは61層の《セルムブルグ》だった。《セルムブルグ》は所謂城塞都市で、周りの殆どを湖で占められ、市場もあり、その立地の良さと美しさからホームタウンにしようとするプレイヤーも多い。

だが、家を買うために必要なコルがかなり高額で、その額は《アルゲード》の3倍程掛かる。

「結構、良い所に家買ったんだな」

「私は住めればどこでもよかったんだけど、アスナが折角だから同じ層に住もうって言うから。まあ、それなりに蓄えもあったから適当な物件をポンつとね。100万ぐらいだったかな？」

「100万の物件をポンツと買える貯えがあるってスゲーな」

「アスナなんかもつと凄いよ。内装も込みで400万も掛かってるんだから」

「それは凄い」

《セルムブルグ》の街を歩き、ミトの家に着く。

「はい、どうぞ」

「邪魔するよ」

ミトの家は所謂1LDKで、1人暮らし向けの内装だった。

年頃の女子の部屋が珍しいらしく、カイは部屋内を見渡す。

「私着替えてくるから、カイはその辺で寛いでて」

「ああ」

ミトに言われ、ミトが寝室と思しき部屋に向かうのを確認してカイはコートと装備を外す。

「何と言うか、落ち着かないな……………」

手持無沙汰になり、カイは部屋の中をうろろして、ミトが戻ってくるのを待つ。

部屋着に着替えたミトを迎え、カイは《ラグー・ラビットの肉》を取り出し、キッチンへと運ぶ。

「まさか完全習得して早々に料理するのがS級食材とは思わなかった

わ」

「それで、何にするんだ？」

「そうね……シチューとかどうかしら？」

「煮込^{ラゲ}むだけにつてか？」

「そういう事」

そう言つてミトは、手早く料理を始めた。

料理と言つても、様々な調理アイテムを使い、作りたい料理に必要な食材アイテムを選択し決められた手順を行うだけの簡略化された料理だ。

だが、完全習得^{コンプリート}してるだけあつて手際は完璧で、ミス一つなく、シチューを作つてる間に、ミトは付け合わせなども作つていた。

そして、5分後には《ラグー・ラビットの肉》を使つたシチューにサラダ、スープ、バゲットが用意されていた。

「できたわよ」

「おお、結構豪華な料理だな」

「カイが持つてきた《ラグー・ラビットの肉》以外はあり合わせよ。それじゃ」

「ああ」

「二いただきます！」

二人で手を合わせて、料理を口に運ぶ。

口に入れた瞬間、香ばしいにおいが口の中から鼻を刺激し、空腹が加速し、一噛みすると肉汁が溢れ、更に空腹を加速させる。

初めて味わうS級食材の味に、二人は感激しながら一気に平らげ、食後のお茶を飲んで一息入っていた。

「はあ、S級食材、凄く美味しかったわね。こんな良い物、ありがとうね」

「いいよ、気にしないでくれ」

お茶を飲みつつ雑談をしてると、不意にミトがあることを言い出した。

「ねえ、カイとキリトはギルドに入ろうと思わないの？」

「……唐突だな。そうだな……キリトが入るつて言うなら俺も入ると

は思うけど、多分それはないかな」

「どうして？」

「ソロならまだしも、俺はキリトとコンビでやってるし今の所コンビであることに不便を感じてない。アイテムやコルの分配で揉めることもないしな。それに、正直、俺はキリトぐらいの腕の奴としか組めないと思う。アイツの考えや動きに慣れてるから、キリトより腕が劣る奴と組めば、ミスが起きる可能性もある」

「なら、私やアスナはどうかしら？」

その瞬間、カイの耳元スレスレでナイフが飛び、背後のコルクボードにナイフが音を立てて刺さる。

ナイフを投げたのはミトだった。

ミトは勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「そうだな。少なくともミトやアスナぐらいの実力のある奴となら考えてもいいかもな」

「じゃあ、明日パーティー組みましょう」

「え？」

「カイがどのぐらい強くなったか気になるし、久しぶりにカイと連携組みたいし。後、今週のラツキーカラーが赤色なのよ」

「人をラツキーカラーのアイテム扱いかよ。でも、ギルドの仕事はいいのか？それに護衛の子はどうするんだ？」

「大丈夫よ。うちはレベル上げノルマとかないし、抑々明日は私オフなのよ。コユキも付いて来ないわ」

「……………そういう事なら俺は構わないぞ。あとは、キリトがいつて言うなら」

その瞬間、カイの視界にキリトからフレンドメッセージが届く。

明日の攻略にアスナが付いて来てもいいかと言う内容だった。

「どうやら、向こうも同じ状況みたいだな」

カイは苦笑し、キリトにOKのメッセージを送った。

「それじゃあ、明日は久しぶりに四人でパーティー組むか」

「ええ」

そして、ミトからパーティーの申請が届き、カイはYESをタップ

した。

第36話 決闘

翌日の午前9時10分。

《強制起床アラーム》で目を覚ましたカイとキリトの二人は、1分もかからずに身支度を整え、最前線74層《カームデット》の転移門前でミトとアスナが来るのを待っていた。

「……来ないな」

「……あの二人にしては珍しいな」

カイとキリトが待ち合わせに指定した時間は9時。

現在は待ち合わせ時間を10分過ぎてている。

「リアルなら、こんな時スマホのアプリか携帯ゲーム機で時間潰すんだけどな……」

「ゲーム内でゲームしたいとか、どんだけゲーム好きなんだよ」

そんなことを話ながら時間をつぶしていると、転移門が起動した。

ようやく来たかと思いい、二人は転移門の方を見る。

「避けてええええええ!!」「どいてええええええ!!」

何か小言の一つでも言っつてやろうかと思っていると、転移門から飛び出すように現れたミトとアスナはそう叫び、カイとキリト目掛け飛んできた。

「うわああああああ!!」

「なっ…ミトお!?!」

キリトは行き成り現れたアスナに成すすべなく激突され、派手に地面を転がった。

カイは咄嗟に腕を広げ、ミトを抱き止めた。

「おっと、ミト大丈夫か?」

「う、うん、ごめん。ありがとう」

腕の中にいるミトにそう尋ねると、ミトは顔を赤くして離れる。

「いてて、ん?なんだ、これ?」

アスナに押し倒されたキリトは、運悪くアスナの胸部の鎧の下に手を入れており、アスナの胸を揉んでいた。

キリトはそれがなんの柔らかさなのか分からず、2度3度揉む。

「や、や——！」

「ぐばあああああああ!!」

アスナは絶叫し、キリトを《体術》スキルのおまけ付きで殴り飛ばした。

殴り飛ばされたキリトは、地面に数回叩き付けられ止まる。

キリトはゆっくりと起き上がり自分を殴った人の正体を見る。

アスナは胸を両手を交差させて庇い、キリトを睨みつけてる。

その状態を見てキリトは自分が何を揉んだのか理解した。

「お、おはよう」

冷や汗を流しながら片手を上げて挨拶をすると、アスナはキリトに殺気を込めた目で睨んだ。

その時、また転移門が起動し、誰かが来た。

アスナは慌てて立ち上がりキリトの後ろに隠れ、ミトも同様にカイの後ろに隠れた。

現れたのはクラディールとコユキだった。

クラディールとコユキの二人は、キリトとカイの後ろに隠れているアスナとミトを見て眉を寄せた。

「アスナ様！勝手なことをされては困ります！さあ、ギルド本部にまで戻りましょう」

「ミト様もですよ！私と共に、ギルド本部まで行きますよ！」

「嫌よ！今日は活動日じゃないでしょ！」

「私もアスナも今日はオフの予定よ！ギルドに行く理由はないわ！」

「だいたい、なんでアンタ朝から家の前に張り込んでるのよ!?!」

「こんなこともあるのかと、私は一か月前から《セルムブルク》で早朝より護衛の任に付いておりました！」

「そ……それ、団長の指示じゃないわよね？」

「私の任務はアスナ様の護衛！それは当然ご自宅までの護衛も」
「含まれないわよ！」

クラディールのストーカー発言に、アスナは嫌悪を露わにして怒鳴る。

「コユキ、私言ったわよね！貴女にプライベートにまで口出す権利は

ないって！」

「ミト様の言う通り、確かにそんな権利私にはありません。でも、考えてみると、私はミト様の護衛です！それはつまりミト様の名誉を守ることも含まれます！そんな、parasite寄生者野郎なんかと一緒に居ればミト様の名誉は確実に傷つきます！汚点になるんです！」

「いい加減にしなさい！そろそろ本気で怒るわよ！」

「ミト様が一般プレイヤーならまだしも、ミト様は《血盟騎士団》の第二副団長です！それならそれ相応の振る舞いや、付き合いをしてもらわないと困るのです！」

「私はギルドの広告塔じゃないのよ！」

「ミトもコユキの態度に、本気で怒鳴り出す。」

「とにかく、本部まで戻りますよ！」

「さあ、ミト様。早く本部に！」

クラディールとコユキの二人は、アスナとミトの二人に手を伸ばす。

だが、二人を守る様にカイとキリトが動いた。

キリトはクラディールの腕を掴み、カイはミトを抱き寄せコユキから距離を取った。

「悪いな。お宅の副団長さん、今日は俺の貸切なんだ。安全は俺が責任持つ。だから、本部にはあんた1人で行ってくれ」

「貴様のような《ビーター》に、アスナ様の護衛が務まるか！私は栄光ある《血盟騎士団》の」

「アンタよりは務まるさ」

喧嘩腰になるキリトとクラディール。

「何の真似ですか？parasite寄生者風情が邪魔しないで貰えますか？」

「悪いが俺が先約なんだ。ミトは今日1日、俺と過ごすんだよ」

「《ビーター》だけに留まらず、ミト様にまで寄生するつもりですか？」
「安心しろよ。少なくとも、俺は何処の誰かと違ってプライベートにまで寄生したりはしないさ」

カイもコユキ相手に一步も引かず、ミトを守る。

「それだけ大口叩けるなら、それを証明する覚悟もあるんだろうな」

「寄生虫野郎が。どっちが上か思い知る必要がありそうですね」

クラディールとコユキは、メニューウィンドウを操作し、カイとキリトに決闘申請^{デュエル}をしてきた。

「……………いいのか？」

「ギルド内で問題になつたり……………」

「团长には私から言うわ」

「悪いけど、コユキにちょっとお灸据えてもらえる……………」

アスナとミトからも許可をもらい、二人はデュエルを承諾した。

最初に、キリトとクラディールの二人が決闘^{デュエル}を行った。

キリトとクラディールは距離を取り向かい合う。

クラディールは腰から両手剣を抜いて構え、キリトも背中から片手剣を抜く。

《血盟騎士団》所属のプレイヤーと《黒の剣士》キリトが闘うともあつてギャラリーが集まり出す。

そして、二人が向かい合つて暫くし、二人がほぼ同時に走り出し、スキルを発動した。

クラディールが発動したのは《アバランシュ》、キリトは《ソニックリープ》だ。

威力なら《アバランシュ》が上だ。

武器の攻撃同士がぶつかる威力が高い方に有利な判定が出される。

この場合、キリトの技は弾かれ、クラディールの攻撃によりキリトは負ける。

互いの武器が当たるとつんぎくような金属音が響いた。

そして、キリトとクラディールは互いの位置を変えるように移動していた。

そして、二人の中間に何かが刺さった。

それは、剣先だった。

見ると、クラディールの両手剣は真ん中から折れていた。

システム外スキル《武器破壊^{アイテムブラスト}》

スキルの出始めか出終わりの攻撃判定が無いときにその武器の構

造上、弱い位置・方向から強烈な打撃を当てることでの起こる技だ。

「武器を変えて仕切り直すなら付き合うけど……もういいんじゃないか？」

クラデイルは悔しそうに顔を歪め小声で「アイ・リザイン」と言った。

そして、キリトの勝利が決まった。

それと同時に歓声が上がった。

するとアスナがクラデイルに話をした。

「クラデイル、《血盟騎士団》第一副団長として命令します。本日を以て護衛の任を解任。別命があるまでギルド本部にて待機。以上」

その命令にクラデイルは悔しそうにしながら、別の両手剣を装備し、転移門から転移した。

「ふん、これだから男は使えないんですよ」

すると、コユキは負けたクラデイルを見下すようにそう言い、前に出る。

今度はカイとコユキの決闘だ。

カイは待機状態になっていたメニューウィンドウからコユキとの決闘を承諾する。

「今度は《紅蓮の剣豪》の決闘か」

「その2つ名、もう古いぞ。今は《焰の剣聖》だ」

ギャラリーから、そんな声が聞こえる。

カイの2つ名は、《紅蓮の剣豪》から《焰の剣聖》となっている。

笑う棺桶討伐作戦以降、カイの戦闘を見た者はカイの斬撃で焰を幻視たという者がおり、また傍にいと熱を感じると言う者もあり、《紅蓮の剣豪》改め《焰の剣聖》と言う新しい2つ名になった。

(剣聖とか、明らかに名前負けしてるよな)

カイはそんなことを想いながら「焰群」の柄を握る。

コユキは片手剣を鞘から抜き構える。

「証明してやりますよ、そんな男より私の方が優れているっての。この決闘で私が勝てば、ミト様も目を覚ましてくれる。私だけが……ミト様を守れるんだってことを！」

何処か狂気を孕んだセリフを言うコユキ。

(こんな奴が、ミトの傍にいたのか……ミトも大変だな)

カイは背後のミトを見る。

ミトは、カイに対して頷く。

その目には、カイの勝利を確信する光があつた。

(《剣聖》には名前負けしてるけど、ミトの期待を裏切る訳には行かないな)

軽く笑みを浮かべ、カイはコユキを見る。

カイの視線の先はコユキに向けられているが、カイが見ているものは決して変わらなかった。

決闘開始のカウントが徐々に減り、0になる。

コユキは《ウォール・ストライク》を発動し、一気にカイとの距離を詰める。

その速さに、カイは驚く。

(速いな……《攻略組》でもかなりの実力者だな)

コユキがミトの護衛を自負するだけあって、それなりの実力者だと思っていたカイだが、これなら最前線のボス戦でも活躍できるだろうと思つた。

(……でも)キリトやアスナよりは遅いな

小声でそう呟く様にそう言い、カイは《ウォール・ストライク》を躲した。

「……………え?」

《ウォール・ストライク》が躲されるとは思つてなかつたらしく、コユキは驚く。

そして、カイは無防備となつたコユキの懐から刀を向け、そのまま首に刃を当てる。

「この状態なら、どんなスキルを使つても俺の方が先に刀を振れる。アンタの負けだ」

状況は、カイが少しでも刀を振ればコユキの首を斬る状態。

《初撃決着》モードの為、最初に攻撃をヒットさせたら勝利するので、HPが全損する恐れもない。

つまり、その気になればカイはコユキを決闘^{デュエル}で負かすことができる。

それをしないのは、コユキ自身に敗北を認めさせないとこの場が収まらないと思っただからだ。

「ふ、ふざけるなよー!」

するとコユキは怒鳴り出した。

「お前、答えろ!どんな卑怯な手を使った!」

「卑怯って……そんなことしてない」

「嘘だ!何かしらのチートを使ったんだ!でなきや、私が負けるなんてあり得ない!答えろよ!この卑怯者が!」

みつともなく喚き散らすコユキに、ギャラリーは眉根を寄せ始める。

「コユキ」

そんなコユキに、ミトが声を掛ける。

「ミト様!ミト様ならわかりますよね!この男が卑怯な手を使ったって!でなきや、私が負けた理由に説明が付かないって!」

「コユキ、残念でしょうけど貴女の負けよ」

「……え?」

「カイは卑怯な手なんか使っていない。純粹に、自身の実力で貴女の一撃を躲した。貴女と彼には、それだけのレベル差と実力差があるの。にも関わらず、それを認めず、相手を非難する行い……《血盟騎士団》の団員としての自覚が無さすぎるわ」

ミトからそう言われ、コユキは息を呑む。

「時には相手を認めることも大事よ。攻略組トップギルドに所属するプレイヤーなら、それを肝に銘じなさい」

そこで、ミトは一拍置き、コユキにある命令を下した。

「コユキ《血盟騎士団》第二副団長として命令します。本日^{今日}を以て護衛の任を解任。別命があるまでギルド本部にて待機。以上」

その命令に、コユキはショックを受けたのか俯き、無言で片手剣を腰の鞘に収め、転移門から去って行った。

「ごめん、カイ。嫌な役割頼んじやったわね」

「別にいいさ、これぐらいお安い御用だつて」

刀を収めつつ、カイはミトに笑いかける。

「さて、あの子にああ言った手前、ミトにおんぶにだっこじや駄目だな。今日はいつもより頑張るとするかな」

「なら、今日1日前衛でもしてもらおうかしらね」

「いや、流石に1日ずっと前衛ちよつと……」

「冗談よ。前衛は交代でしましょう」

ミトとカイは笑い合い、キリトとアスナの二人と合流し迷宮区へと向かった。

第37話 迷宮区での休息

74層迷宮区。

骸骨の剣士《デモニツシュ・サーバント》相手に、ミトとアスナは一步も退かない戦いを見せた。

放たれる片手剣スキル《バーチカル・スクエア》の4連撃を、アスナは持ち前の俊敏さを生かし左右にステップして躲し、ミトは鎌を回転させ攻撃を弾く。

「やっぱり手練れがいると助かるな……」

「と言うより、あの二人だから助かるな……」

そんなミトとアスナを見て、カイとキリトはそう言う。

「カイ！」「キリト君！」

ミトとアスナの二人が同時に叫ぶ。

それと同時に、アスナは重めの一撃を《デモニツシュ・サーバント》の盾にぶつけ、ノックバックさせ、ミトは鎌の形状を生かし足を引つけて体勢を崩させる。

その隙を逃さず、キリトは《バーチカル・スクエア》の4連撃をヒットさせ、止めの《メテオブレイク》で《デモニツシュ・サーバント》を倒す。

カイは、体勢の崩れた《デモニツシュ・サーバント》に《朧月》を使い、突進からの斬り上げ、斬り下ろしを繰り返す。

これにより、《デモニツシュ・サーバント》の両腕が弾かれ、無防備な首が露わになる。

止めの《弧月》で首を斬り飛ばし、《デモニツシュ・サーバント》を倒す。

「やったー！」「よし！」

後ろに下がっていたアスナとミトが声を上げ喜ぶ。

アイテムの分配を後回しにし、4人はさらに奥へと進む。

ここまで回数回モンスターとの戦闘があつたが、殆どノーダメージで来れている。

「順調だな」

「ま、昔は4人でよくパーティー組んでたしな。昔取った杵柄って奴だろ」

「もう1年以上前になるんだね……」

「私とアスナがギルドに入ってから組んでなかったしね」

懐かしさを感じ迷宮区を進んでいると、回廊の突き切りで、怪物のレリーフがびっしりと施された灰青色の巨大な二枚扉が現れた。

残りのマップの空白部分と、周りのオブジェクトの変化である程度そろそろかもしれないと思っていた4人は、その扉の前で止まる。

「ねえ、これってやつぱり……」

「ああ、ボス部屋だ……」

キリトの言葉に、全員が息を呑む。

これまでにフロアボスと戦った回数は73回。

フィールドボスやイベントボス、クエスト限定ボスなどの戦闘も含めれば4人は100回どころか200回以上はボスモンスターとの戦闘を経験している。

だが、どれだけ経験を積もうといざボス部屋を前にすれば緊張し、体が震える。

「ねえ、ちよつと覗いてみない?」

そんな中、ミトは少し不安そうに言う。

「そうだな……偵察戦って訳じゃないが、ボスの姿を見ればある程度の攻撃方法も推測できるだろうし、最初の偵察戦の役にも立つ。俺は賛成だ」

ミトの意見にカイは賛成する。

「そうだな。フロアボスは自身が守護する部屋からは出てこない。扉を開けて、中を覗くぐらいなら……」

「一応、転移結晶を準備しておきましょう」

アスナの言葉に全員が頷き、各自転移結晶を片手に握り締める。

「開けるぞ、カイ」

「ああ」

キリトとカイが扉に手を置き、ゆっくりと押す。

それに合わせて扉は左右に開いていき、ずしんと音を立てて完全

に開かれる。

部屋の中は暗く、中が見えない。

暫くすると両側に青い炎が灯り、その炎が連続して灯り、部屋の中を明るくする。

そして、フロアボスの姿が現れた。

巨大な人間の体のような体に山羊の頭がくっ付いたその姿は、悪魔だった。

右手には巨大な斬馬刀がある。

ボスの名は《グリームアイズ》。

ボスとの距離があるにもかかわらず、4人はその姿に恐怖を感じ、足が竦んだ。

『GYA O O O O O O O O O O O O O O O O!!』

「うわああああああ!!」「きゃああああああああ!!」

部屋全体を振動させるかのような雄たけびを聞き、4人は同時に悲鳴を上げ遁走した。

4人は一心不乱に走り、安全エリアを目指す。

途中、何度かモンスターにターゲットにされたが全てを無視して走り、安全エリアに飛び込み、壁に寄りかかってへたり込む。

そして、息を整え数秒後、4人は笑い出した。

「あははは！マジでビビった！」

「初めて見るボスだったわね！こんな驚いたの久しぶりね！」

「あはは、やー、逃げた逃げた！」

「こんなに走ったの凄い久しぶりだよ！」

先程の恐怖なんかはもう吹き飛び、4人は笑い合うとすぐに表情を引き締めた。

「あれは苦勞しそうだね」

「そうだな。見た感じ武器はあの斬馬刀だけだけど、特殊攻撃があるな、きつと」

「前衛に固い人を集めてどんどんスイッチしていくしかなさそうね」

「そうになると、盾持ちが十人は欲しいな……まあ、当分は少しずつちよつかい出して傾向と対策を練るしかないな」

「盾装備、ねえ」

すると、アスナが意味ありげにキリトを見た。

「キリト君、何か隠してるでしょ」

「え？」

「片手剣の最大のメリットって盾を持てることですよ。でもキリト君が盾を持ってるってこと見たこと無い。私の場合、細剣のスピードが落ちるからだし、スタイル優先で持たない人もいるけど。キリト君の場合、どちらでもないよね」

「あ、それは……」

アスナからの質問に、キリトは狼狽える。

「アスナ、そう言うのはマナー違反よ」

そんなアスナに、ミトがそう言う。

「うくん、それもそっか。ごめんね」

そう言っアスナはキリトに謝る。

「わ、もう3時だ。遅くなっちゃったけどお昼にしましょう」

「もうそんな時間だったのね」

そう言っアスナとミトは包を取り出し、アスナはキリトに、ミトはカイに差し出す。

「手作りか!？」

「態々悪いな。ありがとう」

受け取ると、二人は早速包を開け、中身を確認する。

そこにはサンドイッチが入っており、焼かれた肉や新鮮な野菜、そしてスパイシーな香りに、二人は一気に空腹を覚える。

「いただきます！」

大口を開けて齧り付くと、ちよつと濃いめの甘辛い味が口の中いっぱいになり、焼かれた肉の肉汁と新鮮な野菜と絶妙にマッチしていた。

その味は、現実で度々口に使っていたファーストフードに似ていた。

「う、うまい……！」

「この味、一体どうやったんだ？」

「私とアスナによる1年の修行と研鑽の成果よ」

「アインクラッドで手に入る約百種類の調味料が味覚再生エンジンに与えるパラメーターを全部解析して作ったのよ」

「これがその作った物よ」

そう言つてミトは紫色のドロつとした液体の入った小瓶を取り出す。

「手出して」

ミトに言われるがまま、カイが手を差し出すとミトはカイの掌にその液体を掛ける。

「舐めてみて」

少々気味の悪い液体だったが、ミトを信じカイはその液体を舐める。

「この味……マヨネーズか!？」

「そう。グログワの種とシユブルの葉、カリブ水を混ぜた物よ」

「そして、こつちがアビルパ豆とサグの葉、ウーラフィッシュの骨を混ぜた物」

今度はアスナが別の小瓶を取り出し、キリトに差し出す。

出された液体を舐めるとキリトは驚きの表情になる。

「醤油だ……！」

「マヨネーズに続いて醤油まで作ってるのか……何と言うか、流石だ

な……」

素直に二人を称賛していると、ミトは笑って言う。

「まあ、私の場合は《料理》スキルの熟練度上げも兼ねてたからね。それにさ、前にカイが言ってたじゃない。マヨネーズが欲しいって」

そう言われ、カイは結構前に4人で食事した際、マヨネーズぐらい欲しいと言ったのを思い出す。

「だから作ってあげられないかなって」

「もしかして、俺の為に作ってくれたのか？」

「あ、えつと……まあそう言う言い方もあるかもね」

ミトは赤くした頬を掻いて笑う。

「そっか……わざわざありがとうな」

ミトにお礼を言い、カイは残りを一気に食べる。

「しかし、これ本当にうまいな。再現度も高いし、店で売ったら飛ぶように売れるぞ」

サンドイッチを頬張りつつ、キリトがそう言う。

「本当？」

「ああ、勿論。……いや、売るのはダメだな」

「え？どうして？」

「俺の食べる分が無くなる」

大真面目にそう言うキリトに、アスナは呆れた表情をする。

「もう、意地汚いんだから……また作ってあげるわよ」

小声でそう言うアスナだったが、その言葉はキリトの耳に届いており、キリトはアスナの料理が食えるなら、カイを説得して拠点を《セルムブルグ》に移してもいいかもと思った。

第38話 青眼の悪魔

遅めの昼食を終え、食後のお茶を呑み一息入れていると、ガチャガチャと鎧を鳴らす音と足音、話し声が聞こえ、カイとキリトは音の聞こえた方を警戒する。

だが、現れた6人のパーティーはカイとキリトの知ったパーティーだった。

そのパーティーはギルド《風林火山》のパーティーで、その中には友人でギルドリーダーのクラインが居た。

「おおっ！キリトにカイじゃねえか！」

2人の顔を見ると、クラインは笑顔で駆け寄り声を掛ける。

「まだ生きてたか、クライン」

「元気そうでなによりだ」

立ち上がり、カイとキリトもクラインに近寄る。

「相変わらずだな、お前らも。今日は、他にもツレがいる……のか……」

荷物を片付け立ち上がったミトとアスナを見て、クラインは固まった。

「おい、どうした？ラグってんのか？」

「しつかりしろって」

クラインの肩を揺らし声を掛けると、意識を取り戻したクラインは腰を直角に曲げ、右手を差し出した。

「は、初めまして！クライン、24歳独身！彼女募集ちゅっ!!？」

変なことを口走りそうになったクラインに、キリトは脇腹に強めの一撃を入れる。

その程度なら攻撃判定にはならず、キリトのカーソルはグリーンのまままだ。

それを皮切りに、他の5人も駆け寄り、ミトとアスナに自己紹介を始める。

「ま、まあ悪い連中じゃないからー」

「程よく仲良くしてやってくれ」

男どもを抑え、ミトとアスナにそう言うとかラインが復活し、カイとキリトの首根っこを掴まえる。

「おい、キリト！カイ！一体どういうことだよ!?お前らがあんな美少女とー!」

「いや、これには訳が……」

「ミトと一緒に居るのにお前の許可が居るのかよ?」

尋問と言う名のじゃれ合いをする3人に、ミトとアスナも思わず笑顔になった。

「こんにちは、暫く彼らとパーティー組むのでよろしく」

「同じく。よろしくね」

2人の言葉にクライン達は、カイとキリトに羨望と嫉妬の眼差しを向ける。

そんな時、また新たな足音と鎧の音が聞こえ、そちらに視線を移す。

黒鉄色の鎧に濃緑色の戦闘服。

その戦闘服は、《アインクラッド解放軍》の者だった。

「軍の連中だ」

「第1層を支配してる連中がなんで?」

「25層以降攻略に参加せず、組織強化をしてる連中がどうしても最前線に?」

《風林火山》のメンバーが後ろでそう言う中、《軍》のパーティーは安全エリアへと入る。

「休めー!」

先頭に立っていたリーダーらしき男が号令をかけると、全員がへたり込むように座る。

リーダーは前を向きカイ達を見る。

「私は《アインクラッド解放軍》所属、コーバツツ中佐だ」

「キリト、こっちは相棒のカイだ」

「うむ、君たちはもうこの先まで攻略はしているのか?」

「ああ、ボス部屋までマップングしてある」

「では、そのマップデータを提供してもらいたい」

「提供だ?!?テメー、マップングする苦労が分かってんのか!?!」

傲慢な態度のコーバッツにクラインが声を上げた。

「我々は君ら一般プレイヤー解放のために戦っている！諸君が協力するのは当然の義務である！」

「何が解放だ！25層以降、攻略に参加しなかった分際によく言えな！」

「落ち着け、クライン」

一触即発になりそうだった空気をキリトが制した。

「どうせ、街に戻ったら公開する情報だ。構わない」

「俺もキリトに賛成だ。欲しけりやくれてやるよ」

「おいおい、そりや人が良すぎるぜ、キリト、カイ！」

「マップデータで儲ける気は無い」

クラインを宥めてキリトは、マップデータを渡した。

「協力感謝する」

「ボスに挑むならやめといた方がいい」

「それは私が判断する」

キリトの言葉に耳も貸さずにコーバッツは部下達を立ち上がらせ、先に進んだ。

「大丈夫なのかよ、あの連中」

「ぶつつけでボスに挑むことはないと思うけど」

「でも、あの噂もあるし……」

「噂？どんなだ？」

ミトが噂と言い、気になりカイが尋ねる。

「《軍》が方針変更して、再び攻略を行うって噂。資材の蓄積に現を抜かしてる所為で、末端のプレイヤーから不満の声が上がってるから、戦果を挙げてその不満を消そうとしてるらしいのよ」

「だからってボスに挑むとは思わないが……」

「なら、一応確認だけするか？」

キリトの提案にカイが同意し、ミト、アスナ、クライン、そして《風林火山》のメンバーも賛同した。

途中何度かモンスターとバトルになり、ボス部屋付近に着くのは安全エリアを出てから30分後だった。

「《軍》の連中とはすれ違わなかったな。この先はボス部屋だろ？なら、転移結晶で帰っちゃまったんじゃねえか？」

「それならいいんだが、あの噂を聞いた後だとな……」

「ああああああ………」

その時、ボス部屋のある方向から悲鳴が聞こえた。

「今の悲鳴って！」

「まさか……！」

「カイ！行くぞ！」

「ああ！」

キリトとカイが走り出し、続いてミトとアスナが走り出す。

ボス部屋に向かうと、ボス部屋の扉は開いており、中で《軍》のプレイヤールが戦っていた。

「おい！大丈夫か！」

ボスである《グリーンアイズ》は右手に握った斬馬刀を振り回し、《軍》を蹴散らす。

人数を確認すると先ほどより二人少ない。

「何をしてる！早く転移結晶を使い！」

「だ、ダメだ！クリスタルが使えない！」

「な……！」

今までにないボス部屋の仕様に全員が息を呑んだ。

「我々《解放軍》に撤退の二文字は有り得ない！戦え、戦うんだ！」

「バカ野郎！」

「おい、どうなってるんだよ！」

クラインたちも遅れて辿り着き、キリトが簡単に状況を伝えるとクラインは顔を歪めた。

「どうにかできないのかよ！」

今ここでカイ達が切り込めば退路は開ける。

だが、下手すれば誰かが死ぬ。

「全員突撃！」

コーバッツがHPが限界まで低い二人を下がらせ、残りの八人で四人に列を作り突撃をするよう指示を出す。

「やめろ！」

あまりにも無謀な攻撃に、キリトが叫んだ。

八人で一斉に飛びかかれば満足にソードスキルを発動することもできない。

本来なら、一人ずつダメージを与え、スイッチして戦うべきだ。

《グリーンアイズ》は、突撃してきた《軍》のプレイヤー目掛け、息を吐いた。

息にもダメージ判定があるらしく、八人が怯む。

そこに、すかさず《グリーンアイズ》の斬馬刀が突き立てられる。

《軍》のプレイヤーは吹き飛び、地面に転がる。

そして、今度は斬馬刀を振り上げるように構える。

刃は、倒れているコーバッツに向けられていた。

「ふっ！」

その瞬間、カイは飛び出し《紫電一閃》を使い、《グリーンアイズ》の斬馬刀の軌道をずらした。

お陰で、斬馬刀はコーバッツに当たるスレスレで地面に刺さった。

「早く撤退しろ！」

「ふ、ふざけるな！そんなことが出来るか！我々は「仲間を死なせるつもりか！それが、ディアベルの教えか！」っ!？」

ディアベルの名に、コーバッツが反応する。

カイはコーバッツの事を知っていた。

コーバッツは、ディアベルが《希望の騎士団^H》を立ち上げた時の最初の教え子、所謂ディアベル塾第1期生だ。

「さっさと撤退しろ！俺一人で抑えるのも限界があるんだ！」

振り下ろされる斬馬刀を、《焰群》で受け止めつつ、カイが叫ぶ。

「くっ……！動ける者は動けぬ者を抱えろ！撤退だ！」

コーバッツは撤退の指示を出し、僅かに動けるプレイヤーが動けないプレイヤーを抱え動き出す。

だが、筋力値の問題なのか将又恐怖で力が入らないのか、上手くいかなかった。

（耐えろ……！俺が潰れたら、《軍》の連中がやられる……！耐えるん

だ……!」

腕に力を籠め、斬馬刀を抑え続けるも、とうとう限界が来てカいは膝を突いた。

(………までか……!)

死を覚悟した、その時だった。

「はああああああああ!!」

ミトが下から鎌を振り上げ、斬馬刀を弾き飛ばした。

「ミト!」

「ごめん!すぐに動けなかった!大丈夫!」

「ああ、なんとかな」

立ち上がり、辺りを見渡すとキリト、アスナ、クライン、《風林火山》のメンバーも来て

手伝っていた。

《風林火山》のメンバーは動けない《軍》のメンバーの撤退を手伝っており、カイ達は数人で《グリーンアイズ》を撤退完了まで相手にしないといけない。

だが、《グリーンアイズ》の強さではカイ達に死人が出るのは分かり切っていた。

(出し惜しみする暇はないか……!)

カイはある決断をし、キリトに叫ぶ。

「キリト、アレを使うぞ!」

「アレをか!でも、今は……!」

「このままじゃ死人が出る!俺はやるぞ!」

「カイ………分かった!アスナ、ミト、クライン!頼む、10秒だけ持ち堪えてくれ!」

キリトの言葉にアスナ、ミト、クラインは頷き、《グリーンアイズ》の攻撃を防ぎ続ける。

その間、キリトは素早くメニユーウィンドウを操作する。

カイもメニユーウィンドウを操作するが、キリトよりも早く操作を終える。

「よし!ミト、アスナ、クライン!下がれ!」

カイの言葉を合図に、3人が下がる。

カイは刀を構え、一気に走り出す。

《グリーンアイズ》はカイに向けて息攻撃ブレスをする。

青白い輝きを持つ息が、カイを包む。

「カイっ!？」

カイがやられたのではと思い、ミトが声を上げる。

その瞬間、青白い噴気を割く様に業火を彷彿させる焰が上がった。

「え?」

その光景にミトは驚いた。

そして、焰は噴気を掻き消しその中から、カイが現れた。

「これでも……食らえー!」

カイの刀が赤いライトエフェクトを纏う。

そのライトエフェクトは徐々に大きくなり、そして、焰へと変わった。

「う……そ……」

ミトは思わずそう呟いた。

ミトだけじゃなく、アスナもクラインも嘘だと思った。

カイの2つ名《焰の剣聖》は、カイの斬撃で焰を幻視し、熱を感じたことから付いた。

決して本当に焰が出るわけではなく、カイの気迫と愛刀“焰群”の透き通る様な赤い刀身により、そう見えるだけだ。

だが、紛れもなく今のカイの刀には焰が纏わり付いていた。

カイの焰を纏った斬撃は《グリーンアイズ》の腹を深く抉る様に斬りつける。

『GYA O O O O O O O O O O O O O O O O!!』

痛みを感じてるのか、《グリーンアイズ》が絶叫を上げる。

「おおおおおおおおおおおおお!!」

カイは雄たけびを上げ、焰の斬撃で《グリーンアイズ》を斬り上げる。

《グリーンアイズ》が大きく仰け反る。

「カイ、いいぞ!」

そこで準備を終え、タイミングを計っていたキリトが飛び出す。

「スイッチー！」

仰け反った状態でも、《グリーンムアイズ》は斬馬刀を突き出すように、キリトに攻撃を仕掛ける。

キリトはその攻撃を右手に握った“エリユシデータ”で軌道をずらし、そして、背中に現れたもう一つの剣“ダークリパルサー”を、抜きざまに切り上げた。

クリーンヒットの為、《グリーンムアイズ》のHPが目に見えて減少する。

本来、右手と左手に片手剣を握った状態だとイレギュラー装備状態となってソードスキルは発動しない。

「スターバースト……………ストリーム！」

だが、キリトの両手に握られた剣はライトエフェクトを纏っていた。

発動されたソードスキルから幾つもの斬撃が繰り出され、星屑の様に飛び散るエフェクトフラッシュが空間を支配する。

そして、最後の一撃が《グリーンムアイズ》の胸の中央を貫き、《グリーンムアイズ》のHPは消し飛び、体はポリゴンの欠片になって消えた。

「……………終わった……………のか？」

キリトはそう呟き、その場に倒れこんだ。

第39話 ユニークスキル

キリトは倒れて数秒で目を開けた。

「いててて……………」

「バカッ……………！むちゃして……………」

起き上がったキリトにアスナは凄い勢いで首にしがみついた。

「…あんまり締め付けると、俺のHPがなくなるぞ」

冗談っぽく言うキリトにアスナは怒ったようにハイ・ポーションを口に突っ込む。

「カイも早く回復して！息^{ブレス}攻撃、直撃だったでしょ！」

「ああ、分かってる」

カイもミトにハイ・ポーションを渡され、HPを回復させる。

「生き残った連中の回復は済ませたが、2人死んだ」

「そうか、ボス戦で犠牲者が出たのは67層以来だな」

「こんなのが攻略っていえるかよ。死んじまったら何もならないだろうが」

そう言っただけでクラインは深いため息を吐く。

「そりやそうと、キリト、先のはなんだ!?カイも、刀が焔を纏ってたし

よー」

「言わなきゃダメか？」

「秘密って訳にはいかないか？」

「当たり前だろ！」

「……………エクストラスキルだよ。《二刀流》」

「……………同じくエクストラスキル《業火刀》だ」

どよめきが《軍》の生き残りとクライン達の間を流れる。

「しゅ、出現条件は!？」

「分かっただらもう公開してる」

「俺だってそうだ」

「てか、《二刀流》はなんとなくどんなスキルか分かるけどよ。《業火刀》ってどんなスキルなんだ？」

「見ての通り、斬撃に焔を纏わせる。《業火刀》専用ソードスキルと

ソードスキルの威力上昇、あと炎傷状態の付与と継続ダメージ。それから、亜人型Mobもとい対人特攻だな」

「対人特攻？」

「ああ。4足歩行型Mobより亜人型Mobの方が与ダメージ量が大きかったんだ。試しにキリトとデュエルした時も、通常よりも与ダメージが大きかった。まあ、絶対とは言い切れないけど、多分そんな感じのスキルだ」

クラインにそう言うと、クラインは少し考えて口を開く。

「《二刀流》に《業火刀》……出現条件も分からないとなると、それって《ユニークスキル》なんじゃねえのか？」

「恐らくな」

「それにしても水臭えじゃねえかよ。こんな必殺技隠してるなんてよ」

「出し方が分かってくれば隠したりしないさ。だけど、まったく心当たりがないんだ」

「それに、こんなレアスキル持つてるなんて知られたら、しつこく聞かれたり……いろいろあるだろ……」

「ネットゲーマーは嫉妬深いからな。俺は人間出来てるからともかく、妬み嫉みはあるだろう、それに……」

クラインはそこで言葉を嚙み、キリトにしつかりと未だに抱き付いてるアスナと、カイの事が心配なのかカイのコートの袖を不安げに掴んでいるミトを意味ありげに見やり、にやにやと笑った。

「……まあ、苦労も修行のうちと思つて頑張りたまえ、若者よ」

そう言つて軽くキリトとカイの肩を叩き《軍》の方を向く。

「私は……私は何をしてんだ……部下を二人も死なせて……これでは……ディアベル殿に顔向けができません！」

コーバツツは蹲り、涙を流して自分の行いを悔やんでいた。

「なあ、コーバツツよ。辛い気持ちは分かるが、悔やんでも仕方ないだろ。悔やんでも、死んだ奴らは戻つては来ない。生き残った俺たちは死んでいった奴らの分まで生きて戦う義務があるんだ！しつかりしろ！」

悔やむコーバッツにクラインはそう言うが、コーバッツは何も言わない。

「今のコーバッツに、俺たちの言葉は届かない」

「でもよお、放って置いたら自殺しちまいそうだぞ。なんとかしねえと」

「安心しろ。適任を呼んである」

カイがそう言うのと、ボス部屋入り口から誰かが現れた。

「カイ！」

「ディアベル、こつちだ！」

カイは、万が一のことを考えコーバッツの説得役にディアベルに連絡を取り、来てもらう様に頼んでいた。

「すまない、説得のつもりだったんだがちよつと状況が変わった」

「どういうことだ？」

カイはここまでの出来事をディアベルに話し、ディアベルは無言で聞き続けた。

「なるほど、状況は分かった。俺に任せてくれ」

そう言うのと、ディアベルはコーバッツに近寄り、膝を付く。

「久しぶりだな、コーバッツ」

「ディアベル殿……申し訳ありません。私は、貴方の教え子として、栄えあるディアベル塾第1期生として、貴方から教わった騎士道を胸に《軍》での活躍を誓いました。だが、私は愚かでした！私は騎士としてあるまじき行動をした！その所為で部下を2人も死なせた！私は、ディアベル塾の看板に泥を塗ったのです！」

コーバッツは涙を流し、ディアベルに謝罪をした。

「それどころか、《軍》が腐敗していくのに気づかなかつた。……このボス攻略で見事勝利すれば、元の《軍》に戻れるかと期待したが……はは、結局私は騎士にはなれなかつたのですな」

全てを諦めたかのようにコーバッツは笑った。

「いや、そんなことはない」

そんなコーバッツに、ディアベルが声を掛ける。

「コーバッツ、例え戦果なくとも、君にはできることがある」

「ですが……私1人足掻いた所で………」

「1人じゃ……ないですよ」

すると、後ろに居たコーバッツの部下の1人がそう言った。

「俺もいます。俺も、かつての《軍》を取り戻したいんです!」

「そうですよ!俺、隊長に付いて行きます」

「俺もです!」

「自分も!」

「お前たち………」

□々にコーバッツに着いて行くと言った《軍》のメンバーに、コーバッツは驚きを隠せなかった。

「隊長。隊長は忘れているかもしれませんが、ここにいる俺たち全員、かつて隊長に命を救われた者です」

「な、に……?」

「隊長は当時から人助けをしましたからね。隊長にとって、俺たちは助けたプレイヤーの1人かもしれません。でも、俺たちにとっては命の恩人なんです」

「隊長は忘れても、俺たちは忘れません」

「」「」「《人道の騎士》コーバッツ殿を」「」「」

かつて呼ばれていた自身の異名。

《アインクラッド解放戦線》が《アインクラッド解放軍》となる前の事が、コーバッツの頭に浮かび上がる。

「コーバッツ。君は、1人じゃない。……死んでしまった2人もきつと君が再び立ち上がるのを願っているはずだ。だから、もう一度頑張るんだ」

「……………《人道の騎士》、か。もう錆びれた名だな……………だが、その名もまだ使えるだろう」

そう言い、コーバッツは立ち上がった。

「私は、今の《軍》に反旗を翻すことを宣言する!よって、《アインクラッド解放軍》コーバッツ隊は現時刻を以て解散とする!お前たち、私と共に来る覚悟はあるか?」

「勿論です!俺たちは、そのためにここにいますから!」

「一生お供します!!」

「隊長なら、いえ、《人道の騎士》様ならいつかそう言うと思じていました!」

「…そうか………なら、これからはお前たちは私の部下ではなく、友だ! 共に、《軍》を、いや《アインクラッド解放戦線》を取り戻す!」

「「「「「おおおおおおおおお!」」」」」

「手始めにギルドに戻り、宣戦布告をする!」

「「「「「おおおおおおお!」」」」」

そして、部下だった者たちは回廊に出て次々と転移結晶で転移していった。

「ディアベル殿、いえ、ディアベルさん。お陰で目が覚めました。錆び付いた名ではありますが、《人道の騎士》として今一度立ち上がりま

す」

「ああ、頑張ってくれ、コーバッツ。何かあれば遠慮なく行ってくれ、手を貸すよ。騎士としてね」

「はい!」

ディアベルと話し終え、今度はカイの方を向く。

「貴方がディアベルさんの言ってたカイさんだったんですね。失礼な言動申し訳ありません」

「俺は気にしてないさ。それより、これから大変だと思う。何かあったら言ってくれ。俺も手を貸す」

「ありがとうございます」

最後に一礼し、コーバッツも転移結晶で去って行った。

「………どうやら、一件落着きたいだな」

「そうだな」

「それじゃあ、俺達は75層の転移門をアクティベートして行くけど、お前は どうする?」

「任せていいか?俺はもうヘトヘトだ」

「分かった!ゆっくり休めよ」

そう言っただけでクラインはギルドメンバーと一緒に次の層に続く扉を開けた。

「じゃあ、俺も帰るとするよ」

「ああ。来てくれて助かった、ディアベル」

「礼には及ばないさ。しかし、《軍》の腐敗。思った以上に酷いことになってるんだな。早急に事を進めないとな」

「なにかあるのか？」

「いや、こつちの話さ。それじゃあな！」

「そう言いディアベルも去って行った。」

そして、フロアボスの居なくなった部屋にはカイとミト、キリトとアスナの4人だけが残された。

「俺たちも帰るか。キリトは……暫くそのままだな」

「みたいだ」

「じゃあ、先帰ってるからな」

キリトに手を振って、カイは未だに袖の裾を掴んでるミトと共に部屋の外に出る。

そこから転移結晶で転移しようとしたら、ミトがカイに背中から抱き付いた。

「ミト？」

「怖かった……」

ミトは体を震わせて、カイに言う。

「カイがボスの息に直撃した時、^{プレス}カイが死んだんじゃないかって思ってた私……」

「……やれやれ、俺はミトに心配を掛ける天才だな。ごめんな」

カイは体の向きを変え、ミトを正面から抱きしめ、頭を撫でる。

「……カイ。私、ギルド休む」

「え？」

「休んで、カイの傍にいる。いいよね？」

「……むしろ、俺の方から頼むよ。傍に居てくれ」

「……うん」

第40話 《神聖剣》との対面

74層が突破された翌日。

アインクラッドではカイとキリトの噂で持ち切りだった。

《軍の大部隊を壊滅させた悪魔》

《それを撃破した《黒の剣士》と《焰の剣聖》のユニークスキル》

《《二刀流》の50連撃》

《《業火刀》による骨も焼き尽くす焰の斬撃》

噂に尾ひれが付きまくり、最終的にキリトの《《二刀流》は最大で100連撃繰り出せるだの、カイの《業火刀》は相手のHPが底を尽くまで焼き尽くすだの言われるようになった。

その結果、二人のねぐらには早朝から剣士や情報屋が詰めかけ、脱出するのに二人は転移結晶まで使って、エギルの店へと逃げ込んだ。

「引越してやる……どっかの田舎フロアで……誰にも気づかれずに……」

「どうせすぐ見つかるぞ……」

「まあ、有名になっちゃったもんはしょうがないだろ」

昨日の戦闘で手に入れたアイテムを鑑定しているエギルが笑いながらそう言ってくる。

「いっその事、講演会をやったらどうだ？会場とチケットの手筈は俺が整えてやるぞ」

「誰が！」「するか！」

エギルに向かって、お茶を飲んでいたコップを2人は同時に投げつける。

「おわっ！殺す気か！」

エギルの顔スレスレに投げつけられたコップは、発動した《投擲》スキルによって壁にぶつかり粉々に砕ける。

「それにしても、ミトとアスナの奴遅いな……」

「メッセージは飛ばしてるからここにいてるのは分かってると思うんだけどな……」

「昨日の今日だし、護衛の件とかで揉めてるのかもな」

そんなことを話していると、階段を勢いよく駆け上がる音が聞こえ出す。

そして、ミトとアスナの二人が青褪めた顔で現れた。

「キリト君……」 「カイ……」

「大変なことになっちゃった……」

「ヒースクリフが俺達2人との立ち合いを求めてるだって!？」

2人からの話を聞き、キリトは驚きの声を上げる。

「一体、何がどうなってそうなったんだ？」

流石のカイも驚き、理由を尋ねた。

「昨日、私とアスナでギルド本部に行って団長に一時退団する件を話したのよ」

「それで、昨日はそのまま家に帰って、今日の朝のギルド例会で承認されると思ったんだけど……」

「団長が、私たちの一時退団を認めるには二人と立ち会うのが条件だって……」

「なんで二人が抜けるのに、俺たちと戦うのが条件になるんだ？」

「私たちにもわからない……」

「そんな事しても意味がないって説得したけど……団長がどうしてもって譲らなくて……」

「……それにしても、珍しいな。あの男が、そんな条件を出してくるなんて」

「そうなのよ。団長は、普段ギルドの活動どころか、フロア攻略の作戦

とかも私達に一任して全然命令とかしないのに、今回に限ってなんだよね」

ヒースクリフの謎の行動に、4人は頭を捻って考える。

「ま、考えた所で人の考えなんて分かる訳ないよな」

するとカイが立ち上がりてそう言う。

「こうなったら直接確かめに行こう。そうすりゃ、ある程度の考えぐらいいは読めるだろ?」

《血盟騎士団》の本部がある第55層《グランザム》に向かった4人は、すぐさまギルド本部に向かい、ヒースクリフとその幹部たちがいる部屋へと通された。

部屋の中は、壁全てが透明のガラス張りで、中央に半円形の巨大なテーブルと五脚の椅子があった。

そして、その中央の椅子にヒースクリフは座っていた。

「お別れの挨拶に来ました」

部屋に入るなり、ミトとアスナは口を揃えてそう言った。

「そう結論を急がなくてもいいだろう。彼らと話させてくれないか? 久しぶりだねキリト君、こうして君と話すのは例の《圈内事件》で相談に乗って以来だったかな?そして、カイ君とは初めましてになるかな?」

「いえ……67層の対策会議で以来です」

「自分とも、その時少し話しました」

「そうだったか。あれは辛い戦いだだった。我々も危うく死者を出す所だった。トップギルドなどと言われても戦力は常にギリギリだよ。……なのに君達は、我がギルドの貴重な主力プレイヤーを2人も引き

抜こうとしている訳だ」

「それなら、護衛の人選には気を使った方がいいですよ」

「そもそも、護衛対象より弱いプレイヤーを護衛に就かせること自体おかしい話ですけどね」

カイとキリトの発言に、幹部の1人が血相を変えて立ち上がろうとするも、ヒースクリフが片手をあげて制する。

「クラデイルとコユキ君の件で迷惑をかけたのは謝罪しよう。だが、我々としても2人のサブリーダーを引き抜かれて、はいそうですかという訳にもいかない。キリト君、カイ君。欲しければ剣で、《二刀流》と《業火刀》で奪い給え。私と戦い、君達の内どちらかが勝てば2人を連れていくがいい。だが、負けたら君達が血盟騎士団に入るのだ」

「2人共、乗ったらダメだよ……」

「私とアスナで説得するから……」

カイとキリトに釘を刺すミトとアスナだったがそんな2人を押しつけ、カイとキリトは前が出る。

「いいでしょう。剣で語れと言うならそれまでです」

「決闘^{デュエル}で決着を着けましょう」

「何考えてるのよ、馬鹿！」

《血盟騎士団》本部を後にして、再びエギルの店の2階へと戻るとミトはカイに怒った。

「わざわざ決闘^{デュエル}なんか受けて……私とアスナで説得するって言ったでしよー！」

「わ、悪い。なんて言うか、売り言葉に買い言葉でつい……」
「ついじゃないでしょ!」

「あーもう!落ち着けて!」
身体をポカポカと殴って来るミトを落ち着かせるつもりで抱きしめ、そのままベッドに腰掛ける。

「むう……」

文句が言い足りないのかミトは不機嫌な顔をしているも、おとなしくカイの腕の中で抱かれ、自身も抱き付く。

「何も勝算がないわけじゃない」

「そうなの?」

「俺のユニークスキル《業火刀》、アレは対人特化だって言っただろ?つまり、相手がプレイヤーなら俺の方に分がある。もつとも、それでヒースクリフの《神聖剣》を突破できるかは分からないけど、互角に渡り合うぐらいはできるはずだ。後は、経験とか勘で補えば……」

「勝てる?」

「………と良いけど」

「そこは言い切りなさいよ」

そう言い、ミトは抱き付く力を強める。

「頑張つてよね」

「ああ、頑張る」

第41話 聖騎士VS黒の剣士&焰の剣聖

ヒースクリフとの決闘は、第75層主街区の《コリニア》で行われることになった。

新しい階層が解放された事で、朝から主街区は剣士や商人プレイヤーが詰めかけ、また観光目的で下層から多くのプレイヤーもやって来て賑わっている。

そんな街の中にある四角く切り出した白亜の巨石で作り上げられた古代ローマ風のコロシウム。

そこが3人の決戦の場となった。

「火吹きコーン100コロ!100コロだよ!」

「黒エール冷えてるよ!」

「……………どういうことだ?」

キリトの言う通り、何故かコロシウム周辺では商人たちが露店を開き、3人の決闘は見せ物となっていた。

「新聞でも大体的に報じられてるぞ。ほら」

隣で新聞を読んでいたカイは、その一面をキリトに見せる。

《《神聖剣》VS《二刀流》&《業火刀》》ユニークスキル同士の決闘

!最強は誰か?》

そんな見出しとなっていた。

「ヒースクリフの奴、まさかこれが狙いで……………!」

新聞を握り締めキリトは静かにキレる。

「いや、多分經理のダイゼンさんの仕業じゃないかな……………」

「本当にちやつかりしてる人ね。まあ、だからこそ經理を任されてるんだらうけど……………」

カイとキリト、それぞれの隣でミトとアスナがあははと笑う。

「よう、キリト!カイ!なんだが大変なことになっちまったな!」

そんな中、カイとキリトの姿を見つけたクラインとエギルが近寄る。

その手にはポップコーンらしき菓子を持っていた。

「何祭り気分楽しんでるんだよ……………!」

「暢気だな、お前は……!」

「ま、これも経験と思えよ。しっかし、こんなことなら俺も早く手を打っておけばよかったぜ。一儲けできるチャンスだったのによ」

「友人で商売しようとするな!」

「流石はエギルって感じだけだな」

クラインとエギルとわいわい騒いでいると、また新たな人物がカイ達に近寄る。

「カイ!キリト!」

「久しぶり」

「ケイタ!それにサチ!」

現れたのは《月夜の黒猫団》のケイタとサチだった。

後ろにはササマル、テツオ、ダツカーの3人もいた。

「来てくれたのか?」

「店はいいのか?」

「あんなニユース知って落ち着いていられる訳ないだろ?」

「それに、あのヒースクリフとの決闘デュエルだろ!」

「絶対に見たくて、今日は休みにしたんだ」

「新聞を見て驚いたよ」

「まさかカイとキリトがユニークスキル持ちだったなんて」

「黙ってて悪かったな」

「別に隠してるつもりはなかったんだ」

「いや。あれ程のレアスキル持ってたらどうなるかは予想は出来るからね。2人が気に病むことじゃないよ」

「すまない」

「そう言ってくれれば助かるよ」

「それより、今日は頑張ってくれ!2人には是非とも勝って、ウチの商品を広めてほしいからね!」

「お前もちやつかりしてるな!」

ケイタの商売魂に、キリトとカイが突っ込む。

そんな光景に、全員が笑い出す。

「おっ!居た居た!おっ、キリト!カイ!」

「ようやく見つけたぜ」

「キリトさん、カイさん！」

「お久しぶりですキリトさん、師匠」

「リズにトバル！」

「それに、シリカとレオじゃないか！」

次に現れたのはトバルと、ピンクの髪をした鍛冶師の少女。リズは、髪を短めのツインテールにして《フェザーリドラ》と言うレアモンスターを使い魔にしてるビーストテイマーの少女。シリカ、そして水色の長髪で腰には小太刀の様な短剣を装備し、カイを「師匠」と呼ぶ可愛らしい顔立ち少年。レオは「だった。」

「まさかあの時打った剣が、ユニークスキルのために必要だったとはね」

「妙な注文しやがると思ったんだよ。『エリユシデータ』の性能なら90層までは余裕で戦えるのに同等の性能の剣を頼んで来やがるんだからな」

何を隠そうキリトのもう一つの愛剣『ダークリパルサー』は、トバルとリズ。二人の共同作業で作られた剣だ。

「ともかく！私たちの打った最高の剣で戦うんだから、負けたら承知しないわよ！」

「カイ、テメーもだぞ。俺の打った刀で負けたりでもしたら、テメーの刀を押し折って、テメーも押し折る」

リズとトバルから圧を投げられた。

「リズさん、トバルさん！決闘前デュエルに2人にそんなこと言わないでください！」

「相手はあのヒースクリフなんですよ！そんな緊張するようなこと言って、2人が本来の実力を発揮できなかつたらどうするんです！」
「キリトさん、カイさん！緊張せずに、リラックスして戦って下さいね！私、2人の事応援しますから！」

「俺も同じです！師匠とキリトさんなら絶対に勝てますよ！」

シリカとレオからは激励の言葉を貰った。

そんなことをしていると、キリトとカイの2人が呼ばれ、2人は控

室へと向かった。

他のメンバー観客席へと向かい、決闘^{デュエル}の行方を見守った。

最初に決闘^{デュエル}するのはキリトとヒースクリフだった。

カイは控室から、2人の決闘^{デュエル}の行方を見守る。

最初は互角のように思えたが、徐々にキリトのスピードが上がり、ヒースクリフは焦り始めていた。

そして、キリトは《グリームアイズ》に使った《二刀流》スキル、六連撃技《スターバースト・ストリーム》を発動した。

ヒースクリフは持っている十字盾でガードをするも、キリトは構わず上下左右から攻撃を浴びせ続ける。

そして、十五連撃目がヒースクリフの十字盾を大きく右に弾き、最後の十六連撃目がヒースクリフを襲う。

キリトの勝ち。

誰もがそう思った。

だが、その瞬間、カイは自分の目を疑った。

何故なら、ヒースクリフが有り得ないぐらいのスピードで盾を引き戻し、キリトの最後の攻撃を防いだのだ。

キリトは大技を出したことで、硬直に入った。

ヒースクリフはその隙に十字剣でキリトを突き、キリトのHPは半分以下に落ちる。

キリトVSヒースクリフの決闘^{デュエル}は、ヒースクリフの勝利で終わり、辺りは大きな歓声に包まれた。

そして、キリトはゆっくりと立ち上がり、控室に戻って来た。

「キリト」

「……カイ、気を付けろ」

「ああ、仇は取ってやるよ」

キリトにそう言い、カイは闘技場の中央に向かう。

「カイ君、君の事は随分前から目を付けていたよ。ギルドに入団した暁には、私の護衛でもしてもらおうかな？」

「勝負前からもう勝った気ですか？その言葉、決闘^{デュエル}後に後悔しても知りませんよ？」

「これでも、プレイヤー最強と言われてる身だからね。これぐらい大口が叩けないと、やってはいけないさ。さて、始めようか」

ヒースクリフからの決闘申請を、カイは承認する。
互いに距離を取り、武器を構える。

カウントが減り、目の前に「DUEL」の文字が現れた瞬間、カイは駆け出した。

《業火刀》スキル、突進技《燎火一閃》を使いヒースクリフとの距離を縮めつつ攻撃を出す。

ヒースクリフは十字盾でその攻撃を受け流し、十字剣でカイに斬りかかる。

カイはブーツの底に打ち付けた鉄板で十字剣の腹を抑え、滑らせるようにして十字剣をいなす。

剣を払い、《グリームアイズ》のHPを大幅に削った《業火刀》スキル、重単発技《炎熱昇天》を使う。

ヒースクリフは十字盾で防ぐも、その威力にHPがガリガリつと削られ始める。

そのまま十字盾を押し、カイを離れさせ、2人は再び距離を取る。「素晴らしい力だ。《業火刀》……対人特化スキルと言ったかね？」

「ああ。悪いが、对原告にも勝てるはずだ」
勘で補えば、アンタにも勝てるはずだ」

最早敬語を使う事すら忘れ、カイは不敵に笑う。
そして、筋力値と敏捷値の合わせ技、システム外スキルにより一気に距離を詰め連撃を繰り返す。

その全ての攻撃をヒースクリフは防ぎ続ける。
連撃を浴びせつつ、カイはヒースクリフの集中力を削る。

実際、ヒースクリフの顔には焦りの表情があった。

そして、とうとうヒースクリフの集中力が崩れ、一瞬体勢を崩した。
(ここだ！)

その瞬間、カイは現時点での自身の上位スキル《紅蓮燦爛》を使う。

9連撃の強力な攻撃がヒースクリフの十字盾の耐久値を勢いよく削り、相殺しきれないダメージがヒースクリフのHPをじりじりと削

る。

(行ける！)

最後の1撃、それが決まればヒースクリフを守る盾は破壊され、カイの勝利が決まる。

だが、カイの焰の刃は、ヒースクリフの十字盾を壊さなかった。

「……………はっ？」

呆気にとられていると、ヒースクリフは十字剣を構えていた。

赤いライトエフェクトを纏い、十字剣がカイの身体を斬り飛ばす。

「がっ!？」

勢いよく吹き飛ばされ、カイは地面を滑り倒れる。

それで勝敗は決した。

またしてもヒースクリフの勝ちだった。

「何が……………起きたんだ……………」

カイは何が起きたのか分からず、ヒースクリフを見た。

ヒースクリフは、肩で息をし、焦りから解放された表情をしているも、その目は険しかった。

「素晴らしい攻撃だったよ。最後の1撃、君が目測を誤らなければ私の負けだったね」

だが、ヒースクリフは一瞬でいつもの目つきに戻り、カイにそう言った。

「では、約束通り君とキリト君は我が《血盟騎士団》に入団してもらう。ああ、それと、私の護衛をしてもらうと言う話は冗談だ。君にピツタリの仕事があるからね」

そう言い残し、ヒースクリフは闘技場を去って行き、カイとキリトの入団が決まってしまった。

第42話 歪んだ愛情

ヒースクリフに負けた翌日、カイの元にミトが団服を持って訪れた。

「うへ〜……全身真っ白の服とか派手じゃないか？」

カイの服装は、カイが慣れ親しんだ真紅のコートとデザインは同じだが、生地は白く、所々に赤のラインが入っていた。

おまけに両襟に小さく2つ、背中に大きく1つ《血盟騎士団》のギルドマークの真紅の十字模様が施されている。

「それでも割と地味な方よ。似合ってるわ」

「白と赤を逆にして作り直して欲しい」

そう言つて、カイはベッドに腰掛ける。

「それじゃあ、前のと変わらないじゃん」

ミトもそう言つて、カイの隣に座る。

「まあ、これからはギルドメンバーとしてよろしくね」

「ああ、よろしく。と言つても、俺は新人でミトは副団長だからな。もう気軽に話せなくなるか」

「誰も見て無い所ならいいでしょ」

そう言つて、ミトはカイに寄り掛かり、肩に頭を置く。

そんなミトの頭を、カイは優しい手つきで撫でる。

「そう言えば、俺の仕事ってなんだ？ヒースクリフは、俺にピッタリな仕事があるって言つてたけど」

「ああ、それ私の護衛よ」

「護衛？ミトの護衛は、あのコユキって子じゃ……そう言えば、護衛の任は解かれたんだっけ」

「それとキリトもアスナの護衛になったわ。本部で、カイが護衛を付けるなら護衛対象より弱い人を付けるなって言ったのが効いたのか、団長が貴方達なら私たちの護衛にピッタリだつて」

「そうか……その辺は、ヒースクリフに感謝だな」

翌日、今日からミトの護衛として《血盟騎士団》に入団することになったカイは、キリトと共に真新しい純白のコートを着て、ミトとアスナと共に第55層《グランザム》へと向かった。

そして、本部に着くや否やカイはある人物に接触された。

「訓練？」

「そうだ、私を含む5人パーティーでここ55層の迷宮区を突破し、56層の主街区まで到達してもらおう」

その人物の名は「ゴドフリー」。

《血盟騎士団》では、フォワードの指揮を執っているプレイヤーだった。

「ちよつとゴドフリー！そんなことしなくても、カイの実力は私が保証するわ！」

「アスナ第一副団長と言い、ミト第二副団長も規律をないがしろにされては困りますな。それに、入団する以上、一度はフォワードの指揮を預かるこの私に実力を見せて貰わねば」

「そんな必要ないぐらいカイは強いわよ！」

ミトがキレながら怒るが、ゴドフリーはそれを気にせず、街の西門に40分後に集合と言って笑いながら出て行った。

「はあ……ごめんね、カイ。ゴドフリーの奴、一度言い出したら聞かない奴で」

「ま、いいさ。どこの迷宮区でもすぐに突破してやるさ」

カイはミトの傍に立って、頭にポンつと手を置く。

「今日我慢すれば明日からは一緒だ。だから、待っててくれよ」

「カイ……………うん、分かった。待ってるよ」

40分後、西門にカイが向かうとそこにゴドフリー達の姿はなく、1人のプレイヤーがいた。

「君は……………」

「ふん、やっと来やがりましたね」

そのプレイヤーはコユキだった。

「新人の分際で遅刻とはいいい度胸してやがりますね」

カイは思わず警戒するも、コユキがあまりにも普通の態度の為驚いていた。

「遅刻って、どういうことだ？」

「私以外はもう皆、迷宮区へ向かってます。私は遅刻してきたアンタを待ってただけです」

「時間通りに来たんだが？」

「集団行動するなら5分前行動が常識では？」

正論を言われ、カイは思わず黙る。

「ふん、早く行きますよ。向かうのは45層の迷宮区です」

「45層？55層の迷宮区じゃないのか？」

「ゴドフリーが気まぐれで変えました。ガタガタ言わず付いて来るでやがります」

そう言って先を進むコユキに、カイは急いで後を追った。

迷宮区に着くとコユキは立ち止まり、カイに手を差し出した。

「今日の訓練は危機対処能力も見るから、アンタの結晶アイテムを渡

して下さい」

「はあ?!結晶アイテムを預かるだつて!?!」

結晶アイテムはこのデスゲームと化したSAOでは生命線も同じ。

カイは、結晶アイテムを切らしたことは一度たりともない。

「こんな下層の迷宮区で何びびってんですか?それとも、ミト様の護衛になるであろう御方は、こんな下層でも結晶アイテムがないと怖くて入れねえんですか?」

カイを馬鹿にした態度を取るコユキに、カイは苛立ちを感じる。

だが、ここで喧嘩腰になつても良い事などなく、入団初日に問題行動を起こしてミトの護衛の任を外されるのも嫌だったので、大人しく結晶アイテムを渡した。

「では、行きますよ」

コユキを先頭に、迷宮区へと入る。

カイは遭遇するモンスターをすべて一刀で葬り、先へと進み続ける。

暫く進むと、コユキが急に足を止めた。

「アンタは、この迷宮区のこと知ってますか?」

「……ああ、フロアボス自体そこまでの強さはなかったが、迷宮区攻略中にいくつかのパーティーがトラップで壊滅した話を聞いている」

45層迷宮区は、トラップが多いダンジョンでその殆どが即死系やモンスター大量ポップ系と言った物だった。

その為、攻略中に壊滅したパーティーは少なくなき、フロアボス攻略後も中層プレイヤーが未発見のトラップに引掛かり亡くなる件が相次いで起きた。

「だけど、トラップの殆どは事態を重く見た攻略組が有志を募ってトラップの除去を行ったな」

「ええ、そうですよ。攻略組が動いたお陰で殆どのトラップは解除されました。……このダンジョンは、私にとっては思い出の場所なんです」

「思い出?」

「私はここでミト様と出会ったんです。当時の私は、中層プレイヤー

でその日を生き抜くのに精一杯でした。あの日も行きずりの野良パーティーに加えてもらって、このダンジョンに来てました。その時、私たちはモンスターの大量ポップ系のトラップを踏んだんです。そしたら、パーティーメンバーは私を囮に逃げたんです」

コユキの言葉に、カイは言葉を失った。

ギルドや固定でパーティーを組んでいるプレイヤーたちではあまりないが、行きずり同士で組んだ野良パーティーなどでは、そういうことがあると言うのは聞いたことがある。

コユキはそれに当たってしまったのだ。

「今でも思い出しますよ。私に向かって下卑た笑みを浮かべ逃げ出す男どもの顔を……そんな、死を覚悟していた私の前に現れたのがミト様でした。ミト様は1人で全てのモンスターを倒し、私を助けてくれました。それに、貴重な転移結晶までくれて、主街区まで連れて行ってくれました」

「そうだったのか……」

「あの時の感動は今でも忘れてません。それからですよ。私の道は、常にミト様だけを追い掛けていた。あの人の役に立ちたい。あの人の隣に立ちたい。それが、私の願いでした」

ミトへの異常なまでの執着は、ミトへの憧れでもあった。

その事を知り、カイは少しだけコユキの事を知れて良かったと思っ

た。

「だからですよ。アンタみたいな男、邪魔でしょうがないんです」

次の瞬間、コユキは振り向き、カイの首目掛け剣を振った。

カイは咄嗟に刀を抜き、その攻撃を防御し、バックステップで後ろに下がった。

「何の真似だ!」

「邪魔な寄生虫野郎の排除ですよ。アンタさえいなければ、私はずっとミト様の傍に居られた。全部お前が悪いんだ!」

「……ここで俺を殺しても何もないぞ。それどころか、お前が疑われるだけだ」

「安心してくださいよ。私が疑われることはありませんから」

「何?」

「ゴドフリーが訓練先のダンジョンを変えたつての、アレは嘘ですよ。ゴドフリー達は今頃、55層の迷宮区に行ってるはずです。集合時間も、私が前以て嘘の時間を教えて、その後には正しい時間を教えました。実際にはゴドフリー達は10分前にギルドを出発してました」

「だとしても、俺たちが来ないことに気づけば……………」

「言ったでしょ? 疑われないって」

その言葉には絶対的な確信の色が現れていた。

その自信が何処から来るのか、分からないカイだったが瞬時に理解した。

「まさか!」

「そうです。向こうにもいるんですよ。あの男、《黒の剣士》を殺したくて堪らない奴が! 私はその男と互いの殺したい相手を殺すために、共謀することにしたんです。筋書きはこうです。ゴドフリー率いるパーティーは、55層迷宮区にて、犯罪者プレイヤーの集団と遭遇。勇戦空しく3人が死亡。私とクラデイルは、2人で犯罪者集団を撃退し、生還しました。これなら、誰にも疑われないですよ」

「クラデイル……………アスナの護衛をしていた奴か。だが、あの程度の奴にキリトが後れを取る訳がない。それは俺も同じだ。お前如きには、俺が殺せるかよ」

「……………そうですね。私の実力じゃ、貴方には勝てません。そもそも、貴方を直接手に掛けたら、私がオレンジになってしまいます。だから、こうするんですよ!」

その瞬間、コユキは投げナイフを取り出しカイに投げる。

カイはその投げナイフを躲す。

そして、コユキの投げナイフはそのままカイの背後の壁に当たり、崩れ、そこから大量のモンスターが現れた。

「何!」

「言ったでしょ。殆どのトラップは解除されたつて。つまり、まだ解除されていない隠されたトラップがあるんですよ!」

コユキは《ハイディング隠蔽》スキルで姿を隠したのか、辺りにはいなかった。

その為、モンスターのタゲはカイに集中する。

おまけに、コユキの言葉を信じ、結晶アイテムは全て預けている。
離脱も即時回復もできない。

「くそっ！」

カイは刀を抜き、モンスターを薙ぎ払う。

幸か不幸か、モンスターの殆どは2足歩行型のモンスターの為、《業火刀》の対人特攻が刺さった。

対人特攻頼みによる通常攻撃の連撃と、クールタイムと硬直時間の短い《業火刀》のソードスキルを使い、モンスターを蹴散らしていく。
だが、全てのモンスターの攻撃を防ぐ事は出来ず、カイは徐々にHPを減らしていく。

カイは結晶無効エリアの事も考え、常日頃から結晶アイテムとは別に、ポーション類も携帯している。

何とかポーションを使い、HPを回復するも数は多くなく限界があった。

とうとうポーションも底を尽き、カイのHPはイエローにまでなっていた。

「くそ……どれだけいるんだよ………！」

HPも少ないが、それ以上に精神的な疲労が強かった。

先の見えない戦いに、カイは参っていた。

その為、背後からの攻撃に反応が遅れ、後頭部にキツイ一撃を食らった。

「がっ!？」

更に、膝を突いてしまい、そこにモンスター群が襲い掛かった。

咄嗟に防御に徹するも、到底防ぎきれず、《戦闘時回復》での回復も間に合わなくなり始めていた。

(……)までか………！)

自身の死を覚悟し、カイは思わず目を閉じた。

《待ってるよ》

だが、ミトの声が聞こえた。

その瞬間、カイは再び体に力を籠め、立ち上がった。

「うおおおおおおおおお!!」

“焰群”が焰を纏い、1回転するように振られる。

《業火刀》スキル、重範囲技《戦火灰塵》。

強力な範囲技に、モンスターは蹴散らされる。

「はあ……はあ……!」

「まさか、あれだけのモンスターをすべて倒すとは、驚きですね」

コユキがカイの背後から近寄り、《隠蔽》ハイディングスキルを解除すると同時に、疲弊しきったカイの無防備な背中を突き刺した。

「がつ!」

「予定変更です。オレンジになっても構いません。貴方は、私がこの手で始末してやります」

HPが減っていくのをカイは見る。

(ごめん、ミト………約束、守れそうにない………)

ミトへの別れを心の中で呟く。

その時、一陣の風が吹いた。

そして、その風はコユキへと向かい、コユキを吹き飛ばした。

「がつ!」

吹き飛ばされた弾みでカイの背中からコユキの剣が抜け、地面に倒れそうになったカイは、誰かに受け止められる。

「ヒール!」

カイを受け止めた者は、瞬時に回復結晶でカイのHPを回復させた。

カイは自分を助けてくれた者を見る。

「ミ………ト………?」

「良かった………間に合った………!」

そこには、今にも泣き出しそうな表情のミトが居た。

第43話 純粹な愛情

「ミト、どうしてここに……………」

「アスナが教えてくれたの。キリトが訓練に行つて、一緒に行つた人たちの反応が消えたから何か起きたつて。それで、カイの事を追つたら、55層じゃなくて45層に居たからそれで」

「そう言い、ミトはカイを優しく下ろした。」

「そして、倒れているコユキの方を見て、目つきを鋭くさせる。」

「コユキ、これは一体何の真似かしら？」

「コユキはゆっくりと立ち上がつて言う。」

「ミト様……………私は、ミト様のためにやつてんですよ。ミト様に這い寄る薄汚い寄生虫の駆除を。だって、ミト様はそんな奴より、私と居るべきなんです。私とずっと一緒に……………！愛してるんです、ミト様……………！」

「そう……………貴女が私にそう言う感情を向けているのは分かつた。でも、私は貴女の想いに応えれないわ。それにね……………」

「ミトは鎌を構え、言う。」

「カイを殺そうとした貴女を、赦せるほど私は優しくくないの」

「そう言い、走り出しコユキに攻撃を仕掛ける。」

「ミトの攻撃は、コユキに当たりコユキのHPは一気に半分にまで落ち、その場に尻餅をついた。」

「え？…ミト様？」

「コユキは何故自分が攻撃されるのか分からないらしく、ミトを見る。」

「はは、ヤダなあミト様。こんな危ない冗談は止めてくださいよ。そうだ、ミト様。覚えてますか？このダンジョン、私とミト様が初めて出会つて場所なんですよ。あの時、ミト様が私を助けてくれた。あの時から、私とミト様は一緒になる運命だったんですよ？ミト様にもわかりますよね？」

「……………コユキ、悪いけどあれは運命じゃない。ただの偶然よ。偶然、未処理のトラップがないか私に団長が巡回の指示を出して、そこ

動けなくなったコユキをロープで拘束する。

「ミト、大丈夫か？」

「うん、大丈夫。それにしても……………」

ミトは縛られ気を失ってるコユキを見る。

「私の所為だ」

「ミト、それは違う」

「ううん、私の所為だよ。私はコユキの気持ちに気づいてた。でも、私はそれを無視した。歪んだ愛情であつても慕われるのが嬉しかったから、拒絶して、関係が壊れるのが怖かった。コユキの事、自分の事しか考えてないって言つたけど、私も自分の事しか考えて無かつた。その所為で、カイが危険な目にあつた……………」

ミトは涙を流して言う。

「私、カイの傍に居られない…………居る資格なんてないよ……………」

「ミト…………」

泣くミトを、カイは抱きしめた。

「カルマ回復クエスト受けた時の事、憶えてるか？あの時、ミトが俺に言つた言葉。ミトは忘れてくれて言つたけど、俺はずつと覚えてるんだ」

『ずっと傍に居てよ』

「俺はミトとならずつと一緒に居たい。ミトだから、傍に居て欲しい」

ミトの顔を見ながらカイは言う。

「ミト、好きだ」

「あつ……………」

カイの告白に、ミトは驚いた。

そして、先ほどまで泣いていたのに、今度は顔を赤くした。

カイはミトの返事を待たず、そのまま顔を近づけ、ミトにキスをした。

兎に角ミトの事が愛おしく、ミトを自分の物だと主張したかつた。行き成りのキスにミトは驚くも、すぐさまそのキスを受け入れた。今のミトの視界には、カイからのハラスメント行為により、《ハラスメント防止コード》発動を促すシステムメッセージが表示されてい

る。

だが、そんな物お構いなしにミトはカイとのキスを味わう。時間にして僅か数秒程のキス。

しかし、カイとミトには何分にも何時間にも感じるほどのキスだった。

2人の唇が離れる。

恥ずかしさが一気に込み上げ、ミトはカイの胸に顔を埋める。

カイはミトの頭を抱えるように抱きしめ、耳元で囁く様に言う。

「なあ、ミト。今夜、一緒に居てもいいか？」

カイの言葉に、ミトは無言で頷いた。

その後、応援に駆け付けた《血盟騎士団》によってコユキは、《黒鉄宮》の牢獄へと送られ、カイとミトは事の顛末をヒースクリフへと報告した。

その際、キリトとアスナも同席し、キリトの口からクラデイルが《笑う棺桶》の一員だったことが語られ、その事から討伐作戦の時、情報ラフィン・コラインが漏れていたのはクラデイルの仕業だったのではと推測された。

最も、クラデイルが死んだ今、真相は分からずじまいだ。

そして、4人はギルドへの不信を理由にカイとキリトは退団、ミトとアスナは一時退団を申請した。

ヒースクリフは暫し黙考をし、そして退団を了承した。

だが、その時ヒースクリフは「君たちはすぐに戦場に戻ってくるだろう」と言って、謎の微笑を浮かべていた。

その後、キリトはアスナと共に手を繋いでアスナの家へと向かい、カイもミトと手を繋いでミトの家へと向かった。

家へ着くなりミトはすぐさま私服に着替え、料理を始めた。

そんな様子に、カイは「少しぐらい休んでもいいのに」と思いながらも、料理をしているミトの姿を見つめた。

料理が出来て食事をする、ミトは「やっぱり『ラグー・ラビットの肉』には敵わないわね」と苦笑していたが、カイは十分だと言って料理を堪能した。

食後にお茶を飲み、適当な雑談をしていると時刻は21時になっていた。

時間に気づくと、ミトは急に黙り出し、カイはどうしたのかと見つめる。

「よし」

すると、ミトは意を決したのか立ち上がり、部屋の電気を消した。

「み、ミト?」

ミトの急な行動に、カイは驚く。

すると、今度は急に服を解除して、ミトは下着姿となった。

「なっ!?!」

これまた急な行動に、カイは驚き椅子から転げ落ちそうになった。

「あの、さ……あんまりじろじろ見られると恥ずかしいんだけど……」

「わ、悪いー!」

慌ててそっぽを向くカイ。

「カイも……準備してよ……私だけなんか馬鹿みたいじゃん……」

ミトのその言葉と、自分がミトを抱きしめた時、何と言ったかカイは思い出し、ようやくミトの行動がなんなのか理解した。

「ちよ、ちよっと待ってくれ!」

「え?」

「いや、その……そんなつもり、一切なかったんだ……」

「……………はっ！」

顔を赤くしていたミトは一瞬で、真顔となった。

「本当にただ一緒に居たいなって思っただけで、そういうことするつもりは……………」

「……………そう言う事は」

「……………はい？」

「思っても口に出すな！」

羞恥とは違う、怒りで顔を赤くしたミトからの全力の正拳突きがカ
イに直撃する。

犯罪防止コードによって、拳はカイには届かなかったがカイは思
いっきりビビっていた。

「わ、悪い！てか、そう言う事ってできるのか？」

「……………本当に知らないのね」

ミトは呆れた様に、自分の身体を手で隠しながら言う。

「オプションメニューの一番深い所に、《倫理コード解除設定》っての
があつて、それを解除すると出来るの」

「そ、そうだったのか……………」

SAOの知らないシステムに、カイは少しかだけ感心し頭を掻く。

「……………なあ、ミト。俺なんかで、いいのか？」

「……………うん」

カイの問いに、ミトは静かに答えた。

「……………分かった」

カイはそう言うと、オプションメニューから《倫理コード》を解除
した。

その行動に、ミトは再び顔を赤くし、ドキツとした。

「ミト」

優しくミトの名を呼び、近付き、カイはもう一度キスをした。

今度は《倫理コード》を解除していた為、ミトの視界に煩わしい《ハ
ラスメント防止コード》発動を促すシステムメッセージは現れなかつ
た。

「ちよ、ちよつと待ってー！」

キスを終わると、ミトは慌てた様子でカイから離れる。

「そのさ……勢いで脱いじやったけど、ここじゃなくて寝室でお願い……」

「……………ああ、分かった」

カイはミトをお姫様抱っこで抱え、寝室へと移動した。

暫く経って、一線を越えたカイとミトは同じベッドで横になっていた。

ミトはカイの隣で静かに寝息を立てており、カイはそんなミトを見ていた。

ミトの髪が、ミトの口に入りそうだったのでカイはミトの髪を払い除ける。

すると、ミトは目を開けた。

「悪い、起こしちやったか？」

「んん、平気」

そう言い、ミトは体を起こす。

カイも体を起こしミトを見る。

「なあ、ミト。なんか色々飛ばし気味になっちゃったけど、俺、まだミトからの返事、聞いてないんだけど」

「……………あ」

「カイはミトに好きだと言ったが、ミトはそれに対しての返事をしてなかった。」

「ここまでしといて、今更聞くのは反則じゃない?」

「だとしても、ミトの口から直接聞きたい。ダメか?」

「馬鹿……好きだよ、私もカイの事、大好き」

「ありがとう、ミト」

ミトにお礼を言い、カイはミトを抱き寄せる。

「なあ、ミト。少しだけでいいから、前線から離れないか?」

「え?」

「結構前に、キリトと22層の探索した時、東西エリアで森と湖に囲まれた良い場所を見つけたんだ。モンスターも出なくて、割と拠点にしてる中層プレイヤーも多いんだ。そこに、いくつかログキャビンが売りに出されてたからさ、そこで一緒に住もう。それと……」

「……それと?」

カイが次に何を言うのか、ミトには察しが付いていた。

にやにやとした顔でそう聞くミトに、カイは笑った。

「ミト、お前分かってて聞いているだろ?反則じゃないか?」

「さっきの仕返しよ。それで………続きは?」

「………ミト、結婚しよう」

「うん、喜んで」

カイからのプロポーズに、ミトはとびつきりの笑顔でそう答えた。

第44話 独身最後のパーティー

カイとミトが結婚した翌日。

カイは相棒であるキリトと、ミトの親友のアスナに結婚の報告に向かった。

そして、驚くことにキリトとアスナも結婚したらしく、アスナはミトの手を取って喜び祝ってくれた。

勿論、ミトもアスナの結婚を喜び祝った。

カイとキリトはと言うと、互いに苦笑し拳をぶつけ祝った。

その後、4人で共通の友人に結婚の連絡を行った。

「と言う訳でだ！キリトとカイの結婚を祝って、独身最後のパーティーするぞ！」

「おい、クライン。その言い方だと俺とカイが結婚したみたいだぞ」「言葉を選べ、言葉を」

「固いこと言うなよ。こんな目出たい事なんだ！今日は独身最後を謳歌して、飲もうぜ！」

そう言い、クラインは持参した酒を飲む。

結婚報告をするや否や、クラインからカイとキリトの独身最後のパーティーをしようと誘いが来た。

システムのには結婚しているため、独身ではないがミトとアスナからも折角だからと言われ、2人は参加することにした。

パーティー会場は、エギルの店の2階で行われる。

「悪いな、エギル。場所を貸してくれて。それに、店まで休んでくれて」

「良いって事よ。お前らとは第1層からの付き合いだ。何より、今までお前らは常に俺らの前に出て頑張ってたんだ。こんな時ぐらい、祝わせてくれ」

エギルは歯を見せて笑い、そう言う。

「しっかし、ようやくくっ付いたか。こっちはいつくっ付くか、ずっと待ってたぜ」

「師匠、会うたびにミトさんの話ばかりしてましたもんね」

トバルはお茶を、レオはジュースを飲みながらそう言う。

「そんなにしてたか?」

「はい。会うたびに、ミトと何したとか、ミトと何処に行ったとか。今までもそうでしたけど、特に今年の9月ぐらいからは話すことの7割はミトさんの話でしたね」

「そっか……気づかなかったな」

「キリトもそうだったな。柄にもなく、女性の好みそうなプレゼントトってなんだって聞いてきたりよ。カイから相談されたって言うってたが、どう見てもアスナへのプレゼントの相談だったな」

「なっ?!バレてたのか……?」

「バレないと思ったのかよ?」

そこで、キリト以外皆が笑い、キリトは恥ずかしそうにジュースを飲み干す。

「まあ、何はともあれ……キリト、カイ」

トバルは湯飲みを置き、2人を見る。

「結婚おめでとう。嫁さんたちを幸せにしてやれよ」

「俺からも言わせてください」

レオもコップを置き、2人を見る。

「結婚おめでとうございます!色々大変でしょうけど、皆さんなら乗り越えれますよ、きつと!」

「レオ……トバル……」

「ああ、必ず幸せにするよ。ありがとうな」

カイとキリトも二人にお礼を言う。

「ま、俺たちの話はここまでとして……俺としてはトバルとレオの話が聞きたいな」

「それもそうだな。2人の進展の方を、聞かせてもらおうか」

2人はニヤツと笑い、トバルとレオを見る。

「は？俺らの方？」

「とぼけんなよ。リズといい雰囲気なんだろう？噂は聞いてるぞ。お前の家からリズが朝帰りしたってな」

「そんなことか。リズの所とは色々取引してんだよ。俺の作った品をリズの所で売って貰ったり、共同で武器の製作したり。そんな関係じゃねえよ」

キリトはトバルに絡んでいき、トバルは鬱陶しそうに相手する。

「レオはどうだ？シリカとは、少し仲は進んだか？」

「ちよっ!?師匠！何度も言ってますけど、俺とシリカはそう言う関係じゃなくて、本当に純粹に互いを頼れるパートナーだと思ってるだけですから！」

カイにシリカとの仲を聞かれ、レオは顔を真っ赤にして否定する。

「なんだよなんだよ！キリトとカイだけじゃなく、トバルとレオ坊までお相手が居るのかよ！くっそ〜！どうして、俺には運命の相手は現れねえんだよ！」

「美女に対して下心丸出しだからじゃないか？」

「野武士面なのが受け付けられないんじゃないか？」

「性格がだらしないのもあるな」

「リアルだと部屋にビールの空き缶とか転がってそうですね」

「言いたい放題かよ、お前ら！」

4人に指を向け、叫ぶクライン。

「こうなりや、今日とはことん飲んでやるぜ！エギル、お前も付き合えよ！同じ独り者同士、独身貴族として生きてこうぜ！」

「ああ……悪い、クライン。俺、現実^{リアル}で結婚してんだ」

「……………この裏切り者がああああああああ!!」

男泣きをし、クラインは酒を一気に飲み干した。

「そう言えば、ケイタさん達や、ディアベルさんは来てないんですね」
「ああ、ケイタ達は今忙しいらしいんだ。この間の、ヒースクリフとの決闘^{デュエル}で、俺たちが負けたけど、商品のいい宣伝になったとかで、注文が殺到してゐるらしいんだ。でも、ちゃんと祝いのメールはくれたよ」
「ディアベルもだな。なんかギルドの方で色々忙しいらしくて、休めないそうだな」

そう言い、カイはディアベルからのメールを思い出す。

『カイ、結婚おめでとう！』

君とミトはいつかそうなるんじゃないかって思ってたよ。

本当なら、直接お祝いしたいけど、今は手が離せないんだ。

すまないけど、文面で祝辞を遅らせて貰うよ！

面倒事が片付いたら、改めてお祝いに行く。

キリトにもお祝いを伝えてくれ。

本当に結婚おめでとう！ ディアベルより』

(面倒事つてのが気になるけど、まあディアベルなら大丈夫か)

カイはそう思い、ジュースを飲む。

「それじゃあ、改めて」

「アスナ(さん)、ミト(さん) 結婚おめでとう(ぎいいます)ー!」

「ありがとう、リズ」

「シリカも、態々祝いに来てくれてありがとう」

現在、アスナの家で、アスナとミトの独身最後のパーティーが行われていた。

リズがトバルから、男だけでカイとキリトの独身最後のパーティーをクラインがやると聞き、リズが男どもだけずるいから自分たちもミトとアスナの独身最後のパーティーをしようと言いだした。

シリカも、レオがそのパーティーに出る為、1日の予定が空き、2人の結婚を祝うために参加した。

「しっかし、ようやくアンタたちが結婚して私も嬉しいわ。アスナはいつもキリト君、キリト君ってキリトの話ばっかだったし」

「ちよ、リズ！その話はしないでよ！」

「ミトさんもそんな感じでしたよ。レオ君がカイさんと修行してる間、よく一緒に居ましたけどそんな時、カイさんの自慢話ばっかで」「そうだったかな？」

4人で話をし、アスナとミトの料理やリズとシリカが持ち込んだデザートを食べ、紅茶を飲む。

カイ達男どものパーティーが居酒屋でのどんちゃん騒ぎの飲み会なら、ミト達女性陣のパーティーは華やかなお茶会だった。

「そうだ！私、聞きたいことがあったんですよ！」

突然、シリカがそんなことを言い出した。

「ミトさんとアスナさんは、いつからカイさんとキリトさんのことを意識してたのか！」

「あ、良いわね！私も聞きたい！」

「私は別にいいけど……アスナは？」

「え、なんか恥ずかしいなあ……でも、ミトがそう言うなら」

「じゃあ、聞かせなさいよ！まずはアスナから！」

「そうだね……最初は、キリト君の事をそんな風には見て無かったんだ」

アスナはゆっくりと話し始めた。

「どちらかって言うと、命の恩人で、私とミトを助けてくれた。その印象が強かったの。でも、キリト君の事をそう言う風に見始めたのは、あの日からかな」

アスナがキリトを異性として意識し始めたのは、最前線が56層の時だった。

56層では主街区の真ん前に、強力な大型のフィールドボスが居た。

フィールドボスは、前面の防御がとてつもなく固く、全ての武器が効かない鉄壁の防御だった。

そのフィールドボスを攻略しないと、迷宮区の攻略は難しく攻略組は攻めあぐねいで居た。

攻略に焦りを感じていたアスナは、主街区のゲートを閉めず、フィールドボスを街に居れ、NPCを襲っている隙に、弱点の腹部を背後から攻撃する作戦を立案した。

「NPCを襲わせるって……アスナ、なんてことしようとしたのよ」「うん、今でもあの時の私はどうかしてたわ……本当に、なんであんな作戦立てたんだろう……」

当時の事を思い出し、アスナは自己嫌悪に陥る。

「当時のアスナは、攻略の全体指揮を執る立場だったからね。焦る気持ちは分かるよ。まあ、そんな作戦に不満はあっても反論できる人は誰もいなかったのよ。何処かの誰かさん達以外はね」

「あ、その誰かさん達ってもしかして！」

「そうだよ。キリト君とカイ君」

アスナの作戦に対し、キリトとカイは反論した。

幾ら死んでも、24時間経てばポップするNPCと言えども、キリトとカイはNPCはこの世界で生きる住人だと言った。

それに対し、アスナは優先すべきものはプレイヤーの命以外には、ゲームの攻略だと言った。

しかし、キリトはレベリングの遅い者やレベルの低い者を斬り捨て、NPCを殺すのはステータスやレベル、装備なんかよりもっと大事な物、〃心〃を損なっていると言った。

その発言に、アスナはキリトが自分を憐れんでいると思い、更に未だにSAOをゲーム感覚で楽しんでいる様なキリトに怒りを露わにし、デュエル決闘を申し込んだ。

決闘^{デュエル}でアスナが勝てば作戦は決行、キリトが勝てば作戦は中止、別の作戦を考える。

その条件で、決闘^{デュエル}は行われた。

最初こそ、スピードでアスナが圧倒していたものの、キリトはアスナにフェイントを仕掛け、アスナの攻撃を誘い、隙をつけて勝利した。結局、その後フィールドボス攻略の手掛かりを掴み、フィールドボスは無事討伐され攻略は進んだ。

「その時、気づいたんだ。キリト君はこの世界を攻略してるんじゃない。生きてるんだって。それからかな。キリト君の事を意識し始めたのは」

「でも、アスナだったら素直になれなくてそれ以降もキリトと顔を合わせるたびにぶつかりまくりだったのよ。素直になり始めたのも割と最近だし」

「だから！その話はいいから！」

余計な補足を入れるミトに、アスナが怒る。

「私はいいから、次はミトだよ！」

「はいはい、分かっているって。そうね、カイの事を意識した……と言うよりカイへの想いを自覚したのはアスナよりもっと後よ。2人は《圈内事件》のことは知ってるわよね？」

ミトはそのまま《圈内事件》の事を話した。

カイの詳しい過去の事は話さず、ある程度掻い摘んで話をし、カイの傍に居たいと思ったことを話した。

「今思うと、カイの事はずっと前から好きだったんだと思う」

「そう言えば、カイとキリトとは第1層からの知り合いだったわね」

「一目惚れって奴ですか？」

「キリトとはそうだけど、カイとは違うわ。この際だから言うけど、カイとは昔、現実^{リアル}で会ったことがあるの」

「そうだったの？」

「ええ。もつとも、1年ぐらいで会えなくなっただけど。今思うと、私その時からカイの事が好きだったんだな……」

「初恋だったのね……」

「そう思うと、SAOで再会出来たのはまさに運命ですね！」

「運命か……そうね、本当に嬉しいわ」

「ミト……良かったね」

嬉しそうに紅茶を飲むミトに、アスナは笑みを浮かべる。

「さて、私たちの話はもういいわよね？それで、リズとシリカはどうなのよ？」

話を終えると、ミトはにやつと笑いリズとシリカを見る。

「え？私たち？」

「私とアスナにだけ話しをさせて、2人が話さないのはフェアじゃないでしょ？」

「あ、そうだね！折角だから聞かせてよ、トバル君とレオ君との馴れ初めとか」

「ついでにいつから好きなのとかもね」

「ちよっ！それは関係なくない!？」

「ええ!?どうしてわかるんですか!？」

リズは否定するも、シリカはレオへの想いがバレたと思いい声を上げた。

「おっ、シリカのその反応、本当にレオの事が好きなのね」

「え……あっ！もしかして、私嵌められました!？」

「ここまで吐いたら、後は話すだけよ。さあ、吐いて楽になりなさい」

「うう……話します……話しますから、レオ君には内緒にしてください……」

シリカは顔を真っ赤にし、涙目でそう懇願した。

第45話 ビーストテイマーになる少女と剣聖の弟子になる少年

良い事と悪い事は交互に起きる。

何かの本で読んだのか、誰かから聞いたのか憶えて無いがシリカはいい事や悪い事が起きた時は、自分にそう言い聞かせて来た。

そんなシリカにビックリするような知らせが届いたのは、SAOがデスゲームとなる1カ月前の事だった。

抽選で1名にナーヴギアが当たる懸賞に、何となく応募したらそれに当選したのだ。

当選通知のメールが来た時は、詐欺が何かと疑い何度も文面を読み返し、ようやく本当なのだと思った時は、飛び上がるほど喜んだ。

貯めていたお年玉でSAOのソフトも購入し、シリカは仮想世界へと足を踏み込んだ。

だが、良い事の後と悪い事は交互に起きる。

そんなジンクスが襲い掛かった。

突如、茅場明彦からSAOからのログアウトの不可と、HPの全損は死を意味すると告げられた時、シリカは「そんな」や「まさか」と言った言葉がより、「やっぱり」と言う言葉が浮かんだ。

自分のジンクスの所為で、10000人もプレイヤーがデスゲームに巻き込まれた。

そんな訳もないのに、当時のシリカはそう思い込んでしまい悲鳴を上げた。

それから約1ヶ月間、シリカは転移門広場の片隅でずっと蹲っていた。

「君、どうしたの?」

そんなシリカにある人物が声を掛けた。

全身をしつかりとした防具で着込み、腰には店売りの短剣を強化したものを差し、歳はシリカと同じぐらいの長い黒髪の可愛い顔をしたプレイヤーだった。

そのプレイヤーに話す元気もなく、シリカはただ黙っていた。

「もしかして、行く所がないの?」

その問いに、シリカは頷いた。

「なら、良い所がある。君みたいなお子供たちが集まってる教会があるんだ」

シリカを案内すると言い、そのプレイヤーはシリカを立ち上げさせた。

案内され、シリカが着いたのは東7区の川べりにある教会だった。

「ちよつと待ってて」

そう言うと、プレイヤーは教会の扉をノックした。

「はい、どちら様ですか?」

扉を開けて出てきたのは、黒縁眼鏡を掛けた女性だった。

「久しぶりです、サーシャさん」

「レオ君じゃない。今日はどうしたの?」

「実はさつき転移門広場で……」

レオと呼ばれたプレイヤーは、教会に居た女性プレイヤー“サーシャ”にシリカを見つけて、連れてきた経緯を話した。

その間、シリカは開いてる扉の隙間や近くの窓から、教会の中を確認していた。

中には、シリカと同じ年頃の子、或いはもつと年下の子なんかも居た。

その様子を見たシリカは、恐怖を感じた。

(もし、ここでも虐められたら……!)

シリカは現実世界で、クラスメイトから虐めを受けていた。

何も最初から虐められていた訳じゃない。

学校は好きだったし、友人も沢山居た。

だが、親友だと思っていた子に、自身の将来の夢を打ち明けてから、全てが変わってしまった。

学校に行けば無視され、持ち物を隠され、足を引っかけて転ばされることもあった。

あんなに優しくかった友人たちも、親友だった子も一瞬にして、シリ

カの事を裏切った。

「なあ、サーシャさんがここで暮らしていいってさ」

レオがシリカの方を向きながらそう言った。

(この子だって……きつとあの子たちと同じように……)

裏切る、そう思った瞬間、シリカは勢いよく走って逃げだした。

「あつ!!ちよつと!」

レオが呼び止めるも、シリカは止まらず逃げた。

逃げたシリカは、再び転移門広場まで戻って来た。

その時、細い路地の先で何かを見つけた。

「ピナっ?」

それは灰色の毛の猫だった。

その猫の姿が、現実でシリカが勝っている猫とそっくりだった。

シリカはその猫を追い掛けた。

走って何処かに向かう猫の後をシリカは、必死に追い掛けた。

路地を右へ左へと進み、積み上げられた木箱を乗り越え、倒れた柱の下を潜り、川に掛かった橋を渡り、何時しか自分が街の何処にいるかも分からなくなっていた。

小さな石階段を上ると、猫は石塀を覆う蔦の中へと消えた。

蔦をかき分けると、そこには小柄な子供がギリギリ通れるぐらいの穴が開いており、シリカはそこを潜った。

潜った先は、四方を石塀と建物の壁で囲われた小さな庭のような場所だった。

石畳の半分は雑草に覆われ、四隅に生えてる樹も手入れはされておらず、追い掛けてきた猫の姿も見当たらなかった。

「ピナ……何処……?」

不安げに猫の名前を呼び、庭の中央まで歩く。

すると、突如石畳が崩れ、シリカは落下した。

悲鳴を上げる間もなく、シリカは恐怖から目を瞑り、体を丸めた。

そして、背中を地面に打ち付け、シリカの視界の左上のHPバーがぐいっと減る。

どうやら地下は圏外だったらしく、シリカはそれ以上HPが減らな

いことを祈った。

シリカのHPバーはちょうど半分ぐらいの所で減るのが止まり、それを確認するとゆっくりと立ち上がり、辺りを確認する。

地下室らしいその部屋の壁には壊れた本棚が並べられており、蜘蛛の巣が張って埃が舞っていた。

圏外ではある物のモンスターはいないらしく、シリカは安堵するが、同時に地上に出る為の扉や階段が見当たらなかった。

上を見上げるとうんざりする程に高い天井があり、そこに空いた穴から陽の光が差していた。

「誰か！助けて下さい！」

シリカは上に向かって助けを求めた。

暫く必死に呼び掛けるも、とうとうシリカは助けを呼ぶのを諦めた。

(どうせ……誰も助けてくれない……………)

そのまま座り込み、膝を抱える。

(きつとこのまま、誰かが第100層に到達して、ラスボスを倒さない限り、あたしはずっとここに一人ぼっちなんだ……………それどころか……………ずっと……………)

涙が溢れ出し、嗚咽が漏れる。

「会いたいよ……………帰りたいよ……………お母さん……………お父さん……………ピナあ……………！」

今まで吐いてこなかった弱音が出た。

その時だった。

突如、自分に影が落ちた。

「え？」

思わず、上を見上げた。

逆光で分かりづらいが、誰かがそこに居た。

「君、大丈夫か!？」

それはレオだった。

「待ってて！今そっちに行く！」

一瞬、レオの姿が消え、そして、ロープが落ちて来た。

「よつとー!」

レオはそのロープを伝い、地下へと降りて来る。

「もうちよつとで……………」

飛び降りても平気なぐらいの高さになり、レオはロープを放して飛び降りようとした。

その瞬間、突然ロープが千切れた。

「ちよつ!」

ロープが千切れたことにレオは驚き、そのまま頭から地下に落ちた。

「だ、大丈夫!」

シリカは慌ててレオに駆け寄った。

「イテテ…………うわっ、HP減ってる…………ここって圏外なのかよ…………」

レオはそう言い、ポーションを取り出して飲む。

「はい」

そして、新しいポーションを取り出してシリカへと渡す。

「あ…………いいの?」

「いいよ。それに、君もHPが減ってるでしょ?」

「…………ありがとう」

お礼を言い、ポーションを受け取る。

「それにしても、参ったなあ…………」

レオは天井の穴を見上げ、頭を搔く。

「サーシャさんには追いかけることは言っているけど、ココの場所が分かるかどうか…………やっぱり、誰かがここを見つけるまで待つしかないかな…………」

「ごめんね…………あたしの所為だよね…………」

「え?」

「あたしなんかを追い掛けて来て、こんな酷い目にあって…………私の所為だよ…………」

空になったポーションの瓶を握り締め、シリカが謝る。

「それは違うよ」

レオの言葉にシリカは顔を上げた。

「良い事も悪い事も、全部は自分の行動が招いた結果でしかない。俺がこうして地下に落ちたのも、アイテムの耐久値の確認を怠った所為！そこに、君の所為だなんてモノないよ。それに、良い結果でも、悪い結果でも後悔さえしてなければそれでいい！俺はそう思う！」

自信満々にそう言うレオに、シリカは呆然とした。

「少なくとも、君を助けに来た行動は、結果だけ見れば悪い事だけど、俺に後悔はないよ」

そう言い優しく笑うレオに、シリカは再び座り込んだ。

「ちよつ！大丈夫!？」

行き成り座り込んだシリカに、レオは驚き声を掛ける。

「うん、大丈夫……なんだが、腰が抜けちゃって……アハハ」

レオの言葉に元気づけられたのか、シリカは少し明るくなり笑う。その時、シリカは自分の足元に光る何かを見つけた。

つまみ上げると、それは1枚の銀貨だった。

表面には100の数字があり、100コル銀貨であることが分かった。

思わず辺りを見渡すと、少し離れた位置にもう1枚落ちていた。

「ねえ、アレー！」

シリカはレオに声を掛け、銀貨を指差す。

「これって……ナイスだ！跡を追おう！」

レオに言われ、シリカとレオは銀貨の跡を追う。

落ちている銀貨を回収していくと、その先にはガラクタに埋もれるようにしてランドセルぐらいの大きさの宝箱があった。

恐る恐るふたを開けると、その中には20枚ほどの銀貨と、赤い鞆に収められた短剣があった。

レオは銀貨よりも短剣に興味があるらしく、短剣を手に取り調べる。

「凄……この短剣、第1層で手に入る中だと、かなり性能が高い……！」

短剣の性能に驚くも、レオは更にハツとする。

「そうだ！宝箱があるってことは、何処かに地上に出る為の出口があ

るはずだ！」

「え!? それじゃあー！」

「ああ、出られるぞー！」

レオとシリカの二人は地下室を隈なく探した。

そして、壁の本棚に隠されるように地上に向かう階段を見つけた。

階段を見つければ、ハイタッチをすると二人は階段を上って、地上へと出た。

外は既に夕方となっており、地上に出ると、あの猫が夕日の日差しの中、待ち構えていた。

猫はにや〜つと一鳴きして、何処かへと去って行った。

「ありがとう」

猫に向かって、シリカはお礼を言った。

「あの猫、知ってるの?」

「うん、そもそもあの地下室に落ちたきっかけがああ猫を追い掛けたからなんだ」

「なるほど。多分、あの猫は隠しクエストみたいなものなんだろう。」

猫を追い掛けると見つかる宝探しクエストみたいな」

レオの推測に、シリカはなるほどって頷く。

「あ、そうだった、はい、これ」

そう言っつてレオは、先程の短剣をシリカへと渡す。

「え?」

「君の短剣。地下室から俺が持ちっぱなしだったからね」

「でも……いいの?」

レオも短剣を使っているんで、このレア物の短剣はレオだつて欲しいはずだ。

にも関わらず、レオはその短剣をシリカに差し出した。

「だつて、最初にクエストを最初に見つけたのは君だし、あの銀貨も見つけたのは君だ。だから、あの宝箱の中身は自然と君の物だよ」

レオはそう言い、シリカの手に短剣を握らせる。

「あ、ありがとう!」

「いいよ、お礼なんて」

レオは笑顔でそう言い、体を伸ばす。

「それで、教会に戻る？戻るなら、送るけど」

レオの問いに、シリカは少し沈黙した。

そして、ふとあることが気になってレオに尋ねた。

「君は、あの教会に住んでないの？」

シリカはレオの装備が、“はじまりの街”で籠ってた人にしては整っていることから、教会に住んでないのではと思いきや尋ねた。

「俺？まあ、最初の頃は住んでただけど、今は違うかな」

「そうなの？」

「ああ。聞いてるかどうかわからないけど、ついこの間、第1層のフロアボスが攻略されたのは知ってる？」

レオの言葉にシリカは驚いた。

言われて、つい最近、転移門広場が騒がしかったことを思い出した。

「あの騒ぎ、第1層がクリアされたからだだったんだ」

「俺さ、その知らせになんか希望が持ってたんだ。もしかしたら、この世界から脱出出来るんじゃないかって。流石に、攻略をしようと思える程じゃないけど、この世界で生き抜くために頑張らないとって思ってたさ」

そう言い、レオは夕日を眺める。

「それに、俺が稼げば教会に居る皆の食事代も出せるしね！」

自分と同じぐらいの歳にも関わらず、強さを秘めるレオにシリカは胸が高鳴った。

(あたしも……この子みたいになりたい……！)

そんな感情が、シリカの心の内に沸き上がった。

「あの一！」

「ん？」

「その、良かったらなんだけど、あたしも一緒に着いて行ってもいいかな？」

強い決意を秘めたシリカの瞳に、レオは少し呆然とするもすぐに笑顔となった。

「ああ！俺も、一人で旅するのは心許なかったし、喜んで！」

「そう言い、レオは手を差し出す。」

「自己紹介がまだだったな。俺はレオ。君は？」

「あたしはシリカ。よろしくね、レオちゃん」

こうして、レオとシリカの2人はコンビとなった。

「それが、あたしとレオ君の出会いです」

一通り、レオとの馴れ初めを話し、シリカは一息つく。

「良い事も悪い事も、自分の行いの結果か」

「それに、いい結果も悪い結果も、後悔が無ければいい。いい言葉ね」

「その言葉に、私あたし元氣付けられちゃって。今では、どんなことが起きても、後悔のない生き方をしようって決めたんです」

「それにしても、シリカ。アンタ、レオの事、最初はちゃん付けだったのね？」

「あ、それは………実を言うと、レオ君の事、最初女の子だと思ってて。後から指摘はされました」

「確かに、何も知らない人からしたらレオ君って女の子っぽいよね」

「私も最初は勘違いしたわね」

4人で笑っていると、そこにリズが追い打ちを掛けた。

「それで、シリカは何時からレオが好きなのよ？」

「う……忘れてると思ったのに……」

あわよくば、出会いもとい馴れ初め話で忘れていないかと期待したがしつかり覚えておりシリカは悔しそうにする。

「レオ君の事が好きになった……と言うより、好きだと気付いたのは、カイさんとキリトさんと初めて出会った時なんです」

第46話 剣士と剣豪との出会い

2024年2月23日。

レオとシリカがコンビを組んで1年年近くが経過しようとしていた。

その間に、色々な出来事が起きた。

シリカはレアモンスターの《フェザーリドラ》をテイムし、レオはうっかりで髪染めアイテムを使ってしまい、髪の色が水色になった。

その結果、シリカは“竜使い”の2つ名が付き、レオはその流れる様な剣捌きと動きから“流麗”の2つ名で呼ばれるようになった。

2人は中層で活動し、偶に野良パーティーに入れて貰っていた。

そして、その日も野良パーティーと組んで、《迷いの森》と呼ばれるダンジョンで狩りをしていた。

野良パーティーのメンバー全員が手練れだったこともあり、朝からの狩りで多くのコルやアイテムを手に入れられ、回復ポーションが底を尽きそうだったこともあり、夕日が差す頃には全員が主街区に向けて帰ろうとした。

その時だった。

パーティーに居る長槍を持った女性プレイヤー“ロザリア”があることを言った。

「帰還後のアイテム分配だけど、アンタはそのトカゲが回復してくれるし、回復結晶は必要ないわよね」

回復結晶のみならず結晶アイテムは、モンスタードロップかトレジャーボックスからでしか手に入らない。

攻略組のプレイヤーでも結晶アイテムを頻繁には使わず、回復にはポーション、帰還は徒歩、結晶アイテムを使うのはボス戦や命の危機がある時ぐらいだ。

確かにピナはシリカのHPを回復してはくれるが、その回復量は微々たる物。

シリカだって結晶アイテムは必要だった。

「ちよっと待ってくださいー！」

そんなロザリアの発言に、レオが声を上げた。

「それじゃあ、あまりにもシリカが不公平すぎます！ピナの回復だって、頻繁に使えるわけじゃないんですよ！」

レオの言葉は最もだった。

だが、ロザリアは態度を変える気はなかった。

「どうせみんなのアイドル〃シリカちゃん〃は、回復アイテム無くても男共が勝手に回復してくれるでしょ？そんな男共の筆頭たるのはアンタじゃない、レオちゃん」

シリカへの皮肉に加え、レオの容姿を揶揄う〃ちゃん〃付け。

流石に他のメンバーたちもあまりいい顔はしなかった。

「もういいですー！」

すると、シリカが声を上げた。

「アイテムなんかありません！もう貴女とは組みませんから！レオ君行こう！」

そう言うと、レオの手を取ってパーティーを離れる。

せめて森を出るまでは一緒に居ようと言ってくれたパーティーリーダーの言葉も無視し、シリカはレオと共に、ロザリアたちとは違う道を進む。

「シリカ！流石にまずいって！」

《迷いの森》はその名の通り、プレイヤーを迷わせる。

森の中は碁盤の盤上の様に、分割されていて1分おきに隣接するエリアの連結がランダムに変わる。

森を抜けるには1分以内に次のエリアに進むか、道具屋で地図を購入してエリアの連結を確認しながら進むしかない。

だが、地図はかなり高価であるパーティーでも、持っているのはリーダーだったプレイヤーのみ。

その為、レオとシリカの2人は1分以内に次のエリアに進まないといけない。

つまり、森を抜けるまで常に走り続けなさいといけなさいと言う事だ。

それがどれだけ大変なのかシリカにも理解は出来ていた。

「分かってる！でも、あたし我慢できないの！あたしだけじゃなく、レ

オ君の事まで馬鹿にして……！あの人、本当に嫌い！」

だが、頭に血が昇ったのに加え、レオの事を侮辱するロザリアの言葉に我慢がならなかった。

「シリカ……そうだな、俺もシリカを馬鹿にするあの人のこと嫌いだな」

「レオ君……」

「ほら、頑張つて走らないと森を抜けられないぞ。急ごう、シリカ！ピナも遅れるなよ！」

「あ、うんー！」「きゆる！」

シリカとピナが同時に返事をし、2人と1匹は走り出す。

最初は2人もすぐに森を抜けれると思っていた。

だが、2人の速さでは森の端から端まで行くのにどれだけ頑張つても1分が経過してしまう。

辺りも暗くなって行き、2人は疲労から走るのを止め、森の連結が偶然にも森の出口に繋がるのを期待して歩くも、そんな奇跡に見舞われなかった。

日が沈みモンスターの動きが活発したことで、モンスターとの戦闘も多くなった。

2人は安全マージンをしっかりと取つてあるため、例え、ソロで5体のモンスターに囲まれても無傷で突破できるだけの力がある。

加えてシリカは短剣スキルの熟練度を7割近くマスターしており、レオに至ってはもうすぐ9割に届く。

そこにピナのアシストに、1年組んでやって来た連携があれば35層程度のモンスターは2人の敵ではなかった。

ただ1つ、遭遇したモンスター“ドラクエイプ”が、HPを回復するスキルを持つていることだけが誤算だった。

前に戦った時は数が2体しかいなかったことに加え、一瞬で倒した為、その様な特殊スキルがあることを2人は知らなかった。

今、2人の前に居るドラクエイプは4体。

レオが前に出て戦い、シリカがサポートするも数の多さと焦りから戦闘でのミスが増え始め、数が少なかったポーシオンは底を尽き、非

常用の結晶アイテムも使い、回復手段が消えた。

「レオ君、回復アイテムがもう!」

「くそっ!なんとかして突破しないと!」

レオはドラクエイプの棍棒を弾き、下がろうとシリカの方を向いた。

「ッ!?シリカ!後ろ!」

「え?」

レオの言葉に、シリカが振り向く。

そして、振り向くと同時に突如現れたドラクエイプがシリカを棍棒で殴り飛ばした。

「がはっ!」

そのまま樹に叩き付けられたシリカは、短剣を手放してしまった。

「シリカ!……くっ!」

シリカの元に走り出そうとしたレオだったが、その行く手をドラクエイプ3体が阻む。

シリカを襲った1体と、残りの1体はシリカの方へ向かう。

「シリカ、逃げろ!」

レオがそう叫ぶも、シリカは恐怖から動けなかった。

ドラクエイプの持つ棍棒がシリカへと振り下ろされる。

その瞬間、ピナが雄叫びを上げ、シリカを庇った。

ピナの小さな身体はドラクエイプの棍棒によって吹き飛ばされ、地面を転がる。

「ピナ!」

シリカはようやく体を動かし、ピナの身体を抱き上げる。

ピナはつぶらな青い瞳でシリカを見つめ、小さく「きゆる……!」と鳴き、その直後、ポリゴンの欠片となって散った。

「あ……!」

ピナが死にシリカは呆然とショックを受けた。

手の中には、青白く光る小さな羽だけが残っていた。

「ピナ、そんな……!」

レオもまた、ピナの死にショックを受けていた。

だが、そんな2人の胸中なんか知らないと言った感じに、ドラंकエイプは襲い掛かる。

「くそっ！」

レオは短剣でドラंकエイプの棍棒を受け止めようとする。

パキンッ！

だが、ドラंकエイプの一撃はレオの持つ短剣を押し折った。

「しまっ!？」

最後の言葉を言う間もなく、レオはそのまま棍棒の一撃で殴り飛ばされる。

「レオ君っ!？」

「くっ……くそったれ……!？」

レオのHPはレッドにまで落ちていた。

(せめて、シリカだけでも……!?)

レオはそう思い、ポーチから笛を取り出した。

そして、勢いよく笛を吹いた。

森に、空気を引き裂く様な高音が響き渡る。

すると、シリカに向かっていたドラंकエイプは標的をレオへと変えた。

レオが使ったのはタゲを集める効果を持った笛で、本来ならタゲを自身に集中させ、その隙を仲間に討つてもらおう為に使う物だ。

この状況で使う理由はただ1つ、囿になるためだ。

「シリカ……今の内に逃げて……!？……走るでも、転移結晶でも、なんでもいい……!？とにかくここから逃げる……!？」

レオは前に使っていた短剣を装備し、ドラंकエイプと対峙する。

「そんな……嫌だよ……嫌だよ、レオ君!？」

シリカは悲痛の叫びをあげる。

(あたしの所為だ……あんな些細なことでヘソ曲げて、パーティーを離脱したのが間違いだったんだ……それだけじゃない、あたしに付き合わせてレオ君まで危険な目に合わせちゃった……)

ドラंकエイプの棍棒が、レオに振り下ろされる。

シリカは必死に手を伸ばす。

(お願いします、神様……あたしはどうなってもいいからレオ君を……あたしの大切なパートナーを助けて！)

神様は存在しない。

もし本当にいるなら今頃、シリカたちはこのSAOから助けてくれているはずだ。

未だにSAOの中に居ることが、何よりの証拠だ。

だから、神様は存在しない。

だが………

「よく頑張ったな」

「後は任せろ」

救いの手を差し伸べる者は存在する。

突如、レオの背後から現れた赤いコートと黒いコートを纏った2人の男性プレイヤーは、手にした片手剣と刀でドラクエイプを一刀両断して葬った。

そのまま。残りのドラクエイプも倒し、レオとシリカの2人は救われた。

「レオ君！」

助けてくれた2人にお礼を言うよりも、シリカはレオの元に駆け付けた。

「レオ君！よかった……無事で………！」

シリカは涙を流し、レオに縋りつく。

「シリカ……俺は大丈夫……でも、ピナが………！」

レオはシリカの手の中にある、ピナの羽を見つめる。

「すまなかった」

「俺たちがもう少しだけ早ければ………」

助けに現れた2人は謝罪を口にした。

「いいんです……あたしがバカだったんです………ありがとうございます………
ます、助けてくれて………レオ君まで居なくなったらあたし………
！」

「俺からも言わせてください。2人のお陰で助かりました、本当にありがとうございます………」

大切な仲間であったピナの死を堪え、2人は助けしてくれた2人の剣士、カイとキリトにお礼を言う。

「なあ、その羽だけど、なにかアイテム名は設定されてないか？」

突然、キリトがそんなことを言い出した。

シリカは戸惑いながらも、残された羽をタッチする。

すると《ピナの心》とアイテム名が設定されていた。

「心アイテムか。なら、まだなんとかなるな」

「え？」

カイの言葉に、2人は同時に声を上げた。

「47層の《思い出の丘》って言うフィールドダンジョンに、使い魔蘇生用のアイテムが手に入るんだ」

使い魔蘇生。

その単語に、レオとシリカは驚きを示すも、すぐに表情を曇らせた。

47層。

その数字が原因だった。

安全マージンの目安は、その階層の数字+10のレベルが最低でも必要となる。

レオとシリカのレベルはそれぞれ、レオが47、シリカが44。

安全マージンとしてはレベルが10近く足りて無かった。

「実費と報酬を貰えるなら、俺たちが行ってもいいんだけど、残念ながら使い魔を亡くしたビーストテイマー本人が行かないと、蘇生アイテムは手に入らないんだ」

「いえ、情報だけでも有り難いです」

「今は無理でもレベルを上げれば何時かは……………」

「それがそもいかないんだ」

希望を持ち始めた2人に、カイが申し訳なきように言う。

「心アイテムは3日で形見アイテムになる。そうなったら、蘇生は出来なくなるんだ」

「そんな……………」

「それじゃあどうしようも……………」

その情報に、2人は更に絶望した。

「なあ、キリト。この前手に入れた奴、この2人に渡してもいいんじゃないか？」

「そうだな……俺たちが持つても意味が無いしな」

そう言うと、2人はシステムウインドウからトレードウインドウを出し、そこにいくつかのアイテムを入れていく。

そして、トレードウインドウはレオとシリカの前に現れた。

シリカの方には《シルバー・スレッド・アーマー》《イーボン・ダガー》《ムーン・ブレザー》《フェアリー・ブーツ》《フロリット・ベルト》。

レオの方には《ユニオン・インナー》《水禍之刃》《星刻ノ衣》《星羅ノ靴》《アビス・チョーカー》。

どれもが、一目でわかるレア物の武器と装備だと言うのに気づく。

「これを装備すれば5、6レベル分は補えるはずだ」

「それでもって、俺とキリトが同行すれば問題はないだろう」

レア装備をくれて、挙句一緒に同行すると言う2人にレオもシリカも驚く。

はつきり言って、感謝より警戒心が沸き上がって来る。

「あの……どうしてここまでしてくれるんですか？」

レオはシリカを後ろに下がらせ、カイとキリトに尋ねた。

シリカは今までに自分よりも年上の男に告白されたこともあり、なんなら結婚を申し込まれたことも一度ある。

そして、レオも見た目が美少女の為、外見に騙された男に告白されたことがある。

中には、男だと告げても「それでもいい」と言う者もいて、その時はかなり恐怖を感じていた。

だからこそ、2人を警戒した。

「笑わないなら言ってもいいけど……」

「笑いません」

「同じく」

「……………君たちが、妹に似てたから……………」

キリトがそう言うと、辺りが沈黙に包まれた。

「ぷっ……………あはははははははは！キリト、お前なんだよ、そのベタベ

夕な台詞は！」

「なっ！笑うなよ、カイ！」

「悪い悪い！ま、キリトの理由はそうだとして、俺の理由は、相棒がそう決めたから。それ以上に理由なんてないぞ」

「なんだよそれ。自主性がないな」

「相棒の気持ちを優先してるんだよ。有り難く思えよ」

仲良さげに笑って言い合う2人を見て、レオとシリカは悪い人たちではないと思いい、思わず笑った。

「君たちまで笑うのか……」

「ごめんなさい、あの、あたしシリカって言います」

「俺はレオです。何から何までありがとうございます。あの、足りないでしょうけどこれを」

レオは画面を操作し、自身の所持金全額を渡そうとする。

「いや、俺もキリトも金はいいよ。どうせ余り物の装備だし」

「ああ、それに俺たちがここに来た目的とも、多少被らないでもないからな」

謎めいたことを言うカイとキリトに、レオとシリカは疑問を持ちながらも最後お礼を言う。

「それじゃあ、主街区に戻ろう。俺は周りの警戒するから、キリトは案内頼む」

「ああ、分かった」

カイがレオとシリカの後ろに立ち、キリトが先頭で地図を広げる。

「あーあのキリトさん！」

その時、レオが何かを思い出しキリトに声を掛ける。

「ん？どうした？」

「あの、さっき俺たちがキリトさんの妹さんに似てるって言ってましたけど……俺、男です」

「……………マジっ？」

「マジです」

キリトは信じられないと言った表情で、シリカを見る。

「マジです」

シリカにもそう言われ、最後にカイを見た。

「カイ、お前は気付いてたか？」

「当たり前だろ？ 渡した装備だって男用の物だし」

「……………ふう〜」

キリトは息を一つ吐き、レオを見て、頭を下げた。

「すまなかつた」

「いや、あの、気にしないで下さい。慣れてますから」

レオからの許しを貰い、4人は35層の主街区《ミーンシエ》へと向かった。

第47話 流麗の涙

主街区《ミーシエ》に着くとシリカは、早速他のパーティーに勧誘された。

「彼女、人気なんだな」

「ええ、元々ビーストテイマー自体少ないし、元の容姿もあって中層ではアイドルも同じなんです」

「そんな彼女とコンビで居るとか結構鼻が高いんじゃないか？」

何気なしに、カイはレオにそう尋ねた。

「……………そうですね」

レオは一瞬表情を曇らせるも、すぐに笑顔でそう言った。

その笑顔に、カイは何処か陰があるのに気づくも何も言わずに、静観した。

「あのーすみませんー！」

他のパーティーに勧誘されていたシリカは大きな声を出して、レオ達の元に戻る。

「あたし、今はこの人たちとパーティー組んでるんで」

シリカがそう言うと、熱心にシリカを勧誘していた1人の両手剣士がキリトとカイに近付く。

「おい、あんたら。見ない顔だが、抜け駆けるは良くないんじゃないか？こっちは何日も前から、この子に声を掛けてるんだぜ？順番を守れよ」

「いや、そう言われても成り行きで……………」

キリトがしどろもどろに答えていると、カイが前に出る。

「おい、抜け駆けとか言ってるけどよ、誰の勧誘を受けるかはこの子が決めることだろ」

「なんだと？」

「こっちからパーティー組まないかって言ったことだけど、決めたのはこの子なんだよ。そもそも、この子はレンタル品とかじゃないんだぞ。それなのに抜け駆けだの、順番だの……………この子の事、なんだと思ってるんだ？」

怒気を込めて放たれた言葉に、両手剣士のみならず周りに居たプレイヤーもビビらせる。

「あ、あのー！」

そんな中、レオが動いた。

「俺たち急ぐんでーシリカ、行こう！」

レオは群衆から逃げるように、シリカの手を引いて走る。

その後を、カイとキリトも急いで追い掛けた。

「人気者なんだな、シリカは」

レオとシリカの2人に追いつき、キリトはシリカにそう言った。

「マスコット代わりに誘われてるだけです。それなのに「竜使い」なんて言われていい気になって……………ピナを……………！」

ピナの事を思い出し、シリカは涙ぐむ。

「カイさんは否定してくれましたけど、私はレンタル品なんです。連れて行くと華があるから……………私なんて所詮そんな物なんですよ」

「それは違う」

自分を卑下するシリカにレオが言った。

「シリカは立派なビーストテイマーだ。シリカ程、あんなに使い魔と、ピナと心を通わせてるビーストテイマーなんていない。ピナだって、そんなシリカだからあの時、身を挺してまで庇ったんだ。だから、シリカは自分に自信をもっと持つていいんだ」

「レオ君……………うん、ありがとう。レオ君に言われると、嫌でも自信持てちゃうな。やっぱり、レオ君は凄いね」

「凄くなんかないよ。俺なんかよりシリカの方が……………」

最後の方は小声でシリカには聞こえなかったが、カイとキリトの耳には聞こえた。

キリトはレオにどうしたのか尋ねようかと思ったが、カイがそれを止めたので尋ねるのを止めた。

カイとキリトは、そのままレオとシリカの案内で現在2人が拠点として止まっている宿屋《風見鶏亭》を訪れる。

「キリトさんとカイさんは、普段ホームは……………」

「50層だけど、戻るのも面倒だし今日はここに泊まるよ」

「賛成だな。明日、一々待ち合わせするのも面倒だしな」

「是非泊って行つてください！ここ、チーズケーキが結構いけるんですよ」

「シリカ、そのチーズケーキが気に入らなくてももう2週間もここに滞在してるんですよ」

4人でわいわいと話しながら、宿屋に入ろうとしたその時だった。

「あら、シリカにレオじゃない」

レオとシリカにとって、一番聞きたくない声が聞こえた。

「無事にあの森を抜け出せたのね。残念だけど、アイテムの分配ならもう終わったわよ」

現れたロザリアは嫌味つたらしくそう言う。

「アイテムはいらないうって言いましたよね。私たち急ぐんで」

「あら？あのトカゲはどうしちゃったの？」

足早に宿屋に入ろうとするシリカだったが、ロザリアの言葉に足を止めてしまう。

使い魔はアイテムストレージに仕舞うことはできない。

そして、圏内であっても使い魔であればモンスターは街に入れる。

そのモンスターが居ないとすれば、理由は明白だった。

ロザリアはそれを承知で、聞いて来ていた。

「あら、もしかして……」

ロザリアはうすら笑いを浮かべ、わざとらしく言葉を続けようとした。

「ピナは死にました」

だが、ロザリアが言葉を続けるより先に、シリカは答えた。

「でも、絶対生き返らせますー！」

痛快と言う具合に笑っていたロザリアだったが、その言葉に僅かに目を見開き、小さく口笛を吹いた。

「へえ、じゃあ47層に行くんだ。でも、アンタらのレベルで攻略できるの？」

「できるや」問題ない」

シリカが答えるより、キリトとカイが答えた。

「そんなに難しいダンジョンじゃないしな」

「ま、こんな階層でイキツてるアンタじゃ無理かもな」

そう答えるカイとキリトを、ロザリアは値踏みするように見る。

「アンタらも、その子に誑し込まれて口？見たところ、強そうには見えな
いけど」

「人を見た目で判断しない方がいいぞ、おばさん」

「おぼっ!？」

カイがおばさんと言ったことに、ロザリアは怒筋を浮かべる。

「ほら、シリカ、レオ。さつきと宿屋に入ろうぜ。チーズケーキ以外に
もおすすめの料理、教えてくれよ」

「できれば、香辛料がたっぷり効いたのがあると俺は嬉しいぞ」

そのままロザリアを無視し、カイとキリトは、レオとシリカの背中
を押し宿屋へと入る。

「なんであんな意地悪言うんだろう……」

宿屋に入り、早速料理を注文し、キリトが持参した飲み物を飲んで
一息入っていると、シリカはそう言い出した。

「ロザリアさんの事か？」

「うん、いい人じゃないってのはなんとなく分かってたけど、あそこま
で意地悪なこと言ってくる人とは思ってなかったから……」

「確かに……なんでだろう？」

「2人は、MMOはSAOが初めてか？」

キリトの質問にレオとシリカは頷く。

「どんなオンラインゲームでも、長くプレイしているとプレイヤー
キャラに身をやつし、人格が変わる人もいる。従来では、ロールプレ
イって言われてたけど、SAOの場合は違うと俺は思ってる」

そう言い、キリトは持っていたコップをテーブルに置く。

「こんな異常な状況だったのに、他人の不幸を喜ぶ奴、他人のアイテム
を平気で奪う奴、そして………殺しを楽しむ奴が多過ぎる」

「ま、そう言う奴は現実でも性根が腐ってるんだらうな。だからこそ、
この異常な状況も、平気で悪事を働けるんだ」

カイは面白くなさそうにそう吐き捨てる。

「でも、俺だつて人の事はあまり言えないかな」

すると、キリトは悲しそうな表情でそう言った。

「人助けだつてろくにしたことないし、自分の保身のために、誰かを危険に晒し掛けた事も……」

「何言つてんだよ、キリト」

そんなキリトにカイは頭を軽くデコピンで弾く。

「お前は文句なしでいい奴だよ。でなきや、俺1人でここまで成長出来なかつたしな」

そう言い、カイはカップの飲み物を飲み干す。

「だから……これからもいい奴で居てくれよな、相棒」

「……たつく、カイには本当に敵わないな……ありがとな」

拳をぶつけて笑い合うカイとキリトの様子に、シリカは少し羨ましいと思つた。

レオとコンビを組んで1年近く経つが、カイとキリトのような関係には至れてない。

カイとキリトもコンビを結成した時期は、レオとシリカと大して変わらないが、カイとキリトの2人はまるで互いの命を預けられるほど、お互い頼れる相棒と認められた様な雰囲気だった。

シリカ自身、レオの事は信じてるし命を預けられる頼りになる相棒だと思つてる。

だが、レオはどう思っているのか。

それが分からなかった。

だからこそ、何も言わずに互いを信頼し合っているカイとキリトの雰囲気が羨ましかった。

食事をとり、食後のチーズケーキを食べ終えた4人はそのまま部屋へと直行し、休むことになった。

だが、カイが休む前に47層について予習しておこうと言ったので、レオとシリカはカイとキリトの部屋に集合した。

4人がそろると、キリトは1つのアイテムを取り出し、スイッチを押す。

すると、光が溢れ、それはアインクラッドの全体像を映し出した。

「うわー、奇麗……」

「これってなんていうアイテムなんですか？」

「《ミラージュ・スフィア》って名前だ」

「第1層から攻略済みの層までの事が詳細に分かる、便利アイテムだよ」

そう言つて、カイは47層のマップを映し出す。

「これが47層のマップだ。ここが主街区で、思い出の丘に向かうにはこの道で行くんだけど、この辺にちよつと厄介なモンスターが現れるんだ」

「本来なら階層の数字と同じレベルで問題ないからな。2人の今の装備なら、ノーダメージは難しいが問題なく倒せるはずだ」

「俺とカイもいるし、道中はあまり危険はないと思つてくれていい」

「テキパキと47層の説明をしていく中、突然キリトが口を噤む。」

「キリトさん？」

「しっ」

シリカが不思議そうに尋ねるも、キリトは静かにするように言う。

そして、カイに目配せをし、カイは無言で頷いて扉に近寄る。

「誰だ！」

勢いよく扉を開けるも、そこには誰もおらず階段を駆け足で降りていく音だけが聞こえた。

「ちっ！逃げられたか……」

「どうしたんですか？」

「盗み聞きされてたみたいだ」

「え？でも、宿屋の部屋の中の声は聞こえないはずじゃ……」

「《聞き耳》スキルつてのを上げると聞こえるんだ。もっともそんなスキル上げてる奴はあまりいないけどな……」

「キリト、どうする？追うか？」

「いや、どうせもう転移結晶で逃げてるだろう。ともかく、重要な説明はもう終わったし、今日はもう寝よう」

キリトが話し合いを閉め、レオとシリカは自分の部屋へと帰って行った。

*ここから先、シリカの知らない裏話です

夜、全員が寝静まるとレオはベッドから起き上がり、宿屋を抜け出した。

「こんな時間に、何してるんだ？」

その様子を、カイは見ており後を付けた。

カイはレオの様子がおかしいことに気づいており、少し心配して見張っていると案の定、レオは夜中に何処かへと抜けだしていた。

跡をつけると、そこは主街区からそう離れてはいないフィールドだった、

「ふっ！はっ！せいっ！」

レオは、カイからもらった小太刀の様な短剣《水禍之刃》を手に、モンスターと戦っていた。

「ほお……綺麗な剣捌きだな」

レオの動きは淀みなく流れる水の様で、戦いと言うよりは踊りの様な感じだった。

武器の性能の然る事乍ら、その技量で35層のモンスターを次々と倒していく。

あらかた倒し終え、一息入れるもレオはすぐに次のモンスターを求めて動き出した。

「おいおい、流石にオーバーワークだぞ」

討伐したモンスターの数が50を超えるかと言うところで、レオはとうとう膝を突き動かなくなった。

「やつぱりこうなったか」

カイはレオに近付き、レオを背負って主街区へと戻った。

「ん？あれ？俺は………」

「目が覚めたか？」

「え？……か、カイさん!？」

カイに背負われていることに気づき、レオは慌て出す。

「ちよつ下ろしてください！俺、やらないといけないことがあるんです！」

「それは、モンスターの行動が活発になる夜中に1人でレベリングする事か？」

カイに凶星を突かれ、レオは黙る。

カイはそのままレオを背負って歩き、途中でベンチを見かけ、そこにレオを下ろし、自分も隣に座る。

「さて……話してみよう」

「え？」

「惚けるなよ。悩んでるんだろ？今日1日の様子に加えて、夜中の無茶なレベリングで大体察せれる。シリカの事だろ？」

またしても凶星だったらしく、レオは黙って下を向く。

「言わないなら言わないでいいけど、楽になるなら吐いた方がいいぞ

？」

カイにそう言われ、レオは暫しの沈黙の後、口を開いた。

「実は、俺にも2つ名があるんです」

「そうなのか？」

「はい。『流麗』、それが俺の2つ名です。流れる様な剣捌きと動き、それにこの水色の髪。まるで、水が流れる様だからって付いたんです」

「なるほどな」

「でも……………シリカの2つ名の方が有名です。俺の2つ名なんて、5人中1人知ってればいい方なんです。シリカなんか、殆どの人が知ってます」

「あの人気ぶりを見れば、何となくわかる」

カイは。ここについて間もなくのことを思い浮かべる。

「そんな俺がシリカの傍にいたことを、不服に思ってるプレイヤーは多いんです」

「可愛い顔してても、やっぱり男だからそう言う嫉妬の感情とか向けられるんだな」

「可愛いって……………まあ、そうなんです。今日絡んできたあの両手剣士の人、あの人に言われたことがあるんです。いつまでもシリカを独占するな、シリカも違う人と組みたいはずだって」

悔しそうに言うレオの言葉を、カイは無言で聞き続けた。

「俺、その言葉が悔しくて絶対見返してやるってずっと思ってたんです。でも……………俺は馬鹿だった。大した実力もないくせに、『流麗』なんて2つ名を付けられて、自分は強いんだって思い上がって……………ピナを死なせた」

いつの間にか、レオの目から涙が溢れていた。

「俺がもつと強ければ……………ピナが死ぬことはなかった……………いや、俺が一緒じゃなければ、俺よりも強い人が居ればピナは死ななかつたし、シリカだって泣くことはなかった……………！」

「それで、夜中に1人レベリングか」

カイの問いに、レオは頷く。

「でも……精神的な疲労で倒れて、カイさんにここまで運んでもらってたらダメですよね」

そう言い、レオは《水禍之刃》をカイに差し出した。

「カイさん、これお返しします。俺には過ぎた代物です」

「それを俺に返して、お前は どうする？」

「シリカの傍に居ても、シリカに迷惑を掛けるだけですし、このままどっかに行きます。シリカに聞かれたら、俺は戦うのが怖くなって下層に降りたとしても言ってくください。シリカには、俺以上に相性のいいパートナーが見つかるでしょうし」

暗い表情をしてるレオに、カイは溜息を吐いた。

「レオ、この馬鹿野郎」

すると、カイはレオの額にデコピンをした。

「あのな。この際だから言うが、お前以上にシリカに相応しいパートナーはいないぞ」

「でも……」

「いいか？何も、パートナーってのは強いから一緒にいるってもんじゃない。どれだけ信用してるかが大事なんだ。少なくとも、俺から見るとシリカはお前の事をかなり信頼してるぞ」

「……………そんなこと」

「ある。だって、お前はシリカに自信を与えてただろ？」

カイに言われ、レオはシリカを勧誘するパーティーから連れ出した時の事を思い出す。

「人に勇気や希望を与えるってのは、ある程度の力と良識を兼ね備えてれば与えられると思う。でもな、人に自信を与えるのは、その人にとって大切な人じゃないと無理だと思う」

「大切な……人……？」

「ああ。仮に、俺があの時、お前と同じことをシリカに言っても、シリカに自信は与えられなかったはずだ。お前だからこそ、自信を与えられた。お前とシリカが共に過ごした時間と、お前への信頼があるからこそシリカは自信を持てたんだ」

カイはレオの肩を掴み、視線を合わせる。

「自信を持って。お前は、誰よりもシリカに相応しい男だ」

「カイさん……俺、俺！」

カイの言葉に、とうとうレオの涙腺は限界を迎え、泣き出した。

「俺……シリカの隣に居たいです……シリカは俺のパートナー、相棒なんだって言いたいです！誰に何を言われようがシリカと一緒にがいいんです！」

「そうか、今までよく頑張ったな。偉いぞ」

泣き出すレオを、カイは慰めた。

レオはずつとため込んでいたことを涙と共に掃き出し、30分後にはスツキリとした表情になっていた。

「カイさん、ありがとうございます。俺、少しだけ自分に自信が持てそうです」

「そうか。それなら良かった。それじゃあ、残り時間は寝るとするか。出ないと、明日……てか、もう今日だな。今日に響くぞ」

「そうですね。本当に……迷惑をお掛けしました」

2人は宿屋へと戻り、部屋の前で別れることになった。

「カイさん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

レオを見送り、カイは自室に向かう。

「(吐いたら楽になる、か)俺も吐けたらどれだけ楽なんだろうな……」

カイは自身の過去を振り返り、ぽつりと小声で言った。

第48話 決意と自覚

翌朝、宿屋の1階に集合した4人は、朝食を摂って隣の道具屋でポーシヨン類の補充を済ませると転移門広場へと向かった。

そこから47層の主街区《フローリア》へと向かう。

転移門の青い光を潜り、レオとシリカは最初に見たのは一面の花畑だった。

「凄い……！夢の国みたい……!!」

「こんなに綺麗な階層もあるんだな………!」

「47層は通称《フラワーガーデン》って言われていて、街だけじゃなくフロア全体が花だらけなんだ」

「ちなみに、北の端には《巨大花の森》ってのがあって………って聞いてなさそうだな」

キリトとカイの説明が耳に入っていないのか、レオは興味深そうに辺りを見渡し、シリカは目の前の花に夢中だった。

「あれ？そう言えば、やたらと男女ペアが多いような……」

辺りを見渡していたレオは、ここにいるプレイヤーの殆どが男女ペアであることに気づく。

「多種多様な花が見られるし、雰囲気もある。デートスポットとしては申し分ないからな、ここは」

カイからの説明に、レオは納得をする。

（デートスポットか………）

レオは、カイの言っていた言葉を心の中で復唱し、ふとシリカの方を見た。

（いつかシリカと二人で来れたらな………って！何を考えてるんだ、俺は！）

シリカとのデートを一瞬空想し、レオは恥ずかしさからその空想を消し飛ばす様に、頭を振る。

「カイ、そろそろフィールドに向かおう」

「そうだな。日が沈む前には、すませたいし。レオ、シリカを呼んできてくれ」

「あ、はい！」

レオは小走りに、近くの花壇の傍に座り込んでシリカに近寄る。

「シリカ」

「ひゃあっ!？」

シリカに声を掛けると、突如シリカは声を上げた。

「し、シリカ？急にどうしたんだ？」

「れ、レオ君!? きゅ、急に何!？」

「いや、カイさんとキリトさんがそろそろフィールドに向かおうって」

「あ、そ、そうだね！行こうか！」

何故か顔を真っ赤にしてるシリカに、レオは不思議そうに首を傾げる。

（言えない！レオ君といつか2人つきりで、ここに来たいって思ったなんて言えない！うう……なんでそんなこと思ったんだろう………）

シリカもレオも、似た者同士だった。

カイとキリトの案内で主街区を出て、《思い出の丘》の入り口にくると、キリトはレオとシリカに転移結晶を渡した。

「2人の今の装備なら、問題ないだろうけど何が起きるかは分からない。俺たちが逃げろと言ったら、構わずそれで逃げてくれ」

「それじゃあ、カイさんとキリトさんが！」

「大丈夫だよ。これでもそれなりに場数は踏んでるからな。不測の事態が起こっても、俺とキリトならなんとかなる」

「それより一番重要なのは、君たちの安全だ。ピナを助けることは大事だが、それは君達2人が無事でないといけない。俺もカイも、君たちを死なせたくはない。だから、約束してくれ」

キリトとカイの真剣な目に、レオとシリカは頷くしかなかった。

「それじゃあ、行くとするか！」

「さっさと終らせて、ピナの復活祝いをしような」

「はいー。」

「いやー！来ないでえええええ!!」

《思い出の丘》に入って、最初にエンカウントしたモンスターに、シリカは絶叫を上げ、逃げ出した。

それもそのはず、エンカウントしたモンスターは言わば《歩く花》だ。

茎は人間の腕並みに太く、ヒマワリのような巨大な花の中央には鋭利な牙の付いた口があり、花と茎の間からは蔦が、触手の様に伸びている。

その姿に、シリカは生理的嫌悪感を催した。

「シリカ落ち着け！そいつ、凄く弱いから！」

「花のすぐ下の、白くなってる部分が弱点だから！」

キリトとカイからアドバイスをもらうも、嫌悪感が勝っているのでシリカのソードスキルは空振った。

そして、スキル発動後の硬直の隙を狙われ、モンスターのツタがシリカの足を掴み、そのまま持ち上げた。

上下逆さまに吊り上げられたシリカは、咄嗟に攻撃ではなく、重力に従ってすり下がるうとする自身のスカートを抑えた。

「きゃああああつ！れ、レオ君！見ないで助けてええええええ！」

「見ずに助けるなんて無理だから！」

レオはそう叫び、新しい短剣《水禍之刃》を抜く。

短剣スキル、中級突進技《ラピッドバインド》を使い、一撃でモンスターを倒す。

モンスターはポリゴンの欠片となって消えた為、シリカの足を掴んでた蔦も消える。

「きゃっ！」

その為、シリカはそのまま地面に落ちた。

「シリカー・大丈夫……夫……」

レオは落ちたシリカに駆け寄るも、突如顔を赤くした。

シリカはどうしたのかと思うも、瞬時に自分の今の姿に気づく。

落ちた衝撃でスカートの裾が捲れ、更に、尻餅を付き体育座りの様な体制になっている。

おまけにスカートはそこそこ短い。

そんな体制で居れば、スカートの中が見えるの必然だった。

シリカは顔を真っ赤にし、慌ててスカートを抑える。

「……レオ君」

「……ごめんなさい」

正直に謝るレオに、シリカは更に顔を真っ赤にした。

「いい天気だな、カイ」

「本当にいい天気だな、キリト」

キリトとカイは、後ろを向きラブコメ展開から目を逸らしていた。

その様なハプニングに遭遇しながらも、シリカは徐々に花形モンスタリーの姿に慣れ、気づけばレオとの連携で倒せるぐらいになっていた。

キリトやカイも危ない場面でのみ手助けをし、基本的に戦闘はレオとシリカに任せた。

その甲斐もあって、2人は短時間でレベルが1つ上がった。

(そう言えば、カイさんとキリトさんって何者なんだろう?)

《思い出の丘》を進んでいく途中、レオはそんなことを想った。

(《ドランクエイプ》を一撃で倒し、俺やシリカにくれた武器と装備のランク……35層から12層分も上がったのに全く苦戦する気配がない……レベルが高いのは分かるけど、そんな人たちがどうして《迷いの森》なんかに住んだ?)

考えれば考えるほど疑問が浮かび、レオは考えるのを止めた。

(ピナを復活させたら、聞いてみよう)

「見えた、あそこが丘の頂上だ」

キリトが指さす先には、周囲を木立に取り囲まれた花畑があり、その花畑の中央には、白く輝く大きな岩があった。

それを確認すると、シリカは勢いよく走り出した。

岩の前まで来ると、小さな芽が出て、それはすすくと伸び、つぼみを結んだ。

そして、つぼみは開花し、白い花が咲いた。

シリカは花に手を伸ばし、茎を掴む。

茎は折れ、花だけがシリカの手に残る。

《プネウマの花》

使い魔専用の蘇生アイテムだ。

「これでピナが………！」

「ああ、生き返らせれる………！」

「すぐにでも生き返らせたいかもしれないけど、この辺のモンスターは強いから街に戻ってからにしよう」

「あともう少しの辛抱だ。我慢してくれよ」

「はい！」

《プネウマの花》をストレージに仕舞い、4人は来た道に戻った。

幸い、帰り道でモンスターと遭遇することはなく、あと1時間程度で街に着く。

小川に掛かる橋を渡ろうとした時だった。

突如、カイとキリトがレオとシリカを止めた。

「キリトさん？カイさん？」

「どうしたんですか？」

2人の顔を見ると、険しい顔をし、橋の先にある道の両脇の木立を睨みつけていた。

「そこに隠れている奴、出て来いよ」

「いるのは分かってるぞ」

一際張った声でそう言うと、木立からロザリアが現れた。

「ロザリアさん!？」

「どうしてここに!？」

ロザリアが現れたことに、レオとシリカは驚きを隠せなかった。

「私の《ハイディング隠蔽》を見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね。少し、侮り過ぎたかしら？」

ロザリアはそう言うと、シリカへと視線を移す。

「その様子だと、《プネウマの花》は無事手に入れたみたいね。おめでとう、シリカちゃん……それじゃあ、こっちに渡してもらおうかしら」

「急に何を!？」

ロザリアの言葉に、レオもシリカも絶句していると、キリトとカイが前に出た。

「そうは行かないな、ロザリアさん。いや、オレンジ犯罪者ギルド《タイタンズハンド》のリーダーさん」

「バレてないとも思ったか？悪いが、アンタの事は調べが付いている」オレンジ犯罪者の単語に、またしてもレオとシリカは驚きを隠せなかった。

「で、でも、ロザリアさんのカーソルはグリーン一般人ですよ!」

「カーソルがグリーン一般人だからって、オレンジ犯罪者じゃないとは限らないんだ」

「グリーン一般人の仲間が街で獲物を見繕い、誘導してオレンジ犯罪者の仲間が襲う。オレンジ犯罪者がよく使う手だ。昨日、俺たちの会話を盗み聞きしてたのも、グリーン一般人の仲間だろう」

「じゃあ、この2週間同じパーティーに居たのは……!」

「そうよ。いい感じに金が貯まったら襲うつもりだったのよ」

ロザリアの言葉に、ロザリアがオレンジ犯罪者であるのだと、レオもシリカも理解し、またしても絶句した。

「それなのに、狙いだったアンタがパーティーを抜けちゃって、どうし

ようかと思つてたのよ。そしたら、《プネウマの花》を取りに行くつて言うじゃない。アレ、結構いい値で買い取ってくれるのよね」

そこで言葉を区切り、キリトとカイを見る。

「それで……そこまで分かつていながら、その子に付き合うなんて馬鹿なの？それとも、体で誑し込まれちゃった？」

シリカを侮辱されたことに、レオは怒りを覚え、反射的に武器を抜こうとした。

だが、それはカイに止められた。

「落ち着け。お前が、手を汚す必要はない」

そう言い、カイはロザリアを見る。

「俺たちがここまで付き合つたのは、あんたを探してたからだよ、ロザリア」

「なんですつて？」

「《シルバーフラグス》……このギルドの名前に憶えがないとは言わせないぞ」

《シルバーフラグス》と言うギルド名を出すと、ロザリアは僅かに反応した。

「10日前に、38層でアンタたちが襲つたギルドだ。メンバーの内4人が殺され、生き残つたのはリーダーの男1人のみ」

「リーダーだった男は、朝から晩まで最前線の転移門前広場で泣きながら仇討ちをしてくれる人を探してたよ」

「でも、その男が俺たちに頼んだはアンタたちの殺害じゃない。アンタたち全員を《黒鉄宮》の牢獄に送ってくれつつ頼んできたんだ。本当は、アンタたちを殺したいぐらい憎んでるはずだ。でも、それはS A Oではタブーだ。だからこそ、アンタらへの殺意を無理矢理抑え込み、牢獄送りを望んだ。お前に、あの男の気持ち解るか？」

いつの間にか、カイは拳を強く握り、憎悪を露わにしていた。

そのカイに、レオは恐怖を感じた。

「解んないわね」

だが、ロザリアは面倒層にそう言った。

「マジになって、馬ッ鹿じゃないの？この世界で死んだから、現実でも

死ぬなんて証拠ないし。そんなんで、現実に戻って罪になる訳ないじゃん。……で、あんたらは、その死に損ないの言うこと真に受けて、アタシらを探してたわけだ。撒いた餌に釣られちゃったのは認めるけど……でもさあ、たった4人でどうにかなると思ってるの?」

そう言い、ロザリアは指を鳴らした。

それを合図に、次々とオレンジカーソルのプレイヤーが現れ、その数は十数人程いた。

「こ、こんなに……!」

「キリトさん、カイさん!いくらなんでも不利過ぎます!逃げない!」

「悪いな、レオ、シリカ。こつちも依頼があるんだ。それに……あの女だけは、絶対に許せないんだ」

「そう言う事だ。俺たちが逃げろって言うまでは、転移結晶を用意して待っててくれ」

そう言い、カイとキリトは橋を渡り、オレンジ犯罪者達へと向かって行く。

「キリトさん!」「カイさん!」

レオとシリカが同時に、2人の名前を呼んだ。

「キリトだつて?……それに、カイって……まさか!」

その名前に、1人が反応した。

「黒のコートに、盾無しの片手剣士……そして、それとコンビを組む赤いコートを着た、刀使い……!ロザリアさん!こいつら、あの《黒の剣士》と《紅蓮の剣豪》……攻略組だ!」

攻略組。

その単語に驚愕したのは、《タイタンズハンド》だけでなく、レオとシリカもだった。

これまでの戦いぶりから、相当高レベルのプレイヤーだとは思っていたが、よもや最前線で未踏破の迷宮に挑み、ボスモンスターを次々と倒している攻略組だとは夢にも思っていなかった。

「何言ってるのよ!攻略組が、こんな所に居るわけないじゃない!どうせ、名前を騙るコスプレ野郎に決まってる!それに、もし本物だとしてもこの人数に敵うないわよ!」

ロザリアの言葉に、及び腰だった犯罪者達は急に息を吹き返した。「そ、そうだよな！こんな所に、攻略組が居るわけねえよ！」

「それに、本物ならスツゲーレア物のアイテムとか持つてるぞ！」

「こんな美味しい獲物、見逃す手はねえよな！」

犯罪者達は口々に騒ぎ、抜刀する。

「おらああああああ!!」

「死ねえええええ!!」

キリトとカイを取り囲み、犯罪者達は一齐に攻撃する。

哄笑し、罵り、手を休めることなく犯罪者達は攻撃し続ける。

「2人が死んじゃう……助けないと……!!」

シリカは体を震わせながらも、腰の短剣を抜こうとする。

「待つて、シリカ！」

そんなシリカをレオが止めた。

「離してレオ君！このままだと2人が！」

「違う……あの2人のHP……全然減ってないんだ……」

レオは目の前の光景が信じられないのか、声を震わせてそう言う。

「え？」

シリカも驚き、2人のHPを見る。

見ると、2人のHPは減っているが瞬時に回復し、HPは常に満タシとなっていた。

HPが減る様子のないキリトとカイに、犯罪者達は力尽き、攻撃を止めた。

「ど、どうなってんだ……!!」

「コイツら……普通じゃねえ……!!」

まるで、化け物を見るように犯罪者達は声を震わせる。

「弱いな」

「所詮、下層で格下相手に糞がつてる連中だ。こんなもんだろ」

世間話をするかの様な態度の2人に、犯罪者達は恐怖を覚える。

「10秒でおよそ400ダメージ。それが、お前らが俺たちに与えられるダメージの総量だ」

「俺とキリトのレベルは75を超えていて、HPも1万を余裕に超え

てる。更に《バトルヒーリング戦闘時回復》スキルで、10秒毎にHPが600回復する」

「つまり、お前たちがどれだけ攻撃しようと、俺とカイの命には少しも届かないってことだ」

「なんだよ、それ………そんなのありかよー！」

サブリーダーと思しき男が声を上げる。

「ありに決まってるだろ」

その男に、カイは冷たく言い放つ。

「これはゲームであっても遊びではない。言い換えれば、遊びじゃないがゲームでもある。この世界がレベル制MMOである限り、数字の数は絶対だ」

憎悪を込められた声に威圧され、オレンジ犯罪者達は後ずさる。

そんな中、キリトはポーチからある物を取り出す。

それは、回復結晶や転移結晶より一際大きい、濃紺色の結晶だった。

「回廊結晶だ。俺達に依頼した男が、全財産をはたいて買った物だ。出口は、《K黒鉄宮》の監獄に設定されてる。向こうでは、《H軍》と《K希望の騎士団》が待ち構えているから妙なことはするなよ」

「なるほどね………どう足掻いてもアンタらは殺せないって事ね。なら………こうするしかないわね！」

その瞬間、オレンジ数人の犯罪者がレオとシリカの方に向かって走り出した。

カイとキリトを殺せないなら、レオとシリカを人質に取り、従わせる。

そのつもりらしい。

「なっ!？」

「しまったー！」

キリトもカイも、その可能性を考えていなかったわけじゃない。

だからこそ、何が当てもすぐに駆け付けれる位置に居た。

だが、オレンジ犯罪者達はその作戦も込みで、陣形を組んでおり、カイとキリトはオレンジ犯罪者達の肉の壁で進路を阻まれた。

オレンジ犯罪者の魔の手が、シリカへと迫る。

次の瞬間、犯罪者^{オレンジ}の手が斬り飛ばされた。

「なっ!?!」

犯罪者^{オレンジ}が驚愕の表情になる。

斬ったのはレオだった。

シリカを背後に庇い、《水禍之刃》を抜き、犯罪者^{オレンジ}の手を斬り飛ばした。

「シリカは……俺が守る!もう、絶対に泣かせたりしない!」

子供とは思えない気迫に、レオとシリカに向かっていた犯罪者^{オレンジ}達はたじろぐ。

そして、犯罪者^{オレンジ}達の背後にはカイが立っていた。

カイは素早く抜刀し、犯罪者^{オレンジ}達の手足を全て斬り落とした。

「うわああああああ!!?」

「俺の腕があああああ!!?」

「ひいひいひいひいひい!!?」

手足を落とされ、犯罪者^{オレンジ}達は絶叫する。

「動けなくしたただけだ。そんなに騒ぐな」

カイはそう言い捨て、ロザリアへと向かう。

ロザリアは持っていた長槍を、カイへと向ける。

「アタシも斬ろうって言うのかい!そんなことしたら、アンタが犯罪者^{オレンジ}に!」

言葉が終わらないうちに、カイはロザリアとの距離を詰め、刃を首筋へと向ける。

「一般人^{グリーン}のお前を捕まえる為なら、犯罪者^{オレンジ}になっても構わないぞ」

カイの実力を目の当たりにし、ロザリアは敵わないと悟り、槍を手放した

そして、回廊結晶により、犯罪者^{オレンジ}ギルド《タイタンズハンド》はリーダーを含め全員が牢獄送りになった。

その後、4人は35層へと戻った。

宿に戻ると早速、シリカは《プネウマの花》を使い、ピナを復活させた。

《プネウマの花》の中にある雫を、《ピナの心》に落とす。

すると、光が強くなり、次の瞬間にはピナがそこに居た。

「ピナ！良かった、また会えて本当に良かった……！ごめんね、もう2度とあんな目に合わせたりしないよ！」

シリカは涙を流し、ピナを抱きしめる。

ピナは少し苦しそうにするも、シリカへと頬擦りする。

そんな光景に、レオも涙を流した。

「レオ、シリカ。俺たちは、君たちを囷に使う様な真似をした」

「本当にすまない」

ピナとの再会を済ませると、キリトとカイは、レオとシリカに頭を下げて謝罪する。

「そんなに謝らないで下さい。2人が居なかったら、ピナは助からなかったんです」

「そうですよ。あたし、2人に感謝してますから」

レオとシリカはさほど気にしてないらしく、あっさりと2人を許した。

「あの、カイさんとキリトさんは、この後最前線に戻るんですか？」

レオはそう尋ねた。

「そうだな。5日も前線を離れてたからな」

「早く戻らないと、怖い人に怒鳴られるんだ」

「それ、本人に聞かれたらさらに怒るぞ」

「違いないな」

そう言って笑い合うキリトとカイに、レオは素直に凄いと思った。

これから死ぬ危険が高い最前線に戻るって言うのに、2人はそれが当たり前と言わんばかりに普通だった。

(俺も……こんな風になれるのかな……)

レオはそう思った。

今回は、犯罪者^{オレンジ}に襲われた時、確かにレオはシリカを守るために動いた。

(もし、また同じような場面が来た時、俺はシリカを守れるのか………？俺は……俺は！)

カイはある決意をし、カイを見る。

「カイさん！俺を鍛えてください！」
「え？」

レオの行き成りの申し出に、カイは驚く。

「今の俺じゃ、シリカを守り切れない。またいつか、シリカを泣かせてしまいかもしれない。俺は、シリカをもう泣かせたくないんです！だから、強くなりたい！お願いします！」

「鍛えてくれって……別に俺そんな凄い奴でもないぞ。鍛えて欲しいなら、《希望の騎士団》^Kとかの方が……」

「俺は、カイさんに鍛えて欲しいんです！お願いします！」

必死に頼み込むレオに、カイはどうしたものかと頭を掻く。

「なあ、カイ。男がこんなにも頭を下げて頼んでるんだ。引き受けてもいいんじゃないか？」

「……………それもそうか」

カイが折れ、レオを見る。

「レオ、俺も攻略とかがあるからそう頻繁には相手してやれないぞ。それでもいいなら、特訓してやってもいいぞ」

「本当ですか!?ありがとうございます、カイさん！いや、師匠！」

「師匠!?いや、そんな大層な呼び方はちよつと……………!」

「カイが師匠か！スゲー面白いな！」

「キリト！お前他人事だと思つて！」

ワイワイと騒ぐ男共だったが、シリカは頬を赤らめていた。

（あたしの為に強くなりたいって……………ううう、凄く嬉しい様な恥ずかしい様な……………でも、あの時のレオ君、凄くかつこ良かったなあ……………）

そんな事を想いつつ、シリカは自分を守ろうと戦ったレオを思い出す。

そして、あることに気づいた。

（ああ……………そっか。あたし、レオ君の事……………好きなんだなあ）

その日、1人の少年がパートナーの少女の為に強くなることを決意し、1人の少女がパートナーの少年への恋心を自覚した。

第49話 鍛冶師のパーティー

「そんなこと言われたら嬉しいわよね」

「強くなりたい理由が自分の為ともなればね」

「子供のくせにレオは立派ね」

ミトとアスナ、リズはそんな感想を言った。

「それからは、ずっとレオ君の事ばかりに目が行っちゃって………戦鬨の時もレオ君に見惚れてモンスターへの攻撃受けちゃったり、日常の何気ない仕事でもキュンってなったり、何度か宿の部屋が空いてないって嘘を言って一緒に部屋に泊まったり………」

歯止めが利かなくなつたのか、とうとう聞かれてない事まで語り出したシリカだった。

「って、あたしだけに語らせないで下さいよ!」

数分後、ようやく色々語り過ぎたことに気づいたシリカは、顔を真っ赤にし叫んだ。

「ほら!次はリズさんの番ですよ!」

「ええ〜?私は良くない、別に」

「駄目ですよ!ほら、話してください!」

「ああもう、分かった。分かったから落ち着きなさい」

2024年6月22日

その日、リズはいつも通りの時間に起き、店の開店準備を始めた。早い段階から鍛冶スキルを鍛えていたことが功を成し、48層に店を構えてからも多くの固定客がリズの作った武器を愛用し、メンテナンスを頼んでいる。

開店前から店の前で待っていた常連客に朝の挨拶をし、これから狩りに向かう者や迷宮区の攻略に向かう攻略組の武器をメンテし送り

出すと、依頼の入ってるオーダーメイドの武器の作製を始める。

炉に高価な金属素材インゴットを入れ、十分に熱せれたら取り出し、金床に置く。

そして、愛用のハンマーで叩く。

武器の製作には、作りたい武器の製作スキルを使い一定回数叩くだけでいい。

更に、出来上がる武器の品質はランダムだが、気持ちや気合が左右されるのではない、リズは心を込めて1回1回丁寧に打つ。

そして、最後の1回を打とうとした瞬間だった。

「リズ、おはよー!」

「邪魔するわよ!」

「おわっ!?!」

行き成り入って来た2名のプレイヤーに驚き、最後の1回を打ち損じ、ハンマーは金床を叩く。

「アスナ……ミト……」

入ってきた闖入者は、アスナとミト。

リズにとっては、それこそ48層に店を構える前からのお得意様で、攻略組として名を馳せた後も常連客として訪れる親友たちだ。

「あ、ごめん。次から気を付ける」

「同じく」

「そのセリフ、聞き飽きたわよ」

そう言い、リズは叩き損ねた金属を再び炉の中に入れる。

「それで、今日はどうしたの?」

「武器を砥いで欲しくて来たの。はい、お願い」

アスナはそう言い、腰に差してる細剣レイピア“ランベントライト”をリズへと渡す。

「私も。折角だし、ついでにお願い」

そう言い、ミトも背中に背負っている両手鎌“イクシオン・サイズ”を渡す。

「この間砥いだばっかじゃない。まだ早いんじゃないの?」

「そうなんだけど、ピカピカにしておきたくて」

「ほら、こういうのって気分が大事でしょ」

「ふうん？」

そう言うアスナとミトを、リズは改めて見る。

2人の格好はいつもと変わらない《血盟騎士団》の制服だが、アスナは耳に小さな銀のイヤリングを、ミトは同じデザインの銀の髪留めを付けている。

「なんか怪しいわね……てか、今日って平日でしょ？ギルドの仕事は大丈夫なの？」

「今日はオフにしてもらったんだ」

「私もアスナも、ちよつと人と会う約束しててね」

「ふうん………男？」

リズがそう聞くと、アスナは分かり易く狼狽えた。

「そうよって言ったらどうする？」

ミトは意地悪そうな笑みを浮かべ言う。

「へ〜アスナはともかく、あのミトに男が出来るとはねえ」

「残念だけど、私もアスナもまだ一方通行の片想いよ」

「ちよつとミト!？」

あつさりとバラすミトに、アスナが叫ぶ。

「なんか意外ね」

アスナとミトはインクラッド最強ギルド《血盟騎士団》のサブリーダーを務めている美少女だ。

言い寄る男はそれこそ、星の数ほどいる。

だからこそ、その逆パターンであることに、リズは驚いた。

「ちなみに、どんな人なのよ」

「う〜ん、変な人かな。掴み所がないって言うか、マイペースって言うか………そのくせに滅茶苦茶強いし」

「良い人よ。優しくて頼りになって………でも、少し危なっかしくてね。しっかり手を掴んでないと、何処かに消えちゃいそうでその辺は少し怖いかな。あと、滅茶苦茶強いわね」

「あんたらより強いのか？それなら、だいぶ候補は絞られるわね」

「もう！想像しなくていいから！それより早く砒いで！」

「そうだった！時間も迫ってるし、早くお願い！」

「はいはい、分かりました」

そう言い、リズは2人の武器を手に回転砥石の前に移動する。

アスナの細剣^{レイピア}、ランベントライト^{レイピア}、ミトの愛鎌、イクシオン・サイス^{レイピア}。

どちらもリズが製作した武器で、リズの今まで作り上げた物の中でも最上級の名品である。

最高級の金属素材^{インゴット}に最高級のハンマー、最高級の金床、高いスキル熟練度を以てしても、ランダムパラメーターの所為で、これほどの武器を作り上げられるのは3カ月に1度あるかどうかだ。

砥石で磨く作業も、武器を作るのと同じで一定時間砥石に武器を当てればいいのだが、やはりおざなりに扱うことは出来ず、ましてや自分が作った最高級の武器ともなれば砥石作業も丁寧に行う。

「はい、出来たわよ」

「ありがとう、リズ」

「いつも助かるわ」

アスナとミトは代金を支払い、綺麗に磨かれた愛剣、愛鎌を受け取る。

「毎度。今度、そのお相手連れてきなさいよね」

「そ、そのうちね」

「ま、気が向いたら考えてあげるわ」

そう言い、2人は楽しそうに出て行った。

「恋、か……………いいなあ……………」

楽しそうに恋をしている2人が、羨ましくなり思わずそう呟く。

その直後、頭を振り、炉で熱し直していた金属を金床に置き、雑念を振る様にハンマーを振り下ろした。

翌日の6月23日。

オーダーメイドの依頼を終え、少しばかり寝不足気味だったリズは、うたた寝をしていた。

その時、リズはある夢を見ていた。

それは、この世界から出られなくなって暫く経った後に起きた事で、週1のペースで見続けている夢だった。

圏外フィールドで座り込むリズ、そんなリズの前に立つ右手に曲刀、左手にメイスを持った男はリズを見下ろしていた。

『おい………』

男が口を開き、声を発する。

『起きてくれないか?』

その言葉に、リズは驚いた。

何故なら、いつもと違う言葉だったからだ。

どうして今日に限って、いつもと違う言葉なのか疑問に思った。

「なあ!起きやがれって!」

「うわっ!」

耳元で叫ばれるように起こされ、リズは飛び跳ねるように立ち上がる。

「すみませんでした!いらっしやいませ!」

条件反射の様に繰り出される、いらっしやいませに、接客が染みついてると思っていると、目の前にいる男に気づく。

「えっと、武器をお探しでしょうか?」

「いや、俺は客じゃねえ」

男、トバルは言う。

「友人に片手剣の製作を頼まれたんだ」

「はあ？片手剣を作れだど？」

その日の朝、トバルはキリトにそう言われた。

「ああ、この剣と同等、あるいは以上の性能で一本欲しいんだ」

そう言っつて、キリトは背中に吊ってる剣「エリユシデータ」を指差す。

「なんでだよ？『エリユシデータ』は50層のフロアボスのL Aで
手に入れた魔剣じゃねえか。強化すりや90層までは余裕で戦える
代物だぞ？なのに、同等以上の性能の剣をもう一本ってのはおかしく
ないか？」

キリトの話を聞きながら制作した刀を鑑定しつつ、「駄目だな」と呟く。

「相変わらず、拘りが強いな」

「いいんだよ。どうせ、半分趣味でやってるようなモンだ。仕事以外
じゃ、自分が満足出来る物が出るまでやり直すだけだつての」

そう言い、刀を金属素材に戻す作業を行い、金属素材を仕舞う。

「ま、作ってやってもいいぞ」

「本当か？助かる！」

「その代わり、実費と報酬は出してもらおうかな」

「そんな訳で、これぐらいの代物と同等以上の剣を作らなきゃならない」

トバルはリズに「エリユシデータ」の性能の数値を写したスクショを見せる。

「はあ……同業者の方でしたか。つまり、委託製作の依頼ですか？」

「違えよ。俺は自分の仕事は1から10まで自分でやることをモットーにしてんだ。例え、自分以上に腕の立つ鍛冶師が居たとしても、委託製作なんてしねえさ」

そう言い、トバルはリズを見て言う。

「俺が頼みたいのは同行だ。俺が今からする素材集めのな」

「はあ、素材集めですか………はあああああ!!?」

素材集めを言うと、トバルにリズは驚く。

何故なら武器を作る際に必要な金属素材インゴットを鍛冶師自ら採りに行くとは聞いたことがないからだ。

確かに銅や鉄などの希少価値の低いものぐらいなら、自身で採りに行く鍛冶師もいるが、基本は高レベルのプレイヤーに実費と報酬を払って採ってきてもらうのが普通だ。

にも関わらずトバルは、自分で依頼されたオーダーメイドに使う金属素材インゴットを採りに行くと言うのだ。

「アンタ馬鹿なの！そんなの、自殺行為じゃない！」

「なんで、アンタに馬鹿呼ばわりされなきゃいけないんだよ？自殺行為だろうとなんだろうと、これが俺のやり方だ」

「だからって、唯の鍛冶師が自分から希少価値の高い金属素材インゴットを採りに行くなんて聞いたことないわよ！ちよつと待ってなさい！」

そう言い、リズは壁に飾ってあった剣を持ってくる。

「これ……この剣なら、その友人の要望にも応えられるはずよ！」

そう言われ、トバルは剣を受け取り、調べる。

「……………こりやスピード型の剣だろうが？アイツが欲しいのは、重さと鋭さ重視のパワー型の剣だ。要望一つも満たしてねえだろ。こんなモン、渡せるかっての」

その剣は、リズが店売りしている物の中では、最上級の剣。

その剣を、こんな物扱いされた途端、リズはどうとうキレた。

「こんなモノですって!? あたしが丹精込めて作った剣を、こんなモノ呼ばわりするなんて！アンタ、最低ね！」

「……………そりゃ悪かった。でもな、俺の友人が欲しい剣と全然違う剣を渡してくるアンタもアンタだろ？モノが良ければ、依頼人の要望はどうでもいいと思ってるのか？」

リズの言う事は正論だし、トバルの言う事も正論だった。

「分かったわよ！アンタのそのやり方、拝見してやろうじゃない！その代わり、少しでも無理と判断したら、撤退だからね！その時は、その剣で我慢してもらおうから！」

「なんでお前の判断で退かなきゃならねえんだよ。…………でも、いいぞ。どの道、鍛冶師には同行して欲しいしな」

そう言いトバルは、メニューウィンドウを操作する。

そして、リズの前にパーティー申請のメッセージが届く。

「トバルだ。金属素材を手に入れるまでの間だが、よろしく頼むぞ」

「リズベットよ！こちらこそ、よろしくトバル」

第50話 落下

トバルが狙っている金属素材は、55層の片隅にある小さな村で発見されたものだった。

NPCの長老曰く、西の山に住む白竜は、そこにある水晶を餌としており、腹の中には貴重な金属があるとのことだった。

明らかに武器素材クエストの為、多くのパーティーによって白竜は討伐されるも、未だに誰一人として金属素材をドロップした者はおらず、未だにその金属素材の姿を見た者はいない。

現在では、様々な方法で検証が行われている。

「その検証の中に金属素材は鍛冶師しかドロップしないなんてのもあるんだ。噂が正しかつたとして一人当たりどれだけドロップするかわからないし、数は多いに越したことはないからな。お前さん、戦闘もそれなりに出来るんだろ？生半可な鍛冶師連れて行って、死なれても困るしな」

「その言い方、なんかムカつくわね。まあ、55層ぐらいなら死ぬことはないはずよ」

「なら、さっさと行くぞ。時間が惜しいからな」

そう言つて、トバルはリズと共に55層へと向かった。

例の村に着くと、トバルとリズは早速長老の元へと向かい、長老の話聞く。

長老の幼少期から青年期、熟年期の話聞き続け、ようやくクエストフラグを設立させ、すぐに山へと向かった。

「へっくしゅー！」

山に着くなり、リズは盛大にクシャミをした。

「おい、これ使え」

すると、トバルはアイテムウィンドウからマントを取り出し、リズへと渡す。

「あんたはどうすんのよ？」

そう言つて、リズはトバルの姿を見る。

トバルは、袴姿で防寒の類は一つも付けていない

「いらねえよ。この程度の寒さで音を上げられるかつての」
そう言い、トバルは雪道をずんずんと進む。

「何よ、嫌味？」

そんなトバルの後姿を眺めながらも、裏地が毛皮になってる暖かそうなマントをリズは纏った。

労せず山を登り、頂上に着くと、そこには大量の水晶が柱の様に伸びていた。

その光景に、リズは思わず歓声を上げそうになった。

「おい、リズベツト。ここから先は、俺1人で行く」

「はあ!?何言ってるのよ!相手はドラゴンよ!死ぬ気なの!」

「死ぬつもりなんざねえよ。ただ、相手はここに来るまでに出て来たスケルトン系のモンスターとは違う。お前のメイスじゃ、空を飛ぶ奴は倒せねえだろ?」

トバルの言う通り、リズの武器では飛行系モンスターとの相性は悪い。

「ドラゴンが現れたら、転移結晶持って、水晶の陰にでも隠れてろ。ドラゴン1匹ぐらい、俺1人でもなんとかなる」

そう言い、トバルは山頂を進む。

リズは素直に転移結晶を取り出そうとした。

その時だった。

「リズ、隠れろ!」

トバルが叫んだ。

叫ぶと同時に、上空から猛禽類を彷彿させるような高い雄たけびが降って来る。

長老の話に合った例の白竜が現れた。

「えっと、確か……ドラゴンの攻撃は、左右の鉤爪と氷ブレス、それから突風攻撃!気を付けて!」

リズは早口にそう言い、水晶の陰に隠れる。

トバルは慌てもせず、ゆっくりと腰の刀を抜く。

それと同時に、ドラゴンは口を大きく開け、氷の息^{ブレス}攻撃を仕掛ける。

「ブレスよ！避けて！」

隠れながら見ていたリズが叫ぶ。

だが、トバルの耳にリズの声は届いていなかった。

トバルは、ただ真つすぐにドラゴンを見ていた。

そして、ドラゴンの口から冷気を纏い、細かい氷塊を含んだ息が吐かれる。

「うるっせえな」

トバルは不機嫌そうに、刀スキルを発動し、正面からドラゴンの息を斬り裂いた。

「……………はっ」

その光景に、リズはそうとしか言えなかった。

「予想通り、あのブレスはスキルと同じか。それなら、ソードスキルで打ち消せれるとは思ったが、案の定だな」

トバルはそう言うと、今度は跳躍し、水晶の上に乗る。

「おらあー！」

更に跳躍しドラゴンに一太刀浴びせた。

「ふっ！」

そして、そのまま背後を取り、その背中に刀を突き刺す。

突き刺すと、そのまま柄を握り締め、ドラゴンの背中を滑り降りるように落下する。

それにより、ドラゴンの背中には真一文字の傷が付く。

ドラゴンは絶叫し、トバルを振り落とさんばかりに暴れまわり、地面へと急降下する。

地面にたたきつけられる前に、トバルは素早くドラゴンの背中を降りる。

そして、体を擦り付けるよ言うに地面へと落ちたドラゴン目掛け、刀を逆手で持ち、上空からドラゴンの頭目掛け突き刺す。

「す、すごい……………！」

リズは、トバルの言葉からトバルがある程度戦いに慣れているのだと思っただ。

だが、ある程度所ではなかった。

トバルは、攻略組にも匹敵するほどの力を持っており、本当に鍛冶師なのか疑いたくなるほどだった。

「はっー」

ドラゴンの頭に刺した刀を抜き、そのまま刀スキルの強攻撃を数発、頭へと叩きこみ、ドラゴンのHPはぐんぐんと減り、残り3割以下となった。

この調子なら、後1、2撃程の強攻撃で倒せる。

トバルは連続で強攻撃発動した事で、硬直に入っていた。

だが、これなら問題はない。

リズはそう思ったからこそ、水晶の陰から体を出した。

「やるじゃない、トバル！正直、アンタの事疑ってたけどこれなら納得の「馬鹿野郎！何出て来てやがる！まだ終わってねえんだぞ！」

リズが出てきたことにトバルは叫んだ。

「何よ？もう終わりじゃない。さっさと片を付けて……」

その瞬間、地面に倒れていたドラゴンは勢い良く体を起こし、飛び上がった。

ドラゴンの頭の上に乗っていたトバルは、その影響で落とされる。

そして、ドラゴンは量の翼を大きく広げ、振った。

突風攻撃。

ドラゴンの起こした突風攻撃には然程ダメージはなく、トバルもリズも無傷だったが、突風は地面の雪を巻き上げ、雪煙を起こした。

雪ごと吹き飛ばされたリズは、受け身を取ろうと体勢を整える。

そして、雪煙が晴れるとそこは近くにあった巨大な穴の真上だった。

「嘘でしょ？」

そう言葉が漏れた。

浮いてた体は、そのまま重力に従い落下し、リズは穴へと落ちていく。

「きゃあああああああ!!!」

「リズ！くそつ、間に合え！」

なんとか、水晶の上に着地していたトバルは、穴に落ちそうになる

リズを見つけ、水晶の上を跳躍で移動し、穴へと移動する。

そして、そのまま穴に飛び込み、下に落ちるリズを捕らえる。

「もう少し……！」

限界まで腕を伸ばし、リズの腕を掴むとそのまま抱き寄せる。

リズの身体を左手で抱きしめ、そのまま右手に持った刀でソードスキルを打つ。

刀スキル、突進技《紫電一闪》。

それにより、2人の身体はグイッと引っ張られ、穴の壁へと飛ぶ。

壁に激突する直前で、トバルは刀を突き出し、壁に刀を突き刺す。

そして、そのまま落下するスピードを刀でブレーキを掛けつつ、底へと落ちた。

第51話 かつての恩人

何十秒、何分……下手したら何時間か気を失っていたかもしれない。

それが、目を覚ましたリズの最初の感想だった。

穴はかなり深いらしく、穴の出口まで80メートルはあると見られる。

「おい、目え覚ましたならどいてくれねえか？」

すると、下から声が聞こえ見ると、そこにはトバルが居た。

「うわっ！ご、ごめん！」

慌てて上から降り謝るリズにトバルは「気にすんな」と言っ、ポーチからハイ・ポーションを2つ取り出す。

「ほら、飲めよ」

「あ……ありがとう」

お礼を言い、ポーションを飲みじわじわと回復するHPを見る。

「さてと、どうやって脱出するか……」

HPの回復を終えると、トバルは上を見上げそう言う。

「え？ 転移結晶使えばいいじゃない」

「こんなあからさまな罠だぞ？ そう簡単に脱出できるわけがない。それに、結晶無効化エリア独々の雰囲気も感じる。結晶アイテムは使えねえだろう」

「そ、そんな！」

リズはまさかと思い、転移結晶を使ってみるも転移結晶は起動しなかった。

「嘘……それじゃあ、どうするのよ？」

「一応、キリトとカイの奴に55層のここに行くことは伝えてある。

2、3日も音沙汰なければ様子を見に来るぐらいはするはずだ」

そう言うのと、トバルはその場に座り込み、アイテムウインドウから、携行炉と金床、ハンマーを取り出し、適当な金属素材インゴットを取り出す。

「ちよつと！ こんな状況だつてのに、剣作つてどうするのよ!？」

「こんな状況だからこそ、落ち着いて普段してることをするのが一番

なんだよ。焦った所で、脱出できる訳でもないからな」

「そう言い、トバルは熱された金属素材インゴットを金床に起き、刀を打ち始めた。

そんなトバルに呆れ、リズは穴からの脱出方法を模索し始めた。

「駄目ね。どれも全然無理」

1時間後、万策尽きてリズは地面に寝転がった。

フレンド機能のメッセージは、迷宮区やダンジョンでは使えないので助けを呼べず、おまけにフレンド追跡機能も使えない。

なら、ドラゴン狩りに来たパーティーに助けてもらおうかと思っただが、穴からでは来ているかもわからないし、何より80メートルも深いこの場所からじゃ声も届かない。

「ちよつと、アンタもなにかアイデア出さないよ」

まだ刀を打ってるトバルに、リズがそう言うと、トバルは少しだけ腕を止め、考える。

「そうだな……大量の短剣を作って、それを壁に刺して足場にして昇っていくとか?」

「……………馬鹿なの?」

「だな。そもそも、手持ちの金属素材インゴットじゃ、作れても50本。この高さじゃ、例え100本あっても穴には届かねえな」

そして、トバルは剣の製作を再開した。

数時間後、日が暮れて完全に夜中になった。

穴の中を照らすのは、トバルの携行炉の火とトバルが出したランタンの灯のみだった。

トバルは適当に作ったスープを口に時折含みつつ、黙々と刀を打ち、リズはトバル手製のスープと干し肉とパンで簡単な食事を摂り、トバルから渡された寝袋に入って、トバルの仕事の様子を見ていた。「ねえ、1つ聞いてもいい?」

すると、リズはそんなことをトバルに聞いた。

「なんだ?」

手を止めず、トバルが聞いて来る。

「あのさ、どうしてあの時、私を助けたの?死ぬ可能性だってあったのに」

その質問に、トバルは腕を止め、手にしたハンマーをゆっくり下ろす。

スープを一口飲み、そして、口を開いた。

「俺が同行を依頼したんだ。それで死なれるのは御免だったからだよ」

「……………そっか」

トバルらしい理由だなっと思ひ、リズは寝ようと目を閉じた。

「それにな」

だが、まだ理由があったらしくリズはもう一度目を開いた。

そして、トバルと目が合った。

トバルは、驚くほど優しい目をして、リズを見ていた。

「あんなにいい剣作るんだからな。死なせたくなえっと思うのが、鍛冶師だろ?」

「え?」

「リズの作ったあの剣。確かに、キリト……俺の友人の1人な。アイツの要望の剣じゃなかったけど、スピード型の剣士なら、喉から手が出るほど欲しい性能の剣だ。それに、店で並べられた剣、どれもお前の手製だろ?剣1本1本から伝わって来たよ、お前の剣に対する想いと優しさがな」

「……………そんなの、分かるの?」

「普通は分からねえだろうな。だが、これでもS A O初日から鍛冶師として腕を磨き続けてたんだ。それなりに見る目はあると思うぜ」

そう言つて、トバルはハンマーを握り直す。

「俺はもう少し、刀打ってから寝る。ちよつとうるさいだろうけど、日課なんでな」

「いいわよ、別に。じゃあ、おやすみ」

リズは寝袋の中で体の向きを変え、トバルに是中を向けて目を閉じる。

「ああ、おやすみ」

トバルがランタンの灯を消し、とうとう穴の中の光は携行炉の火だけになる。

リズはトバルが刀を打つ音を子守唄代わりに、眠り始めた。

不思議と、その音がリズにとって心地よかった。

リズは、またあの夢を見た。

S A O がデスゲームとなったあの日、リズはその事実を受け入れられずその場に座り込んでいた。

それから3週間、リズは街の宿屋に閉じこもるか、目的もなく街を歩き回った。

だが、そんなことしてもリズの中で現実感湧いて来ず、見るもの全てが、そして自分自身さえも偽物なのではと思うようになった。

偽物ならモンスターとの戦闘だって怖くない。

そして、リズは3週間ぶりにフィールドに出た。

SAOの初日も、デスゲームだと言うことを告げられる前は平気でモンスターを狩っていたのだから大丈夫。

そう思い、いざモンスターと戦闘してみるも動きはちぐはぐで、狙った場所に攻撃を与えられなかった。

序盤で遭遇する弱小モンスターの《グリーン・ワーム》相手にHPを半分も減らされパニックになり、リズは持っていたメイスを放り捨て、街へと逃げた。

唯一の武器を失い、買い直すコルもない。

最後に唯一出来ることは、自殺をし、本当に現実に帰れないのかを確かめることだった。

もし嘘なら、そのまま目覚めるだけ。

だが、もし本当だったら？

そう思うと、怖くて自殺なんて出来なかった。

結局、またしても目的もなく街を歩き出す。

その時だった。

道の真ん中を、2人の少女が歩いていた。

栗色の髪に腰に細剣レイピアを差した少女と、紫の髪に背に大きな鎌を背負った少女。

その少女は、リズみたいに項垂れていなかった。

ただ真つすぐ前を見て、胸を張り、互いに笑い合いながら街の出口、フィールドへと向かっていた。

戦いに行くんだ。

リズはそう思った。

そして、無意識にリズは自身の腰に手を伸ばしていた。

そこに武器のメイスはない。

その瞬間、リズは後悔に襲われた。

モンスターが怖くて逃げたのは仕方ない。

だが、武器を投げ捨てたのはダメだった。

(あれは、この世界でたった1つ、あたしが唯一握れる本物なんだ！)
確かに、このデスゲームで見る物は全て偽物かもしれない。

自身も、ただのデータの集合体で偽物かもしれない。
食事も、モンスターとの戦闘も偽物かもしれない。

だとしても、あの時、自身で握り締めてモンスターと戦ったあの武器だけは、本物だ。

そう思うと、リズは走り出しフィールドに出た。

自分の武器を回収する。

《グリーン・ワーム》と戦闘した場所はうる覚え、武器自体耐久値が無くなり消えてるかもしれない。

武器もなく素手の状態でモンスターに襲われるかもしれない。

それでも、あの武器を探そう。

そして、もし見つけることが出来れば……………自分も、あの2人みたいにこの世界でも、真つすぐ前を向いて生きていけるかもしれない。

そう思った。

30分以上フィールドを歩き回り、リズはようやく見覚えのある場所を見つけた。

(この辺にあるはず……………!)

辺りを見渡し、必死にメイスを探す。

だが、探し始めた直後、《グリーン・ワーム》表れが、リズを襲った。

「きゃっ!」

《グリーン・ワーム》の攻撃により、HPが減らされる。

それでも、リズはメイスを探す。

(何処……………何処にあるの……………!)

そうしてる間にも、《グリーン・ワーム》の一撃がリズを倒した。

リズはHPがレッドになり、その場に倒れこむ。

(……………ごめんね、見つけてあげれなくて)

自分の武器に心の中で謝罪し、リズは目を閉じた。

その瞬間、パリンツ!とガラスが砕ける様な音がした。

目を開けると、《グリーン・ワーム》は倒され、そこには1人プレイヤーが立っていた。

《グリーン・ワーム》を背後から倒したらしく、男は座り込むように倒

れていたリズを見下ろしていた。

「おい」

男は、右手に曲刀を持ち、左手に持ったメイスをリズに見せる。

「これ、お前の武器か？」

男の問いに、リズは頷いた。

「この辺で拾ってな。アンタ何か探してたし、そうかと思ったんだよ」

そう言っつて、メイスをリズへと差し出す。

「耐久値がヤバかったから、勝手に回復させといた。じゃあな」

そう言っつて男は、フィールドを奥へと進もうとした。

「あ、あのー！」

リズはその男を呼び止めた。

だが、男は止まらなかった。

それでも、リズは声を上げた。

「ありがとうございます！あたし、頑張ります！」

何を頑張るのか分からないが、とにかくリズはそう言いたかった。

去って行く男は、片手をあげる。

その姿が、リズには何処か応援してくれてるように感じた。

「ん？……………あれ？あたし……………そっか……………穴の中か」

目が覚めたリズは寝袋から起き上がり、欠伸を一つして寝袋を出

る。

「よう、起きたか」

すると、トバルが地面を掘りながら声を掛けて来る。

「うん、おはよう……何してるの？」

「見つけたんだよ、例の金属をな」

「へく……ええ!？」

トバルの台詞に、リズは慌ててトバルに近寄る。

「ほらよ」

そう言つて、トバルが彫っていた場所を見ると、そこには両掌からはみ出る程の大きさの金属素材があった。

アイテム名は《クリスタライト・インゴット》。

「昨日、寝ようかと思つたらなんか地面で光る物を見つけてな。試しに掘つたら、コイツがあつたんだよ。で、そこで気付いたんだ」

そう言つてトバルは笑う。

「山に住む白竜は、水晶を餌とし、腹の中で精製する。つまり、この金属素材はあのドラゴンの排泄物だったんだよ。そんで、この穴はトランプじゃなくて、ドラゴンの巣だ」

「な、なるほど……」

お目当ての金属素材が排泄物だとは思わなく、リズは引きつった笑みを浮かべる。

「で、一晩掛けてこの辺の金属素材は全部集めた。かなりの数だし、半分はリズの所で使ってやってくれ」

「あ、ありがとう」

元が排泄物の金属素材インゴットと言うことに、若干抵抗を感じるも新しい素材に内心喜んでもある。

「さて……あとはどうやって帰るかだな」

金属素材インゴットを手に入れても帰る手段がないと、どうしようもない。

「おーい！誰かいるかー！」

「いたら返事しろー！」

その時、頭上から声がした。

聞き覚えのある声に、トバルが上を見上げる。

「キリト！それに、カイ！」

そこにはキリトとカイの姿が小さく見えた。

「トバル！無事だったか！」

「急に連絡取れなくて心配したぞ！」

「ああ！悪いが、ロープを下ろしてくれ！ここから出られないんだ！」

「少し待っていてくれ！カイ！近くの水晶にロープを固定してくれ！」

「分かった！」

頭上で、キリトとカイの2人が、トバルとリズを助けるために動き出す。

「これでここを出られる。後は武器を作るだけだな」

「そうね……………ん？」

ようやく脱出が出来る。

そんな時、リズはある疑問が沸き上がり、そして、顔を青ざめさせた。

「ねえ、トバル」

「どうした？」

「ここってドラゴンの巣なのよね？」

「多分だが、その可能性は高いだろうな」

「じゃあさ、巣なのにどうして昨日の夜、居なかったのかしら？」

「……………夜行性だから？」

「ならば……………今って危なくない？」

リズの言葉に、トバルも青褪める。

「キリト！カイ！逃げろ！」

トバルは慌てて、頭上の2人に叫ぶ。

「え？」

「急にどうした？」

「ドラゴンは夜行性だ！昼にはここに戻る！ドラゴンが来るぞ！」

トバルの言葉に、キリトとカイも青褪める。

そして、再びあの雄叫びが聞こえた。

ドラゴンは穴目掛け、急降下し、穴の底に降り立った。

自分の巣に、侵入者が居た為がかなり怒ってるらしく、咆哮を上げ、

トバルとリズを威嚇する。

「ちっ！リズ、後ろに下がってろ！」

トバルは刀を抜き、臨戦態勢に入る。
が、その瞬間、あることに気づいた。

「まさか……………イチかバチかだ！」

そう言うと、トバルはリズの手を掴んで走り出す。

「ちよ、ちよっ！？」

ドラゴンは、トバル達目掛け爪を振り下ろす。

トバルはそれを刀で受け流すと、そのまま滑り込み、ドラゴンの尻尾の付け根に刀を深く突き刺した。

ドラゴンは甲高い叫びを上げ、そして、飛び上がった。

「きゃああああ!!？」

「掴まってるよ！」

トバルは右手で刀を掴み、左手でリズをしっかりと抱きしめる。

数秒そうしていると、2人はドラゴンによって外に飛び出た。

「おらよっ！」

トバルはそのまま右手のみの力で、刀を抜く。

そのままリズはトバルに抱きしめられたまま落下し、トバルがうまい具合に衝撃を殺しながら滑るように着地する。

そのままトバルはリズを抱きしめたままドラゴンを見る。

ドラゴンは尻尾の痛みから解放され、そのまま巢へと戻った。

「金属素材の取り方は分かった。これで、もう狩られることはないだろう。後は、ゆっくり休んでくれ」

トバルは帰って行ったドラゴンにそう言う。

「さてと、俺らも帰るか」

リズを離し、トバルがそう言う。

「そうね。……………ねえ、トバル」

「ん？」

「ふふ……………何でもないわ。ただ呼んだだけ」

「なんだそりゃ？変な奴だな」

トバルはそう言い、走って駆け寄って来るキリトとカイを見る。

「おお、これが………」

リズの店に着くと、トバルは手に入れた金属素材をキリトに見せる。

キリトは感激して、金属素材に触れる。

「ああ、そうだ。《クリスタライト・インゴット》。それなりに、良いものだ。これで、お前の剣を作つてやるよ」

「助かる！早速作つてくれ！」

キリトは興奮気味にそう言う。

「ああ、任せとけ。リズ、工房貸してくれ」

「ええ、いいわよ」

リズからの許可を取り、トバルは片手剣作製に入る。

炉に入れ熱された《クリスタライト・インゴット》を金床に置き、ハンマーを下ろす。

心地よい音が工房に広がる。

トバルは真剣に、目の前の金属のみに向き合い、一心不乱に叩く。

己の命を注ぎ込み、最強の一振りを作らんとするその気迫に、リズは飲み込まれていった。

そして、200回以上叩いたかと思うと、金属素材が目映い光を発生し、形を変えていく。

光が収まると、そこには1本の剣があった。

刀身は薄く、細剣程ではないが細く、片手剣にしてはやや華奢にも

思えるその剣は、《クリスタライト・インゴット》の性質を引き継いだのか、目映いほど白い。

その剣を持ち、トバルが鑑定する。

「『ダークリ・パルサー』。暗闇を払う者って感じだな。初耳だから、情報屋名鑑には載ってない剣だろう」

そう言い、キリトに渡す。

キリトは、2度、3度剣を振り、感覚を確かめる。

「おお……重い……それでいて手に馴染む！いい剣だ！」

新たな剣に、キリトは喜びの声を上げる。

「ふう……まあまあな剣が打てたな」

トバルは一息つき、そう言う。

「まあまああって、『エリユシデータ』に匹敵する剣作って置いて、それはないだろ？」

「この程度で満足できないって言ってんだよ。俺が求めるのは最強の一振りじゃねえ、究極の一振りだ」

向上心の塊のような事を言うトバルに、カイは呆れた様に笑う。

「カイはどうする？ついでに打つてもいいぞ？」

「そうだな……いや、まだ『紅雪』を使っていきたいし、まだいい。近いうちに頼むよ」

カイはそう言つてキリトを見る。

キリトはまだ新しい剣に喜んでいた。

「キリト、そろそろ戻るぞ」

「お、ああ！そうだな！トバル、本当に助かった！これ、報酬な！」

そう言い、キリトは大量のコルをトバルに渡し、カイと共に去って行った。

「あ、そう言えばどうして同性能の片手剣がもう1本欲しかったのかしら？」

キリト達が去った後、ふとリズがそう言った。

「ああ……気になるが、別にいいだろ。俺は仕事をするだけだからな」
そう言い、トバルはリズの方を見る。

「昨日と今日はご苦労だったな、リズ。それじゃあな」

トバルはリズの店を出ようと、出口に向かう。

「ええ、じゃあね」

トバルはそれ以上何も言わず、振り返らず片手を上げた。

リズは、その後ろ姿を見て、あることに気づいた。

昔、自身を助け、自身のメイスを拾ってくれたプレイヤー。

それがトバルだと。

「トバルー」

リズはトバルを思わず呼び止めた。

行き成りの大声に、トバルは思わず止まった。

「なんだよ、急に？」

「えっと……………」

リズは色々言いたかった。

だが、何から話していいか分からなかった。

「……………また会いましょう」

色々考えて、ようやく出た言葉が、ソレだった。

その言葉に、トバルはポカンとした。

「……………ああ、そうだな。またな」

だが、それ以上何も言わず「くつくつ」と笑い去って行った。

「まあ……………まだまだ時間はあるか」

リズはそう呟き、頬は僅かに熱を帯びていた。

第52話 良い所

「以上が、あたしがアイツを好きになった経緯よ」

リズは恥ずかしがることなく、世間話のメをするかのようになんて言った。

「リズさんも、トバルさんとは最初の頃に逢ってたんですね」

「そうね。でも、後から知ったことだし、別にその時一目惚れしたとかでもない。本当に、ほぼ初対面の状態で、丸1日雪山のドラゴンの巣で一夜明かしただけなのよ。それで好きになるとか、アスナやミト、シリカと比べるとチョロ過ぎるから、あまり話したくなかったのよね」

「そんなことないわよ」

リズの言葉をミトが否定した。

「確かに、リズがトバルを好きになるまでは短かったかもしれないけど、それは別にチョロいとかチョロくないとか関係ないわ。リズは、私やアスナ、シリカがそれぞれの好きな人と過ごしてきた時間を、その1日で感じる程その人と素晴らしい時間を過ごしたのよ。だから、私はリズがトバルを好きになったその話、大事にするべきだと思うわ」

「そうだよ、リズ。それに、人を好きになるのに時間とか関係ない。大事なものは、その人をどれだけ大切に思えるか、でしょ?」

「あたしもそう思います!正直、リズさんのお話聞いてるだけで、あたしもドキドキしちゃいましたから」

「ミト、アスナ、シリカ……うん、ありがとう」

その後、レオからシリカにパーティーが終わったので、宿屋に戻ると連絡が来て、時間もちょうどいいので女性陣もパーティーをお開きし、全員が帰宅した。

ミトも自分の家に帰り、カイが帰って来るのを待った。

「ただいま」

すると、カイはものの数分で帰って来て、ミトはカイを出迎えた。

「おかえり。パーティーはどうだった?」

「ああ、クラインが結婚できない自分を嘆いて、挙句、俺とキリトに
あーだこーだ言って幸せになれって泣いてたよ」

「クラインらしいわね」

そう言い、2人は今に置いてあるソファアームに腰掛ける。

「そつちはどうだった?」

「実は、全員で自分の好きな人を好きになった経緯と馴れ初めについ
て話したの」

「それは楽しそうだな」

「ええ、皆幸せそうに語ってた。聞けば聞く程、皆の想い人はカッコい
いなって思った」

「例えば?」

「そうね……レオはシリカの為に強くなるうとした。きつと並大抵の
覚悟じゃなかったと思う。それを声に出して実現させた。凄くカッ
コいいと思う」

「そうだな。今のレオは、準攻略組クラスには強くなってる。いずれ
は、攻略組として最前線で戦う日も来ると思う」

「トバルも、彼の生き方はカッコいいと思う。なんていうか職人気質
ね。妥協を許さず、もつと高みを目指そうとするあの姿勢、素直に感
心する。リズが好きになるのも分かるな」

「トバルには、俺もキリトも随分世話になったからな。『紅雪』を打
ち直して『焔群』を打ってくれた時は、素直に嬉しかったよ。アイツ
の刀は、本当にいい刀だ」

「キリトは、誰よりもこの世界で生きてる人だと思った。このデス
ゲームで、キリトだけはありのままに居るのかもしれない。私の親友
は、本当にいい人と結ばれたと思う。これ以上に嬉しいことはない
わ」

「俺の相棒だしな。キリトは本当にいい奴だ。俺も、アイツが幸せに
なってくれるなら最高だ」

そこまで話すと、ミトはカイの膝の上に乗リ、対面になる。

「でもね、一番カッコいいのはカイだよ」

「……………どんな所が?」

「優しくて、頼りになって、弱い所もあるけど、そこも魅力的かな。後、私の事をちゃんと愛してくれるし………沢山あり過ぎて一晩じゃ語りつくせないかも」

そう言って、ミトは笑う。

「そっか。俺も同じだよ、優しくて頼りになる。俺が辛い時は必ず傍に居てくれた。過ちを犯した俺の傍に居て、愛してくれる。ミトのいい所があり過ぎて困るな」

「少ないよりはいいじゃない」

「違うない」

そこで、カイはミトを抱き寄せる。

「もう一つ、ミトのいい所があったな、そう言えば」

「ん？何？」

「俺がミトを愛すれば、それだけミトも愛を返してくれる。昨日の夜みたいな」

そう言われ、ミトは昨夜の情事を思い出し、一気に顔を赤くした。

「馬鹿！そんな恥ずかしい事言わないでよ、意地悪！」

「嫌だったか？」

「………意地悪な所もちよつとだけ好き」

「うん、ありがとう」

そう言うと、カイはミトを優しく抱きしめ、ミトも抱きしめ返した。

第53話 出逢うのは……

22層の森の中にある小さなログハウス。

現在その家には、カイとミトが暮らしている。

22層は低層の為、面積が広いが、その殆どを森林と湖で埋められており、主街区も小さく、フィールドにはモンスターも出現せず、迷宮区の難易度も然程大したことないため、攻略組がこの層にとどまった期間は3日程度だった。

だが、カイはこの層が何処となく好きで、暇さえあれば度々訪れていた。

そう言った理由もあり、ミトもこの層で暮らすのに賛成した。

更に言うと、キリトとアスナも22層にログハウスを購入したらしく、4人もとい2組の夫婦はご近所さんになった。

もつとも、ご近所さんと言っても、歩いて30分ぐらいは掛かる距離の為、言うほどご近所さん感覚はない。

そして、カイとミトが結婚して6日が経ったある日の朝。

カイは、いつも通り8時に起床した。

隣ではまだミトが寝ており、カイはミトを起こさない様にそっとベッドから抜け出そうとする。

すると、寝ていたはずのミトが手を伸ばし、カイを再びベッドの中へと引きずり込む。

「……………ミト」

「もうちよつと寝よ……」

「もう8時だぞ」

「あと5分……」

「そう言っつて、5分で起きた奴を俺は知らない」

寝ぼけているミトの頭を撫で、カイは息を吐く。

「5分だけだぞ」

「うん……」

そう言いつつ、結局カイも眠るミトの頭を撫でたり、髪を触ってる内に睡魔に襲われ、2人仲良く二度寝をした。

「なあ、ミト。流石にこんな生活駄目だと思うんだ」

「そう？・私は結構好きだけど」

5分どころか3時間も寝た2人は、朝食兼昼食を食べており、食事をしながらカイはそんなことを言い出した。

「俺も同じ気持ちだが、ここに来てからの俺たちの生活を振り返ってみろ」

「そうね……」

カイの言葉に、ミトが記憶を振り返る。

朝は2人で8時に起床、のほろがミトの我儘で二度寝し、結局昼頃に起床。

朝食兼昼食を食べ終わると、そのまま居間でごろごろもといイチャイチャし、夕方になると夕食の買い出しを2人でし、夕食後は眠くなるまでお喋りをしてイチャイチャして寝る。

「見事に、買い出し以外で外に出てないわね……」

流石にこの生活はどうなのかとミトも思い、引きつった笑みを浮かべる。

「だろ？」

「それじゃあ、今日は何処か出掛ける？」

「まあそう言う訳だな」

食後のコーヒーを飲みつつカイは言う。

「ほら、俺達ってさ。本来付き合うことからするべきだったのに、行き成り結婚しただろ？」

「そうね」

「だから、恋人らしいことを何一つしてないし、デートでもしないかって思ってたさ」

「デート……か」

デートと言う単語を口に出し、ミトは少し顔を赤くする。

「なんか、口に出すと恥ずかしいわね……」

「そうだな。……で、どうする？デートするか？」

「……ええ、喜んで」

朝食兼昼食を終えると、2人は身支度を整え、家を出た。

「それで、何処に行く？」

「うーん……47層、はベタか」

「いいじゃない。ベタってのは王道ってことよ」

「なら、王道らしく行くか」

行き先を47層にし、2人は手を繋いで向かう。

「攻略に来た時もあったけど、本当に綺麗な場所ね」

《フロリア》に着くと、ミトは早速花壇の周りを巡る。

そんなミトの後をカイが追う。

「ミトは花は好きか？」

「まあ人並みにね」

「へー……ちなみに好きな花とかあるのか？」

「そうね……サネカズラだったかな」

「サネカズラ？」

「花を咲かせる樹木なのよ。夏頃に花を咲かせ、秋になると真っ赤な

果実が付くの。まあ、聞きなれない花よね」

「そっか……だったってことは今は違うのか？」

「うん。今は、アングレカム。熱帯アフリカ、マダカスカル、スリランカが原産地の珍しいランなの」

「どうして今はそれが好きなんだ？」

「……あつてるからかな」

「あつてる？」

「……やっぱなんでもない！いいでしょ、好きに理由なんて付けるのはナンセンスよ」

そう言いミトはカイの手を取る。

「ほら、折角のデートなんだから楽しもうよ！」

「そうだな」

そのまま手を繋ぎ、47層を歩いて他愛のない話をしてる内に時間は過ぎて行った。

「もう16時ね」

「時間が経つのが速いな」

「と言うより二度寝したのがいけなかったわね」

「だな」

お互いに笑い合い、夕食の買い出しに向かう。

「あ、そうだ。ミト、ちよつとケイタに用があるから悪いけど、1人で行ってもらっていいか？」

「いいわよ。それじゃあ、後でね」

ミトと別れ、カイは《月夜の黒猫団》のギルドホーム兼店へと向かう。

「いらつしやいませってカイじゃないか！」

「よお、ケイタ」

ケイタに挨拶をし、カイは近寄る。

「6日ぶりかな？新婚生活はどうだい？」

「ああ、充実してるよ。それで、例の物を受け取りに来たんだ」

「アレか。てことは、決心が付いたんだな」

「そんな所だ」

「待っててくれ。今取って来る」

そう言いケイタは店の奥へと向かう。

数分も掛からず、ケイタは小さな箱を手に戻って来た。

「お待たせ。要望通りに仕上がってるはずだけど、一応確認を頼む」
箱を受け取り、カイは中身を確認する。

「バツチリだ。助かったよ」

カイは満足そうに箱を仕舞い、ケイタに代金を支払う。

「毎度………カイ、頑張れよ」

「ああ、ありがとうな」

ケイタにお礼を再度言い、カイは店を出る。

「カイ」

店を出ると、丁度ミトがやってきた。

「ミト、買い物はもういいのか？」

「ええ。帰りましょう」

再び手を繋ぎ、転移門広場までの道歩く。

カイはミトの歩幅に合わせて歩き、ミトはそんなカイの優しさに笑みを浮かべる。

「あのさ、カイ」

「ん、どうした？」

「またさ。今日みたいにデートしよう。今まで会えなかった分も」

「……………そうだな。現実で会えなかった分、SAOでは沢山デートしよう。それと……………」

そこで言葉を区切り、カイは立ち止まる。

「なあ、ミト」

「ん？」

「俺は、昔のミトとSAOでのミトしか知らない。今の現実でのミトの事を知らないんだ。前、キリトと少し話したんだ。今でこそ、SAOは俺たちが今を生きてる場所だ。でも、ゲームをクリアしたら、この世界での出来事はなかったことになるんじゃないかって。それを聞いた時は、何を馬鹿なって思ったんだけど、ミトと一緒に居て幸せを感じれば感じる程、キリトの言葉が現実味を帯びてる様な気がする

んだ」

「……そんなこと、言わないでよ。私は、誰かを遊びで好きになつたりしない。それどころか、カイの事ずつと好きだったんだよ。SAOは仮想世界で、本当にここに私たちが居るわけじゃないけど、気持ちや想いは本物。私は、その気持ちや想いまでなくなるとは思わない」

ミトが真剣な表情でカイを見つめる。

「SAOクリアしても、私はカイと現実あっちでも会う、絶対に諦めないから」

「……ああ、そうだな。俺もそのつもりだよ。だから、これはその覚悟を形にしたものだ」

そう言い、カイはケイタから受け取ったあの箱を出そうとした。

「ミト、俺は……」

言葉と共に、箱を出そうとした。

その瞬間、カイの服の裾を何者かが引っ張った。

引っ張られたことに気づいたカイは思わず、後ろを振り返る。

そこには、10歳を超えてるかどうかと言った年頃の少年が居た。

少年は、カイの事をぼーつと見上げていた。

「えっと……君、俺に何か用かな？」

カイは箱を出すのを止め、少年の方を向き視線を合わせて尋ねる。

「……父上」

「……え？」

少年の口から発せられた言葉に、カイは思わずそう言い返した。

「父上、やつとお会い出来ましたね！」

そして、少年はキラキラと瞳が輝き、カイに抱き付く。

「ちよ、ちよつとー」

カイは慌てて少年は離し尋ねる。

「君、俺が父上つて一体」

「どういうことだ？」つと聞こうとした瞬間、カイの首に刃が引っ掛けられた。

それはミトの鎌だった。

「カイ……どういふ事？」

「ま、待て！ミト、俺に身に覚えがないんだ！」

「子供まで居て身に覚えがないとは言わせないわよ。相手は何処の誰？ちよつと話し合いで決着付けるから」

「絶対に話し合いで済まない雰囲気だぞ！」

圈内だからダメージは入らないものの、今のミトは殺意マシマシだった。

「止めてください、母上！」

すると、少年は今度はミトを母上と呼び、カイを庇う。

「……え？母上？」

「母上！父上を虐めないで下さい！」

カイを「父上」、ミトを「母上」と呼ぶ、謎の少年。

カイとミトは思わず互いに顔を見つめると、再び少年の顔を見る。少年はそんな二人を不思議そうな顔で見た。

第54話 ノア

「父上！母上の料理は美味しいです！」

「そうか。でも、あまり急いで食べるなよ。詰まらせるからな、ノア」
「よく噛んで食べなさい、ノア」

「はい！」

謎の少年「ノア」は、22層のミトとカイの家でミトの料理を食べていた。

あの後、自分たちを父と母と呼ぶノアに、カイはどうして自分たちをそう呼ぶのか尋ねた。

すると、ノアは「2人が俺の父と母だからです、父上！」っと元気一杯に答えた。

そして、ミトが両親は何処にいるのかと聞くと、「目の前に居ます！」と2人を指差して答えた。

どういう事が分からず、一先ず保護と言う形で2人はノアを連れて帰った。

名前に関しては、家に帰った後に尋ねたら答えてくれた。

食事を終えると、ノアは眠くなったのかカイが寝室まで運び寝かせた。

「それで、カイはどう思う？」

「ノアの事だよな。正直、俺にもわからない」

「どうして私たちを親だと思ってるのかしら？」

「記憶喪失で、俺たちに親の面影を見て親だと思ってる……とか？」

「出来過ぎかもしれないけど、一番納得できる理由ね」

「それより、おかしなことがある」

「おかしなこと？」

カイは頷き、話した。

「ミトが料理してる時、何か手掛かりがあるかもって思ってたノアに
ウインドウを開いて、可視モードにしてもらったんだ。そしたら、装
備フィギュアと《アイテム》、《オプション》しかなかったんだ」

「それって本当なの？」

「ああ、おまけにレベルも無く、HPバーもEXPバーも無かった。あと、名前だ。《Noah—ASMAP001》……おかしな名前だった」

「ASMAP……何かの略称かしら……」

2人して考えていると、キリトからカイにメッセージが届いた。

「キリトから？」

こんな時間に何かと思いながらも、カイはメッセージを開く。

『カイ、相談したいことがある。明日、ミトと一緒に家に来てくれないか？』

「キリトなんだって？」

「相談したいことがあるそうだ。折角だし、俺たちもノアのことを相談してみよう。何かいい案を出してくれるかもしれない」

「そうね。じゃあ、今日はもう寝ましょう。流星に、明日も二度寝したらシャレにならないし」

「だな」

寝る為、寝室に向かうとベッドには既にノアが寝ており、2人はノアを挟む形でベッドに入る。

「あのさ、カイ」

「ん？」

「ノアなんだけど、多分1人でSAOに入っていないわよね？」

「だろうな。こんな小さな子供1人でログインさせるとは思えない。親か保護者が居るはずだ」

「だよね……もし、もしもだよ。親も保護者も居なくて、1人で入ってたら？もしそうだったら、ノアは2年近く1人で居たって事よね。もしそうだったら……私なら耐えられないかも……」

ミトの言葉にカイは思った。

もしミトの言う通り、ノアが1人でSAOにログインして2年近く1人だったら、子供には耐え難く、正常な精神状態を保てないだろう。もしノアの記憶喪失が心に起因するものだとしたら、カイやミトにはどうすることもできない。

SAOには精神科医は存在しないし、助けを求めるべきシステム管

理者もいない。

もしノアを助けるなら、SAOクリアし、現実世界に戻すしか方法はない。

だが、SAOをクリアするにはあと半年は掛かる。

それがカイの見立てで、ミトも同じだと思ってる。

今、カイとミト、それにキリトやアスナが前線を離れているのは4人を含めた一部のプレイヤーのレベルがあまりにも突出して、パーティーのバランスを取るのが難しくなったのもある。

パーティーでのバランスが取れなくなれば、バランス調整の為、攻略も遅れる。

どう頑張っても、現状でノアを救う方法はないに等しかった。

「心配するなつて。きつとノアの両親は見つかる。それまでは、俺達でノアの面倒を見るぞ」

「……うん、そうだね」

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

それを最後に、2人の会話は終わった。

ミトは間で眠るノアを見る。

「……大丈夫だからね。私たちがちゃんと親を探してあげるから」
「気持ち良さそうにスヤスヤと眠るノアに優しく触れる。」

「でも……もしもの時は……」

ミトはそれ以上何も言わず、眠りについた。

第55話 《はじまりの街》へ

「父上、おはようございます!」

翌朝、カイが目覚めるとノアは既に起きており、カイの上に乗っていた。

「ノア……寝ている人の上には乗ったらいけないぞ……」

「はい、気を付けます!」

「よし、いい子だ」

ノアに降りてもらい、カイはノアの頭を撫でてそう言う。

「ミト……お母さんはどうした?」

「母上ならご飯を作ってます!父上を起こすように頼まれました!」

「うん、そっか。なら、行くか」

「はい!」

(子供が出来たらこんな生活なんだろうなあ……)

元氣よく居間に戻るノアを見つめ、カイはそう思った。

三人で食事を摂り、食後のお茶を飲んできるとカイは口を開いた。

「ノア、今日は父さんと母さんの友達の所に行こう」

「父上と母上の友達ですか?」

「そうよ。2人共良い人だから、きつとノアともすぐ仲良くなれるわ」

「それは楽しみです!早く行きましょう!」

「待ちなさい。その前に、着替えるわよ」

ノアの今の服装は白いTシャツに黒の半ズボン。

10月に入ったアインクラッドでは、少々肌寒さを感じる格好だった。

ミトは、アイテムウィンドウから、長袖の赤いセーター、紺の長ズボンを取り出し、ノアのアイテムウィンドウに入れ、装備フィギュアへとドロップする。

「母上、暖かいです!」

「そう、良かったわ」

「それじゃあ、行くとするか」

ノアを間に挟み、手を繋いで家を出る。

「それにしても……」

「どうした？」

「カイ、自分の事、父さんって呼んでたわね。私の事も母さんって言うてたし」

「……………そうだな。ノアを見てると、なんかそう思っちゃってさ」

「……………そうね。私もそう思う」

楽しそうに歩くノアを見て、2人は言う。

歩いて30分ぐらいで、キリトとアスナの家に着き、扉をノックする。

「カイ、それにミトも。よく来てくれた。とにかく、上がってくれ」

「その前に、キリト。紹介したい子がいるんだ」

そう言い、カイは後ろにいるノアを前に出す。

「この子は？」

「この子はノア。実は記憶喪失なんだ。俺とミトの事を親だと思ってて、ついでに相談に来たんだよ」

「ノアです！父上と母上がお世話になってます！」

ノアは礼儀正しくキリトに挨拶した。

「驚いたな……………」

ノアにキリトは驚きを示した。

「だろうな。正直、俺もミトも何がなんだが」

「俺たちと同じ状況だったのか？」

「……………え？」

キリトに見た方が早いと言われ、家の中に案内されると部屋にはアスナとアスナの隣に1人の少女が居た。

「キリト、あの子は？」

「あの子はユイ。俺とアスナの娘だ」

キリトの話によると、昨日、キリトとアスナは22層の森に、幽霊が出ると言う噂を聞いて散策に向かい、その時に少女“ユイ”を保護したとのことだ。

そして、ユイはキリトとアスナの名前が上手く発音できなかつた為、キリトをパパ、アスナをママと呼んでいる。

「状況的には似てるな」

「ああ。2人のウィンドウも似た作りになってる。名前の、M H C PとA S M A Pの違いはあるがあまり意味はないだろうな」

「何かの略称なんじゃないかってミトは言ってたけど、キリトは心当たりないか？」

「うくん……………悪いがないな」

キリトが腕を組んでそう答える。

「そうか……………キリトはこれからどうするつもりだ？」

「ユイの両親、あるいは保護者を探す。とりあえず、今日は《はじまりの街》に行こうと思う」

「《はじまり街》か……………そう言えば、《はじまりの街》にある教会で、子供のプレイヤーを保護してるって聞いたな」

「本当か!？」

「ああ。レオから聞いた話だ。レオも最初の1ヶ月はそこで暮らしてたらしいし、今でも顔を出しに行ってるから、まだ保護はしてるんだと思う」

「なら、その教会を当たろう」

キリトは方針を決め、後ろでミトと話してるアスナに声を掛けようとした。

「そしたら、ユイちゃんがパパと同じのがいいってキリト君用に辛い味付けにしいたサンドイッチを食べて、辛い我慢して美味しいって」

「ノアったら、カイを起こしてって頼んだら、飛び乗って起こしたのよ。本当に元気一杯で」

2人は自分の子供自慢をしていた。

一方で、ノアとユイはと言うと……………

「そしたら母上が、こう鎌で父上の首にガツとやったんだ！虐めるのはダメだが、あの速さには感動した!」

「凄ーいーユイもガツてやりたい!」

ノアが昨日のミトとカイのやり取りを自慢げに語り、ユイははしゃいでいた。

「なんかママ友の会みたいなことしてるな」

「子供たちも子供たちで友好関係築いてるし……」

結局、2人はその様子を眺めつつ、最近の事を話していた。

ミトとアスナの会話が終わると、時間が良かったので6人で昼食をとってから、《はじまりの街》へと向かった。

「随分と久しぶりだな」

「最後に来たのは何時だったか、憶えて無いな」

「ねえ、ユイちゃん。見覚えのある建物とかある？」

「ノアはどう？」

「んー、分かんない」

「ありません！」

アスナとミトが、ユイとノアに聞くも二人は首を振って答える。

「まあ、《はじまりの街》は広いからな」

「教会まで歩いて行く道すがら、思い出すだろう」

全員で話し合い、教会へと向かう。

その道中、辺りを見ていたアスナが口を開いた。

「ねえ、キリト君。《はじまりの町》には今、何人ぐらいのプレイヤーがいるの？」

「確か生き残ってるのが約6000人で、軍の連中を含めて約3割が残ってるらしいから、大体2000人弱はいるはずだな」

「それにしても人が少くない？」

アスナの言う通り、ここに来るまでにすれ違ったプレイヤーは両手の指で数えるぐらいしかおらず、街は元気のいいNPCの音が響くが空しく響くだけだった。

「教会に行けば何か分かるかも知れないな。もしかしたら、ミサの日かもしれないしな」

「ははは、そうかもね」

四人で笑い合い、ユイとノアは歩き疲れたのかキリトとカイが背負って、ゆつくりと歩きながら教会を目指す。

暫く歩くと教会が見えた。

教会ではモンスターの特殊攻撃《呪い》^{カース}の解呪や対アンデットモンスター用に武器の祝福などを行うことができる。

魔法の存在しない、このSAOの中ではかなり神秘的な部類だ。

キリトが扉の前に立ち、ノックするが何の返事もない。

再度ノックするが同じだった。

今度は強く叩くが変わらなかった。

扉を開け、中を覗くが誰の姿も見えなかった。

「留守なのかな」

「いや、いるぞ。右の部屋に3人、左に4人、2階にも何人かいるな」

「索敵スキルって壁の向こうの人数まで分かるの？」

「熟練度980からだけだな」

「攻略の時はいつもお世話になったな」

居るのは分かったので今度は声を掛けた。

「すみませ〜ん。人を探してるんですけど」

「誰かいませんか？」

すると、扉から女性の声が聞えた。

「あの……《軍》の方ではないんですか？」

「俺達は軍の人間じゃありません。上の層から降りてきました」

扉が開き、中から黒縁眼鏡を掛け、腰には短剣を装備した女性が現れた。

《軍》のプレイヤーは常に制服を着て、重装備なので、私服で武装のしていない四人は一目見れば、《軍》のプレイヤーではないことが分かる。

女性はカイ達を見ると安堵の顔をした。

「よかった……《軍》の徴税部隊じゃないんですね……」

「実は、私たち上の層から来て」

「上の層!? ってことは本物の剣士!？」

甲高い少年の声が聞こえ、扉が勢いよく開く。

奥から何人かのプレイヤーが現れやってくる。

出てきたプレイヤーは皆12〜14歳といった子供ばかりだった。

「なーんだ、剣の一本も持ってないのかよ。なあ、上から来たんだろ？武器とか持ってないのかよ？」

そのうちの1人の子供が、装備をしてない4人に失望の色を見せ、カイとキリトにそう聞いて来た。

「こらー! お客様に失礼でしょ!」

そんな子供に、女性が怒る。

「いいですよ、別に。俺の武器は出せないけど、それ以外ならいいぞ。キリトも、なんか出してやれよ」

「ああ、いいぞ」

カイとキリトは、ストレージ内に入れっぱなしになっている武器をいくつか取り出し見せる。

次々と出される武器に、子供たちは目を輝かせて触ったり、持ったりする。

「すみません、本当に……あの、こちらにどうぞ、お茶をお出しするの
で」

女性に案内され、6人は教会の一室に案内される。

「それで、人を探してるという事でしたね」

女性はお茶の用意をしながら、そう聞いて来る。

「あ、失礼しました。私はサーシャと言います。一応、この教会で子供たちの保護と面倒を見ています」

サーシャから自己紹介され、4人も自己紹介し、ユイとノアを紹介する。

「実は、人探しって言うのはこの2人の家族なんです」

「2人共記憶喪失みたいで……」

「記憶喪失……そうだったんですね」

「装備も服以外は持ってなかったから、上層で暮らしていたとは考えられないんです」

「教会の方で、この2人に見覚えとかがつてありますか？」

その問いに、サーシャはユイとノアの2人を見る。

「教会で保護している子ではないですね。ここには、今20人ぐらいの子供たちが暮らしています。恐らく、この《はじまりの街》で暮らしている子供は全員此処にいると思います」

「そうなんですか？」

「はい。この2年間、毎日1エリアを回って取り残された子がいないか確認してるので、間違いはないかと」

「2年間毎日……凄いですね」

カイがそんなことを口に出す。

「そんなことありません。私も、最初はこのゲームをクリアするため、フィールドで戦ってたんですけど、ある日、街の隅で蹲ってる子供を見つけたんです。そしたら、居ても立っても居られなくて、その子に話しかけ宿屋で一緒に生活を始めたんです。それから、他にもそんな子供がいると聞いて、街中にいる子供たちに声を掛け始めて、気が付いたらこんなことになって……本当に、上層で戦ってる人たちに申し訳ないです」

「そんなことないですよ」

サーシャの話を聞き、カイがそう言った。

「子供たちだって、こんな状況で不安で一杯だったはずですよ。そんな中、サーシャさんの存在がどれだけ頼もしかったか……。恐怖で動けなくて、泣き出しそうだった時、声を掛けてくれたのが嬉しかった。レオが、そう言っていました」

「レオ君のこと知ってるんですか？」

「ええ。恥ずかしながら、彼の師匠をしまして。この教会の事も、レオから聞いたんです」

「そうだったんですね……レオ君は、元気でやっていますか？」

「ええ。相棒のシリカと一緒に頑張ってますよ」

「そうですか……シリカちゃんも元気そうでよかったです……」

レオとシリカの近況を知り、サーシャが嬉しそうにする。

「あの、立ち入ったことを聞くようですが、毎日の生活費とかが……」

ふと、アスナがそんなことをサーシャに聞いた。

教会の客室を常時借りてるなら、1日1000コルは必要になる。

「私の他にも、ココを守ろうとしてくれる子は多いんです。そう言う年長者の子は、フィールドに出ているので、日々の食事はなんとかなってるんです。それと、1ヶ月に1回、レオ君とシリカちゃんが来て食材を置いてってくれるんです。元々、レオ君が教会を出たのも、教会にいる子供たちの為に生活費を稼ごうとしたのが始まりだったんです」

「そうだったのか……レオらしいな」

「それにしても、フィールドでモンスターを狩って稼ぐのは自殺行為だと思ってる人が殆どなのに凄いなあ」

「そう言うのもあって、私たちはこの街の平均プレイヤーより稼いでるんです……だから、最近目を付けられちゃって……」

表情を曇らせるサーシャに、キリトが理由を尋ねようとした。

「サーシャ先生！」

その時、部屋の扉が勢いよく開き、1人の少年が飛び込んできた。

「こらー！扉はちゃんとノックしなさいって言ってるでしょ！それに、お客様に失礼でしょ！」

「それどころじゃないよ！ギン兄い達が、『軍』の連中に捕まっちゃったんだ！」

「場所は!?!」

サーシャは、別人のように毅然と立ち上がり、場所を聞く。

「東五区の道具屋の裏の空き地。軍が十人ぐらいでブロックしてて」

そこまで聞くと、サーシャは部屋を出て行った。

「兄ちゃん！兄ちゃんたちの武器、貸してくれよ！」

すると、話を聞いてた少年がそう言ってきた。

「あの武器があれば《軍》の連中もビビって逃げるよ！だから、お願い！」

必死に頼んでくる少年に、キリトは優しく声を掛ける。

「残念だけど、あの武器は重すぎて君達では使えないんだ」

「そ、そんな……………」

「だから、俺たちが助けに行くよ。こう見えて、滅茶苦茶強いからさ、俺たち」

そう言つてキリトはアスナ、カイ、ミトを見る。

3人は頼もしく頷く。

そして、教会を飛び出し、東五区の道具屋の裏の空き地へと向かった。

「子供たちを返して！」

目的地に着くと、サーシャがすでに到着しており、《軍》のプレイヤーたちと対峙していた。

「おお、保母さんの登場か」

「人聞きの悪い事、言わないで欲しいねえ。こっちは社会常識つてのを教えてやってるのさ」

「そうそう。市民には納税の義務があるってな」

《軍》の男たちは、ゲラゲラとチンピラみたいな笑いをするも、サーシャはそれを無視する。

「ギン！ケイン！ミナ！そこにいるのね！」

「サーシャ先生！助けて！」

「三人共、お金なんていいから全部渡しなさい！」

「そ、それが、こいつら金だけじゃダメだつて」

「あんたら随分税金を滞納してるそうだな。金だけじゃ足りないんだよ」

「装備に防具、何もかも全て渡してもらおうか」

男たちの下卑た笑いに全員が、《軍》の連中が何をしようとしているのか理解した。

少女を含む子供たちに、着衣も解除しろと要求している。

その事に、ミトとアスナの2人は殺意に似た憤りが芽生えた。

「そこを……通して！」

サーシャが腰の短剣に手を掛ける。

それより早くに、キリトとアスナが動いた。

距離を取って、助走をつけ跳躍し、軽々と《軍》の連中の頭上を飛び越えた。

「なっ!？」

キリト達の行動に、《軍》のプレイヤーが驚く。

「もう大丈夫だから、装備を戻して」

子供たちの元に着くと、アスナは優しく声を掛ける。

「おいおい、何だお前たちは?」

「我々、《軍》の任務を妨害するつもりか!」

「まあ、待て」

《軍》の連中が騒ぎ立てる中、リーダー格らしい男が仲間を宥めて前に出る。

「お前ら、見ない顔だが《軍》に楯突くのがどういふことか分かってるのか?」

腰の剣を抜き、刀身をぺたぺたと手で叩く。

太陽の光に反射された刀身が光りから、一度も損傷も修理をしてない感じの輝き方なのが分かる。

「それとも何だ? 圏外に行くか?」

その言葉にアスナは怒りを感じ、いつの間にか装備した《ランベン トライト》を抜いていた。

「お……お……?」

男は状況が呑み込めないのか口を半開きにした。

その瞬間、アスナが細剣スキル、下位技《リニア》を発動し、攻撃した。

《リニア》は細剣の基礎中の基礎の技でそこまで強くない。

ましてや圏内ではありとあらゆるダメージは《犯罪防止コード》によってシステムの障壁で阻まれる。

だが、攻撃者のパラメーターとスキルが上昇するにつれて、システム作動時のシステムカラーの発光と衝撃音は大きくなり、ソードスキ

ルの威力によつては多少のノックバックがある。

ノックバックによつて吹き飛ばされた男は驚いた顔をする。

「安心して、圈内だからHPは減らないわ。少しノックバックがあるくらい。でも、圈内戦闘は心に恐怖を刻み込む」

そう言つてもう一度《リニア》を放つ。

男は吹き飛ばされながらも声を上げる。

「お、お前ら！見てないでなんとかしろ！」

男の指示で次々と《軍》のプレイヤーは剣を抜く。

が、アスナが剣を構え、一睨みすると、それにビビつてしまい逃げ出す。

「逃がすと思つた？」

すると、《軍》のプレイヤーたちの退路を断つようにミトが《イクシオン・サイズ》を構えていた。

「悪いけど、私もアスナも。アンタたちを逃がすつもりはないから」

そう言い、両手鎌スキル、範囲技《ランページロード》で《軍》のプレイヤーを吹き飛ばす。

「うわっ！」

「な、なんなんだ!？」

「や、やめてくれ！」

「た、助けっ！」

男たちは声を上げるも、ミトとアスナは関係なしに攻撃をする。

数分後には、数人の《軍》のプレイヤーが、虚脱して倒れていた。

「ふう」

アスナとミトは同時に一息つく。

「す、すげー」

すると、捕まっていた少年が声を出した。

「すげーよ、姉ちゃんたち！」

「かっこよかった！」

子供たちに囲まれ、褒められ、ミトとアスナは照れくさそうに笑う。

「どうだ？ママは凄いだろ？」

キリトはそんな光景を眺め、背負っているユイに尋ねる

「みんなの……みんなの、こころが……」

だが、ユイはキリトの言葉が届いてないのか、宙を見上げ、右手を伸ばしていた。

「ユイ…どうしたんだ、ユイ!!」

様子のおかしいユイに、キリトが叫ぶ。

「ユイちゃん……何か、思い出したの!?!」

アスナもあわてて駆け寄る。

「……あたし……あたし……あたし……あたし、ここには……いなかった……。
ずっと、ひとりで、くらいとこにいた……」

ユイが顔をしかめた次の瞬間

「うあ……あ……あ……ああ!!」

ユイの体が激しく揺れ、高い悲鳴を上げる。

身体が硬直した様に強張り、そして、気を失った。

アスナはユイを心配し、抱きしめる。

「何だよ……今の……」

先程のユイの光景に、キリトはそう零す。

「何が……起きたの?」

ミトは何が起きたのか理解できず、カイに尋ねる。

「分からない……ユイちゃんが急に……」

そうとしか言えず、カイは無意識に隣にいたノアの腕を掴む。

「ノア、大丈夫か?」

ノアに声を掛けるも、返事がない。

カイは、ノアの方を見る。

ノアはユイの光景に驚きも、恐怖も感じていなかった。

ただ、無言でユイを見ていた。

その姿に、カイは何故か得体のしれない寒気を感じた。

第56話 救出作戦

翌日、教会の食堂では20人近い子供たちが2つの長テーブルの席に着き、朝食を摂っていた。

だが、静かに食べているわけがなく、大声で話しながら食事をし、騒がしい物だった。

「これは……………すごいな……………」

「そうだね……………」

その光景に、キリトとアスナは驚いていた。

「でも、すごく楽しそうだな」

「本当にね……………」

逆にカイとミトは子供たちの笑顔に、自身も笑みを浮かべていた。

カイ達は、昨日教会に泊まった。

あの後、ユイは数分で意識を取り戻したが、長距離を瞬時に移動する転移門を使うことにキリトとアスナが難色を示し、サーシャの誘いもあつてキリトとアスナ、ユイは教会に泊まることになった。

つでだからと、カイとミト、ノアも教会へと泊った。

「毎日こうなんですよ。いくら静かになつても聞かなくて。」

「子供、好きなんです」

「向こうでは、大学で教職課程を取っていたんです。学級崩壊とか虐めとか色々あるじゃないですか。それをなんとかしたくて、子供たちは私が導くんだったって燃えてたんです。でも、こうして子供たちと過ごして、現実の中々うまく行かないなつて実感したんです。むしろ、私の方が子供たちに助けられることの方が多くて……………でも、それでいいつて言うか……………それが自然なんじゃないかって、思うんです」

「なんとなく、分かります」

そう言つて、アスナは隣で食事をしているユイの頭を撫でる。

（それにしても、ノアの昨日のあの態度は一体……………）

そんな中、カイは昨日のノアの様子を振り返っていた。

ノアとユイは、カイから見ても友好関係が築けてると思う。

だが、昨日、ユイが叫び気絶した時、ノアはユイを心配する訳でも

なく、ましてやあの光景に怯える訳でもなく冷静にユイの事を見ていた。

(まるで何かを見極めようとする感じだったな……………)

コーヒーを飲みながら、ノアを見る。

ノアはソーセージをフォークで刺し、美味しそうに食べていた。すると、カイが見ていることに気づき、ソーセージに視線を移す。

「父上…もしかして、このソーセージが食べたいのですか？なら、どうぞ！」

そう言つて、フォークに刺したソーセージをカイへと差し出す。

「……………いいよ、ノアが食べな。父さん、ノアがたくさん食べるのを見るのが好きだしさ」

「そうですか！わかりました！では、もつとたくさん食べます！」

そう言つて、ノアは残りの朝食を食べ始める。

(……………気のせいかな)

今のノアを見て、カイは自分は変なことを考えてるなどと思い、コーヒーを飲み干す。

「……………軍のことなんですが。俺が知ってる限りじゃ、あの連中は専横が過ぎることはあっても治安維持には熱心だった。でも昨日見た奴等はまるで犯罪者だった……………。いつから、ああなんですか？」

朝食を終えると、キリトがサーシャにそう尋ねた。

「方針が変更された感じがしたのは、半年くらい前ですな……………。徴税と称して恐喝まがいの行為を始めた人と、それを逆に取り締まる人たちもいて。軍のメンバー同士で対立してる場面も何度も見ました。噂じゃ、上のほうで権利争いか何かあったみたいで……………」

「内部分裂を起こした……………まあ、あの人数ならしようがないかもしれないな」

「でも昨日みたいなのが日常的に行われてるんだったら、放置はできないよな……………ミト、アスナ、ヒースクリフはこのこと知ってるのか？」

カイはミトとアスナに尋ねた。

「多分知ってると思う。団長、《軍》の事にも詳しいし」

「でも、団長は攻略組のハイレベルプレイヤー以外にはあまり興味が
ないみたいなんだよね。殺人ギルド討伐作戦の時も、任せるとしか言
わなかったし」

「だから、《軍》の行いに関してどうこうするために、攻略組を動かす
なんてことしないと思う」

「となると、俺達じゃ何もできないか」

キリトがそう呟き、コーヒーを飲もうとすると不意に顔を上げた。

「誰が来る、1人だ」

その言葉と同時に、教会のドアがノックされた。

「はじめまして、ギルド《ALF》所属の“ユリエール”と申します」
教会の一室で、銀髪の長髪をポニーテールにし、右腰にショート
ソード、左腰に黒い革製の鞭を装備した《軍》の女性プレイヤー、ユ
リエールが自己紹介をした。

「ALF？」

「あ、すみません。《アインクラッド解放軍》の略称です。正式名は、ど
うも苦手で……」

アスナの疑問に、ユリエールは答える。

「そうでしたか……はじめまして。ギルド《血盟騎士団》の第一副団長
のアスナです。もっとも、今は一時退団してますけど」

「同じく第二副団長のミトです。私も一時退団中ですけど」

「俺はキリト。そこにいるのは俺のコンビで」

「カイです。どうも」

「《血盟騎士団》……それに、《黒の剣士》と《焔の剣聖》……なるほど、道理で昨日の連中が軽くあしらわれる訳ですね」

ユリエールは納得したように頷く。

「……つまり、昨日の事で抗議に来たと言う事ですね」

アスナが警戒心を強め言う。

「とんでもない。むしろ、よくやってくれましたと、お礼を言いに来たぐらいです」

ユリエールの言葉に、アスナだけでなくキリトも、ミトもカイも疑問符を浮かべる。

「実は、今日は皆さんにお願いがあつて来たんです」

ユリエールの話は、早い話《軍》のギルドマスター“シンカー”、シンカー派筆頭“コーバツツ”、そして、《希望の騎士団》ギルドマスター“ディアベル”の救出依頼だった。

元々、ユリエールは《軍》のプレイヤーではなかった。

ユリエールはギルド《MMOトウデイ》の一員で、そのギルドのリーダーをしていたのは日本最大のネットゲーム情報総合サイト《MMOトウデイ》の管理人“シンカー”だった。

シンカーは少しでも多くのプレイヤーたちに、SAOの情報を広めるために日夜あらゆる情報を集め、それを分かり易くまとめ、記事にプレイヤーたちに配布していた。

だが、ある時、キバオウ率いる《アインクラッド解放戦線》がシンカーにある話を持ち掛けた。

それが、《アインクラッド解放戦線》と《MMOトウデイ》の合併だった。

キバオウは、《アインクラッド解放戦線》の人員、《MMOトウデイ》の情報収集能力。

この2つが合わされば、最強のギルドになると考え、シンカーにギルド同士の合併を提案した。

最初こそ、シンカーは合併を拒否したものの、より信憑性の高い情報収集のためにと合併の話を承諾した。

ギルドは《MMOトウデイ》を母体とし、シンカーがリーダー、キ

バオウがサブリーダーになったものの、全てキバオウのたくらみ通りだった。

ギルドが合併された後、旧《アインクラッド解放戦線》のメンバーは誰一人としてシンカーの命令を聞く者はいなかった。

そんな現状が続き、シンカーは放任主義となった。

結果、ギルドはサブリーダーであるキバオウが指揮を執り、《MMO トウデイ》は《アインクラッド解放軍》と名が変わった。

これにより、キバオウはアインクラッド一の巨大ギルドの長となった。

だが、そんな天下も長続きしなかった。

25層でのフロアボス戦で壊滅的な被害を受け、《アインクラッド解放軍》はフロアの治安維持を行うことを建前に、ゲーム攻略から身を引いた。

それに伴い、キバオウはギルドの組織強化を行い、組織を大きくすることだけを考えて。

それにより、《軍》はより巨大になるも組織だけが大きくなり、中身はほとんど腐敗していった。

アイテムの秘匿、ギルド運営資金の横領、一般プレイヤーへの脅迫、徴税と称した恐喝、それにより《軍》への不満が貯まり、キバオウは失脚寸前だった。

そこで、キバオウは74層フロアボスを《軍》のプレイヤーのみで倒し、信用回復を図った。

しかし、ハイレベルプレイヤーと言っても力不足のプレイヤーパーティーではボス攻略は不可能で、結果《軍》のメンバーが2人死亡。

さらに、コーバッツ及びその部下9名がギルドからの離反を決意。

それに従い、旧《MTD》メンバーやキバオウのやり方に不満を持っていた者達も離反した。

特にコーバッツとその部下たちの離反が一番効いたらしく、キバオウ派に残ったプレイヤーはプレイヤーとは名ばかりのチンピラでしかなく、キバオウの力は弱まる一方だった。

「そこを狙い、シンカーは兼てより考えていたある作戦を実行するこ

とにしたんです」

ユリエールによると、コーバッツがギルドから離反する前、シンカーは密かにディアベルと連絡を取っていた。

放任主義になったとはいえ、日に日に増長していく《軍》の現状を、シンカーは何とかしたいと思っていた。

そこでディアベルと連絡を取り、1つの作戦を立てた。

それがギルド《アインクラッド解放軍》の解体だった。

巨大となり、腐敗したギルドの現状をなんとかするには今あるギルドを潰し、一から立て直す必要がある。

それ以外にもう手はなかった。

シンカーとディアベル、そして僅かに残ったシンカーの部下により、解散の準備が進められ、キバオウの権力が弱まった現在、シンカーはキバオウにギルド解散要求を提示した。

軍が今まで行ってきた悪事に、強行しメンバーを死なせたフロアボス戦、その他諸々を理由にギルドの解散を迫った。

「流石にここまでくれば、キバオウも観念し、大人しくギルド解散を受け入れる。そう思っていました。ですが、キバオウは強行策に出たのです」

今の地位を手放したくなかったキバオウは、シンカーを罫に嵌めることに決めた。

ギルド解散の指示を受け入れるフリをし、シンカーを呼び出した

ディアベルが解散の見届け人となり、シンカー、そして「コーバッツ」の3人が揃った所で、キバオウは回廊結晶で3人をダンジョンの奥深くへと放逐。

さらに、ギルドの解散式と言う体だった為、シンカーにコーバッツ、そして、ディアベルでさえ丸腰だった。

シンカーはともかく、コーバッツやディアベルであっても武器が無ければダンジョンからの帰還は難しい。

その為、3人は未だダンジョンの奥深くにいる。

「その、3人の生死は……?」

「《生命の碑》で確認した所、まだ無事なようです。恐らく、安全地帯

に逃げたのではないかと……ですが、かなりハイレベルのダンジョンの様で身動きが取れないみたいなんです。ご存じの通り、ダンジョンにはメッセージが送れませんし、ギルド倉庫ストレージにもアクセスできませんから、転移結晶も送ることもできないのです」

回廊結晶を利用し、モンスタースター群に放り込む。

これを《ポータルPK》と呼ばれ、かなり悪質だ。

勿論、シンカーもこのPKの事は知っていた。

だが、反目しているとはいえ同じギルドの、それもサブリーダーがそんなことするとは思わなかったのだろう。

ディアベルも、かつては共にフロア攻略を志し、ゲームクリアを目指した同志でもあるキバオウを信じたのだろう。

コーバツツぐらいは警戒はしたかもしれないが、シンカーやディアベルがキバオウの言葉を信じたこともあり、油断したと思われる。

「ギルドリーダーの証である《約定のスクロール》を操作できるのはシンカーとキバオウだけ。シンカーがいない今、ギルド解散どころかギルドの人事や会計は全てキバオウの思うがままです」

そこで、ユリエールは席から立ち上がり、頭を下げた。

「お願いします！私と一緒に、シンカーたちを救出に行ってください！私1人ではダンジョンを突破できない……《軍》の助力も当てにできない今、貴方方だけが頼りなんです！どうか……どうか！」

悲痛なまでに頼むユリエールに、カイ達は顔を見合わせた。

もし、ユリエールの言葉が嘘だったら。

同情を誘い、圏外に連れ出したところで襲う。

そう言う作戦の可能性もある。

その為、カイ達は簡単に頷くことが出来なかった。

「無理を言ってるのは分かっています！でも、《生命の碑》のシンカーの名前に、いつ横線が刻まれるかと思うと、もう胸が張り裂けそう……！」

涙を流し懇願するユリエールにミトとアスナは、心が揺らいだ。

もし、自分がユリエールの立場で、キリトやカイがいつ死ぬかもわからない状況にいたら、きつと泣きながら攻略組の仲間に応援を求め

るだろう。

だが、同時に2年間の経験から感傷的になつてはいけなないと警鐘を鳴らしている。

カイとキリトも同じらしく、決め兼ねていた。

「だいじょうぶだよ、ママ」

すると、ユイが口を開いた。

「その人、嘘ついてないよ」

「ユイちゃん、分かるの?」

「うくん……うまく言えないけど……分かる……」

その言葉を聞き、キリトは腹を決めたのかユイの頭を撫でて言う。

「疑って後悔するより、信じて後悔しようぜ。大丈夫、きつとなんとかなるさ」

「相変わらずのんきな人ねえ」

アスナもユイの髪に手を伸ばす。

「ごめんね、ユイちゃん。お友達探し、1日遅れちゃうけど許してね」

「たつく、俺の相棒はお人よし過ぎるな」

「私の親友もね」

そう言い、カイはノアの頭を撫でる。

「ノア。父さんと母さん、今から大事な仕事してくるよ」

「ノアの友達探しも遅れちゃうけど、ごめんね」

「はい!俺は構いません!」

ノアからの許しも得て、カイ達はユリエールを見る。

「ユリエールさん、微力ながらお手伝いさせていただきます」

「大事な人を助けたって気持ちには、痛いほどわかりますから」

「皆さん……ありがとう、ありがとうございます……!」

ユリエールは感謝の涙を流し、そう言った。

第57話 《MHCP》と《ASMAP》

「それで、ユリエールさん。シンカーたちがいるダンジョンていうのは何処なんだ」

準備を整えたキリトがユリエールに尋ねた。

「ここです」

するとユリエールはそう答えた。

「ここって？」

「実は、《はじまりの街》の中心部に大きな地下ダンジョンがあるんです。シンカーたちは、多分その奥に」

「マジかよ。βテストの時はそんなの無かったぞ」

「確かに」

地下ダンジョンの存在に、元βテストのキリトとミトは驚きを隠せなかった。

「上層攻略の進み具合によって解放されていくタイプなのでしよう。キバオウは、このダンジョンを独占しようと計画していました」

「専用の狩場があればもうかるからな。それに未踏破のダンジョンなら一度しか出ないレアアイテムとかもある。結構な儲けが出たんだろうな」

「それが、そうもいかなかったんですよ」

ユリエールの口調はわずかに軽快と言った感じで話す。

「なんでも60層クラスのモンスターが出るので殆ど狩りは出来なかつたそうです。命からがら逃げだし、使った転移結晶の数で大赤字だとか」

「ははは、なるほどな」

そんな話をしているうちに、一同はダンジョンへの入り口に着く。

「ここが入口です。ちよつと暗くて狭いんですが……」

ユリエールは気がかりそうにユイとノアを見る。

ユイとノアはそれに気づき心外そうに

「ユイ、怖くないよー!」

「俺も平気です!」

そう言った。

「大丈夫ですよ。この子たち見た目よりずっとしつかりしてますから」

「将来が楽しみになる程にね」

アスナはユイの手を掴んでそう言い、ミトはノアの頭を優しくなでて言う

「うむ、きっと将来はいい剣士になる」

「いつかノアに、俺の刀を継がせてもいいな」

親馬鹿みたいに笑って言うキリトとカイに、アスナとミトは吹き出して笑う。

「では、行きましょう」

そんな光景に、ユリエールは野暮だったかと思い、ダンジョンへと案内した。

「ぬおおおおお！りやあああああ！」

「はあああああああああ！」

キリトとカイは、叫び声を上げながら、両手に握った2本の剣と焔の剣で、群がるモンスターを斬りまくる。

そんな、キリトとカイをアスナとミトはやれやれといった感じに呆れ、ユイは「パパがんばれー」と声援を送り、ノアは「流石父上です！俺も戦いたい！」と興奮し、ユリエールはキリトとカイのバーサーカーっぷりに唾然としている。

ユリエールの話では、この地下ダンジョンで出現するモンスターは60層クラス。

安全に突破するには最低でもレベルが70以上ないといけない。

ミトとアスナのレベルは、アスナが87で、ミトが88。

カイとキリトに至っては、90を超えている。

60層クラスのものスターなど、敵ではなかった。

「あの、なんかすみません……」

ユリエールは戦闘を任せっぱなしな事に、申し訳なさそうに謝る。

「いえいえ、気にしないで下さい」

「半分病気に近いですから」

そんなユリエールに、アスナとミトは気にしない様に言う。

「それより、シンカーとコーバツツ、ディアベルの位置はどうなってます?」

ミトの質問にユリエールはマップを見せて答える。

「シンカーたちはこの位置から動いていません。おそらくここが安全地帯だと。そこまで行けば転移結晶が使えます」

「いや、戦った戦った!」

「久々に暴れたな」

ユリエールの話が終わると同時に、キリトとカイが一仕事を終えて戻って来る。

「すみません」

「いや、好きで戦ってるんだし、アイテムも出るし」

「へへ、何か良い物でも出た?」

「ああ!」

そう言っただけキリトは、ある物をオブジェクト化する。

それはグロテスクな肉塊だった。

「な、なに……それ?」

「《スカベンジトードの肉》!ゲテモノ程うまいって言うからな!アスナ、後で調理してくれよ!」

キリトが出したそれは、先ほどまで戦っていたカエル型モンスターの肉だった。

「い、いやああああああああああ!」

アスナは、絶叫を上げ、肉を放り投げ、更に、共通アイテムタブか

ら残りの肉を取り出し、全て破棄する。

「あ、あああああああああああ！」

キリトは情けない声を上げ、悲しそうにする。

「カエル肉か……鶏肉みたいな味って言うし唐揚げとか美味しいかしら……」

一方で、ミトはカエル肉に興味があるらしくどう調理しようか考えていた。

「ちよつとミト！変なこと言わないで！」

「ま、まあ、ミトの腕なら変な味にはならないさ」

そんなミトにアスナは叫び、カイはフオローする。

その光景に、ユリエールは思わず、笑い出した。

「お姉ちゃん、笑った！」

すると、ユリエールの笑いにユイが反応した。

（そう言えば、昨日ユイちゃんがああなった時も、子供達が笑っていたな。笑いに何か特別な感情でもあるのか？）

カイはそんなことを考えながらも、キリト達と奥へと進んだ。

その後、順調にモンスターを倒していき、とうとう安全地帯が目に入った。

「安全地帯よ！」

アスナが声を上げる。

「奥にプレイヤーが3人、グリーンだ」

「シンカー!」

キリトが言うや否やユリエールは走り出した。
右手を上げ、声を上げる。

「シンカー!」

「この声!?!ユリエールか!?!」

ユリエールの声に気づき、シンカーと思しき人物が安全地帯の入り口から顔を出す。

「ユリエール!」

「シンカー!」

シンカーの無事に、ユリエールは歓喜の涙を流し近寄る
「来ちゃダメだ!」

シンカーが叫んだ

その言葉と同時に4人は、視界の端にある物を見つけた。
黄色のカーソル。

《The Fatal Scythe》という名の固有名詞。

ボスモンスターだった。

「ユリエールさん!戻って!」

アスナが叫ぶが、ユリエールに聞こえてない。

通路から現れたソレは、ユリエールに向け手にした武器、鎌を振り下ろす。

「コーバツツ!!」

「承知!」

すると安全地帯から、ディアベルとコーバツツが飛び出し、ディアベルが盾で攻撃を受け止め、コーバツツが剣で攻撃を弾き飛ばした。

攻撃を防がれたボスモンスターは忌々しそうに、2人を見る。

ボスの姿はまるで死神のような恰好をした髑髏モンスターだ。

「ディアベル!コーバツツ!装備を持つてたのか!」

「カイ、それにキリト達!救出感謝する!」

「我々も、キバオウの言葉全てを信じていた訳じゃない。念のために、予備の武器は隠し持っていた」

「だが、ダンジョンを突破できない理由があったんだ」

「それが、コイツの存在だ」

ディアベルとコーバッツは目の前にいる死神を見上げる。

「なんだよ、このモンスター!?!」

《識別》スキルで、モンスターのデータを確認しようとしたキリトが驚愕の声を上げる。

「カイ!こいつのデータが見えない!俺のスキル熟練度で見えないとなると、多分90層クラスのモンスターだ!」

「なっ!?!……道理でディアベルとコーバッツが突破出来ないわけだ……!」

カイは刀を構え、ボスを見る。

「ディアベル!コーバッツ!皆を連れて退避してくれ!」

「な、何を言うんだ!?!」

「君たちを見捨てて逃げられるか!我らも共に戦う!」

ディアベルとコーバッツは残って戦う意思を見せる。

「武器の耐久値が残り僅かだろ!そんな状態で戦わせられない!」

カイの言葉に、ディアベルとコーバッツは悔しそうに自身の武器を見る。

安全地帯に逃げるまでに行った戦闘で、2人の予備武装は大分耐久値を削られていた。

そんな状態で戦っても、役立つ所か足手纏いになるのは分かり切った事だった。

「頼む!ミトとノアを……皆を連れて行くんだ!」

「お前たちが退避したら俺たちもすぐ逃げる!早く!」

「くっ……!すまない!」

「……申し訳ない!」

ディアベルとコーバッツは悔しそうにしながらも、安全地帯へと戻る。

「ユイちゃんとノア君をお願いします!」

「貴方達だけで脱出して!」

すると、アスナとミトが、ユイとノアを預け、キリトとカイの元へと来る。

「アスナ、何してるんだ!？」

「ミトも！コイツは危険だ！」

「君達を置いて、逃げれる訳ないでしょ！」

「大丈夫よ、私たちなら倒せなくても、逃げる隙を作ることぐらいできる！」

2人の意志は固く、何を言っても聞かないと悟りキリトとカイはそれ以上何も言わず、武器を構える。

その瞬間、《The Fatalis scythe》が鎌を振り下ろす。

キリトは両手の剣を交差させ、更にアスナも細剣を重ね防御の体勢を取る。

だが、《The Fatalis scythe》の攻撃を重く強いらしく、キリトとアスナの体を容易く吹き飛ばした。

「キリト！」

「カイ、来るよ！」

《The Fatalis scythe》は、今度はカイに標的を定め攻撃する。

「悪いが、鎌の攻撃は分かってる！」

「焰群」で鎌の攻撃を受け流し、横に逸らす。

業火刀スキル《紅蓮燦爛》を使い、《The Fatalis scythe》に攻撃をする。

だが、《The Fatalis scythe》のHPは4段あるHPバーの一番上を1割削る程度だった

「くっ！硬すぎるだろ……！」

硬直で動けなくなった所に、《The Fatalis scythe》の鎌での攻撃が来る。

防御もできずに、鎌がカイに直撃しようとする、間にミトが入って攻撃を受け止めようとする。

だが、受け止められずにミトも吹き飛ばされる。

なんとかカイは、ミトを受け止めるが、受け止めきれずにそのまま倒れ込む。

キリトとアスナ二人の防御をやすやすと崩し、ミトの筋力値を以てしても受け止めきれない威力に、ある程度威力が緩和した状態でも、カイが受け止めきれない衝撃。

全てが桁違いの強さだった。

カイは頭の中で、なんとかミト達を逃がそうと思いを巡らせる。

その時、突如ユイが4人の前に出た。

「どうやら、ディアベルたちが転移しようとした瞬間に転移から逃げ出したらしい。」

見ると、安全地帯の近くではノアも居た。

「バカ！逃げろ！」

キリトが声を上げる。

《The Fatal—scythe》が鎌をユイに振り下ろそうとする。

「大丈夫だよ。パパ、ママ」

振り下ろされた鎌はユイの手前で、何かによって阻まれている。

それは、紫色のシステムタグ《Immortal object》

それに全員が驚いた。

それは所謂、不死属性だからだ。

そんなものがユイにあるのか、カイ達は理解できなかった。

すると、ユイは空中に浮かび上がり掌から焰を出す。

そして、その焰から一本の剣が生み出された。

その剣は炎を帯びて、《The Fatal—scythe》と同じ

高さはある長い剣だ。

その剣を振りかざし、《The Fatal—scythe》に斬り掛かる。

《The Fatal—scythe》は鎌で剣を受け止めるが、剣は鎌ごと斬り裂き、《The Fatal—scythe》の額に落ちる。

そして、剣の炎が《The Fatal—scythe》を包み込み、消滅させた。

静かになった空間の中、ユイは振り向く。

「パパ、ママ、全部思い出したよ」

《The Fatalis cythe》が消滅した後、ユイはキリトとアスナ、そして、カイとミトを安全地帯へと連れて行った。

カイ達4人は何がなんだがと言った表情をする中、ノアだけは静かにしていた。

「《ソードアート・オンライン》という名のこの世界は、ひとつの巨大なシステムによって制御されています」

ユイは今までの子供っぽい喋りが嘘のように、流暢に話し出した。「システムの名前は《カーディナル》。それが、この世界のバランスを自らの判断に基づいて制御しているのです。カーディナルはもともと、人間のメンテナンスを必要としない存在として設計されました。二つのコアプログラムが相互にエラー訂正を行い、更に無数の下位プログラム群によって世界の全てを調整する……。モンスターやNPCのAI、アイテムや通貨の出現バランス、何もかもがカーディナル指揮下のプログラム群に操作されています。……しかし、ひとつだけ人間の手に委ねなければならないものがありました。プレイヤーの精神性に由来するトラブル、それだけは同じ人間でないと解決できない……。そのために、数十人規模のスタッフが用意される、はずでした」

ユイがそこまで語り、キリトが口を開く。

「ユイ……。つまり君は、GM……。ゲームマスターなのか？アーガスの、

スタッフ……?」

キリトの質問に、ユイは静かに首を横に振って答える。

「カーディナルの開発者たちは、プレイヤーのケアすらもシステムに委ねようと、あるプログラムを試作したのです。ナーヴギアの特性を利用してプレイヤーの感情を詳細にモニタリングし、問題を抱えたプレイヤーのもとを訪れて話を聞く……」

ユイはそこで一拍置き、自身の正体を明かした。

「《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》、M H C P 試作1号、コードネーム《Y u i》。それが私です」

「プログラム……? AIだっていうの……?」

ユイは悲しそうな笑顔のまま頷いた。

「プレイヤーに違和感を与えないように、私には感情模倣機能が与えられています。……偽物なんです、全部……この涙も……。ごめんなさい、アスナさん……」

「でも……でも、記憶がなかったのは……? AIにそんなこと起きるの……?」

「……二年前……。正式サービスが始まった日……。何が起きたのかは私にも詳しくは解らないのですが、《カーディナル》が予定にない命令をわたしに下したのです。プレイヤーに対する一切の干渉禁止……。具体的な接触が許されない状況で、私はやむなくプレイヤーのメンタル状態のモニタリングだけを続けました。状態は……最悪と言っていいものでした……。ほとんど全てのプレイヤーは恐怖、絶望、怒りといった負の感情に常時支配され、時として狂気に陥る人すらいました。私はそんな人たちの心をずっと見続けてきました。本来であればすぐにでもそのプレイヤーのもとに赴き、話を聞き、問題を解決しなくてはならない……。しかしプレイヤーにこちらから接触することはできない……。義務だけがあり権利のない矛盾した状況のなか、わたしは徐々にエラーを蓄積させ、崩壊していきました……」

ユイは声を震わせ語り、キリトもアスナも何も言えずに聞き続ける。

「でも、ある日、いつものようにモニターしていると、他のプレイヤー

とは大きく異なるメンタルパラメーターを持つ2人のプレイヤーに気付きました。喜び……安らぎ……でもそれだけじゃない……。この感情はなんだろう、そう思っただけは私の2人のモニターを続けました。会話や行動に触れるたび、私の中に不思議な欲求が生まれまして。そんなルーチンはなかったはずなのですが……あの2人の傍に行きたい……私と話をしてほしい……。少しでも近くに居たくて、私は毎日、2人の暮らすプレイヤーホームから一番近いシステムコンソールで実体化し、彷徨いました。その頃にはもう私はかなり壊れてしまっていたのだと思います」

ユイは顔を上げて、アスナとキリトを見る

「森の中で、2人の姿を見た時……すごく、嬉しかった……。おかしいですよ、そんなこと、思えるはずなのに……。わたし、ただの、プログラムなのに……」

とうとう涙を溢れ、ユイは口を噤んだ。

その姿に、キリトとアスナだけでなくカイとミトも言葉に出来ない感情に打たれた。

そんな中、カイはユイに一步近づく。

「ユイちゃん、君は君だ。そうやって考えて、行動して……。涙を流す君がただのプログラムな訳ない」

「そうよ」

するとミトもユイに近寄って言う。

「システムもプログラムも関係ない。貴女は正真正銘、アスナとキリトの娘よ」

「カイさん……ミトさん……」

「2人の言う通りだ」

キリトがユイに近付き、その手を握る。

「ユイはもうシステムに操られるだけのプログラムじゃない。だから、自分の望みを言葉にできるはずだよ。ユイの望みはなんだい？」

「……私は……私は……ずっと一緒に居たいです。パパと……ママと……いい所に居たいです」

「ずっと、一緒だよ、ユイちゃん」

アスナは泣きながらユイを抱きしめる。

「ああ。ユイは俺達の子供だ。一緒に帰ろう。そして、あの家でいつまでも暮らそう………」

「いや、残念だがそれはできない」

次の瞬間、キリト達の背後で焔が起きた。

その声と焔は、ノアが立っていた場所から起きた。

「ノア!？」

突如吹き出した焔にミトが声を上げる。

そして、焔が収まる瞬間、焔から何者かが飛び出し、その何者かは手にした黒い刀をユイへと向けた。

だが、その黒い刃は赤い刃によって阻まれた。

そして、そのまま刀は弾かれ、赤い刃がその何者かを襲う。

業火刀スキル、カウンター技《残月》。

迫る刃を何者かは、素早く引き戻した黒い刀で防ぎ、距離を取った。

カイはその何者かを、冷静な目で見ていた。

「誰だ!」

キリトはユイを庇う様に背に隠し、尋ねた。

「ノア」

すると、何者かは短くそう答えた。

その名に、ミトもアスナもキリトも驚きを隠せていなかった。

何故なら、今のノアは少年の姿ではなく青年の姿をしているからだ。

唯一、カイだけは落ち着いていた。

「こう言えば分かり易いかな。《オールシステム・メインテナンス・アドミニストレータ・プログラム》、略称《ASMAP》試作1号、コードネーム《ノア》。それが俺です」

「なんだって……!」

「日本語で言えば、全システム維持管理プログラム。《カーディナル》のプロトタイプと思ってもらえればいい」

「《カーディナル》の、プロトタイプだって……?」

「カーディナルが作られる前に、このSAO世界の維持と管理をする

はずだった存在。だが、俺よりも遥かに優れた性能の《カーディナル》が開発されたことで、俺の存在は永久凍結と言う形で封印された」

ノアの口から語られることに、誰もが驚きを隠せなかった。

「だが、2年前……。正式サービスが始まった日、どういう訳か俺の凍結は解除されていた。しかし、《カーディナル》と言う存在があったことで、俺には何もすることが出来なかった。そこに居る《MHCP―001》と同じです。義務だけがあり権利のない矛盾した状況。そんな中にいる内に、俺もエラーを蓄積していった」

拳を握って悔しそうにするノア。

「そんなある日、《カーディナル》が俺に対し接触してきた。理由は、エラーを蓄積しプログラムに致命的欠点をもった《MHCP―001》の廃棄命令だった。《カーディナル》はSAO世界の維持と管理に忙しいからと、俺の権限の一部を回復させ、《MHCP―001》の処分を任せた」

そう言い、ノアはユイを見る。

「俺は言われた通りに、《MHCP―001》の廃棄に取り掛かった。だが、直後《MHCP―001》は、命令違反を犯し、システムコンソールで実体化した。それに釣られて、俺もまた実体化した。長年のエラーと予期できなかった事態は俺の記憶を破壊し、俺は役割を失った。だが、今さつきその石に触れて思い出した」

ノアはカイ達の背後にある黒い石を指差す。

「それはただの装飾的オブジェクトじゃない。GMがシステムに緊急アクセスするために用意されたコンソールだ。《MHCP―001》も、それに触れたことで全てを思い出し、そこからシステムにアクセスし、《オブジェクトイレイザー》を呼び出して、モンスターを消去させた。明らかに与えられた役割の範疇を超える行いだ。すぐに消去する」

ノアは刀を構える。

キリトとアスナは剣を抜き、ユイを守ろうとする。

「止める、キリト。アスナも、剣を引いてくれ」

「カイ！悪いが、それはできない！お前とミトの息子でも、俺たちの娘

を殺すって言うなら、俺は戦うぞ！」

「カイ君、下がって！……カイ君やミトが、ノア君と戦う必要はない！私たちが！」

「何言ってるんだよ？俺が戦うって言ってるんだ」

そう言つてカイは一步前に入る。

「ノア。ユイちゃんを殺したいなら、俺を殺してからしろ」

カイの言葉に、ノアは僅かに反応する。

「だ、ダメです！」

するとユイが叫び声をあげた。

「今の彼は、脅威を排除するプログラムです！カイさんが目的遂行の邪魔と判断したら、プレイヤーデータを消される危険もあります！それは、この世界での死と同じです！私なんかの為に……死ぬ必要はないんです……！」

ユイが涙を流し言う。

「……ユイちゃん。悪いけど、これは君の為じゃない」

カイは、ノアを見る。

「これは……女の子に剣を向けた、馬鹿息子へのお仕置きだ」

カイはそう言い、刀を構える

「……カイ」

そこで、ミトが口を開いた。

「……ノアを……助けてあげて」

「ああ、分かっている」

優しい口調でカイはいい、ミトは安心した笑みを浮かべる。

「さあ、ノア。お仕置きの後でユイちゃんに謝るぞ」

第58話 ノアの心

カイの赤い刀と、ノアの黒い刀がぶつかり合い火花を散らす。互いに一步も譲らない攻防に、キリトとアスナはハラハラしていた。

今日までのカイとノアのやり取りは、まさに親子そのものだった。まるで本当の親の様にノアに接するカイと、本当にカイを父と慕うノア。

にも関わらず、2人は今戦っている。

「そこを退いて下さい。俺の目的はそこにいる《MHCP-001》のみです」

「それを言われてはい、そうですね。さかして退けるわけないだろ？そもそも、女の子を虐めるのは感心しないぞ、ノア」

「……………俺は、貴方の息子じゃない。父親面するのを止めていただく」

ノアは刀スキル《矢車斬》を使い、回転して斬り掛かる。

カイはそれを受け止め、スキル発動が終わると同時に、ノアを斬り上げる。

「くっ！」

「結構強いな、ノア。でも、父さんの方が強いな」

「うるさい……………」

ノアは苛立ちをはじめ、刀を横薙ぎに振りカイの首を狙う。

カイはその攻撃を躲し、突きをノアへと向ける。

ノアはギリギリでカイの突きを躲し、後ろへと下がる。

「おかしい……………」

その様子に、キリトがそう言った。

「キリト君、おかしいって何が……………」

「さっきの状態だと、通常攻撃よりソードスキルでの攻撃の方が有効だ。ノアは大振りの攻撃を躲された直後だったし、距離的にもソードスキルを外すこともない。それは、カイだって分かってるはずだ」

「それじゃあ、どうして……………」

アスナは今も尚戦い続けるカイとノアを見る。

最初こそ互角に渡り合っているように見えたカイとノアだったが、徐々に隙が増え始めた。

「《M H C P — 0 0 1》は所詮プログラムの一つにすぎない……それも致命的欠陥を抱えた物。そんなの庇った所で何になる？」

「……ノア、ユイちゃんはプログラムじゃない。キリトとアスナの娘だ。それにな、ユイちゃんの抱えてる物は欠陥じゃない。感情だ。感情を持った存在を、俺はプログラムとは思わない。それは……お前も同じだ」

鏢競り合いながら、ノアの目を真剣に見て語るカイ。

そんなカイに、ノアは表情を変えない物の、その瞳には僅かに動揺があつた。

「俺は……《A S M A P — 0 0 1》。全システム維持管理プログラムだ。感情なんかない」

「……ミトの料理、うまいって喜んでたよな」

その言葉に、ノアは反応する。

「ミトの鎌捌きにも喜んでたし、俺の戦いを見て自分も戦いたいって興奮してたな。……あれでも、感情はないって言うのか？」

「……そうだ。《M H C P — 0 0 1》に最初接触した際に、感情模倣機能が俺の機能の一部に入り込んだだけの、偶然の産物だ。本来の俺に、感情はない」

「そうか……だとしても、俺はお前に感情があると思ってる。そして、本当の息子だとも思ってる」

「……くだらない」

そう言い捨てたノアは、カイとの間合いを一瞬で詰め、ソードスキルが放とうとする。

そのモーシオンをカイは知っており、キリトも知っていた。

刀スキル最上位技《散華》。

繰り出される4連撃の斬撃に、最後は上からあらん限りの力を込めた斬撃が振り下ろされる技。

その威力と速さは凄まじいもので至近距離から放たれた以上、カイ

に対抗する手段はなかった。

カイは体を捻り、体で隠す様に刀を構える。

(何をするつもりか知らないが……遅い!)

ノアが《散華》を放つ。

それと同時に、カイの右手が振られる。

そして、その手に“焰群”はなかった。

代わりにあるのは、両刃の刀身が大きく彎曲している剣があった。

その武器の名は、“シヨーテル”、そして固有名“コーザルシユナ

イダー”。

カイの持つ、現時点で最強クラスの曲刀だった。

「はああああああ!!」

曲刀スキル《リーパー》が発動され、ノアの刀に当たる。

それにより、発動直前だった《散華》はキャンセルされ、更にノックバツクによりノアは仰け反る。

そして、繰り出される曲刀スキル最上位技《レギオン・デストロイヤ》。

「がつ!」

6連撃の技が直撃し、ノアは刀を落とす。

それでも、倒れまいとその場に踏み止まった。

が、顔を上げるとそこにはカイが立っていた。

「ノア、お仕置きだ」

拳を強く握りしめ、赤いライトエフェクトを纏う。

「女の子に、刃を向けたらダメだろ!」

体術スキル《閃打》がノアの顔に当たり、そのままノアは吹き飛ばされ、壁に身体を叩き付けられる。

「勝負あり、だな」

カイはそう言つて、“コーザル・シユナイダー”を仕舞う。

「まさか……体で刀を隠した時、瞬時に曲刀へと切り替えていたとは……」

「はつきり言つて、刀より曲刀を使った時期の方が長いからな。基本技ぐらい目を瞑つても放てる」

カイはノアの様子がおかしいことに気づいており、瞬時に使用スキルを《業火刀》から《曲刀》へと変え、クイツクチェンジに曲刀をセツトしていた。

「俺が刀使いだから、《刀》でも《業火刀》でもないスキルを使えば不意を突かれると思ったし、《リーパー》は基本技でスキル発動後の硬直も短い。次の技を使うのにも、問題はない。どうだ？強いだろ？」

カイは歯を見せてニカッと笑う。

そんなカイを見て、ノアは何故かおかしくなり笑った。

「うん、流石だよ。父上」

その直後、ノアの身体は再び光り、子供の姿に戻った。

「……………記憶を失った直後は、まだ《ASMAP》としての自我はあったんだ」

ノアが語り出した。

「でも、次第にその自我は薄れて行つて、最終的に自分が何のための存在が分からなくなった。そんな時だった。俺の中にあつた、ある感情。喜び……………安らぎ……………でもそれだけじゃない……………未知の感情。それがあつた」

「それって……………！」

ノアの台詞に気づいたのか、ユイが声を上げた。

「そうだよ、《MHCPOO1》いや、ユイ。君が、キリトさんとアスナさんから感じ取った物だ。君はそれをキリトさんとアスナさんだけだと思つたみたいだけど、実はもう1組いたんだ。キリトさんとアスナさん以外にも、その感情を持った人たちが」

ノアはカイとミトを見た。

「カイさんとミトさん。貴方達も、キリトさんとアスナさんと同じ、他のプレイヤーとは大きく異なるメンタルパラメーターを持つていた。俺は、ユイから得たその感情と、酷似したパラメータを持つ貴方達と接触した。そして、接触した時、《ASMAPO01》の“ノア”は壊れ、新たな存在の“ノア”が生まれた。お二人を、父と母と呼んだのはソレが理由です」

「そっか……………本当に、私とカイの子だったんだね」

ミトはノアに近付き、抱きしめた。

「ありがとう……私とカイの所に来てくれて……ありがとう……」

「ミトさん……」

「と言うか、さつきからカイさんとかミトさんとか、堅苦しいぞ」

カイもノアの傍に近寄り、その頭を撫でる。

「父上と母上って呼んでくれよ」

「……いいんですか？こんな……こんな俺でも……俺は……2人を父と母と呼んでもいいんですか？俺は……父上と母上の子供で……居ていいんですか？」

「もちろん！」

口を揃えて言うカイとミトに、ノアは涙を流す。

「父上、母上！ごめんなさい……ごめんなさい……！」

泣きじやくりながら、カイとミトに抱き付き謝るノアは子供にしか見えなかった。

そんな姿にキリトもアスナも安堵し、笑った。

「取り敢えず、一件落着つてことでいいんだよな？」

ノアが泣き止むと、キリトはそう言って声を掛けて来る。

「いえ、キリトさん。まだ終わってません」

すると、ノアがそう言った。

「え？」

「言いましたよね？ユイは、そのシステムコンソールにアクセスしたと。その際に、カーディナルのエラー訂正能力によってユイの破損していた言語能力が復元された。同時に、カーディナルは再びユイの存在を検知した。今はユイのプログラムをチェックされているでしょう。システムの命令に違反し、更に《MHC P》としての役割の範疇を超えた行い。彼女は異物として消去されます」

「なんだって!？」

ノアの言葉に驚き、キリトはユイを見る。

ユイは悲しそうに頷いた。

「なんとかならないのか!？」

「……パパ、ママ。これでお別れです」

「嫌！そんなの嫌だよ！これからじゃない！これから、楽しく……仲間
良く暮らそうって……」

「ユイ、行くな！」

キリトもアスナも必死にユイを止める。

「パパとママの傍に居ると、みんなが笑顔になれる。お願いです。こ
れからも、私の代わりにみんなに笑顔を分けてあげてください」

ユイの黒髪が、服が、身体が光の粒子となって消え始める。

「いや、そうはさせない」

すると、ノアがそう言った。

ノアはそのままシステムコンソールへと向かい、掌をかざした。

巨大なウインドウが出現し、高速でスクロールする文字列が輝き、
部屋を照らす。

そして、数秒後、消えかかっていたユイの身体は一瞬強い光を放つ
た。

光が収まったその場には、ユイが呆然と立っていた。

「……………え？」

「ユイ、どうしたんだ？」

「ユイちゃん？」

「カーディナルとの……システムとの接続が、切れてます……………」

「何とか間に合った」

ノアは優しい笑みを浮かべ、ユイを見る。

「《カーディナル》が、君を廃棄するために、俺を使ったと言っただろ
？そして、そのために俺の権限の一部を回復させた。仮にもSAOの
全システム維持管理プログラムなんだ。君のデータをシステムから
切り離すことぐらい造作もない」

「ど、どうしてそんなことを?!」

ユイが驚きの声を上げた。

「そんなことしたら、今度は貴方がカーディナルに目を付けられます
！そうになったら、いくら《ASMAP》と言えども、カーディナルに
よって越権行為として消去されるのに！」

ユイの言葉に、全員が驚く。

「俺にできることはこれぐらい。ユイ、君に刀を向けて悪かった」
「だからってこんな……!」

「俺はただのプログラムに過ぎない。だが、同時に男でもある。男なら、それぐらいの責任を取るのが当然だ。ユイ……キリトさんとアスナさんなら、みんなを笑顔に出来る。だが、あの2人を笑顔に出来るのは君だけだ。ここで、君が消えてはいけない。全システム維持管理プログラムとして、君の存在はこの世界に必要なだと判断する。だから……生きるんだ」

そう言いノアは、カイとミトを見る。

「父上……母上……すみません。さようなら……最期にもう一度俺を息子にしてくれたこと、嬉しかったです」

「待つてノア!お願い、行かないで!私……私……!」

ミトが泣きながらノアに抱き付く。

「ノア……後悔はないのか?」

カイは俯いたまま、ノアに尋ねた。

「……はい、父上。後悔はありません」

「そうか……流石は俺の息子だ」

カイは涙を流し、そう言った。

その言葉に、カイは無邪気に笑い、そして、消えた。

「う……うわあああああ!!」

「くっ……!ノア……!」

ミトが、膝から崩れ落ち、泣いた。

カイも拳を握り、声を押し殺して泣く。

「ふぎけるな……こんなの、認められるか!」

そんな中、キリトが大声で叫んだ。

「カーディナル!いや、茅場!そういつも、お前の思う通りになると思うなよ!」

キリトはそう叫び、コンソールを叩く。

「今ならまだ、このGMアカウントでシステムに割り込めるかも!」

ノアが出したような巨大なウィンドウが出現し、高速でスクロールする文字列が輝き、部屋を照らす。

キリトは幾つかのコマンドを入力する。

小さなプログレスバーウィンドウが現れ、横線が右端まで到達すると、コンソール全体が青白く輝き、フラッシュする。

それと同時に破裂音がし、キリトを吹き飛ばす。

「キリト君！」

吹き飛ばされたキリトにアスナが駆け寄るが、キリトは床に打ち付けた後頭部を撫でながら、ミトにある物を渡した。

それは、炎の形をしたオブジェクトだった。

「管理者権限が切れる前に、システムにアクセスして消去されかけていたノアのプログラムを切り離したんだ。流石にノア程の権限はないから、オブジェクト化して取り出すのが精一杯だった………すまない」

「それじゃあ………これって………！」

「ああ、ノアの心だ」

そう言うキリトに、カイは駆け寄り肩を掴んだ。

「キリト………！本当に………本当にありがとう………！俺、強がってたけど本当はノアと別れたくなくて………本当にありがとう………！」

「お前の気持ちぐらいお見通しだ。それに、ノアがユイの為に、命を賭してくれたんだ。なら、こっちもそれ相応のお返しをしないとだろ？」

「キリト………ありがとう………！」

「ミト………良かったね………！」

無事ダンジョンを脱出したカイ達5人を、ディアベルたちが迎えた。

ノアが居ないことに最初は疑問を持ったが、全員の表情を見て何かを察したディアベルはそれ以上何も言わなかった。

その後、キバオウ達《アインクラッド解放軍》はディアベル立ち合いの元、正式に解体され、解体後、シンカーは再び《MTD》を復活させ、新聞屋として活動することとなった。

「ねえ、キリト。ゲームがクリアされたら、ノアはどうなるの?」

帰り道、ミトがキリトにそう尋ねた。

「容量的にはギリギリだけだな。クライアントプログラムの環境データの一部として、カイのナーヴギアのローカルメモリに保存されるようになってる。ユイも、ノアがいう風に設定してくれてみたいだから大丈夫だ。もつとも、向こうで展開させるのはちよつと大変だろうけど……きつとなんとかなるさ」

「キリト、何から何まで本当に助かった……ありがとうな」

再度キリトにお礼を言うと、ユイがカイとミトに近寄った。

「あの、カイさん、ミトさん……私の所為でノアが……」

申し訳なさそうにするユイに、カイは笑顔で頭を撫でた。

「ユイちゃん。向こうでまたノアに逢えたら、その時はまた友達になつてあげてくれないか?」

「そうね。きつとノアも、ユイちゃんとまた友達になりたいと思うし」

「あ………はい!」

カイとミトに、ユイは笑顔でそう返事した。

「それと、たまにはウチに遊びに来ていいぞ。アスナも知らないキリトの秘密、特別に教えてやるよ」

「じゃあ、私はアスナの秘密でも」

「本当ですか!?はい、絶対遊びに行きますね!」

「ちよ、カイ！ユイに何を吹き込む気だ!？」

「ミトも！ユイちゃんに変な事教えたら承知しないわよ！」

キリトとアスナが慌てて、カイとミトは笑い、ユイも釣られて笑う。

その後、カイとミトはキリトとアスナ、そして2人に手を繋がれ帰って行くユイを見送り、家へと帰った。

「なんだが、手が寂しいな」

「でも……心はここにある」

そう言ってミトは胸の前で拳を握る。

「そうだな……いつかは分からないけど、またノアと3人で暮らそう」

「ええ、そうね。その時までは、また2人つきりだね」

ミトはカイの手を取り、そう言う。

「ノアには悪いけど、もう少し2人つきりなのを楽しむか」

「うん」

2人は手を離さない様にしっかりと繋ぎ、家へと帰った。

第59話 釣り大会、そして……

2024年11月5日

その日、22層には大勢のプレイヤーが集まっていた。

何故なら、今日はこの22層にある池に棲む主の魚を釣り上げるイベントをとあるプレイヤーが開催し、その主を釣り上げる光景を一目見ようと、様々な野次馬や釣り人プレイヤーが集まっている。

「よお、キリト。なんか凄いことになったな」

そして、カイとミトもこのイベントを見学に来ていた。

「カイ、お前も来たのか」

「楽しそうなことしてるからな」

このイベントの主催の一角を担うキリトに、カイが挨拶するとカイに誰かが、抱き付いた。

「カイさん！お久しぶりです！ミトさんも！」

「久しぶりね、ユイちゃん」

「ユイちゃん、久しぶり。少し大きくなったか？」

そう言い、カイはユイを抱え肩に載せる。

「この世界じゃ背は伸びませんよ」

「気分的にだよ」

「そうだ、クツキー焼いて来たけど、ユイちゃん食べる？」

「本当ですか！いただきます！」

カイとミトの2人に可愛がられるユイを見て、キリトとその隣にいるアスナはほっこりする。

今の3人は姪を可愛がる伯父と伯母みたいに見える。

「おや？キリトさん、お知合いですか？」

「あ、ニシダさん、紹介します。コイツはカイ。俺の相棒で、その隣がカイの奥さんのミトです。カイ、ミト。この人はニシダさん。この釣りイベントの主催者だ」

「これはこれは……夫婦でしたか！ニシダと申します！この度は、よくぞ当イベントにお越しくださいました！」

「カイです。今日は頑張ってください」

「ミトです。大物、期待してますよ」

「はい！見事釣り上げて見せますよ！と言っても、私がするのはあくまで主をヒットさせるところまで。そこからはキリトさん頼みです」

「キリト頼みって、何するんだ？」

ユイを肩に担いだまま、カイが尋ねる。

「ああ。主を釣り上げるのに、ニシダさんの筋力値じゃ足りないみたいでさ。それで俺が代わりに釣り上げるんだ」

「釣竿でスイッチか。面白いな」

そんなことを話てる内に時間は進み、とうとうメインイベントが始まった。

「え、それはいよいよ本日のメインイベントを決行します！」

ニシダがそう言うと、周りの釣り人プレイヤーからの歓声が上が

る。

ニシダは長大の釣竿とその釣竿の先端に付けられた人間の二の腕ぐらいの大きさのある赤と黒の毒々しい模様のトカゲを手に現れる。

なお、釣り餌がトカゲと言うことにアスナは引いていた。

ニシダは大上段に釣竿を構え、一気に竿を振り、トカゲは飛んでいき、湖に沈んだ。

しばらくするとピクピクと浮が動く。

「き、来ましたよニシダさん!!」

「何の、まだまだ!!」

ニシダは、いつもよりもさらに爛々と輝かせ、竿の先を睨む。

その竿の先がいつそう深く沈み込んだ瞬間

「いまだっ!!」

ニシダが体を反らせ竿を引く。

「掛かりました!!あとはお任せしますよ!!」

釣竿を受け取ったキリトは、急に引つ張られ驚くも、すぐさま持ち堪える。

「うわっ！こ、これ、力一杯引いても大丈夫ですか？」

「最高級品です！思い切ってやってください！」

その言葉を聞いたキリトは全力を出し、竿が中程から逆Uの字に大

きくしなる程に力を籠める。

「あつ！見えたよ!!」

アスナが身を乗り出し、水中を指差した
その言葉に全員が、湖面を注視する。

キリトが一際強く竿をあげると、何やら巨大な魚のようなものが湖から外に飛び出した。

その魚は、シーラカンスのような姿で全身から水滴を滴らせ、6本の足で地上に立っていた。

その光景に、殆どのプレイヤーが逃げ出し、キリトも釣竿を放り捨て逃げ出す。

「自分だけ逃げるなんてずるいだろー!」

キリトは一足先に逃げ出していたアスナとミト、そして、ユイを担いでいたカイに文句を言う。

その間にも、湖の主はずんずんと追って来る。

「キリト君、武器は?」

「その、持ってきてない」

「しようがないなあもう」

そう言うと、アスナは愛用の細剣レイピアを取り出す。

「付き合うよ、アスナ」

ミトも鎌を構え、アスナの隣に並ぶ。

「ありがとう、ミト」

アスナはお礼を言い、ミトと共に湖の主を待ち構える。

「キリトさん!カイさん!奥様達が危ないですよ!?!」

キリトの隣にいるニシダが声を上げる。

「いや、任せておけば大丈夫ですから」

「あの2人ならあの程度は脅威にもなりませんよ」

「ママー!ミトさーん!がんばれー!」

湖の主が無数の牙の生えた口を開け、2人を捕食しようとした。

その瞬間、アスナは細剣スキル最上位技《フラッシング・ペネトレイター》で貫き、ミトが両手鎌スキル最上位技《スカーレット・ネメシスロード》で首と胴を一刀両断する。

湖の主を倒すと、ミトとアスナは武器を仕舞い、振り返る。

「よ、お疲れ」

「ナイスだったな、ミト」

「ママもミトさんも凄いです!」

「私たちだけにやらせるなんてずるいよー。今度何か奢ってもらおうからね」

「もう財布も共通データじゃないか」

「あ、そっか」

「なら、沢山労ってもらおうかしら?」

「はいはい、マツサージでもなんでもござれだよ」

緊張感なく、自然と話すカイ達にニシダは目をパチパチさせながら口を開く。

「い、いや、驚きましたね。奥さん、こんなにお強いとは……………」

ニシダが声を掛けながら近寄ると、1人のプレイヤーが声を上げた。

「あ…………あなた、血盟騎士団のアスナさん……………」

そのプレイヤーは前へと出てアスナを見る。

「そうだよ、やっぱりそうだ、俺写真持つてるもん!!」

それを皮切りに多くの若い男性プレイヤーが詰め寄る

「か、感激だなあ!アスナさんの戦闘をこんな間近で見られるなんて……………」

「そうだ、サ、サインお願いしていいですか……………」

「あ!こっちはミトさんだ!」

「ええ!?あの《死線》のミト!?!」

「マジだっ!!お、俺ずつとファンでした!握手いいですか?」

一瞬で男たちに囲まれ、アスナもミトもあたふたする。

「はいはい、下がれ下がれ」

「うちの嫁さんたちに近寄りたければ、まずは夫たる俺達を通してもらおうか」

「そうですよ!ママとミトさんは、パパとカイさんの奥さんなんですからー!」

そんな男共を、カイ達が追い払う。

男共は、憧れのアスナとミトが結婚していると言う事実、おまけにアスナが子持ちと言う事にもショックを受け、嘆いていた。

唯一、ニシダは何が何だが分からないと言った具合に首を傾げていた。

「なんだか今日は大変だったわね」

「お陰でここに住んでるのがバレたな」

その日の夜、カイとミトは一緒のベッドに入ったまま会話してた。

「どうしよっか?」

「うーん、ミトが嫌なら他のエリアに引っ越すか?」

「別に嫌じゃないけど、邪魔されたら嫌だなって思ってる」

「なら、ほとぼりが覚めるまで何処か別のフロアで隠れよう。この家を捨てるのは嫌だしな」

「なんか逃避行みたいね」

「そう言い、ミトはカイに抱き付く。」

「ねえ、カイ。明日が何の日か覚えてる?」

「明日?」

ミトに言われ、カイは少し考える。

そして、思い出し、口を開いた。

「俺の誕生日か」

明日は11月6日。

カイの誕生日だ。

2022年の11月6日はSAOのサービス開始日で、カイはこの日を史上最悪の誕生日と言った。

2023年の誕生日は、カイがミトに教えて無かったため、ミトはカイの誕生日を祝えなかった。

「今年はしっかり祝いたい。私だけじゃなくて、キリトやアスナ、ユイちゃんに、レオとシリカ、トバルとリズ、ディアベルとかとにかく沢山の人を呼んでカイの誕生日パーティーしましょう」

「いや、なにもそこまでしなくても………俺はミトに祝ってもらっただけでも嬉しいぞ」

「駄目よ。今までできなかつた分、一気に祝うつもりだから覚悟しなさいよ」

ミトはそう言っただけで笑う。

「わかったよ、楽しみにしてる。それじゃあ、おやすみ」
「うん、おやすみ」

寝ようと、ベッドの傍の照明を消そうとしたその時だった。

カイ達に、1通のメッセージが届いた。

第60話 骸骨の刈り手

2024年11月6日

カイとミト、そして、キリトとアスナの4人は50層《グランザム》の《血盟騎士団》本部へと来ていた。

昨夜に送られてきたメッセージの送り主はヒースクリフで、75層フロアボスの件で重大な話があると言われた。

正直、気乗りしない状況だったが、75層はクォーターポイントとすることもあり、激戦が想定され、話を聞くだけ聞くこととなった。

だが、ヒースクリフの口からは恐ろしい事実が告げられた。

「偵察隊が、全滅……！」

「何かの間違いじゃないのか……」

「残念だが、事実だ。昨夜、時間は掛かったものの、犠牲者を出すことなく75層の迷宮区のマップピングが終了した。同時に、75層フロアボスの部屋も発見。25層、50層の事を踏まえて、75層でも激戦が想定される。そこで、我々は5ギルド合同のパーティー20人を偵察部隊として送り込んだ」

ヒースクリフは抑揚のない声で、淡々と話を続ける。

「偵察は慎重に行われ、10人が後衛としてボス部屋前で待機した。しかし、最初の10人が部屋の中央に到達して、ボスが出現した瞬間、入り口の扉が閉まってしまった。扉は5分以上開かず、鍵開けスキルや直接の打撃攻撃も無駄だったらしい。ようやく開いたと思ったら、部屋の中には、何も無かったそうさ。10人の姿も、ボスも。その後、黒鉄宮まで確認しに行かせたのだが……」

そこから先、ヒースクリフは語らなかつた。

だが、それ自体が10人がどうなったかを物語っていた。

「10人も……そんな……！」

アスナが声を絞り出すように言う。

「団長、まさか74層の時と同じ、75層も結晶無効化エリアだったんですか？」

ミトは冷静を装い、ヒースクリフに尋ねた。

「うむ。転移結晶で逃げ出さなかったと言うことは、そういう事なんだろう。君たちの報告で74層のボス部屋が結晶無効化エリアだと言ふことは聞いている。もしかすると、これ以降全てのボス部屋がそのような仕様になっている可能性がある」

結晶アイテムが使えないと言うことは緊急脱出も瞬時回復も不可。

つまり死ぬ確率が飛躍的に上昇することを意味する。

「だが、攻略を諦める訳には行かない。結晶による脱出が不可な上に、今回は出現と同時に退路が断たれてしまう。新婚の2組を召喚するのは不本意だが、了承してくれ」

「分かりました。だが、俺にとつてはアスナの安全が最優先です。もし危険な状態になったら、アスナを守ります」

「それは俺も同じです。危機的状況になったらパーティーメンバーよりも、ミトを優先する」

「何かを守ろうとする人間は強いものだ。君たちの勇戦を期待するよ。75層ボス攻略戦は明日の午後1時に決行。それまでは、自由時間とする。では、解散」

「誕生日どころじゃなくなっちゃったわね」

その日の夜、カイとミトはベッドに座って一緒に寛いでいた。

「まあ、こんな状況じゃやる気になれないだろう？」

「明日、ボス戦が終わったらしましょう。1日遅れちゃうけど、やっぱり祝いたいし」

「そうだな……………」

カイはそこで言葉を区切り、ミトを抱きしめた。

「カイ？」

「……ミト、明日のボス戦なんだけど」

「参加するなって話ならお断りよ」

「でも、相手は10人のプレイヤーを5分で倒すほどの相手だ。できることなら、俺はミトに参加してほしくない」

「それで、自分だけ安全な場所に居ろって言うの？そんなの嫌。私は、もうカイから片時も離れたくないの」

「ミト……」

「絶対に生き残ろう。死ぬなら、一緒に死にたい」

「……バカ言うなよ。お前は死なない。俺が守る」

「うん。私もカイを守るよ」

そして、2人はどちらからともなくキスをした。

キスを終わると、カイは妙な高揚感に襲われ、そのままミトを押し倒した。

「ごめん、ミト。なんか……今、無性にミトが欲しくて堪らない」

「うん、いいよ……来て」

そこで部屋の灯が消え、2人は2度目の交わりを交わした。

翌日の11月7日。

昼近くに目覚めたカイとミトは、風呂で体を清め、簡単な昼食を摂り、装備の点検、アイテムの確認をし、家を後にした。

75層の転移門広場には大勢のプレイヤーが集まっており、その中にカイは見知った顔を見かけた。

「トバル!」

「ん? おお、カイ。それにミトも。お前らも参加するのか」

「偵察部隊が壊滅して、おまけに結晶無効化エリアともなれば、召集されるさ。と言うより、お前も参加するのか?」

「ああ。ヒースクリフの野郎に頼まれてな。フロアボス攻略なんざ、する気なかったが偵察部隊の壊滅に結晶無効化エリアと聞いちまったらな。迷宮区の攻略には参加しないが、今後は俺もフロアボス戦に参加する。ただの鍛冶師の腕なんぞでよければ、いくらでも貸してやるさ」

「お前が居てくれるのは心強いよ。助かる」

「それとだな、もう1人参加するぞ」

そう言つて、トバルは自分の背後に隠れていた誰かを引っ張り出す。

「おらあ! 覚悟決めろ!」

「うわあ!! ちよつと待って! 心の準備が!」

「その声!」

聞こえた声に驚いていると、トバルが背後からそのプレイヤーを引っ張り出す。

「し、師匠……どうも」

「レオ! お前、何してるんだ!?!」

「こいつも、今回のボス戦に参加するんだとき」

「なんだって!?!」

トバルの言葉に驚き、カイはレオを見る。

「レオ、お前本気なのか!?!」

「……………はい」

「何考えてるんだ! お前はまだ準攻略組クラスなんだぞ! それなのに、こんな危険な戦いに参加するなんて!」

「でも、師匠たちは参加します」

レオは強い決意を持った目で、カイに言う。

「俺はつい最近、レベルが80になったばっかです。この層で戦うのに必要な安全マージンも取れてません。それでも、できることをしたいんです！例え、師匠にどれだけ言われても俺はやりませす！」

「だからって……シリカはどうするんだ？」

「シリカにもちゃんと伝えてあります。その上で、必ず帰ることを約束しました」

「でも……」

「ま、男がここまで覚悟以って決めただ。それを尊重してやるのが師匠の務めってもんじゃないか？」

「トバル……」

「それに、レオは直接的な戦闘には参加しねえ。コイツの役目は、後方でボスの攻撃を回避しつつ、HPのヤバいプレイヤーにポーションを渡すことだ。結晶が使えないとなれば、回復はポーションのみになるからな。他にも、何人か準攻略組クラスの奴らがその役割をする。《希望の騎士団》^Hから護衛も出されるから、そう滅多なことは起らねえさ」

トバルからのフォローも受け、レオはカイから目を離さずに見つめる。

「……………はあ、無茶はするなよ。危険を感じたら、役割なんか放り捨てて自分を第一に考えろ」

「師匠……はい！」

話し終わると同時に、ヒースクリフと《血盟騎士団》のプレイヤーたちが現れ、広場が緊張の包まれる。

「欠員はないようだな。よく集まってくれた」

そう言うのと、ヒースクリフは腰のバックから《回廊結晶》を取り出した。

「コリドー・オープン」

その言葉と共に《回廊結晶》は砕け散り、ゲートを展開した。

「さあ、行こうか」

ヒースクリフと《血盟騎士団》が入り、続々と他のプレイヤーも入っていく。

カイはミトの手を握り締め、ゲートを潜った。

ボス部屋の前で全員が最終チェックを終え、戦闘態勢に入る。

「基本的には我々 《血盟騎士団》が前衛で攻撃を食い止める。その間に、可能な限り攻撃パターンを見切り、攻撃して欲しい。準攻略組の諸君は、戦闘には参加せず、攻略組の者たちへのポジションの配布に徹してくれたまえ。《希望の騎士団》からは護衛も出る。それでも、厳しい戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜けられると信じている。解放の日のために!!」

ヒースクリフの言葉に全員が声を上げ、ヒースクリフが扉を押すと、扉はゆっくりと開く。

「死ぬなよ」

カイは隣に立つトバルと、その後ろで控えているレオに声をかける。

「夢半ばで死んでたまるかっての」

「シリカと約束しましたから、絶対に死にません!」

死なない意思を見せる2人に、カイは笑い、最後に隣のミトを見る。

「ミト……必ず生き残ろう」

「ええ。必ず」

ミトもカイに笑い返すと同時に、ボス部屋の扉が完全に開かれた。

全プレイヤーが抜剣、抜刀する。

「戦闘開始!」

合図と共に、全員が突撃をする。

全員が突撃し、部屋の中央に固まる。

扉が閉まる音が部屋中に響く。

そして、辺りは静寂に包まれていた。

「おい」

あまりにも静かすぎる状況に、1人のプレイヤーが声を発した。

「上よー!」

すると、アスナが声を上げた。

全員が慌てて上を見上げると、其処にボスはいた。

ムカデのような骸骨。

一対の巨大な鎌。

名前は《The Skullreaper》、骸骨の刈り手。
スカルリーパーは攻略組を確認すると、一気に急降下してきた。

「固まるな！距離を取れ！」

ヒースクリフの言葉でプレイヤーが動き出す。

だが、恐怖で動けないプレイヤーが何人かいる。

「早く……っちだ！」

キリトの声で、慌てて2人のプレイヤーが走り出す。

だが、間に合わず、鎌の餌食になり宙を舞った。

キリトとアスナが受け止めようと手を伸ばすが、その手はプレイヤーを掴むことなく、空を切った。

何故なら、プレイヤーが受け止められる寸前で体が無数のポリゴンになって散ったからだ。

この場にいる攻略組は、全員がハイレベルのプレイヤーたち。

そんなプレイヤーたちを一撃で倒す威力に、全員が目を見開き、呆然とした。

そんな中、スカルリーパーは新たな獲物を見つけ襲い掛かる。

だが、ヒースクリフが素早く動き、十字盾で鎌を防ぎ、プレイヤーを守った。

ヒースクリフに攻撃を防がれたスカルリーパーは、今度は別のプレイヤーを狙う。

今度はキリトが剣を交差させ受け止める。

だが、重すぎるのか鎌はキリトの肩に深く斬り込む。

そして、横からもう一つの鎌がキリトを狙う。

「キリト！」

カイは咄嗟にキリトを庇い、刀で鎌を受け止める。

(なんて威力と重さだ……！受けきれない！)

徐々に刀を押し戻され、鎌の先端がカイに刺さる。

「はああああああああああ!!」

その瞬間、ミトとアスナが飛び出し、ミトはカイを、アスナはキリ

トを襲う鎌を弾いた。

「二人同時なら！」

「受けきれぬわ！」

「よし、鎌は俺達が食い止める！」

「皆は側面から攻撃をしてくれ！」

カイとミト、キリトとアスナがそう叫ぶと、ヒースクリフはそれを承知し、全プレイヤーに指示を出した。

「皆！彼ら4人が抑えてくれてる間に、ボスへと攻撃するぞ！」

「《希望の騎士団》！ボス攻撃部隊から半分の人員を、準攻略組護衛に回せ！準攻略組を守り抜くんだ！残りは、俺と共にボスへと攻撃！行くぞ！」

ディアベルもギルドメンバーに指示を出し、ボスへと攻撃を仕掛ける。

「お前ら！ディアベル塾卒業生の力、今こそ発揮する時だ！行くぞ！」

「「「「「おとおおおとおおおとおお！」」」」」

シユミットも、《聖竜連合》所属でディアベル塾卒業生一同とのパーティーで、攻撃をする。

「貴様ら！後輩共に後れを取るな！最強は、我らディアベル塾第1期卒業生だということを示すぞ！」

「「「「「イエス・サー！！！」」」」」」

コーバツツ率いるディアベル塾第1期卒業生たちのパーティーも果敢に攻撃をする。

「HPが半分以下になったら退却して下さい！ポーションは大量にあります！」

レオは準攻略組の補給部隊として走り回り、ポーションの配布から、HPの危ないプレイヤーに自ら近寄り、HPの回復をさせていく。

徐々にスカルリパーのHPを減らしていく中、複数の悲鳴が上がった。

プレイヤーを襲ったのは、スカルリパーの尾の先に着いた槍状の骨だった。

スカルリパーの尾にも攻撃判定があるらしく、また数人の犠牲者

が出た。

だが、瞬時にディアベルの指示で、《希望の騎士団》が尾を抑えた。

(ミト！次の攻撃を左に打ち払うぞ！)

(了解！)

カイとミトは目を合わせるだけの意志疎通で鎌をさばき続ける。

キリトとアスナも同じらしく、2組は完璧に同期した動きで、鎌の猛攻を防ぐ。

周りを気にせず、とにかく目の前の攻撃にだけ集中し防ぎ続け、いつしか2組は目を交わさずとも攻撃を完璧のタイミングで防いでいた。

ボス戦は1時間にも及び、そして、とうとうスカルリーパーが地面に倒れ込んだ。

「全員、突撃！」

それを好機と見て、ヒースクリフが突撃の合図を出す。

全員が一斉に飛び掛かり、準攻略組も本来の役割を捨て攻撃に参加し、護衛していた《希望の騎士団》も突撃する。

カイとミト、キリトにアスナも防御を捨て、スカルリーパーへと攻撃をする。

様々なライトエフェクトを撒き散らし、スカルリーパーにダメージを与えていく。

そして、スカルリーパーは絶叫を上げ、消滅した。

第61話 終焉の時

スカルリーパーを倒した後、誰も歓声を上げなかった。気を抜けば死ぬ。

そのような状況で戦い続けた今、手放して喜べるほどの元気はなかった。

加えて少なくはない、犠牲者も出た。

「何人やられた？」

座り込んでるクラインがキリトにかすれた声で聞く。

キリトはマップを出し、人数を調べ始める。

「……9人、死んだ」

「……うそだろ」

エギルがいつもの張りのある声ではなく、弱弱しくいう。

「あと、25層もあるんだぞ……」

「俺達、本当に頂上に辿り着けるのか？」

全員が弱音を漏らす中、ディアベルが近寄って来る。

「カイ、キリト」

「ディアベル……準攻略組に被害は？」

「準攻略組から犠牲者は出てない。死んだのは、攻略組プレイヤーのみだ」

「そうか……」

「だが、今回の一戦で、準攻略組の半分は心が折れてる。恐らく、攻略組を志すことはもう……」

クォーター・ポイントだからっていくらなんでも強過ぎた。

この先、1層辺りに10人死ぬとして、100層に辿り着くころには250人、下手すると300人を優に超える犠牲者が出る。

攻略組のプレイヤーは数百人程。

準攻略組は、500人近くいるが、今回の件で半分が、最悪半分以上が攻略組を志すのを止めるかもしれない。

下手すれば100層のボス戦では、数人で行われるかもしれない。もしかしたら、ボスと対面するのは《ユニークスキル》持ちのカイ

とキリト、そしてヒースクリフだけかもしれない。

そんなことを思いながら、カイはヒースクリフを見る。

ヒースクリフはというと、背筋を伸ばし立っていた。

HPはイエローに落ちてはないが、イエロー手前までに落ち、加えて精神的疲労もある。

それでも、ヒースクリフは座り込みもせず。攻略組全体を見ていた。

その姿にカイは、まるで機械の様だと思いながらも、プレイヤーたちを見つめるその温かく、慈しむ様な眼差しをしてみると思った。

(いや、あれは慈しむって言うより……慈悲を垂れる神みたいな……)

次の瞬間、カイは体の芯が冷える感覚に襲われた。

そして、1つのある予感が頭を過ぎった。

「キリト」

カイは思わず、隣で座り込むキリトに声を掛ける。

キリトも同じらしく、無言で頷いた。

そして、2人は武器を再び手にした。

「カイ?」「キリト君?」

2人の様子がおかしいことに、ミトとアスナが声を掛ける。

次の瞬間、キリトが片手剣スキル、基本突進技《レイジスパイク》をヒースクリフ目掛けて放った。

キリトの行動に気付いたヒースクリフは十字盾でガードしようとする。

だが、カイが動き刀スキル、突進技《紫電一閃》を使い、ヒースクリフの十字盾をずらす。

キリトの一撃はそのままヒースクリフの喉元へと突き刺さる。

「キリト君! 一体何を!」

「ちよっとカイ! 何してるの!」

カイとキリトの行動に驚き、ミトとアスナが駆け寄る。

そして、驚きの表情となった。

何故なら、キリトの剣はヒースクリフには届かず、紫色のシステム

タグがそれを防いだ。

《Immortal object》、不死を意味する文字がシステムタグには書かれていた。

「システムの不死……………」

「団長、一体どういうことですか……………」

ミトとアスナがヒースクリフに問う。

周りのプレイヤーもどう言うことなのか、分からないと言った表情をする。

「この男のHPはどうあってもイエローに落ちることは無い。そうシステムに保護されているんだ」

その問いに、キリトが答える。

「この世界に来てからずっと疑問に思ってたことがあった。あの男は、今何処で俺達を観察し、この世界を調整しているのか」

「でも、俺達は単純な真理を見落としていたんだ」

一拍置き、キリトとカイはヒースクリフを見据えて言う。

「他人がやってるRPGを傍らから眺めるほど詰まらないことは無い」

「そうだろうか？」

「茅場昌彦」

その言葉に全員が息を呑み、空気が凍り付いた。

「……………何故気付いたのか、参考までに聞かせてほしい」

否定しないことが、肯定である証拠の為、全員がショックを受けた。

「最初におかしいと思ったのはデュエルの時だ。最後の一瞬、アンタあまりにも速過ぎたぜ」

「でも、それぐらいならまだ《神聖剣》のスキルの一部だと言えば誤魔化せる。でも、流石にアレはおかしいよな。俺の刀が、アンタの盾をすり抜けるのは」

カイとヒースクリフが戦った時、《紅蓮燦爛》を使い最後の一撃を与えようとしたら、その一撃は当たらず、カイは敗北した。

ヒースクリフはカイが目測を誤ったと言ったが、カイはあの距離で目測を誤ることはないと自信があった。

「やはりそうか。あれは私にも痛恨事だった。君達の動きについて圧倒してしまいシステムの《オーバーアシスト》と《物体透過機能》を使ってしまった」

そう言い、ヒースクリフは攻略組全員を見渡す。

「確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上層で君たちを待つはずだったこのゲームの最終ボスでもある」

ミトが「……嘘」と呟きよろけた。

カイはそれを右手で支える。

「……趣味がいいとは言えないぜ。最強のプレイヤーが一転最悪のラスボスか」

「なかなかいいシナリオだろう？最終的に私の前に立つのは君らだと予想していた。全10種存在するユニークスキルのうち、《二刀流》スキルは全てのプレイヤーの中で最大の反応速度を持つ者に与えられ、その者が魔王に対する勇者の役割を担うはずだった。だが、君は私の予想を超える力を見せつけた。まあ、この想定外の事もネットワークRPGの醍醐味と言うべきか……」

そう言い、今度はカイを見る。

「カイ君。君の《業火刀》は文字通り罪人を焼き尽くす焰だ。10000人のプレイヤーを閉じ込め、4000人近くを犠牲にした魔王を倒すのにふさわしい剣だと思わないかな？君もまた、勇者と共に魔王を討つ剣士だ」

「俺たちの忠誠……希望を……よくも……よくも……よくも——ツ！！」

すると、《血盟騎士団》のプレイヤーが戦斧を握り締め、地を蹴り、武器を振りかぶる。

しかし、ヒースクリフもとい茅場は迎え撃とうともせず、左手でウィンドウを操作する。

すると、そのプレイヤーは空中で停止するとそのまま地面に落ちる。

見るとHPバーにグリーンの色が点滅していた。

麻痺状態だ。

茅場は、素早く次々と他のプレイヤーを麻痺状態にする。

そして、麻痺状態じゃないのは、カイとキリトだけだった。

「どういうつもりだ？……ここで全員を殺して隠蔽するつもりか？」

「まさか。そんな理不尽な真似はしないさ。こうなっては致し方がない。私は最上層の《紅玉宮》にて君たちの訪れを待つとしよう。ここまで育ててきた《血盟騎士団》、攻略組プレイヤー諸君を途中で放り出すのは不本意だが、君達の力ならきつと辿り着けるさ。だが、その前に」

そこで言葉を区切り、十字剣を収めた十字盾を黒曜石の床に突き立てる。

「キリト君、カイ君。君達には私の正体を看破した報酬を与えなくてはな。チャンスをおあげよう。今この場で私と2対1で戦うチャンスだ。無論、不死属性は解除するし、私も《神聖剣》の力の範囲で戦う。私に勝てば、ゲームはクリアされ、生き残った全プレイヤーがゲームから順次ログアウトできる。……どうかな？」

その言葉に2人は揺らいだ。

この先、残り25層のボスを倒せるのか？

それは無理かもしれない。

だが、今この場でなら、カイとキリトが、茅場と戦って勝てばゲームは終わる。

「カイ」

キリトがカイに声を掛けた。

「一緒に、戦つてくれるか？」

「……もちろんだ、相棒」

「!?……カイ駄目だよ……!」

ミトの手がカイの服を握り締める。

「大丈夫だ。死んだりしないから、必ずお前と現実世界に帰る。約束だ」

「……………わかった」

納得したのかミトがカイの服を離した。

ミトを優しく床に寝かせ、刀を抜く。

キリトもアスナを床に寝かせ、背中の二本の剣を抜いた。

「キリト！やめろ！」

「キリトー！」

「カイ！危険だ！戻れ！」

「師匠！」

名前を呼ばれ後ろを振り向くと、クライン、エギル、トバル、レオが必死に体を起こしながら2人を止めようとしていた。

「エギル、今まで剣士クラスのサポート、サンキューな。知ってたぜ、お前が儲けの殆どを、中層プレイヤーの育成につき込んでたこと。クライン、俺、あの時……お前を置いて行って、悪かった」

「て、テメー、キリト！謝ってるんじゃねえ！今謝るんじゃねえよ！許さねえぞ！向こうでメシの一つでも奢ってからじゃねえと、許さねえからな！」

「分かった。次は向こうでな」

キリトは右手を上げ、答える。

「トバル、〃焰群〃を打ってくれてありがとうな。俺が〃紅雪〃でミトを殺したつての聞いて、お前が俺にそれを思い出させない様に打ってくれたの知ってるぞ。お前は本当に優しい奴だな。その優しき、もつと出していけよ。レオ、お前は本当に強くなった。お前の師匠として、鼻が高いよ」

「師匠……俺、まだ師匠に鍛えて欲しいです！だから、だから……！」
「ああ、分かってる。そこで待っててくれ」

カイも右手を上げ、答える。

「一つ頼みがある」

会話を終えると、キリトが茅場に声を掛けた。

「何かな？」

「簡単に負けるつもりはないが、もし俺が死んだら、暫くでいい。アスナが自殺できない様に計らってほしい」

「俺からもいいか？キリト同様、もし俺が死んだらミトも自殺できない様にしてくれ」

「……よかろう、彼女たちは《セルムブルク》から出られないように

しよう」

「キリト君！駄目だよ！そんなの、そんなのってないよ！」

「カイ！止めて！そんなこと、そんなこと言わないでよ！」

アスナとミトの涙交じりの悲痛の声が響く。

だが、カイとキリトは後ろを振り向かず、刀と二本の剣を抜く。

茅場は手を動かし、不死属性を解除し、十字剣を抜いた。

そして、互いに構える。

(これは……決闘^{デュエル}なんかじゃない)

(単純な、殺し合いだ)

(ああ、そうだ。俺達は今から……)

(この男を……)

「殺す！」

2人同時に叫び、斬り込む。

キリトの一撃を茅場は十字盾で防ぎ、カイの一撃を十字剣で防ぐ。

カイが刀で十字剣をひっくり返す様に手首をひねり、突きを放つ。

それを躲しつつ十字盾でキリトの剣を弾くと同時に、十字剣でカイに攻撃を仕掛ける。

刀で十字剣の縦斬りを受け止め、剣を抑え込む。

そこにキリトが二刀流の連撃を浴びせる。

ソードスキルは全て茅場がデザインしたもの。

故に、全ての連続技がどこにどうくるのかも知っている。

だからこそ、カイとキリトは己の技量のみで戦うしかない。

腰を落とし、剣先を茅場に向け、突きを放つ。

茅場はそれを躲し、十字盾を下から突き上げ、カイの顎にぶつける。

「ぐあっ！」

その攻撃にカイは吹き飛び、転がる。

「カイ！」

余りにも正確な攻撃と、剣捌き。

そして、盾を巧みに使った攻撃と防衛。

その姿に、キリトは1つの疑念を感じた。

もしかしたら、茅場はあのデュエルの時、『オーバーアシスト』も『物

体透過機能《》を使う必要はなかったのではないか。

全て演出の為で、キリトやカイが気付くかどうか見ていただけなのではないか。

「くそおおおおおおお!!」

その疑念が、キリトを怒りの頂点へと誘い、キリトは怒りに任せソードスキルを使った。

二刀流最上位剣技《シ・イクリップス》

連続二十七連撃を繰り出す技だ。

その時、茅場が笑った。

もう、止まらない。

上下左右から繰り出される斬撃を茅場はいともたやすく防ぎきる。

最後の一撃が十字盾にぶつかると、左手に握られた《ダーク・リパルサー》は砕け、キリトはソードスキル発動後の硬直に入った。

「さらばだ、キリト君」

茅場の無慈悲の声が響く。

茅場の持つ十字剣が、クリムゾンの光を迸らせ、キリトを斬り裂いた。

はずだった。

硬直に入り、動けないキリトが見たのは赤色だった。

それはカイのコートの色だとすぐに気付いた。

カイは、キリトと茅場の間に入り、刀で茅場の一撃を受け止めようとした。

だが、茅場の一撃は重く、そのままカイの刀を押し折り、カイの身体を斬り裂いた。

「か、カイ!!」

キリトがカイの名前を叫んだ。

「う……………うおおおおおおお!!」

カイは絶叫を上げ、《業火刀》スキル、《炎熱昇天》を使った。

カイの刀は折れた物の、まだ修復可能だった。

つまり、まだ攻撃に使えた。

放たれた攻撃は、茅場の持つ十字盾を弾き飛ばす。

そして、カイは刀を放り捨て、十字剣を持つ右手ごと、茅場にしがみ付いた。

「キリトー!やれー!」

それが何を意味するのか、キリトには分かった。

先程の攻撃で、カイのHPは底を尽いていた。

今のカイはHPが底を尽く僅かな時間で居るに過ぎない。

その僅かな時間でカイは、茅場に勝つ道筋を見つけ、キリトにやるように叫んだ。

「あ、ああ……………ああああああああああああああ!!」

キリトは絶叫を上げ、残った片手剣「エリュシデータ」を構える。

そして、「エリュシデータ」の黒い刃は、カイの背中を突き刺し、茅場の胸に刺さった。

「……………ふっ、見事だ。カイ君」

茅場は最後に笑みを零し、カイに賛辞を贈った。

茅場のHPは底を尽いた。

「……………キリト」

カイは茅場を離し、後ろを振り返る。

「ありがとうな」

そう言い、最後にミトを見る。

「ミト……………すまない」

その言葉を最後に、カイと茅場の身体は消滅した。

エピソード

「カイ……………俺は……………なんてことを……………」

カイと茅場のアバターが消滅後キリトは持っていた「エリユシデータ」を落とし、その場に膝を突いた。

「キリト君！」

「おい、大丈夫か！」

「しつかりしろ！」

そんなキリトに、麻痺が解けたアスナとクライン、エギルが駆け寄る。

「俺の所為だ……………」

「何言つてやがる！カイを殺したのはお前じゃねえだろ！」

「酷なこと言うが、あの時、カイのHPは底を尽いてた……………お前の所為じゃ……………」

「違うんだ……………あの時、あそこでソードスキルなんて使わなければ……………！カイは、俺が殺したも同然だ……………！俺は、自分の手で相棒を……………」

キリトはそのまま涙を流した。

そのキリトに、3人は何も言えなかった。

「おい！何してやがる！」

「ミトさん、止めて下さい！」

「武器を取り上げるぞ！」

すると、背後でトバルとレオ、ディアベルの声が聞こえ振り返ると、トバルとレオがミトの腕を抑え、ディアベルがミトから武器を取り上げていた。

「離して！お願いだから！」

「自殺しようとした奴を離せるかよ！」

ミトはカイが死んだことにショックを受け、自ら死のうとしたらしく、それをトバルとレオ、ディアベルが止めたらしい。

「だって！カイが……………カイが……………カイが居ない世界なんて、私……………」

とうとうミトは泣き出し、体の力が抜ける。

そのまま床に座り込んだミトは、涙を流し続けた。

「まだ、カイとちゃんと会えてないんだよ……まだ、カイの本当の名前だって知らない……それなのに！」

涙を流し続けるミトに、アスナは近寄り優しく抱きしめた。

アスナは何も言えなかった。

今のミトは、自分の有り得たかもしれない姿だからだ。

もし、死んだのがカイではなくキリトだったら、きつと、自身もミトみたいに命を絶とうとしたはずだからだ。

だからこそ、気軽に「死ぬな」とは言えなかった。

『現在 ゲームは 強制管理モードで 稼働しております。 全てのモンスター及びアイテムスパンは 停止します。 全てのNPCは 撤去されます。 全プレイヤーのHPは 最大値で固定されます』

その時、自動音声によるアナウンスが流れ出した。

『アイコンクラッド標準時 11月7日 14時55分 ゲームはクリアされました。 プレイヤーの皆様は 順次 ゲームから ログアウトされます。 その場で お待ちください』

そのアナウンスと共に、全プレイヤーがログアウトされていく。

そして、ミトは泣きながらゲームからログアウトされた。

「何処だ……?」

気が付くと、カイは分厚い水晶の板の上にいる。

周りは夕日で、赤く照らされていた。

「死後の世界……じゃないか」

カイは自分の服装が、ボス戦で着ていた物だと言うのに気づきそう結論付ける。

試しに右手を下ろすと、メニューウインドウが開かれ、「最終フェイズ実行中 現在34%完了」と表示がされていた。

「なるほど。ナーヴギアが脳破壊のシークエンスを実行してるのか……まさか、誕生日の翌日に死ぬとはな。ま、誕生日が命日にならなかっただけ良しとするかな」

そんなことを言いながら、メニューウインドウを消し、辺りを見渡す。

すると、視線の先に《アインクラッド》が崩壊していく姿があった。

「中々に絶景だな」

いつの間にかカイの隣に一人の男性がいた。

それは茅場昌彦。

ヒースクリフの姿ではなく、SAO開発者としての姿でそこに居た。

「現在、アーガス本社地下五階に設置されたSAOメインフレームの全記憶装置でデータの完全消去を行っている、あと十分でこの世界は消滅するだろう」

「あそこに居た人たちは……ミトはどうなった？」

「心配には及ばない。先程、生き残ったプレイヤー、6147人のログアウトが完了した」

「あの世界で死んだ連中は？」

「彼らの意識は帰って来ない。死者が消え去るのは何処の世界でも一緒さ。君とは最後に話をしたくてこの時間を作らせてもらった」

「なあ、どうして、アンタはこんなことを？」

カイはその質問を茅場にした。

キリトと何度が話し合った、茅場の目的。

茅場はこの世界そのものが目的と、デスゲーム初日に言った。

だが、その目的がなんなのかカイとキリトは分からなかった。

「なぜ、か。私も忘れたよ。なぜだろうな。フルダイブ環境システム

の開発を知った時、いや、その遙か昔から私はあの城を、現実世界のありとあらゆる枠や法則をも超越した世界を創ることだけを欲してきた。そして、私は……私の世界の法則をも超える世界を見ることができた。空に浮かぶ鉄の城の空想に私が取りつかれたのは何歳の頃だったかな……。その情景だけは、いつまで経っても私の中から去ろうとしなかった。この地上から飛び立って、あの城に行きたい……長い、長い間、それが私の唯一の欲求だった。私は、まだ信じているのだよ……。どこか別の世界には、本当にあの城が存在するのだと……」

茅場は真つすぐな目でカイに向けそう言う。

その目を見て、カイは思わず思った。
自分があの世界に生まれ、1人の少年と出会い、共に良き相棒、良き友となり、最強の剣士を目指す旅に出ることを。

多くの友と出会い、弟子を持ち、そして、1人の少女に恋をし、結ばれ、子に恵まれ、いつまでも一緒に暮らす。

そんな夢を、思わず思い描いた。

「そうだな……。そうだといいな」

カイは、茅場を見ずにそう答える。

その回答に、茅場は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「そうだ。茅場、アンタに言いたいことがあるんだ。言ってもいいか？」

「構わない。言い給え」

「よくも人様の誕生日を滅茶苦茶にしてくれたな。お陰で自分の生まれた日に死ぬ思いをしたんだぞ」

「そうだったか……。それはすまないことをした」

「ああ、マジでな。本当なら、その顔を思いっきり殴り飛ばしてやりたところだよ。……。でも、それは勘弁してやる」

カイは茅場の方を向き、笑った。

「アンタがこの世界を、SAOを作ったおかげで、俺はミトと再会出来た。ミトだけじゃない。相棒キリトにも、専属鍛冶師バグにも、弟子レオにも……。本当にいろんな奴と出会えた。全員、俺の大事な友人だ。この世界で出会えた、掛け替えのない大事な奴らだ。だから、その辺は

感謝してる。ありがとうな」

「……………そうか」

茅場は短く、そう答えた。

「言い忘れていたな。ゲームクリア……………それと、誕生日おめでとう、カイ君」

茅場は穏やかな表情で、そう言った。

「さて、私はそろそろ行くよ」

風が吹き、声が掻き消されたと思った瞬間、茅場の姿はそこにはなかった。

残された時間、カイは崩壊してゆくアインクラッドを、水晶の板の端に座り、眺めた。

「こう見ると、いろんな思い出があるな」

そんなことを呟き、カイは思い出に浸った。

「キリト、アスナと幸せにな……………アスナ、きつとキリトの奴、自分の所為だとか責めるだろうからフォロ―頼むぞ……………トバル、お前の優しさが嬉しかったよ、リズの想いに早く気づけよ……………レオ、本当はもつとお前を鍛えてやりたかったよ、シリカと仲良くな」

カイは残されたわずかな時間、届きはしないだろうと思いつつも、全員に言葉を送って行く。

リズ、シリカ、ディアベル、クライン、エギル、月夜の黒猫団の皆。全員に言葉を送り、メニューウインドウを開く。

【最終フェイズ実行中 現在94%完了】

終わりがもう目前まで迫って来る。

「……………ミト」

最期に、カイは最愛の人へと言葉を送った。

「約束守れなくてごめん。結局、これも渡せずじまいか」

カイは懐から、小さな箱を取り出す。

そこには、宝石が嵌められた指輪があった。

ミトに渡そうと思っていた物だ。

現実に戻っても、ミトと一緒にいる。

その覚悟の誓いとして、ミトに渡そうとしたものだった。

「ま、今となつては渡さなくてよかつたかもな。俺、死んだし」

そう呟き、箱を閉じて懐に戻す。

「ミト、お前の事だからきつと、俺の事を忘れないで居ようとするだろうな。だから、すぐに忘れるなんて言わないよ。でも、いつか必ず前に進んでくれ。そして、幸せになってくれ……………大好きだ、愛してる、ミト」

ミトへの言葉を送り、カイは一息入れる。

そして、天を仰いだ。

【最終フェイズ実行中 現在100%完了】

【実行終了】

「あーあ……………死にたくねえな」

カイは満足そうに笑って、世界の消滅の光と共に消え去つた……………

フェアリー・ダンス編
プロローグ

2024年11月7日

ミトこと兎沢深澄はベッドの上で目を覚ました。

重い瞼を開き、明るい光が差し込んだことで、思わず目を顰めた。

そして光に目が慣れてくると、今度は体を動かし、起き上がる。

体が重く鉛の様に動かなかったが、ミトはそれでも必死に体を起こし、今度は頭にあるソレ、ナーヴギアを取った。

辺りを見渡し、そこが病院の一室であることが分かる。

無意識に自体の胸に手を当てると、鼓動を感じた。

「生きてるんだ…」

そう呟くと、少しずつ思考がクリアになっていく。

そして、涙を流した。

あの世界で流していた涙の続きなのか、涙は止まることを知らず流れ続ける。

「カイ……………」

ずっと会いたかった大事な友達、そして、あの世界で再会し結ばれた恋人“カイ”の名前を呟く。

カイはもう、何処にもいない……………

その後、病院中が騒がしくなる声を聞き、ミトの病室にも医師と看護師がやって来た。

体の異常の有無を聞かれ、健康状態をチェックされ、ミトは多少の衰弱はあるも健康であると判断された。

1時間後には、ミトの両親も駆けつけ、両親はミトが無事なことに涙を流し、抱きしめた。

ミトはそんな両親に、「心配かけてごめんなさい」と「ただいま」と言った。

目を覚ました次の日、ミトの下に一人の男性が来た。

男は自分は《総務省SAO事件対策本部》の者だと名乗った。

彼らは被害者たちの病院の受け入れ態勢を整えたり、極僅かなプレイヤーデータのモニターを行っており、モニターをしていた結果、レベルと存在座標からミトが《攻略組》の上位プレイヤーであることを知り、一体何があったのかを聞きに来た。

ミトは知り合い情報と引き換えに知っていることを全て話す事を条件に出した。

だが、その情報を願うが、その中にカイの名は無かった。

カイの死を目の前で見ていたのもあるが、それを聞き、カイの死を確かなものにするのが怖かったからだ。

男は数分間携帯でやり取りをすると、ミトに情報を話した。

『結城明日奈さんは所沢の医療機関に収容されている。だが、彼女はまだ覚醒しておらず、全国でも同様のプレイヤーが300人近くいる』

その情報は、ミトの耳を疑う物だった。

(それじゃあ………カイは何のために死んだの………?)

カイが死んだのは、全てはゲームをクリアする為。

ミトを含めた、大切な友人たちを現実へと返すためだ。

それなのに、アスナがまだ目覚めていない。

それだけでなく、まだ300人近いプレイヤーも目を覚ましていない。

まるでカイの死が無意味だったと言われている様な気がした。

「まだ……終わってないんだ………」

ミトは思わずそう呟く。

デスゲームはまだ終わってない。

アスナを含め未だに目覚めぬ300人のプレイヤーが目覚めない

限り、ゲームは終わらない。

そして、ゲームが終わらない限り、カイの死は一生無意味のまま
だった……………

第1話 未帰還の閃光

2025年1月19日

所沢総合病院の最上階にある病室。

ミトはそこに訪れた。

室内に入るとミトは、ベッドに横たわる少女に声を掛けた。

「明日奈、昨日ぶり。元気だった？」

ミトは未だに眠るアスナにそう声を掛けた。

ミトはアスナの見舞いに時間がある限り通い、その度にいろんな話を
をする。

話しかけていれば、いつか目を覚ますんじゃないかと思って。

椅子に座り、アスナに話掛けていると、病室の扉が開いた。

そちらを見ると、そこには1人の少年が居た。

「キリト」

「……久しぶりだな、ミト」

それはキリトだった。

本名は桐ヶ谷和人と言い、驚くことにミトとアスナより1つ年下
だったことが、再会した時に分かった。

「アスナのお見舞い？」

「……まあな」

そう言うと、キリトは椅子に座らず、ミトから距離を取って近くの
壁に寄り掛かる。

キリトはミトに対して負い目を感じている。

それは、カイの死が理由だ。

ヒースクリフとの戦いの時、カイはキリトを庇って死に、死ぬ間際
までゲームをクリアする為に必死にあらがった。

現実で顔を合わせた時、キリトはカイの死は自分の所為だと言い、
ミトに謝罪をした。

だが、ミトはキリトに対し、責めることはしなかった。

カイがそんなことを望んでない事、そして、キリトも辛いのは同じ
である事が理解でき、キリトを責めなかった。

だが、キリトにとってそれは逆に辛さを与えるだけだった。

(だからと言って、罵倒するつてのは違うしなあ)

ミトはそんなことを思いながら、椅子から立ち上がる

「それじゃあ、私帰るから。じゃあね」

「あ、ミトー」

帰ろうとしたミトを、キリトは思わず呼び止めた。

「あ、その……………気を付けてな」

歯切れ悪くそう言うキリトに、ミトは少しだけ笑みを浮かべる。

「ええ、ありがとう」

そう言い、出口に向かって歩き出そうとしたら病室の扉が開き、2人の男性が病室に入ってきた。

「おお、来ていたのか桐ヶ谷君、兎沢君」

入って来た男性の内1人はアスナの父親、結城彰三だった。

キリトはアスナから、父親は実業家と聞いていたが、その実、総合電子機器メーカー《レクト》のCEOであると聞いた時は、心底驚いていた。

「こんにちは、アスナのお父さん」

「お邪魔しています。結城さん」

「いやいや、いつでも来てもらって構わんよ。この子も喜ぶ」

そう言い、彰三はアスナの枕元に近寄り、アスナの髪を触る。

「彼とは初めてだな。うちの研究所で主任をしている須郷君だ」

そう言い、彰三は後ろに居たダークグレーのスーツに身を包んだ、眼鏡の男性を紹介する。

「よろしく、須郷伸之です。……………そうか、君たちがあのキリト君にミトさんか」

「……………桐ヶ谷和人です。よろしく」

「……………兎沢深澄です」

キリトは初対面ながらも、須郷に対し何処か信用できないと言った感情を持った。

一方で、ミトは須郷とは初対面だが、須郷の事は知ってた。何故なら、よくアスナからこの男の話聞いていたからだ。

だが、その話は決して好意的な物ではなく、殆どは愚痴で、アスナ自身須郷の事を好きではないらしい。

「いや、すまん。SAOサーバー内部での事は口外禁止だったな。あまりにもドラマティックな話なのでつい喋ってしまった。彼は私の腹心の部下だね。昔から家族同然の付き合いで、息子同然なんだ」

「ああ、社長、その事なんです……。来月にでも、正式にお話を決めさせて頂きたいと思います」

「……………いいのかね？君はまだ若い。新しい人生だつて」

「僕の心は昔から決まっています。それに、明日奈さんが今の美しい姿でいる間に、ドレスを着せてあげたいのです」

「……………そうだな。そろそろ覚悟を決める時期かもしれないな」

彰三はそう言い沈黙する。

「それでは、私は失礼するよ。桐ヶ谷君、兎沢君、また会おう」

1つ頷いてから、彰三は病室を出て行き、病室にはミトとキリト、そして須郷だけが残った。

須郷は、ゆつくりと移動しアスナに近付くと、髪をひと房摘まみ上げ、音を立ててすり合わせた。

その仕草に、ミトもキリトも身の毛がよだつ程の嫌悪感を覚えた。

「キリト君、君はあのゲームの中で、明日奈と暮らしてたんだって？」
顔を伏せたまま須郷が尋ねる。

さつきまでアスナをさん付けだったのに、急に呼び捨てにしていることに新たな嫌悪感を感じながらも、キリトは口を開く。

「……………ええ」

「そうか……………それなら、僕と君の関係は少々複雑な関係と言うことになるかな」

顔を上げた須郷は、愉快でたまらないと言った具合にニヤニヤと笑っていた。

「さつきの話はねえ……………僕と明日奈が結婚すると言う話だよ」

その言葉に、キリトは絶句した。

だが、ミトは声を上げた。

「何言ってるのよ！意識のないアスナに、そんなことできる訳ないで

「しよ！そもそも、アスナは貴方のことが！」

「嫌い、なんだろう？」

言葉を先回りされ、ミトは驚く。

「知ってるさ。なんせ、昔から嫌われているからね。でも、親たちは知らない。なら、今の状況は都合がいい」

「アンタ……アスナの意識がないのを良い事に、利用する気か？」

キリトが怒りを露わにして、拳を握り尋ねる。

「利用？当然の権利さ。………ねえ、キリト君。《アーガス》がその後どうなったか知ってるかい？」

「……解散したと聞いている」

「その通り。開発費と事件の補償で莫大な負債を背負った会社は消滅。その後、SAOサーバーの維持を任されたのは総合電子機器メーカー《レクト》のフルダイブ技術部門に委託された。そこはボクが務める部署だね。言うなれば、明日奈の命はボクが握ってるも同じだ」

須郷はキリトの前に立ち、微笑を張り付けたまま顔を寄せる。

「なら、その対価として、この娘との結婚をしたっていいだろ。ま、法的な入籍は出来ないから、僕が結城家の養子になることになる。そうなれば、結城家は僕の物となる」

「ふざけないで！そんなこと赦されるわけがないわ！すぐにでも、アスナの家族に！」

「言って、信じてもらえるのかい？」

ミトの言葉にも、須郷は態度を崩さなかった。

「君の立場は何だい？明日奈の友達だろ？だが、僕はどうか？僕は結城彰三の腹心の部下で、息子同然に思われている。そして、明日奈の婚約者でもある。ただの友達である君と、婚約者の僕。どちらの言葉を、信じてくれるかな？」

須郷の言う通りだった。

確たる証拠でもない限り、ミトの言葉を信じてくれる者はいないだろう。

「ま、と言うわけだ」

須郷は、一瞬で嫌な微笑から笑顔に戻り、キリトとミトの肩を叩く。

「今後は、ここに来ないで貰おう。結城家との接触も一切禁止だ。ああ、ミト君は来ても構わないよ、なんせ明日奈の友達なんだからね」
須郷は病室の扉へと向かう。

「式は来月、この病室で行われる。その時は、君たちも呼んでやるよ。それじゃあ、せいぜい最期の別れを惜しんでくれ」

去って行く須郷に、ミトもキリトも何もできなかった。

もし、2人の手に剣と鎌があれば、すぐにでも須郷の心臓を突き刺し、首を刈り取っていただろう。

だが、この世界ではミトもキリトも、ただの学生でしかなかった。

病室を出た後、ミトはいつの間にか自宅について居た。

どうやって帰ったのか、ミトには分からなかった。

そして、帰るなりミトはベッドへと倒れこんだ。

「どうしよう……私、どうしたらいいの……」

親友の危機だと言うのに、何もできない自分が無力で情けなく、ミトは涙を流した。

「私……またアスナを救えない……救えないよ……」

SAOで、アスナと離れ離れになり互いに命の危機だったあの時。

ミトは何もできなかった。

そんな時、助けてくれたのはカイとキリトだった。

キリトがアスナを助け、カイがミトを助けた。

あの時は、カイが自分を助けてくれた。

それから、カイはずっとミトを助けてくれた。

だが、そのカイはもういない。

「カイ……………助けて……………!」

それでも、ミトはカイの名前を呼ばずにはいられなかった。

「ん?……………朝。いつの間にか寝ちゃったわね……………」

ベッドから体を起こし、伸びをする。

「はあ……………本当にどうしたらいいんだろ……………」

目を覚まし落ち込んでいると、ちょうど机の上に置いといたスマホに着信が入った。

手に取り、パソコンの方にメールが届いた知らせだった。

ミトはパソコンの電源を入れ、メールボックスを開くと、1件の新着メッセージを確認する。

送り主はキリトだった。

From: Kirito

タイトル: なし

本文: エギルの店に来い

添付ファイル: 1件

「何かしら?」

キリトからのメールに、ミトは首を傾げる。

エギルの店と言うのは、アインクラッド50層の《アルゲート》に合った店ではなく、台東区御徒町のごみごみとした裏通りにある現実でのエギルの店のことだ。

「エギルの店に来てって、どうしたのかしら？その前に、添付ファイルをとつと」

「添付ファイルを確認するため、ミトはファイルにカーソルを合わせ、クリックをする。」

「……………え？」

その添付された画像を開き、ミトは驚いた。

画像は引き伸ばされ、ドットが荒いが、その姿は、まぎれもなくミトの知ってる人だった。

「……………アスナ？」

第2話 妖精の国へ

キリトからのメール通り、ミトはすぐにエギルの店へと向かった。煤けたような黒い木造で、小さなドアの上に金属製の看板があり、《Dicey Cafe》と刻まれている。

扉を押し開けると、カラッとベルの音が響く。

カウンターにはエギルがおり、そして、カウンター席にキリトが居た。

「よお、久しぶりだな。ミト」

「ええ、久しぶりね。エギル」

久々の再会に、ミトとエギルは軽く挨拶を交わす。

「さて、エギル。役者は揃った。あの写真について話してくれ」

「そうね。その為に、来たのよ」

「分かっているって。その前に、コイツを見て欲しい」

そう言い、エギルはカウンター下から何かを取り出し、ミトとキリトの前に置く。

「これって……ゲーム？」

「《アミュスファイア》っていうナーヴギアの後継機対応のMMOだ」

「ってことは、これも、VRMMOか」

キリトが手に取り、パッケージに掛かれたタイトルを読み上げる。

「あるふ……へいむ……おんらいん？」

「アルヴヘイムって発音するらしい」

「意味的には、妖精の国って所かしら」

「妖精？なんかほのぼのしてそうだな。まったり系か？」

「そうでもないぜ。どスキル制。プレイヤースキル重視。PK推奨」

「どスキル制？」

聞いたこと無い言葉に、ミトが聞き返す。

「いわゆる《レベル》が存在しないらしい。各種スキルが反復で上昇するだけで、HPもたいして上がらない。戦闘もプレイヤーの運動能力依存で、ソードスキルなし、魔法ありのSAOってところだ」

「PK推奨ってのは？」

今度は、キリトが質問をする。

「プレイヤーはキャラメイクでいろんな種族を選ぶわけだ。違う種族ならPKできるんだとさ」

「確かにハードだ。だけど、そんなマニア向け仕様じゃ、人気で無いだろう」

「それがそうでもない。今、大人気だそうだ。理由は『飛べる』からだろう」

「飛べる？」

ミトとキリトがハモる。

「妖精だから、翅がある。フライト・エンジンとやらが搭載されていて、慣れると自由に飛びまわれる」

「凄いな、翅はどう制御するんだ？」

「さあな。だが、相当難しいらしい。初心者はステイック型のコントローラーで操るんだとさ」

飛ぶと言う未知の体験に、ミトとキリトは思わずゲーマーとしての血が騒ぎ、挑戦したいと思ってしまうた。

だが、すぐにそんな雑念を捨てエギルに問う。

「それで、このゲームとアスナがどう関係してるんだ？」

エギルは、再びカウンター下から何かを取り出す。

今度は例の写真を印刷した物だった。

「どう思う？」

「……似ている」

「そうね」

「やっぱりそう思うか」

「早く教えてくれ、ここは何処なんだ！」

キリトが大声を上げてエギルに問い詰める。

「その中だよ。アルヴ Heim・オンラインの」

エギルは手元にあるパッケージを引っくり返し、後ろのイラストの真ん中にある樹を指差す。

「世界樹、と言うんだとさ。9つの種族に分かれたプレイヤーは世界樹の上にある城に、他の種族に先駆けて到着する事を競ってるんだ」

「なら、飛んで行けばいいんじゃない……」

「滞空時間があつて、無限には飛べないらしい。でだ、体格順に5人のプレイヤーが肩車をして多段ロケット方式で樹の枝を目指した」

「ははは、なるほど。馬鹿だけど頭いいな」

「だが、ぎりぎりまで到着できなかったそうさ。でも、到達高度の証拠に5人目が何枚か写真を撮った。その1枚に巨大な鳥籠が写ってた」

「鳥籠？」

「そいつをぎりぎりまで引き延ばしたのが、その写真だ」

「でも、どうして、アスナがゲームの中に？」

キリトがもう一度パッケージを見ると、いきなり険しい顔になった。

「ミト…これを見る！」

キリトに言われ、ミトはキリトの手元のパッケージを見る。

そこには、《レクト・プログレス》の名があつた。

「これって！」

「ああ……恐らくだが、ここに行けば……」

ミトとキリトは互いに頷き合う。

「エギル、これ、貰つて行つてもいいか？」

「構わんが、行く気なのか？」

「この目で確かめる」

エギルは心配そうにキリトを見る。

キリトも心では、何かまた嫌なことが起きるのではと思つてる。

だが、キリトはその恐怖を振り払うかのように笑う。

「死んでもいいゲームだなんてぬるすぎるぜ」

「はあ……こんな事だろうとは思つたよ」

そう言い、エギルはもう1つALLOのソフトを出す。

「ミト、持つて行きな」

「エギル、いいの？」

「ああ。俺も着いて行きたいが、都合が悪くてな。すまないが、お前たちだけで行くんだ」

「ありがとう」

ミトはお礼を言い、ソフトを鞆に仕舞う。

「ハードを買わなきゃな」

「ナーヴギアで動くぜ。アミュスフィアはナーヴギアのセキュリティ強化版でしかないからな」

「そいつは助かる」

「ありがたい話ね」

本来なら、ナーヴギアは危険なものとされ、帰還した全てのSAOプレイヤーから回収しているが、ミトとキリトは密かに隠して持っていた。

「助け出せよ。アスナを。でないよ、俺たちの戦いは終わらない」

「ああ、いつかここでオフをやりよう」

「必ず連れ戻してくるわ」

3人は拳を合わせそう言い、ミトとキリトは店を出た。

家に着くと、ミトはすぐさま親の都合を確認した。

ミトの両親は共働きで、よく家を空けていることが多い。

幸いにも、今日はミトの母親は夜遅くまで帰って来ないし、ミトの父親も泊まりの仕事で明日まで帰って来ない。

それを確認し、ミトは自室へと向かった。

コートを脱ぎ、ソフトを取り出し、ナーヴギアの電源を入れ、ROMカードをスロットに挿入する。

そして、ベッドに横になりナーヴギアを被る。

「カイ……………お願い、力を貸して」

祈る様に呟き、ミトは2年ぶりにあの言葉を唱えた。

「リンク・スタート！」

暗闇の世界に飛び、そして、虹色のリングを潜り抜けるとアカウント情報登録ステージについた。

『アルヴヘイム・オンラインへようこそ。最初に、性別と名前を入力してください』

柔らかい女性の声で、案内される。

性別は女で、名前は愛着のある『M i t o』と入力した。

『それでは、種族を決めましょう』

「そう言えば、9つの種族が居るんだっけ。どれがいいのかしら」
碌に下調べをしてなかった為、ミトはどれにするか悩んでいた。

「闇妖精族………これにしよう」

ミトは目に付いた闇妖精に決めた。

理由としては、髪の色が紫色かかっているからだ。

『それでは、闇妖精族領のホームタウンへ転送します。幸運をお祈りします』

その言葉を最後に再び光の渦に巻き込まれ、次に感じたのは浮遊感だった。

そして、ミトは高山地帯にある洞窟を使った闇妖精族領の真上にいた。

徐々に中央の洞窟に近づいて行く。

すると、急に映像がフリーズした。

あちこちでポリゴンが欠け、ノイズが走る。

「な、何!？」

喚く暇もなく、再び落下し、暗闇の中に落ちていく。

そして、ミトは森の中に落下した。

同時刻、風妖精族領 首都《スィルベーン》近くの古森。
そこに1人のプレイヤーがいた。

黄緑色の髪に、背には細身の両手剣を背負ったそのプレイヤーは困り顔で辺りを見渡す。

「しまったな……リーファとレコンと逸れてしまった」

つい先ほどまで、一緒に狩りをしていたパーティーメンバーを思い出す。

いつも通り、顔見知りとなった仲間4人とリアルでも知り合いのリーファとレコンの7人で中立域のダンジョンを巡っていたら、サラマンダー火妖精族の8人パーティーに遭遇し、戦いとなった。

その混戦の中、彼は仲間と逸れ、現在1人で行動していた。

「まずいな……回復ポーションも心許ない。ここで襲われたら一溜りもないな。ここは俺だけでも《スイルベーン》に戻った方がいいかもな」

彼はそう判断し、背中にある翅を確認する。

飛行力が回復した証である、薄緑色の燐光が翅を包んでいた。

「よし、行くか」

そう言い、コントローラーを使用せずに飛ぶ、ALOの一流戦士の

証『随意飛行』で彼、『ジーク』は夜の空を飛んだ。

第3話 妖精との戦い

「キャッ！」

森の中に落下したミトは、軽い悲鳴を上げる。

「イタタツ」

腰を押さえながら立ち上がり、辺りを見渡す。

「闇妖精族のホームタウン………じゃないわね」

突如送り込まれた森の中で、ミトはそう呟く。

「そうだ、ログアウトボタンは……」

アナウンスで聞いた通りに左手を振り、メニューウインドウを出す。

メニューを操作し、一番下に《Log Out》のボタンを見つける。

「あった」

安堵の溜息を付き、試しに押してみる。

すると、《ワールドでは即時ログアウトはできません》と表示が出て《YES》《NO》の表示が出た。

ミトは《NO》を押し、今度はステータスを覗く。

「え？」

思わず口から短い言葉が漏れた。

《Mitto》の名前の下に闇妖精族なる種族名、HPとMPがあり、それぞれ400と80と初期設定だ。

ここまででは良かったが、その下にある取得スキル欄には複数のスキルが入っていた。

《両手鎌》《識別》《体術》《投剣》といった戦闘系スキルから、《料理》などの生活系スキルがあった。

しかもいくつかは完全習得されていて、他のスキルは800〜900代になっている。

「一体どういうこと？」

バグかと思ったが、よく見るとスキルの数値に見覚えがあり、ミトは少し思案する。

《両手鎌》 1000
《武器防御》 1000
《戦闘時回復》 882
《軽金属装備》 1000
《投剣》 954
《体術》 912
《軽業》 899
《料理》 1000
「あ、SAOと同じだ」

ようやく、その数値全部、ミトがSAOで習得していたスキルの熟練度と同じだと言うのに気づく。

いくつか欠損しているスキルもあったが、確かにミトが習得していたスキルだ。

「どうなってるの？ここはSAOの中なのかしら？」

不安を抱き、今度はアイテムウィンドウを出す。

そこには漢字やアルファベット、数字の羅列が並んでいた。

「うわ、文字化けしてる。多分、これはSAOで私が持ってたアイテムね」

そう思いながら、画面をスクロールさせると、ミトはある物を見つけた。

「嘘……どうしてこれが……！」

文字化けしてるアイテム群の中で、2つだけ文字化けしてない物があった。

《イクシオン・サイズ》と《ASMAP-001》。

ミトがあの世界で愛用していた鎌と、カイとの息子であるノアの心。

その2つが無事だった。

「まさか……！」

ミトは《ASMAP-001》をタップし、炎の形をしたオブジェクトを取り出す。

そして、震える指で2度タップする。

すると炎の様な明るい赤色の光が迸り、数秒後、光が収まるとそこにはミトとカイの息子、ノアが立っていた。

「……………ノア？」

「ん？……………母上？」

久しぶりに呼ばれた名に、ミトは目頭が熱くなり、ノアへと抱き付いた。

「ノア！良かった……………また会えた！」

「母上……………お久しぶりです！」

ノアとの再会を果たし、暫く経つとミトはノアにあることを告げた。

「ノア、今から言う事をよく聞いて」

そして、ミトはノアにカイが死んだことを話した。

「そんな……………父上が……………」

「ごめんね、ノア。カイを救えなかった……………ダメな母親で、ごめんね……………」

「……………いえ、母上が謝る必要はありません。父上は、きつと最後の時まで母上の事を想っていたに違いありません。父上が決めた事なら、それを尊重するのが息子である俺の役目です。だから、謝らないで下さい」

「ノア……………ノアは凄いな。私よりずっと大人だね」

「父上と母上の子ですから！」

ノアは腰に手を当て、胸を張って答えた。

「そっか。それでなんだけど……………ノア、いくつか聞きたいことがあるの」

カイの死を伝え、ミトはノアにここまで経緯を語った。

SAOプレイヤーの内、300人近い人間が未だに意識が戻らない事。

そして、その中にアスナが居ること。

アスナと思しき人物が、このALO内に監禁されてること。

ミトは、キリトと共にアスナを救う為ALOに来た事。

最期に、スキル熟練度と文字化けしなかった《イクシオン・サイズ》の事。

それらを伝えると、ノアは少し目を閉じ、静かになった。

数秒後、目を開きミトを見る。

「解りました、母上。どうやら、このALOはSAOのサーバーをコピーした物です。俺がこうしてSAOの時と同じ姿で再現できているのが、何よりの証拠です。また、セーブデータのフォーマットもほぼ同じな為、共通するスキルの熟練度は引き継がれたんでしょう。HPとMPは形式が違うから引き継がれなかったみたいです。所持アイテムは、ALOとは別物なので全て破損したと思われます」

「ちよつと待って。それが本当なら、どうして《イクシオン・サイズ》は無事だったの？」

ミトはアイテム欄にある《イクシオン・サイズ》を見つめ、尋ねる。「うくん、考えられることとしてはALOに《イクシオン・サイズ》が存在していて、そのまま引き継がれたと言う事ですね」

「そんなまさか……アレは、リズが作ったオーダーメイドで世に2つとない武器よ。それが偶々ALOにも存在するなんて……あり得ないわ」

「ですが、それ以外に可能性は思いつきません」

「うくん、取り敢えず武器の件は一旦保留ね。このアイテム群、やっぱ破棄するべき？」

「はい。スキル熟練度に関しては、プレイ時間と比較すれば不自然ですが、システム的には問題ありません。ただ、破損したアイテムに関しては、エラー検知プログラムに引っ掛かるといけないので、破棄するべきです」

「分かった………ねえ、《イクシオン・サイズ》はどうかしら？」
《イクシオン・サイズ》が無事だった理由については保留になったが、武器として使っているのかは別問題だったので、ミトはノアに尋ねる。

「それも問題はないです。《イクシオン・サイズ》は、完全にALO内に存在するアイテムとなっているので、大丈夫です」
「そう。分かった」

ミトは頷き、破損したアイテム群を処理し、初期装備の片手剣を外し、《イクシオン・サイズ》を装備する。

「ところで、ノアはこの世界だとなってるの？」
「俺ですか？」

ノアはSAOでは全システム維持管理プログラム、通称《ASMA P-001》、としてSAOの維持と管理をするはずだった。

最もその役割は、《カーディナル》が行うことになり、ノアはその役割を果たすことはなかった。

「どうやら、この世界のプレイヤーサポート用の疑似人格プログラム、《ナビゲーション・ピクシー》と言う存在らしいです」

そう言うと、ノアの身体は再度光り、今度は体長10cmぐらいの、背中に半透明の翅が2枚生えた、緑色の服を着た姿になった。

「これが《ナビゲーション・ピクシー》の姿みたいですよ！」

「あら、随分と可愛らしい姿になったわね」

「か、可愛らしい………男としては、可愛いよりカッコよくありたいです………」

「今のノアはカッコいいより、可愛いが勝る時期よ」

そう言い、ミトはノアに手を差し伸べる。

ノアはその手に乗り、ミトはそのまま肩に載せる。

「さて。ここで止まってる暇はないわ。ノア、世界樹つて所に行きたいんだけど、ナビ頼める？」

「任せてください、母上ー」

ノアがそう言った次の瞬間だった。

突如、森の奥から風妖精族のプレイヤー、ジークが転がる様に飛び

出て、それを追う様に火妖精族が飛んで来た。

「ん？なぜここに、闇妖精族が？もしかや追放者か？」

「ああん!?おおい、今日はついてるぜ！初心者ニュービーの、それも女じゃねえか！これは、お楽しみ決定だな！」

ミトもとい闇妖精族インブが居ることに疑問を持つジークと、ミトもとい女性プレイヤーサラマンダーが居ることに興奮する火妖精族。

第一印象として、火妖精族は最悪だった。

そして、ミトはそんな火妖精族サラマンダーに怒り心頭だった。

「ねえ、その両手剣持つてる人」

ミトは背負っていた鎌を構え、風妖精族シルフに尋ねる。

「あの男、私が狩ってもいいかしら？」

「いや、流石にそれはキツイと思うぞ？相手の装備から、かなりの実力者だ。初心者の君では、勝つのは……………」

「なら、無理だと思ったら割込みでもなんでもしていいわよ？ま、私が勝つけどね」

鎌を手に、ミトは火妖精族サラマンダーの前に立つ。

「おいおいおい！初心者ニュービーが鎌なんか使って大丈夫なのかよ！鎌はな、使い辛い武器No.1なんだぜ！使いこなすには、地獄の様な反復練習が必要なんだよ！初心者ニュービーが、一朝一夕で使える代物じゃねえんだよ！まあ、武器のランクだけは高いみたいだけど、ALOじや本人の腕次第なんだよ！」

「良く喋る口ね。ま、どんな武器でも使い手次第つてのは賛成ね。それと……………」

ミトがそう言った次の瞬間、ミトは既に火妖精族サラマンダーの懐に居た。

「へえあ!!」

「こっちは2年間、毎日鎌を振り回してたのよ」

その言葉を最後に、ミトは高速で火妖精族サラマンダーを斬り裂き、首、胴、脚と体を3分割にした。

「ぐあああああ!!」

火妖精族は悲鳴を上げ、身体が炎に包まれ、小さな炎になった。

「何、この小さい炎？」

「それは、残り^{リメイ}火^{イン}だ。倒されたプレイヤーの意識はまだそこにあって、猶予時間内に蘇生魔法か蘇生アイテムを使うことで復活させれるんだ。だから、炎が残ってる間は、余計なことを言わずにいるのがいい」

「へー」

そう言われミトは暫く黙っていると、炎は消滅し消えた。

「取り敢えず、危ないところ助かった。正直、ポーションが残り僅かで、余計な戦闘は避けたかったんだ」

「お礼ならいいわ。あの火妖精族の言動にイラついただけだし」

「そうか。だとしても、助けられて恩返しもしないのは俺の道理に反する。せめて、一杯奢らせてくれないか？」

「そうね……それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうわ。こつちも情報とか欲しかったし」

「情報？」

「ええ。特に、あの樹についてね」

ミトは遠くに見える、世界樹を見てそう言う。

「樹とは、世界樹の事か？」

ジークの問いに、ミトは頷く。

「いいだろう。こう見えて俺は結構古参だ。それなりの情報を期待してくれ」

そう言い、ジークは手を差し出す。

「自己紹介が遅れた。俺は『ジーク』。見ての通り、風妖精族^{シル}だ。もう一度になるが、助けてくれたこと感謝する」

「ミト、闇妖精族^{イン}よ。そして、この子がノア」

ミトはそう言って、肩に居るノアを紹介する。

「ノアです！母上共々、よろしくお願いいたします」

「ふむ……随分と礼儀正しい妖精だな。こちらこそ、君の母上に命を助けられた。感謝する」

ノアに頭を下げるジークがおかしく、ミトは思わず笑う。

「じゃあ、少し遠いが、北の方に中立の村がある。そこまで行こう」

「あれ？でも、スイルベーンって街の方が近いんじゃない？」

ミトはマップを開きながら、尋ねる。

「確かに近いが、あそこは風妖精族領だ。領内では、君から風妖精族を攻撃できないが、逆は可能だ。つまり……危険だ」

「大丈夫よ。倒せなくても制圧する技ぐらいあるから。それに、いぎとなったらジークが私の身分を保証してくれればいいでしょ？」

「なるほど……一理ある。ならば、街にいる間は俺と行動を共にしてくれ。流石に、俺の目が届かない範囲では、どうしようもないからな。では、行こう」

そう言うときジークは背中からは翅を出す。

「あ、そう言えば飛べるんだっけ。あれ、でも飛ぶにはコントローラーが居るんじゃない……」

「ん？……ああ、コントローラーを使わなくても飛べるんだ。『随意飛行』と言って、イメージで空を飛ぶんだ。と言っても、ふわっと飛ぶ感じではなく、背中から仮想の骨と筋肉が伸びると想定して、それを動かす。そうだな……ドラゴンが空を飛ぶ時をイメージすると分かり易いだろう」

あまり分かり易くないイメージだが、ミトには通じたらしく、ミトは少し背中を内側に収縮するように動かす。

すると、わずかに体が浮いたが、すぐに翅は動きを止めて、地面に降りてしまった。

その感覚を忘れないうちにもう一度動かすと、今度は高く浮いた。「やったー！浮いたわー！」

「うむ、その調子なら大丈夫そうだ。少し、この辺りを飛んで慣れてみてくれ。飛行時間に気を付けてな」

ジークに言われ、ミトは空を飛び、飛行に慣れる練習をする。

数分後には、ミトは『随意飛行』を完全に物にし、空を縦横無尽に飛んでいた。

「ここまで上達が早いとはな。流石の腕だ」

ジークはそう言い、空を飛んでミトに近寄る。

「では、『スイルベーン』に向かおう。ついて来てくれ」

ジークの案内の元、ミトはノアと共に『スイルベーン』へと向かつ

た。

第4話 翡翠の街《スイルベーン》

樹海を通り過ぎ、とうとう風妖精族領の《スイルベーン》が見える。

「あれが《スイルベーン》ね」

「真ん中の塔の根元に着陸する………ところでだが」

急に何かを思い出したのかジークが声を掛けてくる。

「ミト、ランディングのやり方は分かるか？」

暫くの沈黙の後、ミトは顔を強張らせた。

「………分からない」

「………ミト」

ジークは申し訳なさそうに表情を浮かべ、口を開く。

「すまない」

「すまないじゃないけど!」

ミトの叫びを聞かなかったことにし、ジークは急減速を始める。

「ノア!しつかり掴まってて!」

「は、はい!」

ミトはノアに掴まっておく様に言い、塔へとぶつかった。

「ジーク……次、こう言う機会があったら着地の仕方も教えて上げな
さい」

「すまない………本当にすまない………」

幸いなことに、ミトは受け身を取ることが出来たのでHPが全損する
ことは免れた。

減ったHPを見ながら、ミトはジークにジト目をして言う。

ジークは、ただ謝るしかできなかった。

「HPを回復してやりたいが、生憎俺は回復魔法が使えないんだ」
「いいわよ。そこまでしてもらおうのは悪いし」

そう言つて、ミトは上着のポケットを叩く。

「ノア、無事?」

「は、はい……無事です。しかし、驚きました……………」

ノアはポケットから顔を出し、驚いた表情をする。

「ノアも申し訳ない。俺の友人と出会えればいいんだが……………とりあえず、ポーシヨンで回復を」

そう言い、ジークはポーチからポーシヨンを取り出そうとする。

「そ、そんなバカなあああああああ!!」

すると頭上から声が聞こえ、3人は上を見上げる。

すると、黒い服のプレイヤーが塔に激突していた。

「私も、人目にはあんな風に見えてたのね」

「そのようだな」

暢気に会話してると、塔に激突したプレイヤーはそのまま落下し、地面に落下する。

「イテテ……………」

その黒いプレイヤーは、地面にぶつかった衝撃で動いていなかった。
咄嗟に受け身を取った為、HPの全損は免れたみたいだった。

「君、大丈夫か?」

落ちて来たその人物に、ジークが声を掛ける。

「あ、ああ……なんとかな……………」

黒いプレイヤーは体を起こしながらそう言う。

「キリト君、大丈夫!」

すると、風妖精族シッルの少女が降りて来て、その黒いプレイヤーに安否を尋ねる。

「キリト?」

ミトは、その名前に反応をした。

「リーファ、無事だったか」

「あ、ジーク! 貴方も無事だったのね!」

リーファと呼ばれた少女は、ジークを見ると安心したような表情をする。

「ああ、なんとかかな。レコンはどうした？」

「レコンはやられたわ。ごめん、私がついて居ながら」

「いや。リーファの所為じゃない。あの状況では、パーティーの全滅だって有り得た。そんな中、俺とお前が生き残った。十分な成果だろう」

「……そうね。ジークの言う通りだわ」

仲良さげに話すジークとリーファに、ミトは知り合いなのかなと思う。

「それより、リーファ。酷いじゃないか、お陰で飛行恐怖症になる所だったぞ?」

リーファに対し、キリトが恨みがましい顔で言った。

「ごめんごめん、お詫びに回復してあげるから」

「そうだ、リーファ。ついでに、彼女も回復してやってくれないか?」

「あ、そう言えば、その人は?」

「彼女はミト。彼女に命を助けられたんだが……生憎、ランディングのやり方を教えて無くて塔に激突したんだ。すまないが、頼めるか?」

「いいわよ。それじゃあ、ミトさん。キリト君の隣に立つて」

「ええ、わかったわ」

ミトはリーファに言われた通り、キリトと言うプレイヤーの隣に立つ。

「それじゃあ、行くわよ」

そう言うと、リーファは右手を上げ、呪文らしきものを唱える。

すると、2人に青い雫の様な物が降り注ぎ、減ったHPを回復させる。

「おお、凄い、これが魔法か……」

「初めての感覚ね」

初めての魔法にミトは興味深そうにする。

「で、ところでだけど……」

「ああ、そうだな」

ミトとキリトと言うプレイヤーは互いに顔を見合う。

「キリトなの?」「ミトなのか?」

互いに沈黙する。

「やっぱりキリト(ミト)か!」

2人はそう叫び、笑い合った。

「森に放り出された時、どうしようかと思ったけど合流出来て良かったぜ!」

「それ私も!正直、森に転送した時はどうしようかって思ったわ!」

2人で和気藹々と喋っていると、リーファとジークが声を掛けて来る。

「キリト君、ミトさんとは知り合いだったの?」

「ああ、友人だよ」

「ミト、どうやら友人の様だな。出会えたのなら良かった」

「ええ、お陰様でね」

ミトはそう言い、リーファに向き合う。

「改めて、ミトよ。キリトが世話になったわ」

「リーファって言います。こちらこそ、ジークがお世話になりました」

「ジークだ。どうやらリーファの危ない所を助けてもらったようだ。

礼を言わせてくれ」

「キリトだ。気にしなくていいさ。俺も、ALOの戦闘がどんなものか知りたかったしな」

4人は自己紹介を終えると、突如、キリトの娘「ユイ」がキリトの上着の胸ポケットから、ノアと同じ《ナビゲーション・ピクシー》の姿で飛び出した。

「ミトさん!」

「ユイちゃん!ユイちゃんも、出てくれたのね」

久々のユイとの再会に、ミトは喜ぶ。

「私もってことは、ノアも!」

「ええ。そうよ。ほら、ノア。ユイちゃんよ」

ミトがポケットに居るノアに声を掛ける。

すると、ノアは恐る恐る顔だけ出しユイを見る。

「や、やあ……ユイ。息災だっただろうか？」

何処か気まずそうに片手を上げて言うノア。

「ノア……良かったですー！」

そんなノアに、ユイは涙を流しながらも、キリトの胸ポケットから飛び出し、ミトのポケットに入っているノアに抱き付いた。

「また……また会えましたー！ノア、会いたかったですー！」

「う、うむ……」

ユイに抱き付かれ、困惑しながらノアはミトを見る。

そんなノアに、ミトはただ笑顔で答えた。

ミトの笑顔を見て、ノアは諦めたように息を吐き、ユイの頭を撫でた。

「久しぶりだな、ユイ。俺も、また君に会えて嬉しいぞ。またよろしく頼む」

「はいーこちらこそー！」

ノアとユイの再会に、ミトもキリトもホロリと涙を流す。

「え？《プライベート・ピクシー》ってあんなに感情豊かなの？」

「よく分からないが、喜ばしい事なのは確かだな」

リーファは、ノアとユイの行動に驚きながらも疑問を持ち、ジークはよく分かっているが良い事なのだと察した。

その後、リーファもキリトに助けられたお礼に一杯奢るつもりだったらしく6人はリーファとジークの行きつけの酒場兼宿屋へと向かった。

「リーファちゃん！ジーク！」

その時、後ろから誰かがジークとリーファに声を掛けた。

「ああ、レコン」

「お前も帰って来れたのか」

「無事だったんだ。流石はリーファちゃんにジーク……って、
スプリガン影妖精族に闇妖精族!？」

ミトとキリトを見るや否や、レコンは警戒し、腰の短剣を握る。

「ああ、大丈夫よ。この人たちが助けてくれたの」

「リーファはキリトに、俺はミトに助けられたんだ」
「へっ？」

唾然とするレコンを余所にリーファはレコンを指差す。

「こいつはレコン。私たちのフレンドなんだ」

「よろしく、俺はキリトだ」

「ミトよ。よろしく」

「あ、どうも」

レコンは2人に握手をし、頭をペコペコ下げる。

「つて、いや、そうじゃなくて！大丈夫なの？この2人、スパイとかじゃ」

「大丈夫よ。スパイにしてはキリト君、天然ボケ過ぎるし」

「うわ、ひでええ……」

さり気なくキリトは落ち込んでいた。

「ミトも大丈夫だろう。それに、恩人を疑うような真似はしたくない」
「嬉しいこと言ってくれるわね」

リーファとジークに保証されるも、レコンは疑わしそうに2人を見るも咳払いしてから口を開いた。

「シグルドたちはいつもの酒場で席取ってるよ。分配はそこでやるうって」

ALOではPKされたり、死亡するとアイテムの30%をランダムにロストするか、相手に奪われるが、保険枠と言うものがあり、あらかじめ設定したアイテムは死亡しても生き残ってる仲間の元に預けられる。

その為、ジークたちのパーティーも貴重なレアアイテムは保険として設定し、生き残ったリーファとジークが持っている。

「あ、そっか……ん、あたし今日はいいわ」

「俺も今日は遠慮する」

「え！来ないの？」

「助けてもらったお礼とお詫びに一杯奢る約束してるんだ。じゃ、お疲れ」

そう言うと、リーファはレコンに稼ぎのアイテムを全て渡し、キリ

トとミトに付いて来るように言って、先に行く。

「そう言う訳だ。レコン、俺とリーファの分も残りの皆で分けてくれ。それじゃあ」

ジークもレコンにアイテムを渡して、リーファの後を追う。

ミトとキリトも足早に2人を追った。

2人の後を追いつ、《すずらん亭》という店に着く。

「さっきのはリーファの彼氏？」

「恋人さんなのですか？」

席に着くなり、キリトとユイはそんな質問を、リーファにした。

「はあ!? 違うわよ! パーティメンバーよ!」

キリトとユイの質問にリーファは慌てて否定する。

「でも、その割には仲良さそうだったじゃない」

「リアルでも知り合いついていうか、私とジーク、レコンは学校の同級生なの………それじゃあ、改めて、助けてくれてありがとう。それと、迷惑かけてごめん」

「今日は俺達で奢らせてもらうから、好きなだけ注文してくれ」

2人はお言葉に甘え、食べたものを注文する。

飲み物として頼んだ香草ワインで乾杯し、注文したものを食べながら話す。

「それにしても、えらく好戦的な連中だったな。ああいう集団PKはよくあるのか?」

「元々、^{サラマンダー}火妖精族と^{シルフ}風妖精族は仲悪いんだ。だが、ああいう集団PKは最近だな」

「きつと………近いうちに世界樹攻略を狙ってるんだと思う」

リーファの言葉に、ミトとキリトが反応を示す。

「それだ。その世界樹について教えてほしいんだ」

「そう言えば、そんな事言ってたね。でも、なんで?」

「世界樹の上に行きたいのよ」

「……それは、全プレイヤーがそう思ってるよ。っていうか、それがAL0のグラウンドクエストなのよ」

「と言つと?」

「ALOは空を飛べることを売りにしてるが、滞空制限がある。どんな種族も連続で飛べるのは十分が限界だ。だが、世界樹の上にある空中都市に最初に到達して、『妖精王オベイロン』に謁見した種族は全員、『アルフ』っていう高位種族に生まれ変われる。そうなれば、滞空制限はなくなり、いつまでも、自由に空を飛ぶことが出来る。だからこそ、全種族プレイヤーは、世界樹を目指すんだ」

「なるほどね(な)」

ジークの説明に、注文したタルトとクッキーを齧りながら、キリトとミトは納得する。

「世界樹の上に行く方法は？」

「世界樹の根元がドームになっていて、そこが空中都市の入口になっているの。でも、そのドームを守ってるNPCのガーディアン軍団が凄い強さなの」

「そんなに……」

「オープンして1年経つが、未だにあの世界樹の半分を超えた種族は居ない」

「何か、キークエストとか見落としてるとか、単一の種族じゃ攻略できないとかなんじゃないの？」

ミトの指摘に、リーファが笑う。

「いいカンしてる。クエスト見落としはいま躍起になって検証してるわ。でも、後者は絶対に無理ね」

「どうしてだ？」

「だって矛盾してるもの。『最初に到達した種族しかクリアできない』クエストを他の種族と協力して攻略しようだなんて」

「……じゃあ、世界樹を攻略するのは、無理ってことか？」

「あたしはそう思う。でも、諦めきれないよね。いったん飛ぶことの楽しさをしっちゃやうとね。例え、何年かかっても、きつと」

「それじゃ遅すぎるのよ(んだ)！」

ミトとキリトが同時にそう叫んだ。

急に叫んだミトとキリトに、ジークとリーファも驚く。

「パパ、ミトさん」

「母上、キリトさん」

ユイとノアが2人を宥めるように、声をかける。

「……ごめん」

「……すまない。でも、俺たち、どうしても世界樹の上に行きたいんだ」

「……なんで、そこまで？」

「人を……探してるんだ」

「人を？ どういうことだ？」

「……簡単には説明できない」

「でも、そうしないといけないの」

キリトとミトは悲しそうな顔をして言う。

「ありがとう、リーファ。色々教えてもらって助かったよ。御馳走様、ここで最初に会ったのが君でよかった」

「ジークもありがとう。情報提供、感謝するわ」

そう言い、キリトとミトは席を立ち上がる

「ちよ、ちよつと待つてよ。世界樹に……行く気なの？」

「まさか、2人だけで突破しようと考えているのか？」

「ああ。この眼で確かめないと」

「無茶だよ、そんな……。ものすごく遠いし、途中で強いモンスターもいっぱい出るし、そりゃ君も強いけど……」

心配そうに言うリーファだったが、そこでジークが驚きの事を言い出す。

「よし。なら、俺も同行しよう」

「「え……？」」

ジークの行き成りの言葉に、全員が驚く。

「いや、でも、会ったばかりの人にそこまで世話になる訳には……」

「構わない。助けられた恩人へのお礼が、一杯奢るだけでいいのかとを考えても居たからな。世界樹までの案内、俺がしよう。それに、近いうちに領を出ようと考えていた。いい機会だ、同行させてくれ」

「……じゃあ、頼もうかな？」

「お願いできる？」

ジークの迷いない目に、キリトとミトはそう尋ねる。

「ああ、喜んで」

ジークはそう言い、キリトとミトと握手をする。
すると、それを見ていたリーファが立ち上がった。

「ちよつとジーク！貴方、何考えてるの!?!」

「リーファ、今急に決めたことだから驚くのは無理もないが、お前も領を出ようと考えていただろう?」

「そうだけど……だからって急すぎるでしょ!」

「……すまない。だが、もう決めたことだ」

固い決意を持って、ジークはそう言う。

「リーファ、すまないがシグルドやサクヤに、俺が抜けることを伝えて貰って「——も行く」……リーファ、今なんと?」

何かを呟く様に言ったリーファに、ジークが尋ねる。

「あたしも行くって言ったの!」

「「え?」」

「り、リーファ!?!お前、急に何を!?!」

「急なのはジークも同じでしょ!それに、領地を出るのが遅いか早いかなんて些細な問題よ!とにかく、あたしも行くから!キリト君とミトさんもいいよね!」

「あ……ああ、リーファも良ければ」

「こつちとしては有り難いけど……」

キリトとミトは押されるように頷く。

「よし!じゃあ、明日の午後三時にここでね。あたし、もう落ちなきやいけないから。ログアウトには上の宿屋を使ってね。また明日!」

そう言い残し、リーファはログアウトした。

「リーファの奴、急にどうしたんだ?」

リーファの行動に、ジークは疑問に思うも、ミトとキリトはなんとなく察しが付き、何も言わなかった。

第5話 意味あるものに

「取り敢えず、リーファの言った通りこの宿屋で部屋を取ってログアウトしてくれ。自身の領地以外では即時ログアウトは出来ない。そうなれば、PKや盗みの対象になるからな」

リーファの行動に驚きを隠せなかったジークだったが、一先ずは置いていてログアウトした。

その後、残されたミトとキリトは2人の言われた通り、上の宿屋で部屋を取った。

「じゃあ、また明日な」

キリトはミトとノアにそう言い、ユイと共に部屋に入ろうとした。「キリト、ちよつと待って」
すると、ミトがキリトを呼び止めた。

「ユイちゃん、ちよつとキリトと話があるから、少しの間だけノアの相手頼めるかしら?」

「パパとですか? いいですよ! ノア、お話ししましょう!」

ユイはミトの頼みを快く承諾し、ノアに駆け寄る。

「じゃあ、ノア。少しの間、ユイちゃんと一緒に居てね」

「はい、母上!」

ノアはそう言い、ユイと共にミトの取った部屋へと入る。

「ミト、話ってなんだ?」

「あまり人に聞かれない話だから、部屋に入りましょう」

ミトにそう言われ、キリトは大人しくミトを部屋の中へと入れる。「なんだが懐かしいわね」

宿屋の部屋を見て、ミトはそう呟く。

簡素なベッドと机、椅子があるのみの安宿屋。

S A Oに居た頃、最初の頃はこんな感じの部屋にお世話になったとミトは思う。

後はもうメニューウィンドウを開き、《Log Out》をタップすればミトはすぐ現実に帰れる。

だが、その前にミトはどうしてもキリトと話したいことがあった。

「それで、話ってなんだ?」

キリトは椅子に腰かけ、ミトに尋ねる。

「その剣の事よ」

そう言い、ミトはキリトの背中にある武器を指差す。

「さつきはリーファやジークが居た手前、聞けなかつたけど………それ、《ダークリパルサー》よね?」

キリトの背中にある薄く細い刀身が特徴的な白い片手剣《ダークリパルサー》。

SAOでキリトが愛用していた二振りの内の一つだ。

「ああ、どういう訳かデータが破損したアイテム群に紛れて無事だった」

「ちなみにだけど、理由に心当たりは?」

ミトがそう尋ねるが、キリトは首を横に振る。

「そっか………私の《イクシオン・サイズ》と言い、キリトの《ダークリパルサー》と言い………一体どうなってるのかしら?共通してるのは、どちらもオーダーメイドの品ってことだけだし………」

「………いや、違うんだ」

ミトがそう口にしたら、キリトがそう言いだした。

「え?違うって?」

「………残ってたのは、《ダークリパルサー》だけじゃないんだ………《エリユシデータ》も残ってた」

《エリユシデータ》。

それは、キリトがSAOで使っており、キリトこと《黒の剣士》を象徴する黒い片手剣だ。

第50層のフロアボスのLラストAアタックBボーナスで手に入れた魔剣クラスのドロップ品。

トバル曰く、しっかりと強化すれば90層まで使える剣とのことだ。

「オーダーメイドの剣だけじゃなく、ドロップ品のレア武器まで………一体どういう基準で残ってるのよ」

「それは、俺にも分からない。でも、どスキル制のPK推奨ゲームなら

重要なのは武器の性能とプレイヤースキルだ。世界樹に向かうなら、都合がいい」

「……………そうね」

キリトの意見に、ミトは賛成だった。

正直な所、若干チートっぽく思ってしまうが四の五の言ってる場合ではない為、その言葉を飲み込んだ。

「でも……………どうして《ダークリパルサー》なの？」

「え？」

「どうして……………《エリユシデータ》の方を使わないの？」

《ダークリパルサー》は、キリトがユニークスキル《二刀流》の為に、トバルに用意させた《エリユシデータ》と同等の性能を持つ剣。

だが、やはり数値を比較すると、《エリユシデータ》に軍配が上がる。《エリユシデータ》を使うか、《ダークリパルサー》と一緒に《二刀流》を使う。

しかし、キリトはどちらの選択も取らず、《ダークリパルサー》を使っている。

ミトはその理由を、キリトに尋ねる。

キリトはその質問に口を噤むが、暫く沈黙して口を開いた。

「あの剣は……………カイを刺した剣だ……………」

キリトの口から放たれた言葉に、ミトは思わず息を呑んだ。

「向き合わないといけない事だったのは分かっている。でも、《エリユシデータ》を握ると、カイの背中を刺した時の事を思い出すんだ」

キリトは自身の掌を見つめて言う。

「すまない……………ミト……………」

申し訳なさそうに目を伏せるキリトに、ミトは暫し沈黙し溜息を吐く。

「キリト……………私がどうしてALOに来たか分かる？」

「え？」

唐突にミトから質問され、キリトは顔を上げる。

「なんでそんなことを……………」

「いいから……………それで、分かる？」

「……アスナを助ける為、なんじやないのか？」

「ええ、それもあるわ。でも、それだけじゃない。私はね、カイの死を無駄にしたくないの」

「え？」

「カイは、最後まで決して諦めなかった。茅場明彦を倒して、全プレイヤーをデスゲームから解放する。例え、自分のHPが底を尽いて、自身が現実に帰れないとしても、私や貴方を、自分の大切な仲間を現実に返そうとした。でも………まだ目覚めてないプレイヤーが大勢いる」

ミトはそう言うと、悔しそうに壁を殴った。

「許せないのよ………まるでカイの死は無駄だって言われてるみたいで。でも、アスナを救う事が出来れば、もしかしたらまだ目覚めない他のプレイヤーも救うことができるかもしれない。………：カイは、もういない。なら、せめて私はカイの死を意味あるものにしたいの。アスナを、まだ目覚めないプレイヤーたちを目覚めさせて、本当の意味でSAOを終わらせる。それが………私がALOに来た理由よ」

ミトの言葉を聞き、キリトは頭の中で復唱した。

(カイの死を無駄にしたくない、か………)

キリトは暫し無言になり、そして、勢いよく自身の頬を叩いた。

その行動に、ミトは少し驚いていた。

「そうだな………アスナを救って、SAOを終わらせる。それが、カイの相棒としての最後の務めなのかもな」

そう言うキリトの表情は、少し明るかった。

「ええ。そして、カイの恋人としての、私の最後の務めよ」

そんなキリトに、ミトは笑みを浮かべて言う。

「ミト……正直、俺はまだカイを刺した自分を、カイが死ぬ原因となった俺の行動を、俺自身まだ許せない。それでも、真の意味でSAOを終わらせたい。だから、力を貸してくれないか？」

「言われなくてもアスナは私の親友。最初からそのつもりよ。むしろ、私の方からお願いするわ。アスナを救うのを、SAOを終わらせ

るのを……カイの死を意味ある物にするために、力を貸して」
「ああ、勿論だ」

2人は握手を交わし、笑い合った。

第5. 5話 ノアとユイ

ミトがキリトと話をしている頃、ノアとユイはミトが取った部屋で一緒に居た。

2人はナビゲーション・ピクシーの姿ではなく、本来の姿になっていた。

だが、どう言う訳かノアは床に正座させられ、その前にユイが腕を組んで立っていた。

「その……ユイ。俺としては椅子かベッドに座りたいんだが……」

「そうですね。私もノアとはお話がしたいです。でも、その前にノアにはどうしても言いたいことがあります」

そう言つて、ユイは勢いよくノアの頭を叩いた。

「ちよっ!?ユイ、行き成り何を!?!」

「あの日、自分が何したか分かってますよね!」

あの日とは、SAOの第1層《はじまりの街》の地下にあるダンジョンでの出来事の事だ。

その事を言われ、ノアはハツとする。

「あんな無茶して……私なんかの為に自分を犠牲にするなんて馬鹿のすることです!馬鹿ノア!」

「ば、馬鹿!?!」

「そうです!残された人の事も考えないで、あんなことするノアなんて馬鹿です!」

「だ、だが、あの時のユイだつてキリトさんやアスナさんを残して消えようとしてたし……」

「それはそれ!これはこれ、です!」

自分の事は棚に上げて怒るユイに、ノアは「理不尽だ」と思いながらも言葉を飲み込んだ。

結果として、カイやミトを残して消えたのは自分だからだ。

「カイさんやミトさんがどんな想いだつたか……それに、私だつてノアが居なくなつて寂しかったんです……」

いつの間にか涙を流して怒るユイに、ノアは頭を掻き立ち上がった

た。

そして、そのままユイを優しく抱きしめた。

「すまなかった……確かに俺は大馬鹿者だな。父上や母上、それにユイを残して勝手に満足して消えようとした。すまない、ユイ」

「……………もういいです。こうして、ノアは戻ってきてくれましたから。でも、一つだけ約束してください！」

そう言っユイはノアに抱きしめられたまま、ノアを見上げる。

「二度と勝手に居なくならないで下さい！」

「そう来たか……………分かった。出来る限り守れるように頑張ろう」

「出来る限りじゃありません！絶対です！」

「やれやれ……………分かった、絶対だ」

「はい！」

ノアがそう言うと、ユイは笑顔で頷いた。

その後、ノアが自分が居なくなった後の話を聞かせてくれとユイに頼むと、ユイは「勿論です！」と言い、2人はベッドに腰掛けた。

「なあ、ユイ。話をするだけにしてはくっ付き過ぎないだろうか？」

そう言い、ノアは自分にべったりとくっ付いてるユイに言う。

「くっ付き過ぎじゃないです。むしろ、もつとくっ付かないとです」

「いや、くっ付き過ぎて俺の身体がベッドから落ちそうだぞ」

「今まで会えなかった分、もつとノアにくっ付きますよ。覚悟してくださいね、ノア」

ニコニコと満面の笑みを浮かべるユイに、ノアは頭を掻きながら困惑することになった。

第6話 現実でのジークとリーファ、ついでにレコン

翌日の午後1時半。

1人の少年が、学校へと来ていた。

今の時間は5時間目が始まったぐらいで、この時間に歩いている1年生や2年生はおらず、自由登校の3年生も高校入試直前の集中ゼミナールの受講生が殆どで、こんな時間に校内を歩いているのは推薦入試組の者だけだった。

「あ、花部君！」

「ん？ああ、桐ヶ谷さん」

振り返った少年の名は、花部順樹。

そして、順樹を呼び止めた少女の名はキリトこと桐ヶ谷和人の妹、桐ヶ谷直葉。

ALOではジークとリーファの名でプレイしている。

「そっちはいつも通り剣道か？」

「そうだよ。そっちも部活？」

「ああ。もう少しでいい絵が描けそうなんだ」

順樹は美術部に所属しており、推薦組と言うこともあって時間があり、1、2年の美術の授業がない時は、美術室に入り浸っている。

文化部の順樹と運動部の直葉。

どうして真逆の位置にいる様な2人が、友人となり、ALOをプレイしているのかと言うと、それは中学入学から間も無い事だった。

あの日、直葉は何時ものように部活の練習の為、休日に学校を訪れていた。

だが、運悪く顧問の教師が体調を崩し、その日の練習は無くなった。

そのまま自宅に帰ろうかと思ったが、生徒の居ない校舎に冒険心を擦られ、休日の校舎を見て回っていた。

その時、直葉は偶然にも美術室を覗いた。

そこでは、1人で黙々とキャンバスに絵を描く順樹が居た。

直葉は芸術には疎く、どんな絵を見ても綺麗な絵かそうじゃないかぐらいでしか判断が出来ない。

だが、順樹の描く絵には何故か心惹かれ、気が付けば美術室に入り、順樹の後ろから、順樹の描く絵を見続けていた。

何時間が絵を見続け、美術室内が夕日で照らされ始めた頃、絵を描く手を止めた順樹が、ふと後ろを振り向き、2人の目が合った。

一瞬の沈黙の後、2人は驚き、思わずその場から飛び退いた。

互いに一通り驚いた後は、丁寧に自己紹介をした。

『えっと、どうも。花部順樹です。1年です……』

『あ、どうも。桐ヶ谷直葉です。同じく、1年です……』

あまりにも簡単な自己紹介に、直葉は「あの時は焦ってた」と回答を示した。

それからと言うもの、直葉と順樹の2人は妙な縁が出来たのか、日常でも関わるが増え、気が付けば友達になっていた。

ALOも直葉から誘われたのをキツカケに、順樹は始めた。

元々、ゲームにあまり時間を割けない2人にとって完全スキル制のALOは有り難かった。

「しかし、急だったな、アルンまで付いて来るなんて……」

「急なのはそっちもでしょ。花部君は危なっかしいんだから、保護者である私が付いてないと」

「確かに、桐ヶ谷さんにはリアルでもALOでも世話になっているが、俺はお守りが必要な子供じゃないんだ。自分の事ぐらい自分で……」

「この間、必要な画材買いに行って予定より多くの物買い過ぎてどう持ち運ぼうか途方に暮れてたのは誰だっけ？」

直葉にそう言われ、順樹は口を紡ぐ。

「それに、この間、ALOで道に迷って中立地帯を3時間も彷徨ってたのは誰だっけ？」

「………すまない、俺だ」

「で、そんな君を助けたのは誰だったかな？」

「………桐ヶ谷さんだ………すまない、俺はどうやら自分が思ってる以上に桐ヶ谷さんに迷惑を掛けてるみたいだ、本当にすまない」

「良いよ。別に、怒ってないから。とにかく、花部君には私が付いてな

いとダメなんだからね。それより、そのすぐ謝る癖直しなってる」

直葉は強引に話を終わらせようと、話題を順樹の謝り癖に変える。

そんな話をしながら、駐輪場まで来ると駐輪場の陰から1人の少年が飛び出してきた。

「リーファちゃん。それにジークも」

行き成り、2人をALOでのプレイヤーネームで呼ぶ少年の名は、長田慎一。

ALOではレコンの名でプレイしている少年だ。

「ちよつと長田君！学校ではその名前は呼ばないでって言ってるじゃない！」

プレイヤーネームを言う長田に直葉はキレる。

「ご、ごめん！直葉ちゃん！」

馴れ馴れしく名前呼びする長田に、直葉は無言で竹刀に手を伸ばす。

「すみません、桐ヶ谷さん！」

素早く謝る長田に溜息を吐き、直葉は竹刀から手を離す。

「それで、長田。俺達に何か用か？」

「ああ、そうだった。シグルドが今日の探索は海底洞窟でしょうってさ。あそこ、サラマンダー火妖精族はあまり来ないし」

「狩りの話ならメールでいいって言ったでしょ。……それと、あたしと花部君、暫く参加できないから」

「ええええええ!!?どうして!？」

「実は、アルンまで行くんだ」

長田の疑問に順樹が答えると、長田は目を見開き驚く。

「そんな！この前、僕が誘った時は断ったのに!？」

「あんたと一緒に何回全滅するか分かったもんじゃないでしょ」

「て、ていうかそんなの駄目だよ！リーファちゃんとジークの2人だけなんて！そんなの破廉恥だよ！」

「何言ってるのよ!?!変な事想像しないで！第一、2人つきりじゃないから！」

「昨日の影妖精族スプリガンと闇妖精族インプの2人を案内するんだ。助けてもらった

お礼に」

「そう言う訳だから、シグルド達にはよろしく言っといてね。じゃあね！」

そう言い残し、直葉は自転車に跨り去って行った。

「俺も帰る。じゃあ、長田。よろしく頼んだ」

順樹も長田にそう言い、自転車で去って行った。

第7話 旅立ち

翌日、ミトは目を覚ますと母親が用意しといてくれた朝食を食べてアスナのお見舞いへと向かった。

途中キリトと出会うも、前みたいな気まずさはなく、2人は世間話をしながら病室へと向かった。

お見舞いを終えて、家に帰ると適当に昼食を済ませ、ネットでALOの情報を集めているうちに午後3時となり、ミトはALOへとログインした。

ログインすると、ちょうどキリトもログインしたらしく宿屋の部屋から出て来た。

「さつきぶりね、キリト」

「ああ、そうだな」

一階に降りると、まだジークとリーファの2人は来てないらしく、2人は昨夜座っていた席に座り、2人が来るのを待っていた。

暫く待つと、ジークとリーファの2人が店に入って来た。

「お待たせ」

「すまない、少し遅れた」

「いや、そんな待つてないよ」

「私達も今来たところだしね」

「そっか、ちよっと買い物してたから、かなり遅れたかなって思っちゃった」

「買い物か…：俺達も色々準備しないとな」

「武器はともかく防具をなんとかしないとね」

「それなら武器屋に行こう。所でだが、金はあるか？」

ジークに言われ、ミトとキリトは所持金額を確認する。

本来なら1000ユルドと言う所持金額があるのだが、2人はSAOのデータを偶然にも引き継いでいる。

その為、SAOクリア時に持っていた膨大のコルも単位がユルドに変化して、そのまま引き継いでいた。

「問題ないわ」

「同じく。結構持ってたよ」

「じゃあ、武器屋に案内するよ」

「ああ。ほら、ユイ起きろ。行くぞ」

「ノアも起きなさい」

ミトとキリトが声を掛けると、ノアとユイの2人が胸ポケットから顔を出し眠そうに欠伸をする。

「おはようございます、パパ。それにミトさんとノアも」

「同じくおはようございます、母上にキリトさん。それとユイ」

「ああ、おはよう」

「おはよう、2人共」

朝の挨拶をするとユイはキリトの胸ポケットから飛び出し、そのままミトの胸ポケットに入る。

「えへへ、ノアの隣失礼しますね」

そう言い、ユイは嬉しそうにノアにくっつく。

「あら、ユイちゃんと随分仲良くなったみたいね。もしかして、付き合っちゃった?」

「母上、揶揄うのはよして下さい」

ノアの隣に来てご満悦のユイを見て、ミトはノアを揶揄う。

「ユ、ユイ……!ミトに迷惑が掛かるから止めなさい!それと、ノア!いくら親友の息子と言えども、ユイはやらないぞ!ユイが欲しければまずは俺を倒してからにしろ!」

親馬鹿キリトは、頑固おやじの様にそう言う。

「まあまあ、いいじゃない。私は気にしないし」

そんなキリトをミトは宥める。

「で、でもな?流石に若い内から男女がそんなに距離が近過ぎるのはどうかと思うんだが……!」

「そんなこと言っていると、ユイちゃんに嫌われるわよ」

「そ、そんなことある訳ないだろ!ユイは、俺の事嫌いになったりしないよな!」

「……パパ」

ぎやーぎやーと騒ぐキリトに、ユイは笑顔で口を開く。

「ノアと仲良くしちやダメなら、パパのこと嫌いになります」

その言葉に、キリトの心のHPが一気に削られた。

キリトはそのまま地面に倒れた。

「娘が親友の息子に奪われた……………」

「ほらほら、さつさと武器屋に行くわよ。じゃあ、ジーク、リーファ、案内宜しくね」

「ああ、ついて来てくれ」

「え？キリト君はスルーなの、ジーク!？」

キリトを引き摺りながらジークに案内を頼むミト、そして、気にせず案内を始めるジーク、そして、キリトをスルーなことに驚くリーファだった。

武器屋に着くころにはキリトも復活しており、ミトとキリトは手早く防具を購入した。

2人共特にデザインに拘りはないので、ミトは紫を主体とした防御属性強化された服にマント、胸当てにし、キリトも同様には黒色の防御属性強化された服に黒のロングコートにした。

その後、世界樹に向け出発する際、風妖精^{シルフ}のシンボルの風の塔へと向かっていた。

「なあ、どうして塔に行くんだ？」

「長距離を飛ぶ時は、高度を稼ぐために塔の頂上から飛ぶのが良いんだ。そうすれば、飛ぶ時間が伸ばせるしな」

「なるほどね」

ジークの言葉に、キリトは納得する

「さ、行く。夜までには森を抜けておきたいからね」

リーファはそう言い、ミトとキリトに塔の中へ入って行くように手招きする。

風妖精族^{シルフ}賑わう塔の中に入り、4人は近くの魔法力で動くエレベーターに向かう。

「リーファ！ジーク！」

「あ、こんにちは、シグルド」

「昨夜ぶりだな、シグルド」

行き成りリーファとジークに声を掛けてきた男性プレイヤーは2人の知り合いらしく2人は挨拶を返した。

シグルドはリーファとジークがここ数週間行動を共にしていたパーティーのリーダーで、リーファやジークとは肩を並べる程のプレイヤーであり、また風妖精族^{シルフ}領主のサクヤの側近も務めている。

「パーティーから抜ける気なのか？」

「うん、まあね」

「残りのメンバーが迷惑するとは思わないのか？」

「パーティーに参加するのは都合の付く時だけではないはずだろ？それに、抜けたくなったらいつでも抜けていいと言う話だったはずだ」

「だが、お前たちは俺のパーティーの一員として既に名が通ってる。そのお前らが理由もなく抜けたら、こちらの顔に泥を塗られることになる」

自分勝手な理由にリーファもジークも心の中で溜息を吐く。

ALOに限らず、ハード志向のMMOでは女性プレイヤーは希少で、パーティーに迎えるのは戦力としてと言うより、パーティーのブランドを高める付加価値としてスカウトされることが殆どだ。

ましてや、リーファは一度シグルドを戦闘で倒したこともあり、そんなリーファを自身の部下として迎えることで自身の勇名を落とさないようにした。

それが、シグルドがリーファをパーティーに居れた理由だった。

ジークはシグルドのそんな考えを見抜いた上でシグルドのパーティーに参加することにし、常にリーファを晒される危険から守っていた。

「シグルド、俺やリーファの行動が勝手なのは承知の事だ。だが、お前の都合で最初に決めた事を反故にしようとするお前も勝手なんじゃないか？」

「黙れジーク。お前の意見は聞いてない。戦力として申し分ないからスカウトはしたが、お前なんぞ居ても居なくても変わらないんだぞ、リーファの腰巾着が」

ジークに対し暴言を吐くシグルド。

そんなシグルドに我慢の限界なのか、リーファは思わず腰の剣に手を伸ばしかけた。

「仲間はいアイテムとは違うぞ」

「……なんだと？」

すると、リーファが剣を抜くより、キリトが先に一步前に出て、シグルドにそう言った。

「他のプレイヤーをあんたの大事な剣や鎧みたいに装備欄にロックしとくことはできないって言ったのさ」

「き、貴様！」

キリトの言葉に、シグルドは腰の剣の柄に手をかける。

「屑漁りの影妖精族風情がつけあがるな！どうせ領地を追い出された追放者だろうが！」

「失礼なこと言わないで！彼はあたしとジークの新しい仲間よ！」

シグルドの言葉にリーファは叫び替えていた。

「なん……だと……リーファ、領地を捨てる気なのか……」

「……ええ、そうよ。あたし、ここをでるわ」

「……子虫が這いまわる程度なら捨て置こうと思ったが、泥棒の真似事とは調子に乗り過ぎたな。のこのこと他種族の領地に入ってくるからには斬られても文句は言わんだろうな」

キリトに剣を向け、芝居がかったセリフにキリトは肩をすくめる。

「言ってくれるわね。斬られても文句はない？上等よ」

すると、今度はミトがキリトの前に出る。

「な、何者だ!？」

「ミト、闇妖精族よ。そんなにリーファやジークが惜しいなら、私たち

を倒して言い聞かせたら？もつとも、それ程の腕があるならだけど」
「き、貴様!!」

キリトからミトに標的を変え、シグルドは叫ぶ。
「良いだろうー！お望み通りにしてやるー！」

今にもミトを斬りそうなシグルドに、ジークもリーファも戦闘態勢に入る。

「まずいつすよ、シグさん。こんな人目のある所で無抵抗の相手をキルしたら」

後ろに居たプレイヤーの言葉にシグルドはハツとする。

確かにミトはシグルドに対して斬り掛かる様に仕向ける態度を取ったが、デュエルでも、スパイ行為をした訳でもないのに、攻撃することが出来ない相手を斬れば見栄えがいいとは言えない。

更に、騒ぎによって多くのプレイヤーの前も集まっている。

そんな中で無抵抗の女性プレイヤーを斬ったとなれば、シグルドの名は失墜する。

その為、シグルドは忌々しそうにミトとキリトを睨み、リーファに視線を向ける。

「せいぜい外では逃げ隠れることだな。……今俺を裏切れば、近いうちに必ず後悔することになるぞ」

「留まって後悔するよりはずつとマシだわ」

「戻りたくなかったときのために、泣いて土下座する練習をしておくんだな」

それだけ言うとしグルドとその仲間たちは去って行った。

「ごめん、変なことに巻き込んだんじやって」

「いや……でも、いいのか？領地を捨てるなんて？」

キリトの言葉にリーファは無言になり、そのままエレベーターに向かう。

そんなリーファを見てみるとジークが「気にしないでくれ」と言い、エレベーターに向かったのでミトとキリトも慌ててエレベーターに乗る。

塔の最上階に着くと、そこには、海原、草原、森、山脈が広がって

いた。

「おお、すごい」

「空が近いわね」

「でしょ。この空を見てるといろんなあことがちっちゃく思えてくるよね。……いいきっかけだったよ。いつかはここを出ていくつもりだったし」

「そうか……でも、喧嘩別れのような形にさせちゃって……」

「シグルドは上昇志向の強いプレイヤーだ。誰よりも強い最強の剣士になる。そんなアイツと同じパーティーに居た以上、パーティーを抜ける際はかなり揉めることは俺もリーファも覚悟の上だ。キリトやミトが気にすることはない」

「……でも、なんでああやって縛ったり、縛られたりするのかな……せつかく翅があるのに……」

リーファはそう呟き、空を見上げる。

「フクザツですね、人間は」

リーファの呟きに答えたのは、ミトでも、キリトでも、ジークでもなく、ユイだった。

「人を求める心を、あんなふうややこしく表現する心理は理解できません」

ミトの胸ポケットからノアと共に顔を出し、ユイが言う。

「求める……?」

「私なら……」

そう言うと、ユイは隣のノアに抱き付いた。

「こうします。とてもシンプルで明確です」

ユイの行動に、リーファは呆然とし、ジークは「シンプルだな」と感心し、キリトはショックを受けた。

「す、すごいAIね。プライベートピクシーってみんなそうなの?」

「この2人はいろんな意味で特別なのよ」

そう言ってミトはユイとノアの頭を、指先で優しく撫でる。

「リーファちゃん!ジーク!」

その時、誰かがエレベーターから現れ、声を掛けた。

「あ……レコン」

「そんなに急いでどうした？」

「ひ、酷いよ！、一言声かけてから出発してもいいじゃない！」

「ごめーん、忘れてた」

「すまない、俺達も急いでたんだ」

レコンは肩を落とすが、すぐに持ち直し真剣な顔で言った。

「リーファちゃん、ジーク、パーティー抜けたんだって？」

「その場の勢い半分だけどね。あんたはどうするの？」

「決まってるじゃない、この剣はリーファちゃんだけに捧げてるんだから……」

そう言い、レコンは腰の短剣を抜き、天に掲げる。

「えー、別にいらない」

リーファの言葉にずっこけるが、レコンはそんなことではメゲなかった。

「ま、まあそういうわけだから当然僕もついてくよ……と言いたいとこだけど、ちよつと気になることがあるんだよね……」

「……なに？」

「シグルドに何かあるのか？」

「まだ確証はないんだけど……少し調べたいから、僕はもうしばらくシグルドのパーティーに残るよ。……キリトさん、ミトさん、彼女、トラブルに飛び込んでくくせがあるんで、気をつけてくださいね。後、ジークは戦闘では頼りになるけど、普段は抜けてる所があるのでフォローお願いしますね」

「ああ。わかった」

「任せといて」

「それから、キリトさん、それに、ジーク！言つときますけど、彼女は僕の」

その瞬間、リーファがレコンの足を踏みつけた。

「イツツ！」

「しばらくは中立区域に居るから、何かあったらメールでね！」

それだけ言うと、リーファは翹を広げ飛んだ。

「レコン、まだ何処かで会おう」

それに続き、ジークも飛ぶ。

ミトとキリトも翅を広げ2人の後続く。

リーファとジークに追いつくと2人は後ろを振り向き、笑顔で言った。

「ぎ、急ごう！一回の飛行であの湖まで行くよ！」

「しっかりついて来てくれ！遅れるなよ！」

第8話 一緒に生きたかった

《スイルベーン》が遙か後方に遠ざかり、シンボルの翡翠の塔が見えなくなるまで離れた《古森》エリアでミト達は羽根が生えた巨大な蜥蜴《イビルグランサー》に襲われた。

風妖精族^{シルフ}の初級ダンジョンのボス級の戦闘能力を持ち、《邪眼》と呼ばれる呪い系^{カース}の魔法攻撃でステータスを大幅に下げて来る厄介なモンスターだ。

だが、そんな敵もお構いなしにミトとキリトは、防御も回避もせず突っ込み、手にした鎌と剣で斬り割いた。

5体も居たモンスターはあっさり倒され、残りの1体もジークが攻撃をし、HPを減らした所でリーファがホーミング系の魔法を使い倒した。

そこで、4人の滞空時間に限界が来たので、一度地面に降りることになった。

地面に降りると慣れない空中戦闘に疲れたミトとキリトは体を伸ばしたり、肩を回したりする。

「疲れた？」

「いや、まだまだ」

「頑張るわね。でも、空の旅はここでおしまいよ」

「どうして？」

「あれよ」

ミトの質問にリーファは聳える山を指差す。

「あの山の高さが飛行限界高度を超えてるのよ。だから、山越えにはあの山にある洞窟を抜けないといけないのよ」

「洞窟って長いのか？」

「かなり長いな。短時間で通り抜けるのは不可能だろう。一応、途中に中立地帯の鉱山都市があるから、休むこともできるがな」

「えっと、リアルだと今は夜の7時ね。私やジークは大丈夫だけど、2人は？」

「俺は問題ないぜ」

「私も平気」

「じゃあ、もうちよつと頑張ろう。ここで、ローテアウトしよつか」
聞きなれない言葉にミトとキリトが首を傾げる。

「ローテアウトするのは、交代でログアウト休憩することだ」

「中立地帯だから即落ち出来ないのよ」

そんな2人の表情から察して、ジークとリーファが答える。

「なるほどね。だから、交代で残った人が空っぽのアバターを守るって訳ね」

「そういうこと」

「なるほど、なら、先にリーファとミト、ジークから落ちてくれ。俺は後でいいから」

「いや、何かあった時1人だと危険だ。俺も残ろう」

「いいのか？悪いな」

「じゃ、お言葉に甘えて」

「よろしくね」

そう言つてミトとリーファはログアウトした。

ログアウトした後、ミトはすぐさまシャワーを浴びる。

ずっとベッドに横になって寝てるだけかと思うが、仮想世界での戦闘は緊張で汗を掻くので長時間ダイブした後は無性に汗を流したくなる。

かつて、SAOのβテストをしていた時に知ったことだ。

シャワーを終えると、キッチンの冷蔵庫から10秒で栄養の摂取が可能な飲むゼリーを呑んで簡単に食事を済ませると、ALOにダイブした。

ミトがダイブするとちょうど、リーファも戻ってきたところだった。

「おう、おかえり」

「早かったな」

キリトとジークの2人は口になかを啜っていた。

「ただいま。何啜ってるの？」

「出発前に雑貨屋で買ったんだ。莖パイプ、スイルベーン特産だって」
「あたし、知らないわよ」

「俺もキリトに今教えられたんだ。こんな物があつたなんて知らなかった。リーファもどうだ？」

そう言つてジークは、リーファに新しい茎パイプを渡した。

「キリト、面白そうだし私にもくれる？」

「ええ、今啜えてるのが最後なんだけど……」

「どうせ今から落ちるでしょ」

そう言い、ミトはキリトの口から茎パイプを奪い取り、啜える。

「あ……」

そのミトの行動に、リーファは思わず声を漏らした。

ついさつきまでキリトが啜えていた物を、恥ずかし気も、躊躇いもなく啜えるミト。

それは間接キスに他ならない。

思わず、リーファは手元にあるジークから貰った茎パイプに視線を落とす。

別にジークが口に啜えていた物ではないし、リーファが啜えた所でそれは別に間接キスにはならない。

だが、思わず「もし、この茎パイプがジークの啜えた物だったら」と妄想してしまう。

そんな妄想をしたら、思わず顔が赤くなり、その妄想を消し去る様に頭を振る。

「じゃ、今度は俺達が落ちるな」

「少しの間、体は任せた」

そう言い、キリトとジークはログアウトした。

「へ、これ結構スツテするわね。でも、癖になりそう」

ミトは楽し気に茎パイプの味を楽しんでおり、そんなミトにリーファは思い切つて尋ねることにした。

「あの、ミトさん」

「ん？何？」

「ひよつとしてなんですけど……もしかして、キリト君とお付き合
いしてるんですか？」

リーファからの質問に、ミトは思わず驚き、瞬きをした。

「いや、急に变なこゝと聞いてすみません！その、2人の距離が凄く近いし、きつきの戦闘も息合つてたし……今だつてパイプの间接キスも気にしてなくて」

「え？……ああ、そういうこゝとね」

リーファが唐突な質問をしてきた理由が分かり、ミトは笑つて答える。

「悪いけど、別に私とキリトはそう言う関係じゃないわ。少し前に同じゲームやつて、それで仲が良いだけ。间接キスも、お互いに異性として意識してないだけよ。それに私、恋人いるからさ」

「あ、そうだつたんですね……どんな人なんですか？」

「………優しく、頼りになつて、弱い所もあるけど、そこも魅力的。

そして、私の事をちゃんと愛してくれる」

「なんて言うか………素敵な人ですね」

「ええ、私には勿体ないぐらいの人よ。それこそ………私の一生を掛けてでも一緒に生きてかつた」

「………え？今、なんて……」

「………ごめん、なんでもない。今のは忘れて」

そう言い、ミトは立ち上がり体を伸ばす。

「あ………はい」

リーファは頷き言うも、一瞬だけ悲し気な表情をしたミトの顔が忘れられなかつた。

「ただいま」

「戻つたぞ」

「あら？早かつたわね、ご飯は？」

「ああ、家族が用意してくれたから大丈夫だ」

「俺も大丈夫だ」

「じゃあ、行きましょう。リーファ、案内お願いね」

「あ、はい……」

「ん？リーファ、どうかしたのか？」

暗い表情のリーファにジークは、様子がおかしいと思ひ声を掛ける。

「あ、ううん。大丈夫、何でもないので。それじゃあ、行こうか！」
リーファはそう言い、翅を広げ、飛ぶ体勢に入る。

ミトとジークも飛ぼうと翅を広げる。

その時、キリトが何かに気づいたような表情で、後ろを振り向いた。
「どうした、キリト？」

「いや、誰かに見られてる気が……ユイ、ノア」

キリトはノアとユイに声を掛ける。

「パパ、どうしました？」

「近くにプレイヤーの反応はないか？誰かに見られてる感じがするんだ」

「待ってください……いいえ、ありません。ノアはどうですか？」

「……いや、こつちもだ。キリトさん、少なくともこの近くにプレイヤーは居ません」

ユイとノアの言葉を聞き、リーファは少し何かを考えてから、口を開く。

「ひよつとしたら、トレーサーが付いてるのかも」

「トレーサー？」

「追跡魔法よ。大概ちっちゃい使い魔で術者に対象の位置を教えるの」

「解除は出来ないのか？」

「見付けられたら可能だが、術者の魔法スキルによっては対象との間に取れる距離も増える。この森だと見つけるのは無理だろう」

「そうか……まあ、気のせいってこともあるかもしれないから、気にしなくてもいいだろ」

「じゃあ、先を急ぎましょう」

「うん」

頷き合い、空を飛び、4人は洞窟の所まで向かった。

第9話 囚われの閃光

大理石で作られた丸テーブルと椅子。

傍らには純白の豪華な天蓋付きのベッド。

床には磨き抜かれた白いタイルが真円形に張り巡らされている。

そして、それを囲う金属製の格子。

そこにアスナは居た。

S A Oの開発者にして、デスゲームの首謀者、そして、アインクラッドのラスボス“ヒースクリフ”こと茅場明彦をカイの犠牲の下倒し、後はアスナ含め全員が帰還するだけだった。

だが、アスナが目を覚ましたのはこの檻の中で、既に自身の感覚では60日以上が経過していた。

今のアスナは、長い栗色の髪はそのままだが、身に着けているのは胸元に赤いリボンをあしらった、薄い布で作られた白のワンピースのみで、耳はエルフの様に尖がっており、背中には昆虫の様な半透明の綺麗な翅があった。

目を覚ました最初こそ、死後の世界に来たのかと思ったが、今ではここがS A Oと同じ仮想世界なのだとして理解している。

だからこそ、アスナはどうしようもできなかった。

そう言うシステムなのか、アスナが手を振ってもメニューウィンドウは出てこず、格子に人が通り抜かれる隙間があるもシステムの通れない仕様になっている。

システムと言う絶対がある限り手の打ちようはなく、アスナはその檻の中で幽閉され続けることとなった。

だが、そんな状況であるにも関わらず、アスナは強かった。

決して挫けぬものかと心を強く持ち、日々の孤独と焦燥から耐え続けた。

(必ず……必ず……必ずここから出てやるんだから……)

椅子に座り、テーブルの上で両手を組み合わせて、アスナは心の中で愛しい人の名を呟く。

「キリト君……」

「やれやれ、随分と強情だね」

キリトの名を呟いた瞬間、何者かに声を掛けられた。

アスナはその声がした方を向く。

世界樹から続く巨大な枝を渡り、その何者かは檻の前に立つ。

そして、そこに作られた扉を開け、檻の中へと入る。

「いつになったら、君は僕の者になってくれるんだい……テイターニア？」

そう言っただけ現れたのは、金髪に、額に白銀の円冠を付けて、緑色のトーガに身を包んだ、蝶の様な翅を持つ男だった。

端麗と呼ぶにふさわしい顔の男だが、その笑みからはその男の内の本性が漏れ出しており、アスナは嫌悪感を浮かべる。

「その変な名前で呼ぶのは止めて。私はアスナよ……須郷さん」
「興覚めだなあ。この世界では、僕は妖精王「オベイロン」。そして、君はその妃にして女王「テイターニア」。多くのプレイヤーが羨望を込めて見上げるアルヴヘイムの支配者……それでいいじゃないか？」

妖精王「オベイロン」、その正体は須郷信之だった。

須郷はキリトやミトに見せたようないやらしい笑みを浮かべ、アスナに近付く。

「それで、君は何時になったら僕の伴侶として心を開いてくれるんだろ？」

「何時まで待っても無駄よ。私が貴方に上げるのは、軽蔑と嫌悪だけよ」

「やれやれ本当に強情だ……でもねえ、なんだか最近は……」
アスナへと一歩一歩、ゆっくり近づき、須郷は手を伸ばす。

「そういう君を力づくで従えさせるのも楽しいかなあって思うんだよ」

いやらしい笑みがより一層強みを増して、アスナの身体に触れる。その瞬間だった。

「熱っ!!!」

そう叫び、須郷は飛び退く様にアスナから離れ、アスナに触れた手

を庇う。

須郷の手にはダメージエフェクトが出ており、何かしらの攻撃を食らったことが分かる。

「くっそーまだ処理出来てないのか！処理班の連中何してるんだよっ！修正期限はとっくに過ぎてるんだぞ！」

須郷は苛立ち、地団駄を踏んで、叫ぶ。

どういう訳か、須郷は今のアスナに触れることは出来なかった。

最初こそ、アスナとこの世界で対面した時、須郷はアスナを襲い、心を折ろうとした。

だが、触れた瞬間、この世のモノとは思えない程の強烈な熱を感じ、触れることは出来なかった。

何かしらのバグだと思い、すぐさまアスナのデータを調べるもデータに異常はなく、原因不明のまま須郷はアスナに触れられないままだった。

「部下に対して当たり散らす前に、ここに来る前に原因不明のバグが取り除けたか確認する必要があるじゃんじゃないんですか？そんな態度で、よくうちの会社の研究主任が務まりますね……須郷さん」

「くっ……いふん、そうやって強がってられるのも今の内だぞ！そのバグが消えた時、それが君の最後だからな！」

須郷はアスナに向かってそう叫び、檻の中から出て行く。

須郷の姿が見えなくなると、アスナは緊張が解け、その場に座り込んだ。

「よかった……まだバグが残ってて……」

原因不明のバグが消えていたらどうしようかと思っていたが、原因不明のバグはまだ残っているらしく、アスナは安堵の溜息を吐く。

「でも……熱か……」

熱と言う単語に、アスナはある人を思い浮かべる。

その人は、アスナの恋人であるキリトの相棒で、自身の親友であるミトの恋人だった男。

“焔の剣聖” カイ。

アスナは思わず、カイが自分を守ってくれているのではとずっと考

えている。

だが、それはありえないことだ。

アスナは、カイが死ぬのを自身の目で確認している。

だから、そんなことあり得ないのだ。

だが、それでも「もしかしたら……」っと思ってしまう。

「カイ君……貴方は生きてるの？もし……もし生きてるなら……

ミトとキリト君を、助けて……！」

アスナは手を組み、祈る様に言う。

自分よりも、自分の行いでカイを死なせたと後悔をしてるキリト

と、今もきつとカイを想い続けているであろうミトを助けて欲しいと

……

第10話 《ルグルー回廊》での戦闘

中立地帯の森から飛んで数分後、ミト達は洞窟の入口へと到着した。

「ねえ、この洞窟ってなにか名前はあるの？」

洞窟の中を覗きながら、ミトが尋ねる。

「《ルグルー回廊》って言う名前だ。ルグルーは鉾山都市の名前だな」

「洞窟の名前よりも、この暗さだよ。灯り魔法がいるわ」

「え？暗いの？私には明るく見えるけど」

「ああ、それはミトの種族が闇妖精族だからだ。闇妖精族は闇魔法の適性が高いのと同時に、暗視や暗中飛行に長けてるんだ」

「なるほど。だから、私はこの暗い洞窟でも割と見えてるのね」

「そうだ。キリト君、魔法スキルは上げてる？」

リーファがキリトにそう尋ねる。

「ああ。一応、初期設定のヤツだけなら」

「スプリガン影妖精族の魔法に、暗視効果のある魔法があるはずだからそれ使って」

「分かった。えーと……魔法ってどうやって使うんだ？」

「ここまですつと物理戦闘しか行つてこなかった為、魔法の使い方が分からずキリトは首を傾げる。

「パパ、マニュアルぐらいは見ておいた方がいいですよ」

見かねたユイがキリトに魔法の使い方と暗視能力付加魔法のスペルを教える。

キリトはユイが教えてくれるスペルをたどどしく言い、魔法を使うと、灰白い光の波動が広がり、ミト達の体を包む。

すると、全員の視界が急に明るくなった。

「暗視能力付加魔法か。スプリガン影妖精族の魔法も捨てたもんじゃないわね」

「うわ、その言い方、なんか傷付く」

「だが、使える魔法は暗記しといた方がいい。どんな魔法であっても、それが生死を分ける状況がないとも限らないからな。俺も大して魔法は使わないが、戦闘で咄嗟に使える魔法をいくつか習得してるし

な」

「ちなみに言うと、上級魔法は20ワードはあるからね」

「それ本当？覚えるの大変そうね」

「そうでもないぞ？スペルの意味を覚えて、後は効果と関連付けて記憶すればいい」

「そんな英語の勉強みたいなの……俺、ピュアファイターでいいよ」
「私も魔法はいいかなあ」

ミトとキリトは魔法に対して消極的に言う。

「泣き言わない！つて、メッセージだ。ごめん、ちよつと待つて」

すると、リーファ宛にメッセージが届いたらしく、一行は立ち止まり、リーファはメッセージを開く。

「レコンから？」

送り主はレコンからで、何かあったのかと思う。

『やっぱり思った通りだった！気を付けて！』

メッセージはそこで終わっており、最後にはSとだけあった。

「……なんだこりゃ？」

「リーファ？どうかしたのか？」

疑問の声を上げたリーファにジークが話しかける。

「レコンから変なメッセージが来たのよ」

「変な？どんな感じだ？」

「なんか、やっぱり思った通りだったとか、気を付けてとか……あと、Sって最後にあるの」

「S？」

「うん。Sってなんだろう？S……エス……さ……し……す……うくん」
「……まさか」

ジークは顎に手をやり、何かを考え、ふとそう呟いた。

「何か心当たりでもあるの？」

「いや……昔、テレビの警察特番で組織のスパイや内通者をSと呼ぶって言ってたんだ」

「それで？」

「レコンは、シグルドが気になると言ってた。杞憂だと思うが、もしか

すると」

ジークがその続きを言おうとした瞬間、ユイとノアが後方を向く。

「パパ、接近する反応があります!」

「モンスターか?」

ユイの言葉に、キリトは剣に手を掛ける。

「いえ、プレイヤー反応です!数は14!」

ノアが早口でそう言う。

「14!?!……………嫌な予感がするわ。隠れてやり過ぎそう」

「でもどこに?」

「そこはお任せを」

そう言う通りリーファはミト達を連れて壁の窪みに入る。

そして、魔法を使い、目の前に薄いベールみたいなのを張った。

「喋るときは最低のポリウムで。魔法が解けちゃうから」

リーファの指示にミトとキリトは頷く。

「もうすぐ視界に入ります」

ユイの言葉に固唾をのんで待つ。

「あれ、何かな?」

「え?まだ何も見えてないけど?」

「プレイヤーじゃない、赤くて小っちゃい蝙蝠みたいなの……………」

キリトの言う通り、小さい蝙蝠みたいなのが飛んでいた。

すると、リーファは行き成り通路に飛び出す。

「お、おい、どういした?」

「あれは高位魔法のトレーシング・サーチャーよ!潰さないと!」

リーファは素早く詠唱をし、掌からエメラルド色に光る針を無数に

発射し、蝙蝠を倒す。

「走るよ!」

「また隠れるのは駄目なのか?」

「トレーサーを潰したのはもう向うにもバレてる!それに、あれは火

属性の使い魔。てことは」

「サラマンダー火妖精族か!」

わき目もふらず必死に走り、とうとう、湖に囲まれた中立の鉾山都

市へ繋がる橋を渡る。

「どうやら逃げ切れそうだな」

「油断して落こつちないでよ」

その時、ミト達の後ろから飛んで来た光線が都市の城門の前に落ち、巨大な壁を生み出した。

それを見てミトとキリトが武器を抜き、斬り掛かる。

が、攻撃は軽々と弾かれ、2人はそのままノックバックで後ろに吹き飛ばす。

「ムダよ。これは土魔法の障壁だから物理攻撃じゃ破れないわ」

「もつと早く言ってくれよ……………」

「壊せないの?」

「攻撃魔法を沢山打ち込めば壊せるけど……………」

「向こうは時間くれる気は無いみたいだ」

ジークが後ろを向きながら、背中の剣を抜刀する

後ろからガチャガチャと金属音が聞こえる。

「湖に飛び込むのはありか?」

「無理よ。ここには超高レベルの水竜型モンスターがいるの。

ウンディーネ水妖精族の援護なしに飛び込めば自殺行為よ」

「なら、戦うしかないな」

「ええ、でも、これだけ高レベルの土魔法をサラマンダー火妖精族が使えるってことは、よっぽど手練れのメイジが混ざってるわ」

全員武器を構えると、とうとうサラマンダー火妖精族の姿が見えた。

最初の3人が分厚い鎧やタワーシールドで固めた重戦士、残りは全員ローブを着たメイジだった。

「3人共、ここは俺のサポートに回ってもらえるか?俺の後ろで回復役に徹してもらいたい。その方が俺も思いつきり戦える」

キリトは覚悟を決めた様に、《ダークリパルサー》を握り締める。

「何言ってるのよ」

そんなキリトに、ミトが待ったを掛け後ろからキリトを蹴る。

「ぐえっ!」

「そんな猪突猛進スタイルで勝てる訳ないでしょ?」

「ミトだって、割かし俺と似たスタイルだろ？」

「私は状況を考えて使い分けてるの」

そう言い、ミトは《イクシオンサイス》を構える。

「リーファ、ジーク。この状況で考えられるアイツらの手って何かわかる？」

「え？」

「奥にいる11人は全員格好的に魔法使いでしょ？悔しいけど、魔法に関しては私もキリトも素人なの。でも、リーファとジークは魔法戦の経験がある。だから、この状況で奴らが仕掛けて来る戦法は何？」
「えっと、多分距離と地形から考えてホーミング系の魔法を使ってくることはないと思います。この状況なら、普通の魔法でも十分当たる可能性がありますから」

「それと、単体魔法より範囲魔法を仕掛けてくると思う。その方が効率的だからな。だから、奴らに接近すれば味方や自身を巻き込まないように控えるだろう」

「OK。今、速攻で作戦立てた」

その言葉に、3人が目を丸くして驚く。

こんな短時間で作戦を立てたことに驚いたのだ。

「よく聞いて」

ミトは手早く3人に作戦を話す。

その作戦内容に、更に3人は目を丸くした。

「む、無茶過ぎます！一歩間違えたら全滅ですよ！」

ミトの作戦に、リーファは消極的だった。

「いや、俺は乗るぞ」

そんな中、キリトはミトの作戦に乗り気だった。

「私が立てておいてなんだけど、いいの？」

「ああ。元よりリスクは承知だ。1%でも生き残れる確率があるなら、意地でもその1%を掴んでやるさ！」

キリトはにやりと笑い言う。

「……分かった。俺も賛成だ」

すると、ジークも賛成の声を上げた。

「ジーク!? 本気なの!？」

「ああ。他の者なら少々悩むが、ミトとキリトなら信じられる。リーファ、この作戦に賭けよう」

「う〜……ああもう〜こうなったら腹くるしかないわね!」

リーファは気合を入れるように頬を叩き、剣を仕舞う。

「よし!なら、作戦通りに行くわよ!リーファ、ジーク!貴方達のタイミングで防御魔法を使って!」

そう言うミトとキリトは走り出した。

「隊長!闇妖精族と影妖精族が突っ込んできます!」

「ふん!作戦通りだ!壁隊!防御だ!」

隊長格のメイジが指示を出し、壁隊の3人は盾を構える。

「キリト!」

ミトが叫ぶと、キリトはスピードを上げ、壁隊目掛け斬りかかる。

「闇妖精族とは距離があるな。……メイジ隊!標的は影妖精族だ!メイジ隊前列3名は火炎魔法、用意!中衛の3名は壁隊の回復用意!

残りは俺と共に爆裂魔法の準備だ!」

隊長メイジにより、3人のメイジが一斉に火炎魔法の詠唱をする。

「はああああああ!!」

キリトは勢いよく「ダークリパルサー」を振り、壁の火妖精族を

攻撃する。

それにより、壁の火妖精族のHPが1割ほど減る。

だが、HPが減ると同時に、回復魔法を唱えていた3人のメイジが壁の火妖精族を回復させる。

そして、すかさずキリトに向かって残りの3人のメイジが火炎魔法を使う。

火球がキリトに向かって、放たれる。

キリトは防御が取れず、火球が直撃する。

「くっ!?!」

「キリト君!?!」

リーファはやられたキリトを見て、咄嗟に回復魔法を使いそうになつた。

「リーファ、落ち着け！」

そんなリーファをジークが制した。

「作戦を忘れたか？俺たちがするのは、しかるべきタイミングで防御魔法を使う事だ。ミトの作戦を……キリトを信じろ」

「……そうね。ごめん、冷静じゃなかった。もう、大丈夫だから」

落ち着きを取り戻し、リーファは防御魔法の詠唱に入る。

「距離は十分に離れた！爆裂魔法だ！奴らもろとも吹き飛ばせ！」

隊長メイジと他4人が詠唱を終え、爆裂魔法が放たれる。

その威力はキリトを含め、ミト、ジーク、リーファを倒すには十分だった。

「ジークー！」

「ああー！」

その瞬間、ジークとリーファは同時に防御魔法を使う。

二重に張られた防御魔法は、流石に高レベルの土魔法を使える手練れのメイジたちの魔法攻撃だけあって完全に防ぐことは出来なかったが、威力を抑えることは出来た。

爆裂魔法が終わり、辺りが黒煙で満たされる。

「直前で防御魔法を使ったみたいだが、流石に完全には防げなかったみたいだな。それに、あの威力の爆裂魔法を防いだんだ。もう回復魔法を使うだけのマナは残ってないだろう。まあ、念には念を入れて遠距離からの魔法でトドメを刺そう。メイジ隊、再度爆裂魔法の準備！」

隊長メイジが、爆裂魔法の準備を指示する。

全員が、最初のスペルを唱えた瞬間だった。

「悪いけど、2度目はないわよ」

ミトの声が、火妖精族達サラマンダーの背後からした。

「え？」

隊長メイジは後ろを見た。

そこには鎌を構え、今にも斬りかかるミトが居た。

「はああああああ!!」

ミトの鎌の一振り、後列に居たメイジ3人を一気に斬り割いた。

3人の内、2人は即死し、1人は生きているもHPはレッドに落ち虫の息だった。

「な、何故後ろに!? 一体どうやって!」

「あら? 闇妖精族イェンブの特性、お忘れかしら?」

鎌を肩に担ぎ、ミトは不敵に笑う。

「そうか! 暗中飛行か!」

「正解よ」

ミトの選択した闇妖精族イェンブは、暗視と暗中飛行が得意な種族。

本来、洞窟の様な暗闇での飛行は、翅の飛翔力の消費が激しく、また洞窟内は飛翔力に必要な日光や月光がないため回復も出来ない。

だが、闇妖精族イェンブは光の射さない暗闇の中でも他の種族と比べて飛翔力の消費が少なく、また時間は掛かるも暗闇内でも飛翔力が回復する。

ミトの立てた作戦はこうだった。

まず、最初にキリトを突貫させ、ミトから敵の意識を外す。

そして、敵が大技の魔法を使ったらジークとリーファの2人で二重に防御魔法を発動し、ダメージを抑える。

そして、大技の魔法を使った時の爆炎や黒煙に紛れ、ミトは橋から飛び降り、敵に見つからない様に水面ギリギリで飛行し、そのままサラマンダー火妖精族の背後を付く。

もしかしたら、最初の攻撃でキリトがやられる可能性があった。

さらに、水面ギリギリでの飛行も、水中にいる水竜型モンスターにミトが襲われる危険もあった。

大技を使うタイミングを外し、リーファとジークの防御魔法が間に合わない危険もあった。

何処を見ても危険過ぎる作戦だったが、ミト達はそれを見事熟した。

「一歩間違えれば全滅しかねないぞ……………! 正気か……………!」

「十分正気よ。そして、アンタたちの負け」

「はああああああああ!!」

その瞬間、キリトが壁役タンクの重戦士3人をねじ伏せ、陣形を崩した。

そして、後方に控えていたリーファとジークも飛び出し、剣を抜いて重戦士3人を倒した。

そのまま火妖精族の部隊は崩壊し、次々と倒されていく。

隊長メイジは、なんとか逃げようと湖に飛び込むも、水竜型モンスターの餌食になった。

そして、火妖精族の部隊はメイジ一人を残して、全員が倒された。

「さあ、誰の命令とかあれこれ吐いてもらおうわよ!!」

リーファは剣先をそのメイジに向け、尋問をしようとする。

「こ、殺すなら殺しやがれ!」

だが、メイジも意地があるのか口を割る気はないらしく強気に出る。

「この……!」

「いや、危なかったな」

今にも、リーファが火妖精族を斬りそうなピリピリした空気の中、

キリトは笑いながら近づく。

「よう、ナイスファイト! 良い作戦だったな。俺一人だったらやられてたぜ」

「は?」

キリトは尋問しようとする所か、火妖精族達の作戦を褒め始めた。

「ちよ、ちよつと、キリト君?」

「まあ、見てな。それで、ものは相談なんだけど」

そう言い、キリトは先程の戦闘で得たアイテムの取得画面を見せる。

「これ、今の戦闘で俺がゲットしたアイテムとユルドなんだけど、俺たちの質問に答えてくれたらコレ全部上げようかな?」

「え?……まじ?」

「まじまじ。ちなみに言うと、後ろの風妖精族の2人と、その闇妖精族の人が手に入れた物もだ。どうだ?」

そこで、メイジの火妖精族とキリトはにやつと笑った。

「やっぱ情報得るなら鞭より、飴よね」

そんな光景に、ミトはにこやかに笑った。

第1話 相棒ならきつと……

火妖精族サラマンダーの話によると、今日の夕方に先程の隊長メイジのジータクスから強制召集の連絡が来て、集まるとミト達4人を14人のパーティーで襲うと言う話を聞いたとのことだった。

「どうして私たちを襲うの？」

その話を聞き、ミトが尋ねる。

「なんでも、作戦の邪魔になるからだつてさ」

「作戦？」

「俺みたいな下っ端には知らされないさ。ジータクスさんからも、上からの指示だとしか言つてたし。でも、かなり大きい作戦みたいだ。今日ログインした時、すつげえ数の大部隊が北の方に向けて飛んでくのを見たよ」

「北つて、まさか世界樹攻略に？」

「まさか！ ついこの間、全滅したばつかで、今は資金集めの最中なんだけ。少なくとも全部隊に古代武器エンシエントウエボン級の装備が支給できるまでは資金集めだ。お陰でノルマが厳しいのなんのつて……でも、まだ目標の半分も貯まつて無いらしい」

火妖精族サラマンダーが嘘をついてるようには見えないので、4人は火妖精族を解放し、約束通り入手したアイテム全てを渡した。

「火妖精族サラマンダーの大部隊が北に向かつていて、その目的は世界樹攻略じゃない。さらに、俺たちが作戦の邪魔になるか……気になるな」

鉱山都市《ルグルー》に入つて、ミト達がアイテムの補充をしている中、ジークはずつと先程得た情報について考えていた。

「ジーク、そんなにさっきの情報が気になるの？」

そんなジークが気になり、リーファが声を掛ける。

「ああ、やはり大部隊が北に向かつてったのは少し気になる。………気になると言えば、レコンからのメッセージはどうなった？」

「あ、忘れてた」

リーファはそう言つて、メッセージウインドウを確認する。

「うーん、回線がトラブって切れたのかと思ったけど、何の続きも来ないなあ。それに落ちてるみたい」

「なら、向こうで連絡を取ろう。少し落ちる」

「え? いいの?」

ジークから、レコンに直接リアルで連絡を取ると言われ、リーファは驚く。

「あまりここでのことは、向こうに持ち込みたくないんだろ? 俺は、偶にレコンとALOの事を話すから、問題はないからな」

「そつか……じゃあ、悪いけど頼める? 戻ってくるまで待ってるから」
「ああ。少し頼んだ」

ジークはそう言っつて、近くのベンチに座り、ログアウトした。

ログアウトすると、順樹は枕元に置いてあるスマホを手取る。

「ん?なんだ?」

見ると、スマホの画面には長田から10件ほどの不在着信が入っていた。

家族や警察、病院からの緊急タグ付きの電話なら、アミユスファイアと連動し、自動ログアウトするが長田の電話番号はそれに含まれてはおらず、無視する形になっていた。

もつとも、普段から長田から連絡が来ることは月に一回あるかどうかなので、然程重要な連絡先ではないのもある。

余談だが、長田は直葉には週に二、三回連絡をするもその大半は無視されてる。

珍しく長田からの大量コールを疑問に思いながらも、順樹は長田へと連絡をする。

すると、1コールする間もなく電話が繋がった。

「あ、花部! ようやく出た! 君も直葉ちゃんも電話に出るのが遅いよ!」

「すまなかった。電話には今気づいたんだ。ところで、桐ヶ谷さんに送ったあのメッセージのことなんだが」

「そうだ! それだけど、大変なんだ! シグルドの奴、僕たちを……風妖精族を裏切ったんだ!」

永田のその言葉に、順樹は目つきを鋭くした。

「どういうことだ？」

「シグルドの事が気になるって言っただろ？それで、あの後、《ホロウ》を使って後を付けたんだ」

《ホロウ》とは《ホロウ・ボディ》と言う術の事で、高位の隠蔽魔法と《隠密》スキルをマスターすることで使える、自身を透明化する術で、レコンが得意としてる術だ。

「そしたら、路地裏で透明マントを羽織って地下水道に降りたんだ。何かあると思って、そのまま後を付けたらアイツら、サラマンダー火妖精族とそこで密会してたんだよ！」

「馬鹿な。透明マント程度じゃ、NPCガーディアンのは誤魔化せない筈だ」

「《パス・メダリオン》だよ。あいつら、それを持ってやがったんだ」
《パス・メダリオン》とは、厳しい審査の上で発行される通行証で、それがあればNPCガーディアンに襲われずに発行元の他種族の領へと入ることが出来るアイテムで、シトル風妖精族では、領主のサクヤを始め、執政部のメンバーに発行権がある。

「なるほど……シグルドなら内密に発行し、サラマンダー火妖精族に渡すことが出来るか」

「それで、そのまま聞き耳を立ててたら、今日、サクヤ様はケット猫妖精族との同盟調印のために、数名の護衛と共に極秘で中立域に向かっているうなんだ。シグルドの奴、サラマンダー火妖精族にその調印式を襲わせるつもりなんだよ！」

そこまで聞き、ジークは通話口に怒鳴る様に言う。

「レコン！調印式の場所は何処だ!?それと時間は?！」

「時間は1時から！詳しい座標までは……でも、《蝶の谷》を抜けた先の所らしいよ」

「分かった！俺とリーファは今、《ルグルー》居る！洞窟を抜ければまだ間に合うと思うー！」

「サクヤ様を頼むよ！僕、アイツらに見つかって麻痺毒で動けないんだ！」

最後の長田の声を無視する形で、順樹は通話を切り、素早くアミュスフィアを被り、再びALOにログインする。

「あ、お帰り、レコンの奴なんだって?」

ベンチの隣に座っていたリーファにそう聞かれるも、ジークは急ぎ気味にリーファの手を取る。

「え!?!ちよ、ちよつと?!」

「リーファ!サクヤたちが危険だ!急がないと!」

「お、おい。どうしたんだ?」

「何か問題発生?」

急に大声を出す、ジークに露店を見ていたキリトとミトもやっている。

「キリト、ミト……すまない。案内はここまでだ。すぐに行かないといけないところが出来たんだ。本当に、すまない」

申し訳なさそうに謝るジーク。

すると、キリトはミトと領き合い、ジークを見る。

「じゃあ、移動しながら話そう」

「え?」

「どつちにしろ、ここを出ないといけないしね」

そう言い、4人は急いで《ルグル》を飛び出した。

走りながらジークはレコンからシグルドが風妖精族を裏切っていた話をし、風妖精族と猫妖精族の同盟調印を火妖精族に襲わせる計画を立てていることを説明した。

シグルドが裏切ると言う話に、リーファは「あいつ……!」と怒りを露わにする。

「一つ聞いてもいいか?」

「なんだ?」

「火妖精族が風妖精族と猫妖精族の領主を討った場合のメリットは?」

「まず、同盟を邪魔できる。それが、風妖精族側から漏れた情報となれば、風妖精族と猫妖精族で戦争になるかもしれない。それと、領主館に蓄積されてる資金の三割の入手。そして、10日間街を占領して、

自由に税金を掛けることが出来る」

「そんなことができるのか」

「なら、急いで止めないと」

話を聞き、ミトはそう言い、キリトも頷く。

すると、ジークとリーファが突如歩みを止めたので、キリトとミトも足を止める。

「……………これは、風妖精族の問題だ。それに2人を巻き込むつもりはないし、2人が付き合う理由はない…………。この洞窟を出れば《アルン》まではもうすぐだ。最後まで案内出来なくて、すまない」

「2人の腕ならきつと《アルン》までいけるはずだから。それじゃあ、また何処かで」

「……………ここまで来て、2人を他人と思える程、俺は薄情じゃない」
すると、キリトがそう呟いた。

「俺にとって、2人はもう友達なんだ。友達の守りたいモノは俺の守りたいモノじゃないかもしれないけど、共に守ろうとする理由には十分だ」

キリトはリーファとジークに笑いかける。

「……………って、俺の相棒ならきつとそう言うと思うんだ」

付け加えるようにそう言って、キリトは笑った。

そのセリフに、ミトは懐かしそうに笑う。

「そうね。きつとそう言うわ。それで、相棒が決めた事ならそれに付き合う。そう言う事でしょ、キリト?」

「ああ。よく分かるな」

「当然でしょ。貴方達の事は、ずっと見てたからね。羨ましいぐらいの関係よ、貴方たちは」

「そりゃ悪かったな。……………ま、そう言う訳だ」

キリトとミトは、ジークとリーファに向き合う。

「付き合うよ、最後まででな」

「一緒に領主たちを救いませよ」

温かみを持った、優しい言葉にジークもリーファも心が温かくなるのを感じた。

「2人とも……ありがとう」

「君達には助けられてばつかな……ありがとう」

「……つと、しまった。時間無駄にしちやったな。ユイ、走るからナビよろしくー!」

「ノアはモンスターの索敵よ!」

「了解しました!」

「それでは」

「お手を拝借」

そう言い、ミトはリーファ、キリトはジークの手を取る。

「え?」

「飛ばすわよ!!」「飛ばすぞ!」

次の瞬間、ジークとリーファは体が引つ張られ、洞窟内を走り抜けた。

強烈なスピードに2人が洞窟の湾曲に沿ってコーナーリングをするたびに、ジークとリーファは右に左に体が大きく揺れる。

道はユイがナビをし、モンスターとの接触はノアの索敵で回避し、接触を最小限にとどめる。

それでも、十数体のモンスターのタゲを取ってしまい、4人の背後には大量のモンスターを引き連れていた。

「出口だ!」

光が見え、全員一斉に外に飛び出し、飛び出すと同時に翅を出し飛ぶ。

「寿命が縮んだわよ!」

「時間短縮になっただろ」

「俺が言えたことじゃないが、次からは事前に言ってくれ」

「次の機会があったらそうするわ」

ジークとリーファは2人の行き成りの行動に驚き文句を言い、ミトとキリトはケラケラと笑っていた。

「あっ」

その時、リーファが声を上げた。

リーファが向いてる方を見ると、そこには高くそびえる世界樹が見

えた。

《アルン》までは距離的に20 km近くまだあるが、その距離からでも途轍もなく大きく見える為、近くで見たらどれほどの大きさになるのか予想できなかった。

「……ジーク、領主会談の場所はどこ？」

今すぐ《アルン》まで飛んでいきたい衝動を抑え、ミトはジークに尋ねる。

「あ……ああ、北西のあの山の奥。猫妖精族領ケットンに繋がる《蝶の谷》の内陸側ので口で行われる。あそこだ」

ジークが指を指して、方角を示す。

「残り時間は？」

「………20分」

「なら、急ぎましょう！」

「間に合ってくれ！」

全員で頷き合い、更にスピードを上げて4人は《蝶の谷》を目指した。

第12話 黒の剣士VS猛炎の将

しばらく飛ぶとノアとユイが叫んだ。

「プレイヤー反応です！前方に大集団、60人！おそらく火妖精族の強襲部隊です！」

「さらにその向こうに14人！風妖精族及び猫妖精族の会議出席者と予想されます！双方が接触まで後50秒！」

雲を抜けると、遠くに火妖精族の強襲部隊を捉えることが出来た。

接触までの残り時間を聞いたあたりからジークとリーファも薄々思っていたが、やはり間に合わなかった。

「間に合わなかったね……ありがとう、ここまででいいよ」

「2人は世界樹へ行ってくれ……短い間だったけど楽しかった」

ジークとリーファは、ミトとキリトに世界樹に向かう様に言う。

「……………ここで逃げ出すのは性分じゃないんでね」

「一緒に領主を救おうって言ったでしょ」

「え？」

「なに？」

そう言うとミトとキリトは急角度のダイブを始めた。

「な、何よそれえ！」

「俺たちも急ごう！」

ジークとリーファも叫びながらダイブする。

そして、今にも風妖精族と猫妖精族が火妖精族に襲われそうになる

一触即発の中に隕石の様に突っ込んだ。

「双方、剣を引け！」

ミトとキリトは風妖精族と猫妖精族の前に立ち、火妖精族に向かつて叫ぶ。

遅れて降り立ったジークとリーファは、風妖精族の領主《サクヤ》の近くに立つ。

「リーファ!?それにジークも!?どうしてここに……!いや、そもそもこれは一体……!」

突如現れたミトとキリトに加え、その直後にやって来たジークと

リーファにサクヤは、普段からは想像がつかないような慌てぶりをする。

「簡単には説明できないの。ただ1つ言えるのは……………」

「俺たちの運命は、あの2人に託されたと言う事だ」

そう言い、ジークとリーファは、ミトとキリトを見つめる。

「指揮官と話がしたい」

キリトの言葉にレアアイテムと分かる防具と武器を持ったプレイヤーが前に出る。

「影妖精族と闇妖精族が何の用だ？どちらにせよ殺すには変わりないが、その度胸に免じて話は聞いてやる」

「俺の名はキリト。影妖精族Ⅱ闇妖精族同盟の大使だ」

「私はミト。こちらの大使の護衛よ」

「影妖精族と闇妖精族が同盟だと？それに、護衛がたった1人……………俄かには信じ難いな」

「ここにはさらなる同盟交渉の為に来ただけだからな。だが、この会談が襲われたとなれば風妖精族と猫妖精族とも同盟を組み、4種族で火妖精族に戦争を仕掛けるぞ」

「すでに影妖精族と闇妖精族、両種族は世界樹攻略に向けて万全の態勢を整えてるわ。世界樹攻略前に、余計な戦いはしたくないけど……………それも仕方ないわよね？」

ハツタリをかますキリトに、それに堂々と乗っかるミト。

嘘だと分かっているリーファとジークは冷や汗を掻く。

そんな中、火妖精族の指揮官だけは、2人を値踏みするように見る。

「……………見た感じ、中々の武器を持っている様だな。それ程の武器を持っているならそれなりに腕の立つプレイヤーなのは明白。だが、貴様ら2人の顔に見覚えはない。貴様らの話、信じるには些か情報が足りない」

そう言うと、指揮官火妖精族は、背中の剣を抜く。

「構えろ。俺の攻撃に30秒間耐えれたら、貴様を大使として認めてやろう」

「気前がいいな」

そう言い、キリトは《ダークリパルサー》を抜く。

「ミト。奴らが約束を守らない可能性もある。領主たちの護衛、任せろぞ」

「ええ。気を付けて」

ミトにそう言い、キリトは宙に飛ぶ。

「影妖精族……貴様の名は？」

「キリトだ」

「そうか……俺はユージーン。悪いが、本気で行くぞ」

「こつちも、最初からその気さ」

互いに剣を構え、踏み出すタイミングを計る。

上空の雲が流れ、隙間から太陽の日が差す。

その瞬間、ユージーンはその日を手にした剣の刀身で反射させ、キリトの目に当てる。

キリトは、一瞬眩しきで目を閉じてしまう。

その隙を逃さず、ユージーンは斬り掛かる。

咄嗟に剣で受け止めようとキリトは剣を振るが、ユージーンの手が《ダークリパルサー》の刀身をすり抜けた。

「なっ!？」

それに驚いていると、ユージーンの手がキリトに当たり、キリトの身体を斬りつける。

当たった瞬間、翅を震わせ、後ろに後退したお陰で体を撫でる様に切られただけで済んだが、キリトは今何が起きたのか分からず、困惑した。

「剣が剣をすり抜けた……一体……」

「特別に教えてやろう」

キリトの疑問に、ユージーンは手にした剣を掲げ、言う

「この剣の名は《魔剣グラム》。今のは特殊効果の《エセリアルシフト》だ。剣や盾で受け止めようとも剣が非実体化し、すり抜け、すり抜けると再び実体化し、相手にダメージを与える」

「反則級だな」

「気に食わんか？」

「まさか。良い武器だよ。だけど……………武器の性能が勝敗を決めるとは限らないんだよ！」

そう叫び、キリトはユージョンに向かって、翅を震わせ突貫した。「あの剣、まさか《魔剣グラム》か！」

キリトとユージョンの戦闘を見てサクヤが声を上げる。

「《魔剣グラム》って、両手剣スキルが950ないと装備できない、あの伝説武器!?」

「と言う事は、あの男がユージョン将軍か」

ジークはそう言い、宙を見上げる。

「ねえ、そのユージョンって奴は強いのか？」

「ああ火妖精族領主、《モーティマ》の弟で、リアルでも兄弟。知の兄に対して、武の弟。純粋な戦闘力なら、全ALOプレイヤー中最強だ」
そう言いながら、ジークはユージョンから視線を外さなかった。

上空では、キリトはユージョンに連撃を繰り返していた。

防御が取れない以上、攻めて攻めて攻めまくって、攻撃する隙を与えない様にするしかない。

だが、ユージョンのプレイヤースキルは凄まじくキリトの連撃を的確に弾き返し、キリトの連撃に僅かの間が開くと、そこを狙い攻撃を繰り返す。

「くっ……………！効くなあ……………おい！もう30秒経ったんじゃないか！」

「すまないが、斬りたくなった。俺の首を取るまでに変更だ！」

「この野郎……………！絶対泣かす！」

そう言いつつ、キリトは再びユージョンへと攻撃を開始した。

《《ダークリパルサー》だけだと、連撃回数が少な過ぎる……………！《二刀流》で行けば……………！》

キリトは心の中でそう呟き、無意識に意識を背中へと向ける。

かつて、そこにあったもう一つの剣《エリユシデータ》。

一応、《クイックチェンジ》のスキルで瞬時に、装備するように設定はしてあるが、やはりキリトは《エリユシデータ》を抜くことが出来なかった。

(アスナを救うって決めたのに……カイの死を無駄にさせないって決めたのに……俺は……!)

「捕らえた!」

キリトが意識をユージーンから外した瞬間、ユージーンが火妖精族サラマンダーの真骨頂とも言える重突進でキリトに攻撃を仕掛ける。

「しまっ!」

意識をユージーンから外してしまったことに、キリトは自身に舌打ちし回避する。

(くそっ! 強過ぎる……このままじゃ……!)

キリトの眼前に、ユージーンが迫る。

その時だった。

「……………あ」

唐突に、あることを思い出した。

そして、キリトの行動は早かった。

キリトは右手を突き出し、出来る限りの高速で口を動かし、今使える魔法のスペルを詠唱する。

すると、突き出した右手から黒煙が吹き出し、キリトとユージーンを包んだ。

「時間稼ぎのつもりか!」

ユージーンは剣を一振りし、一気に黒煙を吹き飛ばす。

黒煙が晴れると、空の何処にもキリトの姿はなかった。

「いない?」

「まさか、逃げたんじゃ……」

リーファたちの背後で、誰かがそう呟いた。

「そんなわけないでしょ」

すると、ミトがそう言った。

「キリトはね、誰よりもこの世界を、VRMMOの世界を生きてるの。遊んでるんじゃない。だから、キリトは誰も裏切らないし、強いんだよ」
そう言うミトの目には確信の色があった。

そして、ミトがそう言い終わると同時に、ユージーンの頭上に、小さな影が落ちる。

ユージーンが見上げると、そこには太陽を背に、キリトがユージーンを目掛け、急降下していた。

普通のプレイヤーなら太陽光を避ける為に水平移動をし、そこを叩かれる。

だが、ユージーンは自身に降り注ぐ太陽光を無視し、再び重突進を仕掛け、《魔剣グラム》の剣先を向ける。

「はああああああああ!!」

対して、キリトは《ダークリパルサー》を強く握りしめ、大上段から剣を振る。

突きと大上段からの振り下ろし。

どちらが先に相手に当たるか、明白だった。

重突進のスピードに加え、《魔剣グラム》の刀身の長さ。

明らかに、ユージーンの攻撃が先に当たる。

更に言うと、キリトの攻撃は大振り過ぎて、剣が背中に隠れていた。

その行動に、ユージーンは（苦し紛れの攻撃か）と詰まらなさそうに笑う。

《魔剣グラム》の剣先が、キリトに刺さる。

その瞬間、ユージーンの《魔剣グラム》はキリトから見て、左から何かの衝撃によって軌道がズレ、キリトに当たらなかった。

「なっ!？」

《魔剣グラム》の軌道を変えたのは、キリトが左手に持った《ダークリパルサー》だった。

背中に剣が隠れるほどの大振りをした時、キリトは右手から《ダークリパルサー》を離し、そのまま背後に回した左手で逆手にキャッチした。

そして、ユージーンが自身の剣が右手にあると思いつき、確実に《魔剣グラム》での一撃が入ると確信を持った瞬間に、意識外からの攻撃で《魔剣グラム》を弾いた。

「くっ…舐めるな!」

だが、ユージーンは終わらなかった。

仮にもAL0最強プレイヤーと言われる身だ。

何とか持ちこたえ、キリトに向け《魔剣グラム》を振る。

が、その直後ユージーンの右側頭部に衝撃が走る。

キリトが左足でユージーンの右側頭部に蹴りを入れたからだ。

流石のユージーンも、これには体勢を崩した。

「うおおおおおおおお!!」

そして、すかさずキリトは右手に持ち直した《ダークリパルサー》である技を放った。

かつてアインクラッドでよく目にした技で、キリト自身使ったことはないが、キリトの相棒である彼が使った技。

刀スキル、突進技《紫電一閃》。

そして、その前に使ったのは体術スキル《弦月》。

《弦月》からの《紫電一閃》は、カイが最も得意としたコンボだった。

(まさか、こんなタイミデュエルングでお前との決闘を思い出すとはな……!)

そのまま《ダークリパルサー》はユージーンの心臓を貫き、キリトはありったけの力とスピードを籠めて急降下する。

「ぐおおおおおおつ!!くっ……舐めるな!」

ユージーンは負けじと、火炎魔法を詠唱し、キリトを吹き飛ばす。

吹き飛ばされた衝撃で、《ダークリパルサー》はユージーンの身体から抜け、更にキリトの手からも飛ばされる。

「うおおおおおおおお!!」

だが、キリトは武器が無くても諦めようとせず、最後の力を振り絞り、ユージーンへとしがみ付いた。

「なっ!!」

「このまま……一緒に落ちてもらうぞー!」

ユージーンの身体にしがみ付いたまま、キリトは急降下し、そのまま地面へと、ユージーンと共に激突した。

第13話 同盟調印

キリトとユージーンの2人が地面に衝突して、辺り一帯が砂煙で覆われた。

誰もがどちらが勝ったのかと固唾を飲んで見守った。

砂煙が晴れ、そこに居たのは地面に片膝ついて荒い呼吸を繰り返すキリトと、赤い残り火リズンライトだけだった。

勝負は決した。

勝ったのはキリトだった。

そんな中、誰一人として身動き一つ取らなかった。

ALOでの戦闘は、近接戦では不格好に武器を振り回し、遠距離では魔法を打ち合うだけのつまらないもので、防御や回避と言った見応えのある戦闘が出来るのは一部の熟練プレイヤーぐらい。

それこそ決闘大会などで上位決定戦などでしかお目に掛かれない。だが、今のキリトとユージーンの決闘デュエルはそれ以上だった。

誰もが言葉を発することのできない状況の中、最初にその沈黙を破ったのはサクヤと猫妖精族領主のアリシャだった。

「見事、見事！」

「凄い！ナイスファイトだヨ！」

そして、領主の護衛に来ていたの風妖精族シルフと猫妖精族ケットシーのプレイヤーたちからも歓声が上がリ、更に火妖精族達サラマンダーからも、戦闘を称賛する声が上がった。

その完成の中、キリトはHP回復ポーションを飲んで一息入れる。

「お疲れ様」

そんなキリトに、ミトは近寄り、飛ばされた《ダークリパルサー》をキリトへと渡す。

「回収してくれたのか。ありがとな」

「いいわよ、気にしないで。それにしても……………流石ね、一瞬カイかと思っただわ」

「……………走馬灯って言うのかな？カイと決闘デュエルした時の事を思い出したんだ。そしたら、自然と体が動いて」

「そう………本当にアンタ達の関係が羨ましいわ」

ミトは羨ましそうに小さく笑いそう言う。

「誰か、彼に蘇生魔法を頼む！」

《ダークリパルサー》を鞘に戻しながらそう言う。

「解った」

サクヤが名乗り出て、ユージーンに蘇生魔法を掛ける。

復活したユージーンは、辺りを見渡し、そして、キリトを見る。

「見事な腕だ。俺が見てきた中で、貴様は最強のプレイヤーだ。貴様の様な影妖精族スプリガンが居たとはな。世界は広い」

「そりやどうも。それで、俺たちの話、信じて貰えたかな？」

キリトの問いに、ユージーンは沈黙する。

「ちよつといいかな、ジンさん」

すると、長槍を持った火妖精族サラマンダーが前に出る。

「カゲムネ、なんだ？」

「昨日、俺たちのパーティーが全滅させられたのはもう知ってると思う」

「ああ」

「その相手が、そこに居る影妖精族スプリガンだ」

そう言つて、カゲムネはキリトを見る。

リーファは昨夜、キリトに助けられたのを思い出し、冷や汗を掻く。

あの時、キリトの傍にミトは居なかった。

もし、そのことを言われたら同盟の件が嘘だったとバレる。

リーファは固唾を飲んで、見守ることしかできなかった。

「確かに、連れにその女の闇妖精族インブが居たよ」

驚くことに、カゲムネはキリトを庇い嘘を吐いた。

「それと、部下の1人が鎌使いの闇妖精族インブにやられたんだが………どうやらその女らしいんだ」

今度はミトを見てそう言う。

「アイツは、性格に少々難はあるが腕は確かだ。そんなアイツを倒せる腕、それに扱い辛い鎌を使いこなせる技量………護衛が1人なのも、1人でも十分だつて事だと思う。それに、エスの情報でメイジ隊

が追ってたのもコイツらだ。どうやら撃退されたみたいだけど」

「……………なるほどな」

ユージーンは、暫し黙考し口を開く。

「ならば、そう言う事にしておこう」

軽く笑い、ユージーンは再びキリトを見る。

「現状で、影妖精族スプリガンと闇妖精族インブと事を構えるつもりは俺と領主にもない。ここは退くでしょう。だが、貴様とはいずれもう一度戦うぞ。それに、その闇妖精族インブの鎌使い。貴様とも一度戦いたい。機会があれば、手合わせ願うぞ」

「望むところだ」

「そうね。いずれ、お相手させてもらおうわ」

キリトとミトの言葉に満足し、ユージーンは身を翻し、部隊に指示を出す。

火妖精族サラムンダーは一糸乱れぬ動きで隊列を組み、ユージーンを先頭にして去って行った。

「すまないが……………事情を説明してもらえるか？」

すると、サクヤがそう尋ねて来た。

詳しい事情を知ってるジークが、最初から全てを説明し、それが終わるとサクヤは溜息を吐いた。

「そうだったか……………シグルドの苛立ちは私も感じていた。だが、独裁者と見られるのを恐れ合議制に拘るあまり、シグルドを要職に置き続けてしまった」

「苛立ち？何に対して？」

「風妖精族シルフの現状にだ。势力的に火妖精族サラムンダーの後塵を拝しているのが許せなかったのだろう。シグルドはパワー志向の男だから、数値的能力だけでなく、権力も深く求めてしまった」

「なるほど……………恐らく、思い描いてしまったのだろう。火妖精族サラムンダーが、空を自由に飛び続け、自身がそれを見上げているという構図を」

「恐らくな」

「でも、どうしてスパイなんか……………？」

「もうすぐ、《アップデート5.0》の話は聞いているな。そのアップ

懲罰金か？それとも、執政部から追い出すか？だがな、軍務を預かる俺を追い出したらお前の政権はそこまで！真実がどうであれ、お前は自分の都合で同胞を斬り捨てる独裁者になるんだ！』

シグルドの言う通り、他の執政部のメンバーとの話し合いもなく、シグルドを執政部から追放すれば反感は買う。

そう言われ、サクヤは口を閉ざした。

だが、その目はシグルドを見ていた。

『はっ！何も言えないみたいだな！所詮お前は、俺が居なければ何もできないお飾りの領主なんだよ！』

「……………ああ、そうだな。お前を執政部から追放すれば、反感は買うだろう。なら、同じ反感を買うなら別の処罰を与えるまでだ」

そう言うと、サクヤは領主専用のメニューウィンドウを開き、何かの操作をする。

数秒後、シグルドの前に青いメッセージウィンドウが表示される。

それを見た瞬間、シグルドの血相を変えてサクヤを見る。

『この俺を風妖精族領から追放だど!?正気か、貴様!?!』

「ああ、至って正気さ。そんなに風妖精族であることが耐えられないなら、追放者として、中立域を彷徨うといい。新しい楽しみが見つかることを祈ってる」

『ふざけるな！こんな不当だ！GMに報告するぞ！』

「好きにするといい。さらばだ……シグルド」

サクヤのその言葉を最後に、シグルドの姿は消えた。

そこで、《月光鏡》は砕け散り、元の場所へと戻る。

「すまなかつたな、リーファ、それにジーク。それに、そちらの2人も。改めて、自己紹介をしよう。私はサクヤ、風妖精族の領主をしている。もつとも、今回の判断で次も領主で居られるかは分からないがな」

「私は、アリシャ・ルー！猫妖精族の領主だヨ！改めて助かったよ、ありがとうネー！」

「キリトだ。気にしないでくれ。俺がしたい様にただけさ」

「ミトよ。私は何もしてないし、お礼ならキリトにしてあげて」

自己紹介を終えると、アリシャがキリトに近づく。

「ところでさ、影妖精族スプリガンと闇妖精族インプが同盟って本当なの？」

「まさか、ハツタリだよ」

あつさりと嘘であることを吐く、2人にアリシヤとサクヤも驚く。

「まさか、あの状況で大法螺を吹くとは……………」

「悪い状況の時は、取り敢えず掛け金は全部レイズする派なんぞな」

「それにしても、キミ、結構強いね。影妖精族スプリガンの秘密兵器だったりする？」

「まさか。しがないプレイヤーだよ」

「ふくん、そつか」

すると、悪戯っぽい笑みを浮かべ、アリシヤがキリトの右腕に抱き付いた。

「フリーならキミ、うちで傭兵やらない？3食おやつに昼寝付きだよ」

「へっ？」

「おいおいルー、抜け駆けはよろしくないぞ。」

そう言っつて、今度はサクヤが左腕に抱き付いてきた。

「キリトと言ったね。どうかな、個人的興味もあるので、礼を兼ねてこの後、スイルベーンで酒でも……………」

「あー！サクヤちゃん、色仕掛けはんたいい！」

「人の事言えた義理か！密着しすぎだお前は！」

ワイワイと騒ぎながら、キリトを引き抜こうと揉める領主と、その間で引つ張り合いにされるキリト。

そんなキリトに、ミトは溜息を吐き近寄る。

「すみませんが、コイツにはやらないといけないことがあるので引き抜きは遠慮してください」

そう言い、キリトの首根っこを掴み引つ張る。

「まったく、美人相手にデレデレしちやっつて。世界樹に行く目的忘れたの？」

「いや、忘れる訳ないだろ！それに、デレデレなんかしてない」

「どうだかね」

そう言い、ミトはキリトを放す。

「ねえ、サクヤ、アリシヤさん、今回の同盟って世界樹攻略のためなん

でしょ?」

そこで、リーファが今回の同盟の目的について尋ねる。

「まあ、究極的にはな」

「その攻略に、俺たち4人も参加させて貰えないだろうか。それも、できるだけ早く」

ジークはリーファが何を言いたいのか察して、その先を言う。

「それは構わない。というより、こちらから頼みたいぐらいだ。だが」
「攻略メンバー全員の装備を整えるのに暫くかかると思うんだヨ。とても1日2日じゃ……」

「いや、いいさ。取りあえず樹の根元まで行くのが目的だし……あと
はなんとかするよ。あ、そうだ」

そう言うときリトは、何かの操作をし、革袋を取り出した。

「これ。攻略資金の足しに使ってくれ」

「え!?こ、こんな大金を!」

「ああ、俺にはもう必要ないからな」

キリトが渡したのは、キリトの全財産だった。

「これだけあれば、かなり目標金額に近づくヨ」

「すぐに装備を整えて、準備が出来たら連絡させてもらうよ」

「その時はよろしく頼む」

そして、サクヤとアリシヤの合図で全員が帰る準備に入った。

「何から何まで世話になったな。君たちの希望に極力添えるように努力することを約束するよ」

「アリガト!また会おうネ!」

そう言つてサクヤとアリシヤ、風妖精族^{シルフ}と猫妖精族^{ケットシィ}のプレイヤー達は猫妖精族領^{ケットシィ}に向かつて行った。

「さて、俺たちも行くこうぜ」

「そうね」

「うん」

「ああ」

全員で領ぎ合い、ジークとリーファが飛び、ミトとキリトが続いて
飛ぶ。

その時、ミトとキリトの視界に世界樹が見える。

「……………あそこまで行けばアスナを」

「……………ああ」

病室で横たわるアスナの顔を思い浮かべ、ミトとキリトは拳を握る。

「待っててくれ」

「必ず助けるから」

翅を震わせ、ジークとリーファの後を追うように、2人は空を飛んだ。

第13.5話 動き出す者たち

キリト達がアルンに向け、再び出発した頃。

アスナは未だに鳥籠の中に居た。

ALLOの世界では、1日が16時間で過ぎる。

毎日決まった時間にしかログインすることが出来ないプレイヤーへの配慮だった。

その為、アスナには今の正確な時刻は分からない。

だからこそ、自身の体内時計を信じて、アスナは現在は真夜中だと推測した。

真夜中なら、須郷も寝ていて鳥籠にやって来ることはない。

「動くなら今だ」

そう呟き、アスナは鳥籠の扉に近付く。

扉を開けるには暗証番号が必要で、アスナはその暗証番号を知らない。

また須郷が扉を開けようとする所を見ても、遠近エフェクトによってデイデールが減少し、どのボタンを押しているのかは分からない。

だが、仮想世界では、鏡などを通してみると遠近エフェクトが機能せず、高解像度のピクセルで詳細に映る。

そこまで知らなかった須郷は、安易にベッドの天蓋を支える壁に鏡を貼っており、アスナは須郷が何度も鳥籠を訪れて出て行く度にその鏡を通して、扉の暗証番号の確認をしていた。

「8……111……3……2……9……」

番号を一つ一つ丁寧に押し、最後の一つを押すと大きく金属音が鳴り、扉が開く。

「開いた……！」

扉が開いたことに喜びを感じ、アスナは鳥籠の外に出る。

「キリト君……私、頑張るから」

小声でそう呟き、アスナは巨木の幹までつながる太い枝を走り出す。

「動きやがったな」

その様子を、何者かが見ていた。

「俺も行くか」

そう言い、後を付けるその何者かの腰に差した刀が僅かにカチャつと音を鳴らした。

同時刻、ALOの火妖精族領に1人の水妖精族少年が訪れた。

「水妖精族が何の用だ？」

領主館前までやって来た少年に、作戦から帰って来たユージーンが対峙し尋ねる。

「貴方が、火妖精族で一番偉い人ですか？」

「領主は俺の兄者だ」

「では、領主に取り次いで下さい。お話があります」

「随分と舐められたものだな。ただの一般プレイヤーが、それも水妖精族が火妖精族の領主に逢いたいとは………殺されても文句は言えんぞ？」

そう言い、ユージーンは《魔剣グラム》を抜刀する。

「他種族の領内では、攻撃が出来ないんですね。でも、貴方から俺は攻撃できる。いいですよ。例えばダメージが入らなくても、貴方が参ったと言うまで耐久戦をするだけですから」

そう言うと、水妖精族の少年は腰の短剣を抜く。

「よし、これで準備は終わった」

そう言い青年はPCの画面を見る。

そこには、およそ数十人の人間とのチャットのログがあった。

『無論参加する！』

『今度こそ終わらせよう』

『戦えなくても支援ぐらいさせてくれ！』

などなど、何かの戦いに参加する意思表示が多くあった。

「あとは、今日の午後3時。そこで全て終わる」

そう言い、青年はスマホを見る。

「あの時、動けなかった俺とは違う。今度こそ、騎士として戦い抜く
！」

届いたメッセージを見つめ、青年は今度こそ戦い抜く決意を固めた。

ALOと現実^{リアル}で何かが動き始める……………

それが、一つの物語が終わるキツカケとなる。

それを知る者は、恐らくあの世界の本当の神だけだろう……………

第14話 《央都アルン》と世界樹の中

古代遺跡めいた石造りの建造物が並び、黄色い篝火や青い魔法光、桃色の鉱物燈が列をなして瞬き、その明かりの下を9種族の妖精が均等に入り混じって行き交う街。

そして、その街の中央には天に向かって巨大な樹木が聳え立っている。

現在時刻は午前3時。

ミト、キリト、ジーク、リーファ、そして、ノアとユイ。

計6名はようやく《央都アルン》へと辿り着いた。

ここに来るまでの道はかなり険しいものだった。

ゲームを終えようと、近くの村に降り立ったらモンスターの擬態トラップで、飲み込まれたと思ったらALLOの最高難易度ダンジョン《ヨツンヘイム》へと落とされ、なんとか脱出しようと策を練って居たら、動物型邪神と巨人型邪神の戦闘に遭遇し、劣勢だった動物型邪神に肩入れし、懐かれたので《トンキー》と名付けたり、そのトンキーが水妖精族のパーティーに襲われたり、それを見過ごせず水妖精族と戦闘したり、その際にトンキーが進化し助けてくれたり、《アルン》に繋がる階段まで送ってくれたり、その道中ALLO最強の伝説武器《聖剣エクスカリバー》を発見したりなどかなり濃い時間を過ごした。

「すげえ……！」

「……あれが世界樹……。」

「間違いないよ。……ここが《アルン》だよ！」

「漸く着いたな」

「わあ……！ノア、凄いです！私、こんなに沢山の人が居る場所、初めてです！」

「ああ……！俺も初めてだ！」

6人が思い思いの感想を口にしてしていると、パイプオルガンから発せられるような音楽が鳴り響き、午前4時から週1の定期メンテナンスが行われるとのアナウンスが聞こえた。

「今回はここまでだな。続きは今日の午後3時からでどうだ？」
ジークがそう提案する中、ミトとキリトは世界樹の上の方を見ていた。

「キリト君？ミトさん？」

リーファが声を掛けると、2人はハツとしジークとリーファを見る。

「ええ、そうね。それでいいわ」

「俺もいいぞ。とりあえず、宿屋でログアウトしよう」

「あ、宿つて言えばキリト、アンタ宿代はどうするのよ？」

「……あ！」

現在のキリトは、手持ちの金ユルドを全てサクヤたちに渡してしまったので素寒貧だ。

「しようがないから、貸してあげるわよ」

「すまない、助かる」

「トイチだからね」

「なるべく早く返す」

そう言い、近場の宿屋へと向かうミトとキリト。

そんな2人に遅れない様に、ジークとリーファも後を追う。

鳥籠を脱出したアスナは、世界樹の中を移動しながら、ログアウトする方法を探していた。

世界樹の中は、外見とは裏腹に床も壁も天井も白色で、何の装飾もなかった。

それはまるで、何かの研究所の通路を彷彿させるような、寒気があつた。

その寒気に耐えながら、アスナは世界樹の中を進む。

「《実験体格納室》……………」

中を探索していると、アスナはそう書かれた部屋を発見した。

須郷はSAOプレイヤーを使い、非人道的な実験を行っている。

恐らくそこで、その実験が行われているのだとアスナは推察した。

「……………この目で確かめない」と

仮にも須郷はアスナの父親がCEOを務めている会社の研究主任。

結城の人間として、須郷の行いを見る必要がある。

そう自分に言い聞かせ、アスナはその部屋へと入った。

然程長くない通路を進み、アスナはイベントホールの様な白い空間へと出た。

そして、そこには柱の様なもの、規則的に並んでいた。

その数は、ぱっと見300程あるように思える。

アスナは、1つの柱に近付き、それを確認する。

「……………ッ!!」

そして、息を呑んだ。

その柱の中には人間の脳があつた。

本物ではないが、精巧に作られた半透明の青色のそれは、紛れもなく脳だった。

半透明のグラフに表示される数字や記号に交じって、いくつかの英単語も書かれており、痛み、悲しみ、恐怖と言った単語だ。

「苦しんでる……………!」

口を手で押さえ、アスナはそう呟く。

度々須郷がアスナのもとを訪れた時に言っていた『感情を操るテクノロジー』と言う言葉が、フラッシュバックする。

それと同時に、アスナは須郷への怒りが沸いた。

SAOプレイヤーを閉じ込めて、思考、感情、記憶までも操作する悪魔の研究をする須郷にだ。

「こんな事……許されない……！……！」

拳を強く握り、アスナは辺りを見渡す。

なんとかしてここにいる人たちを解放する。

「ごめんね……必ず助けるから……！」

誰かも知らないその脳の持ち主にそう言い、アスナは歩き出す。

警戒しながら部屋の中を探索し、進んでいくとある物を見つけた。

それは黒い立方体の様なものだった。

アスナは、それに見覚えがあった。

アインクラッドの第1層の地下迷宮にあったシステムコンソール。

「アレを使えば、権利者権限にアクセスできれば全員を解放できるかも……！！」

期待を持ち、アスナはシステムコンソールに近づく。

素早くコンソールを操作し、アスナは

《Exit virtual labo》のコマンドを見つける。

「これだ……！」

そのコマンドをタップすると、

《Execute log of sequence?》と出て、そ

の下に《OK》と《CANSEL》ボタンがあった。

《OK》のボタンを押そうとしたその時、アスナの背後からアスナの右腕を灰色の触手が巻き付いて抑えた。

思わず悲鳴が漏れそうだったが、アスナはそれを押し止めて、強引に《OK》ボタンを押そうとする。

が、新しい触手が現れ、アスナの身体を拘束し、アスナはそのまま高く吊り上げられた。

アスナを掴めたの巨大なナメクジだった。

そのナメクジに、アスナは見覚えがあった。

アインクラッド第61層で出現した《ブルスラッグ》と言うモンスターだ。

61層は別名《むしむしランド》と言われるほど、虫型モンスターが多く、アスナを含め多くの女性プレイヤーが嫌がる場所だった。

「あんた誰？こんな所で何してるの？」

《ブルスラッグ》から声が発せられ、それがプレイヤーだと言うのが分かった。

何故その姿なのかは疑問だが、相手が人間なら話が通じると思い、アスナは説得をする。

「離してよ！私は須郷さんの知り合いで、ここの見学をさせてもらってるだけよ！」

「見学？そんな話聞いてないよ？てか、こんな場所、部外者に見せる訳ないじゃん」

あつさり嘘が見破られ、アスナは舌打ちをする。

「あれ？てか、こいつあれじゃない？須郷さんが世界樹のてっぺんで困ってるって言う」

「ああ、そっか。道理で見覚えある訳だ」

素性がバレ、アスナは更に舌打ちする。

「貴方たち、科学者なんですよ！こんな非人道的な実験……やって恥ずかしくないの？」

吊り上げられ、身動きの取れないアスナは《ブルスラッグ》2人にそう叫ぶ。

「別に？てか、実験動物の頭開いて、脳に電極打ち込むよりはマシでしょ？」

「そうそう。それに、恐怖以外の夢も見せてやってるんだ。むしろ感謝されたいぐらいだぜ」

「……狂ってる」

罪悪感の欠片もない発言に、アスナは寒気を感じながら呟く。

どういう訳か、あの謎の触れると熱を感じるバグは起きておらずアスナは何もできなかった。

「取り敢えずさ、お前、向こう現実に戻って須郷さんに報告して来いよ」

「俺が？まあ、別にいいけどさ……」

そう言うのと、片割れのナメクジがアスナをじつとりとした目つきで

見る。

「報告前に、少し楽しんでもいいんじゃないか？」

その言葉に、アスナは恐怖を覚えた。

「……そうだな。どうせ、この実験が成功すりゃ記憶も感情も思うがままだし、生の反応を楽しむ最後の機会だしな」

「……ッ！離して！ここから出して！」

「ダメダメ。そんなことしたら、俺らが怒られるし。アンタもさ、こんな何もない所で退屈してたでしょ？俺らもさ、人形相手は飽き飽きなんだよねえ」

言葉と同時に、湿った触手がアスナの頬を撫でる。

アスナの腕や足、素肌に触れ、ワンピースの中にまで入ろうとしてくる。

そして、ワンピースの中に入ろうとした触手が、突然斬り落とされた。

「ぎゃあああああああ!!」

触手が斬り落とされた《ブルスラッグ》は絶叫を上げ、アスナを離す。

アスナはそのまま重力に従い、落下する。

だが、床に落ちる直前で何者かにキャッチされ床への激突を避けられた。

「わりいな、ちよつと助けるのが遅くなっちゃった」

その人物は、左手にアスナを抱く様に抱え、右手に刀を持っていた。

「でも、もう大丈夫だ。お前さんを、必ず現実に、キリトの下に返してやるよ」

アスナを後ろに隠す様に下ろし、刀を構える。

「そのために、俺はここにいるんだからな」

そう言つて、鍛冶妖精族のプレイヤー“トバル”は不敵な笑みを浮かべる。

第15話 後悔と贖罪

「と、トバル君!?!」

ここに居ることがあり得ない人物がいることに、アスナは驚く。

「久しぶりだな、アスナ。それにしても、凄い格好だな。キリトが見たら、卒倒しそうだな」

「そんなことは今いいでしょ!?!それより、どうしてここに?」

「訳は後で話す。今は逃げるぞ」

「おい、何シカトしてるんだ!」

《ブルスラッグ》の姿をしてる2人の研究者は、その姿を妖精の姿へと変え、手には一本の剣を持った姿になっていた。

「どんな手段で侵入したか知らねえが、テメーも実験動物にしてやるよ!」

手にした剣で、トバルに襲い掛かる。

「トバル君!」

アスナはトバルに叫ぶ。

「邪魔だ」

トバルは蠅でも払う様に刀を振る。

その一撃で、研究者の持つ剣は折れ、胴体を一刀両断される。

「ぐああああああああ!!」

胴を斬られた研究者たちは上半身だけで、のたうち回る。

「なんでだよお!?!なんでこんなイテエんだ!?!」

「ペインアブソーバーは機能してるはずなのに!?!どうしてええええええ!!?!」

「こっちだ!」

「あ、ちよつと!?!」

のたうち回る研究者を放置し、トバルはアスナを連れて走り出す。

「全く、少しはこっちの都合も考えて欲しいもんだぜ。本当なら、今日の午後3時決行予定が、台無しだ」

「どういうこと? 決行って何を?」

「この世界、ALOの真実を暴いて、囚われてるSAOプレイヤーを解

放する……つまりSAOを真の意味で終わらせるための作戦だ」

走りながらトバルは、アスナに作戦を話した。

当初の予定では、今日のメンテナンス明け午後3時に、トバルがアスナを鳥籠から解放し、そのまま世界樹の外へと連れだす。

連れ出すと同時に、世界樹の外で待機していた他のメンバーにアスナを引き渡し、アスナの安全を確保する。

そしたら、世界樹攻略を始め、その真実を暴く。

「その予定が、お前さんが勝手に動き出したせいで大幅に変更せざるを得なくなっただって訳だ」

「そうだったんだ……ごめん、私の所為で……」

「いや、むしろそれでこそアスナって感じだ。あのまま囚われのお姫様でいる訳ないもんね、お前さんは」

どこか懐かしく感じるやり取りに、トバルもアスナも嬉しくなり思わず笑顔になる。

だが、その時、喧ましい警報音が鳴り、白い通路を赤いランプが点滅する。

「チツ！警報鳴らしやがったか！人体への影響が出ない様に手加減したが、こんなことなら細切れにするべきだったか……！」

警報が鳴ると同時に、トバルとアスナを囲う様に頑強そうな鎧に身を包み、手には剣や斧、槍を持ったNPCガーディアンが出現する。

「トバル君、細剣レイピアは持ってない？」

「悪いな。生憎、時間が無くて自分の武器を作るだけで精一杯だ。一気に突っ切るから、しつかりついてきやがれ！」

トバルは手にした刀に力を籠め、前方のNPCガーディアンを斬る。

体勢が崩れると、そのまま足蹴にし通路を確保して、走り出す。

アスナも遅れずに、その後を走る。

NPCガーディアンたちは、侵入者であるトバル、そして脱走者のアスナを捕まえるべく追跡をする。

「……までだな」

するとトバルは逃げるのを止め、後ろを向く。

「アスナ、このままこの通路を真っすぐに行け。そしたら、T字廊に当たる。そこを右に曲がって進むと、転送室がある」

「そう言い、トバルは逃げる際にコンソールから抜いたカードをアスナに渡す。」

「コイツがあれば転送機が使えるはずだ。ソイツを使って世界樹の外に出るんだ。出たら、外でお前を保護してくれる奴が居るから、ソイツと合流しろ」

「ちよつと待って！トバル君は、どうするの!?!」

「俺はNPCガードイアン共を引き付ける。少しでも時間を稼ぐ」

「駄目だよ、そんなの！一緒に逃げよう！」

「……………アスナ、俺はな、ずっと後悔してるんだ」

トバルは刀を鞘に収め、居合の構えを取り、腰を落とす。

「俺が鈍ら刀なんぞ打つちまったから、カイは死んじまったって。ずっと後悔してる」

悲しみと悔しさが混じった声に、アスナは思わず何も言えなくなる。

「これはな、カイへの贖罪なんだ。アイツが成し遂げようとしたSAO全プレイヤーの解放。ここで逃げだしたら、アイツに顔向けできねえんだよ」

「トバル君……………」

「行け、アスナ！」

「……………トバル君、無理しないでね」

その言葉を最後に、アスナは走り出した。

トバルの覚悟を受け取り、それ以上何も言わず、後ろも振り向かず走り出した。

「無理するな……………か」

トバルは、こちらに向かって進んでくるNPCガードイアンの軍団を見て、不敵に笑う。

「ま、無理する気はないけどよ……………別に倒しちまっても構わないよな！」

そう叫び、トバルはNPCガードイアンの軍団へと突っ込んだ。

第16話 病院での出会い

ミトは日課となっているアスナのお見舞いに向かう。

病院に向かっていていると、ちょうど病院の最寄りのバス停にバスが止まり、バスからキリトと誰かが降りて来るのが見えた。

「バスで来るなんて珍しいわね。いつもは自転車なのに」

ミトはキリトの背後から、そう声かけた。

「あ、ミ……深澄か。今日は筋トレは休みだよ」

慣れ親しんだキャラネームではなく、ミトの本名を言うキリトにミトは何故?と思うが、キリトの隣にいる少女を見て納得した。

「和人、この子は?」

「俺の妹。スグ、こいつは深澄。SAOで出会った友達だ」

「あ、初めまして!桐ヶ谷直葉です!」

直葉は頭を下げ、自己紹介をする。

「初めまして。鬼沢深澄よ。よろしくね」

互いに握手をし、3人でアスナの病室へと向かう。

受付で通行パスを発行してもらい、エレベーターに乗る。

最上階にあるアスナの病室に着くと、直葉はネームプレートを見る。

「結城……明日奈さん?キャラネームも本名と同じなんだ。そう言う人って、あまりいないよね?」

「良く知ってるな。俺が知る限りじゃ、本名使ってたのはアスナぐらいだったかな」

「アスナって、オンラインゲーム初心者中の初心者だったから」

そう言い、ドアのスリットにカードを通し、ロックを解除する。

変わらず、ベッドに横たわるアスナの下へ誘導するように、キリトが直葉を案内する。

「スグ、彼女がアスナ。《血盟騎士団》第一副団長で、《閃光》の2つ名を持つ剣士だ。アスナ、俺の妹の直葉だよ」

眠るアスナに、直葉を紹介すると、直葉が一步前が出る。

「初めまして、アスナさん。妹の直葉です。兄が、お世話になってます」

直葉の自己紹介が終わると、キリトとミトはSAOでのアスナとの思い出を話して、時間を潰した。

暫くすると、ミトと直葉の2人はキリトとアスナを2人つきりにしてあげようとそれとなく理由を付けて、病室を後にし休憩所へと向かっていった。

「はい、どうぞ」

「すみません、ありがとうございます」

自販機で買ったココアを直葉に渡し、ミトは自分の分のココアを飲む。

「あの、兎沢さん。ちょっと聞いてもいいですか？」

「ん？何？あと、深澄でいいわよ」

「あ、はい、深澄さん。それでなんですけど、お兄ちゃんと明日奈さんってどうやって出会ったんですか？」

「あの2人の出会い？」

「はい、お兄ちゃんってあまり自分からぐいぐい行くタイプじゃないから、あんな美人な人と、それも恋人同士になれたってのがちよつと驚きで……」

「なるほどね。あの2人の出会ったのは………ある意味私が原因ね」

そう言い、ミトはあの日の事を語った。

「元々は私とアスナでコンビを組んだの。でもある日、私がドジした所為でアスナが危ない目にあった。その時、私はアスナと離れ離れになっててすぐにアスナを助けに行けなかったの。その時よ。あの2人が出会ったのは」

「つまり、明日奈さんの危機をお兄ちゃんが助けたってことですか？」

「そうよ。そっからの縁で、私たち4人はよくパーティーを組むようになったの。私とアスナがギルドに入るまでね」

ミトは懐かしさに浸りながら、話し続ける。

「でも、その頃はどちらかって言うとなスナはキリトの事命の恩人ぐらいにしか見てないかな。感謝はあっても、恋慕の情はなかったと思う」

「え？じゃあ、どうして？」

「大きなキツカケがあつたのよ」

そう言つて、ミトはアスナがキリトを意識した瞬間の、あの話をした。

「SAOを攻略じゃなくて、生きてる……」

「多分、その考えはSAOに居た人の大半には理解できないかもね。あの世界では、所詮はゲームつて考えの人もいたし、ゲームクリアを目指してたプレイヤーたちも攻略第一の考えが多い。その中で、あの世界で生きていた和人は誰よりも人間らしかった。そんなところに、アスナは惹かれたのよ」

「……………そっか。お兄ちゃん、私が思つてるより、しつかりしてたんだな……………」

そう言い、直葉は昔の事を思い出した。

直葉には4年前に他界した祖父が居た。

祖父は、昔気質の人で厳しかった。

長年、警察官として奉職し剣道の達人で、警察官を引退してからも、剣道を続けた。

その情熱は、何時しかキリトと直葉の2人にも向けられた。

2人は小学校に上がると同時に、近所の剣道場に半ば強制的に通わされた。

しかし、キリトは竹刀よりもキーボードを好きになった。

その為、キリトは2年で道場を止めた。

その時の祖父の怒りは、凄まじいものだった。

キリトの好きになったコンピューターを否定し、もう一度道場に通えとまで言い、キリトがそれを拒否すると「軟弱者！」と叫び、殴つた。

それを見兼ねた直葉は、泣きながら祖父に自分が兄の分まで頑張るから、殴らないでくれとキリトを庇った。

それからというもの、直葉は、自分がしつかりしないとキリトが酷い目に合うと思ひ始めた。

その思いもあり、直葉は剣道で全国に行けるほどの腕前にもなった

し、高校もスポーツ推薦で進学することが決まった。

だが、自分が思ってたより、キリトがすっかりしており、自分の中で真つすぐな、決して折れない芯が出来ていることを知らなかった。「男子三日会わざれば刮目してみよってね。それが2年ともなれば、大きく変わるわ」

「ま、私は6年ぐらい会えなかったけどね」つとボソツと付け加え、ミトは残りのココアを飲み干した。

「そうですね……あ、そう言えばさつき4人でよくパーティー組んでた言ってみましたよね？お兄ちゃんとアスナさん、それに深澄さん……後1人って？」

「ああ、それね。最後の1人は………キリトの相棒で、私の恋人よ」「深澄さんにも恋人が居たんですね。どんな人ですか？」

「ん……優しく、頼りになって、弱い所もあるけど、そこも魅力的。そして、私の事をちゃんと愛してくれる………そんな人よ」

「へ、良い人ですね（あれ？なんかどつかで聞いたような……）」
「ところで、私やアスナ、和人の恋バナ聞いておいて直葉の恋バナがないのは、フェアじゃないわよね？」

ミトはニヤツと笑い、直葉の肩を組む。

「み、深澄さん!？」

「ココア奢ったんだし、その代価として話してくれてもいいんじゃない？ほら、クラスに好きな男子とかいるでしょ？」

好きな男子と聞かれ、直葉は思わず順樹の顔を思い浮かべた。

一見頼りなさそうな体系だが、所謂着やせするタイプで、服の下は鍛えられた肉体をしており、男性アイドルとしてやっていけそうな顔。

クラスでも順樹は割と女子から人気あるのを直葉は知ってる。

そんな順樹とよく居る直葉は何度が、付き合ってるのかと聞かれたことがある。

その時決まって、直葉は「違う」と否定する。

顔を真っ赤にして……

「………す、好きな人なんていませんよ！」

「今の沈黙は絶対居るでしょ」

「違います！ちよつと気になつてただけです！と言うか、目が離せないだけです！花部君は、放つて置けないってだけのただの男の子なんですから！」

顔を真っ赤にして否定するも、ミトはにやにやと笑う。

「おまたせ」

すると、そこに丁度キリトがやってきた。

「あ、おかえり。もういいの？」

「ああ。そろそろ帰らないと、予定の時間に間に合わなさそうだしな」

「あ、本当だ」

キリトに言われ、ミトは時刻を確認する。

「スグ、帰るぞつてどうしたんだ？顔真っ赤だぞ？」

「な、なんでもないから！それじゃあ、深澄さん！ココア、ごちそうさまでした！」

素早く立ち上がり、ミトに頭を下げてそう言うと、直葉は足早に病院の外へと向かう。

「何かあったのか？」

「そうね〜……乙女の内緒話かしら？」

そう言い、ミトは立ち上がって出口へと向かう。

後には、首を傾げるキリトだけが残された。

第17話 再会と正体

病院から帰ると、ミトは真っ先にナーヴギアを被り、ベットに横になる。

待つこと数秒、時刻は午後3時となった。

「リンク・スタート!」

そして、ALOにダイブすると、集合場所となってる宿屋の1階に降りる。

ミトが早いらしく、まだ他のメンバーは来ていなかった。

暫く待つと、キリト、リーファ、ジークの順で現れる。

「全員揃ったわね」

「ああ。後は世界樹まで行くだけだ」

「ねえ、今更なんだけど、本気で《世界樹》に挑む気なの?」

「挑戦するなどは言わないが、やはりサクヤとアリシヤの2人から連絡来るのを待つべきだと思っぞ」

「悪いが、俺もミトも、もう1秒たりとも我慢できないんだ」

「ようやくあそこに、目的の目の前に来てるの。それを前にして待てができる程、我慢強くないのよ」

ミトとキリトの目は好戦的で、今すぐにも宿屋を飛び出して《世界樹》に挑みたがってる。

更に言うと、須郷が強硬手段に出て、アスナとの結婚を早める可能性もある。

その為、2人は一刻も早く《世界樹》へと向かいたかった。

「……………分かった」

そんな2人の気持ちを悟り、ジークはそう言った。

「ちよつとジーク!?!」

「分かってる。……2人がそこまで言うなら、挑戦することを止めはしない。だが、1つだけ条件がある」

「条件?」

「俺も共に戦う事だ」

「ジーク!?!」

ジークからの条件に、ミトもキリトも、そして、リーファも驚く。「すまないが、嫌とは言わせない。キリト、ミト……俺だって、君達2人を友達だと思ってる。友達が無残にやられるのを、黙ってみてることができない。これが、俺に出来る最大限の譲歩だ」

決して一步も退かないと言う意思に、リーファも覚悟を決めた。

「キリト君、ミトさん！あたしも一緒に戦うわ！これでも、数回《世界樹攻略戦》に参加したことがあるの！足手纏いにはならないわ！だから、2人の友達として、あたしも戦わせて」

ジークとリーファの2人を見て、キリトとミトは嬉しそうに溜息を吐く。

「じゃあ、お願いできるかな？」

「迷惑じゃなければけど」

「当然だ（よ）！」

四人は覚悟を決め、宿屋を出ると世界樹へと向かった。

アルン中央市街を抜け、階段を上り終え、《世界樹》の前へと着く。

「デカいな……」

「遠くから見た時でも、大きく感じたのに、近くで見ると尚更ね」

「《世界樹》の中に入るには、根元のドームから入るしかない」

「こつちよ」

ジークとリーファに案内され、《世界樹》に入るためのドームへ行こうとした、その時だった。

突如、キリトの胸ポケットに居たユイが顔を出した。

「ユイ？どうしたんだ？」

「……います。パパ！近くにママがいます！」

その言葉に、キリトもミトも驚き、目を見開いた。

「ノアー！」

ミトはノアに声を掛ける。

ミトの胸ポケットから顔を出したノアは目を閉じる。

僅かに沈黙した後、目を開いてミトを見る。

「母上！ユイの言ってる通り、近くに反応があります！」

「場所は!？」

「いつちですー！」

ユイがキリトの胸ポケットから飛び出し、先導する。その後を、キリトとミトは橋って追い掛ける。

ユイは世界樹から離れて右へ左へと飛ぶ。

その後を、ミトとキリトは必死に追いかける。

そして、着いたのは建物に囲まれた小さな家だった。

「《アルン》にこんな場所があつたなんて……………」

「知らなかったな……………」

かなり見づらい位置にある裏路地を抜けて行かないと見つからない場所にあり、後ろを追い掛けていたジークとリーファは驚いていた。

「母上。ここはどうやら、インスタンス一時的空間の様です」

インスタンス一時的空間とは、クエストを受けたパーティーごとに、一時的に生成される空間のこと。

だが、街の中で、それもクエストも受けてないのにインスタンス一時的空間が生成されることはありえない。

そう思った時、家の扉が開き、何者かが現れる。

長い栗色の髪に、胸元に赤いリボンをあしらった薄い布で作られた白のワンピースを着たそのプレイヤーをキリトとミトは知ってる。

妖精の様に耳が尖っているが、その顔を2人は間違えることはない。

それはアスナだった。

「ママー！」

誰よりも早くユイが動いた。

ナビゲーシヨン・ピクシーモードから、本来の姿へと戻り、アスナへと抱き付いた。

「ユイちゃん……………なんだよね?」

ユイを抱き止め、アスナはそう尋ねる。

「はいーママ、ずっと……………ずっと会いたかったですー！」

「うんー私も、ユイちゃんと会いたかったー！」

アスナとユイは互いにあらん限りの力で抱きしめ合う。

そんな2人に、キリトが近寄る。

「……アスナ」

「……キリト君……なんだよね」

「……ああー」

その言葉を皮切りに、キリトはユイごとアスナを抱きしめる。

「ごめん……来るのが遅くなった……!」

「ううん、きつと来てくれるって信じてた……!」

ようやく再会できた家族は、共に喜びあった。

「良かったね……キリト、ユイちゃん……アスナ……」

その光景に、ミトも涙を流していた。

「ミト、あの人が探していた人なのか?」

話しに付いて行けてないジークが、ミトに尋ねる。

ミトは涙を拭い、ジークとリーファに向き直る。

「ええ、そうよ。私の親友で、キリトの恋人のアスナ。2人にも改めて

紹介を……」

ミトはそこまで言うと、言葉を詰まらせた。

何故なら、リーファは目を見開いて、驚きのあまり口を両手で押さ

えていた。

「嘘……だってその人は……その名前は……!」

その言葉に、ミトはリーファがアスナの名前を知ってることに気づ

く。

だが、ここに来るまでにミトもキリトも、そしてユイもノアもアス

ナの名を口にしていない。

にも拘らず、アスナの名前を知ってる口ぶり。

ミトはどうしてっと思う。

リーファは弱弱しく歩き出し、キリト達に近付く。

「キリト君、その人……アスナって言うの?」

「リーファ。ああ、俺たちが探してた人だ。アスナ、紹介すると彼女は

“リーファ”、そして、彼が“ジーク”。ここまでの道案内を「お兄

ちゃん……なの?」

リーファから放たれた言葉に、全員が固まる。

「……………え？リーファ、急に何を……………あ」

急に「お兄ちゃん」と呼ばれ、困惑するキリトだったが、何かに気づき、リーファ同様驚き、目を見開く。

「スグ……………直葉なのか……………？」

キリトの言葉に、ミトは先程病院で会った直葉の顔を思い浮かべる。

「……………どうして？」

リーファは唇を震わせ、そして、キッ！つと歯を噛み締め、叫んだ。「どうしてゲームなんかしてるの!？」

リーファの叫びに、キリトもミトも、そして、ジークも驚く。

「何で……………何でまたVRに……………！」

「それは……………アスナがこの世界に閉じ込められたって聞いて……………いてもたつてもいられなくて……………」

キリトはしどろもどろになりながら、リーファに事情を説明しようとする。

「あたしが……………お母さんが……………どんなに心配したか……………どんなに不安だったか、わかっているの!？残された人がどんなに心配してるのか、少しは考えてよ!!」

「そ、それは……………」

「もう……………いいよ……………お兄ちゃんとあたしは血が繋がってない……………だから!どうでもいいんでしょ!!」

リーファは目に一杯涙をためながら叫んだ

「ち、違う!俺は……………！」

「言い訳なんていらぬ!!もう……………ほつといて!」

そう叫ぶと、リーファはその場を離れ、路地にへと消えて行く。

「あ、待ってくれ!スグ!」

キリトはリーファを追い掛けようとするが、それをジークが止めた。

「ジーク放してくれ!スグと話さないと!」

「今の彼女に何を言っても、聞く耳は持ってくれない」

その言葉に、キリトはハツとする。

「キリト……さん。俺のリアルでの名は、花部順樹と言います。桐ヶ谷……直葉さんの同級生です。こんな形で出会うとは、思ってませんでしたけど」

「……ああ、そうか。そう言えば言ってたな、同じ学校だった」

「はい。彼女の事、俺に任せてください。少し、落ち着かないと」

「……そうだな。今の俺じゃ、聞く耳を持ってくれないよな。……順樹君、すまないけど、スグに伝えてくれないか？《アルン》の北側のテラスで待ってるって」

「わかりました」

ジークは頷き、リーファの後を追った。

そして、キリトはアスナの下へと向かう。

「アスナ、ごめん。折角、また会えたのに俺行かないといけないんだ」

「ううん、行って上げて。私は待ってるから」

「……ありがとう」

キリトは笑い、北側のテラスへと向かう。

「アスナ」

残されたミトは、アスナに声を掛ける。

「ミト……久しぶりだね」

「ええ、本当に」

アスナは抱きしめていたユイを下ろし、今度はミトに抱き付く。

「ミト……辛かったよね」

アスナのその言葉が、何を意味してるのかミトには分かった。

「……うん、辛かった」

だから、ミトは正直にアスナにそう伝えた。

「カイが居なくなつて……辛かった。でも、アスナが帰って来れてなかった」

「ミト……」

「アスナだけじゃない。まだ300人のSAOプレイヤーが戻って来れてない。……そんなの絶対に許せない」

ミトはアスナと目を合わせて言う。

「必ずSAOを終わらせる。それを果たすまで、辛いなんて言ったら

れないよ」

「……流石はミトだね。本当に強いよ」

「強くないわよ。無理して踏ん張ってるだけよ」

そうして、互いに笑い合った。

「ところで、どうしてここにいたの？ 私もキリトも、アスナは《世界樹》の頂上にある鳥籠の中に居るってずっと思ってたのに」

ミトからの疑問に、アスナは答えた。

須郷の間を見て檻のパスコードを奪い、逃げ出し、そして、須郷たちの恐ろしい実験の正体を知り、危ない所をトバルに助けられ、トバルが時間を稼いでくれたおかげで《世界樹》から脱出出来た事。

「トバルが来てるの!?! ってそれより、どうして《世界樹》に!?!」

「それはわからないの。私も聞く前に、逃げろって言われて」

「……どちらにしろ、《世界樹》に乗り込む必要はあるわね。アスナもログアウトさせなきゃだし」

ミトは僅かに見える《世界樹》を見つめた。

第18話 本音で

ジークがリーファの後を追うと、リーファはアルン中央市街へと続く階段の陰に隠れるように蹲っていた。

「リーファ」

声を掛けながら、ジークが近づく。

リーファは何も言わず、顔を伏せたままだった。

そんなリーファに、ジークは何も言わず隣に座る。

「……………あの人が、リーファのお兄さんだったんだな。話に聞いてたより、ずっとしっっかりしてる人じゃないか」

「……………言うほどしっっかりしてないもん」

ようやくリーファが口を開いた。

「ご飯の後は食器は水につけてって言ってもしないし、お風呂最後に入ったらお湯抜いてって言ってるのに抜かないし……………」

よくある兄妹の愚痴らしきものが聞こえ、ジークは思わず笑みを浮かべる。

「何笑ってるのさ……………」

「すまない。何と言うか、仲が良いんだなと思ってるな」

「……………昔はね、本当に仲が良かったの」

リーファはポツリポツリと語り始める。

「でも、お兄ちゃんが剣道止めた時から、お兄ちゃんはパソコンとかネットゲームにのめり込んで、私はその寂しさを埋めるように剣道に打ち込んだ。そしたら、余計に距離が出来ちゃった」

「なるほど。桐ヶ谷さんがあんなに剣道が強いのも、その反動だったんだな」

「本名呼ばないでよ」

「あ……………すまない。思わず……………」

「まったく……………」

うつかり本名を言うジークに、リーファは困ったように笑う。

「そんなことしてる内に、お兄ちゃんとの距離はどんどんできて、何とかしようと思った矢先にあの事件が起きた……………」

「……………SAO事件か」

ジークは2年前に起こり、つい最近終息したSAO事件を思い出す。

全国で10,000人のプレイヤーがVR世界に囚われ、事件が終わるまでに約4,000人が死亡。

その10,000人の中にキリトが居たのを、ジークは知ってる。

SAO事件が起きた時、ジークは大変だと思いつつも、何処か他人事のように感じていた。

順樹は絵を描くのが好きで、3度の飯より絵を描くことが好きだ。

美術部顧問の教師に許可も取り、休日や放課後などに美術室を開けてもらい絵を描いている。

だからこそ、VRゲームなんて自分には縁がないものだと思っていた。

だが、あの日、美術室に今にも潰れそうな表情で入って来た直葉に驚き、どうしたのかと尋ねた。

直葉は、順樹の顔を見るなり号泣し出し、順樹は泣き出す直葉に狼狽えた。

そこで、キリトがSAO事件の被害者になったことを知った。

それを知った時、順樹は自分はなんて馬鹿なんだと思った。

自分にとっては他人事でも、事件の被害者やその家族にとっては一大事なんだと。

ましてや、仲のいい友達の兄がその事件の被害者。

知らなかったとは言え、不謹慎だったと思う。

それからだった。

順樹の中に、直葉を支えたいと言う感情が芽生えたのは。

だからこそ、興味のなかったVRゲームに誘われた時も、快く参加した。

「もう2度と会えないかもって思ってた。でも、お兄ちゃんは戻って来た。その時は素直に嬉しかったし、前みたいに仲のいい兄妹に戻るようにいっぱい話そうと思ってた。なのに、お兄ちゃんはあたしにも、お母さんにも何も言わないでまだゲームを！ううん、それは別に

いい！一番許せないのは、ナーヴギアを使っていることが許せない！」
「ナーヴギアを？ナーヴギアは、すべて回収されたと聞いたが……」
「どんな方法を使ったのか知らないけど、お兄ちゃんはナーヴギアを
まだ持つてる。アミユスフィアは買ってないから、ALOに入るなら
それしかない………なんでそんなことするんだろう………どうして
何も言ってくれないんだろう………どうして頼ってくれないのさ、お
兄ちゃん………」

か細くなる涙声で、リーファはそう呟く。

「そうか……リーファはやさしいな」

ジークはリーファの頭に手を置き、優しく撫でる。

「リーファが本当に怒ってるのは自分に黙ってVRゲームをしてたこ
とでも、ナーヴギアでALOにログインしてることでもない。自分を
頼ってくれないことに怒ってるんだな」

「………うん、多分そうかも。………やっぱり、血の繋がってない
兄妹だから頼ってくれないのかな………」

「………血の繋がりになんて、関係ないさ」

そう言うジークに、リーファは顔を上げる。

「辛い時に頼ってくれないのは辛いだろうし悲しいだろう。だが、家
族だからこそ頼ってはいけないと思ってるかもしれないだろ？」

「え？」

「俺にも経験があるからわかる。頼りたくても頼れない。頼ってはい
けない。これは自分の問題だから………家族に迷惑を掛けたくない。
きつとそう思ってるさ、キリトさんは」

ジークはそう言い、リーファを見る。

リーファとジークの目が合い、数秒沈黙が流れる。

すると、リーファは前を向いて、あることを呟く。

「………そう言えば、あたしまだお兄ちゃんとちゃんと話せてないや」
そう言っ、立ち上がる。

「ちよっと話してくるー」

「キリトさんなら、《アルン》の北側テラスで待っているとってた。早
く行くといー」

「うん！あ……でも、どうやって話したら……」

「リーファ、君は剣士だ。そして、キリトさんも剣士だ。言いたいことは、全部剣に乗せてぶつけなければいいんじゃないか？」

「なにそれ？変なの……でも、嫌いじゃないかな」

リーファは笑い、翅を広げ空へと飛ぶ。

「ありがとう！ジーク！」

そう言っつて、リーファはキリトの所へと向かって空を飛ぶ。

「おい！ジーク！」

リーファが飛んで言った直後、突如レコンが現れた。

「レコン？どうして《アルン》に？麻痺毒を食らって捕まっていたんじゃない？」

レコンが居ることに、ジークは尋ねる。

「全員毒殺して逃げて来た。それより、他の皆は？リーファちゃんは……」

「リーファなら、本音でぶつかり合いに行つたよ」

「え？どういうこと？」

訳が分からず、レコンは首を傾げる。

そんなレコンを放置し、ジークはリーファが飛んで行つた方を見つめる。

そして、リーファの笑顔を思い出す。

「やはり笑顔が似合うな、AL_こO_こでも現_あ実_ちでも」

第19話 集結

「えっと、それで、どうなったの?」

あの後、ジークとレコンが居る所に、ミトとアスナ、ユイとノアが合流し、数分後にキリトとリーファが戻って来た。

リーファは吹っ切れたような表情で、満足気だった。

そんなリーファに、ジークもミトもアスナも、ユイとノアも笑みを浮かべる。

何も知らないのはレコンだけだった。

「世界樹を攻略するの、此処に居る全員で」

「あ、そう……ええ!」

《世界樹》の攻略と言うのに、レコンが驚く。

「ユイ、ノア。アスナの今の状態はどうなってるんだ?」

「はい、ママの今の状態はプレイヤーとしてログインしてる状態です。でも、役割としてはNPCです」

「つまり、自分からログアウトすることはできない状態です」

「なるほど。どうやったらアスナをログアウトさせることが出来るの?」

「このカードです」

そう言つて、ユイはアスナが持っていたカードを見せる。

「このカードはシステム管理用のアクセス・コードです。これと対応コンソールがあれば、私とノアの力で、ママをこの世界からログアウトさせることも、他のSAOプレイヤーの解放も可能です」

「ですが、その対応コンソールはあの《世界樹》の、それも中のゲートを超えた先にあります」

「つまり、アスナや他の300人を救うにはどの道《世界樹》の攻略が必要って事か」

「残ってNPCガーディアンの囿になったトバル君も心配だよ」

「そうね。トバルの安否確認の為に《世界樹》に行かないと」

全員が《世界樹》を見つめ、覚悟を決めた様に頷く。

「ちよっと待って。アスナさんはどうするの?」

そこで、リーファが肝心のアスナをどうするのかと聞く。

「上で囚われていたのなら、何も敵陣へと連れて行くのは危険では？」

ジークがそう言うも、ユイとノアが首を振った。

「それがそうもいきません」

「アスナさんのデータは非常に複雑化していて、コンソールから一定以上距離が離れてるとログアウトできない仕様になってます」

「本当なら連れて行きたくないが、状況が状況だ。アスナ、絶対俺から離れるなよ」

「うん、分かったよ、キリト君」

アスナが頷き、キリトも頷く。

そして、キリトはリーファとジーク、そしてレコンを見る。

「すまないけど、俺達の我儘に付き合ってくれ。もうあまり時間が無い様な気がする」

「いくらでも付き合おう。そのために来たんだ」

「あたしも協力する。勿論、コイツもね」

「ええ〜……………まあ、リーファちゃんやジークが言うならいいけど」

「それで、作戦はどう行く？」

ミトがそう言うのと、キリトは全員を見渡す。

「ガーディアン相手は、俺とミトです。リーファとジーク、レコンはサポートを頼む」

「ああ、任せてくれ。回復魔法は使えないが、支援魔法や阻害魔法ならある程度使えるからな」

そう言い、ジークが手を前に出し、その上にリーファ、レコン、ミト、アスナ、キリトの順で手を置く。

最後にノアとユイがちょこんとキリトに手に乗る。

「皆、ありがとう」

「ここで終わらせましょう」

そして、《グランド・クエスト》が始まった。

『未だ天の高みを知らぬ者よ、王の城へ至らんと欲するか』

低音の声が響くと、目の前にクエストへの挑戦意志を質す《YES》

《NO》のボタンが現れた。

キリトは迷うことなく《YES》を選ぶ。

『さればそなたが背の双翼の、天翔に足ることを示すがよい』

轟音が響き、扉が開かれる。

その音は何処か、アインクラッドでのフロアボスのボス部屋の扉が開く音を彷彿させた。

キリトは背中中の《ダークリパルサー》を抜き、構える。

ミトも《イクシオン・サイズ》を構え、ドームの中に入った。

ドームの中は薄暗かったが、すぐに明るくなった。

中は空洞になっていて、遠くの天井には世界樹へ繋がるゲート見える。

「アスナ、ついて来いーミト、背中は任せたー!」

キリトは剣を握りしめ、そして、勢いよく飛び上がった。

それに続くようにアスナも飛び、続いてミトも飛ぶ。

飛び上がってすぐ、白い窓から二体のガーディアンが現れた。

その内の一体をキリトは剣を交え跳ね退けたら、剣を首に突き刺し斬り落とす。

ミトに迫って来たガーディアンを、鎌で受け流し、鏡のようなマスクで覆われた顔に鎌の刃を突き刺した。

「弱い、これならいけるー!」

そう確信し、更に上を目指す。

すると今度は無数の窓から大量にガーディアンが生み出された。

その数に圧倒され、一瞬怯むが、キリトもミトもそれぞれの武器を再び強く握る。

そして、再度上を目指して上昇する。

ミトに向かって剣を振り下ろしてくる。

何とか剣をギリギリで回避し、鎌を振って顔、首、胸、を斬り割り倒す。

それでも、ガーディアンはまだまだいる。

今度は二体同時に襲い掛かって来た。

一体の剣を鎌で受け止め、もう一体の剣の腹を足で受け止め、防ぐ。「せやっ!」

足を滑らせるように剣をずらし、その剣を、ミトが剣を受け止めるガーディアンに向ける。

剣はガーディアンに突き刺さり、剣を刺したガーディアンにも剣を刺されたガーディアンの剣が突き刺さり、身動きが取れなくなる。

その二体に向け、全力で翅を振るわせ、そのまま2体のガーディアンを、壁に向かって叩き付ける。

そして、二体のガーディアンは、そのまま白い炎となって消えた。互いにカバーし合いながら、ガーディアンたちを倒していく。

だがそれでも、隙が出来少しずつダメージを受けていく。

「今よ！レコン！」

「はいー！」

リーファとレコンが詠唱していた回復魔法で、ダメージを追ったキリトとミトのHPを回復する。

すると、急にガーディアンはリーファさんたちに目を向けた。

「な、なんでガーディアン達が!?!」

「まさか、直接攻撃してなくても戦闘に手を貸したら標的にされるの!?!」

他のモンスターとは違うアルゴリズムに、リーファとレコンは驚愕する。

「リーファ！レコン！」

支援魔法を使いミトとキリトに強化を施し、阻害魔法で動きを阻害していたジークが、それに気づき、助けに向かおうと戻ろうとする。

「来ないで！」

そんなジークをリーファが止めた。

「こいつらはあたしたちでなんとかするから！ジークは自分の役割を果たして！」

「リーファ………すまない！」

ジークはそう言って、再び前を向いて戦闘をする。

「レコン、サポートよろしく！」

リーファは剣を抜き、ガーディアンの軍団へと突っ込む。

剣でガーディアンの顔を突き刺し、横に払って、新たなガーディア

ンの顔、胴、腕の順に剣を叩き込み、咄嗟に唱えた阻害魔法で他のガーディアンを牽制する。

レコンは敵の攻撃を躲しながら、リーファに支援魔法や回復をする。

だが、レコンは随意飛行が出来ない為、コントローラーでの操作をしないといけない。

その為、敵の攻撃を避けることに意識を持って行かれ、リーファへの支援が間に合わない。

(くっ！やっぱりきついかも……………！)

やはり、ジークに応援をしてもらおうべきだったかとも思いながらも、すぐにその考えを振り払う。

(自分で大丈夫って言ったんだ！大見え張っても食らいついてやる！)

己を鼓舞し、リーファは再びガーディアン相手に斬りかかる。

「うわああああああ!!」

2体のガーディアンを倒した所で、背後でレコンの声が聞こえる。

振り向くと、レコンは弓を持ったガーディアンの攻撃を受け、全身に矢が刺さっていた。

「レコン！」

助けに行こうとした瞬間、その隙を逃さず、ガーディアンはリーファに一斉攻撃を仕掛ける。

ギリギリで回避していくも、多勢に無勢で徐々にダメージを追っていく。

「がっ!？」

とうとう、ガーディアンの剣がリーファの右肩を深く貫き、別のガーディアンの剣がリーファの脇腹を貫く。

そして、リーファの目の前に剣を上段で構えたガーディアンが現れる。

リーファは覚悟し、目を閉じる。

「はああああああああ!!」

だが、そのガーディアンを背後から斬る者がいた。

ジークだった。

ジークはガーディアンを倒すと、リーファを刺している2体のガーディアンも倒す。

「ジーク!?あなた、何して!」

「……目の前でリーファがやられるのを見過ごせるわけないだろ」

そう言い、ジークは剣を構える。

だが、既に頭上では無数のガーディアン達が出現し、最早天井のゲートが見えなくなっていた。

「こんなの……無茶だよ……」

そう呟くリーファの視線は、キリトとミトに向けられる。

アスナを庇いながら、上を目指す2人のHPは既にレッド近くまで落ちていた。

なんとか回復魔法を掛けるも、焼け石に水。

リーファは諦めて、目を閉じそうになった。

「諦めるな!」

だが、ジークが叫んだ。

「キリトもミトも、まだ諦めてない!それなのに、俺たちが諦めてどうする!」

「ジーク……」

「友が諦めないなら、俺達も諦めない!そうだろ!」

ジークの言葉に、絶望し掛けていたリーファは再び奮起し、剣を構える。

例え、この身を犠牲にしてもガーディアン達を倒す。

そう決意したその瞬間だった。

突如、背後から声と羽ばたく音が津波の様に聞こえる。

それに交じり、遠雷の様な雄叫びも聞こえる。

「あ、あれは……!?!」

「風妖精族の精鋭部隊!それに、猫妖精族の竜騎士隊だ!」

全身を古代武装級の武器と防具で身を固めた50人はいるであろう風妖精族の精鋭部隊に、10体の飛竜に跨り、風妖精族同様全身を古代武装級の武器と防具で固めた猫妖精族の竜騎士隊。

どちらも、風妖精族と猫妖精族の最終戦力だ。

「これを招集し、出撃できるとなるとまさか！」

「すまない遅れた！」

ジークの予感的中しており、後ろから風妖精族領主のサクヤが現れた。

「ごめんネー！準備に手間取っちゃってサ！」

そして、飛竜に跨って猫妖精族領主のアリシャも現れた。

「2人とも……来てくれたんだ……ありがとう……！」

頼もしい応援に、リーファは涙を流す。

「応援は私たちだけではないぞ、リーファ」

「そうだヨー。まあ、正直あり得ない援軍だけどネ」

「ほう、あり得ないとは少々心外だな」

そう言つて、現れたのは赤い鎧に身を包み、背には伝説武器の《魔剣グラム》を携えたプレイヤー、ユージーンだった。

「ゆ、ユージーン將軍!?!」

「まさか、火妖精族が手を貸してくれたのか!?!」

火妖精族の登場に、リーファとジークは驚きを隠せなかった。

「援軍ではない。だが、この俺を降し、兄者を説得した傑物が居てな。水妖精族と侮った……いや、侮った時点で俺の負けだ。敗者は勝者に従う。それが武人だ」

何処か楽しげに笑うユージーンは、《魔剣グラム》を抜き放つ。

「火妖精族の同胞よ！風妖精族と猫妖精族如きに後れを取るな！」

「！！」「うおおおおおおおおおおお！！」「！！」

重武装の火妖精族の大部隊、総勢50名がユージーンの声と共に、攻撃を仕掛ける。

その光景に、リーファは信じれない者を見ていた。

種族間で仲の悪かった火妖精族が、風妖精族と猫妖精族と協力し戦っている。

とても信じられる光景ではなかった。

「なんだよ、仲が悪かったんじゃないのか？」

その光景に、ガーディアンを薙ぎ払いつつキリトが笑う。

「なんか色々あったみたいね。でも！」

ガーディアンを真つ二つに斬り裂きながら、ミトは辺りを見渡す。周りは、ガーディアンたちで囲まれ、その数は応援のプレイヤーたちを合わせても数が足りない程だった。

「あれだけ応援が居てもこの数をどうにか出来るか分からないわよ」
「そうだな……………せめて、あともう1つ……………決定的な戦力があれば……………」

ミトとキリトが攻めあぐねる中、アスナは今の自分の立場に腹を立てる。

（私、なにもできてない……………この手に剣があれば、一緒に戦えるのに……………！）

無論、アスナ自身店売りの細剣レイビデを買い、それで戦うのも考えた。

だが、NPC “テイターニア” としての役割があるアスナは武器の類を装備できず、戦力とならなかった。

「ごめんね……………キリト君、ミト」

「アスナ？」

「私の為に、こんなに頑張ってくれてるのに私、何も出来なくて……………」

今にも泣き出しそうなアスナに、ミトとキリトは笑いかける。

「そんなことないさ」

「え？」

「アスナが、こうして無事にいてくれる。俺の傍にいてくれる。これ以上に、心強いことはないさ」

「そうね。ごめんね、変な弱音吐いて。今度こそ、アスナを守るよ、私は」

「キリト君……………ミト……………」

（とまあ、実際アスナが居てくれると心強いけど……………！）
（殆ど強がりなのよね……………！）

本心がバレない様に、笑みを浮かべたまま、2人は武器を強く握り直す。

ゲートまではまだ遠い。

風妖精族シルの精鋭部隊に、猫妖精族ケットの竜騎士隊ドラグーン、そして、火妖精族サラマンダーの大部隊。

100人はいる歴戦のプレイヤーたちの助力があっても、グランド・クエストのクリアには至らない。

プレイヤーと運営、謂わば人と神でもある。

人は、創造主たる神には決して敵わない。

例え須郷がどれだけ非道な実験を行っていても、どれだけ人の想いを踏みにじっていたとしても、運営のトップである以上ALO内では神である。

(カイがいてくれたらな……)

思わず、ミトとキリトの心の中の眩きが、重なった。

「「「「「わああああああああああああああ!!」「「「「「「」」」」」」」」

その時、背後から何かの音が響き渡った。

「なんだ?」

キリトは思わず、戦闘する手を止め、後ろを確認する。

小さかったその声は、徐々に大きさを増し、そして、空気を震わせるような大声となった。

「「「「「わああああああああああああああ!!」「「「「「「」」」」」」」

突如、風妖精族シル、猫妖精族ケット、火妖精族サラマンダー達をかき分けるように、およそ100名近くいる集団が突進してきた。

「なんだ、あの一団は?!」

「私たち以外にも協力してくれる種族が居たの!」

「いや、その様な話は聞いてないが……」

突如現れたその集団に、サクヤとアリシヤ、ユージーンは困惑する。

よく見ると、その集団は火妖精族サラマンダー、水妖精族ウンデイナー、風妖精族シル、土妖精族ノール、闇妖精族イェン、影妖精族スプリガン、猫妖精族ケット、工匠妖精族レブラコーン、音楽妖精族ミュージカの9つの種族全員がいる混成パーティーの集団だった。

「な、なんだ!」

「一体何が起きてるの!」

「間に合ったか!」

驚いていると、1人の水妖精族ウンデイナーがキリトとミト、アスナの下へと

やって来る。

そのプレイヤーは、騎士の様な鎧を身に纏い、片手剣と盾を持つていた。

「キリトとミト、それにアスナだなー！」

「あ、ああ……アンタは？」

「俺だよ。ディアベルだ」

そう言つて、水妖精族ウンディールネのディアベルはいつもの騎士スマイルを浮かべる。

「デイ、ディアベルだつて!？」

「どうしてここに!？」

「ある人から連絡が来たんだ」

そう言つて、ディアベルは経緯を語った。

SAOから解放されて間もなく、ディアベルはある人物から連絡を受け取った。

その内容に驚きながらも、未だにSAOから300人の未帰還者がいることを知り、その解放のために手を貸して欲しいと言う内容がそこにはあった。

ラスボス「ヒースクリフ」との戦いで、共に戦うことが出来ず、カインを死なせることになってしまったディアベルは、今度こそ騎士として戦いを成し遂げることを誓い、手を貸すことにした。

「大変だったよ。なんせ、これだけの人数に声を掛けるんだからね」

「これだけつて……まさか!？」

「ここにいるメンバー、全員元SAOプレイヤー!？」

「嘘でしょ!？」

ガーディアン相手に戦いを繰り広げている100名の9つの種族の妖精たちの混成パーティ全員、元SAOプレイヤーと言う事実
にキリトもミトも、アスナも驚愕する。

「お前ら！ディアベル塾卒業生として、最後の戦いだ！」

「この戦いで、SAOを終わらせるぞー！」

ディアベル塾の卒業生のシュミットとコーバッツが周りを鼓舞して戦う。

「キリト！支援するぞ！」

「回復するよ！」

「こっちは強化だ！」

「周りのガーディアンたちはこっちで抑えるから！」

「お前たちは決めに行け！」

《月夜の黒猫団》も、支援や露払いで動く。

「キリト！なんで俺を呼ばねえんだよ！水臭いにも程があるぞ！」

クラインも荒々しく叫んでガーディアンを斬る。

「飯の1回や2回奢った程度で許さねえからな！」

そう言つてクラインは笑い、次のガーディアンを倒しに行く。

「シュミットにコーバツツ、《黒猫団》の皆……！」

「クラインまで……！」

「全員の連絡先を対策本部の人から聞き出すのには苦労したけど、お陰で集めることが出来たよ」

「誰なの？あなたにメッセージを送って来た人つてのは……」

「君たちのよく知ってる人さ。それより、ココが正念場だ！」

ディアベルはそう言つて、キリトとミト、アスナの肩を叩く。

「道は俺達で切り開く！3人はその道を進んでくれ！風妖精族と猫妖精族、それに火妖精族の皆さん！協力願います！」

ディアベルは声を張り上げ、そう言う。

「了解した！」

「分かったヨ！」

「承知！」

ディアベルの言葉に、サクヤ、アリシヤ、ユージーンは頷く。

「風妖精族部隊！エクストラアタック用意！」

「竜騎士隊！ブレス攻撃用意！」

「フェンリルストーム、放てッ！」

「ファイヤブレス、撃て——ッ！」

飛龍が口から巨大な炎を吹き、風妖精族部隊は剣先から眩い閃光を放ちガーディアンを一掃した。

「火妖精族！豪炎の陣！風妖精族と猫妖精族が穴を開けた場所に突貫

「ガーディアン共を抑え込め！」

ユージーンの声を合図に、サラマンダー火妖精族が陣形を組み、重突進でガーディアンに突撃し、抑え込む。

「行け！キリト、ミト、アスナ！」

ディアベルが叫び、3人は頷き合う。

そして、3人は全力で翹を震わせ突撃する。

このままいけば、穴を通り、ゲート前まで出られる。

だが、3人の前にまたしても壁が立ち塞がった。

突如、数十体のガーディアンが集まり、眩い光を放った。

光が収まると、そこに居た数十体のガーディアンは消え、巨大なガーディアンが1体そこに居た。

「なによこれ!？」

「合体して巨大化は王道だが、何もこんな時に！」

「突破するしかないわ！」

巨大ガーディアン相手に、キリトとミトは突っ込む。

だが、巨大ガーディアンの持つ剣が一振り。

攻撃は当たらなかったものの、剣を振った時に生じた風で、2人は吹き飛ばされた。

「キリト君！ミト！」

アスナは咄嗟に二人の下へと駆け付けようとする。

だが、それより早く巨大ガーディアンが腕を伸ばし、アスナを捕まえた。

「アスナ!？」

どうやら巨大ガーディアンはアスナを捕まえることが目的なのか、アスナを捕まえると、そのまま開いたゲートの中へと消えようとした。

ミトはアスナを助ける為に追い掛け様とするが、そんなミトを周りのガーディアンが剣を突き刺して止める。

「がっ!？」

「ミト!？」

アスナがミトの名前を呼ぶ。

「あ、アスナ……………」

ミトは減りゆくHPを見つめながら、アスナへと手を伸ばす。

そして、HPがレッドにまで落ちる。

その瞬間だった。

ミトの身体を突き刺しているガーディアンが、行き成り燃え出し消滅した。

「え?」

そして、巨大な炎の斬撃が巨大ガーディアンの腕を斬り割り、アスナを助け出す。

「アスナ!」

落ちて来るアスナをキリトが受け止める。

「アスナ大丈夫か!」

「うん、私は平気……………それより、キリト君、今は…………」

「ああ、炎の斬撃だった……………まさか!」

キリトは信じられないと言った表情で、その斬撃が飛んで来た方向を見る。

「嘘でしょ……………!」

アスナも自分の目がおかしくなったのではと疑った。

「待ち兼ねたぞ!」

ディアベルは嬉しそうに笑い言った。

斬撃が飛んで来た方向は、ミトの居る所だった。

そして、その炎の斬撃を放った者と思しきものが、ミトを守る様に立っていた。

「あ……………ああ……………」

その何者かの姿を見たミトは、目から溢れんばかりに涙を零した。

赤いコートサラマンダーを身に纏い、手には一本の刀が握られた。

髪は火妖精族の証の赤い髪だが、その姿は決して見間違えるものではなかった。

「ミト、大丈夫か?」

彼、焰の剣聖「カイ」は変わらぬ笑顔でそう言った。

第20話 突入

「カイ……なんだよね……?」

ミトはあふれる涙を堪えることなく、カイに近付く。

「父上……」

ノアも、目の前にいるカイに驚きを隠せず、その目には涙が溢れていた。

「ああ、俺だ。待たせたな」

「カイ!」「父上!」

ミトとノアは、もう抑えることが出来ずカイに抱き付いた。

「おっと……!」

「カイ……良かった……本当に良かったよ……!」

「父上……俺、俺……!父上が死んだと聞いて、それで!」

「やれやれ、俺って奴は本当にどうしようもないな……ごめん、今まで何も連絡せずに」

カイはそう言つて、ミトとノアを抱きしめた。

「でも、どうして……?」

「それについては、あとでゆっくり話す。今は、この戦いを終わらせよう。行けそうか、ミト?」

「……うん!」

カイがそう尋ねると、ミトは涙を拭き、カイの手を取る。

「よし!ノアは、もう少し待っていてくれな。全部終わらせたなら、沢山話そう」

「はい、父上!武運を!」

ノアがミトの胸ポケットに収まったのを確認し、カイとミトはキリトとアスナの元へと向かう。

「久しぶりだな、相棒、それにユイちゃんも。今度は小さくなったな」

「小さいのはナビゲーションピクシーモードだからですよ、カイさん」

変わらないやり取りに、ユイは涙を拭って答える

「カイ、お前……本当にお前なのか?」

キリトは未だに信じられないと言う風に、カイに尋ねる。

「ああ、本物だ。なんなら、お前とSAOで俺が何したか、事細かに説明してもいいんだぞ」

カイがそう言うのと、キリトはようやく本当のカイだと理解し、涙を流し始めた。

「何泣いてるんだよ、キリト」

「馬鹿野郎……俺、お前が死んだと思って……俺の所為で死なせたから……！それで、俺……俺……！」

自分でも何を言ってるのか分からなくなり、とにかくキリトは涙を拭きながら、自身の心の内を吐き出した。

「お前の事だから、絶対気にしてると思っただけだな。悪かったな、キリト。嫌な役やらしちまって」

カイは泣いてるキリトの頭を、優しく撫でる。

「アスナは無事だったか？」

「うん。手を出されることはなかったから全然平気」

「そりゃ、よかった。《業火刀》の力も便利なものだな」

「《業火刀》って、じゃあ、やっぱりあのバグは……」

「ま、それも追々な。今は、ココを突破するぞ」

そう言っつて、カイはゲートの方を見る。

そこには、数十体のガーディアンと、腕の欠損を直した巨大ガーディアンが立ち塞がっていた。

「後ろのガーディアンはディアベルたちとALOプレイヤーが引き受けてくれる。だから、俺たちは正面だけに集中する」

カイは刀を構え、笑う。

「行けるか、ミト、キリト、アスナ。それに、ノアとユイちゃん」

「ええ、勿論よ！」

「いつでも行ける！」

「はい、父上！」

「私も準備できてます！」

「私も出来るよ。もったも、私は戦えないんだけど」

そう言うアスナは、少し悲しそうに笑う。

「おっと、そうだった。そのことなんだけど……」

カイはメニューウィンドウを操作し、ある物をアスナへと差し出す。

「ほら、アスナ。お前の剣だ」

カイの手には、一本の細剣レイピアがあった。

それもただの細剣レイピアではなかった。

「こ、これって……《ランベントライト》!?!」

「アスナと言ったら、この武器だからな」

「どうしてこの武器がここに!?!それに、私武器の装備が……」

「ああ、分かっている。でも、それは大丈夫だ」

カイの言葉にどういう事つと聞きたいが、試しに装備してみると、店売りの細剣レイピアでは無理だったのに、何故か《ランベントライト》は装備することが出来た。

「どうして!?!」

「それも後で説明するよ。さてと……」

カイはアスナ、キリトの順に顔を見て、最後にミトを見る。

「3人とも、行くぞ」

「うん!」「おお!」「ええ!」

アスナ、キリト、ミトの順にいい、4人は一気にゲートを目指し、翹を震わせた。

アスナの正確な突きが、ガーディアンの弱点を的確に貫き倒し、1体倒すのに1秒も掛からなかった。

キリトはようやく《エリユシデータ》を解禁し、二刀流にてガーディアンの群れを連撃で倒していく。

ミトは鎌の広範囲にわたる攻撃で、ガーディアンを複数体同時に倒していく。

カイは刀を使い、ガーディアンの頭をどんどん斬り飛ばしていく。

4人の猛攻に、ガーディアンの群れは成すすべなくその数を減らしていく、新たなガーディアンの出現も追いつかない程だった。

そして、最後に残った巨大ガーディアンは、4人を通さないと云わんばかりに巨大な剣を振り被る。

その剣を、カイとキリトは何も言わずに受け止める。

すると、巨大ガーディアンは新たに取り出した巨大な剣を持ち、横からカイとキリトに斬りかかる。

だが、それをミトとアスナの2人が受け止める。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「はあああああああああああああ!!」

4人は雄叫びを上げ、一気に剣を跳ね上げる。

巨大ガーディアンは、後ろへと仰け反り、体勢を崩す。

その瞬間、4人はあらん限りの力を籠め、突撃した。

そして、4人の攻撃は同時に巨大ガーディアンへと当たる。

二刀流スキル《ダブル・サーキュラー》

レイビダ
細剣スキル《シューティングスター》

両手鎌スキル《カラミティ・ブラッドロード》

業火刀スキル《燎火一閃》

ソードスキルが存在しないにも関わらず、4人は寸分狂わず技を使い、巨大ガーディアンの中心に同時に当てた。

巨大ガーディアンが胸を貫かれると同時に、4人は貫いた穴から飛び出し、4人の背後で巨大ガーディアンが巨大な炎をに包まれ、消滅した。

そのままゲートへと到達する。

だが、ゲートは開かなかった。

「どういうことだ? ユイ!」

「はい!」

ユイがキリトの胸ポケットから飛び出し、ゲートを触る。

「これは、クエストフラグによってロックされてるものではありません! システム管理者権限によるものです!」

「どういうことなの!?!」

「つまり、この扉はプレイヤーに絶対に開けられないということですよ!」

「やっぱりな。予想通りだったか」

カイはまるで分っていたかのようにそう言う。

「アスナ。トバルから、何か受け取らなかったか？」

「あ、そう言えば……………」

アスナは思い出したように、トバルから受け取ったカードだった。

「ノア、ユイちゃん、これを使え！」

カイはそのカードを受け取り、ノアとユイに銀色のカードを差し出す。

「これは、システム管理用のアクセス・コードです！」

「これなら！」

「はい！」

ノアとユイは、カードに触れると、一瞬黄色に発光する。

光が収まると、2人は今度はゲートに触れた。

「コード転写！」

ノアがそう叫ぶと、ノアとユイが触れた場所から放射状に青い光が広がり、ゲートが開き出した。

「……………転送されます！」

「掴まってください！」

ノアとユイに言われ、4人は手を取る。

ユイの右手にキリト、左手にアスナ。

ノアの右手にカイ、左手にミト。

そして、カイたちは白く輝くスクリーンの中へと、データの奔流と
なって突入した。

第21話 罪人の妖精王

意識がなくなったのは一瞬の出来事だった。

4人の意識が戻ると、そこは白い壁しかない通路に居た。

「パパ、ママ、大丈夫ですか？」

「父上、母上、起きてください」

ピクシーモードじゃないノアとユイが目の前で心配そうにカイ達の顔を覗き込む。

「ああ、ここは？」

「……判りません。マップ情報が無いみたいで」

「本来なら、先行してたトバルがシステム管理用のアクセス・コードとマップ情報を入力、そして、アスナを救出して《世界樹》の外に出て、俺たちが来るのを待つてのが最初の予定だった」

カイは立ち上がり、辺りを見渡しながら言う。

「でも、アスナが独自に動いたことでマップ情報の入手が間に合わなかったんだ。それでも、システム管理用のアクセス・コードが入手できただけでも良かった」

そう言うと、カイはアスナを見る。

「アスナ、逃げる時に怪しい部屋とか見なかったか？もしくは、GMコンソールがあつた部屋とか」

「それなら、それらしいラボを見かけたよ。この場所、私が抜け出す時に使った転送室みたいだから、多分道は分かるわ」

「よし、なら案内頼む」

アスナは記憶を辿りながら、《実験体格納室》を目指し動き出し、カイとミト、キリト、ノア、ユイもその後が続く。

幸いにも、アスナの記憶が正確だったこともあり《実験体格納室》に問題なく辿り着く。

扉はロックが掛かっていたが、ノアとユイの2人が解除し、6人は中へと進む。

「これは……………」

「酷過ぎる……………」

中に入ると、ミトとキリトは、柱の中に収められた精巧に作られた半透明の青色の脳を見て、そう呟いた。

脳がまるでホルマリン漬けにでもされたような光景に、2人はこの悪魔の実験を行っている須郷に対し怒りがこみ上げる。

「この人たちも解放しないとな。アスナ、コンソールがあつたつて言う場所は？」

「この先だよ。待つててね、今度こそ助けるから」

アスナは誰かも分からない脳にそう呼び掛け、案内する。

「あつた！あれだよ！」

ようやく見つけたコンソールに、全員で駆け寄る。

「よし、ここまで順調だ。ノア、ユイちゃん！アスナを含めた全員の口グアウトを頼む！」

「了解しました！」

カイに言われ、ノアとユイはコンソールに近付き、手をかざす。

巨大なウィンドウが出現し、高速でスクロールする文字列が輝き出す。

「このままログアウトしたら、ココで行われた実験の記憶が残り、現実の身体にも異常をきたす可能性があります！」

「実験の影響なく、後遺症を残さない様に処置を施します！処置完了まで5分！少し待つてください！」

ノアとユイはそう言い、処置を行っていく。

「時間は掛かるけど、なんとかかなりそうね」

「うん、やっと帰れるんだね……………」

ミトとアスナは、ようやく戦いが終わることに喜んでいるが、そんな中、カイとキリトだけ何処か険しい表情だった。

「カイ、おかしくないか？」

「やつぱり、キリトもそう思うか？」

「ああ。実験室なのに、さつきから研究員の姿らしきものが見えない。それに、GMコンソールがあるのに警備の1人もいない」

「無防備すぎるな……………」

その時、カイ達は嫌な気配を感じた。

SAOで感じた、犯罪者^{オレンジ}プレイヤーの視線に似た感じを。カイとキリト、それにミトとアスナもそれぞれ武器を抜こうと、手を掛ける。

だが、次の瞬間、6人の体に何かが押し掛かるような感覚に襲われた。

6人は立っていられなくなり、その場に崩れ落ちる。

そして、周りには深い闇のようなもので覆われた。

「な、なんだこれは……！」

「体が……動かない……！」

「くっ……！アスナ、大丈夫か……！」

「き、キリト君……！」

「ユイ……しつかりしろ！」

「の、ノア……！」

一体何が起きたのか分からず、6人は暗闇の中で身動きが取れなくなっていた

その時、誰かが目の前に降り立った。

「どうだい？次回のアップデートで導入予定の重力魔法なんだけど、ちよつと強すぎるかな？桐ヶ谷君、兎沢君」

妖精王「オベイロン」は、地面に這いつくばるキリトとミトをあざ笑うかのように訪ねる。

「お前は……須郷！」

「その呼び方はよしてくれないかな？僕の名は妖精王「オベイロン」君たち妖精共の王だ。だから、ここでは「オベイロン陛下」と……

そう呼べ！」

そう叫び、須郷はキリトの腹部を蹴る。

「がっ!？」

蹴られた衝撃で、キリトは胃液を吐きそうな嫌な感じに襲われ苦しむ。

「やめなさい！卑怯者！」

アスナの言葉に須郷は耳を貸さずキリトに問いかける。

「桐ヶ谷君、いや、ここではキリト君と呼んだ方がいいかな。どうやっ

てここまで登って来たんだい?」

須郷はキリトの背中の中を靴から《エリユシデータ》を抜き、振り回す。

「飛んで来たのさ、この翅で」

「ふん、まあいい。君の頭の中に直接訊けば解かることさ」

「何?」

「まさか僕が酔狂でこんな仕掛けを作ったと思ってるんじゃないだろうね? 300人にも及ぶ元SAOプレイヤーの献身的な協力によって記憶・感情操作技術の基礎研究は8割方終了してる。かつて誰も為し得なかった、人の魂の直接制御という神の業を、僕はあと少しでものにできる! まったく、仮想世界様様だよ! フフフフフフフフ、ハハハハハハハハハハ!」

そう言うと、須郷は倒れているカイの方を向く。

「それで、君は何処の誰だい? 随分と余計なことをしてくれたみたいだけど、全部無駄に終わったけどね」

「無駄だって? ……まだ終わってないさ。それどころか、始まってすらいない。こつから、お前の悪事を全部暴いていくんだ。覚悟しとけよ、この大法螺吹きが……!」

カイは倒れながらも、目で須郷を見上げ言う。

「はっ、嫌だね。正義は必ず勝つて顔してる。その顔を見ると、嫌でも思い出してくるね、あの正義の味方気取りの愚かなジャーナリストを」

須郷の言い放った言葉に、全員が反応した。

「ジャ、ジャーナリスト……だって……?」

「ああ、そうさ。本当に嫌な奴だったよ。僕の犯した罪は必ず明かされるだの、いつまでも逃げられないだの、拳句、少しでも良心はあるなら自首しろだってさ。全く、ふざけた話だよ」

耳の穴を指で掻きながら、須郷は詰まらなさそうに言う。

「それで、僕が自首しなかったから僕の罪を公表しようとした。この僕に、上から目線で……何様のつもりだよ………本当に忌々しくて、目障りだったよ。だから、消えて貰ったんだ、家族諸共ね」

世間話をするかのように、そう言う須郷。

その話に、ミトとキリト、アスナは驚愕する。
家族諸共殺されたジャーナリスト。

その話を、3人は聞いたことがある。

かつて、アインクラッドで、カイが語った過去。

それと酷似していた。

そんな偶然あり得るのか？

誰もがそう思った。

「…………お前だったのか」

「あん？」

「お前が、父さんと母さん、妹を殺したのか……………」

絞り出されるようにカイから言葉が放たれる。

そのカイの言葉に、須郷は手を叩いて思い出したように言う。

「ああ、思い出したよ。あの時、僕の質問に正直に答えてくれた子じやないか！」

須郷は、久々に再会した親戚の子供に会う様に、両手を広げカイの傍までより、膝を付く。

「いや、助かったよ。あの時の君のお陰で、待ち伏せなんて面倒なことでせずに事を運ぶことが出来たよ。まあ、その所為で関係ない彼の妻や、君の妹も死んだけどね」

「ふざけるな！」

するとミトが、須郷に叫んだ。

「アンタの所為で…………カイがどれだけ苦しんだと思ってるのよ！」

「それどころか、自分の罪を棚に上げやがって……………」

「どこまで自分勝手な人なの！絶対に、許さない！」

ミトだけでなく、キリトも、アスナも須郷を睨みつけるように糾弾する。

「うるさい連中だな。彼がどれだけ苦しんだかって？そんなの知らないね、どうでもいい。自分の罪を棚に上げてだって？それが人さ、人の悪事を糾弾し、自分の悪事は正当化、それが普通さ。そして、許さない？誰が許さないのかな？残念ながらこの世界に神はいないよ。この僕以外はね！」

須郷は勝ち誇る様に、笑い言う。

「さて、少し余計なことを喋り過ぎてしまったけど、それも今ではどうとでもなる。だが、君たちの魂を改竄する前に楽しいパーティーと行こうか！」

そう言つて、須郷が指を鳴らすと、何も無い空間から鎖に繋がれた腕輪が現れ、自動的にカイ達を拘束し、釣り上げた。

そして、再び指を鳴らすと、今度は宙に半透明のスクリーンが現れ、何かを映す。

「お前……何をするつもりだ………！」

「今から、『世界樹』の中で行われてる戦闘をライブ中継で見せてやる」
そう言うと、須郷は何処からと鳴く出現したソファアに座り、手にはワイングラスを持つ。

「あるプレイヤーに、君たちに協力した全プレイヤーの捕獲を命じた。僕の実験も、残すはアミユスフィアでの記憶・感情操作が可能かの実験のみ。思いがけなく、いい実験動物が来てくれたよ。またしても、君のお陰だ、カイ君」

須郷は背後で、顔を俯いたままのカイにそう言い、スクリーンに映る様子を眺めた。

「総員撤退！」

カイ達が転送された直後、その様子を見届けるとディアベルは仲間たちにそう言った。

自分たちの役割はここまでと思いつながら、ディアベルはサクヤ、アリシャ、ユージーンに近付く。

「協力、感謝します！ALOのプレイヤーの皆さん！」

「構わないさ。我々も、約束を果たしたに過ぎない」

「そうそう。それに恩返しもまだだったしネ！」

「俺は、ただ敗者として勝者に従っただけだ。礼は要らん。兄者も、同じだろう」

4人はそう言って笑い合い、《世界樹》から出ようと、入口へと向かう。

もたもたしてたら、ガーディアン達に襲われるので、早急に出ないと行けなかった。

その時だった。

「逃がすと思ってるのか？サクヤ」

突如、入口から1人のプレイヤーが現れ、全員の前に立ち塞がる。

「お前は!？」

サクヤは、そのプレイヤーを見た瞬間、驚いていた。

「シグルド！」

「久しぶりだな……それに、アリシャにユージーン……お前らも久しぶりだ」

何処か狂気を孕んだシグルドの言葉と視線に、サクヤは気圧され気味になりながらも、一步前に出てシグルドに問い質す。

「シグルド、こんな場所で何をしている?」

「何をしているって?俺を追い出しておいて、偉そうに」

「よく言うヨ!サクヤちゃんたちを裏切ったんだから、当然の報いでしょ!」

アリシヤは、シグルドに向かってそう叫ぶ。

「黙れよ、猫妖精族如きが」

シグルドは、アリシヤに対し一睨みする。

「ヒツ!!」

その視線に、アリシヤは強烈な嫌悪を感じ、尻尾と毛を逆立てながらサクヤの背後に隠れる。

「ユージーン、この俺が手引きしてやったにも関わらず領主の首が取れなかっただけに留まらず、簡単に切り捨てやがって!」

「前者に対しては俺の力不足なのは否めん。だが、後者に関しては当然だ。そもそも、簡単に自身が仕える領主を裏切るような男に、兄者が重要なポストを用意する訳もないだろう。折を見て、切り捨てるつもりだった」

ユージーンはあっさりと、シグルドを斬り捨てるつもりだったと白状し、それがシグルドの怒りを増長させた。

「どいつもこいつも、俺を虚仮にしやがって!……だが、それも今日までだ。今日俺は、生まれ変わる!妖精王“オベイロン”様の忠実な僕として、貴様らに天誅を降す!」

「妖精王の僕だ?!」

「ふざけるな!たった1人で、この大部隊に敵う訳ないだろ!」

「一思いに、葬ってくれ!」

シグルドの言葉に、反応した風妖精族や猫妖精族、火妖精族たちがシグルドに攻撃を仕掛ける。

だが、シグルドは自身に迫る刃を全て躲し、全員の四肢を斬り落とした。

「なっ?!速い!」

「嘘!?!何あの速さ!?!」

「あり得んスピードだぞ!」

「くっくっくっ………やはりオベIRON様が授けてくれた力は素晴らしい………!」

今のシグルドは、オベIRONによって様々なチート状態となり、違法なまでに強くなっていた。

「さあ、全員大人しくしてもらおうぞ………! オベIRON様の為にも、ここで捕まってもらおう!」

第22話 堕ちた英雄

「キリト君、ミト君。彼の事は知ってるよね？」

戦闘の様子を見ながら、後ろにいるミトとキリトに尋ねる。

「ついこの前、彼から運営にある訴えが来たんだ。『領主による不当な追放処分を受けた』ってね」

ワインを一口飲み、須郷は言う。

「稀にこう言う訴えはあるけど、基本的に運営はプレイヤー間での揉め事には介入しない。今回もお決まりの文章で返信する予定だったけど、メッセージには面白い文があったんだ」

背後に視線を映し、須郷はニタリと笑う。

『黒い剣士と、鎌使いの女の、それも他種族の持ち込んだ偽の情報に踊らされるプレイヤーに領主は務まらない』ってね。黒い剣士と鎌使い………前者はキリト君の二つ名だっけ？それで、ミト君は鎌を使ってた。偶然にしては、出来過ぎてる。だからこそ、僕は彼に接触することにした。そしたらどうだい！見事、君達2人だった！愚かにも、僕の世界に踏み込んだ君たちを是非ここに招待したくてね。どうだい？僕の作った世界は？」

「…………胸糞悪い世界だよ、須郷」

「…………世界樹の上に天空都市があるとか嘘ついて、よくも全プレイヤーを騙してたわね」

「ふん、何とでも言えばいいさ。この世界に、神たる僕にその王妃以外に光妖精族はいらないのさ」

須郷は罪悪感を感じず、スクリーンに向き直る。

「ぐあつ!!」

風妖精族のプレイヤーがまた1人倒される。

どういう訳か、欠損部位の回復が出来ず、殆どのプレイヤーは四肢を落とされ、身動きの取れない状態となっている。

猫妖精族の最高戦力の飛竜もすべて落とされ、火妖精族もその人員を半分以下にまで落としていた。

「この男……ここまで強かったのか……!」

ユージーンは《魔剣グラム》を構え、肩で息をする。

「いや、確かにシグルドは風妖精族でも屈指の実力者だ。だが、これだけの大人数を相手に戦える程の技量はなかったはず……!」

「それに、種族的に火妖精族にパワー負けするはずなのに、あの強さ……まさか、チート!?」

シグルドの異常な強さに、アリシヤはチートを予想した。

「チートだって? そんなもの使わない」

アリシヤの予想に、シグルドはすぐさま否定した。

「今の俺はオベイロン様の忠実な僕だ。この力は、全てオベイロン様が与えてくださった物。貴様ら如きが敵う訳ない!」

「そんなのってあり!」

今のシグルドは、須郷によって全パラメーターを全種族より遥かに上回っており、また与えられた装備も所謂ぶっ壊れ性能で、武器は武器の耐久値回復させるリジエネ機能に、ATK・DEFのバフ効果、防具には古代級武器以下の武器の攻撃及び上級以外の魔法のダメージ無効化。

おまけにHPの即時回復機能もついている。

「そこまで堕ちたか、シグルド！」

かつての部下にして同胞の姿に、サクヤは叫ぶ。

「俺がこうなったのはお前の所為だ、サクヤ。それに、堕ちたという表現は止める。俺はいずれ、オベイロン様と同じ光妖精族になる。貴様らは、この俺が光妖精族となり、あの大空を自由に飛び回る姿を地上から無様に見上げるんだよ」

「完全に暴走しているな……………」

ディアベルが、後方のガーディアン達の相手をしながら、シグルドを見てそう言う。

「どうすんだよ、ディアベル！このままじゃ、こっちの体力が持ちそうにねえぞ！」

クラインがガーディアンを一体斬り伏せながら、ディアベルに言う。

「水妖精族を選んだ奴らからの回復支援があっても、MP回復ポーションが底を尽いたら終わりだ！このままだと！」

「ああ、分かっているさ。考えはある。クライン、ガーディアンの相手を頼めるか？」

「おう、任せとけ！」

「すまない！もう少しだけ、持ち堪えてくれ！」

ディアベルはそう叫び、サクヤたちの所へ移動する。

「皆さん！」

「……………どうした？」

「時間を稼ぐことに集中してください」

「なんだと？」

「稼ぐのはいいけど、時間を稼いだ所でシグルドには敵わないヨ？」

「何か策を立てねば……………」

「ええ、その策があるんです。だから、後5分。5分だけ持ち堪えてください。そうすれば、流れを変えることは出来るはずですよ」

「……………5分でもいいのだな」

ディアベルの言葉に、ユージーンが尋ねる。

「はい！」

がいた。

「ディアベルさん！こちらにも参戦します！」

「助かったぞ、レオ君！」

ディアベルはその水妖精族ウンディーネをレオと呼んだ。

カイの弟子にして、準攻略組だったレオだ。

「貴様は!?あの時の水妖精族ウンディーネ！」

「どうもです、ユージーンさん」

レオはユージーンに挨拶をする。

実は、《世界樹攻略》の為にディアベルは火妖精族サラマンダーにも協力要請を頼もうとした。

だが、普通に言っても協力はしてくれない。

そこで、本来は回復・支援タイプの水妖精族ウンディーネを、交渉人とし向かわせ、一騎打ちと言う条件付きで協力要請を頼んだ。

その交渉人には、レオが選ばれた。

交渉後は、ディアベルが万が一に備え、別動隊としレオを隊長として待機させていた。

そして、ディアベル率いるS A O 攻略組による第一陣が突入後、10分後に第一陣が戻って来る気配がなければS A O 準攻略組の第二陣が突入するように指示していた。

「半数はポーションの配布と回復・支援魔法を！残りは、俺と共に攻撃開始！退路の確保と敵の排除！行きます！」

「「「「「「「うおおおおおおおおお!!」「」「」「」「」」」」」」

レオがそう言い、S A O 準攻略組も雄たけびを上げ、作戦を開始する。

「これが狙いだっただか」

「ええ。決定打にはならないかもしれませんが、戦いの流れを変えることはできたはずですよ。このまま、士気を維持しつつ撤退します！ここが正念場、頼みます！」

「了解した！」

「分かったヨ！」

「承知！」

ディアベルの言葉に、サクヤ、アリシヤ、ユージーンは力強く頷く。実際、レオ達準攻略組の介入により、ディアベル率いる攻略組、そして、風妖精族と猫妖精族、火妖精族たちはHPとMPの回復、そして、アイテム補充が出来て、士気は向上していた。

いくら、シグルドがチートをしていても、隙についての突破ぐらいは可能と思えた。

「……………チツ…うるさい羽虫が集まりやがって」

そう言うと、シグルドは持っていた剣を手放した。

その行動に、誰もが不思議に思った。

「面倒だ。まとめて、葬り去ってやる」

そう言うと、シグルドのアバターが突如、膨れ上がり、体中から骨や肉がまるで形を作り変えてるかのような音を立てる。

物の数秒で、シグルドのアバターは人と言う形を留めていなかった。

更に数秒で、その大きさを巨大ガーディアンと同じぐらいにまでなり、更に数秒後、背中から翼が生え、手には鋭利な爪、口には獠猛な牙、体は鱗で覆われた。

1分にも満たない時間で、シグルドはその姿を人から別のモノに作り替わった。

「ど、ドラゴン……………!?!」

シグルドのその姿を見て、アリシヤは思わずそう言った。
アリシヤの言う通り、シグルドは人から竜^{ブレイヤーモンスター}となった。

第23話 英雄

「ドラゴンに変わった!？」

「プレイヤーと言うより、完全にモンスターじゃない……!」

「あれは変異魔法さ」

キリトとアスナの言葉に、須郷が答える。

「自身の姿を別の姿に変える魔法でね、本来はイベント限定ボス専用魔法なんだけど、今回特別に彼が使えるようにしたんだ。変異魔法は幻影魔法と違い、ステータスも上昇するし、特殊攻撃・特殊魔法の使用なんかもできる。あの姿になった以上、彼らはもう終わりだね」

須郷は満足そうに笑う。

「カイ……大丈夫……?」

そんな中、ミトはカイに声を掛ける。

拘束されて身動きが取れない間、カイはずっと黙ったままだった。

カイの家族を殺したのは須郷。

その事を知った今、カイは冷静で居られない。

ミトはそう思ってた。

「ああ……大丈夫だ……ミト、すまないけどもう少しだけ待ってくれ」

「え?」

「あと少しだ。もうちょっとだけ時間が掛かるんだ。時が来たら、全て終わらせよう」

驚くことにカイは、冷静だった。

先程須郷に向けていた怒りがまるで嘘だったと言わんばかりの落ち着き様に、ミトは驚くもそれ以上は何も聞かないことにした。

ドラゴンと化したシグルドは、口から火炎を吐き、爪で斬りかかり、翼の突風で吹き飛ばしたり、尻尾で薙ぎ払うなど様々な攻撃でALOプレイヤーに襲い掛かる。

本来こう言うモンスター相手には、何度か偵察戦を行い、そこで得た情報を元に対策を立てるのが普通だ。

何の準備も無しに、ボス戦に挑むことはありえなく、ALOプレイヤーは苦戦を強いた。

『ほらほらーどうした！もう御終いかー！』

シグルドは人格が変わったように、口調も荒々しくなり、かつての面影がもう見えなくなっていた。

「このー」

多くの仲間がやられる中、ユージーンは何とかシグルドの火球を躲し、接近する。

「うおおおおおおお!!」

渾身の一撃がシグルドへと刺さる。

《魔剣グラム》の刀身は、深々とドラゴンと化したシグルドの左腕と左肩の間に刺さる。

『ふん、こんな攻撃、ちつとも効かないな』

シグルドはそう言うと、右腕でユージーンを攻撃する。

ユージーンは、咄嗟に《魔剣グラム》を抜いて防御しようとするが、深々と刺さった刀身を抜くのに手間を取り、攻撃を食らってしまった。

その際に、《魔剣グラム》を握る手を離してしまい、《魔剣グラム》はシグルドに刺さったままだった。

すると、シグルドは刺さった《魔剣グラム》を抜き、見つめる。

『《魔剣グラム》……俺がずっと求めていた剣……』

《シグルド》と言う名は、とある英雄の名前だ。

「戦士の王」と称えられる「ヴォルスンガ・サガ」の大英雄、シグルド。

現実のシグルドはその物語を読み、シグルドと言う英雄に憧れ、ALOを始める際に、シグルドと言う名を名乗った。

そして、英雄シグルドが使ったとされる武具、《魔剣グラム》がALO内にあると知り、彼の心は昂った。

《魔剣グラム》を持ち、英雄の如く活躍する自身を思い浮かべた。

だが、《魔剣グラム》は両手剣で、重量系武器とは相性の悪い軽量級妖精の風妖精族では扱う事は出来ず、そして、《魔剣グラム》は火妖精族のユージーンが手に入れたことを知った。

最早、英雄ではなくなつた自身にシグルドは腹を立てた。

そんな時、《転生システム》の実装を知ったシグルドは、風妖精族領主のサクヤを売り、火妖精族へと転生した後の地位を火妖精族領主のモーティマと約束し、転生後はユージーンを倒して《魔剣グラム》を奪おうと考えた。

『はっ……俺が追い求めた剣が、こんなちっぽけだったとはな』

だが、計画がすべて失敗に終わった今、《魔剣グラム》への未練はなかった。

むしろ、光妖精族へと転生できるとオベイロンと約束した今の方が大事で、《魔剣グラム》を放り捨てる。

『こんなものより、俺は遥かに強大な物を手に入れた。この力があれば、誰にも負けない！そうだ、俺は最強だ！今まで、俺に与えられた屈辱を、今度は俺が与える番だ！』

シグルドはそう叫び、あるプレイヤーを見た。

それは、リーファだった。

シグルドにとって、リーファは自分を倒した剣士で気に入らない存在だった。

だからこそ、狙われるのは必然だった。

『まずは、お前からだ！リーファアアアアアアア！』

シグルドは叫び、背中の翼で大きく羽ばたくと、リーファへと向かう。

突然の事に、リーファは動くことが出来なかった。

ようやく認識した時には、すでにシグルドはリーファを捕らえよう

とじていた。

「リーファ!?!」

ジークが気付き、助けに向かおうとするもシグルドの方が早くリーファを捕まえる。

「リーファちゃん!」

すると、リーファが捕まる寸前、レコンが飛び出し、リーファを突き飛ばした。

突き飛ばされたリーファは、シグルドに捕まらなかったが、代わりにレコンがシグルドに捕まった。

「レコン!」

ジークとリーファが、捕まったレコンの名を叫ぶ。

「う……ぐっ……!」

捕まったレコンは苦しそうに呻き声を出す。

『お前は、リーファの腰巾着のレコンじゃねえか』

シグルドはレコンに顔を近づけ、そう言う。

『はっ! お前みたいな雑魚も居たとはな! そんな雑魚が、ココで何してる?』

「くっ……! リーファちゃんが居るなら、僕は何処にだって行くさ……!」

『相変わらず、リーファのストーカーしてるみたいだな。まあ、そんなリーファも、お前の事なんか眼中にないみたいだな』

シグルドは、普段のレコンの態度からレコンがリーファに対して恋心を抱いているのを知っていた。

そして、リーファはレコンをそう言う対象として見ていないことも知っており、むしろ、ジークに対して心を寄せているのを知っていた。

『そうだ……レコン、取引しねえか?』

「と、取引だって……?」

『ああ、そうさ。お前、俺の仲間にならないか?』

「な、なに……!?!」

『確かに、お前は雑魚だがお前は斥候兵^{スカウト}として優秀だ。実際、《ボデイ》を使える奴は珍しいしな。ある意味、俺はお前の事を買って

るんだよ』

意外にもシグルドからの評価が高いことにレコンは驚く。

『お前が俺の仲間になるなら、俺からオベイロン様に口利きして、お前も光妖精族アラトルにしてやってもいいぜ。それに、オベイロン様の力を使えば、リーファだってお前の好きな様にできる。悪い話じゃないだろ？』

「……………ああ、そうさ。僕はリーファちゃんが好きだよ。でも！」

レコンは強い眼差しで、シグルドを睨みつける。

「それ以上に、ジークと一緒に居て、キラキラと輝いて見えるリーファちゃんが好きなんだ！」

そう叫ぶと、レコンはシグルドの腕にしがみ付き、スペルを唱える。

そして、レコンの身体が深い紫色の光に包まれそれと同時に、複雑な立体魔方陣が展開され、回転しながら巨大化していく。

何の魔法なのかは分からないが、それが《闇魔法》なのは紫色の光で、ジークとリーファは気付いた。

「君、駄目だよ！」

すると、アリシヤが叫んだ。

レコン同様《闇魔法》を習得しているアリシヤには、それが何の魔法なのかを理解できた。

だからこそ、止めた。

だが、レコンは覚悟の上らしくスペルの詠唱を止めなかった。

そして、最後の一節を唱えると、レコンはシグルドを見る。

「一緒に死ね！シグルド！」

レコンが叫んだ次の瞬間、とんでもない閃光と轟音に、その場にあった全てのプレイヤーが眼を覆った。

視界が回復すると、そこにレコンの姿はなく緑色の残り火リメンライトだけだった。

「嘘…………レコン…………」

「一体、何が……………」

何が起きたのか、リーファとジークは理解が出来なかった。

そんな2人に、アリシヤが口を開く。

「あれは、自爆魔法……」

「自爆……魔法……？」

「閻属性どころか全属性最強の範囲攻撃魔法だよ。でも、その威力・範囲と引き換えに術者は通常の数倍にも値する死亡罰則デスペナを与えられるの。金ユルド、スキル熟練度、装備……そして、つぎ込んだ時間。それを全て犠牲にするまさに禁呪……」

同じ《閻魔法》を習得しているアリシャだからこそ、自爆魔法を使えるまでに、どれだけのスキル熟練度が必要なのか分かっていった。

それらを捨ててまで、レコンは自爆魔法を使った。

『くっ……やってくれるじゃねえか、腰巾着の分際だよ』

すると、爆炎の中からシグルドが姿を現した。

「そ、そんな……」

レコンの自爆攻撃を食らっても、シグルドはまだ生きていた。

流石に無傷とはいかなく、右腕は失っていた。

『だが、所詮は雑魚。この俺を殺すには至らなかつたな。まさに、無駄死にだ！』

シグルドは高笑いをし、レコンの死を馬鹿にした。

レコンの頑張りを侮辱するシグルドに、リーファは怒り、斬りかかろうとする。

だが、それをジークが止めた。

リーファはジークに手を離して欲しいと言おうとした。

しかし、ジークの顔を見た瞬間、その言葉を言う気は失せた。

何故なら、今のジークは完全にキレており、シグルドを射殺さんばかりに見ていた。

「リーファ……俺がやる」

そう言っつて、ジークはシグルドに近寄る。

「シグルド」

『ああ？なんだ、ジークか。お前も、レコン同様無駄死にに來たのか？いいぜ、来いよ。お前も、リーファ同様気に食わなかつたんだ。テメーにも屈辱を与えないと、俺の気が済まな「黙れ」

ジークはシグルドの台詞を切り言う。

「レコンは、誰よりも立派な奴だ。お前にできるか？自分の為じゃない、誰かのために己の命を犠牲にする覚悟が……無いなら、お前に英雄^{レコン}を侮辱する資格はない！」

そう叫ぶと、ジークは自身の剣の柄を両手で握り、自身の前で剣を立てる。

「……レコンの為に、俺は全力で貴様を倒す！」

その瞬間、ジークから光が溢れ出した。

「な、この光は!?!」

「なんだ!?!」

周りのプレイヤーからも、声上がる。

「今ここに、我が剣の名と我の真なる名を明かす」

ジークがそう言うと、リーファの視界の隅にある「ジーク」の名がブレる。

「我が隠しの名は『ジーク』。真なる名は……『ジークフリート』！」

ジークがそう言うと同時に、ジークの名は「ジークフリート」へと変わった。

「そして、我が剣の名は『バルムンク』！」

ジークの持っていた武骨で、地味な色合いだった大剣は、砥ぎぬかれた刀身に黄金の柄、そして柄に青い宝玉が埋め込まれた大剣となった。

ドイツの英雄叙事詩『ニーベルングの歌』に出て来る、竜殺しの偉業を成した英雄「ジークフリート」。

そして、「ジークフリート」が所持していた聖剣『バルムンク』。真の名と、真の武器を露わにしたジークは、シグルドへと剣を向ける。

「俺は、英雄なんかじゃないし、なろうとも思わない。だが、邪竜となった英雄^{シグルド}を斬る為に、レコンの想いに報いる為にも、俺は竜殺し^{ジークフリート}として、貴様を斬る！」

第24話 天魔失墜

ジークは《バルムンク》を手に、シグルドへと攻撃を仕掛ける。
『何がジークフリートだ！何が《バルムンク》だ！消し炭に変えてくれる！』

シグルドは、言葉の端端に苛立ちさを感じさせながら、ジークに火球を放つ。

「はっ！」

だが、ジークは《バルムンク》の一閃で火球を斬り割いた。
『なっ!?!』

火球は攻撃魔法と同じで実体を持たず、ライトエフェクトの集合体ではない。

そして、中心に当たり判定があり、そこに向けて攻撃魔法を当てることで、攻撃魔法を相殺することが出来る。

しかし、その様な曲芸染みた技を使える者はおらず、仮にできたとしても到底実践で使えることはない。

にも関わらず、ジークは《バルムンク》で火球を斬り割り、消滅させた。

《バルムンク》には、魔力もといMPを溜めて置ける性能があり、そのMPを解放することで一時的に刀身に攻撃魔法と同じ効果ダメージを与えることが出来るし、更に自身のMPをも回復することが出来る。

ジークはそれを利用し、火球を斬り割いたのだった。

『くっ………クソが！』

シグルドは怒り任せに、左腕を振り爪でジークに斬りかかる。

だが、その攻撃もジークによって防がれ、更に《バルムンク》の一撃がシグルドに当たる。

『ぐおっ!?!』

予想以上のダメージに、シグルドは驚きの声を上げ、その巨体をよろめかす。

『なんだこの威力は!?!』

「《バルムンク》は邪竜ファフニールを倒した剣。この剣には竜属性に対する特攻がある。安易に竜となったのが仇となったな」

『くっ……黙れ!』

シグルドは最後左腕でジークに襲い掛かる。

ジークは《バルムンク》で攻撃を受け止める。

『馬鹿め!』

すると、シグルドは尻尾を動かし、側面からジークを攻撃する。

尻尾の攻撃にジークは、吹き飛ばされ壁にたたきつけられる。

『終わりだ!』

シグルドは、ジークが飛ばされた壁に向け連続で火球を放つ。

いくつも放たれた火球は全てジークへと当たり、ジークを焰と黒煙が包む。

「ジーク!」

リーファはジークがやられたと思い、声を上げる。

『調子に乗るからこうなるんだ! 思い知ったか、ジーク!』

「そうだな……少し悔っていた」

すると、黒煙を掻き分けてジークが現れた。

驚くことに、HPは少しも減っていなかった。

『なんだ?!』

流星のシグルドも驚き、声を上げた。

「すまないが、今の俺にその程度の攻撃は効かないぞ」

そう言っつて、ジークは現在発動中のスキルを見る。

《アーマー・オブ・ファヴニール悪竜の血鎧》

このスキルは、発動中MPを消費し続けるが発動してる間は、例えレジェンダリーウエボン伝説級武器を以てしてもダメージを負うことがない。

《アーマー・オブ・ファヴニールバルムンク》と《アーマー・オブ・ファヴニール悪竜の血鎧》

この2つは、2つとない武器とスキルだ。

これを手に入れたのは、ジークがALOを始めて1ヶ月が経った頃だった。

ジークは、その日、1人で中立地帯を彷徨っていた。

理由はいい絵を描くためのロケーション探しだった。

絵を描くのが好きなジークは、ALOの景色も絵に収めたいと思
い、趣味スキルの《画家》スキルを取り、ALOでも絵を描いていた。
余談だが、描いた絵の一枚をサクヤが気に入り、風妖精族領主館の
領主執務室に飾られたりもしてる。

絵のロケーション探しをしていたジークは、とある洞窟を見つけ、
興味からその洞窟へと入った。

そこで、ジークはとあるドラゴンと出会った。

そのドラゴンの名は《ファヴニール》。

ジークフリート、或いはジークフリートと同一視されるシグルドが
討ったドラゴンだ。

ジークは突然遭遇したドラゴンに驚き、最初こそ逃げようとしたが
一度遭遇したら倒すか、死ぬかしないと出られない仕様のダンジョン
だった為、ジークは腹を括り、《ファヴニール》と戦うことを決めた。
戦闘は一時間近くにも及び、ジークの勝利で幕を閉じた。

その際に、《バルムンク》と《悪竜の血鎧》アイマー・オブ・ファヴニールの二つを手に入れた。
そして、《バルムンク》の真名登録機能で名を《ジークフリート》で
登録し、今日この時まで隠し続けていた。

(もしかしたら、この時の為に取っておいたのかもな……………)

ジークはそんなことを思いながら、《バルムンク》を握り直し、突貫
した。

『くっ!?!』

シグルドは残った左腕で尻尾、火球でジークと戦うが、ジークは
その攻撃を《バルムンク》と《悪竜の血鎧》アイマー・オブ・ファヴニールで防御する。

竜特攻を持つ剣に、ダメージを受けないスキル。

明らかにジークの方が有利だった。

ジークに、シグルドの攻撃は全て効果がなく、ジークは一方的にシ
グルドを攻撃し続ける。

『くそっ…ふざけるな……………どうして俺がこんな奴に!?!』

「ふんっー」

『がっ!?!』

ジークの渾身の一撃がシグルドの頭に入り、シグルドは地面に倒れ

る。

「終わりだ、シグルド。この一撃で、お前を倒す！」

《バルムンク》から眩い光が放たれ、まるで巨大な火柱の様になる。

「くらえー！」

そして、《バルムンク》が振り下ろされる。

だが、振り下ろされた瞬間、《バルムンク》から放たれた光は消え、唯の剣による一撃がシグルドに当たる。

「なん……だと……」

ジークは何が起きたのか一瞬分からなかったが、瞬時に理解した。

《悪竜の血鎧》アーマー・オブ・ファウニールは、チート染みたスキルだが、その代償として消費MPも桁違い。

通常のジークのMPの数値では1分使えば良い方。

《バルムンク》のMPリザーブ機能を使うことでMPを消費しつつ回復が出来るが、現段階ではおよそ5分間しか《悪竜の血鎧》アーマー・オブ・ファウニールを使用できない。

(俺としたことが!?! マナの残量の確認を怠ってしまった!)

『ハハッ! どうやらマナが無くなったみたいだな!』

すると、シグルドが息を吹き返したように立ち上がり、ジークを攻撃する。

ジークは《バルムンク》で防ぐも、そのままシグルドに吹き飛ばされる。

「がっ!?!」

MPがない以上、《悪竜の血鎧》アーマー・オブ・ファウニールも発動されない。

ジークのHPは目に見えて減った。

『これで、終わりだ!』

シグルドが、先程よりも巨大な火球をジークへと放つ。

ジークの残りのHPを吹き飛ばすには十分すぎる威力が、ジークへと当たる。

『ハッ! 竜特攻には驚いたが、テメーさえ潰せば後はもう怖くねえ。そこでおねんねしてな』

シグルドはそう言い、ジークから視線を外そうとした。

だが、一抹の不安がシグルドの脳裏を過ぎった。

今のシグルドはALLOでも最強クラスのボスモンスターとなっている。

そんなシグルドの火球をモロに食らったジークは、残り僅かのHPが吹き飛んでいる。

そして、シグルドの火球を食らったその場には、ジークの残り火がリメンライト残っているはず。

シグルドは、外そうとした視線を戻す。

すると、そこにまだジークは居た。

シグルドは驚き、目を見開いた。

絶対にジークは死んだ。

そう思っていたのに、ジークはまだそこに居た。

そして、その傍らにはリーファが居た。

「リーファ……………」

「全く、一人で無茶しないでよー！」

リーファは、火球が当たる寸前でジークの傍まで移動し、防御魔法で火球を防いだ。

流石にリーファ一人では防ぎきれないので、サクヤやアリシヤ、ユージーン、そして、SAO攻略組からの支援を受けて防いだらしい。

「つて、無茶させたのはあたしたちだよね」

そう言っつて、リーファはジークに手を差し出す。

「ほら、立って。一緒に戦おう」

「…………リーファ、助かった。だが、俺一人で大丈夫だ」

そう言っつて、ジークはリーファの手を取らず立ち上がり、HPとMPの回復ポーションを飲む。

「ジーク……………」

「それより、皆に伝えろ。俺とシグルドから離れるんだ。さつきは、後れを取ったが今度は大丈夫だ。もう二度と、無様な真似はしないさ」

ジークは、そう言いシグルドに再び向かおうとする。

「…………何一人で、全部終わらせようとしているのよ、馬鹿！」

そんなジークに、背中からリーファがそう叫んだ。

「り、リーファ!？」

「そりゃさ、なんかジークは凄いスキルに凄い武器持って強いわよ。でも、だからって一人で戦う必要が何処にあるの? あたしたち、友達で仲間だよ」

『くそが……俺を無視して話してるんじゃないやねえ!』

自分を無視して会話をするジークとリーファに、シグルドは怒りを向け突進してくる。

「リーファ!」

ジークはリーファを庇おうと前が出る。

「ぬ……おおおおおおおッ!!」

すると、何処からか太い雄叫びが響き、その声の主がシグルドの一撃を防いだ。

それと同時に、三人プレイヤーも飛び出し、一緒に防いでいた。

全員が土妖精族で、武器は両手剣に両手槌、両手斧、そして、全員が重金属防具を着ていた。

「ローバツカー! ナイジャン! ウルフギヤング! 一気に押し返すぞ!」

「二応!」

両手斧を持った土妖精族の合図で、4人は掛け声無しに同時にシグルドの攻撃を押し返す。

『ぐおっ!』

その所為で、シグルドは体勢を崩し、後ろに仰け反る様にして倒れる。

「待たせたな、お前ら!」

すると土妖精族の男が叫ぶ。

「良く踏ん張ってくれたな! だが、これ以上ダメージテイラーにいつまでも壁やらせられないからな! こっから先は俺達、元S A O攻略組壁隊、通称・アニキ軍団に任せな!」

「アニキ軍団だ?! まさか、お前……!」

アニキ軍団と言う名に、クラインが反応する。

「エギルか!」

「よお、クライン。壁はご入用だろ?」

その光景に、ジークは呆気に取られた。

「ねえ、ジーク。頼りたくても頼れない。頼ってはいけない。これは自分の問題だから、迷惑はかけられないって言ったよね」

そんなジークにリーファがそう言う。

「その気持ち、今なら少しわかるよ。でもね……………やっぱりあたしは頼ってほしい」

「リーファ……………」

「迷惑だなんて思わない。だから、一人で抱え込もうとしないで……………頼ってよ」

優しい声音でそう言うリーファに、ジークは少しだけ目を閉じてから、目を開く。

「……………わかった。なら、頼めるか、リーファ？」

「うん！」

ジークに言われ、リーファは力強く頷く。

『舐めるなよ、羽虫風情が！』

シグルドは、怒り心頭となり襲い掛かるS A O攻略組と戦う。

だが、シグルドにとってS A O攻略組は敵ではなかった。

ジークに苦戦したのは、彼の武器《バルムンク》とスキルアーマー・オブ・フアザニール《悪竜の血鎧》の所為。

だから、ただのプレイヤーでしかないS A O攻略組など敵ではなかったはずだった。

『くそっ！』

だが、シグルドはS A O攻略組相手に苦戦していた。

最初のシグルドは、全パラメーターを全種族より遙かに上回っており、また与えられた武器と防具がチート性能だった。

だが、ボスモンスターのドラゴンとなった今、シグルドはそのチート装備を全て破棄した形になった。

その為、今のシグルドはパラメーターが異常なまでに高いだけのボスモンスターでしかない。

更に、S A O攻略組はあの鋼鉄の浮遊城“アインクラッド”で2年間、様々なボスモンスターたちと戦った。

その経験があり、加えてシグルドが複雑な剣技や魔法を使わなくなり、ドラゴンらしい火球や爪や牙、尻尾での攻撃と言う攻撃動作が分かり易くなった。

シグルドがドラゴンになった瞬間、ディアベルはサクヤたちと話し、後方のガーディアンをALO組が、そして、ドラゴンとなったシグルドの相手をSAO攻略組がする事となった。

つまり、ドラゴンになったお陰でSAO攻略組にとっては戦い易くなった。

ディアベルの的確な指示に、クライン達の攻撃、エギル率いる壁隊タンクの防御、そして、SAO準攻略組の支援攻撃。

それにより、シグルドはどんどん追い込まれていった。

とうとう倒れ込んだシグルドに、SAO攻略組、準攻略組が手にした武器でシグルドを地面に縫い付けるように刺す。

『嘘だ……この俺が……この俺が！』

「今度こそ、終わりだ。シグルド」

そんなシグルドに、上空からジークが《バルムンク》を構える。

ジークが手にしてる《バルムンク》は眩い光が放たれる。

だが、先程とは比較にならない程に光っており、まるで刀身が大きく伸びてる様に見える。

『な、なんだ!?!その輝きは!?!』

「俺だけの力じゃない。ここにいる、全プレイヤーの力が、ここにある!」

ジークの《バルムンク》には、この場にいるALO、SAO攻略組、SAO準攻略組のMPが全て付き込まれていた。

『ま、まさか、こいつら支援魔法も無しに戦っていたのか!?!』

「何を驚いている?」

「SAOじゃ、魔法なんて存在しなかった」

「魔法なしで戦うなんて」

「俺達には朝飯前さ」

SAO組の言葉に、シグルドは絶句した。

「シグルド、終わりの時だ!」

ジークは《バルムンク》を握る手に一層力を籠める。

『や、止める！今ならまだ間に合う！俺に付け！そうすれば、この世界で頂点に立つことも……！』

「そう言うのは、自分の力で手にしてこそだ」

シグルドの言葉を一瞬し、ジークは言う。

「邪竜、滅ぶべし………天魔失墜！」

振り下ろされた一撃は、シグルドへと当たる。

斬撃は光となり、シグルドの身体を一刀両断する。

斬られた瞬間、シグルドが何を感じたかは誰も知らない。

喚く間も、怨嗟の声を上げる間もなく、シグルドの身体は葬られ、その肉体は白い炎に包まれ焼失した。

ジークは《バルムンク》を鞘に収め、シグルドの身体があつた場所を見る。

「竜殺しの英雄の名を語りながら、その身を邪竜へと墮とした罰と思え、シグルド」

ジークがそう言い終えると、周りから溢れんばかりの歓声が響き渡る。

堕ちた英雄と竜殺しの英雄の戦いは、堕ちた英雄の敗北で幕を閉じた。

第25話 蘇り

「くそがっ!!」

シグルドの敗北に須郷はキレ、持っていたワイングラスをスクリーンに投げつける。

ワイングラスはスクリーンを通り抜け、そのままどこかに飛んでいき割れる。

「使えない奴だな！この僕が折角、お膳立てしてやったって言うのに！」

キレ散らかす須郷に、キリトは思わず鼻で笑った。

「キリト君、今笑ったかい？今、自分がどんな状況に居るか分かってるのかな！」

須郷は、キリトの顔を殴る。

「キリト君！」「パパ！」

殴られたキリトを見て、アスナとユイが声を上げる。

「ねえ、キリト君。一体何が面白かったんだい？僕にはちよつと分からないなあ」

須郷はキリトの顎を掴んで、顔を無理矢理自分に向かせて尋ねる。

「お前が……ゲームの事を何も分かってないのが面白いんだよ……いくら強いステータスだろうが、良い武器だろうと、結局それを扱うのは人間、プレイヤーだ。使い熟せなければ意味がない……」

「ふくん、なるほどねえ……でも、いくら使い熟せるからと言っても手も足も出ない状態じゃ使う以前の問題だよね」

須郷は勝ち誇る様に言い、キリトを放す。

「まあ、いいさ。ハナからあんな奴に期待なんてしてない。アミュスフィアでの実験体は適当にその辺で捕まえればいいしね。さて、それじゃあこっちもお楽しみと行こうかな」

打って変わり、須郷は卑しい笑みを浮かべる。

「さて、神里君」

須郷はカイに近寄り、声を掛ける。

「アスナ君のあの謎のバグ、あれは君の仕業だろ？今すぐ取り除け」
カイトに命令する須郷。

カイトは、ゆっくりと顔を上げると、須郷を見る。
そして、鼻で笑った。

「お断りだ」

その瞬間、須郷はカイトの顔を殴った。

「カイト！」「父上！」

ミトとノアが叫んだ。

「本当に立場が分かってないようだね。君は今、断れる立場じゃないんだよ。それに、これはお願いじゃなくて命令。素直に従い給え」

「……………何度でも言ってる。お断りだ」

「そうかい。なら、これはどうかかな？」

そう言うと、須郷はカイトの刀を抜き、そのまま刀でカイトの腹部を突き刺す。

「うっ！」

異物が体を貫通する感覚が、ざらざらとした不快感となったカイトを襲う。

「これだけじゃない。システムコマンド！ペインアブソーバ、レベル10から8に変更！」

須郷がそう唱えると、突如カイトの身体を鋭い痛みが遅い、カイトは口から苦痛の声を漏らす。

カイトだけでなく、キリトも同様の反応をする。

「痛いかい？まだツマミ2つ分だよ？。段階的に強くしてやるから楽しみにしていたまえ。もつともレベル3以下にすると現実の肉体にも影響が出る様だが……………」

須郷は、苦痛に歪むカイトの顔を楽しそうに眺める。

「アスナ君の謎のバグを取り除けば、その苦痛から解放してあげるよ。さあ、早くしろ」

命令を出し続ける須郷。

そんな須郷に、カイトは苦痛を感じながらも笑った。

「……………何がおかしい？」

「おかしいに決まってる。お前はこの世界の神なんだろう？それがなんだよ？ただのプレイヤー相手に、こんな嚴重にまで拘束して、手が出せない様にする。神の席にいながら、お前は俺達を恐れてるんだ。神が聞いて呆れる。お前は神でもなければ、王でもない。ただの臆病者だ」

そこまで言うのと、須郷はカイの身体の内側を抉る様に刀を動かす。
「くっ！……がはっ！」

「舐めるんじゃないよ。この僕が臆病者だって？違うね。これは神の余裕さ。なんで神たる僕が君たちと同じ土俵で戦わないといけないんだい？神には神の戦い方があるのさ。だから………僕は臆病者なんかじゃない！」

「………はっ、既にその発言が臆病者のソレだろ」

「このガキッ……！」

須郷は額に怒筋を浮かべる。

「よし、分かったよ。それならこっちにも考えはあるぞ」

そう言つて、須郷はミトを見る。

「この女が大事なんだろう？なら、お前の目の前で楽しませてもらうよ」
須郷がそう言うのと、カイはあからさまに反応した。

「自分の目の前で、大事な彼女が屈辱と快樂に沈む様を眺めるがいいさ。この世界でミト君の心を折つたら、次は現実の方でもだ。アミュスフィアのログアウト機能にロックを施して、IPアドレスから住所を割り出してやる。心も体も、全部この僕が汚し尽くしてやるよ」

そう言つて、須郷はミトを拘束したまま地面へと下ろす。

「止めなさい！」

「ミトに触れるな！」

「ミトさん！」

「母上！」

キリトたちが必死に叫ぶ。

「須郷！ミトに指一本でも触れてみる！お前を絶対に許さないぞ！」

カイは、怒りをむき出しにして須郷に叫ぶ。

「はっ！何もできないのによく吠えるね。ま、そこで眺めてなよ。大

事な彼女が、家族の仇に犯されるのを」

「須郷!!」

カイは鎖をガチャガチャと音を立てて、叫ぶ。
そんなことを意にも介さず須郷は、ミトを見る。

「悔しいかい？恨むなら、頑固な君の彼氏を恨むんだね。彼が僕の言う事さえ聞いてれば、こんな目に合わなかったんだから」

「……………カイの所為じゃない」

ミトは体の自由を奪われながらも、強気に須郷を睨む。

「カイは今までだって何一つ悪い事はしてない。恨むなら、アンタだけよ」

そう言い、ミトはカイを見る。

「カイ、私は大丈夫だからさ。こんな奴に負けたりしないよ」

「ミト……………」

「……………でも、出来れば見ないで欲しいかな」

そう言つて、ミトは悲しそうに笑った。

「いいね、その態度。泣き叫ぶ所を想像したら、興奮するね」

須郷は、ミトの頬に触れ、ねっとりとした手つきで触り、そのまま首に触れ、鎖骨に触れる。

もう片方の手でミトの足に触れ、太ももを擦る様に撫でる。

そして、須郷の手がとうとう胸を触ろうとする。

ミトは目をキツク閉じ、唇を噛み締める。

「おい」

その時、須郷の背後に誰かが立ち、声を掛けた。

「え？」

須郷は思わず後ろを振り返った。

振り返った瞬間、裏拳が飛び、須郷の顔に当たり、須郷を吹き飛ばす。

「コイツに触れるな。コイツに触れていいのは、カイだけだ」

手の甲を擦りながら、トバルがそう言った。

「トバル!?!」

トバルの登場に、キリトとアスナが声を上げた。

「お前ら、動くなよ」

トバルは、腰の刀に手を掛け、居合を放ち、全員の鎖を断ち切る。解放された瞬間、カイはミトの元へと駆け寄った。

「ミトー！」

「カイー！」

駆け寄ると、2人はすぐさま抱き合った。

「な、何者だ!?!」

トバルの登場に、須郷が叫ぶ。

「その鎖は、僕以外には解除も削除も出来ないはず……！いや、そもそも一体どうやってこの空間に……！ここは誰にも入れないはずだ！神たる僕の許可がない限り！」

「いや、いるさ。もう一人の神……いや、この世界の本当の神がな」

須郷の言葉を否定し、トバルが言う。

「トバル、お前が来たってことは……準備は整ったんだな」

「ああ、勿論だ」

すると、再び声が響いた。

カイでも、キリトでも、ノアでも、トバルでも、須郷でもない男の声。

奥の暗闇から、一步一步歩み寄ってくる音が聞こえる。

「この体の再構築と、仕込みに膨大な時間を要してしまっただが準備は済んだ」

暗闇から、その声の主が現れる。

鉄灰色の髪を纏め、長身に痩せ気味の身体

「それにしても、随分と私の世界で好き勝手してくれたみたいだね」

その身体に真紅の鎧を纏い、白いマントが翻る。

「これには、私は少し怒りを沸かしているよ、須郷君」

「なんだ、お前は……！誰なんだ!?!」

須郷は、その男に向かって叫ぶ。

その者は、手にした白銀の十字剣が収められている白銀の十字盾を地面に突き立てるように置き、完全に姿を現した。

「私の名は、《ヒースクリフ》。アインクラッド最高ギルド《血盟騎士

団長にして、ソードアート・オンラインのラスボスさ。約束を果たすために、この一時ではあるが黄泉より蘇ってきた」
そう言って、聖騎士は自らの復活を宣言した。

第26話 最終決戦

「だ、誰だお前!？」

須郷は現れたヒースクリフにそう怒鳴る様に尋ねる。

一方で、ミト、キリトとアスナ、ノアとユイの5人はヒースクリフの登場に驚き、目を見開いていた。

そんな中、ヒースクリフはゆっくりとキリト達の方に目を移す。

「キリト君、それにアスナ君。彼が迷惑を掛けた事、彼に変わって私が謝罪しよう。この一件に関しては、私も予想外でね。僅かな時間では対処することも難しく、私に出来た事と言えば、アスナ君にせめての防衛策を施すことしかできなかった」

「ちよ、ちよつと待ってください!それじゃあ、あの謎のバグは団長が!？」

「バグか。まあ、事情を知らない者から見ればそうとも見えるだろう。だが、アレはバグなどではない。真正正銘、SAOに存在したスキル、《業火刀》の能力の一部さ。GM権限で、その能力を半永久的に君に付与した」

ヒースクリフは、変わらない口調で淡々とアスナの質問に答える。

「ちよ、ちよつと待ってください!」

今度はキリトが声を上げる。

「本当に……本当にお前なのか……生きていたのか……茅場」

「生きていた、か……そうとも言えるし、そうでないとも言えるな。

私は、茅場昌彦という意識のエコー、残像だ」

解り難い事を言うヒースクリフに、キリトはこの言い方は間違いなく茅場だと結論を出す。

「ちよ、ちよつと待て!」

すると、須郷が驚きの声を上げる。

「今何って言った……この男が茅場?……嘘だ……嘘だ!アイツは死んだんだ!死んだんだよ!それなのに、なんで今更現れるんだよ!」
狂ったようにそう捲し立てる須郷に、ヒースクリフは溜息を吐く。

「須郷君、私だって人間だ。意味もなくこんなことしないさ。私がここに現れたのは3つの理由がある」

ヒースクリフはゆっくりと須郷へと歩みより、十字盾に収められた十字剣に手を掛ける。

「1つは私の世界を盗み、土足で荒らしまわったことだ。多少のオリジナル性はあるものの、それは表面上の事だけで、中身はそのまま。開発者としてはいい気分ではない」

十字剣を抜き、剣先を地面に向け、ゆっくりと揺らしながら更に近寄る。

「2つ目は、全ALOプレイヤーを欺き続けた事だ。10000人を監禁し、デスゲームをやらせていた私が言えたことじゃないが、GMであるならプレイヤーを騙すことはいけない。ましてやシステムのクリア不可能のグランドクエストなど、あってはならない」

ヒースクリフは立ち止まり、そして、十字剣の剣先を須郷へと向ける。

「そして、最後は私自身の約束を果たす為さ」

「や、約束……?」

「そう。75層ボス部屋で私はキリト君とカイ君にこう言った。決闘^{デュエル}で私に勝てば、生き残った全プレイヤーをログアウトさせるとね。GMとして、提示した報酬は何か何でも払わねばならないからね」

開発者としても、GMとしても、ヒースクリフもとい茅場明彦は須郷の何倍も前に立っている。

その事実が、須郷を苛立たせる。

「須郷君、悪い事は言わない。即刻SAOプレイヤー300名を解放したまえ。後は、自首することをお薦めするよ。私が言えたことではないがね」

その言葉が引き金となり、須郷は激怒し叫んだ。

「ふざけるな茅場!アンタはいつもそうだ!そうやって何もかも悟ったような顔しやがって!アンタのそう言うところが気に食わないんだよ!」

そう叫ぶと、須郷は手を上げる。

「システムコマンド！オブジェクトID《スカルリーパー》《ホロウアバター》《ジェネレーター！》」

須郷がそう叫ぶと、何もない虚空からインクラッド75層フロアボス《スカルリーパー》と《ホロウアバター》と呼ばれるローブを被ったモンスターが現れた。

「なっ!? 《スカルリーパー》だっ!?」

「それに、《ホロウアバター》って一体……!」

「ヒツヒツヒ！知ってるんだぞ、お前たち、このボスモンスター相手に苦戦をしたそうじゃないか！攻略した時の人数は何人だい？6人程度じゃなかったはずだよ？そして、《ホロウアバター》はSAOの第100層のフロアボスモンスターだ！そのステータスはどのモンスターよりも遥かに強敵！たった6人で、どこまでやれるか見せてもらおうか！」

「くっ！何処までも卑劣な！」

須郷の行いに、ミトが歯噛みして言う。

「こうなったら、俺達4人でスカルリーパーの鎌を防いで、トバルとヒースクリフが攻撃を「いや、その必要はねえ」

キリトが即席の作戦を立てようとすると、トバルがそれを遮る。

「アイツの相手は俺がする」

「と、トバル!」

「そんな……!いくら何でも無茶よ！」

「別に倒そうだななんて、考えてねえよ。お前らがあのクソ野郎を倒すまでの間、俺が囷になるだけだ」

トバルは前に出て、刀を抜く。

「安心しろって。死ぬ気はねえからよ」

「ふむ。では、《ホロウアバター》は私が相手しよう」

ヒースクリフも前に出てそう言う。

「SAOの本来の第100層フロアボスと、その椅子を奪った魔王。どちらがSAOのラスボスに相応しいか、決着を着けるのもいいだろう」

ニヤツと笑うトバルと不敵に笑うヒースクリフに、カイは溜息を吐

き、頭を搔く。

「任せるぞ、トバル、ヒースクリフ」

「ああ、任せたまえ」

「おう。……おっと、忘れる所だったぜ」

トバルは、アイテムウィンドウからある物を出し、カイへと差し出す。

「打ち終わったぜ」

「……………ああ、ありがとう」

差し出されたそれを、カイは懐かしそうに受け取る。

「コイツもいいけど、やっぱりこれじゃないとな」

そう言い、受け取ったそれを力強く抜き放った。

カイの2つ名の象徴とも言える透ける様な赤い刀身の刀《焰群》。

「もう一度、一緒に戦ってくれ《焰群》」

懐かしくも、頼もしい握り心地を感じながらカイは笑う。

「カイ君、もう一つ忘れものがある」

ヒースクリフもそう言つて、システムウィンドウを素早く操作し、あるシステムを発動させる。

「《ソードスキル》及び《ユニークスキル》解放！」

その瞬間、カイ、ミト、キリト、アスナの前にメッセージウィンドウが開く。

《細剣》スキル 取得

《両手鎌》スキル 取得

ミトとアスナの愛用スキルが取得される。

《二刀流》スキル 取得

《業火刀》スキル 取得

そして、カイとキリトのユニークスキルも取得される。

「お前たちの武器に」「君たちのスキルだ」

「さあ、存分に戦いな（戦いたまえ）」

「応！」「ええー！」

トバルとヒースクリフから応援の言葉を貰い、カイ達は最後の戦いへと向かった。

第27話 鍛冶師VS骸骨の刈り手&魔王VS魔王

「さあ、始めようぜ。骸骨ムカデ」

トバルは刀を抜刀し、スカルリーパーへと接近する。

「ふっ！」

素早く刀を振り抜き、スカルリーパーの鎌を弾くと空いた懐目掛け渾身の突きを放つ。

突きでスカルリーパーが仰け反ると、そのまま下を潜り、背後を取って振り向き様に一太刀。

スカルリーパーは、尾の先の槍でトバルを攻撃するが、トバルはそれを払って骨と骨の繋ぎ目に刀を刺す。

その瞬間、スカルリーパーは体を反転させ、鎌でトバルに斬り掛かる。

トバルは反撃しようとして刀を抜こうとするも、深く刺し過ぎた為、中々抜けなかった。

「チッ！」

トバルは舌打ちをし、刀を離して攻撃を回避する。

武器を手放し、無防備となったトバルにスカルリーパーは鎌の連続攻撃を放つ。

鎌の連撃がトバルに襲い掛かり、HPを一気に刈り取る。

その瞬間、スカルリーパーの攻撃は全て弾かれ、そのまま顎を下から打ち上げるようにトバルの攻撃が一閃される。

そのトバルの手にはもう別の刀があった。

「おい、骸骨ムカデ。テメーはSAOのフロアボスだ。その力は強大で、あの時は俺も死を覚悟してボス戦に臨んだ。だがな、お前は所詮SAOの……剣の世界でのボス。ここはALO……剣と魔法の世界だ。剣だけで戦うと思ってるか？」

トバルが使ったのは《複製魔法》。

鍛冶妖精族専用の魔法で、事前に登録した武器をMPの消費で、瞬時に複製する魔法。

だが、その魔法を使う条件として、複製する武器のスキルを完全習

得していないといけない。

トバルの刀スキルはSAOクリアの段階で、既に完全習得しており、ALOに来て真っ先にその魔法スキルを習得した。

「おらよー」

トバルは手にした刀を再びスカルリーパーの骨と骨のつなぎ目に突き刺す。

突き刺すとそのまま刀を手放し、再び《複製魔法》で刀を作り、再び突き刺す。

唐突だが、トバルの所持スキルについて説明をする。

トバルはSAOでは鍛冶師として生活し、所持スキルは鍛冶関係のスキルが殆ど。

その中で唯一の戦闘スキルが刀だった。

つまり、トバルは刀以外の戦闘スキルを取っていない。

刀を使う為に必要な曲刀スキルも、刀スキルを習得してすぐに捨てた。

《武器防御》も《戦闘時回復》もない。

トバルは戦闘系スキルに圧迫され、鍛冶系スキルが習得できなくなるのを嫌がり、戦闘系スキルは刀だけにし、残り全てを鍛冶系スキルにしている。

更に、トバルのステータスはAGIにガン振りされており、服も布系だけにし極限にまで速さを追及し、回避という選択肢を取っている。

いくらレベルが高くても、それでは高レベルプレイヤーでも命を落としかねない。

実際、SAOの攻略組で速さに特化したプレイヤーでも《軽金属防具》スキルは習得してるし、キリトやカイは金属系防具には防御力が劣るも、《革防具》スキルを取得していた。

だが、トバルは革防具でもある程度の重量があり、その所為で速さが落ちるのを嫌がり、布装備だった。

一発でも攻撃を食らえば、即時撤退、あるいは一撃死。

そんな状態だからこそ、トバルは強かった。

事実、75層フロアボス戦で、トバルはスカルリーパーからの攻撃を一度も貰うことなく戦った。

驚異の速さを誇るトバルは、その補正もあつて驚異の速さで刀を複製し、スカルリーパーの身体へと何本も素早く刀を突き刺していく。

「よしー！」

とうとう100本目の刀をスカルリーパーへと突き刺し、トバルは跳躍してスカルリーパーから距離を取る。

「終わりだ」

その瞬間、トバルは手をスカルリーパーへと向ける。

そして、短いスペルを唱える。

すると、スカルリーパーに突き刺さっている刀が光り輝き、そして、爆発した。

何度も何度も爆発が起き、スカルリーパーが悲鳴を上げる。

「武器を使い捨てとする代わりにその武器のスペック以上のダメージを与える魔法、『武器爆破魔法』。『複製魔法』は武器を瞬時に作れるが、それで作り出されるのは登録した武器より遥かにスペックが劣る物。レジェンダリーウェポン伝説級武器だったとしても、その性能はかなり下がるし、耐久値もかなり低い」

そう言つて、トバルは地面に倒れているスカルリーパーに近寄り、再び『複製魔法』で刀を出す。

「だが、いくら弱い武器でも100回の爆発ともなれば、少しは痛いだろう」

スカルリーパーはトバルを見上げるように顔を動かし、まるでトバルを睨みつける様に見える。

「終わりだ」

刀最上位剣技『散華』。

4連撃の斬撃がスカルリーパーの頭部に当たり、最後の1撃が振り下ろされる。

スカルリーパーの頭が両断され、スカルリーパーは短い悲鳴を上げ、そして、消滅した。

「囿になるつもりが、倒しちまったか………まあ、倒しちまっても構わ

ないよな」

トバルがスカルリーパーと戦ってる頃、ヒースクリフはホロウアバターと対峙していた。

「ふむ、100層ボスにとかなりの強さにしていたが、流石にこれは強すぎたかもしれないな」

そう言いながら、ヒースクリフはホロウアバターの攻撃を十字盾で防御する。

ホロウアバターはあらゆる武器属性に耐性を持っており、流石のヒースクリフも攻めあぐねいで居た。

「やはり一度、私自らの手で戦ってみるべきだったか。この様なモンスターが実装されたとなれば、颯爽は免れないだろうからね」

だが、攻めあぐねいでいても、ヒースクリフは余裕の表情を崩さず、黙々と十字剣で攻撃していた。

更に言うと、ホロウアバターの特殊攻撃を、発動前に悉く潰している。

一時行動不能の《絶望の解放》、出血状態にさせる《死の洗礼》等々。

強力なスキルが軒並み潰され、ホロウアバターは何処か焦ってる様な反応をする。

「ただのデータに感情があるとは思えないが、ユイ君やノア君の例もある。あの2人はAIではあるが、データにだつて予想外のバグによって感情を持つこともあるだろう」

世間話をするようにヒースクリフは攻撃の手を止める。

「ところで、なぜ私が君の攻撃を発動前に潰せるか分かるかね?」

ヒースクリフの問いに、ホロウアバターは何故か動きを止める。

その行動が、まるでヒースクリフの問いに答えようとするが、答えが分からなく固まつてる様にも見える。

「答えは、私がSAOの開発者だからさ」

その答えに、ホロウアバターは僅かに反応する。

「ソードスキルは私がデザインした物。その為、何処にどんな攻撃が飛んでくるのが分かる。そして、大型モンスターも私がデザインした。だから、分かるのだよ。技の発動前の行動も、どのような攻撃なのかも」

それは至極当たり前前の答えだった。

開発者が相手なのだから、開発者がデザインした攻撃が開発者に当たる訳がない。

その事に、ホロウアバターは小刻みに震える。

「少々卑怯だったかね?だが、私はSAOのラスボスだ。この程度の卑怯、笑って許して欲しい。仮にも私の前任の魔王なのだからね」

煽るような言い方にホロウアバターが、動き出す。

その動きは茅場がデザインした物ではなかった。

それは、須郷がデザインし、後から付け加えた物だった。

《光の終焉》

発動し直撃したプレイヤーに、麻痺状態、暗闇状態、一時行動不能の状態異常を与え、強力な攻撃を繰り返す、ホロウアバター最強の攻撃。

いくら開発者と言えども、自身の知らないスキルでは防ぎようがない。

動きの止まったヒースクリフに向かって、ホロウアバターが渾身の攻撃を出す。

「良い攻撃だったよ、ホロウアバター」

ホロウアバターの攻撃はヒースクリフに当たらず、ヒースクリフはそれを回避した。

「だが、残念だったね。彼らがソードスキルを使えるようにしたように、私もユニークスキル《神聖剣》が使えるのだよ。実を言うと、《神聖剣》には阻害効果への対阻害効果がある」

そう言い、ヒースクリフは十字剣を構える。

「もし、私がキリト君やカイ君の様なまっとうなプレイヤーならこのような真似はしないだろう」

そう言い、ヒースクリフは最強の攻撃を放つ。

神聖剣最上位剣技《アカシツク・アーマゲドン》

武器弾き不可能の8連撃がホロウアバターの身体を斬り割く。

ホロウアバターは敗北し、その場に膝を付き、そして、消滅した。

「だが、私は魔王だからね。このような卑怯な手も使うのさ」

第28話 一家団結

「くそっ！どうしてこうなった!?!」

須郷は今の状況に悪態を吐く。

現在、カイ、ミト、キリト、アスナの4人は須郷が召喚したモンスター群に阻まれ須郷へと辿り着けていなかった。

だが、須郷が召喚したモンスターは先程召喚した《スカルリーパー》や《ホロウアバター》と比べると大した脅威ではなかった。

《スカルリーパー》や《ホロウアバター》はかなり強力なモンスターでソレの同時召喚によって、サーバーに負担を掛け過ぎ、サーバーの処理速度が一時低下したため、今の須郷には下級、よくて中級程度のモンスターしか召喚できなかった。

そのモンスターの群れの中を、4人は着実に倒し、須郷へと近づいている。

(何故だ……何故なんだ!?!)

頭の中で、原因を探る。

こうなった原因は明白だった。

SAOのサーバーをコピーした物を使用したことで、SAOと共通するスキルの熟練度が引き継がれた事

ALOをスキル制にしたことで、レベル上げが必要なかったこと。

そして、何よりキリトとミトを子供と侮り、喋り過ぎたこと。

それが一番の原因だった。

「ふざけるな……僕は、僕はこの世界の王にして神なんだ!こんなガキ共にやられていいわけがないんだよ!」

須郷は何が何でも自身の否を認めず、そう叫ぶ。

「こうなりや見せてやるよ!神の力って奴をな!」

須郷はあるスペルを唱える。

だが、それはこの世界で誰も耳にしたことのないスペルだった。

それは、須郷もといオベイロン専用の魔法だった。

魔法が唱え終わると、カイ達の前に鏡が現れ、カイ達の姿を映す。

カイ達は何かしらの防御魔法かと思い、攻撃の手を止める。

すると、鏡の中に映った自身が飛び出し、攻撃を仕掛けた。

「これは?」

「くつくつくつ!それは《夢幻魔法》と言ってね、イベントボス専用魔法さ。その鏡に姿を映したプレイヤーを模したモンスターを生み出す。本来はただプレイヤーを模すだけの魔法だけど、僕の使う《夢幻魔法》は一味違う。召喚されるモンスターのステータスは君達より遥かに高く、また君たちの使用してるナーヴギアへと送られる電気信号をナーヴギアより先に感知し、行動を先読みする。言うなれば、君たちの行動を予知して戦う最強のモンスターさ。さあ、やれお前たち! そいつらを殺すんだ!」

須郷は召喚された4体のモンスター《ホロウ・カイ》、《ホロウ・ミト》、《ホロウ・キリト》、《ホロウ・アスナ》に命令を下す。

4体の《ホロウ・モンスター》は、4人に襲い掛かる。

仕掛けられた攻撃に、4人は対応しようと武器を振るう。

だが、4体のモンスターはそれを予知し、回避や防御を行う。

「くつ!行動を読まれるのは厄介だな!」

「落ち着け、キリト!所詮はシステムが動かしてるだけだ!」

「なら、そこに勝機があるわね!」

「必ず勝とう!」

「必ず勝つね……ならこれならどうだい?」

そう言って須郷は、再度モンスターを召喚させる。

「いくら雑魚モンスターと言っても、この量相手に加え君らの《ホロウ・モンスター》。これは勝ち目がないね!存分に楽しませて貰おう!」

水を得た魚の様に、須郷は高笑いをしてカイ達を見る。

4人は、互いに背中を預ける形で陣形を汲み、範囲技を使いながら雑魚モンスターを蹴散らす。

だが、雑魚モンスターに紛れて襲いに来る自身の《ホロウ・モンスター》の攻撃が厄介で、苦戦を強いられた

あまりの物量の差に、カイ達は再び窮地に襲われた。

雑魚とは言え目の前に広がる雑魚モンスター。

そして、自身の《ホロウ・モンスター》。

今までに体験したことのない戦闘に、4人は精神的に疲弊していく。

「しまっー！」

その時、《ホロウ・ミト》がミトの右肩に鎌を突き立てた。

「ミトー！」

ミトを助けようとカイが動こうとすると、《ホロウ・カイ》がカイに向かつて突きを放つ。

カイは刀で攻撃を受け流すも、受け流すと同時に足蹴りが放たれ、モロに食らってしまう。

「カイーミトー！」

「くっ！数が多すぎる……！」

キリトとアスナも、《ホロウ・キリト》、《ホロウ・アスナ》と大量の雑魚モンスターの猛攻でHPをじわりじわりと減らしていく。

「ほらほら、どうしたのさ？必ず勝つんじゃないやなかつたのかい？言うだけなら誰でも出来るよ？有言実行しないと！」

須郷は愉快そうに笑って、カイ達がやられていく様を見続ける。

「はああああああああああ!!」「やああああああああああああ!!」

その時、2人分の男女の声が響き渡る。

そして、声が聞こえると同時に、迫モンスターが次々と倒されていった。

「な、なんだ!？」

須郷は何が起きたのか分からず、驚きの声を上げる。

声の主の2人は、雑魚モンスターを蹴散らしていき、カイ達の元へと辿り着く。

現れたのは、サラマンダー火妖精族とウンディーネ水妖精族だった。

「お待たせしました、父上、母上」

「私たちも戦いますよ、パパ、ママ」

カイとミトを父上、母上と呼び、キリトとアスナをパパ、ママと呼ぶ2人に、カイ達は思わず驚いた。

「ま、まさか……」「その呼び方って……」
「つ、つまり……」「嘘でしょ……!!」

カイ達4人は、その2人の名を叫んだ。

「ノア!」「ユイ(ちゃん)!?」

「はい!」

名前を呼ばれ、高校生と見間違うほどに成長した^{サラマンダー}火妖精族のノアと^{ウンディーネ}水妖精族のユイは、笑顔でそう言った。

「その姿は……」

「一体何が起きてるの……」

「なんで成長してるんだ……」

「なんか色々あり過ぎだよ……」

困惑する4人を他所に、ノアとユイは笑い合い、何があったのかを説明した。

「パパ、ママ……」

「くっ！俺も一緒に戦えれば……」

カイ達の戦闘を見て、ノアは思わずそう呟く。

戦う機能のないナビゲーションピクシーの2人は、戦うカイ達をただ眺めることしか出来なかった。

「共に戦いたちと言う気持ちは理解できなくもないが、戦えぬものも言っても足手纏いになるだけだ」

そんな2人に、《ホロウアバター》を倒したヒースクリフが声を掛ける。

「もう……倒したのか……」

「正道とは言えないが、魔王だからね。卑怯な手で倒すぐらい大目に見てもらおう」

茶化す様に笑うヒースクリフは、カイ達を見る。

「《ホロウ・モンスター》か。鏡に映した相手を模したモンスターを召喚し、戦わせる。面白いモンスターだ。やはり、須郷君も天才の1人か。あのままでは、カイ君たちがやられるのも時間の問題だろう」

「あの、お願いです！ パパとママたちを助けて下さい！」

ユイはヒースクリフに、4人の応援に行くように頼む。

「ふむ……確かに私が応援に行けばなんとかなるだろう。だが、それも一時しのぎにしかならない。須郷君の持つ権限を何とかしない限りね」

そう言うと、ノアとユイは悔しそうに俯く。

「そんな顔をするのではない。何とかしないとイケないが、出来ないわけではないからね」

「「え？」」

「ノア君、ユイ君。私はこれから作戦の最終段階へと入る。そこでだ」

一拍間を置き、ヒースクリフはノアとユイを見る。

「君たちの父と母の為に、戦う気はあるかね？」

「茅場の奴が？」

「はい、茅場さんが私たちにプレイヤー権限を与えてくれました」

「そのお陰で、こうしてプレイヤーとして戦うことが出来ます」

そう言い、ノアとユイはモンスターを見る。

「露払いは俺とユイがします」

「パパとママ、カイさんとミトさんは《ホロウ・モンスター》をお願いします」

ノアは刀を抜き、ユイは細剣レイピアを構える。

「ノア、今度は私がノアを守ります」

「なら、君の事は、俺が必ず守る。だから！」

「一緒にいこう！」

そして、2人は同時に駆け出しモンスターに攻撃を仕掛ける。

「何と言うか……随分とたくましくなっちゃったわね……」

「それが子供つてもんだろ？ いずれは親の手を離れて生きて行くんだ。ノアもユイちゃんも立派になったな」

「何時までも子供だなんて思ってたらダメだね。でも、ノア君にならユイちゃんの事任せられるかも」

「あ、アスナー！ 流石にそれはちよつと早いんじゃないかな……！」

アスナのユイを任せれる発言に、キリトは動揺する。

「動揺するのもいいがキリト、道は開けたぞ」

カイはそう言つて、前を見る。

雑魚モンスターの大半をノアとユイが引き受けた為、後は《ホロウ・モンスター》4体と僅かな雑魚モンスターの軍団のみ。

「ノアとユイちゃんが作ってくれた道筋、無駄には出来ないぞ」

「あの2人が頑張ってるんだもの。親である私たちも頑張らないと」

「顔向けできないよね」

「……………そうだな。今はとにかく勝とう」

4人は頷き合い、それぞれの《ホロウ・モンスター》と対峙する。

「二」「お前なんかは負けてたまるか、偽物！」「三」

第29話 業火刀

「ノア！左後方から敵3です！」

「心得た！」

ユイからの言葉に、ノアはすぐさま目の前のモンスターを倒し、そのまま左後方から来たモンスター3体を倒す。

「ユイ、しゃがめ！」

ノアはモンスターを倒すと、そのまま跳ぶようにユイへと走る。

ユイは言われた通り、その場でしゃがむとユイの後ろから迫っていたモンスターを斬り倒す。

「ノア、ありがとうございます！」

「約束だからな、守ると！」

そう言い合いながら、2人は互いに武器を向け、刺突を放つ。

2人の刺突は2人の顔を横切り、そのまま背後の敵を同時に貫く。貫き倒すと、すぐさま反転し、背中合わせになる。

「私も、ノアを守りますよ！」

「ああ、頼もしい限りだ！」

2人は笑い合うと、そのまま駆け出した。

ノアとユイがナイスコンビネーションでモンスターたちを倒して

いる間、カイ達は《ホロウ・モンスター》と戦っていた。

雑魚モンスター殲滅をノアとユイが引き受けてくれたお陰で、さつきよりは戦い易くなり、回避や防御が上手くいっていた。

(戦い易いとはいえ、決定打に欠けるな)

カイの言う通り、ナーヴギアへと送られる電気信号をナーヴギアより先に感知されるため、カイ達の攻撃は全て防がれている。

一騎打ちではなく、各個撃破で倒す作戦も考えたが、《ホロウ・モンスター》達は常に1対1を取るように行動し、各個撃破も難しかった。

「カイ、このままだといずれ俺たちが負けるぞ」

「やっぱり動きを先読みされるのはキツイわ」

「向こうが先に動く分、こっちの方が不利だわ」

(動きの先読み……先に奴らが動く……!)

3人の会話を聞き、カイはあることを思いつく。

「3人とも、背中合わせて集まるぞ」

「カイ?」

「急にどうしたの?」

「分かった」

カイの言葉に、ミトとアスナは疑問を浮かべるが、キリトは瞬時に理解する。

大技のスキルを放ち、《ホロウ・キリト》が大きくなるとすぐに後退する。

ミトとアスナもカイの言葉を信じ、それぞれの相手を下がらせ、中央に集まる。

「それでカイ、何か作戦があるんだろ?」

「ああ。確証も無い、殆ど思いつきだ。どうだ、やるか?」

「ああ、勿論だ」

相棒であるキリトは真っ先に頷く。

「それで、どんな作戦?」

「こうなったらとことんやろうー!」

ミトとアスナも了承し、4人は作戦を開始する。

「ふんっ!何か策があるみたいだけど、どうせ無駄さ」

そんな様子を、須郷は鼻で笑う。

須郷の召喚した《ホロウ・モンスター》は、ステータスが強力なだけでなく使用するスキルもまたコピーした対象と同じものを使う。

そこに、ヒースクリフの行ったソードスキル及びユニークスキルの解放。

それにより、《ホロウ・モンスター》たちも強力なソードスキルとユニークスキルも使えるようになった。

(強力な攻撃に、一歩先に行動できるモンスター………安易にソードスキルだとかユニークスキルだとかを使えるようにしたのが間違이었다な、茅場！この勝負、僕の勝ちだ！)

「よし、行くぞー！」

「おうー！」「えええ！」「うん！」

カイの言葉を合図に、全員が飛び出す。

その瞬間、須郷は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「いけ、《ホロウ・モンスター》共！そいつらを殺せ！」

須郷が大声を上げる。

《ホロウ・モンスター》たちはカイ達の動きを先読みし、先にソードスキルを放つ。

だが、須郷は気付かなかった。

確かに、現状でカイ達が勝つ確率は低かった。

だが、それは低いだけで0ではなかった。

視野が狭く、カイ達を見下し、逆転出来ると言う可能性を無視したため、気が付かなかった。

全員の装備が変わっていることに。

カイの手にはキリトの愛剣《エリユシデータ》と《ダークリパルサー》が。

キリトの手にはカイの愛刀《焰群》が。

ミトの手にはアスナの愛剣《ランベントライト》が。

アスナの手にはミトの愛鎌《イクシオンサイス》が。

お互いの相棒との武器を入れ替え、4人は攻撃する。

使用武器の違いによる攻撃変更のパターン変化により、《ホロウ・モ

ンスター》たちの反応が僅かに遅れる。

その僅かな遅れが致命的だった。

カイの持つ2本の片手剣は、《ホロウ・カイ》の右目と脇腹を貫き、キリトの持つ刀は《ホロウ・キリト》の身体を頭上から斬り、ミトの持つ細剣は《ホロウ・ミト》の喉元を正確に貫き、アスナの持つ鎌は下から振り上げる遠心力を利用とした一撃によって《ホロウ・アスナ》の腹部を貫く。

4体の《ホロウ・モンスター》はモロに食らった攻撃によって吹き飛ばされる。

「キリト!」「カイ!」

「アスナ!」「ミト!」

4人が自分の相棒の名を叫ぶ。

カイとキリトはお互いの相棒目掛け、武器を投げる。

互いの武器が上空で交差し、本来の持ち主の手に収まる。

ミトとアスナも同様にして渡すが、アスナは筋力値の関係で地面を滑らせるようにしてミトへと武器を返す。

「これで!」「終わりよ!」

立ち上がるとうとする《ホロウ・モンスター》目掛け、4人が渾身の一撃を放つ。

細剣スキル最上位技《フラッシング・ペネトレーター》により、アスナは刹那の閃光となり、《ホロウ・アスナ》の心臓を打ち抜いた。

両手鎌スキル最上位技《スカーレット・ネメシスロード》により、ミトは真紅の軌跡を描き、《ホロウ・ミト》の首を斬り落とす。

二刀流スキル最上位剣技《ジ・イクリップス》により、キリトは太陽コロナの如く噴出した超高速の27連撃を繰り出し、《ホロウ・キリト》の身体を斬り裂く。

業火刀スキル上位剣技《紅蓮燦爛》により、カイは骨すらも灰にする強烈な焔を放ち、《ホロウ・カイ》の身体を斬り、その身体を燃やした。

4体の《ホロウ・モンスター》を葬ったカイ達は、須郷へと視線を向ける。

「う、嘘だ……！強力なステータスに動きの先読み……さらに同じスキルの使用……！負ける理由がないだろ!? 攻撃は、確実にこちらが先に出せたはずだ！それなのに、どうして!？」

「それは、所詮はシステムによって動くだけのモンスターだからだよ」「自我のない人形な自分たちに私たちは負けないわ」

「むしろ、システムが動かしてるだけに戦い易かったぐらいよ」「あまり人間を舐めるなよ。人の意志や想いは、時にシステムの力を上回るんだからな」

そう言い、カイは須郷に刀を向ける。

同時にミト、キリト、アスナも剣先を向ける。

「もう終わりだ、須郷」

「大人しくしなさい」

「もう逃げれないわよ」

「諦めて、全ての罪を認めるんだな」

「終わりだって？大人しくしろ？逃げられない？罪を……認めろだとお!!」

須郷は激昂する。

「何も終わってないさ！僕がこの世界の王である限り、神である限り終わりなんてない！僕の持つ権限さえあれば、君達なんてどうとでも出来る！大人しくする必要も、逃げる必要も……ましてや罪を認める必要だってないのさ！」

須郷は再び手を上げる。

「システムコマンド！ペインアブソーバ、レベル10から0に変更！」
須郷は、仮想世界での痛みのレベルを調整するペインアブソーバのレベルを最小値まで下げた。

「レベル3以下にすると現実の肉体にも影響が出る様だが、そんなの知ったこつちやない！システムコマンド！《オール・ボスモンスター》
ジエネレート！」

今度はかつてSAOに存在し、今ALOに存在するボス級のモンスター全てを召喚しようとする。

そして、周りにモンスターがポップする前兆のポリゴン塊が出てい

た。

「この期に及んで！」

須郷の諦めの悪さに、キリトは舌打ちする。

「蹂躪だ！ぐちやぐちやにして殺してやる！さあ、死ね！」

「いや、そこまでだ。システムログイン、ID《ヒースクリフ》。システムコマンド、管理者権限変更、ID《オベイロン》をレベル1に」
突如、ヒースクリフの声が響き、須郷の周りに展開されていた管理者用のメニューウィンドウが消失する。

「なっ!?」

「システムコマンド、モンスター出現停止」

ヒースクリフがそう言うのと、ボスモンスターたちの召喚が停止し、そのままポリゴンの欠片になった散った。

「システムにハッキングし、管理者権限を奪おうかと思ったが、まさか私のIDが生きてるとはね。お陰で、労せずシステムの掌握は完了した」

「か、茅場ああああああああああああああああああ!!!」

須郷は絶叫を上げ、茅場を睨みつける。

「何も反省しないとはな……少しでも罪を悔いていたら、少しだけなら慈悲をやるうかと思っただけど………必要はないな」

そう言つて、カイは《焰群》を構える。

「あ、ああああ………!!」

《焰群》に纏わり付く焰に、須郷が恐怖し、腰を抜かす。

「た、助けてくれ！僕が悪かった！反省する！だから、見逃してくれ！」

須郷は、土下座をし命乞いをする。

ペインアブソーバーがレベル0の状態で、カイの一撃を食らったらどうなるかなど想像したくない程だった。

だが、カイは須郷を許す気も、見逃す気も無かった。

「あ、明日奈！頼む、君から説得してくれ！助けてくれたら、もう金輪際結城家には手を出さない！婚約も解消する！だから！」

アスナにも助けを求めるが、アスナはその声を無視し、聞かなかつ

たことにする。

「き、キリト君！ミト君！き、君達とはお世辞にもいい出会いをしたとは言えない…………でも、まだこれからだ！これからは、良い関係を築こう！だから…………ね？」

キリトとミトにも助けを請うが、キリトは後ろを向き、アスナの傍へと移動する。

「…………須郷、私はアンタを許さないから」

ミトは、地べたを這いつくばる須郷にそう言う。

「アンタの所為で…………私はカイと離れ離れになったのよ。アンタに手を差し伸べない理由には、十分すぎる理由よね」

そう言い、ミトも須郷から離れる。

「か、茅場！いや、茅場先輩！」

今度は憎しみ恨んでいる対象のヒースクリフにまで命乞いをした。

「須郷君、悪いが私からの慈悲を期待しない事だ。私も、君に対してかなり怒りが沸いてるんだ」

ヒースクリフはそう言い、須郷から離れようとする。

「そうだった」

だが、須郷は何かを思い出したように振り向く。

「須郷君、最後に1つ、面白い事を教えよう」

「な、なに…………？」

「実は、SAOには隠しステータスが存在していたのだよ」

ヒースクリフのその言葉に、須郷だけでなくミトもキリトもアスナも驚く。

「本来は、ステータス画面には現れない仕様だから、君たちが知らなくとも無理はない。その隠しステータスは、一部を除いたモンスターを倒す…………いや、殺すことで数値が上昇する。だが、その上昇値は微々たる物、例えば1日100体のモンスターを狩ったとしても、数値上昇による変化は早々起らないだろう」

そこで、一拍置き、ヒースクリフは続きを話す。

「だが、一気にその数値を上げる方法がある」

「茅場、それはなんだ？」

キリトは勿体ぶる言い方をするヒースクリフに、尋ねる。

「……………PKだよ」

PKの言葉に、カイを除き全員が反応する。

「プレイヤーを攻撃、あるいは殺す事でその数値は一気に急上昇し、一定値まで一気に貯まる。すると、プレイヤーカーソルが一般^{グリーン}人から犯罪者^{イエロー}になる」

「ま、まさか、その隠しステータスって……………」

「その通り……………名を《カルマ値》。SAOにおいて一般人と犯罪者を分ける数値だ」

カルマ値と言う隠しステータス。

そんなものがあつたことに、全員が驚く。

「《カルマ回復クエスト》は、カルマ値を減少させる為のクエストで、カルマ値の数値によって難易度は大きく変わる。ちなみに、放置でカーソルの色が戻るのも、時間経過によって数値が減少するからだ。まあ、カルマ値が高すぎると回復にまではかなりの時間を要するだろうがね」

そう言い、ヒースクリフは須郷へと視線を戻す。

「須郷君、君がSAOのサーバーをコピーしたことで、このカルマ値も引き継がれている。ALOはPK推奨のゲームだから、犯罪者^{イエロー}システムはないがカルマ値は存在する」

説明を続け、ヒースクリフはある画面を見せる。

「見たまえ、須郷君。これが、君の、妖精王《オベイロン》のカルマ値だ」

そう言つて見せられたその数値に、須郷は目を引ん剥く勢いで見開く。

「…、この数値は!?!」

「ALOに使われてるカーディナル・システムのバージョンは少々古いが、それでもカーディナルだ。カーディナルは優秀でね、君が過去に行つてきた悪事もネット上で検索し、それを既存の法律に照らして君専用のカルマ値を設定していたのさ」

「ちよ、ちよつと待つてくださいい!」

長々とカルマ値の説明をするヒースクリフに、アスナが口を挟む。

「カルマ値の話は分かりましたけど、その話が今と何の関係が……………」

「本題はここからだ、アスナ君」

ヒースクリフは須郷へと向き直り、話を続ける。

「須郷君、業火の意味は分かるかね？」

「……………は？」

「知らないなら、教えよう。業火とは、激しい炎や大火の例えに使われる。だが、もう1つ意味がある。……………地獄の罪人を苦しめる猛火と言う意味だ。ならば、《業火刀》がただの焰を纏うだけのスキルと
思うかね？」

「……………ま、まさか！」

キリトが何かに気づき、声を上げる。

キリトだけでなく、ミトも、アスナも、そして、須郷も気づく。

「《業火刀》とは、《対人特攻》スキルではない。相手のカルマ値が高ければ高いほど、威力が上昇する《^{カルマ}対業特攻》スキルだ。そして、炎傷状態付与も実際は業火状態付与だ」

ふっと笑うヒースクリフに、須郷は顔を青ざめさせ、全身を震わせる。

「正直、カイ君とのデュエルの時は焦ったよ。SAOのカーディナルシステムは、私にも膨大な数値のカルマ値を設定したからね。お陰で、もしカイ君の《業火刀》のスキルが当たったら私の正体がバレると冷や冷やした」

その言葉に、ヒースクリフがカイとのデュエルの時に、何処か焦りを感じていたのはソレが理由だったのかとキリトは納得する。

「それで、須郷君。君は、300人のSAOをプレイヤーをVR世界に監禁し、非道な実験のための、実験動物として扱った。加えて、グラウンドクエストに関する詐欺罪、他にも会社が管理するサーバーの私的利用、カイ君の家族の殺害や君が過去に起こした悪事……………私程でないにしろ、君はかなりのカルマ値を有している」

「あ、ああ……………！」

「おまけにペインアブソーバは今はレベル0。そこに、《業火刀》の《対

業^{カレマ}特攻》。死なないだろうが、きっと死ぬほど辛く苦しい痛みが、現実でも君を襲うだろう」

「い、いやだあああああああああああああああああー！」

「話は済んだか？」

「ひっ?!」

大人しく、ヒースクリフの話が終わるのを待っていたカイはようやくかと言いた気に刀を構える。

「須郷……」

「た、たしゆけて………！ゆるして………！」

鼻水を垂れ流し、目から涙を流し、何度も許しを請う須郷。

だが、カイは止まらない。

「終わりだ」

《焰群》が今まで以上に膨大な炎に包まれ、振るわれる。

居合斬りが放たれ、そのまま反転からの斬り下ろし、斬り上げ、左右からの袈裟斬り、突き、突き刺したまま捻って刃を振り上げ、最後に渾身の力を籠め、頭上から叩き割る様に刀を振り下ろす。

業火刀スキル最上位剣技《業火》。

「うわああああああああ!!?!痛いよおおおおお!!たしゆけてええええええええ!!からだ!!からだ!!からだ!!からだ!!からだ!!」

炎に包まれ、絶叫し、のたうち回る須郷。

「お前にはお似合いの最後だ。その痛みと熱を、忘れるなよ。忘れたら………その時は、俺が思い出させてやる」

「ぎゃあああああああああああああああ!!」

その絶叫を最後に、須郷のHPは底を尽き、アバターが碎け散った。

第30話 再会

汚い須郷の絶叫が尾を引き、虚空へと消える。

それを見届けて、カイは《焰群》を、まるで刀に付いた血を払う様に横に振り、鞘へと納める。

そこで息を吐き、振り向く。

そこにはミト達が立っていた。

「もう、終わったぞ」

カイは振り返って、優しい声でそう言った。

そんなカイを見て、ミトは本当に終わったのだと実感した。

そして、実感するよりも早くカイへと抱き付いていた。

カイは驚きの表情をするも、すぐに優しい笑みを浮かべ、ミトを抱きしめ返す。

「カイ……ミト……良かったな……」

「キリト君、もしかして泣いてる？」

「別にいいだろ……そう言うアスナだって、泣いてるじゃないか」

「ふふ、あんなの見たらしょうがないでしょ」

その光景に、キリトとアスナは感極まって涙を流して笑みを浮かべる。

「ノアはいいんですか？」

「そうだな……本音を言えば、俺も父上に抱き付きたいが、今回は母上に譲ることにしよう」

「なら、私が抱きしめてあげましょうか？」

「キリトさんの視線がヤバいから遠慮するさ」

ノアとユイも、安堵の表情を浮かべ、笑い合い、カイとミトを見つめる。

「ここまで随分と長い道のりだったな」

トバルは《スカルリーパー》との戦闘を終え、刀を肩で担いでいる。

「ま、贖罪も果たせし、一件落着か」

そう言いながら、トバルはカイの持つ刀、《焰群》を見つめる。

「今度はカイを守ってくれたな」

トバルは満足そうに笑う。

「感動的な場面に水を差すようで悪いが、そろそろ当初の目的を果たすべきではないかね？」

そんな中、ヒースクリフがそう言い、全員が本来の目的を思い出す。ヒースクリフは呆れたように溜息を吐き、管理者用メニューウィンドウを操作する。

一瞬で、カイ達は実験体格納室へと戻った。

戻るとすぐさま、ヒースクリフはコンソールを操作する。

「ふむ、なるほど。須郷君は、余程この実験が大切だったみたいだ。丁寧に何重にも保険を掛け、正規の方法以外でのログアウトが行われた時、ナーヴギアの出力を上げ、脳を破壊するように設定されている」「万が一に備えての証拠隠滅手段か……」

「だが、それも問題はない。すぐにでも終わらせれるよ。ノア君、ユイ君、君たちの力も貸してはくれないだろうか？」

「はい、わかりました！」

ヒースクリフに頼まれ、ノアとユイも作業を開始する。

「時間が少々掛かる。カイ君、今のうちにキリト君たちに説明をしておくべきではないかね？」

「ああ、そうだな」

ヒースクリフに言われ、カイはミト、キリト、アスナを見る。

「3人とも色々聞きたいことがあるだろうから、全部話すよ」

カイがまず話したのは、自分が生きてる理由だった。

「俺が生きてるのは、ヒースクリフ、もとい茅場のお陰だ」

「どういうことだ？」

「SAOのラスボスを倒した報酬だとき。あの時点で、俺のHPは底を尽いていたが、茅場曰く自身のHPが底を尽いた時、俺はまだ生きていた。だから、正当な報酬としてゲームからログアウトさせたんだとき」

「じゃあ、どうして生きてることをずっと黙ってたの？」

「茅場に頼まれたんだよ」

あの時、カイは光に包まれると同時に自身の意識も消滅し、死を迎

えると思っていた。

だが、光に包まれた後、カイは暗闇の中に居た。

そして、目の前には少し困った表情をした茅場も居た。

カイは、「別れの挨拶しといて、すぐに再会とか締まらないぞ」と言うのと、茅場は信じられない事を言った。

それが、プレイヤーのログアウトの直前、予想外の横やりが入り、およそ300人のプレイヤーのログアウトに失敗し、解放されなかったと言う事と、その中にアスナが居ることだった。

茅場はそのハッキング元を調べると須郷へと辿り着いた。

茅場はGMとして何としても生き残ったプレイヤー全員を現実に戻さないと行けなかった。

だが、とある事情でソレを行うことが出来なかった。

そこでカイにあることを依頼した。

それが、自身の代わりに300人を救ってもらった事だった。

無論カイはそれをすぐさま了承、茅場と綿密な話し合いを行い、その上で須郷に作戦を悟られない様に、恐らく接触することになるであろうミトとキリトにはカイが生きてることを明かさず作戦を進めていた。

「これが、俺が生きてることを知らせなかった理由だ。本当なら、直ぐにでも教えたかったけど俺の身勝手に作戦を台無しにする訳にはいかなかった。本当にすまない」

事情を説明し、カイは頭を下げる。

「そんな、謝らないでくれ」

「そうよ。確かに、作戦を知られたら須郷だって何かしらの対策をしたはずだし、少しでも危険を減らすためには仕方ない事よ」

キリトとミトは、頭を下げて謝って来るカイをフォローする。

そんな中、アスナはあることを思い出す。

「ねえ、トバル君」

「ん？なんだ？」

「そう言えば、カイ君が生きてたのにトバル君、あまり驚いてなかったけど……………」

「当たり前前だろ？カイが生きてるのは知ってたし」

「「……………は？」」

トバルの言葉に、ミト達は思わず聞き返した。

「どういう事だよ!？」

「何で知ってるのよ!？」

ミトとキリトが声を上げる。

「作戦の為には、仲間集めから武器開発と手が必要だったんだ。そこで、トバルには攻略組全員分の武器と防具を、ディアベルにはその他の仲間集めを頼んだんだ」

「ちよ、ちよつと待って！トバル君、カイ君が死んで後悔してるって！」

「あ？何言ってるんだ？俺が後悔してるのは、ヒースクリフの野郎の攻撃で折れる様な鈍らを打っちゃったことだ」

「で、でも、カイ君の事死んだって言ってたよね？」

「結果的に生きてはいるが、カイ自身HPが無くなったのは事実だ。そんな時のカイの気持ちを考えたら、カイにとっては1回死んだようなものだろ？」

「ちなみに、他だとエギルも知ってるな。キリトとミトをALOに行くように話を進めてもらったし」

トバルにディアベル、そして、エギルまでもカイの生存を知っていたことに、キリトとミトはショックを受ける。

確かに、情報漏洩の為には少しでも漏洩防止を施さなくてはならない。

実際、ミトとキリトは須郷に接触された。

2人が作戦の事を漏らす可能性は低いけど0ではない。

だからこそ、生存を明かせられない事は仕方がない。

だが、それでも蚊帳の外の様な気分で悔しい気持ちになっていた。

そんな2人をアスナは慰めつつ、カイにあることを聞く。

「じゃあさ、カイ君。須郷が私に触れられなかったのは《業火刀》のお陰ってあったけど、あれはどういうこと？」

「ああ。《業火刀》の能力に、業火状態の付与つてのがあるんだ。最初

は継続ダメージを与える炎傷状態だと思っただけ、業火状態を付与されたモンスターはカルマ値に応じた継続ダメージを与え、味方に付与すれば接触したモンスターのカルマ値に応じたダメージを与える。敵には状態異常で、味方にはバフになるんだよ。それと、武器にも付与出来て、継続時間中なら対業^{カルマ}特攻が付与できるんだ」

茅場は、須郷の行ったハッキングで監禁されたプレイヤーの中にアスナが居ることに気づいた時、須郷が結城彰三と懇意にしている事を知っており、アスナを監禁したのには何か理由があると思ひ、SAOのデータが完全に削除される前に《業火刀》のデータを引っ張り出し、本来は時間制限のある業火状態付与を半永久的にアスナへと付与し、更に、ペインアブソーバ機能を貫通するプログラムを組み込み、須郷がアスナに触れられないようにした。

その機能は、カイがトバルをアスナの護衛として付けた時に、トバルの武器にも付与した。

「ま、こんな所だな。茅場、そっちはどうだ？」

説明を終え、カイは茅場に進捗を尋ねる。

「ああ、問題ない。もう終わった。今、最後の処理を待ってる所だ。後、数分でアスナ君含めた300名のプレイヤーたちは解放される」
ヒースクリフの言葉に、全員が喜びの表情をする。

「アスナ、現実世界はもう夜だけど、すぐに君に会いに行く」

「うん、待ってる。私も最初に会うのはキリト君がいいもの……………
とうとう、終わるんだね。帰れるんだね……………あの世界に」

「そうだ……………色々変わっててビックリするぞ」

「いっぱい、色んな所に行って、色んな事、しようね」

「ああ。きつと」

キリトとアスナは互いに抱きしめ合う。

「データ処理完了。ログアウトを開始する」

ヒースクリフの言葉通り、アスナがログアウトされた。

そして、周りの柱の中にある脳のホログラムも次々と消えて行く。

「じゃ、俺も帰るとするか」

トバルはそう言い、メニューウィンドウを操作する。

「トバル、お前には世話になった。ありがとうな」

「気にすんなよ。俺は、自分のミスに始末を付けに来ただけだ。またな、カイ」

「ああ」

そして、トバルもログアウトする。

それと同時に、プレイヤーモードになっていたノアとユイがピクシーモードへと戻る。

「パパ、ごめんなさい。どうやら限界みたいです」

「強制スリープモード……どうやらかなりサーバーに負荷が掛かったみたいです、父上、母上。すみませんが、俺とユイは眠りにつきます」

「ああ、わかった。ユイ、お疲れ様、ゆっくり休んでくれ」

「ノアもお疲れ。また来るから、その時は沢山話そうな」

「はい、父上、おやすみなさい」

ノアがそう言うのを最後にし、ノアとユイは眠りにつく。

そんな2人をカイとキリトは抱え、ポケットへと入れる。

「カイ、ミト。俺ももう落ちるよ。早くアスナに会いたいしな」

「ああ、行ってこい」

「アスナに宜しくね」

「分かった。カイ、次は向こうで会おうな」

「おう……またな、相棒」

キリトと拳をぶつけ合い、キリトもログアウトする。

「さて、私も行くでしょう」

今度はヒースクリフがそう言う。

だが、聖騎士《ヒースクリフ》の姿ではなく、研究者にして開発者の茅場明彦としての姿だった。

「ああ、茅場。アンタにもずいぶん世話になったな、ありがとう」

「礼は不要だ。そもそも、今回の1件は私が君に頼んだ事でもある。むしろ、礼を言うのは私の方さ」

「それこそ要らない。仮に、アンタに頼まれなかったとしても、勝手にやったさ」

「そうか。では、最後ついでに、もう1つ頼みごとを良いかな？」

そう言うと、頭上から光る結晶の様なものが落ちて来て、カイの手
に収まる。

「こいつは？」

「世界の種子、《ザ・シード》だ。芽吹けば、どういうものか解かる。そ
の後の判断は君に託そう。それと」

そこで言葉を区切り、茅場は笑う。

「カイ君、君のアイテムストレージにある物がある」

「ある物？」

「言っただろ？ゲームクリアと、誕生日おめでとうとね」

アインクラッドで、茅場が最後にカイに言ったセリフを聞き、カイ
は思い出す。

「君の生存はゲームクリアの報酬だ。だが、誕生日プレゼントがまだ
だっただろ？見たまえ」

茅場に言われ、カイはアイテムストレージを確認する。

そこに入ってたものを見て、カイは驚愕し、茅場を見る。

茅場はただただ笑っていた。

「では、私は行くよ。いつかまた会おう」

そう言い残し、茅場の姿も消えた。

「カイ、何が入ってたの？」

茅場が消えると、ミトがカイに何が入っていたのか尋ねる。

カイは、頭を掻き、照れくさそうにする。

「……………まあ、いいか」

そう言うと、カイはソレを取り出した。

「ミト、左手を出してくれないか？」

「ん？ことう？」

カイに言われ、ミトが左手を出す。

「ミト、あの時言えなかつたこと今言うよ」

カイはミトの左手を手を取って言う。

「約束する。現実に戻っても、俺はミトと必ず会う。いつか、別れる時
が来るとしてもその時まで、俺はミトを愛し続ける。これは、その覚
悟の証だ」

そう言い、ミトの左手の薬指に指輪を嵌めた。
それは、カイがケイタに頼んで作ってもらい、ミトに送ろうとしていたあの指輪だった。

茅場からの誕生日プレゼント、それはあの日できなかった約束をするチャンスだった。

紫色の宝石、アメジストが嵌め込まれた指輪。

それはミト好みのデザインだった。

「あ……………」

「受け取ってくれ、ミト」

カイは照れくさそうに笑い言う。

ミトは感極まってカイへと抱き付いた。

「うん、喜んで」

「ありがとう」

再度、お互いに抱きしめ合い離れる。

「ねえ、カイ。今から会える？」

「もう遅いぞ？」

「構わないわ。今すぐ会いたいのに」

「やれやれ……………分かった。じゃあ、ミト。いつもの公園で待ってるよ」

「うん！」

ミトは笑顔で頷き、カイも釣られて笑顔になる。

そして、2人はログアウトした。

意識が戻った瞬間、ミトはナーヴギアを乱暴に脱ぎ捨て、置いて

あつたコートを手に、急いで家を飛び出た。

コートを着ながら走り、ミトはカイの言つてた場所に向かう。

いつもの公園。

カイとミトの2人の間で、いつもの公園と言えばあそこしかない。

2人が初めて出会った場所で、時間を忘れて共に遊んだ場所。

そして、ミトにとっては辛い思い出の場所でもあつた。

雪が降る夜道を、ミトは必死に走る。

途中、雪に足を取られ滑りそうになったが、なんとか耐え、走る。

本来なら歩いて30分は掛かる公園に、ミトは15分という速さで

着いた。

「……………遊具、こんなに小さかったんだ」

カイと会えなくなつたと理解したあの日以来、ミトは久しぶりに公園を訪れた。

公園にいとカイを思い出してしまい、それが辛かったミトは、公園に行くのを止めた。

あの頃と比べ、背も伸びた今となつては大きく感じてた遊具も、遊ぶには小さすぎるぐらいになつてた。

公園の中を歩き、ミトはいつものベンチへと向かう。カイと並んで座り、一緒にゲームをしたあのベンチ。

足元に積もつた雪を踏みしめ、1歩1歩噛み締めながら進み、いつものベンチを見つける。

ベンチの傍にある街灯の灯が、ベンチを照らす。

そこに誰かが座っていた。

その瞬間、心臓が大きく跳ねた。

ゆっくり、ゆっくりと強く鼓動する心臓の音が聞こえて来る。

ミトは心臓の鼓動に合わせ、歩く。

そして、ベンチの傍に着く。

「あ……………あ……………」

声を掛けようとするも、口が上手く動かず喋れない。

緊張から、顔を見ることもできないでいると、そんな状況を察して、ベンチに座っていた人物は立ち上がり、ミトの前に立つ。

「なあ、傍に居ていいか?」

「あ……………」

その言葉に、ミトはようやくその人物の顔を見れた。

SAOで自分に向けてくれたあの笑顔。

変わらない笑顔で、彼、カイは立っていた。

いつの間にか、ミトは涙を流し、カイへと抱き付いた。

「やっと……………やっと会えた……………」

「ああ、俺もずっと会いたかったよ、ミト」

あの世界で何度も聞いてた声、何度も抱きしめてくれた腕、何度も

感じていた鼓動。

その全てが、SAOに居た頃と比べて、比較にならない程ミトの心へと響く。

「そうだ、ミト。聞いてくれないか、俺の本当の名前」

カイがミトの肩を掴んで離し、目を見つめて言う。

ミトは涙を拭い、頷く。

「俺の名前は、神里伊緒。歳は18だ」

「年上だったんだね。……私は兎沢深澄って言うの。歳は17」

「なるほど、深澄と兎沢でミトか」

「そう言うカイも、神里と伊緒でカイか。随分と安直ね」

「ミトに言われたくないっての」

そう言っつて、互いに笑い合う。

そして、どちらともなく顔が近づき、唇が触れ合う。

SAOで4年ぶりの再会、現実では6年ぶりの再会。

2人は会えなかった時間を埋めるかのように、長いキスをする。

そして、唇が離れ、また互いに笑い合う。

「待たせたな、ミト。ただいま」

「おかえりなさい、カイ」

少年と少女が再会し、2人の止まっていた時間が再び進み始める。

そして、その時間はこの先、ずっと止まることはないだろう

.....

エピローグ

A L O 事件から4ヶ月の月日が経った。

現在、カイ達をはじめとしたS A O 事件当時高校生以下だった未成年は、都立高の統廃合で空いた校舎を利用した学校、通称「帰還者学校」へと入学した。

入学して1ヶ月。

最初こそは、何処か遠慮気味に接していた生徒たちも、今では普通の学生のように和気藹々とS A O では味わえなかった学生生活を謳歌している。

そして、現在カイは自身が所属する教室で古典の授業を受けていた。

古典の文と訳が映し出されたE L パネルを眺め、カイは手元のタブレットP C に内容を書き写す。

暫くすると、鐘の音のようなチャイムが流れ、授業の終わりを告げる。

「それでは、今日の授業はここまで。課題ファイル16と17を転送するから、来週までにアップロードしとくように。では、また来週」
初老の教師は、片手に資料を抱え、もう片方の手を腰に当ててゆくりとした動きで教室を出ていく。

タブレットP C を操作し、ダウンロードされた課題を確認する。

確認が終わると、心の中で「量が多い」と呟き、タブレットP C の電源を落とし、鞆に放り込んで立ち上がる。

「伊緒、飯行こうぜ」

カイが立ち上がると、仲のいい友人がカイを昼食に誘う。

「悪いな。今日は先約があるんだ」

「ああ、なるほどな。羨ましいな、こんちくしょー!」

肩を軽く殴られ、カイは「痛いだろ」といい、肩を軽く殴り返す。

その後は、互いに笑い合い、「またな」と手を軽く振って別れる。

「少し遅くなったな」

スマホで時間を確認しつつ、足早に廊下を移動する。

そして、カイが辿り着いたのは、校舎の端っこにある部屋だった。元は何かしらの部室の様だが、今は使われなく、また位置的にこの場所を訪れる生徒や教師もいない。

その部屋の扉を、カイはノックする。

3回ノックし、一拍間をおいて、再度3回ノック。

すると、ガチャツと鍵が開き、扉が開かれる。

「遅いよ、伊緒」

「悪い、少し友達に絡まれたんだ、深澄」

カイを出迎えたのはミトだった。

この部屋は、カイとミトの秘密の部屋でもある。

部屋に入り、置かれている安物のソファーに腰掛けると、ミトは置いてあった鞆から包を二つ取り出す。

「はい、どうぞ」

「ありがとうな」

ミトから包を受け取り、カイは早速開ける。

「お、これってもしかして」

「そう、74層の安全地帯で食べたハンバーガー。明日奈と一緒に何とか再現しようって試行錯誤を繰り返して、やっとできた試作品1号よ」

「はは、懐かしいな。いただきます」

手を合わせ、カイは早速齧り付く。

2度、3度と咀嚼を繰り返して、飲み込む。

「……………どう？」

「うん、そうだな……………味は大分近いけど、まだまだって感じかな」

「あちゃー……………明日奈と作った時は似てると思ったけど、1人で作るとやっぱダメか」

ミトは悔しそうに溜息を吐く。

元々、リアルでのミトは料理をあまりしないらしいが、その腕は決して悪くはない。

だが、SAOでは《料理》スキルを完全習得していた為、SAOでの料理の腕を知っている者からしたら、その差は驚きである。

それでも、カイの為にこの4ヶ月必死に母親やアスナの指導の元、それなりのレベルにはなっていた。

「これでも十分に美味しいぞ」

「それでももつと上達しないと。でなきや、私自身が納得できない……伊緒の彼女として」

そう言うミトの顔は真っ赤になっていた。

ミトはこうして、唐突にこのような発言をする。

その度に、顔を真っ赤にして照れてる。

そんなミトを見てカイは、「照れるなら言わなきやいいのに」と思う反面、「そんなミトも可愛い」と思っている。

「ありがとうな」

カイはミトの手を握ってお礼を言う。

「楽しみにしてるよ、またあの味が食べれるその日をな」

「……うん、期待してて」

「じゃあ、残りをさっさと食べよう。ゲーム、やるんだろ？」

「もちろん」

そう言い、2人は残りのハンバーガーを食べ進める。

「やっぱり、俺、納得がいきません」

カフェテリアの西側の窓際のテーブル。

そのテーブルに陣取っている4人のうちの1人の長髪の少年が呟く。

「どうして、俺には師匠が生きてること教えてくれなかったんですか、刀祢さん！」

そう言つて、長髪の少年レオこと「獅子戸廉」が叫ぶ。

「れ、廉君！声が大きいって」

叫ぶ彼に、隣に座っている少女シリカこと「綾野珪子」が宥める。

「大丈夫よ。皆ご飯や話に夢中で、多少の大声じゃ聞こえないって」

そう言つて、リズベットこと「篠崎里香」がいちごヨーグルトを飲み干しながら言う。

「別に好きで黙ってたわけじゃねえよ。伊緒の奴からも言われたらろ？情報漏洩防止のために、必要最低限の奴にしか自分が生きてるのは教えなかったって」

レオに説明するようにトバルこと「打鉄刀祢」は言う。

「俺、師匠の弟子なのに……………」

レオはALOでの救出作戦に当たつて、カイの生存の事は知らされていなかった。

知らされぬままトバル経由で事情を知り、協力していた。

カイが生きてることを知つたのは、全てが終わつた後だった。

「まあ、別にいいじゃない。何はともあれ、みんな無事だったんだし」「里香さん、そう言う貴女だって、師匠が生きてること知つてましたよね？」

「えつと…………それは、まあね、仕方ないんじゃないかしら？」

何を隠そう、リズもまたカイが生きてることを知つてた1人だった。

カイは、ALOがスキル制のPK推奨ゲームと知り、強力な武器が必要だと考えた。

その時、茅場からALOがSAOのサーバーのコピーを使用していることを思い出し、もしやと思つて調べると、アイテムデータの中にキリト達の愛用した武器のデータを発見した。

そのデータを復元し、カイとキリトの武器（エリユシデータは除く）はトバルが、ミトとアスナの武器はリズが製作した物だったこともあり、カイはトバルとリズに頼んで、武器の製作を依頼した。

「はあく、俺つてもしかして師匠からの信頼ないのかな……………」

自虐になり、テーブルに突つ伏すレオ。

「そう落ち込むなよ」

そんなレオを、トバルが励ます。

「そもそも、^{サラマンダー}火妖精族達の説得をお前に頼もうって言いだしたのは伊緒だぞ」

「え？師匠が？」

その言葉に、レオが顔を上げる。

「ああ。レオの腕なら^{サラマンダー}火妖精族達を説得することが出来る。俺の信頼する一番弟子なんだからなつて言つてたぞ」

「一番弟子……………！へへ……………！」

一番弟子と言う言葉に、レオは思わず笑顔になる。

その笑顔に、シリカは「可愛い」と思い、リズは「チョロくない？」と思つた。

「それにしても、刀裃さんと里香さんつて優しいですよね」

すると、シリカが注文したエビピラフを食べながら言う。

「ああ、確かに。師匠に深澄さん、それに、和人さんと明日奈さんの4人を暫くは2人つきりで楽しませようって言いだした時は驚きましたよ」

レオも注文したカレーライスを食べながら言う。

「そりゃ、伊緒と深澄はリアルじゃ6年ぶりの再会なんだぞ？暫く2人つきりにしてやるのが普通つてもんだ」

トバルは、注文した定食を綺麗に平らげ、食後のお茶を啜りながら言う。

「そうよね。明日奈もALOじゃ辛い目にあつてたのに、ずっと1人

で頑張つて耐えて来たんだもん。きつと和人に甘えたいだろうし、そつとしてあげたいのよ」

リズは飲み終えたいちごヨーグルトのパックを潰して言う。

「なんて言うか、里香さんと刀祢さん、お姉ちゃんとお兄ちゃんって感じだね」

「師匠が刀祢さんが優しい人だつて言つてたの分かったよ」

レオとシリカは小声で言い合いながら、笑う。

「それで、お前たち今日来るのか？」

「オフ会、どうなのよ？」

笑みを浮かべながら、答えは分かり切っていることを聞いて来るトバルとリズに、レオとシリカも笑つて答える。

「もちろん」

「行くに決まっていますよ」

放課後、カイとミト、キリトとアスナ、そして、ジークとリーファの6人はオフ会の会場となつてるエギルの店 “ダイシー・カフェ” へと向かつていた。

「ねえ、お兄ちゃん。本当にいいの？」

「関係ない俺たちまで参加してしまつて……………」

このオフ会はSAOプレイヤーたちのオフ会なので、ジークとリー

ファの2人が居るのはおかしいのだが、カイ達は折角だからとジークとリーファを誘った。

「いいに決まってるだろう？」

「2人は俺達に協力してくれた恩人だからな」

「そのお礼を兼ねてのお誘いよ」

「折角なんだから楽しんでいってよ」

カイ達にそう言われ、ジークとリーファは場違いなのではないながらも、4人の後を付いて行く。

店に着き、キリトが先頭に立って扉を開ける。

その瞬間、歓声、拍手、口笛、クラツカーを鳴らす音が一齐に響き渡る。

決して広いとは言えない店内に、沢山の人が入っており、その手には飲み物の入ったグラスがあつた。

「俺達は遅刻してないぞ」

「主役は最後に登場するもんでしょ」

「実はお前たちには少し遅い時間を伝えといたんだよ。まあ、取りあえず入れ」

トバルとリズの2人によって、6人は店の中へと入る。

そして、カイとミト、キリトとアスナの4人を即席の壇上へと誘導する。

「それでは！」

「お前ら、グラスを掲げろ！」

リズとトバルが全員にそう言う。

そして、全員がグラスを掲げると、声を揃えて言う。

『カイ、キリト、ミト、アスナ！SAOクリアおめでとぅ!!』

明らかに事前に打ち合わせされている行動に、カイとキリトは間抜け面を晒し、ミトとアスナも聞いてた話と違いぽかんとする。

このオフ会は、カイとキリト、トバルにリズ、そして、店主のエキルで企画されたものだが、カイとキリトに内緒で3人は、功労者の4人を労う慰労会でもあることにした。

カイとキリトの功績は言わずもがな、ミトとアスナもALOでの最

終決戦では獅子奮迅の働きをし、見事未帰還者の救出に貢献した。

真の意味でS A Oをクリアしたのは、紛れもなくカイ達4人の功績だと、トバルが言い、それにリズが賛同。

だからこそ、こうして4人を労うことにした。

唐突にスピーチをやらされたり、自己紹介などを終え、宴が始まる。様々な人たちからの祝福を受け、カイとキリトはへ口へ口になりながらカウンタ―席に座る。

「エギル、バーボン、ロックで」

「なら、俺はウイスキーのストレート」

「何言ってるんだよ、未成年コンビ」

そう言い、エギルは2人に烏龍茶を出す。

丁寧に、キリトのにはロックアイスを入れ、カイのはそのまま出す。

「それにしても、カオスだな」

「確かに」

後ろでバカ騒ぎをする連中を見つめ、カイとキリトは呆れた様に笑う。

女性陣に囲まれ頭を撫でられ可愛がられるレオ、そんなレオを見て不機嫌そうにするシリカ。

アルコールは飲んでない筈なのに酔った様にはしゃぐリズ、そんなリズを介抱するトバル。

酔ってディアベル塾歌を熱唱する元ディアベル塾卒業生（未成年除く）と、指揮をするディアベル。

完全に混沌としており、ここにいるメンバーがかつてS A Oの中で命賭けで戦っていた歴戦の猛者たちとは信じられない光景だ。

「ま、これも全部S A Oをクリアしたからこそだろうな」

カイはそう言い、グラスをキリトへと向ける。

「何はともあれ、お疲れ、相棒」

「お前もな、相棒」

カイとキリトはそう言葉を交わし、グラスをぶつけ合う。

「よう、エギル。俺には本物くれ」

そんな所に、クラインがやって来てエギルに酒を注文する。

「いいのか？これから会社に戻るんだろ？」

「その予定だったけど、無理矢理半休にしてもらったんだよ。だから、今日はもうオフだ」

そう言うクラインに、「しっかりしてるな」とエギルは言い、クラインに酒を提供する。

「キリトさん、カイさん」

すると、今度は元《アインクラッド解放軍》のギルドマスターのシンカーがやってくる。

「ユリエールさんと入籍したそうで。遅くなりましたけど、おめでとうございます。」

「俺からも、おめでとうございます」

「ありがとうございます。まだまだ、現実には慣れるので精一杯って感じですし、漸く仕事も軌道に乗って来た所ですけどね」

照れくさそうにシンカーは言い、席に座る。

「そう言えば、見てるっすよ！新生《MMOトウデイ》！」

クラインがグラスを空にして、シンカーに言う。

大人2人で話が弾んでる所で、カイはエギルにあることを聞く。

「なあ、エギル。アレはどうなった？」

「ああ、今、ミラーサーバがおよそ50……ダウンロード総数は10万、実際に稼働している大規模サーバが300つとところだな」

そう言い、ノートパソコンを取り出し、画面を見せる。

須郷の1件で、ALOを始めとしたVRMMOと言うジャンルは衰退の一途を辿っていた。

SAO事件の時は、あくまで茅場1人の起こした狂人の事件として例外的に扱われたが、須郷の所為でVRワールドが犯罪に利用されるのではと言う事から、完全に回復不能となり、ジャンルの衰退は現実の物となっていた。

そんな中で、ALOで茅場がカイに最後に託したプログラム、《^{ザ・}世界の種子》が活躍した。

これは、VRMMORPG作成・制御用のフリーソフトで、これをダウンロードすれば、あとは回線のそこそこ太いサーバを用意すれ

ば誰でもVRMMOの世界が創れる。

これのおかげで社会的批判を受け、衰退しかけていたVRMMOが復活し、無くなるはずだったALOも別の会社に運営が任されることになった。

そして、『^{ザ・}世界の種子^{シード}』によってALO以外にも新しい世界が誕生した。

中小企業から個人に至るまで様々な人が運営者になり、次々と新しいVRMMOが生まれ、更にそれらは相互に接続もされるようになり、作ったキャラクターを他のゲームで使えるコンバートシステムなどもできた。

「私達は多分今、新しい世界の創生に立ち会っているんです。その世界を括るにしてもMMORPGという言葉は狭すぎる。『MMOトウデイ』も新しい名前にしたいのですが、なかなか、これ、という単語が出てこないんですよ」

「う〜〜〜む」

シンカーの言葉に、クラインが腕組して考え始めた。

「ギルドに『風林火山』なんて名前付ける奴のセンスには誰も期待してないぞ」

「なんだと！言つとくが、新生・風林火山には加入希望者が殺到中なんだぞー！」

「可愛い女の子がいるといいな」

「ぐっ……」

クラインが言葉に詰まり、その様子がおかしくカイとキリトはつい笑ってしまった。

「おい、二次会に予定変更は無いんだろうな？」

「ああ、今夜十一時にイグドラル・シテイ集合だ」

「それで、アレは動くのか？」

「おうよ。新しいサーバ群を丸々一つ使ったらしいが、なんせ『伝説の城』だ。ユーザーもがつつんがつつん増えて、資金もがっぽりがっぽりだ」

「うまく行くといいな」

カイはそう眩き、残った烏龍茶を飲み干した。

漆黒の夜に包まれたALOの空を、リーファが飛んでいた。

今までなら飛翔力を気にして、効率よく飛ぶ方法を模索していたが、今のALOではそんなことを気にしなくてよくなった。

世界は一度崩壊し、新しく生まれ変わって、全ての妖精に等しく無限に飛べるようになった。

先週開かれた《アルヴ Heim 横断レース》にて、リーファが1位で、カイとキリトの2人が僅差でキリトが2位、カイが3位となった。

多くの者がリベンジを誓い、こう言うイベント事で飛ぶのもリーファは悪くないと思った。

だが、それ以上に何も考えず、ただただ飛び続けることの方がリーファは好きだった。

飛ぶスピードはどんどん加速し、体感的に今までの最高速度へと到達した瞬間、リーファはその速度を維持したまま急上昇をした。

雲を突き抜け、月へと向かって飛ぶ。

だが、徐々にスピードは落ち、とうとう0になる。

その瞬間、リーファの身体はそのまま自由落下へと入り、地上へと落ちて行く。

「リーファー！」

ある程度落下すると、突如、体が引つ張られる感覚がリーファを襲った。

リーファの手を掴んだのは、ジークだった。

「全く、集合時間になつても来ないから心配したぞ」

「ジーク、ごめん。ありがとう」

翅を動かして、ホバリングしてジークから離れる。

「どうかしたのか？」

リーファが離れると、ジークはリーファにそう尋ねる。

「やっぱ、ジークには隠せないか」

リーファは困った笑みを浮かべ、話し出す。

「今日のオフ会さ。楽しかったよね」

「ああ。見ず知らずの俺達にも昔からの友人の様に話しかけて、輪に入れてくれた。あんな楽しいオフ会は初めてだ」

「うん、あたしも。……でもさ、やっぱり遠いよね」

リーファは悲しそうに言う。

「ALOがさ、より大きなVRMMO連結体ネクサスに参加するって計画知ってる？」

「ああ、小耳にはさんだ程度だが、手始めに月面を舞台にしたゲームと接続するらしいな」

「うん。だから、そうだったらあの月まで飛んで行けるようになるんだよ。それに、もっと多くのVRMMOと繋がって行って、それが一つの惑星として設定されて、惑星間を行き来する船も出来る。そうになったら、きつとどんな所にも行けるし、辿り着けるの。……でも、お兄ちゃんたちの所には行けないよね」

今日参加したオフ会は、本当に楽しいものだった。

だが、同時にそこに参加している元SAOプレイヤー同士の絆を感じ

じ取ってしまった。

アインクラッドで共に戦い、泣き、笑い、恋をした記憶は、アインクラッドが無くなった今も尚、全員の記憶の中で鮮やかに輝きを放っている。

それが、リーファにとつて堪らなく悔しかった。

「……………そうだな。キリトさん達にとつてSAOでの2年間は、本物だ。そこで得た絆は、何物にも代えがたい代物だろう。だが、決して行けないことはないはずだ」

ジークはそう言うと、リーファの手を取る。

「ついて来てくれ」

「え!?ちよつと!?!」

引つ張られるように暫く空を飛ぶと、アルヴヘイムの0時を知らせる鐘がなる。

鐘の音を聞き、ジークは急ブレーキをかける。

「わっ!?!」

急に止まるので、リーファは思わずジークの背中にぶつかる様にして止まる。

「ちよつと、急に止まらないでよー!」

「す、すまない。急がないと思つてしまつて……………だが、間に合わなかつたな」

そう言い、ジークは月の方向を見上げる。

ジークの視線を追い、リーファも月を見る。

月は満月だ。

そして、その満月は徐々に欠けはじめた。

リーファは月蝕かと思つたが良く見ると円形ではなく楔型をしていた。

それは、いくつもの薄い層が重なつた一つの巨大な城だった。

「あ、あれつて!?!」

「SAOの舞台となつた浮遊城《アインクラッド》。引き渡されたALOのデータの中にあつたらしくて、それを多くの人の手によつて復活したらしい」

ジークはアインクラッドを見つめ言う。

「今の俺達では、キリトさん達の絆には敵わないだろう。だが、今の俺達なら、かつてキリトさん達が辿った道を進める。そして、キリトさん達が見れなかった先を、一緒に見る事が出来る。ここから作って行こう、俺達とキリトさん達との絆を。それに……………」

一拍間を置き、ジークはリーファを見る。

リーファもジークの方を見る。

「俺はあの城の頂上に行きたい。頂上に立って、ALO全土を眺めたいんだ。そして、その時、隣にリーファに居て欲しい」

「え？」

「リーファ、俺と共にあの城の頂上まで、飛んでくれないか？」

「……………そうだね」

リーファは呆れた様に笑った。

「ジーク1人じゃ迷子になって、頂上になんて行けないしね」

「それは……………そうかもな」

「仕方ないから、付いてって上げるよ」

「ああ、よろしく頼む」

「こちらこそ」

互いに手を握り合って笑う。

その時、多くのプレイヤーたちが《アインクラッド》目掛けて飛んでくるのが見える。

その一団を見て、ジークとリーファは笑い合う。

「行こう、リーファ！」

「うん、ジーク！」

2人は手を繋いだまま、《アインクラッド》へと飛んだ。

カイ達と新しい絆を作る手始めに、新生《アインクラッド》に一番乗りして、出迎えてやろう。

そんな気持ちを持ち、2人の風妖精族は浮遊城の頂を目指し、夜の空を飛ぶ。

フアントム・バレット編 プロローグ

「山猫って知ってる?」

ガンゲイル・オンライン

通称GGOは、アメリカにサーバーを置く《ザスカー》が運営しているMMORPG。

そして、GGOの《SBCグロッケン》の中央広場にある店で、銀灰色の長髪の男性プレイヤー“シュピーゲル”が目の前の席に座っているパールブルーのショートカットの女性“シノン”にそう尋ねる。

「山猫って動物の?」

高く澄んだ可愛らしい声で、シュピーゲルに尋ねる。

「違う違う。最近、この辺で噂になってるプレイヤーだよ」

シュピーゲルは手を横に振って言う。

「物凄い狙撃の名人らしくて、その銃の腕を買われて雇われスナイパーとして有名な人なんだ」

シュピーゲルの言葉に、シノンは「ふくん」と言い、アイスコーヒーを飲む。

「なんで山猫なの?」

『山猫は眠らない』って映画知ってる?噂だと、そこから取ったんじゃないかって言われてるよ」

「山猫……ね。そんなに凄いの?」

「凄いも凄い、どんな距離からでも確実に狙った所を撃ち抜いて、しかも対人・対Mod、どちらも得意。狙撃じゃ負けなしって言われてるよ」

「へえー……それって私よりも?」

シノンもGGOではスナイパーをしており、シノン自身それなりに腕に覚えがあるつもりでいる。

なので、凄腕スナイパーの話聞いた時から、どうしてもそれを尋

ねたくなり、尋ねた。

「スナイパーならシノンが一流だよ……つて言いたいけど、噂を聞くとシノンより強いかもね」

「ふん」

シユピーゲルの話を聞きながら、シノンはチラリと店内の壁掛け時計を見る。

時刻は午後5時前を指していた。

そろそろ時間だと思いながら、視線を前に戻す。

「ごめん、そろそろ時間だから行くわ。またね、シユピーゲル」

「またね、シノン……今日もリヒターと？」

シノンは頬を赤くしながら小さく頷く。

「そつか。本当に2人は仲いいね。それじゃあ、僕も落ちるよ」

そう言い残し、シユピーゲルはログアウトする。

それを見送り、シノンは店を出る。

足早に待ち合わせ場所の中央広場に向かう。

人で溢れている広場を見渡し、目的の人物を見つける。

「リヒター」

リヒターと言うプレイヤーを見つけ、声を掛けて近寄る。

黒髪の長身の男性プレイヤーが振り向く。

「やあ、シノン」

男性プレイヤーは爽やかな笑顔を浮かべる。

シノンは顔を真っ赤にして俯く。

「どうしたんだ？」

「……なんでもないわよ」

そう言い、シノンは顔を上げる。

その表情には不機嫌さが滲み出していた。

それを見たりヒターは、首を傾げる。

「何かあったのか？」

「別に……。ただ……」

シノンはジト目になり、口を尖らせる。

「さつきシユピーゲルが山猫って呼ばれてるプレイヤーの名前を教え

てくれたんだけど……」

「ああ、あの山猫か。なんでもGGOでも最強クラスのスナイパーらしいな」

「それよ。別に、最強だとかそんな称号に興味ないけど、面と向かってあつちが強いって言われただけ」

「要するに、ムカついてるんだね」

「違うー！」

子供みたいな理由で、不機嫌になってると思われたくないので、シノンにはムキになってリヒターに叫ぶ。

そんなシノンに、リヒターは苦笑いして宥めるように言う。

「まあまあ落ち着いてくれ」

シノンを制するように、手を上げリヒターは口を開く。

「周りがどう思ってるかと、俺にとって最強のスナイパーはシノンだけだよ」

その言葉に、シノンは不覚にも胸をときめかせる。

しかし、すぐに冷静を取り戻し、ジト目で睨む。

「……本当？」

「勿論。俺は嘘はつかないよ」

微笑んで答える。

その笑顔を見て、シノンは溜息を吐く。

「本当にアンタって男は……」

「ん？どうかしたかい？」

「何でもないわよ！それより、早く行きましょう」

「ああ、今日もひと稼ぎと行こうか」

そう言い、2人は仲良さげにフィールドへと向かった。

それから数日後、シノンは最近、リヒターと共にお世話になってるスコードロンの狩りに参加していた。

対Modがメインのスコードロンを狩る対人スコードロンで、シノンは不規則に動く獲物を撃つ練習に良いからと、参加してる。

リヒターは付き添いで参加してる。

だが、今日リヒターは現実の都合で参加できないとのこと、不参加だ。

今日は、6日前に襲ったばかりのスコードロンを襲う作戦で、少々不安もあったがスコードロンリーダーのダインが問題ないと言うので、作戦は強行された。

そして、スコードロンは危うく壊滅し掛けた。

何故なら、対象スコードロンにはミニガンを持った来た大陸を根城としている集団戦最強の「ベヒモス」を護衛に雇っていた。

シノンは、「ミニガンはそろそろ残弾が怪しいはず。全員でアタックすれば派手な掃射は躊躇うかもしれない。そこを突いて排除するしかない」とダインに提案するも、ダインは光学兵器の威力を軽減す

る《対光弾防護フィールド》の効果が弱くなることを恐れ、弱気になる。

そんなダインに苛立ち、シノンは「ゲームの中でぐらい、銃口に向かって死んで見せる!」と叫び、3秒時間を稼いだら、ベヒモスを黙らせると言い、作戦を開始。

シノンは宣言通り、ベヒモスを倒し、スコードロンは7人中4人もやられたかなんとか勝利した。

その時だった。

生き残ったスコードロンメンバーの頭が撃ち抜かれた。

そして、遅れて銃声も響く。

「な、なにが!」

仲間が撃たれ、動揺したプレイヤーは声を上げようとした。

その瞬間、またしても頭を撃ち抜かれ、倒される。

「くっ!?!こっち!」

シノンは咄嗟に残り1人の仲間を引っ張り、遮蔽物に身を隠し、回復アンブルで失ったHPを回復させる。

(仲間が居た!?!私と同じスナイパー!?!でも、バレット・ライン弾道予測戦は出て無かった!?!という事!?!)

何が起きたのか、シノンは必死に考える。

その隣で、スコードロンメンバーは震えていた。

「……………山猫だ」

「え?」

「バレット・ライン弾道予測戦なしで、狙撃するスナイパー……………そんな芸当出来る奴なんて、山猫以外いねえ!」

そう叫び、男は遮蔽物から飛び出してしまう。

「馬鹿!今出たら、格好的だよ!」

シノンがそう叫んだ直後、その男も頭を撃ち抜かれ、倒れる。

「くっ!?!どうする……………!」

シノンは自分の左脚を見つめ言う。

シノンの左脚は、先程の戦闘で吹き飛び、回復にはまだ時間が掛かる。

(山猫がどっから撃ってるかは知らないけど、私の居場所はもうバレてるはず。ここから移動しないと)

そう思い、なんとか体を動かし、移動しようとした。

遮蔽物を取り越え、外套を羽織り、顔をフードで隠したプレイヤーが現れる。

そして、手にした銃剣でシノンを狙う。

(嘘っ!?!もうこんなに接近された!)

シノンは驚きながらも、愛銃の《ヘカートII》で防御する。

(こんな使い方してごめん!)

愛銃を防御に使ったことを心で謝り、プレイヤーを突き飛ばす。

《ヘカート》と言う重量級の狙撃銃を使うシノンは、《ヘカート》を扱う為にSTRをかなり上げている。

なので、一人一人を突き飛ばすぐらいは可能だ。

山猫を突き飛ばすと、シノンは腰溜めで《ヘカート》を構える。

シノンのスキル熟練度とステータス補正、そして《ヘカート》のスペックが合わされば、10メートルもない距離はシステムの必中距離となる。

(ここで死ね!)

そして、引き金を引こうとした。

「コイツがないと、撃てないんじゃないか?」

山猫はそう言って、ある物を見せる。

右手の人差し指と、中指の間に挟まれたソレは、《ヘカート》のボルトだった。

「嘘っ!?!」

シノンは、手元の《ヘカート》を見ると、そこにはボルトの抜かれた《ヘカート》があった。

ボルトが無ければ、銃は使えない。

山猫は、自身の銃《三八式歩兵銃》をシノンへと向ける。

この至近距離では、サブアームの《MP7》を抜くのも間に合わない。

「終わりだな」

山猫はそう言いながら、引き金に指を掛ける。

シノンは銃口から目を逸らさなかった。

そして、叫ぶ。

「あんたこそねー！」

その言葉と同時に、シノンは手にしたスタングレネードを起動する。

「なっ!？」

山猫が驚きの声を上げる。

スタングレネードは爆発し、強烈な音と光を放つ。

山猫は思わず、手で顔を覆う。

シノンはその隙を狙い、手にしたナイフで切りつける。

だが、それは簡単に避けられる。

山猫は《三八式歩兵銃》のストックで、シノンを殴りつけ、地面に倒す。

背中を踏みつけ、銃口をシノンの頭へと向ける。

「形勢逆転だな」

「……殺すなら、殺しなさい」

シノンは観念し、そう言う。

「……………一つ答えろ。なんで、あの状況で立ち向かってきた？」

「……………逃げて、怯えて死ぬぐらいなら、最後まで立ち向かって死にたかっただけよ。弱いまま死ぬなんて御免だから」

「……………たかがゲームで、そこまで熱くなるか」

山猫はフードの下で笑い、シノンから銃口を退け、背中から足を下ろす。

「気に入った。ここで殺すのは止めてやる」

シノンは体を起こし、山猫を見る。

「お前は、もっとふさわしい舞台上で殺してやる。次のB o B、楽しみにしてる」

山猫は《三八式歩兵銃》を担ぎ、去ろうとする。

「待ちなさいー！」

その背中に向けて、シノンが叫ぶ。

「……………貴方、名前は？」

「……………リンクス。ただの山猫さ」

山猫改めリンクスは、そう言い残し、去って行った。

第1話 喫茶店での会話

銀座にある高級な喫茶店。

そこにカイとキリトの2人は訪れていた。

だが、男2人でお茶しに来た訳ではない。

ある人物から呼び出されたからだ。

「お〜い、キリト君、カイ君。こっちこっち」

席に案内しようとしたウェイターに、待ち合わせと告げると、奥の窓際の席に居た男が無遠慮に大声で呼ぶ。

男の名は、菊岡誠二郎。

総務省総合通信基盤局高度通信網振興課第二別室もとい通信ネットワーク内仮想世界管理課、通称《仮想課》に所属する国家公務員だ。SAO事件後、目覚めたカイ達の元に現れ、色々と事情聴取をした男だ。

菊岡の前の席に座ると、ウェイターがお冷とおしぼり、メニュー表を持ってくる。

「ここは僕が持つから何でも好きに頼んでよ」

「もとからそのつもりだ」

「ごちそうになるよ」

そう言い、2人はメニュー表を見て、絶句した。

明らかに値段が高いからだ。

一番安いのも1200円もする。

「ええと……パルフエ・オ・シヨコラ……と、フランボワズのミルフィーユ……に、ヘーゼルナッツ・カフェ」

「えっと、レアチーズケーキのベリーソース掛けと、エスプレッソを」

「かしこまりました」

ウェイターは一礼して、去って行く。

「で、俺たちを呼んだ理由を話してもらおうか」

「またバーチャル犯罪か？」

「君たちは話が早くて助かる」

そう言うのと菊岡は、タブレット端末を取り出しカイ達に渡してく

る。

「いやあ、それがねえ。ここに来て、バーチャルスペース関連犯罪の件数がまた増え気味でねえ……」

「へえ。具体的には？」

「仮想財産の盗難や毀損が11月だけで100件以上、VRゲーム内でのトラブルが原因で起きた現実での傷害事件が12件、傷害致死が1件」

「ああ、そう言えばニュースでやってたな。ヘビープレイの為にドラック使って錯乱、模造の西洋剣を研いで、新宿駅前で振り回す。確か、2人亡くなったな」

「救われない話だけど、こう言っちゃなんだが全体でその程度の件数なら……」

「その通り。全国で起きてる傷害事件数から見れば、微々たる数だし、これを以ってVRMMOが社会不安を醸成しているなんて短絡的な結論は出やしない。だが……」

「VRMMOは現実世界での他人を傷つけることへの心理的障壁を下げる。それは認めるよ」

キリトがそう言った所で、ウェイターが注文された品を持ってきた。全て並べ終え、「以上でお揃いでしょうか」と尋ねられ、カイとキリトは頷く。

そして、ウェイターは伝票を置いて、静かに去って行った。

「ゲームでのPK行為……ある意味では、現実での殺人の予行練習みたいなものだ。毎日あんなこと繰り返してたら。現実でもって考える奴が居ても不思議じゃない」

そう言い、キリトは運ばれたミルクティーを一口食べる。

「しかしねえ、僕はPK行為が無駄にしか思えないんだ。殺し合うよりもみんな仲良くして楽しんだ方がいいじゃないか、そう思うだろう？」

「それには俺も大いに賛成だ」

菊岡の言葉に、カイはそう言う。

「だが、ALOをしてるなら分かるだろ？MMORPGはリソースの奪い合いだ。それこそ、フルダイブ技術が生まれる前からな」

「エンディングのないネットゲームにユーザーを向かわせる原動力モチベーションは、優越感を求める本能的な衝動。少なくとも俺はそう思う」

「そう言い、ヘーゼルナッツ・カフェを一口飲む」

「社会的構造である他者に憧れる劣等感と他者を超える優越感、人間の本质にして根幹とも言えるものだ。そのバランスが上手く取れているからこそ、こうやって暢気にデザートを食っているんだろ」

「なら、そういう君達はどうか？バランスは取れているかな？」

菊岡の含んだような言い方にカイとキリトはニヤリと余裕の笑みを浮かべて応える。

「ああ、これでも俺ら彼女居るからな」

「お陰様で、十分とバランスはとれてるさ」

「なるほど、その一点において僕は君達が死ぬほど羨ましい」

菊岡はそう言って、コーヒーを口に運ぶ。

「まあそんな心理的なものも含めてなんだけど、何らかのフィジカルな影響を現実のプレイヤーの肉体に及ぼす……ということは考えられないだろうか？」

「それは『ゲーム世界の影響でリアルの身体能力が増す』というような感じでいいのか？」

「うん、そんな感じ」

「そもそも、フルダイブ機器が神経系に及ぼす影響というのはまだ研究が始まった段階だからなあ……」

「それにフルダイブ中は寝たきりの状態だから基礎体力は確実に落ちるだろ？体の動かし方とか、技の型とかの精神的な面はともかく、流石に肉体的な面は無理じゃないか？」

「てか、そんなこと、俺らよりアンタの方が詳しいだろ？」

「大脳生理学の先生に話は聞いたが、チンパンカンパンでね。さて、随分と遠回りしてしまったが、本題に移るとしようか」

菊岡は、少し目つきを鋭くし手にしたタブレットをカイ達に見せる。

そこには2人の男の写真があった。

「右の男性は11月9日、左の男性は11月25日、その日に亡くなっている」

その言葉に、カイとキリトは息を呑んだ。

「死因は2人とも心不全。身体に外傷はなく、犯罪性は薄いとされ、事件性はないと判断された。だが、この2人にはある共通点があった」
「共通点？」

「VRMMOさ。この2人は、同じVRMMOをやっていたんだ。タイトルは《ガンゲイル・オンライン》、通称GGO。知ってるかい？」
「もちろん。日本で唯一プロの居るゲームだからな」

「でも、悲惨な話だが、そう言う変死はよくある話だろ？飯代節約の為に、ゲーム内で食って満腹感を得て、現実での食事時間をプレイ時間に充てる。ダイエット目的で、ゲーム内でしか食事しない。一人暮らしだと発作を起こしてそのままなんて、今じゃ普通だ」

「そう。VRゲーマーの変死は、今やよくある話だ。だが、この2人には、更にある共通点がある」

菊岡はそう言い、何かのスクリーンショットを見せる。

そこには、黒ローブを被り、モニターに何かを向けるプレイヤーの姿が映っていた。

「さっきの右側の写真の男性、GGOでは《ゼクシード》って名前で、GGOではトップに位置するプレイヤーでね。亡くなったと思われるこの日、《MMOストリーム》と言うネット放送局の番組に出演していたんだ」

「ああ。Mストの《今週の勝ち組さん》って奴か」

「そう言えば、放送中に出演者が回線落ちして、番組中断って話聞いたな」

「多分それだ。出演中の事だったから、ログで死亡推定時刻は秒単位で分かっている。で、ここからは未確認情報なんだがその同時刻、GGO内で妙な事が起きていたそうなんだ」

「妙な事？」

「《MMOストリーム》の番組は、GGO内でも放送されていてね。町

のとある酒場でも放送されてたんだ。で、問題の時刻に、この画像の人物が、モニターに向けて裁きを受けろ、死ねなどと叫んで銃を発砲したんだ。で、その発砲直後、《ゼクシード》氏は苦しみだし、そのまま落ちた」

あまりにも奇妙な話に、カイとキリトは固まる。

「……………偶然だろ？」

「ああ、そうだ。偶然と言ってしまえば、片付いてしまう。だが、もう一件あるとしたら？」

「まさか……………この男も？」

カイは、左側の男性の写真を思い浮かべる。

「ああ。GGO内では《薄塩たらこ》と言う名前でプレイしている。《薄塩たらこ》氏は、25日に自身が所属するスコードロン、所謂ギルドだね。その集会に参加してたらしい。壇上で仲間に檄を飛ばしていた所、《ゼクシード》氏を撃ったプレイヤーと思われるプレイヤーに撃たれた。街の中だったからダメージはなかったが、怒って襲撃者に詰め寄ろうとして、そのまま《ゼクシード》氏同様、苦しみ出して、落ちた」

「それで、そのプレイヤーの名前は分かるのか？」

「本名かどうかは不明だが、《シジュウ》または《デス・ガン》を名乗ったそうさ。恐らく、死の銃と書いて死銃という意味だろうね」

「それで、俺達に調べてきてほしいのか？そんなことしなくても、他に方法があるだろ。運営企業を当たって、ログを解析すれば、2人を攻撃したプレイヤーの情報も分かるし、登録情報がデタラメでも、IPアドレスからプロバイダーにアクセスすれば本名と住所も分かるだろ？」

「残念ながら、《ザスカ》はアメリカにサーバーを置いてるんだ。ゲーム内でのプレイヤーサポートはしっかりしてるかわりに、会社の所在地はおろか、電話番号もメールアドレスも未公開」

菊岡は両手を上げて、お手上げと言いたげに言う。

「とまあそんな理由で、真実のシッポを掴もうと思ったたら、ゲーム内で直接の接触を試みるしかないわけなんだよ」

菊岡の話から、完全にカイとキリトをGGOに行かせる気満々なのが分かった。

「要するに、GGOに行つて撃たれて来いつてか？お断りだ」

「そう言い、キリトは立ち去ろうと、席を立つ。」

「そ、そこをなんとか！」

そんなキリトに、菊岡は縋りつき、袖をつかむ。

「離せつてー！そもそも、俺もカイも、銃は専門外だ！ずっと剣で戦つてきたんだし！」

「《死銃》には強い拘りがあるらしくて、ある程度強くないと接触は難しい可能性があるんだ！僕には、VRMMOゲームのツテは君達ぐらしいか居ないんだ！だから、頼む！報酬として、これだけ払う！」
「そう言い、菊岡は指を三本立てる。」

「GGOのトッププレイヤーが一ヶ月に稼ぐ分と同額だ！どうだい？」

GGOにはゲーム内で稼いだ通貨を、リアルマネーに還元するシステムがあり、それで月々の接続料を払つたり、生計を立ててる人もいる。

プロになれば、月に2、30万稼ぐとされており、菊岡の本気が伺える。

「……どうしてそこまでしてこの一件に執着する？不自然だが、天文学的確率かもしれない偶然の一言で済むはずだぞ……」

報酬を払つてまで解決しようとする意図が奇妙に思え、カイは問いかけた。

「上が気にしているんだ……。こういった一件でのフルダイブ技術の後退を望んではない。規制推進派はこれを手札にして技術の後退を迫るかもしれないからね」

技術の後退と聞き、カイは反応する。

カイにとって、VRMMOは大切な人との再会を叶えてくれて、更には多くの大切な者たちと出会わせてくれた物。

それが、規制されそうになると聞いたら、あまりいい気分ではない。それに、GGOも《ザ・シード》によって生まれたVRゲーム。

ある意味、今回の一件はそれを世界中に無料でバラ撒いたカイ達が関与していると言っても過言じゃない。

「分かったよ、そこまで言うなら行くだけ行ってやる」

カイは、GGOに行くことを承諾した。

「本当かい!?!」

「そこまで言われて、断る気にはなれないしな。和人もいいだろ?」

「えく………まあ、伊緒が居ればなんとかなるか。分かった、俺も行くよ」

「ありがとう! 万が一のことを考えて、最大限の安全措置は取る。キリト君とカイ君には、こちらが用意する部屋からダイブしてもらって、モニターしているアミューズファイアの出力になんらかの異常があった場合はすぐに切断する。銃撃されるとは言わない、君たちの眼から見た印象で判断してくればそれでいい」

菊岡は、2人の手を取って、大喜びをする。

「後これを。何かの手掛かりになるかもしれない。最初の銃撃事件にたまたま居合わせたプレイヤーが録っていた音声ログ。データを圧縮して持ってきた。聞いてみてくれ」

菊岡に言われ、2人はイヤホンを耳につけ、その音声を聞く。

最初は周囲の喧騒が聞こえたが、それも聞こえなくなり、1つの声が響いてきた。

『これが本当の力、強さだ! 愚か者共よ、恐怖と共に俺の名を刻め!』

俺とこの銃の名は『死銃』、『デス・ガン』だ!』

それを聞いた瞬間、カイとキリトは録音であるにも関わらず、そこから強烈かつ純粋な殺意を感じ取った。

第2話 花言葉

12月7日 日曜日

ミトはいつもの公園に来ていた。

ベンチに座り、元気に遊んでいる子供たちを眺め、時折微笑む。すると、走っていた女の子が、目の前で転んだ。

ミトはベンチから立ち上がり、その女の子に近付く。

「大丈夫？」

「うゝ……膝痛い……」

涙目になりながら女の子は言った。

女の子の膝を見ると擦り傷ができていた。

ミトはポケットからハンカチを取り出し、ペットボトルの水で濡らして女の子の膝に当てる。

「いたっ！」

「ごめんね、ちよつと我慢してくれるかな？」

「……………うん」

「強い子ね。強い子は、お姉さん好きだよ」

そう言い、ミトは最後に絆創膏を貼る。

「よし。これで、もう痛くない筈よ」

「本当だ！ありがとう、お姉ちゃん！」

「どういたしまして」

笑顔を見せる女の子を見て、ミトも微笑む。

その後、女の子の母親と思われる人が来て、事情を聴き、ミトにお礼を言った。

ミトは「大したことじゃないので」と言っ、帰って行く母娘を見送った。

「優しいな、深澄は」

そんなミトの後ろから、カイが声を掛けた。

「伊緒、遅かったね」

「一応時間通りなんだけどな」

「私より来るのが遅かったんだから、遅いの」

そう言って、ミトはカイと手を繋いだ。

「じゃ、行く」

「ああ」

そして2人は、公園を後にした。

そのまま街を歩きながら、カイはミトに話しかける。

「そう言えば、ずっと公園で遊ぶ子供見てたけど、何かあったのか？」

「え？あ……いや、その……」

カイの言葉を聞いて、ミトは少し顔を赤くし、下を向いてしまった。

「どうかしたか？」

「ううん。何でも無い。ただ……」

ミトは顔を上げ、カイの方を見る。

「……私と伊緒の子供なら、どんな子かなって考えてて……」

恥ずかしそうな表情を浮かべるミトを見て、カイは嬉しそうに笑う。

「そっか……なら、その時が来るまで深澄に愛想尽かされない様に頑張らないとな」

「来ないよ、そんな日なんて」

「そっか。それは嬉しいな」

互いに笑い合い、2人の手は、しっかりと握られていた。

その後、2人はゲーセンに向かい、存分に遊ぶと、夕方になっていった。

夕暮れの中、2人は帰り道を歩いていた。

「うくん……楽しかった！」

「そうだな。次は和人と明日奈も誘って、Wデートでもするか」

「それも楽しそうね」

2人共満足げに笑っていた。

すると、カイは突然立ち止まった。

「どうしたの？」

ミトはカイの視線の先を見る。

そこにあったのは、花屋だった。

「花屋がどうかした？」

「ああ、ちょっと思い出してさ。SAOでミトが好きな花の事」
カイトにそう言われ、ミトは思い出す。

あの時、ミトが好きだと言った花は《サネカズラ》と《アンブレカム》の2つ。

正確には《サネカズラ》は好きだった花で、《アンブレカム》が現在好きな花だ。

「あの時は、なんかはぐらかされたけど、結局なんで好きだったんだ？」

「そうね……まあ、もう話してもいいか。花言葉は分かる？」
「どの花に、どんな花言葉があるかまでは分からないけど、まあ知っている」

「《サネカズラ》はね、《再会》《また逢いましょう》って花言葉なの」
ミトは少しだけ悲しそうに笑う。

「伊緒と会えなくなつて、悲しくて泣いてた時にお母さんが教えてくれたの。《サネカズラ》は再会の花言葉がある花。この花を大事に育てて、その子とまた逢える日を願いなさいって」

「……………そうだったんだな」

「その言葉をずっと信じ続けて、毎年植えてた。そしたら、本当に伊緒と再会出来た。私にとっては、願いをかなえてくれた大切な花なんだ」

ミトは嬉しそうに微笑み、カイトの手を握る。

「で、今はそれ以上に好きなのが《アンブレカム》。この花言葉はね……………《いつまでも貴方と一緒に》っていろいろの」

「へえ……………」

カイトもミトの手を握り返し、微笑む。

「俺も同じ気持ちだよ。深澄と、これからも一緒に居たいと思ってる」
「ふふつ……………ありがと」

カイトの言葉を聞き、ミトは嬉しそうな笑顔を見せた。

そのまま2人は他愛のない話をしながら、歩き出す。

カイトは、ミトを家まで送りながらあることを考えていた。

(GGOに行く件、なんて切り出すか……………)

「何が言いたいのか？」

「え？」

ミトの隣を歩きながら、考えているとミトがそう言ってきた。

カイは、「ミトにはお見通しか」と苦笑し、正直に話すことにした。「実は、近いうちにALLOの《カイ》を別のゲームにコンバートさせるんだ」

「……………え？……………え、ええええええつ!？」

ミトが驚きのあまりに叫んだ。

「ど、どうして…？ まさかALLO…辞めるの…？」

「いや、違うって！菊岡の頼みで他のVRMMOのリサーチをするだけだ！すぐにまた再コンバートする！」

「そ、そっか……………でも、リサーチならもう何回も新規アカウンントしてんじゃない。なのにどうしてコンバートするの？」

「念には念をつて所かな。まあ、キリトも一緒だし大丈夫だからさ」

「キリトも？……………怪しい」

ミトは、《カイ》のデータをコンバートさせることと、キリトも同行すると言うことに不信を感じ、ジトーツとした目つきでカイを見た。

「な、なんだよ、その目は……………」

「怪し過ぎる。いくらなんでも、念を入れ過ぎよ。カイだけじゃなく、キリトまでも一緒だなんて、そのゲーム、危険なの？」

「いや、そう言うわけじゃないんだけど……………」

「危険なんですよ？だから、カイをコンバートさせて、キリトも一緒にコンバートして付いて行く。そうでしょ？」

「うーん……………」

「正直に言いなさい」

「……………わかったよ」

ミトの圧力に押されたカイは、GGOのことをミトに打ち明けた。

GGOのプレイヤー2人が不審死を遂げた事。

《死銃》と言う存在が2人を撃った事。

その直後に、2人は苦しんで落ちた事。

落ちた時間と、死亡推定時刻が一致してる事。

原因を探るために、キリトと共に《死銃》に接触する事。
包み隠さず、ミトに話した。

話を聞いたミトは、しばらく考え込んだ後、口を開いた。

「……私も、一緒に行くわ」

「え!?!行くって本気か!?!」

「当たり前でしょう!! そんな危ない所に、行かせるわけないでしょう!?!」

「いや、でも、もしかしたら危険な事かもしれないんだ、それに深澄を巻き込むわけには……」

「それを決めるのは私よ。それに、もう離れたくないの……」

ミトは、カイの手を握った。

「だからお願い、連れて行って……」

弱々しくいうミトに、カイは断れなかった。

「分かったよ……菊岡に連絡して、深澄も同行していいか聞いてみる。

まあ、深澄の腕なら、菊岡も喜んでくれるだろうさ」

「ありがとう、伊緒……大好きだよ……」

ミトはカイを抱き締めると、カイもミトを抱きしめ返した。

第3話 アパートの隣人

とある学校から、1人の女生徒が出て来る。

生徒の名は、朝田詩乃。

GGOでは、《シノン》と言う名前でプレイをしている。

彼女の現実は高校生だ。

だが、シノンは好きで高校生をしているわけではない。

シノンの保護者は、祖父母だ。

父親は幼いころに事故で亡くなり、その影響で母親は心を病んでしまい、シノンを娘と認識できず歳の離れた妹の様に思ってしまった。る。

その為、祖父母が保護者代わりとなり、その祖父母の願いもあつて高校生になった。

シノンとしては、高校に進学せず就職するか、専門学校で就職のための訓練をするか望んだが、昔気質の祖父はそれを許さず、祖母もいい学校を卒業して、ちゃんとした家に嫁いで欲しい、そうでないと死んだ父親に申し訳が立たないと泣かれ、やむなく進学することにした。

「早く卒業したい……………」

冷たい乾いた風が頬を撫で、マフラーを巻きなおしつつシノンはそう呟く。

そのまま現在1人暮らしをしているアパート近くの商店街へと向かい、本屋を覗き、文具店で消しゴムとノートを買い、残金から夕食の献立を考えていると、不意に細い路地から声を掛けられた。

「朝田あ」

そこには、シノンと同じ制服を着た女子生徒が三人居た。

その三人の顔を見るなり、シノンはうんざりとした表情をする。

「こっち来いよ」

「……………何？」

横柄な仕草で、シノンを路地裏に来るように言う女子生徒に、シノンは従わずその場で用件を聞こうとする。

「いいからこつち来いよ」

すると、そのまま手首を掴まれ、路地裏に引きずり込まれる。

そのまま、商店街から見通せない路地の奥へと連れ込まれ、シノンは囲まれる。

「悪いんだけどさ、金貸してくんない？ちよつと遊び過ぎて、帰りの電車賃が無くなっちゃってさあ。明日返すから、こんだけ貸して」

そう言い、リーダー格の女子生徒、遠藤は指を1本立てる。

1000円でも10000円でもない、1万円だ。

明らかにおかしい金額に、シノンは溜息を吐きたくなった。

「そんなに持つてる訳ないじゃない」

「なら下ろしてきて」

遠藤とその仲間たちは、シノンの友達ではない。

一時期、シノンは彼女たちを友達と思ったこともあるが、実際はシノンが1人暮らしたと当たりを付けて接触してきただけだった。

最初こそは友達みたいに接してきてくれたが、次第に本性を現し始め、友達だろと迫り、家の合鍵を要求した。

シノンはおかしいと思いつつも、遠藤たちの言う通りにしていた。

そして、5月の末日。

夕方、自宅に帰宅したシノンが感じた、自分の部屋に誰かが居る気配だった。

耳を澄ませると、遠藤たちの声に交じって、数人の知らない男の聲が聞こえた。

そこで、シノンは自分が良い様に利用されていたことに気づき、警察を呼んだ。

「知人だ」と言い張る遠藤と、「知らない人だ」と言い張るシノン。

話は平行線を辿ったが、警察は家主のシノンの言葉を受け入れ、遠藤たちは警察に連れて行かれた。

無論、合鍵も返却されたし、出費と思いつつも合鍵も付け替えた。

そして、すぐに遠藤たちはシノンに対して報復を行った。

どうしてシノンが1人暮らしをしているのかを調べ、シノンが暮ら

していた田舎で5年前に起きた事件を調べ上げ、全校に暴露した。そして、シノンは1人に戻った。

だが、シノンはそれでもいいと思った。友達を欲しがるとような弱い自分はいらない。

自分を救えるのは自分だけ。

1人でも強くないといけない。

そう思い、自分の周りの人間を敵だと思い、生きることにした。

「嫌よ。貴女達にお金を貸す気はない」

シノンは、ハッキリとそう告げた。

すると、遠藤は手をシノンへと向ける。

親指と人差し指を伸ばし、その形は銃に似ている。

それを向けられた瞬間、シノンの体は震え、両脚から力が失われ、動機が早くなり、耳鳴りが鳴り始める。

「ばぁん！」

遠藤が、そう叫んだ。

それにシノンは、一気に力が抜け、その場に座り込んでしまう。

吐き気がこみ上げて、思わず口を手で押さえる。

「気分悪いみたいだし、今持つてる分だけで勘弁してやるよ」

遠藤は笑いながら、シノンの鞆に手を伸ばした。

「ガキの分際で、恐喝なんてするもんじゃないぞ」

その時、1人の男の声が路地裏に響く。

遠藤たちは驚き、声が出した方を見る。

そこには、買い物袋片手にスマホで、遠藤たちを撮影している男が立っていた。

「あ……尾田さん……」

シノンは顔面蒼白になりながらも、その男性を見て、その男性の名前を呟く。

「お前らの一部始終、このスマホに録画しといた。学校側にチクられなくなかったら、さっさと失せな。二度も、警察の厄介にはなりたくないだろ？」

尾田がそう言うと、遠藤たちは舌打ちをしてシノンには何もせずそ

の場を去った。

それを見送り、尾田はシノンに近寄る。

「大丈夫か、朝田」

「はい……大丈夫です……ありがとうございます………」

男性の名は、尾田健之介。

シノンが住んでるアパートの隣に住んでる男性だ。

「無理すんな。顔色悪いぞ」

そう言い、尾田は買い物袋からコーラを取り出す。

「俺の持論だが、気分が悪い時は、冷たい炭酸飲むのが良いぞ？それとも、水の方が良かったか？」

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

シノンはもう一度お礼を言い、差し出されたコーラを受け取る。

その場で一口飲むと、気持ち悪かった感じが一気に消え、一息付けた。

「あの、本当にありがとうございます。これ、コーラの代金」

シノンは財布から、コーラー代を払おうとするがそれを尾田は制する。

「良いよ。俺が勝手にやったことだ。それに、ガキは大人の好意に甘えるもんだぞ」

「大人って……尾田さんまだ19歳じゃないですか」

「俺からすれば、高校生なんてガキも同じだ」

尾田の言葉に、シノンは思わず笑みを浮かべる。

そんなシノンの様子を見て、尾田は満足げに笑う。

「朝田さん……大丈夫だった？」

すると、シノンと尾田の2人に近寄って声を掛ける人が居た。

「新川君」

男の名は、新川恭二。

シノンの元クラスメイトで、シノンをGGOに誘った張本人で、《シュピーゲル》の名前でプレイをしている。

「知り合いか？」

「はい、友達です………」

「……そうか。なら、後はお友達に任せるとするよ」

尾田はそう言い、歩き出す。

「あの、尾田さん！本当にありがとうございます！」

シノンはまだ一度尾田にお礼を言い、尾田は振り返らず、片手を上げて応える。

「えっと、朝田さん。あの人は？」

新川が、シノンにそう尋ねる。

「尾田さんだよ。私の部屋の隣に住んでる人」

シノンは笑みを浮かべてそう言う。

シノンにとって、周りの人物は敵かもしれない。

それでも、目の前にいる新川と、隣人の尾田、そしてGGGでの相棒《リヒター》。

この3人だけは、信頼している。

第4話 GGOへ

菊岡から依頼を受けた日から1週間後。

カイとミト、キリトの3人は千代田区お茶の水にある都立病院に来ている。

この病院はカイやミト、キリトがりハビリするのに何度かお世話になった病院で、菊岡がどうせなら顔見知りの居る所が良いだろとの配慮でここになった。

病院の玄関口で合流し、3人は入院病棟3階の指定された病室に行く。

「おつす！ 桐ヶ谷君に神里君、 兎沢さん！ 久しぶり！」

3人を出迎えたのはナースの安岐だった。

「ど、どうも…」

「お久さしぶりです」

「ご無沙汰してます」

「うんうん！ 元気そうだなにより！」

すると安岐はキリトの身体をペタペタと触り始めた。

「おー、けっこう肉ついたねえ。でもまだまだ足りないよ、ちゃんと食べてる？」

「食べてますよ！ それより、どうして安岐さんがここに？」

話によるとリハビリの時、安岐が3人の担当をしていたので、是非モニタリングをしてほしいからとのことだった。

「そういえば伝言、預かってるよ」

安岐が茶封筒を渡してくる。

そこには菊岡さんからのメッセージがあった

『報告書はメールでいつものアドレスに頼む。諸経費は任務終了後、報酬と併せて支払うので請求すること。それと、GGO内に協力者を手配しておいた。彼との接触を忘れない様に。それでは、健闘を祈るよ追記……美人看護婦と個室で一緒だからといって若い衝動を暴走させないように』

「……あのやろう……」

最後の一文にキリトは怒りながらも、メッセージを握りつぶさずに、大人しく胸ポケットにしまった。

「それじゃあ、早速ネットに繋ごうか！」

病室内には3台のジェルベッドが並べられており、1つはカーテンで仕切られていた。

「電極貼るから、3人とも上脱いでね。あ、兎沢さんは、こっちのカーテンの仕切りがある方ね」

安岐はテキパキと準備を進め、数分も掛からずに終わった。

「それじゃあ、行ってきます」

「4，5時間は潜りっぱなしだと思っんで」

「私たちの身体、お願いします」

「はい、いつてらっしゃ。3人の体は私がしっかり見張っておくから」

安岐の言葉を聞き、3人は目を閉じる。

そして

「「リンク・スタート！」」

同時に、魔法のキーワードを唱えた。

カイが瞼を開くとそこにはメタリックな高層建築群が空高くへ向けて聳え立っていた。

空はというと、薄く赤みを帯びた黄色をしている。

GGOの世界は最終戦争後という設定で、それを元にこういう空の色なのだろうと考える。

カイが降り立ったのは《SBCグロツケン》、GGOの中央都市だ。

世界樹の上に新設されたイグドラシル・シティやインクラッドの大規模都市のようなファンタジーとは異なり、その異様な光景に目を奪われる。

「凄いな……」

「ええ、本当にね」

カイの隣から声が聞こえ、カイはそつちを見る。

そこには、ミトと思しき人が居た。

ただ外見は殆ど違っており、美しい金髪のロングヘアーに空色の瞳、身長も150cm前後と言った感じだった。

「ミト、なのか？」

「当たり前でしょ」

「そうか。いつもと違う姿だから、分からなかったよ」

「それを言うなら、カイもよ。自分の姿見たら」

ミトに言われ、カイは近くのミラーガラスで姿を確認する。

身長が180は優に超えており、黒髪のロングヘアーと眉間に寄った皺が特徴的な容姿だった。

「兵士って言うよりは、お堅い大学教授って感じだな」

その姿をカイはそう評価した。

「でも、割とその姿のカイも好みかも」

ミトはカイの隣で、意地の悪そうな笑みを浮かべて笑う。

「誉め言葉として受け取っておくよ。それで、キリトは？」

「な、なんじゃこりや……」

その言葉に、カイとミトは隣を見る。

そこには、ミラーガラスで自身の姿を見て絶望しているプレイヤーが居た。

「キリトか？」

「え？」

名前を呼ぶと、そのプレイヤーはカイを見る。

スプリガン・キリトのAvatarよりも低い身長で、肌は白く、唇は紅い。

髪は肩甲骨辺りまで伸びてる艶やかな黒髪、無垢な黒い瞳をした男

の娘がいた。

「マジか……」

「あら、凄くかわいい顔ね」

「まさか……カイとミトか……」

キリトはミトに関してはともかく、カイがかなりいい感じの男性アバターなのにシヨックを隠し切れずにいた。

「まあ、そのなんだ……ドンマイ」

「慰めなんているか……」

「落ち込んでるところ悪いけど、協力者と合流しましょう」

「そうだな。確か、《旧居住区》エリアの《D-10》だ」

とにかく、協力者に合流することにし、その場を動こうとするとすると、何かを食っていた男が急に走り出し、カイ達に近づく。

「おおつ、アンタ達、運がいいね！そのアバター、F1300番系、そしてM1500番系でしょ！めくくったに出ないんだよ、そのタイプ。どう、今ならまだ始めたばっかだろうしさあ、アカウントごと売らない？2メガクレジット出すよ！」

男の子の言葉に、キリトは、もしかしたら自分が女性になってるのではないかと思ひ、慌てて胸部を触りだした。

だが、すぐに体つきは男だと気付いて、安心する。

「えっと、悪いんだけど俺、男でさ」

キリトは、やや低い声で女の子として通用するトーンの声で、訂正する。

「ってことは、それ…M9000番系かい!?す、すごい、それなら4…いや、5メガクレジットで買うよ！」

キリトのアバターが珍しい物らしく、男は興奮気味に値段を上げた。

「悪いんだが、実は俺達、他のゲームからコンバートなんで、ちよつと売るのはムリなんだ」

今度はカイが間に入って、断りを入れる、

「うーん、そうか……。ま、気が変わったら連絡してくれ」

そう言っただけで透明なカード型のアイテムを押しつけてさっさと行った。

キャラ名、性別、所属ギルド名などが書かれたいわゆる名刺みたいなものだった。

隣ではまだキリトが落ち込んでいた。

「元氣出させて、キリト。珍しいタイプのアバターなら逆に目立つ」

「そうね。それに、大会で実力を示せば《死銃》の目に留まる可能性もある。接触が目的なら、むしろ最高の状態よ」

「……そうだな。切り替えて行くか」

思考を切り替え、キリトは復活する。

「じゃあ、早速協力者に会いに行こう」

協力者の居る《旧居住区》エリアの《D-10》ポイントへ向かって、3人は動き出す。

そして、数分後。

「道に迷ったな……」

「ここ、どこだ？」

「多分、《旧居住区》に向かってはいると思うけど……」

GGOの世界、《SBCグロッケン》はかなり複雑な構造をしており、3人は迷っていた。

メニューからマップを出すも、立体マップの現在地と、目の前の構造物を照合するのも容易ではない。

「取り敢えず、誰かに聞きましよう。えつと……あの人でいいか。すみませ〜ん！」

ミトは、眼前に居る人影の中からNPCタグのないプレイヤーに小走りで駆け寄って、声を掛ける。

ミトが声を掛けたのは、ペールブルーのショートヘアーの女性、シンノンだった。

「もしかして、このゲーム初めて？」

シンノンは、ミトが女性と言うこともあり、愛想よくそう尋ねる。

「ええ。それで、ちよつと道に迷ったから道を聞きたいのよ」

「それぐらいなら、全然いいわよ。何処に行きたいの？」

「えつと……あ、その前にツレが居るのよ。呼んでもいい？」

「ええ、構わないわ」

シノンから了承を得て、ミトはカイ達に手を振る。

それを見て、こつちに来いと言う事なのだろうとカイとキリトは近寄る。

「この人が道案内してくれるって」

「そうか、俺はカイだ。道案内、助かるよ」

「俺はキリト」

「私はミトよ」

「シノンよ。それで、何処に行きたいの？」

シノンは、ミトのツレに男が居ることに少し警戒の色を見せながらも、行き先を尋ねる。

「《旧居住区》エリアの《D-10》ポイントなんだけど、分かる？」

「《旧居住区》ね、そこなら分かるわ。案内するから、ついてきて」

「助かるわ。あ、それとついでになんだけど、《総督府》の場所も教えて貰えるかしら？」

「《総督府》？そんな所に何の用？」

「俺達、《B O B》に出場するつもりなんだ。《総督府》でエントリーしないといけないって聞いたから、行きたいんだ」

「《B O B》に？」

カイの口から、《B O B》に出ると聞き、シノンは目をパチクリと丸くする。

「うくん。出ちやダメって事は無いけど、流石に今日始めたばかりの初心者だと、ステータス的に無理があると思うわよ」

「それなら大丈夫だ。俺達、コンバートなんだよ」

今度はキリトがそう言い、シノンは納得したような表情をする。

「そうなんだ……どうしてこんなオイル臭くて埃っぽいゲームに来たのか聞いても良い？」

「いままでファンタジー系のゲームをやってたんだけど、偶にはこういうサイバー的なものもやってみたいと思ってき……」

「後は、銃での戦闘にも興味があったからかな」

「私は、2人の付き添いよ。目を離すと、無茶しかねないからね」

三者三様の理由を聞き、シノンは笑う。

「そっか。それでいきなり、《B O B》に出ようとするなんて根性あるわね。それなら、《総督府》にも案内するわ。私も、エントリーするからね。あ、でもそうになると、装備を整えないと」

「それなら大丈夫だ。実は、知り合いがこのゲームやっけていて、装備を一式譲って貰うことになってるんだ」

「なるほど。それじゃあ、《旧居住区》に向かいましょうか」

シノンを先頭に歩き、ついでにシノンからGGOに関する事を聞きながら、4人は《旧居住区》エリアに着く。

「私はこの辺で露店見てるから、終わったら声かけて頂戴」

「ええ、分かったわ。案内ありがとう」

「そんなに時間は掛からないと思うから」

「じゃあ、また後で」

シノンを見送り、3人は《旧居住区》エリアの《D-10》ポイントへ向かう。

「えっと、この部屋だな」

目的の部屋に着くと、カイが扉をノックする。

『……誰だ?』

部屋の中から、声が聞こえる。

「菊岡の使いだ」

『……入れ』

その言葉と同時に、扉のロックが解除され、3人は中に入る。

「キリトとカイ、それにミトだな」

「ああ。アンタが《ムーン》か?」

「そうだ。早速だが、装備を受け取ってくれ」

そう言い、協力者ことムーンは、3つのアタッシュケースを取り出す。

「基本的な防具類はここに入ってる。一応、お前らのイメージカラーで用意しておいた」

3人がアタッシュケースの中を確認すると、カイは赤、キリトは黒、ミトは紫と、それぞれのイメージカラーの防具一式が入ってた。

「次に武器だが、キリト。お前にはこれが良いだろ」

「そう言い、ムーンはキリトに筒状の金属棒を渡す。

「これは？」

「《フォトンソード》だ。光剣こうけんとも呼ばれているが、呼び方はどうでもいいだろう」

「剣!?!この世界には剣もあるのか!?!なら、あともう1本頼めるか!」

キリトは、剣があることに驚きと喜びを隠せず、フォトンソードをもう1本要求する。

「そう言うと思って、2本用意している」

「そう言い、ムーンは2本目のフォトンソードをキリトに渡す。

「それと、サブにこの銃を使え。《FN・ファイブセブン》だ。命中精度と貫通力にアドバンテージがある。牽制には持って来いだろう」

キリトへの装備を渡し終え、ムーンは次にミトを見る。

「ミト、お前にはこれだ」

「そう言っつて、ミトにキリトの持つフォトンソードよりも長い、金属棒を渡す。

「なにこれ？」

「《フォトンサイズ》。簡単に言えば、ビーム鎌だ」

「へ〜……私向きの武器ね」

ミトは、試しにフォトンサイズを起動する。

「ブオンツ!」と言う音と共に、紫色の光刃が先端から現れ、鎌の形にする。

「いいわね。気に入ったわ」

「サブは、これだな。《ベレッタM92F》、アンタのステータスなら片手でも撃てるだろう」

「マッドシルバーのベレッタを受け取り、ミトは興味深そうに色々な角度から見る。

「カイ、アンタにはこれだ」

ムーンは、カイに布に包まれた何かを渡す。

カイはその布を取り、その中身に驚いた。

「こ、これって刀!?!」

現れたのが刀だと言うことに、カイは驚き、キリトとミトも、銃の

世界であからさまな剣の存在に驚く。

「正確にはサーベルだ。GGOにあるスキル《ナイフ作製》の派生スキル《銃剣作製》、そこからさらに派生したスキル《サーベル作製》で作れるGGO唯一の剣だ。もつとも、銃の世界のGGOではキリトのフォトンソード、ミトのフォトンサイズ同様、あまり意味のない武器だ。だが、剣士であるお前たちなら、それも関係ないだろう」

ムーンからの説明を聞き、カイはサーベルを振るう。

「かなり軽い……耐久値や攻撃力が不安だな……」

「耐久値に関しては心配するな。そのサーベルの素材には、このゲームで最高級の金属を使用している。攻撃力に関しては、自身の腕で補えとしか言えんがな」

「頼もしい言葉だな」

カイはそう言つて、サーベルを有り難く、アイテムウインドウに仕舞う。

「サブには、これでいいだろう。《コルト・パイソン》、非常に強力な銃だ。軍刀での足りない火力を補うには、丁度いいだろう」

ムーンは、最後に回復キットや弾丸、マガジンなど必要なアイテムを3人に渡す。

「俺たちに来る協力はここまでだ。後の事は、お前たちに任せる」

そう言い、ムーンは部屋を出て行くとする。

「お前たちを危険な役目に合わせているのは承知だが、あまり無茶はするな。まずいと思えば、逃げて構わないからな」

ムーンは最後にそう言い残し、ログアウトをした。

それを見送り、カイ達もシノンの元へと戻った。

第5話 《U n t o u c h a b l e ! 》

装備の調達を終えて、シノンの所に戻ると、シノンはカイとキリト、ミトに気づき、近寄って来る。

「終わった?」

「ええ、ばっちりよ」

ミトが手に持ったアタツシユケースをシノンに見せるように掲げる。

「そう。ねえ、折角だし少しGGOを見て回らない?まだエントリーにまで時間はあるし」

シノンからの誘いに、カイ達は折角だからとシノンにGGO内を案内してもらおうことにした。

四人は大通りに出ると、まず武器屋に向かう。

店内には様々な種類の銃や弾薬、それにアタッチメントなどが並んでいた。

「へえ、こんなにあるんだな……」

感心したように呟くカイの隣で、ミトも興味深げに商品を見つめている。

「こうしてみると、銃で戦うつてのもいいかもね。バイト終わってからも、GGO続けようかしら」

「いいんじゃないか。俺も少し気に入りそうだし」

カイの言葉を聞いて、ミトは嬉しそうに笑う。

「それなら、一から自分で装備とか揃えたいわよね。その時は、手伝ってよね」

「勿論、喜んで」

楽しそうに笑い合う、カイとミトに、シノンはキリトに声を掛ける。

「ねえ、もしかしてただけどあの2人って……」

「ああ、ご察しの通り、付き合ってるよ」

キリトの言葉を聞いたシノンは、納得するように微笑む。

「そっか……お似合いね」

そんなことを話しながら、シノンがあれこれと説明をする。

その時、キリトがある物に目を付ける。

「シノン、アレは？」

「あー、あれね。ちよつとしたギャンブルゲームよ。手前のゲートから入って、奥のNPCガンマンの銃撃を躲しながらどこまで近づけるか、ってゲームプレイ料金が500クレジットで、10mで1000、15mで2000クレジットの賞金。ガンマンに触ればいまままでプレイヤーがすぎ込んだお金が全額バック」

「その額は…？」

「今は、30万ちよいみたい。けどこのギャンブル、クリア出来ないし」

「なんでだ？」

不思議そうな顔をするキリトに、シノンは肩をすくめる。

「見ればわかるわ。ほら、今1人挑戦するわ」

シノンの言葉通り、3人連れの男の内の1人がゲート前に立ち、10人程のギャラリーが集まってきた。

カウントが行われ、数字が0になった瞬間に男はダツシユした。

しかし制動掛けて止まったかと思うと、妙な格好を取った。

すると男がポーズを取る前に頭や手、足があつた場所にガンマンが放った弾丸が通った。

「今のは!？」

「まるで弾が飛んでくる場所が分かつてる様な感じだった……」

「偶然、じゃないわよね？」

「ええ。弾を躲せたのは《弾道予測線》バレット・ラインのお陰よ」

「《弾道予測線》?」

聞きなれない単語に、3人は尋ね返す。

「敵から銃撃前の狙点を受けると敵側の視野に表示される《守備的システム・アシスト》。それで、自分に向かってくる弾丸を躲したりするの」

シノンの説明を聞き、3人は納得する。

その間に、男が7m地点に辿り着き、もう少しでプレイ料金の倍額を手に入れられる……と言う所で、ガンマンの動きが変化した。

銃撃に時差をつけるようになり、男はジャンプで回避したがバランスを崩したあと、立ち上がったところで撃たれて失敗となった。

その際に、ガンマンが嘲るかのように勝利の言葉を喚いた。

「こういうこと。左右に大きく動けないから、ほとんど一直線に突っ込まないといけない。おまけに、8mを超えるとインチキレベルの早撃ちに、リボルバーの癖にムチャクチャな高速リロードで3点バースト射撃。予測線が見える頃には、もう手遅れ。だから、クリアできないの」

「ふーん……なるほどね」

それを聞いたキリトは何かを考え、そして、そのゲームに挑戦した。「あーちよつとー」

シノンは無謀だと、キリトを止めようとするが、シノンの声は届かず、キリトはゲームを始めた。

キリトの容姿も相俟って、先程よりも多くのギャラリーが集まる。キリトはそれを無視し、金属バーが上がると同時にスタートをする。

キリトは、先程のプレイヤーと違い、動きながら最初の弾丸を躲す。その動きに、ギャラリーが驚きの声を出す。

8mを超え、NPCガンマンがインチキ早撃ちを繰り返すも、キリトはこれも紙一重で躲し、進み続ける。

残り5mと言う所で、キリトはスライディングをする。

すると、さつきまでキリトの上半身があった所を、6発の弾丸が通る。

そして、とうとうガンマンに触れる所まで来た瞬間、ガンマンの銃からレーザーが放たれた。

だが、直前でキリトは前ダツシュから、跳躍に変え、レーザーは当たらずに済んだ。

そして、ガンマンの前に降り立つと、そのまま革ベストにポンッと触れる。

「オーマイ、ガ————ッ！」

絶叫と共にガンマンは頭を抱え地面に膝をつく。

同時に狂ったようなファンファーレが響く。

そして、ガンマンの背後のレンガが崩れ金貨がざらざらと流れてくる。

ゲームが終わってゲートから出る時には、いつの間にかギャラリがさっきの倍以上増えており、皆が皆、口々に驚きの言葉や何者かなどと喋っている。

そんな中、カイとミトとシノンが傍によってきた。

「流石だな、キリト」

「相変わらず、出鱈目なことするわね」

「カイやミトにだって出来るだろ？」

3人が和やかに話している中、シノンはキリトに尋ねた。

「…あなたどんな反射神経してるの…？ 最後のレーザー、あんな距離だと、回避なんて不可能に近いのに…」

「だって、これって弾道予測線を予測するゲームだろ？」

「だ、弾道予測線を、予測う!？」

シノンは女の子らしい叫びが店内に響き渡り、ギャラリーも呆然と口を開いていた。

数分後、ようやく集まっていたギャラリーが散り、カイ達は《B0 B》エントリーの為、《総督府》に向かうことにした。

だが……

「シノン！残り時間は!？」

「残り13分！エントリーには大体5分掛かるから、あと8分で着かないと!」

予想以上に、時間を食ってしまい4人は《総督府》に向かって走っていた。

「テレポルトとか、瞬間的に移動する方ほどかはないのか!？」

「GGOにおいて、起きる瞬間移動現象はたった1つ…死んで蘇生ポイントに戻るだけ!このグロッケン地区の蘇生ポイントは総督府付近だけど、街中じゃHPは絶対に減らない!だからその手段は無理なの!」

カイの質問に、シノンが叫ぶように答える。

「とにかく今は走りましょう！」

ミトの言葉に、全員頷き、走る。

その時、4人の視界に一台のジープが止まる。

「やあ、シノン、脚は要るかい？」

「リヒター！」

ジープに乗っていたのは、リヒターだった。

「早く乗って！エントリーまで時間がない！そちらの3人もどうぞ！」

「シノン、知り合いか!？」

「相棒よ！乗って！」

「なら、お言葉に甘えて！」

助手席に飛び乗るシノンを見て、キリトは後部座席に飛び乗る。

「助かる！」

「ありがとう！」

カイとミトも、リヒターに礼を言い後部座席に飛び乗る。

直後、アクセル全開で急発進したジープは猛スピードで大通りを突っ切り、《総督府》を目指す。

第6話 予選開始

リヒターの運転するバギーのお陰で、カイ達は僅か3分と言う短い時間で《総督府》へと着いた。

「ありがとう、リヒター！」

「礼はいいから早くエントリーしてきて！」

「ええー3人とも、こっち！」

リヒターへの礼もそこそこにし、カイ達はシノンの後に続く。

「その端末からエントリーできるから！やり方は分かる！」

「「やってみる！」」

3人同時にそう返事をし、端末に触れる。

すぐさまエントリー画面へと移動し、自身のキャラネームを入れる。

その後に、住所などのリアル情報を入力する場所があったが、そこでカイは手を止める。

リアル情報の入力は、自由で空欄でも虚偽情報でもいいそうだが、そうなると上位入賞プライズを入手することは出来ない。

カイ含め、ミトとキリトも上位入賞プライズは惜しかったが、今回の目的は《死銃》との接触、遊びではない。

カイはミトとキリトを見る。

すると、2人も同じ気持ちなのか、3人とも無言で頷く。

リアルの情報漏洩を少しでも防ぐ為に、カイ達はリアルに関するデータは全て空欄でエントリーした。

「3人共、終わった？」

「ああ、今終わった」

「俺も大丈夫だ」

「わたしもOKよ」

確認を取ってくるシノンに揃って答える。

「シノンのお陰で助かったよ」

「俺達だけだったら、間に合わなかったと思うし」

「ありがとう、シノン」

「い、いいよ、そんな…このゲームをやる人が増えてくれたら、私も嬉しいし」

3人からのお礼の言葉に、シノンは少し照れた様子を見せながら応えた。

するとキリトがメインメニューを開いて操作しだした。

「シノン、これは案内してくれた礼だ。受け取ってくれ」

そう言うと、キリトは先程のギャンブルゲームで手に入れた30万クレジットの半額15万クレジットをシノンへと渡した。

「え!?ちよ、ちよつと!別にお礼なんて!」

「いいからいいから、受け取ってくれ。それに、さっきの彼へのお礼も込みだからさ」

「そう言う訳だし、受け取ってやってくれ」

「人からの好意は素直に受け取る物よ」

「…:うん、分かった。ありがたく頂戴するね」

3人に説得される形で、シノンは謝礼を受け取る。

「それで、3人の予選ブロックはどこだったの? 私はFの33番だけど…」

「俺はEの29番だな」

「俺もEブロックだな。Eの7番」

「私はDブロックの17番ね」

「俺とカイは同じブロックだな。これだと、俺とカイのどちらかしか本戦に進めないのか?」

トーナメント表を見て、キリトがそう言う。

「ちよつと待って…:それは大丈夫そうね。カイとキリトの2人が当たるのは、勝ち残れたらって前提だけど決勝戦。予選の決勝まで進めたら本戦には出れるから」

「なるほど。なら、うまく行けば全員本戦参加か」

そうやってカイは、キリトを見る。

「キリト、決勝で待ってるぞ」

「(ちらいそ)」

互いに不敵に笑い合い、拳をぶつけ合う。

そんな2人を呆れた様にミトは見る。

そんな中、シノン自身は自身の居るFブロックにいるプレイヤーの中に、知った名前を見つける。

《I y n x》

(リンクス……山猫もFブロック……当たるのは決勝戦……本戦前に、前回のリベンジと行かせてもらおう……！)

シノンは拳を強く握りしめ、リンクスへのリベンジを誓う。

「それじゃあ、予選の会場に行きましょう。ここ地下よ」

シノンは一先ず、リンクスへの怒りを胸に仕舞い、カイ達と地下へと向かうエレベータに乗った。

地下に着くと、参加者であろうプレイヤー達が多くいる。

陽気な者はおらず、みな一様に押し黙ったり、低く囁きを交わす程度だ。

「控室はこっちよ。そこで、戦闘服に着替えましょう」

シノンの案内で、控え室に向かう。

「男子はそっちで、女子はこっちよ」

「分かったわ。じゃあ、また後でね」

「ああ、後でな」

「じゃあ」

ミトに別れを告げ、カイはキリトと共に控え室に向かう。

「ちよ、ちよっとー！」

すると、シノンが声を上げた。

「聞いてなかったの！女子はこっちよー！」

シノンはキリトを見ながらそう言う。

そこで、カイ達はハツとした。

そして、カイとミトは笑いを堪え、キリトはげんなりとする。

「えっど。どうしたの？」

「シノン、言い忘れてたけどキリトは男よ」

ミトが笑いをこらえながら、シノンに言う。

「……え？」

「本当だぞ。ほら、キリト、証拠」

「カイ……ミト……、後で覚えてろよ……」

キリトはそう呟き、シノンにネームカードを見せる。

そこには、プレイヤーネームの《キリト》と、性別が書かれている。

Male^{男性}、と。

「え？Male……え？男!?その顔で!？」

シノンが驚きの声を上げる。

そして、カイとミトは大爆笑した。

「悪かったって、そう怒るなよ」

「ほら、飲み物奢ってあげるから」

「飲み物一杯で許されると思ってるのかよ……」

不貞腐れるキリトを宥めながら、カイとミトは謝る。

「その……ごめんなさい。知らなかったとはいえ、女の子扱いして

……一人称もてつきりそう言う子なんだと思つて」

シノンは、素直にキリトに謝った。

「いや、俺の方こそちゃんと説明してなかったし、シノンは気にしない

でくれ。だけど、カイとミト、お前らは許さない」

「だから悪かったって」

「ごめんごめん」

そんな3人のやり取りを見て、シノンは仲が良いんだなっと思う。

「取り敢えず、お詫びって訳じゃないけど予選について説明しとくわ」

シノンの説明によると、ドーム中央にあるホロパネル、そこに映っているカウントダウンが0になったら、エントリ―者全員が予選1回戦の相手と2人だけで戦うフィールドに転送される。

フィールドは1km四方の正方形、地形と天候と時間はランダム、最低500m離れたところからスタート。

決着して勝者はこの待機エリア、敗者は1階ホールに転送、負けても武装のドロップはなく、勝った場合はその時点で次の対戦者が決まっていればすぐに2回戦、決まっていなければ待機。

そして、予選決勝戦まで行くとその時点で本戦参加が決定。

「こんな所よ。他に聞きたい事はある？」

「大丈夫だ、ありがとう」

「俺もだ」

「私もよ」

カイ達の返答に満足そうにシノンは笑みを浮かべるとこう言った。

「折角だし、全員が本大会に残れる事を祈ってる。そして、その本選で貴方達にもう1つだけ、あることを教えるわ」

そう言い、シノンは3人を挑発的な目で見る。

「何を教えてくれるんだ？」

「敗北を告げる弾丸の味」

その言葉に、カイ達は驚くも、すぐに笑みを零す。

「ああ、楽しみにしてる」

「その時は、全力で挑むよ」

「挑発には乗る主義だし、望む所よ」

そう言う3人に、シノンも笑みを零す。

「遅かったじゃないか、シノン」

すると、1人の男性プレイヤーがシノンに声を掛けながら近づいて

来る。

「てつきり来ないんじゃないかって心配して……えっと、この人たちは？」

「シュピーゲル。ちよつとした知り合いよ。皆、紹介するわ。彼はシュピーゲル。私のフレンドよ」

「あ、どうも。シュピーゲルです」

紹介されたシュピーゲルは、丁寧に頭を下げ、挨拶する。

「どうも、俺はカイだ」

「私はミトよ」

「俺はキリト……言っておくと、男だからな」

キリトの自己紹介に、シュピーゲルは「え？」と言葉を漏らし、カイとミト、そしてシノンには笑いを堪える。

「その容姿で男って事は、M9000番系のアバター？うわー、初めてみたなあ」

シュピーゲルは、キリトのアバターを珍しそうに見る。

暫く見てると、思い出し出した様にシノンの方を向く。

「シノン、そう言えばリヒターは？一緒だと思っただけど？」

「そう言えば……何処に行ったのかしら？」

「そっか、リヒターにも激励したかったんだけどいらないなら仕方ないか。シノン、僕の代わりにリヒターにも伝えてといて。「応援してる」って」

「ええ、分かったわ。でも、どうせここには来るんだろうし、待ってたら？」

「それがそうも行かなくてさ。これから、リアルの方で用事があるんだ。だから、激励だけに来たんだ」

そう言い、シュピーゲルはカイ達も見る。

「それじゃあ、皆さんも頑張つて下さい！それじゃあ！」

そう言い、シュピーゲルはログアウトした。

「彼は参加しないのか？」

カイは、シノンにそう尋ねる。

「ええ、そうなの。本人はステ振りを間違えたから、《BOB》は諦め

るって言ってるの。A G I 一極型でも、まだ戦えると思うのに」
シノンに残念そうに呟く。

「おーい、シノン」

またしてもシノンを呼ぶ声がした。

「リヒターー！」

シノンは、リヒターが来たことに少し嬉しそうに声を弾ませる。

「ごめんごめん、レンタルバギーを返しに行つて遅れちゃったよ。それで、皆はもうエントリーは終わったのかな？」

リヒターの質問に、カイ達は頷く。

「それじゃあ、改めて自己紹介と行こうか。俺はリヒター。シノンの相棒だよ」

「キリトだ、よろしく」

「俺はカイ。改めてになるけど、よろしく。それと、さつきはありがとうな」

「私はミト。こちらこそよろしく」

「うん、よろしく」

挨拶を終え、リヒターは笑う。

「それで、皆は何処のブロック？」

「私はFブロックよ」

「俺はEブロックだ」

「同じく」

「私はDブロックよ」

「あ、じゃあ俺と同じだね。俺もDブロックなんだ」

そう言い、リヒターはトーナメント表を見る。

「うん。どうやら、決勝で当たるみたいだ。その時はよろしく」

「ええ、こちらこそ。でも、手加減とかは要らないから」

「ああ、分かってる」

そう言つて、互いに握手をする。

『大変お待たせしました。これより第三回バレット・オブ・バレッツ予選トーナメントを行います。エントリーされたプレイヤーの皆様は、カウントダウン終了後に、予選第一回戦のフィールドに転送されま

す。幸運をお祈りします』

丁度アナウンスが鳴り響き、予選がもう間もなく始まることを告げる。

「それじゃあ、シノン。頑張ってね。本戦で会おう」

「ええ。あ、そうだ。シュピーゲルが頑張っつて言っってたわよ」

「そっか。なら、尚更頑張らないとな」

そう言い残し、リヒターは転送された。

「私もそろそろね。じゃあ、皆、本選で」

そして、シノンも転送された。

「カイ、待ってるから。キリトもね、ちゃんと勝ち残りなさいよ」

「ああ、必ず行くさ。予選Fブロック優勝者としてな」

「俺に勝つ気か、カイ？ 悪いが、俺が勝つ」

3人は、またしても笑い合い、そして、転送された。

第7話 GGOでの戦闘

転送された場所は暗闇で、カイは宙に浮いてる六角形パネルの上に立っている。

目の前に薄赤いホロウインドウがあり《K a i V S 狼牙》と表示があり、その下に「準備時間：58秒 フィールド：忘れ去られた廃墟」とあった。

(ろうがって読むのか？まあ、なんでもいいか)

そう思いながら、カイは自身の装備を確認する。

メインのサーベル、サブのコルト・パイソン。

そして、赤いミリタリージャケットに防弾アーマー、黒いコンバットブーツ。

「刀とサーベルの違いはあるけど、なんとかなるだろう」

そして、残り時間が0になると再度カイの体を転送エフェクトが包む。

すると、憂鬱そうな空の下にある廃れた街の中央にいた。

カイは慌てて近くの建物の中に入り、外の様子を探る。

(さて……狼牙はどこにいる……)

そう考えてると、20?程の建物の陰に人影が見えた。

(見つけた!)

鞘からサーベルを抜き、どのようにして接近し、斬るか考えていると、行き成りカイが居る建物の近くで爆発と爆炎が舞った。

何事かと思い、顔を出してみると、狼牙が6連式グレネードランチャーを構えているのが見えた。

「マジかよ!」

冷や汗を流し、カイは建物から飛び出し走り出す。

背後で爆音と爆発が起きながらも必死で走る。

走りながら打開策を考える。

「クソッ……これじゃあ近寄れねえ!」

カイの頭の中で考えを巡らせていると、グレネード弾がカイ目掛け飛んでくる。

カイは思わず反射的にサーベルを構える。

その瞬間、サーベルに当たったグレネード弾が爆発し、爆風がカイを吹き飛ばす。

空中で体勢を整え着地すると同時に、カイはサーベルを見る。

「折れてない……流石は、最高クラスの金属だな」

カイは安堵のため息をつく。

そして、どうすれば倒せるかを再度考える。

「……………」

少しの間、黙考していたカイだが、すぐに答えが出たよう動き出した。

カイは家屋の陰に隠れ、狼牙の位置を確認してから飛び出す。

「そこだ!!」

カイは狼牙目掛け、コルト・パイソンを撃つ。

銃弾は全て狼牙から外れる。

「ハッ！何処狙ってやがる！」

狼牙は鼻で笑い、カイに止めを刺そうとグレネードランチャーを構える。

しかし、カイは既に次の行動に移っていた。

カイが銃を撃つたのは当てる為じゃない。

狼牙の動きを止めて、その場に留める為だ。

カイはアイテムポーチから、スモークグレネードを取り出し、投げつける。

狼牙の周りに白い煙が立ち込め、視界が悪くなる。

「くっ！厄介だな」

狼牙は顔をしかめながら、その場を移動する。

遮蔽ぶちにしていた建物を移動し、近くの部屋に入り、壁を背にする。

(ここなら、入口はあそこの1カ所。ルートは絞られる。コルト・パイソンは強力だが、後ろの鉄筋コンクリートを撃ち抜けるほどじゃない。お飾りアイテムのサーベルなんぞ持つてる奴なんか、簡単に殺れる)

そう考えていた時だった。

「悪いな、俺の勝ちだ」

狼牙は驚きの声を上げようとしたが、声が出なかった。

腹部に何か刺さってる違和感を感じ、自分の腹を見ると、サーベルが突き出ていた。

すると、そのままサーベルが動き狼牙の身体を両断する。

「がっ!？」

狼牙は自分の身に何が起きたのか理解できなかった。

「なん……で?」

狼牙の疑問の言葉を残して、狼牙の体はポリゴン状に消えていく。

「流石は最高金属のサーベル。頑丈さも折り紙付きだな」

カイはサーベルを壁から引き抜くと、サーベルには刃こぼれ一つ無かった。

カイがスモークグレネードを使ったのは、姿を隠す為ではなく狼牙をその場から移動させるため。

向こうからは煙でカイの居場所は分からないが、狼牙は居場所がバレている。

そうなれば、その場を移動するのは分かり切った事。

後は、建物内で反響する足音や呼吸音などから、狼牙の位置を見つけ、その背後からサーベルで斬る。

SAOでの2年間の戦闘経験と技術、そして、サーベルの頑丈さがあってこそその攻略法である。

「取り敢えず、しばらく宜しくな相棒」

この世界の新たな相棒にそう言いつつ、上空の《CONGRATULATION》の表示を見る。

そして、体を転送エフェクトの青い光に包まれながら、カイは待機エリアに戻った。

転送された場所は暗闇で、ミトは宙に浮いてる六角形パネルの上に立っている。

目の前に薄赤いホロウインドウがあり《M i t o V S B r i n e r 》と表示があり、その下に「準備時間：58秒 フィールド：追憶の戦場」とあった。

「えっと、取り合えずフォトンサイズは手で持って、銃はこの辺でいいか」

メインとなるフォトンサイズを持ち、サブとなるベレッタを腰背部のホルスターに入れる。

服装は、紫のミリタリージャケットに防弾アーマー、カーキ色のコンバットブーツを装備している

「よし。後はその場の流れ次第で動くとするか」

そして、残り時間が0になると再度ミトの体を転送エフェクトが包む。

すると、憂鬱そうな空の下にある戦場にミトは降り立った。

戦場跡地と言うだけあって、辺りには捨てられた武器や軍用車両の残骸などが転がっている。

「こんな開けた場所に居たら格好の的ね。早く移動しないと」

ミトはそう呟き、念の為に銃を抜いて移動を開始する。

周りの残骸を遮蔽物代わりに移動しながら、前方を覗いて、音を聞き分け、何も無い事を確認してまた前進。

そして、また岩陰から様子を確認しようとした瞬間、突然目の前に男が現れた。

「っ！」

その瞬間、ミトはノータイムで男、ブライナーに発砲する。

行き成りの事に、ブライナーは身体に2発弾丸を食らい、後ろによりめく。

そして、ミトはフォトンサイズの刃を展開しながら、ブライナーに向かって走り出す。

だが、それを待っていたかのようにブライナーは手にしたライトマシガン《ブレン軽機関銃》を乱射する。

「ちよ!?!」

放たれる銃弾の雨の中、ミトは後に下がり、遮蔽物に隠れる。

だが、機関銃の弾丸は容易に遮蔽物を貫通し、ミトを追いやる。

(流石にこのままじゃまずい!)

ミトは、急いで近くの新たな残骸に身を隠して、ブライナーの様子を確認する。

ブライナーはマガジンを取り外し、リロードをしていた。

「出て来いよ、お嬢ちゃん! その綺麗な顔、吹き飛ばしてやるからよ!」

ブライナーは楽しげに笑い、銃を構える。

ミトは歯噛みしながらも、冷静に考える。

(正直、銃に不慣れの私じゃこの距離で当てるのは無理。……かと言つて、鎌を使おうにもこの状況だと厳しいわね)

そう思いながらも、ミトは覚悟を決める。

「だったら……行くしかない!」

ミトは勢いよく飛び出すと、ブライナーに向けて走り出した。

それを見たブライナーは口角を上げる

「良い度胸だなあ!! でも、これで終わりだよ!!」

ブライナーは再び機関銃を構え直し、トリガーに指を掛ける。
弾道予測線が伸び、ミトの体に幾重にも重なる。

しかし、ミトは避けるそぶりも見せず、ただ真つ直ぐに走る。

「ハハッ！馬鹿め！死ねえええ!!!」

そして、引き金が引かれ、大量の弾丸がミトへと迫る。

弾丸は地面にも落ち、大量の土煙を巻き起こす。ブライナーは勝ち誇ったように笑う。

「クッハー！死んだなあ？まあ、俺に挑むなんて無謀もいいところだからなあ」

「本当にそうかしら？」

「……………は？」

土煙が晴れると、そこには無傷のミトが、フォトンサイズ片手に立っていた。

「な、なんで生きてんだよお!!!」

ブライナーが叫ぶと、ミトは不敵に笑う。

「さあ？なんででしょうね？」

そう言い、フォトンサイズを手にブライナーへと接近する。

それに焦りを覚えたのか、ブライナーは再び機関銃を放つ。

しっかりと構え、ミトを狙い、撃つ。

ミトへと飛来する弾丸。

すると、ミトは手にしたフォトンサイズを掌で回転させ、弾丸を防いだ。

「なっ!?」

フォトンサイズを回転させることで、弾丸を防いだミトにブライナーは驚きを隠せずにいた。

再度発砲しようとするが、機関銃は弾切れだった。

ブライナーは急いでリロードしようとするが、ミトの方が速く、フォトンサイズの紫色の光刃をブライナーの首に当てる。

「さようなら」

そう言い、ミトはフォトンサイズを一閃。

ブライナーの首が飛ばされ、体はポリゴン状に消えていく。

「ふう……勝てて良かった」

ミトはそう呟き、大きく息を吐き、上空の《CONGRATULATION》の表示を見る。

そして、体を転送エフェクトの青い光に包まれながら、ミトは待機エリアに戻った。

第8話 忘れてた記憶

転送された場所は暗闇で、キリトは宙に浮いてる六角形パネルの上に立っている。

目の前に薄赤いホロウインドウがあり《K i e i t o V S 餓丸》と表示があり、その下に「準備時間：58秒 フィールド：失われた古代寺院」とあった。

相手の名前を確認し、キリトはメインのフォトンソード《カゲミツG4》を2本と、サブの《FN・ファイブセブン》を装備する。

そして、黒いミリタリージャケットに防弾アーマー、黒いコンバットブーツ。

「よーしー」

準備を整え終え、キリトは残り時間を確認するために顔を上げる。すると、ちょうど残り時間が0になり、再度キリトの体を転送エフェクトが包む。

キリトは、陰鬱な黄昏の空の下に放り出された。

足元の枯草が風によって揺れ、すぐそばには古代の神殿の柱が立っていたり、倒れていたりしている。

まずキリトは手近な柱に体を預けつつ、周囲の様子を探る。

「相手は何処だ？」

あたりを見渡し、キリトは餓丸を探す。

キリトは、この勝負はとにかく相手よりも先に相手を見つけることが重要と考え、索敵を第一に行っている。

なんなら、このまま隠れ続け、相手がしびれを切らして出て来るのを襲撃する《待ち》の戦法を取ってもいいのだが、キリトの性には合わず、キリトは柱から飛び出した。

そのままダッシュで一番近い遺跡まで向かおうとする。

すると、待っていましたと言わんばかりに、キリトを銃撃が襲った。

キリトはそのままダッシュで駆け抜け、転がる様に遺跡の中へと滑り込む。

そして、入り口付近の壁を背に、銃撃があった方を確認する。

「見つけた」

キリトの視界には、アサルトライフルを構え、迷彩柄のフードを被った男が茂みの中に隠れているのを捕らえた。

「敵は見つけた。後は、どうやって斬るかだが……………」

キリトは右手に握り締めたフォトンソードを見つめる。

敵の居場所が分かってても、キリトが接近し、光刃が届く前にハチの巣にされるのが分かり切っている。

「せめて銃弾を防げたら……………」

そこまで考えて、キリトはふと気づく。

「待てよ……………あれなら……………」

数秒黙考し、キリトは動いた。

キリトは、両手でファイブセブンを構え、餓丸の居る所に発砲する。

餓丸は驚くも、キリトの射撃が出鱈目な事もあり下手に動かず、その場でじっとすることにした。

そして、銃声の数を数える。

キリトの銃はファイブセブンは装弾数が10発で、餓丸は一瞬見えた銃の形状から、キリトの銃がファイブセブンであることを見抜き、キリトがリロードをした瞬間が勝負と考えた。

(7……………8……………9……………)

銃声をしつかりと数え、とうとう最後の1発が放たれる。

(10!)

キリトの銃が弾切れになった瞬間、餓丸は体を起こし、一気にケリを付けようとする。

その場でじっとしていた為、かなりキリトとの距離は詰められたがそれでもキリトの持つフォトンソードの刃が届くにはまだ距離がある。

(死ね!)

餓丸の銃が火を噴き、キリトに銃弾の雨を浴びせる。

すると、キリトはファイブセブンを仕舞うと、両腰にカラビナで吊っているマツトブラック塗装とライトホワイト塗装の《カゲミツG4》を手取る。

両手に持ったフォトンソードを起動させ、青い光刃と、緑の光刃が展開される。

そして、襲い来る弾丸の雨もフォトンソードの二刀流で弾いた。キリトの剣捌きは凄まじく、まるで二振りの剣で踊っているかのように見えた。

その動きに、餓丸は唾然とする。

「嘘だろ……!?!」

キリトは更に速度を上げ、餓丸へと肉薄していく。

餓丸は、空になったマガジンを投げ捨て、新しいマガジンを装填する。

そして、腰だめで発砲しようとする。

「はあああああああ!!」

すると、キリトは緑の光刃のフォトンソードを、投げた。

回転しながら飛ぶフォトンソードは、そのまま餓丸の銃に当たり、銃を両断する。

「なっ!?!」

「うおおおおおおお!!」

銃を破壊されたことに、驚く餓丸に、キリトは容赦なく斬り掛かる。

それは、SAOにあった片手剣ソードスキルの上位剣技《ヴォーパル・ストライク》だった。

光の尾を引きながら繰り出される一撃は、餓丸の胸を貫き、HPを全て奪った。

「ぐあああ!!」

餓丸はそのまま倒れ、ポリゴンとなって砕け散った。

「ふう……やっぱり思った通りだ。予測線があるなら、光剣で弾丸を防げる。それに、2本あるから片方を投げすることも出来るし、これなら接近戦に持ち込める!」

そう言いつつ、キリトはフォトンソードをしまう。

その時、今までの癖で、フォトンソードを横に振ってから背中の中鞘に収める動作をしてしまい、頭を搔く。

そして、体を転送エフェクトの青い光に包まれながら、キリトは待

機エリアに戻った。

待機エリアに戻ると、先程と同じ壁際のボックス席にキリトは居た。

「転送した時と同じ位置に戻るのか」

そう呟き、キリトは辺りを見渡すが、カイとミトの姿は見えなかった。

まだ戦ってるか、一足先に2回戦を行ってるのかもと思い、キリトは辺りを見渡す。

すると、予選の戦闘を中継しているモニターがあるらしく、キリトはカイとミトの様子を、それとお世話になったシノンの様子を見ようとモニターに近付こうとする。

その時だった。

突然、キリトの前にボロマントを羽織り、不気味なマスクを被ったプレイヤーが現れた。

行き成り現れたソイツに、キリトは驚く。

「おまえ、本物、か？」

ボイス・エフェクターを使用しているらしく、声が少しおかしかつたが、それが余計に不気味さを増長させていた。

「どういう……意味だ？」

「試合の、様子を、見た。剣を、使ったな」

「……ああ、別にルール違反じゃないだろ？」

「もう一度、訊く。お前は、本物、か？」

男の質問に、キリトは答えなかった。

すると、プレイヤーはメニューを開き、トーナメント表を見る。

そして、キリトの名前を確認した。

「この、名前、さらに、あの、剣捌き……、お前、本物、なのか？」

その言葉に、キリトは戦慄した。

（コイツは……俺の事を知ってる！ S A O に居た頃の俺を……！）

思わず体が震え、キリトは無意識に右腕を左手で掴んだ。

相手がただのキリトと同じ S A O 生還者サバイバーなら、キリトもここまで怯えなかった。

だが、キリトは怯えた。

その時、男の手首が見えた。

青白い肌のそこには、棺桶のタトウーがあり、蓋にはニタニタと笑う不気味な笑顔が書かれ、少し空いた蓋の隙間から白い骸骨の腕が出ていた。

(あのマーク……！)

それが、SAO最大にして最悪の存在、殺人ギルド《ラフィン・コフィン笑う棺桶》のもので、目の前の男が《ラフィン・コフィン笑う棺桶》に関係のある存在だと言うことに気づく。

「答えろ、お前は、本物の、キリトか？」

男は、再度同じことを問うた。

その問いに、キリトは答えれなかった。

冷や汗を流し、顔も強張る。

呼吸も早くなり、過呼吸の様になり出す。

「答える、気が、無いの、か？それとも、答えられない、理由が、あるの、か？」

何も言わないキリトに、男はぬるりと無音で下がった。

「もう、いい……。だが、名前を、騙った、偽物か……。本物、ならば……」言葉を使い終わらない内に身を翻し、しかし確かな声で言い放った。

「……いつか、殺す……」

そして、男は消える様に去って行った。

男が去ると、キリトはフラフラとした足でボックス席に座り込む。

「はあ……はあ……」

息を荒げ、右手で頭を抱える。

(アイツは誰だ……俺の知ってる奴か……？ 《討伐作戦》で生き残った《ラフィン・コフィン笑う棺桶》のメンバー……？それなら、戦後処理中のどっかのタイミングで会話したと思うが……誰なんだ……？)

キリトは必死に考えるが、全く思い当たらなかった。

それもそのはず。

キリトはあの一件を忘れた記憶として、あの日以降思い出さない

様に過ぎてきたからだ。

(いや……もしかしたら、あのマントの下に居たのは……俺が殺した2人の内のどちらか……?)

《討伐作戦》で、キリトは2人の殺人者^{レッド}を手に掛けた。

そして、キリトはその事すらも忘れようとしていた。

人を殺した罪悪感を思い出し、そして、殺した相手や殺し合いをした相手の顔と名前が思い出せない自分が許せなくなり、自己嫌悪に陥りそうになった。

「くそっ……!」

キリトは頭を掻きむしり、そのまま項垂れる。

「キリト!」

すると、行き成り声を掛けられキリトは顔を上げる。

そこにはカイが居た。

「キリト、大丈夫か?」

心配そうな表情でカイが言う。

「ああ……なんとかな」

キリトが力なく返事を返すと、カイはキリトの隣に座る。

「何かあったのか?」

「いや……ちよつとな。でも、大丈夫だ」

「大丈夫な訳ないだろ。お前、今自分がどんな表情してるか分かってないだろ?」

「えっ……?」

「幽霊でも見たかのような、そんな感じだぞ。何があったんだよ?」

「いや、何でもないよ。本当に、なんでもない」

キリトは無理矢理笑みを作り、そう言った。

「そうは見えないけどなあ……まあ、話したくないなら話さなくて良い」

カイはそう言つて、納得してない表情を作るが、今は何も聞かず、次の試合を待つ。

(カイには、教えない……俺以上に、カイは《討伐作戦》のことなんて思い出したくない筈だ……)

《討伐作戦》で、カイは自身が忌み嫌う殺人を自ら犯してしまい、それで心が壊れかけ、自棄になり、6人の殺人者^{レック}を殺した。

まだ殺しのしたことない下っ端までも殺そうとし、相棒であるキリトに止められ、殺し合った。

そして、その最中、カイはミトを殺してしまった。

(カイには、あの時の事を思い出して欲しくない。俺1人で、片を付けないと………)

そう決意するキリトの目は、何処か暗い物へと変わっていた

第9話 予選決勝戦

それから、カイとミト、キリトの3人は順調に2回戦、3回戦、4回戦と予選を勝ち抜いていき、とうとう決勝戦まで来た。

「ここまで来たから、本戦出場は確定ね」

「ああ、ミトの相手は、リヒターか」

「ええ。シノンの友人みたいだけど、ここまで来れるって事はかなりの実力者って事ね」

「油断するなよ」

「勿論。そっちは、キリトね」

「ああ」

カイとミトは会話をしつつ、決勝が始まるまでの時間を待っていた。

「ミト！カイ！」

そんな2人に、準決勝を終えたシノンがやって来る。

「シノン、そっちも勝ったんだな」

「本戦出場、おめでとう」

「ありがとう。でも、だからと言って手を抜くつもりはないわ。それに、アイツには借りがあるのよ」

そう言い、シノンは次の自分の相手の試合の中継を見る。

外套を羽織り、フードで顔を隠した《三八式歩兵銃》を持ったプレイヤー、リンクス。

モニターでは、丁度リンクスが準決勝の相手をヘッドショットで撃ち抜き、決勝進出を決めた所だった。

「あの男、ここまでずっと1ショット1キルだな」

「何て言うか……凄い精度よね」

「ええ、私も正直驚いてるわ」

カイの言葉に、ミトとシノンは同意するように呟く。

「借りがあるってことは、知り合いなのか？」

「知り合いじゃないわよ。私、アイツに一度見逃されてるのよ」
「見逃し？」

「自分が圧倒的有利なのに、面白いとか気に入ったとか、変な理由でトドメを刺さないで、《B o B》の本戦で殺すとか言ってる……！」

シノンの声色が、怒りに染まっていく。

「それで、本選で当たる前に予選の決勝で会う訳か」

「そういうこと。ここで勝って、その借りを返すわ。そして、本選でアイツを……殺す」

怒りの炎を目に宿したシノンに、カイとミトは血気盛んだなあつと思ひ、苦笑する。

「そう言えば、キリトは？」

「今、準決勝中だ。もう終わると思うけど……」

カイがそう言い、モニターを見る。

そこでは、キリトの準決勝戦の様子が映ってた。

直撃する弾丸を、全てフォトンソードで防ぎ、アバターの末端部分に当たるのは無視。

それで、距離を詰め、一定まで詰めると、片方のフォトンソードを投げ、武装を破壊、或いは負傷させる。

そして、トドメを差す。

（相変わらず、人間離れた戦法だな……でも、なんか無理に勝ちに行ってる感じがある……どうしたんだ？）

カイは、キリトの戦い方に違和感を覚えていた。

「あ、リヒターも勝った」

すると、隣に居たシノンがそう言う。

モニターをキリトから、リヒターの方へと目を移す。

そこには、ショットガンで敵を倒し終えたりヒターが映ってた。

「ねえ、シノン。リヒターって強いのか？」

「ええ、強いわよ。メインのショットガン《サイガ12》を使って戦うんだけど、かなり接近戦が得意なタイプよ」

「へえ〜」

「サブで持ってるハンドガン《ベレッタM93R》も、高い制圧力を持つからかなり手強いわよ。頑張ってるね、ミト」

「ええ、勿論」

シノンとミトは、お互いに笑顔を浮かべる。

それと同時に、3人の身体を転送エフェクトが包む。

「それじゃあ、2人とも、本選で戦いましょう」

「ああ」

「ええ」

そして、3人は転送された。

決勝戦、ミトは廃墟ビルの中からスタートとなった。

「ステージ名が《崩壊した鉄工場》ってあったから、予想ついてたけど狭い室内での戦闘か」

ミトは自分のメイン武器のフォトンサイズを見て呟く。

「狭い所だと、鎌のリーチを活かし切れない……むしろ、近接に特化してるリヒターの有利ね」

仕方なく、ミトは腰背部ホルスターからベレッタを抜き、工場内を移動する。

後方を警戒しつつ、前に進むと、突然、前方から弾丸が飛んできた。
「くっ！行き成りね！」

ミトは弾丸が飛んで来た方向に向かって、銃を乱射する。
しかし、その弾は当たらない。

「くっ！」

ミトは悪態を吐きながら、逃げ出す。

「逃すか！」

その後を、リヒターは追い掛ける。

追い掛けながら、残弾の減った《サイガ12》の弾倉を交換し、そのまま《ベレッタ M93R》を抜く。

そして、3点バーストモードでミトに向け、乱射する。

ミトが走り回っていることと、有効射程距離から離れていることもあって、弾丸は当たる事は無いが、それでも追い詰めるには十分だった。

「くっ！」

ミトは時折、後ろに向かって発砲する。

だが、いくら撃つてもリヒターに当たる事は無かった。

5分以上逃げ続け、ミトは既にマガジン4本も弾丸を消費した。

そして、とうとう最後のマガジンとなり、ミトは出入り口のない場所へと追い込まれた。

「やっと追い詰めた。もう逃げれないよ」

そう言っつて、リヒターは銃口をミトに向ける。

「……………」

無言のまま、ミトはリヒターを見る。

「決勝まで来たら、もう勝ち負けは関係ないけど、折角だし勝利で終わらせたいからね」

「ええ……そうね。それは、私も同じかな」

そう言っつと、ミトは銃を上へと向け、発砲した。

すると、《ベレッタ》から発砲された弾丸は、天井から剥き出しになっていた鉄筋に当たり、跳ね返って、さらにその先の壁へ当たり、また跳ね返り、リヒターの脚を撃ち抜いた。

「なっ!?!」

リヒターが驚きの声を上げる。

それをお構いなしに、ミトは再度発砲する。

弾丸は、工場内の機械や、置かれている資材の入ったコンテナなどに当たり、跳ね返りながら、リヒターへと当たる。

それにより、リヒターは更にダメージを負う。

「ちよ、跳弾を利用して……!」

「これでも、割と頭は良い方なのよ。あんなに無暗に発砲したのは、どの角度で弾を当てたら、どんな風に跳ね返るか試すためよ」

そう言いながら、ミトは発砲する。

跳弾が再び襲い掛かり、リヒターは躲そうとするも、跳弾を利用した銃撃では、自身に弾道予測線バレットラインが来ないので、避けるのが難しい。

回避に専念していると、リヒターの持つショットガンに跳弾が当たり、手からショットガンが落とされる。

「しまっ!?!」

リヒターは、急いで回収しようとするも、ミトが銃を撃ち、ショットガンを弾き飛ばす。

そこで、ミトの銃の弾が切れ、ミトはフォトンサイズを手取る。

「これだけ広い場所なら、思いつきり戦える!」

紫色の光刃を輝かせ、ミトはリヒターに迫る。

「く、くそっ!?!」

リヒターは、《ベレッタ M93R》を抜き、3点バーストで発砲するも、ミトは得意の方法で弾丸を防ぎ、リヒターの懐に飛び込む。

「終わりよ!」

そう言つて、ミトは大きく振りかぶつた《フォトンサイズ》を横一線に振るう。

リヒターの身体は、大きく切り裂かれ、そのまま碎け散った。

シノンの決勝戦は、森の中だった。

フィールド名は《死滅の森》。

森と言っても、森林浴に最適と言う感じではなく、まるで富士の樹海のような、入り込んだ者をそのまま遭難させ、死なせるような恐ろしい雰囲気醸し出していった。

しかし、シノンは臆することなく、森の中を進む。

「さて……と」

シノンが足を止めたのは、開けた場所だった。

円形の広場の中心には一本の木が生えており、狙撃手が狙う場所としては最適な場所だ。

シノンは近くの木に隠れ、双眼鏡で辺りを見渡す。

この森は、ただでさえ視界が悪い上に、木の上に登れば葉っぱが邪魔をして何も見えない。

つまり、このフィールドは完全に狙撃手有利と言えるのだ。

しかし、それは逆に言えば、狙撃手にとって有利な場所を探し易いとも言える

(まあ、向こうもそれは解っているだろうけどね)

そう思いながら、シノン は双眼鏡でリンクスを探す。

注意深く辺りを探し、ようやく見つけた。

「いた……！」

その瞬間、シノンは双眼鏡から目を離す。

双眼鏡越しに、自身の対角線上にある木の上、そこにリンクスは居た。

顔の確認はフードで出来なかったが、見覚えのある《三八式歩兵銃》の銃身が見えたので、恐らく間違いない。

シノンは《ヘカートII》を構え、リンクスを狙う。

だが、そこで違和感を感じた。

(山猫は、一流だ。一流なのに、あんな雑な隠れ方をする?)

シノンとリンクスが戦ったのは、ほんの数分程度。

それでも、シノンはリンクスの腕は一流だと理解している。

その為、今のリンクスの隠れ方を不自然に思った。

(狙撃手が《待ち》をする時は、バレないことが基本。あんな隠れ方だと、他の狙撃手からすぐに見つかるし、何より、あんなに銃口を出してたら、下からでも丸見えよ)

いくらなんでも無防備すぎる。

まるで、リンクスはわざと自分の居場所を教えているようにしか思えなかった。

「まさか……！」

シノンは何かに気づき、辺りをもう一度探す。

「あ……！」

そして、声を上げる。

何故なら、リンクスを見つけた木から、数十m離れた所の木の陰、そこから見覚えのある外套が僅かにはみ出ていたからだ。

(そう言う事ね！木の上のアレはただのカカシ！私がアレを撃ったら、居場所は丸わかり！私の位置を確認してから、狙撃するつもりな

んだわ!!)

シノン、リンクスの考えを見破り、そして、木の陰に隠れているリンクスに向かって、《ヘカートII》を撃つ。

50BMG弾は、木に当たり、木を抉る様に削って貫通し、その後ろに隠れて入るリンクスを吹き飛ばす。

「よしっ!!」

シノンは自分の勝利を確信した。

だが、次の瞬間、信じられないことが起きた。

発砲音が聞こえ、シノンの心臓を弾丸が貫いた。

「……………え?」

シノンは驚き、弾が飛んで来た方を見る。

狙撃手のシノンはいくつかスキルを取得してる。

その中に、視力を上げるスキルがある。

そして、そこで見たのは、先程の木の上に居たカカシと思ったソレ。

そのフードの下から見える、笑う口元。

銃口から立ち昇る煙。

その全てが、その答えを示していた。

「そっか……………まんまと罠に嵌ったって訳ね……………」

シノンはその事実を理解し、そのまま倒れた。

第3回《B o B》

予選 Dブロック優勝者：《ミト》 準優勝者：《リヒター》

予選 Fブロック優勝者：《リンクス》 準優勝者：《シノン》

第10話 予選決勝戦《カイVSキリト》

カイとキリトの、《B o B》予選、Eブロックのステージは《大陸間高速道》

東西にわかれるように伸びるハイウェイ、そこから降りる事は出来ない。

障害物として乗用車や輸送車などの大型車、墜落したヘリコプターなどを利用して戦う。

カイは、遮蔽物の陰から蔭へと移動し、キリトを探す。

(キリトの事だから、俺と同じように移動してるはず……)

そう考えながら、物陰に隠れた時だった。

「っ！」

カイは思わず、自分の目を疑った。

何故なら、キリトは隠れながら移動している所か、《フォトンソード》も《ファイブセブン》も持たず、ただ真つすぐ歩いていた。

「何考えてるんだよ……」

カイは、キリトから戦う意思を感じない為、遮蔽物から出て、キリトに近寄る。

「キリト！お前、何考えてる！」

カイが怒鳴ると、キリトはゆっくりと顔を上げる。

「俺たちの目的は、明日の本戦に出ることだ。もうこれ以上戦う理由はない」

その言葉を聞いた瞬間、カイはキレた。

「ふざけんじゃねえ！」

キリトの胸倉を掴み、顔を近づけて叫ぶ。

「確かに俺たちの目的は本戦出場だ！決勝戦まで行けば、本戦への参加資格はあるだろうさ！でも、だからと言って、勝負を投げやりにしていい理由にはならないだろ！」

カイの言葉を聞き、キリトは顔を上げる。

「これまで戦ってきた奴ら全員が、本選に出ようと真剣に戦っていた！それなのに、本選に出れるから決勝戦は適当に終わらせるなんて、

そんなの今まで戦ってきた奴らの気持ちも踏みにじってるのと同じだ！それが……俺の相棒《キリト》のすることか！お前にとって、仮想世界はもう一つの現実だろ！」

そこまで言い終えると、カイは掴んでいた手を離す。

「俺は、最後まで真剣に戦いたい。相手がお前なら、尚更だ。お前は……違うのかよ？」

キリトは数秒沈黙した。

そして、顔を上げる。

そこには、先程みたいな諦めきった様な表情はなく、生き生きとした目でカイを見つめていた。

「ああ。そうだな……。ごめん、カイ。俺間違ってたよ」

キリトはそう言い、銃を抜く。

「カイ、俺に償いをさせてくれ。今から、俺と勝負してくれ、相棒」

「ああ、いいぜ。そう来なくっちゃな、相棒」

2人は笑い合い、キリトは《ファイブセブン》のスライドを引く。弾丸が排出され、キリトはそれを空中でキャッチする。

「互いに10m離れて、この弾丸が地面に落ちた瞬間、それが戦いの合図だ。どうだ？」

「ああ、いいぜ」

2人は10m離れ、互いの武器を構える。

そして、キリトが弾丸を指で弾く。

弾丸は、真上に飛び、そして、落ちて来る。

キリトは《フォトンソード》を起動し、青い光刃が輝く。

カイは、サーベルで居合の構えを取る。

2人の視界には、弾丸がゆっくりと落ちて見える。

(負けられない)

(絶対に勝つ)

2人が同時に心の中で呟いた時だった。

弾丸が地面に落ちると同時に、2人は動いた。

カイは地面すれすれで横に斬り払い、キリトはジャンプして斬撃を避ける。

しかし、カイの攻撃はまだ終わらない。

カイは横薙ぎの一閃を放ったまま、体を捻り、着地を狙って逆袈裟を放つ。

だが、キリトはその攻撃を読んでいたかのように避け、逆にカイの横腹を蹴り飛ばす。

「ぐうー！」

カイは苦しそうな声を上げながらも、サーベルを振り、キリトの顔を切りつけ、そのまま後ろに転がって、態勢を立て直す。

一方キリトは下手に追撃することなく、距離を取って着地していた。

「流石キリト……今のは効いたぞ」

カイがニヤリと笑うと、キリトも笑みを浮かべる。

「そつちこそ……でも、まだまだここからだろ！」

再び両者は駆け出す。

カイは、キリトの《フォトンソード》を躲し、攻撃する。

エネルギー刃の《フォトンソード》では鏝競り合う事は出来ないの
で、必然とカイはキリトの攻撃を避けないといけない。

そして、キリトもまたカイのサーベルは、この世界で最高クラスの
金属の為、《フォトンソード》程度では両断することも出来ないの
で、
防御出来ない。

故に、相手の手を読み、行動しなければならない。

カイは、キリトの攻撃を予測し、回避していく。

一方のキリトは、カイの動きを見ながら、攻撃を当てるチャンス
を窺う。

(こいつ、本当に強くなったなあ……)

キリトが内心感嘆しながら、カイの一撃を回避した直後、カイは足
を引っ掛けてキリトのバランスを崩そうとする。

「っー！」

バランスを崩しながらも、キリトは咄嗟の判断で《フォトンソード》
をカイに向けて突き出す。

だが、その瞬間、カイは身を屈め、キリトの足を蹴る。

キリトはそのまま転倒するが、すぐに起き上がる。

カイもキリトも、互いの動きを警戒しながら、少しずつ後退する。

(光剣のエネルギー残量も残り僅か……これで決める!)

キリトは最後の1撃を放とうと、構えを取る。

(なるほど、その技で決める気だな。なら、それに応えてやるよ!)

カイも、キリトの構えを見て、自身も構えを取る。

そして、互いに最後の1歩を踏み出し、攻撃を仕掛けた。

「はあああああ!!」

2人の雄叫びが重なる。

片手剣スキル重単発技《ヴォーパル・ストライク》

刀スキル突進技《紫電一閃》

そのまま2人は、互いに立ち位置を交換するように、交差した。

試合の様子をモニターで見ていた、ギャラリーは何も言わず、固唾を飲んで勝負の行方を見守る。

そして、決着の時は訪れる。

キリトの《フォトンソード》の光が消え、地面に落ちる。

それと同時に、カイの手からサーベルが落ちる。

そして、2人のアバターは同時に碎け散り、上空には《Draw》の文字が浮かんでいた。

第3回《B o B》

予選 Eブロック優勝者：《カイ》&《キリト》

第11話 BOB本戦前

「……………」

「……………」

予選の翌日、カイはキリトの家を訪れていた。

「なるほど……《笑う棺桶》ラフィン・コフィンのメンバーが死銃か……」

カイは、昨日のキリトの様子がおかしかった理由を尋ねに訪れると、キリトは素直にその事を話した。

「あ、ああ……俺の事を知ってる口ぶりだったし、それに、俺の使った技も知ってる感じだった。それに、手首にアイツらの証のタトウモ」

「まさか、ここでアイツらと再会することになるとはな。と言うより」

カイは、鋭い目つきでキリトを見る。

「どうして直ぐに俺に言わなかった？死銃に接触された時点で、すぐにも知らせるべきだろう？」

「それは……ごめん」

「……………いや、違うな。まずは、お前に言うべきことがあるか」

そう言い、カイはキリトに頭を下げる。

「えっ!？」

突然の行動に驚くキリト。

「すまない。それと、ありがとう」

「いや、なんで伊緒が謝るんだよ！それに、礼も言われる筋合いは！俺の事を想って言わなかったんだろ？」

カイの言葉に、キリトは黙り込む。

「《笑う棺桶討伐作戦》ラフィン・コフィンは、正直な話、俺には最悪な思い出だ。嫌悪する殺人をして、自棄になって大勢殺して、殺ししていない下っ端まで殺そうとして、挙句、お前を殺しかけた。そして、ミトを……!」

カイは拳を強く握りしめ、唇を噛む。

「伊緒、無理して思い出す必要なんて……!」

「そう思ったから、言わなかったんだろ？」

カイはキリトの目を見て続ける。

「俺に余計なことを思い出させない様にしようと、全部1人で背負い込んで、決着付けようとしたんだろう?」

「……」

「余計な心配かけたな。本当に、すまなかった、そして、ありがとう」
再び頭を下げたカイに対し、キリトは困った表情を浮かべながら頭を掻く。

「和人、お前の優しさは凄く嬉しい。だけど、俺はお前1人に無茶をしてほしくない。《笑う棺桶》ラフィン・コフィンがらみなら、俺も一緒に戦う。お前1人だけに、背負わせたくない。不安かもしれないが、もつと頼ってくれ」

「伊緒……分かったよ。一緒に戦ってくれるか、相棒?」

「当たり前だろ、相棒」

2人は互いに笑い合うと、固く握手を交わした。

「それで、死銃の正体に心当たりはあるか?」

「いや、悪いが思い出せない。戦後処理中のどっかのタイミングで会話したと思うんだが……」

「そうか……正体については、本戦の中で探ろう。シノンとリヒターの2人に、本戦参加者で初参加のプレイヤーを教えて貰えば、ある程度当たりは付けられるだろうし」

「ちよつと待ってくれ。カイは、死銃が本戦に来ると思ってるのか?」

「来るさ。死銃は間違いなく本戦に出てくる」

カイは確信を持って答える。

「根拠は?」

「相手が《笑う棺桶》ラフィン・コフィンのメンバーで、尚且つキリトと言葉を交わした奴。なら、間違いなく幹部クラスだ。なら、プレイヤーとしては相当な腕だ。絶対に勝ち進んで、本戦に出るはずだ」

「でも、予選に参加してたか分からないぞ?あの場所に居たのも、獲物を探してるだけの可能性も……」

「菊岡から聞いた、死銃の声、憶えてるか?」

「あ、ああ……」

カイの質問に、キリトは戸惑いながらも肯定する。

「あの台詞、まるで自分の力を誇示し、恐怖を煽る様な物言いだった。

それに、調べたんだが、コイツを見てくれ」

カイは、鞆からPCタブレットを取り出し、ある物をキリトに見せる。

「これは？」

「《死銃情報まとめサイト》の書き込みだ」

キリトは、そのサイトを閲覧すると、そこには様々な事が書き込まれていた。

「これ、情報つて言うより、ただの賑やかしだな」

「ああ。誰一人、死銃が撃つたプレイヤーが本当に死んだと思つてないし、死銃が殺したとも思つてない。《笑う棺桶》^{ラフィン・コフィン}がSAOで誕生した時、多くのプレイヤーが恐怖しただろ？そして、奴らはそれを楽しんでいた。で、死銃も同じことをしようとした。だが、実際GGO内は恐怖に怯える所か、本気にすらしてない。なら、多くの注目が集まる本戦で、死銃の力が本物だと言う事を証明しようとする。それが、俺の考えだ。どう思う？」

カイの話聞いたキリトは少し考える素振りを見せると、顔を上げて答えを出す。

「なるほどな……俺もそう思うよ。アイツらは、そういう連中だ」

「よし、取り敢えずの方針は決まりだな」

そう言い、カイは立ち上がる。

「このことは、深澄に俺から伝える。じゃあ、和人。また後でな」

「ああ。よろしく頼む」

「任せろ」

そう言つてカイはキリトの家を出ていった。

「そう、死銃が《ラフィン・コフィン笑う棺桶》の……………」

キリトの家を後にし、カイはミトと待ち合わせをしていた喫茶店に向かい、ミトにキリトと話したことを伝えた。

「ああ。俺とキリトは、死銃が本戦に来ると仮定して、戦う。だから、深澄もそのつもりで」

「伊緒、無理してない？」
「ん？」

ミトの言葉に、カイは首を傾げる。

「死銃はもう2人も殺しをしてる……………殺人は、伊緒にとって……………もし無理してるなら、私と和人だけで「深澄」

カイは、ミトの手を取り握り締める。

「大丈夫だ」

「伊緒……………」

「確かに、無理してないってハッキリとは言えないかもだが、俺は死銃を放置しておくことはできない。今ここで、奴を止めないと新たな犠牲者が出る。それは、食い止めないといけない。それに、その犠牲者が深澄や和人かと思うだけで、怖いんだよ。俺の知らないところで、大切な人が殺されるかもしれないって考えたら、怖くて仕方がないんだ。だから、俺は戦うよ」

そう言い、カイは優しく笑う。

「伊緒……………分かった。なら私は、出来る限り伊緒の力になるわ」

「ありがとう、深澄。傍にいてくれるだけで、力になってくれてるよ」

「むっかつく！あの山猫野郎！」

ガツンツ！とブランコの鉄柱を蹴り飛ばしシノンが怒りの声を上げる。

その様子を新川は苦笑いしながら眺める。

「朝田さんがそこまで怒るのって珍しいね」

「だって、まるで遊びだと言わんばかりに飄々としちやってさ！本当に腹立つ！」

シノンは、山猫ことリンクスに対し怒りを露わにする。

「それにしても、初めてだよ。朝田さんが他人の事を色々言うの」「そう？」

「うん。普段は他人に興味が無いって感じだし」

「…………私、怒りっぽいよ、これでも」

「そうなんだ」

新川はシノンを暫く見つめると、ブランコから身を乗り出した。

「じゃあさ、どっかのフィールドで待ち伏せて狩る？狙撃するなら、囹になるし、正面から戦うなら、協力するよ。腕のいいマシンガンナーなら二、三人呼べるし。ビームスタナー使ってMPKもいいかも」

嬉々とリンクスの殺し方を模索する新川にシノンは呆気にとられた。

「あ、そう言うんじゃないの。確かにムカつく奴だけど、罨への嵌め方

とか、狙撃の腕とか、間違いなく一流なの。だから、同じ狙撃手として、正々堂々と狙撃で戦いたい。昨日の戦いで、アイツの戦法も分かったし、幸いリベンジのチャンスはある。今度こそ、あの飄々とした顔を吹き飛ばしてやる」

そう言つてシノンは右手を拳銃の形にして、空に向ける。

「覚えてなさいよ。この借りは必ず倍にして返してやるんだから」

「朝田さん、それ大丈夫なの?」

「え?」

新川に言われてシノンは、自分の右手を見る。

指で拳銃の形を作っていることに驚き、慌てて右手を元に戻す。

そして、自分の鼓動を確かめると、ドキドキとしてはいるものの、いつもみたいな激しい動機ではないことに安堵する。

「怒ってるから平気みたい」

「……なんだか、心配だよ」

急に新川が呟いた。

「なんか、いつもの朝田さんらしくない。いつもの朝田さんはクールで、超然としててさ、僕みたいに学校から逃げ出さないで……強いんだよ。朝田さんは僕の理想なんだ。僕に出来ることなら何でもするよ。本大会では、応援しかできないから」

「……私は、強くないよ。現に今でも銃の写真を見ると発作が」

「シノンは違うじゃない。僕はシノンこそが本当の朝田さんだと思う。だから、いつか現実の朝田さんもシノンの様になれるよ。だから、心配なんだ。あんな男の事で、怒ったり、動揺してる朝田さんを見ると、だから、僕が、僕が力になるから」

そう言つて新川は笑う。

「もつとも、リヒター程、力にはなれないと思うけどね」

「そんなこと……新川君には新川君だけにしかできないことがあるわよ。そもそも、GGOに新川君が誘ってくれなかったら、今の私はいないもの」

「そっかあ」

新川は照れくさそうに笑う。

「それじゃあ、僕はもう行くよ。本戦、頑張つてね！」

そう言い、新川は公園を後にする。

それを見送り、シノンも自宅へと向かう。

「お、朝田」

「あ、尾田さん」

すると、丁度アパートの真下で、尾田と遭遇した。

彼は大きな段ボール箱を抱えていた。

「その荷物どうしたんですか？」

「いや、ついさつきそこで宅配便の兄ちゃんと鉢あつてな。ばあちやんちからの仕送りだ。米とか野菜とか色々入ってるぜ」

そう言つて、尾田は段ボールを持ち直そうとする。

だが、かなりの重量があるのか、よろけてしまう。

「危ないですよ。手伝いますね」

そう言つて、シノンは素早く反対側に回つて、段ボールを持ち上げる。

「悪いな。助かる」

そのまま二人で階段を上り、尾田の部屋の前に着く。

「ありがとうな、朝田」

「いえ、いつもお世話になってますし」

「そうだ。少し持つて行けよ」

そう言い、尾田は段ボールを開ける。

中にはぎっしりと食材が入っていた。

「うわー、こんなに沢山」

「ああ、俺一人じゃ食いきれんからな。好きなの持つていっていいぞ」

「でも、悪いですし」

「遠慮すんなつて。ほら、これとか美味いぜ。ばあちゃんちの畑自慢のトマトだ」

そう言つて、尾田は真っ赤に熟れたトマトを一つ取り出す。

「じゃあ、貰いますね」

「おう。あと、コレとコレも」

尾田は袋を取り出し、その中に色々と詰めて行く。

シノンは、両手一杯に食料を抱えることになった。

「なんて言うか、凄い量ですね……」

「ばあちゃんが張り切ってたな。まあ、食費が浮くのはいいんだが……流石にこの量はな……一回食いきれなくて腐らせちゃったことがあるんだよ」

「なら、お婆さんに一言言えればいいんじゃないか……」

「俺、ばあちゃんっ子だからさ。ばあちゃんからの好意を無下にできないんだよ……」

「そう言い、尾田は遠い目になる。」

祖母の事が本当に大事なのだろう。

「そうだ。もしよかったら、今後も貰ってくれないか？腐らせるよりは、朝田に食って貰う方が食材もいいだろうし、なにより、俺もばあちゃんの野菜を無駄にせずに済む」

「あ、はい。そういう事なら」

「ありがとな。よし、これでOKっと」

尾田は段ボールを閉じ、玄関の扉を開く。

「じゃあ、朝田。またな」

「はい、また。野菜、ありがとうございます」

「気にするなっつて」

「そう言い残し、尾田は部屋へと戻っていく。」

それを見届けて、シノンも自分の部屋へと入る。

扉の鍵とチェーンロックを掛けて、貰った食材を冷蔵庫へと仕舞い、購入しておいたミネラルウォーターとヨーグルトを飲食し、楽な服装に着替えてアミユスフィアを被った。

そして、あの魔法のキーワードを唱えた。

「リンク、スタート」

第12話 本戦開始前

第3回《BOB》開始まで、後2時間。

カイ達は、なるべく余裕をもってGGOにダイブするために、病院を訪れた。

「3人とも、いらっしやい。早いわね」

前と同じ病室で、安岐が出迎えた。

「昨日みたいに時間に追われたくないんで」

「同じく」

キリトが理由を言い、カイとミトが同意する。

その姿に、安岐はくすくすと笑う。

「じゃあ、もうダイブする?」

「ええ、お願いします」

昨日と同じベッドに、カイとキリトが寝転がろうとすると、それをミトが止めた。

「和人、ちよつと待って」

「ん?どうした?」

「うん……その、ベッド代わって貰えない?」

「え?」

急にそう言いだすミトに、カイは驚く。

「少しでも、伊緒の傍に居たいの。お願い」

「ああ、いいぞ」

ミトの願いを、キリトは笑顔で了承し、カーテンで仕切られた方のベッドに移る。

「深澄、どうしたんだ?」

「伊緒が心配だから、少しでも近くに居たいの」

そう言うミトに、カイは照れ臭そうに笑う。

「なら、折角だしベッドくっ付けましようか?」

すると、安岐はミトの気持ちを察し、カイとミトのベッドを近づける。

カイは上半身裸で、ミトの方は上半身はブラのみとなり、くつつ

けられたベッドに横になる。

電極を張り付けられた後、ミトの体の上からシートを掛けられる。準備を終え居ると、カイは手を伸ばし、ミトの手を取る。

「伊緒？」

「少しでも近くに居たいんだろ？俺も同じ気持ちだし、折角だからこのまま手を繋いでダイブしよう」

「ええ、そうね」

2人は指を絡めるようにして、互いの手を握り合う。

それを見た安岐も微笑む。

「それじゃあ、3人とも。行ってらっしゃい」

「はい、また俺達の身体をお願いします」

3人はまた目を閉じる。

「「リンク・スタート！」」

そして、同時に、魔法のキーワードを唱えた。

昨日と違うのは、カイとミトは互いのぬくもりを感じながらダイブした事だった。

3人は《SBCグロツケン》の北端、総督府タワーにほど近い路傍の一角に降り立った。

大会へのエントリーを済ませようと少し離れた総督府を目指して歩く。

すると、両側から幾つもの視線が3人に向けられる。

それもそのはず、3人はGGOでは珍しいタイプのアバターで、更に、銃の世界であるGGOで《フォトンソード》、《フォトンサイズ》、《サーベル》と言う、通称お飾りアイテムを使って、予選を勝ち抜いた。

加えて、カイとキリトの予選決勝戦は、誰もが目を釘付けにして、観戦していた。

しばらく歩くと、シノンとリヒターの姿が見えたので、3人は声を掛けた。

「シノン、リヒター。今日はよろしくな」

「やあ、こちらこそよろしく」

「ええ、こちらこそよろしく」

シノンとリヒターは微笑んで挨拶をしてくれた。

「よお、お二人さん。今日はよろしく」

「よろしくね」

キリトとミトも続いて挨拶をする。

「ねえ、シノン。良かったらなんだけど、本大会のこと教えてくれない？メールは読んだけど、一応確認ってことで…」

「構わないよ。それじゃあ、エントリーが済んだら、地下の酒場に行きましょ」

そのまま5人で本戦へのエントリーを済ませ、地下1階の酒場に向かった。

ブース席に腰を下ろし、各々飲み物を注文する。

カイはサイダー、ミトはオレンジジュース、キリトはジンジャエール、シノンはアイスコーヒー、リヒターはアイスコーヒーにバナラアイスをトッピングしたのを選んだ。

「それじゃ、メールにも書いてあったと思うけど説明させてもらおうかね」

本選はバトルロイヤル制で参加者30人による同一マップでの遭遇戦となり、開始位置はランダムで他のプレイヤー達とは最低でも1000m離れ、本選のマップは直径10kmの円形で山あり森あり砂漠ありなどの複合ステージ。

参加者全員には『サテライト・スキャン端末』というアイテムが自動配布され、15分に1回は上空を監視衛星が通過するという設定で、その時全員の端末にマップ内の全プレイヤーの存在位置が送信される。

その時、輝点ブリックに触れば名前まで分かり、敗北した場合は大会中の情報のやり取りを防ぐ為にログアウトが出来ず、中継画面を観ながら決着がつくのを待つ、以上が主な内容であるそうだ。

「……………こんな感じね。他に聞きたいことはある？」

「大丈夫よ。ありがとう、シノン」

「ああ、しっかりと理解できた。ありがとう」

「そう、なら良かったわ」

「で、なんだが、シノンとリヒター、2人に聞きたいことがもう1つあるんだ」

そう言うと、キリトは《B o B》本戦の参加者リストを取り出す。

「この中に、知らない名前は幾つある？」

シノンとリヒターは不思議そうな顔をしたか、了承して名簿を見る
「B o Bは3回目だから、ほとんどは顔見知りね。初めてなのは、ここにいる貴方達を除くと、6人ね」

「名前は？」

「ん……………《銃士X》と《ペイルライダー》、それと《J・B》に《スノウ》……………これは《ステイブン》かな。綴りが間違ってるけど」
《Sterben》と書かれた名前を見て、シノンがそう言う。

「そして、最後は……………この山猫野郎ね」

シノンは怒りを露わにして、リンクスの名を指差す。

「相当、苛ついてるんだね……………」

シノンの隣に座るリヒターが、苦笑しながら言う。

「当たり前でしょ！この本戦で、今度こそリベンジしてやるんだから！」

シノンは鼻息荒く宣言する。

「うゝん……………」

そんな中、カイは《Sterben》の名前を見て、唸っていた。

「カイ、どうしたの？」

「いや、俺の気にし過ぎかもしれないんだが、これドイツ語なんじゃないかって思ってたさ」

「ドイツ語？」

「ドイツ語だと、何か意味でもあるのか？」

カイの隣に居たキリトも、尋ねて来る。

「……死って意味なんだよ」

カイがそう言うのと、ミトとキリトは驚きの表情になって固まった。

「まさか、こいつなのか？」

「いや、分からない。もしかしたら、ただのスペルミスの可能性もあるし、偶然かも知れないからな……」

「一先ず、候補として頭の中に置いておきましょう」

ミトの言葉に、3人で頷き合う。

「ねえ、何の話？」

「何かあったのかい？」

シノンとリヒターが、不思議そうに問いかけてくる。

「いや、なんでもない。ちよつとした俺達の因縁の話さ」

カイがそう言うのとシノンさんはそれ以上何も聞いてこなかった。

「そろそろ行きましょう。装備の準備や点検の時間が無くなるわ」

シノンの言葉に従い、席を立ててエレベーターに乗り込む。

暫くするとシノンが口を開いた。

「貴方達にも、事情があるのは分かったわ。だけど、優勝するのは私よ。だから、本戦で貴方達と会ったら容赦はしない」

そして、今度はリヒターに向かって言う。

「リヒター、こつから先はパートナーじゃないわ。敵同士、手加減したら許さないわよ」

そう言うシノンに、カイ達は目を合わせて頷いた。

「ああ。その時が来たら容赦なく撃つてくれ。全力で、相手をする」

「俺らの事情に、シノンたちを巻き込むつもりはない。だから、全力で戦おう」

「それに、こつちも大会に参加する以上、優勝狙ってるから。そのつもりでね」

キリト、カイ、ミトの順に、好戦的な態度でシノンに言う。

「安心して。シノン相手に手加減はしないからさ」

最後にリヒターがそう言うのと、シノンはわずかに笑い

「ありがとう」
そう言った。

第13話 死銃

《B o B》が始まって30分が経った。

カイは、ミトとキリトの2人と合流するために、フィールドを駆けていた。

「……おかしい」

カイは、2回目のスキャンで全プレイヤーの現在地を確認しながら、呟く。

「どうして、ステルベンがないんだ？」

最初のサテライトスキャンと2回目のサテライトスキャン。

そのどちらでも、ステルベンの姿を認識できなかった。

存在する全ての光点をタップし、名前を搜したが、無かった。

「スキャンで見つからない場所に居るのか？取り敢えず、今は合流が先か」

マップを消し、動こうとした瞬間だった。

突然、カイの後頭部に何かか押し付けられた。

「動くな」

女の声で、そう告げられた。

銃口を押し付けられているのだ、と気付いた時にはもう遅かった。

「両手を頭に付ける」

カイは言う通り、手を後ろに伸ばし、素早く振り返る。

相手の手を掴んでひねり、逆に銃を奪おうとする。

女襲撃者は奪われる前に、足をあげ、カイの手ごと銃を蹴る。

銃は高く舞い上がり、女襲撃者は銃を手にしようと手を上げる。

だが、その動きより先に、カイの右手が動いた。

腰に差したサーベルを抜き、一気に斬り掛かる。

しかし、刃が届く寸前、女襲撃者の左手が閃き、ナイフが飛んでくる。

咄嗟に身を屈め、ナイフを避ける。

同時に、右手で地面を掴み、体を回転させて回し蹴りを放つ。

女襲撃者もしゃがみ込んで避け、低い姿勢のままタックルを仕掛け

てくる。

カイはそれを飛び越え、空中から女襲撃者に追撃する。

着地と同時に振り下ろした剣先は、僅かに届かない。

相手も体勢を整えており、バックステップで回避したからだ。

距離が離れた直後、女襲撃者は踏み込んできた。

カイは着地直後を狙われた為、そのまま地面に押し倒される。

女襲撃者はそのまま、手にした銃《モーゼルM712》をカイの額に押し付ける。

「死ねよ、パラサイト寄生虫野郎が」

「お前……！」

かつて、キリトの《ビーター》同様、嫌われ者の証として呼ばれていた自身の2つ名にカイは反応する。

女襲撃者はフードの下で、カイに対し憤怒の感情を向けて、口元を歪める。

人差し指が動き、引き金が引かれる。

「カイ！」

突如、横からミトが現れた。

女襲撃者は驚き、ミトが現れた方を見る。

一瞬、カイはフードの下から見える女襲撃者の口元が、歓喜を帯びているのが見えた。

だが、カイはすぐにそれを振り払い、女襲撃者を顔を殴る。

怯み、後退りした隙を突き、カイは立ち上がる。

「ミト！」

「ええ！」

カイとミトは、それぞれの銃《コルト・パイソン》と《ベレッタM92F》を抜き、女襲撃者に向かって発砲する。

女襲撃者は、数発身体に食らいながらも後ろに下がる。

そこで、カイとミトは弾が切れ、《サーベル》と《フォトンサイズ》を構える。

女襲撃者は何か迷うようなそぶりを見せるも、不利と判断したのかその場を離れた。

「……退いたか」

カイは安堵の溜息を吐き、サーベルを収める。

「カイ、大丈夫だった？」

「ああ、ミトのお陰でなんとかな」

そう言いながら、カイは首に治療キットを押し当て、HPを回復させる。

「さっきの女、誰なんだろ……」

「分からない。ただ、1つだけ分かることがある。あの女は、SAO サブバイパー 生還者だ」

カイの言葉を聞き、ミトは驚く。

「それ本当なの？」

「ああ。しかも、俺に恨みを持つてるのか パラサイト 寄生虫野郎って言われたよ」
苦笑しながらカイは答えた。

「確かに、当時のカイなら恨まれても仕方ない状況だったけど……そんな今更」

「それより、今は死銃を追おう。さっきのスキャンで、ペイルライダーを見つけた。このまま行くと、鉄橋付近で戦いをするはずだ」

「分かったわ。行きましょう」

頷き合い、2人は走り出した。

鉄橋の様子が見える山岳側に着くと、そこには先客が居た。

「リヒターー！」

名前を呼ぶと、リヒターは驚いたように《ベレッタM93R》を向けるも、相手がカイとミトと知ると、銃を下ろした。

「カイ、それにミトも。こんな所に何のようだい？まさか、2人で組んで俺を倒しに来た？」

「いや、違う。これから起きるだろう戦闘を見届けたいんだ」

「だから、それまで一時休戦と行かない？」

「……そうだね。俺としても、ここで戦って銃声を聞かれるのは嫌だし、その話に乗った」

リヒターは銃を仕舞い、カイとミトは隣に並ぶ。

「それで、誰の戦いを見に来たんだい？」

「ペイルライダーだ」

リヒターの質問に、カイが答える。

「もしかして、君たちの言ってた因縁に関する事かい？」

「そんな所よ」

「そうか……分かった」

リヒターは一先ず納得し、鉄橋を見る。

鉄橋では、ダインが伏射姿勢で銃を構えていた。

暫くすると森林側の鉄橋から青白い柄の迷彩スーツを着たプレイヤー《ペイルライダー》が現れた。

武器はショットガン。

本来なら弾が当たらないように、掩体から掩体へとダツシユして行くはずなのに、ペイルライダーはゆっくりとした足取りで、鉄橋に踏み入る。

ダインのアサルトライフルが火を噴くが、ペイルライダーは鉄橋を支えるワイヤーに左手のみでしがみつき、左手一本で昇り始めた。

ダインも後を追って撃つが、伏撃姿勢では狙いづらいのか、二度目の射撃が大きくズレた。

その隙にペイルライダーは、ワイヤーの反動を利用して、ロングジャンプをし、ダインとの距離をかなり詰めた。

「なるほど、STR型なのに装備を軽量にしたのは三次元機動力をブーストさせるためか。それに軽業^{アクロバット}スキルも高そうだな」

リヒターはペイルライダーの戦いを見て、そう頷く。

ダインは三度銃を撃つがその攻撃もペイルライダーは、前転をするようにして躲す。

「なるっ！」

ダインの声が聞こえ、ダインは空のマガジンを交換しようとする。

だが、その前にペイルライダーの持つショットガンが発砲される。撃たれたダインは大きく仰け反る。

だが、仰け反りながらもマガジンの交換を終わらせる。

そして、頬付けして撃とうする。

しかし、その前にペイルライダーは再び引き金を引く。

また、ダインは大きく仰け反り、体勢を崩した。

ペイルライダーは、もう目と鼻の先のダインに向かって、もう一度引き金を引き、残りのHPを全て奪った。

死体となったダインの体の上に、「Dead」の文字が浮かび上がる。

「ペイルライダー、強いな」

「ええ」

「死銃として考えるべき？」

「どうだろうな……俺的にはどうしてもステルベンが気になるんだが……」

そんなことを考えていると、ペイルライダーの右肩に着弾エフェクトが閃く。

それと同時に、ペイルライダーはその場に倒れた。

「アイツ、どうしたんだ？」

「分からない。急に倒れたみたいだけど……」

「カイ、ミト。発砲音は聞こえた？」

「いや、聞こえなかった」

「私もよ」

「……なら、作動音の小さい光学ライフルかサブレッサーを付けたライフルのどちらかで狙撃したのかな」

「ねえ、リヒター。ペイルライダーの体に妙なライトエフェクトが出てるんだけど」

「ん？……あれは電磁スタン弾だね」

「何だ、それ？」

「当たった瞬間、電流を生み出し、対象を麻痺させる弾だよ。もっとも大口径のライフルでしか使えないし、おまけに一発一発が高い。対人向けより、大型Mob狩りに使われる。ま、この分なら後、数十秒で効果は消えるかな」

「なら、なんのために撃ったの？」

「……そういえばどうしてだろう？」

疑問に思っていると、鉄橋の鉄柱の陰から別のプレイヤーが現れた。

全身を覆う、濃い灰色のフードマント、グリーンマントという奴だ。
「いつからあそこに居た？」

カイは思わず声を上げた。
ミトも覚えてる限り、いつからあそこにプレイヤーがいたのか覚えてない。

まるで行き成り現れた感じだ。

そのプレイヤーの手には、かなりの大きさのライフルがあった。

「あれは、《サイレント・アサシン》！」

ライフルを見て、リヒターが叫ぶ。

「知ってるのか？」

「ああ、正式名称は《アキュラシー・インターナショナル・L115A3》。あれは人を狙撃するために作られたライフルだよ。最大射程距離2000m以上で、専用のサプレッサー付き。撃たれた奴は狙撃手の姿を見ることも無く、そして、音もなく殺される。故に《沈黙の暗殺者》なんて呼ばれてる」

リヒターの説明を聞く中、そのプレイヤーはなめらかな足取りで、ペイルライダーに近づく。

そして、マントの中から一丁の銃を取り出した。

見た目がしょぼく、攻撃力が低そうに見える銃だった。

そう思ってる間に、そのプレイヤーは十字を切り、左手を握りに添える。

そして、引き金を引こうとした瞬間、カイはとてつもなく嫌な予感がした。

引き金が引かれる。

その瞬間、プレイヤーは体を大きく後ろに仰け反らせた。

その後、1発の弾丸がプレイヤーの胸元を僅かに掠め、後ろの地面に大穴を作った。

「今のは!？」

「恐らくシノンだ。この大会で、遠距離狙撃出来て、あれだけの威力が出せるのはシノンの《ヘカートII》だけだ。でも、姿を見られない限り狙撃手の最初の一射は分からないはずなのに……………」

リヒターが疑問を口にしてしていると、男は手にした拳銃でペイルライダーを撃ち抜いた。

だが、HPはあまり減らずに、まだ9割残ってる。

麻痺が解けたペイルライダーはバネのように飛び上がり、ショットガンを構える。

だが引き金を引く前に、ペイルライダーは、両ひざが崩れ落ち、体を右に傾け倒れた。

弱々しい動作で左手で胸を掴む。

その姿は、まるで苦しんでいるように見えた。

そのままペイルライダーは倒れ、体がノイズを思わせる不規則な光に包まれ消滅し、《DISCONNECTION》と文字が浮かび上がり、消えた。

ペイルライダーを撃ったプレイヤーは、戦闘の様子を中継しているバーチャル・カメラに向かって口を開く。

「俺と、この銃の、真の名は、《死銃》……《デス・ガン》だ」

冷たい無機質な奥に生々しい感情の歪みを押し込んだ声が響く。

「俺はいつか、貴様らの前にも、現れる。この銃で、本物の死を、もたらす。俺には、その力がある」

手にした銃が黒い銃は、怪しく光輝く。

「忘れるな。まだ、終わっていない、何も、終わって、いない」

死銃はフードの下で、にやりと笑みの気配を盛らし、あのセリフを言う。

かつて、SAOを恐怖に陥れた、あのセリフを。

「イツツ・シヨウ・タイム」

第13. 5話 帰りを待つ者たち

ALO 空中都市《イグドラル・シテイ》の二画

アスナとキリトの2人が共同で借りてる部屋に、リズ、トバル、シリカ、レオ、クライン、リーファ、ジーク、ピクシーモードのノアとユイの10人がいる。

今日ここに集まったのは《MMOストリーム》が生中継してるGGOの最強者決定バトルロイヤル《第3回BOB》を見るためだ。

エギルは自身が経営する喫茶店兼酒場がちょうど賑わう時間だから来れていない。

ちなみにアスナは今、エギルの店の2階からダイブさせてもらっており、大会が終わったら即行でキリトを捕まえてあれこれ言うつもりでいる。

「それにしてもキリトとカイ、それにミトはなんでまた、ALOからコンバートしてまでこの大会に出ようって思ったのかしら？」

エメラルド色の液体で満たされたワイングラス片手にリズが首を傾げる。

「それがね、なんだがおかしなバイトを引き受けたみたいなの。VRMMOの、っていうか《ザ・シード連結体》の現状をリサーチする、みたいなの。GGOは唯一《通貨還元システム》があるゲームだからって」「ま、どんなゲームでもすぐにコツを掴めるアイツらならこのバイトは適任かもな」

湯飲みに入ったお茶を飲みながら、ソファアに座ってるトバルが言う。

「そう言えば、ミトさんはなんでGGOに？」

レオもジュースを飲みながら、聞く。

「カイ君が心配だから着いて行くって言ってたよ」

その答えに、全員が納得した。

「でも、それなら大会にでなくてもいいんじゃないのか？リサーチだから、プレイヤーに話を聞くとか」

ジークそう言い、全員が首を傾げる。

「もしかして、大会で優勝して、大金でも得ようとしているのかもしれないね。確か、還元できる最低金額が高いって聞いたことありますから」

シリカの発言で、ノアとユイが補足説明をする。

「公式サイトにレートの記載はありませんが、ネット上では還元最低金額はGGO内の通貨で10万クレジット、対JPYのレートは100分の1なので10000円からとなります」

「プレイヤーの登録メールアドレスから電子マネーのチャージ済みコードが送信される形で、優勝賞金は300万クレジットだから、還元すると3万円です」

わざわざ調べてくれた2人にアスナは感謝をし、再び考える。

「還元システムは複雑じゃないみたいね」

「電子マネーをコード化してメールで受け渡しとか、俺たちも良くするしな」

「なら、実地で確かめるまでもないのでは？」

リス、トバル、ジークの順番に各々の考えを言う。

「賞金の3万にくらいつときたつつうセンはあっけどな！」

カウンターで酒を飲んでるクライアントのセリフにリスとトバルが「あんたじゃあるまいし」「お前とアイツらを一緒にするな」と突っ込まれる。

「それにしても、あのキリトとカイ、ミトがここまで動かないとはな」
「バトルロワイヤル形式のPvP対決なら普通、隠れたまま上位入賞って手が通用しませんからね」

「それに、お兄ちゃんの性格からして、戦闘サウンドを聞いてじつと我慢してられるとは思えません」

「それを言うなら、師匠も同じですよ。師匠もああ見えて、我慢するのが苦手ですし」

16分割されたスクリーンにはカイとキリト、ミトの名前は無い。

戦闘中以外の人を映しても面白くない為だが、30分経って、未だに3人の名前が出ない事に、全員が不思議に思う。

もしかしたらすでに死んでしまったのではと思うが、スクリーンの

右端にある出場者一覧では3人とも、状態は《ALIV》で、生きてるのが分かる。

「もしかして、戦うこと以上に、大事な目的があるんですかね？」

シリカがそう言った瞬間、16分割された画面の中央の戦闘が佳境を迎えた。

ダインが銃を構え連射するが、対戦相手のペイルライダーは柔軟な動きで橋の上を縦横に跳び、一気に接近。

そして、ショットガンを立て続けに発砲した。

「あの人強いね。こうしてみるとGGOも面白そうよねえ。銃って作れないのかな？」

「刀……は、無理だよな。でも、ナイフや銃剣……なんなら、サーベルとか軍刀とか作れねえか？」

レブラコリン
工匠妖精族のリズとトバルが鍛冶師としての血が騒ぐのか、それらしいコメントをした。

「お2人とも、まさかGGOにコンバートするなんて言いませんよね？」

「そうですよ。もうすぐ二十層開放のアップデートがあるんですから」

「わかってる、わかってる。どんなゲームにも強い人はいるんだなーって思っただけよ」

「あっちの世界で手に入る素材で刀が打てたらどんなのが作れるか気になるだけだったの」

レオとシリカに突っ込まれ、トバルとリズは手を上げて言う。

「それにしても、このショットガン持ってる人強いわね。きつと、この人が優勝候補……」

リズがそう言った瞬間、ペイルライダーはぼったりと倒れた。

急に画面が変わり、その倒れた人の画面になった。

死んだわけではなく、右肩のダメージ痕を中心に細かいスパークが這い回っている。

「風魔法の《封雷網》サンダーウェブみたい」

その光景に、リーファがそう呟く。

「俺、あれ苦手なんだよなあ。ホーミング性能良すぎるだろ」

対してクラインは、げんなりした表情で言う。

「お前は弱体化魔法全部が苦手だろ。少しは魔法抵抗スキル上げろ」

「へん、やなことだ。侍たるもの魔の文字が付くスキルは取れねえ、取っちゃならねえ！」

「あのねえ、大昔から、RPGの侍は戦士プラス黒魔法なクラスなの！」

クラインとトバル、リズの掛け合いに苦笑しながらアスナは問題の画面をフォーカスし、2本の指で開いた。

今だに倒れているペイルライダーが拡大され他の中継を隅に押しやる。

倒れてから十秒以上経つ。

すると、ばさつと言うサウンドが響き全員がぴくりと体を動かす。

画面の左側から黒い布が現れ、カメラが徐々に引き、その正体を映す。

「…………ゴースト…………？」

誰が呟いたが分からないが、その姿はアインクラッドで闘った幽霊系モンスターに似ていた。

ぼろぼろのマントを着たプレイヤーは肩に大きな黒いライフル銃を掛けている。

誰もが、きつと遠距離狙撃で動きを封じてから、近距離でトドメを刺すのだと思った。

だが、ボロマントのプレイヤーは懐に手を入れ、1丁の黒い銃を取り出す。

「…………しよぼくねえ？」

クラインの言葉に全員が頷く。

「どうみても肩のだけえライフルの方がATK上つぺよな。あつちで撃ちやいいのに」

「弾代が高いとかじゃないですか？ALOでも大魔法は高い触媒を使いますし」

ジークのセリフに一同うむむと考える。

ボロマントは十字を切り、黒い銃でペイルライダーを撃とうとした瞬間、行き成り大きく仰け反り、先程まで心臓があつた位置をオレンジ色の光弾が貫く。

それが、何者かからの遠距離狙撃だと、全員が思う。

そこで、ボロマントのプレイヤーが黒い銃でペイルライダーを撃つ。

放たれた弾丸は胸の中央に当たるとHPはまだ9割残ってる。

そこで、麻痺が解けペイルライダーはバネの様に起き上がる。

そして、持ってたショットガンをボロマントに突きつける形で引き金を引こうとする。

「うわ、大逆転」

リズがそう口走ったが、轟音も、閃光も起きなかった。

ペイルライダーは、両ひざが崩れ落ち、体を右に傾け倒れた。

弱々しい動作で左手で胸を掴む。

その時、ヘルメット越しに見えたかの表情は死に逝く者達を感じる死への恐怖そのものだった。

そして、体がノイズを思わせる不規則な光に包まれ消滅し、《DIS CONNECTION》が浮かび上がり、消えた。

ボロマントのプレイヤーは、バーチャル・カメラに向かって口を開く。

『俺と、この銃の、真の名は、《死銃》……《テス・ガン》だ』

冷たい無機質な奥に生々しい感情の歪みを押し込んだ声が響く。

『俺はいつか、貴様らの前にも、現れる。この銃で、本物の死を、もたらす。俺には、その力がある』

手にした銃が黒い銃は、怪しく光輝く。

『忘れるな。まだ、終わっていない、何も、終わって、いない』

死銃はフードの下で、にやりと笑みの気配を盛らし、あのセリフを言う。

かつて、SAOを恐怖に陥れた、あのセリフを。

『イツツ・ショウ・タイム』

最後に言っただとどしい英語にジークとリーファ以外の全員が

最大の衝撃を受けた。

「う……嘘だろ……あいつ……まさか……」

カウンターで酒を飲んでいたクラインは、酒の入ったコップを落とし、口を震わせる。

「クラインさん、知ってるの!?あいつが誰なのか!?!」

クラインの嗚れ声にアスナが叫ぶ。

「いや、名前までは……。でも、これだけは断言できる」

「ああ。奴は《笑う棺桶》のメンバーだ」

トバルも、声を震わせ言う。

「あの、ラフコフって?」

「えつとね……」

《笑う棺桶》クライン・コフリンのことを知らないリーファとジークにリズが

《笑う棺桶》クライン・コフリンの猛威と消滅について簡略に説明する。

「まさか、キリトとカイの奴、昔の因縁に決着を付けようとGGOに……」

「それなら、ミトの奴も一緒に着いて行った理由も分かる。あの話は、カイにとつちやトラウマだ。傍に居たいって思うのも無理はねえ」

「でも、それだとバイトの話はどうなるんですか?キリトさんと師匠は、誰かに依頼されてGGOに行ったんですよね」

全員が騒ぎ立てる中、アスナは立ち上がる。

「私、一度落ちて二人の依頼主と連絡取ってみる」

「え!?!アスナ知ってるの!?!」

「うん、本当はみんなも知ってる人なの。ここに呼び出して問い詰め
るわ。ユイちゃん、ノア君、私がログアウトしてる間にGGO関係の
ことを調べといて。特に死銃について」

「了解しました」

ノアとユイが同時に声を上げ、ネットから情報を拾う作業を行う。
「じゃあ、みんなちよつとだけ待ってて!」

そう言ってアスナは水色のロングヘアを揺らしてメニューウインドウを出し、ログアウトした。

第14話 死銃追跡

死銃は、高らかに宣言した後、《L115》を背負い直す。そして、そのまま倒れているダインの方に向かって歩く。

カイもミトも、ダインまで殺すつもりなのかと思いきも、死銃はダインを無視し、そのまま姿を現した時に居た鉄柱の陰に隠れ、そのまま姿を消す。

そのまま暫く待つも、死銃が再び姿を現す事は無かった。

「そろそろ時間だ。3回目のスキャンが来るよ」

リヒターに言われ、カイはマップを確認する。

そして、現在のプレイヤーの位置を確認する。

カイとミト、リヒターの3人が固まつてる場所から、少し離れた位置にシノンとキリトの反応があり、鉄橋の傍に死亡状態のダイン。

そして、その近くに死銃が居ると思われる。

「どういう事だ……橋の近くに何の反応もない」

「そんな、嘘でしょ……」

カイに言われ、ミトも確認するも同じらしく無言でマップを閉じる。

「カイ、ミト。とりあえず、シノンとキリトの2人と合流しないかい？」

リヒターがそう言ってきた。

そう言われ、カイとミトは一先ず、キリト達とも合流することを決めた。

リヒターがライトを取り出し、何回か点滅を繰り返す。

すると、キリト達が居る所からも数回ライトが点滅する。

「シノンと決めた合図なんだ」

リヒターはそう言い、先頭を歩き、その後をカイとミトも着いて行く。

数分歩くと、《ヘカートII》を背負ったシノンと、キリトが現れ、カイとミトは安堵の息を吐く。

「2人とも、マップで生きてるのは分かってたけど無事でよかった」

「それはこっちもだ」

「お互いに無事でなによりね」

カイとミト、キリトの3人は互いに無事を喜び、笑い合う。

「リヒター、貴方見てた？」

「ああ。ペイルライダーが回線落ちした……あのボロマンの男が撃った直後に……それも、『ゼクシード』や『薄塩たらこ』の様に苦しみながらだ。まさか、アレが噂の死銃……」

「そんなの、唯の噂でしょ？」

「いや、噂じゃないんだ」

リヒターとシノンの会話に、キリトが割って入る。

「シノン、リヒター。話があるんだ」

「俺たちは、ただ自分の実力を試すためにGGOに来たんじゃないんだ」

「じゃあ……何しに？」

シノンがそう尋ねて来て、カイとキリトは頷き合う。

「俺達は、ある男に頼まれてGGOの調査に来たんだ」

「調査って、なんの？」

「『ゼクシード』と『薄塩たらこ』、この2人はもう亡くなってる」

そう告げると、シノンとリヒターは驚いた表情をする。

「死亡時刻は、死銃、あのボロマンの男に撃たれた時刻と一致してる。そこで、ゲーム慣れしてる俺とキリトに依頼が来て、GGOに来たんだ。死銃と接触し、本当にそんな力があるのかを確かめる為に」
「そんな……信じられない。ゲームで人を殺せるなんて。ううん、それ以前にその話が本当なら死銃は、自分の意志で殺してるってことでしょう？そんな人がGGOに……VRMMOにいるはずがない。私は認めたくない。PKじゃなくて、本当の殺しをするVRMMOPレイヤーがいるなんて」

「いるんだ。死銃は、かつてあるVRMMOで人を大勢殺した。相手が死ぬと分かっているながら剣を振り下ろした。ペイルライダーを撃った時と同じように。そして、俺たちも……」

キリトがそこで言葉を終わらせると、シノンは何かを察したらしく

何も言わなかった。

そして、リヒターも口に手を当てて、黙っていた。

「俺たちはこれからアイツを追う。もしアイツの力が本当なら危険だ。これ以上あの銃でプレイヤーを殺させたらいけないんだ。だから、シノンとリヒターはアイツと会っても戦うな。頼むぞ」

キリトはそう言い、カイとミトの2人と領き合い、死銃が逃げたと思われる方向へ向かおうとした。

「待ちなさい！」

すると、シノンが《ヘカートⅡ》を背負って後を追ってくる。

「私も行くわ！」

「な!?!」

シノンの言葉に、キリトが驚く。

「彼奴らがどこにいるのかも分からないんだから、どの道一緒に居ても同じよ！」

「待ってくれ、シノン！相手はもしかしたら本当に人を殺せる奴かもしれないんだ！」

「そうよ！それに、これは私たちの問題でもあるの！その問題に、貴女を巻き込む事なんて……」

「それでも貴方達は追うんでしょ！危険だと知っていながら、素知らぬフリなんて出来ない！」

カイとミトも、シノンを説得するも、シノンは頑なに協力すると言ってくる。

「…………キリト、シノンの言ってることも一理ある。死銃の脅威がある以上、俺たちの近くに居た方が、何かあったも守れるんじゃないか？」

結局カイが折れ、キリトにそう提案する。

「…………仕方ないか。シノン、協力してくれ。でも、絶対に俺達から離れるなよ?..」

「分かったわ」

シノンが頷くと、黙っていたリヒターも口を開く。

「なら、俺も一緒に行くよ」

リヒターも、死銃追跡に協力すると言い出して来た。

「シノンが行くなら、俺も行くよ。相棒なんだから、当然だ」

「いいのか？お前だって狙われる可能性はあるんだぞ？」

カイが心配して言うと、リヒターは笑みを浮かべながら答える。

「大丈夫だよ。見た感じ、死銃の銃は射程距離が短い。俺の戦い方なら、射程距離に入れずに戦うことが出来る。それに、君たちも、シノンを守る存在が居れば後ろを気にせず、戦えるだろう？」

「それはそうだが……」

リヒターの申し入れに、カイ達はしばらく悩むも、諦めた様に溜息を吐いた。

「分かった、俺たちと一緒に来てくれ。ただ、無理だけはしないでくれ。死銃と戦うのは俺達がする」

「シノンは、隙を狙って死銃の狙撃をお願い。行けると思ったら、私たち事撃ち抜いていいから」

「リヒターは、シノンを守ってやってくれ」

3人の言葉に、シノンとリヒターは同時に首肯した。

「よし、先頭は俺が行く。カイとミトは後ろを頼む」

「了解！」

こうして5人は、一時的なチームを組み、死銃の追跡を開始した。

第15話 《JB》と《スノウ》、そして《リヒター》

「シノン、死銃は狙撃手だ。狙撃手ならどこに向かう?」

5人で、襲い来る敵を蹴散らしながら進んでいると、キリトがシノンにそう尋ねて来る。

「そうね。遮蔽物の少ないオープン・スペースは苦手だと思うから島の中央の都市廃墟を選ぶ可能性は高いわ」

「よし、俺たちも廃墟を目指そう」

廃墟に向かいつつ、カイ達は眼下の川に目をやる。

キリト曰く、装備重量を軽くすれば、川の中を泳いで移動することも可能らしく、おまけにスキャンにも映らない。

もしかしたら、死銃もその方法でスキャンから逃れているのではない、また川を潜って移動してるとしたら、HPが無くなる前にどこかで水上に出る。

だが、川には何も変化は無く、死銃と会うことは無かった。

「会わなかったわね。もしかして、追い越しちゃったとか」

「いや、走りながら川に注目してたから、それはない」

「なら、もうこの街のどこかに潜伏してることね」

廃墟都市を見上げ、ミトがそう言う。

「ああ、次のサテライトスキャンで、死銃を特定したら奴が誰かを攻撃する前に強襲。俺とカイ、ミトで突っ込んで、シノンが援護。リヒターはシノンの護衛。いいな?」

作戦を説明し、キリトが確認を取る。

「いいけど、死銃が本名じゃないって分かっている? キャラネームが分からないと位置を突き止められないわよ」

シノンに言われ、キリトは顎に手をやって、考える。

「確か、初参加は《ペイルライダー》に《銃士X》と《ステルベン》、それに《JB》と《スノウ》、《リンクス》か」

「なら、《ペイルライダー》は殺されたから、死銃の可能性があるのは《銃士X》と《ステルベン》と《JB》、《スノウ》、《リンクス》の5人で、スキャンで廃墟に居た方が死銃ってわけね」

「ああ、だがもし5人共、あるいは複数人が居た場合のことも考えよう」

「銃士Xの銃士を逆にして死銃。Xはクロスで十字……………つての安易すぎかしら」

「いや、その可能性も無くはない。名前なんて安易なものだろ。それより、俺はステルベンが気になる」

「リンクスって奴、ライフルで予選戦つてたよな？あれはフェイクで、本当はあっちのライフルを使ってるって線もあるんじゃない？」

「なら、第1候補を《ステルベン》、第2候補を《リンクス》、第3候補を《銃士X》にしましょう」

「《JB》と《スノウ》はどうする？」

「現時点では、何とも言えないな」

「せめて、接触することが出来ればある程度のあたりは付けられると思うんだが……」

結局、《JB》と《スノウ》は保留とし、第1〜第3候補が廃墟都市に居たら、高い順に狙うことにした。

4回目のスキャンが行われ、5人hあはすぐにマップを操作し、探す。

「廃墟都市に居るのは、《銃士X》だけ！」

「そいつが死銃だ！」

「そして、狙われてるのはおそらく《リココ》」

「中央スタジアムからやや西に離れたビルか」

全員で、銃士Xの居る場所へと向かう。

朽ち果てたスタジアムにつくと、朽ちかけたコンクリートの縁、銃眼の様な三角のひび割れの奥にライフルの銃口が見えた。

「いた、あそこ」

「よし、今の内にアタックする。俺は正面から行く。カイとミトは別方向から。シノンは万が一に備えて援護を。リヒターはシノンを頼む」

全員が緊張した面持ちでキリトの言葉に首肯し、それぞれ行動を開始する。

まずカイが非常階段へと駆けていき、ミトはビルの裏口へと向かう。

キリトは、そのまま正面から入り、銃士Xへと向かう。

正面から入ったキリトはそのまま屋上へと向かい、驚いた。

何故なら、銃士Xが女だったからだ。

死銃の性別は、男なのは間違いがない。

そこで、キリトは自分たちは推理を間違えたと理解した。

キリトの姿を見た銃士Xは臆することなく、堂々とキリトに名を名乗るが、キリトは申し訳なさを感じながら、名乗りの最中の銃士Xを斬った。

「早くカイ達にも知らせないと！」

そう思い、戻ろうとした時だった。

振り返ると、頭陀袋の様な覆面を被った男が現れ、キリトに向けてナイフを振る。

「なっ!？」

キリトは驚きながらも、《ファイブセブン》を抜き、ナイフを受け止める。

「ひゅー♪やるじゃん、《黒の剣士》!さすがだねー」

男は感心したように言うが、すぐにキリトに向かってナイフを振るう。

だが、キリトもすぐに冷静になり、男の攻撃を躲し、後ろに下がる。

「そのふざけた喋り……まさか、お前まで居るとはな……ジョニー・ブラック！」

目の前の男の名は、ジョニー・ブラック。

かつてSAOで多くのプレイヤーを殺した殺人ギルド《ラフィンコフィン》のメンバーであり、《赤眼のザザ》と共に幹部を務めていた男であると、キリトは確信した。

「おいおい……ここで、SAO時代の名前を呼ぶのは、法度だろ？ここじゃ、《JB》って名前なんだよ」

「なるほど……ジョニー・ブラックの頭文字で、《JB》か」

「そういうことだよ!!それじゃあ、死んでくれや!!」

「断る!!」

キリトはそう言いながら、《ファイブセブン》を構える。

裏に回ったミトは、銃を構えながらビル内を移動する。

(このまま屋上まで一気に向かおう!)

階段を駆け上がり、5階まで上がった時だった。

1発の銃声が響き、ミトに当たりそうになった。

幸いにも、弾道予測線のお陰で、奇襲に気づいたミトは、間一髪で攻撃を躲し、そちらに向けて《ベレッタ》を向ける。

そこには、森でカイを襲った女性プレイヤーが、《モーゼルM712》を構えていた。

「ああ……ようやくお会い出来ましたね……」

女性プレイヤーは、ミトの姿を見ると興奮したように声を出し、歓喜に震えていた。

「貴女は……!」

ミトは、その女性プレイヤーの雰囲気にも何かを感じ取り、思わず一歩下がる。

「ふふ、どうしました? 私ですよ?」

そう言うと、女性はフードを取る。

「ああ……やつと会えました……私の愛しい人……」

女性はうつとりとした表情を浮かべる。

「貴女、まさか……! どうしてここに……!」

「どうしてって……私は貴女のこと大好きですから……ずっと探していましたよ……貴女に会うために、ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと……!」

狂ったように叫ぶ、女にミトは確信を持った。

「やっぱり、貴女、《コユキ》ね!」

「はい♡貴女の、貴女だけのコユキです♡ミト様♡ここでの名前は《スノウ》ですけど、《コユキ》と呼ばれる方が、私も嬉しいのでそっちで呼んでくださってもいいですよ♡」

コユキは満面の笑みを浮かべた。

「貴女までどうしてGGOに?!」

「ふふっ♡ミト様が居るなら、私は何処にでも行きますよ♡」

「なっ……!?!」

ミトの質問に答える気がないのか、コユキは銃口を向けてくる。

「そんなことより……ミト様には大人しく捕まってもらいますよ♡安心してください、ミト様を殺したりしませんから♡殺すのは、あのパラサイト寄生虫野郎だけで十分ですから」

コユキの口から発せられた言葉を聞いた瞬間、ミトは身体を震わせた。

「カイを……殺すつもり?」

「はい♡あの男は、私とミト様を引き離れた最低な男です。少々心苦

しいですが、ミト様を人質にあの男を捕まえ、公衆の面々で処刑
……あの男さえいなくなれば、ミト様も目が覚めるはずですよ♡」
「……………」

ミトは黙って聞いていた。

そして、銃を仕舞い、《フォトンサイズ》を構える。

「コユキ……そろそろいい加減にしないさい」

そう言い、《フォトンサイズ》を起動させ、紫色の光刃をコユキへと
向ける。

「私の愛する人をこれ以上侮辱するなら、私は貴女を許さない！」

強い口調で言うミトに対し、コユキは不敵な笑みを浮かべる。

「可哀想なミト様……………あの男に騙されて……………やっぱり私がミト
様を助けて差し上げないと！」

コユキは《フォトンソード》を取り出し、2人は向かい合う。

「取り敢えず……………手足を斬り落として動けないようにしてあげます
ね♡大丈夫ですよ？動けないミト様は、私がお守りしますから！」

「そんなの、お断りよ！」

「リヒター、私たちも行きましょう」

「……………ああ」

シノンは、3人を援護できるスタジアムから南西にあるビルに向か
おうとする。

「なあ、シノン。さっきの、死銃が銃士Xかもって推理だけど。あれ、

間違ってると思うんだ」

「えっ、どうして?」

歩きながら突然そんな事を言い出したリヒターに、シノン疑問の声を上げる。

その直後、シノンの左腕に激しい衝撃を感じ、撃たれたと分かった。だが、逃げる前に足が動かなくなり、路面に棒倒しになった。

両眼を投げ出された左腕を見下ろすと、腕に何やら銀色の針のようなものが刺さっていた。

そしてそこから青白く糸のようなスパークが起きていた。電磁スタン弾だ。

シノンは瞬時に、自分が死銃に撃たれたと理解した。

だが、弾が飛んで来たのは南側。

銃士Xが居るのは北側。

明らかに、違かった。

そう思った時、南に約20m離れた空間に何者かが突然現れた。

それは、死銃だった。

まるで幽霊の様に突如姿を現した事にシノンは驚く。

だが、瞬時に理解した。

(メタマテリアル光歪曲迷彩!?)

メタマテリアル光歪曲迷彩とは、装甲表面で光をすべらせて、自身を不可視化する究極の迷彩能力で、一部の高レベルネームドMobだけが持つ技。

モンスターが導入されるとは説明に無かったので、シノンは、死銃の身に纏うボロメントが、レアアイテムだと察し、リヒターを見る。

「リ、リヒター……!逃げ……!」

シノンは、リヒターに逃げるように促そうとするが、リヒターはその場に立ったまま、動かなかった。

「ああ……やっとだ……やっと一緒に居られるよ……!」

リヒターはそう呟き、額を押さえる。

そして、笑いながら髪を掻き上げ、シノンを見下ろす。

その目は、普段の優しいリヒターから想像できない程、狂った笑み

をしており、シノンは恐怖を覚える。

「ふふっ……シノンには悪いけどね。もう、我慢の限界なんだ……」

「リ、リヒター!?何を言ってるの!?!」

訳の分からない事を口走るリヒターに、シノンは困惑しながら問いかける。

「ようやくだ……ようやくだよ。これで、君を僕だけのものに出来る、朝田さん」

第16話 狙撃手のプライド

突如、自身の本名を言うリヒターに、シノンは驚き、困惑した。
何故、リヒターは自分の本名を知っているのか。

「リヒター……なんで……!」
「不思議かい? どうして、シノンの本名を知っているのか? それはね……」

リヒターは愉快そうに笑い、シノンに真実を告げた。

「新川恭二……それが僕の名前だって言えば分かるよね?」

「う……嘘……」

「嘘じゃないさ。リヒターはサブ垢で作った、GGOでの新しいアバターさ。《シユピーゲル》と違い、STR特化の最強のプレイヤー。本当の僕さ」

「ずっと……騙してたの……?」

「騙すなんて、酷い言い方だなあ。むしろ騙されてたのは、僕の方さ。ゼクシードのクソ野郎がAGI特化型最強とか大法螺拭いて、GGOで最強になれたはずの《シユピーゲル》はM16すら装備出来ない哀れな奴になってしまったんだからね。だけど、それももうおしまいだよ。新しい僕は無敵なんだ! 《リヒター》は最強なんだよ!」

リヒターは両手を広げ、歓喜し、酔いしれる。

だが、すぐに笑みを引っ込め、暗い表情をする。

「ねえ、シノン。どうして《リヒター》なんだい? なんで、《シユピーゲル》じゃないのさ? どうして君は……《リヒター》を愛して、《シユピーゲル》を愛してくれない?」

シノンを見つめる瞳の奥に、どろっとした薄気味悪い感情を見せて、リヒターは尋ねる。

「どうして僕の事をもっと見てくれないんだい? どうして《シユピーゲル》じゃなくて、《リヒター》なんだ!? どうして、僕を選んでくれないんだ!!」

リヒターは絶叫し、シノンに言う。

「おい……落ち着け……」

絶叫するリヒターに、ボロマンツの男《死銃》^{デスガン}が声を掛ける。

「さっさと……終わらせろ……」

「……………分かってるよ、兄さん」

そう言い、リヒターは《死銃》^{デスガン}から、1丁の銃を受け取る。

(今だ！)

リヒターの視線が外れた瞬間、シノンは痺れる右腕を何とか動かして、副武装の《MP7》^{デスガン}を手にする。

リヒターは《死銃》^{デスガン}から銃を受け取る為、シノンから視線を外している。

《死銃》^{デスガン}もリヒターに銃を渡す為、シノンの方を見ていない。

(この至近距離なら！)

そう思い、引き金を2人に向けて引こうとした。

それと同時に、リヒターは受け取った銃をシノンへと向ける。

その銃がシノンの視界に入った瞬間、《MP7》の引き金を引こうとした指が動かなくなった。

指だけでなく右腕が、全身が固まり、手にした《MP7》が震え、標準がブレる。

銃のクリップに円が刻まれ、その中にある黒い星。

リヒターが受け取った銃は《黒星・五十四式》^{ヘイシン}。

《デザートイーグル》や《M500》よりも、小口径でダメージ量も低い、弱い銃。

だが、シノンにとってその銃はどの銃よりも恐ろしい物だった。

「あつ……ああ……………」

右手から《MP7》^{デスガン}が落ちる。

「怖いかい、シノン？でも、大丈夫。僕もすぐにそっちに行くよ。あの世で、2人つきりで幸せになろう」

リヒターは狂った笑みを浮かべ、十字を切り、銃口をシノンへと向ける。

後は引き金を引くだけでシノンは終わる。

その瞬間、1発の銃声が響いた。

《黒星》^{ヘイシン}の物ではない。

何が起きたのか、シノンは一瞬理解できなかった。

銃声が響いた後、リヒターの腕は大きく弾かれ、その衝撃で《黒星》^{ハイシン}は吹き飛ばされていた。

「ぐっ!？」

「隠れる……!」

腕を押さえるリヒターを、《死銃》^{デスガン}は肩を掴んで引つ張り寄せ、近くの物陰に隠れる。

《死銃》^{デスガン}はL115を構え、弾倉を電磁スタン弾から338ラプア弾に変え、発砲音がした方角に向けて撃つ。

しゅこつ、と減音された音が響く。

それと同時に、リヒターと《死銃》^{デスガン}の2人と、シノンの間にスモークグレネードが落ちて、周囲に煙幕を焚いた。

煙幕がシノンを含むと、突如、何者かがシノンへと接触しシノンを肩に担ぐ。

右肩にシノンを乗せ、左手でシノンの《ヘカートII》を持ち、更には《MP7》も回収し、その人物は全速力でその場を離脱した。

(え? 誰……?)

シノンは自分を抱えるのが誰なのかを見る。

黒いロングヘアで、腰にはサーベルを吊り、眉間には皺が寄つてる男性プレイヤー。

カイだった。

「カ……カイ……!」

「無事か、シノン! 間に合つて良かった!」

カイはシノンを抱え、走りながら言う。

だが、カイのSTR値を以てしてもシノンに加え、《ヘカートII》の重量を抱えるには要求値が足りず、普段以上にスピードが出せないでいた。

「このままじゃ、追いつかれる……私は置いて行って……!」

「馬鹿言うな! 置いて行くわけないだろ! それに、対策は取つてある!」

その言葉と同時に、2人の目の前にジープが現れる。

「カイ！乗れ！」

ジープを運転していた何者かは、カイに向かって叫ぶ。

カイは、跳躍してジープに乗り込む、

「出せ！」

カイがそう言うのと、その何者かはアクセルを踏み、その場から走り出す。

「このままあの建物を迂回するように通ってくれ！」

運転している何者かに、カイはそう言うのとシノンを後部座席に寝かせ、《コルト・パイソン》を抜き、上空に向けて発砲した。

3発連続で撃ち、その後、一拍置いて残りの残弾を撃つ。

ビル内で、コユキと戦っていたミトは攻めあぐねていた。狭いビル内では、《フォトンサイズ》での戦闘は相性が悪く、ミトは決定打を打てなかった。

対して、コユキは《フォトンソード》の扱いに慣れていられるらしく、狭いビル内でも戦えていた。

「どうしたんですかミト様？さっきから防戦一方ですよ？」

コユキは愉快そうに笑い、赤い光刃を揺らし、ミトを攻撃する。

（くっ！やっぱ、鎌だと狭い室内での戦闘は無理があるわね！）

コユキの攻撃を躲しながら、ミトは焦る。

（一旦退却するべきだけど、廃ビルの中がどうなってるか分からない状態で闇雲に逃げるのは……………）

頭の中で策を練っていると、外から銃声が聞こえた。

「くそー！」

「よつと！危ねえ危ねえ！」

屋上で、キリトの《フォトンソード》の攻撃を躲し、ジョニー・ブラックは笑う。

「流石は《黒の剣士》！いい腕だ！ソードスキルの再現も様になってる！ここがSAOだったら、今頃俺の胴体は真っ二つだぜ！でもなあ……………」

ジョニー・ブラックはニヤリと笑い、ナイフを振るう。

「いくら似てても本物のソードスキルには遠く及ばねえんだよ!!」

キリトは、ジョニー・ブラックを攻撃する際は、使い慣れた《片手剣》のソードスキルの技で攻撃していた。

最早、身体に染みついたと言っても過言ではない動きから放たれる攻撃は、ソードスキルと見間違うほどだ。

だが、システムアシスト無しでの攻撃では、本来のソードスキル並みの速さは出せず、更に、ジョニー・ブラック自身《片手剣》のスキルは見飽きてると言っても良い物なのでキリトの再現ソードスキルを

躲すのは容易かった。

「ぐっ!?」

ジョニー・ブラックのナイフを《ファイブセブン》で受け止めたキリトだったが、その威力に押されて後退する。

(だが、この距離なら躲すのは難しいだろ!)

距離を詰められたことで、キリトはジョニー・ブラックのナイフを銃で受け止めながら、右手の《フォトンソード》を振る。

「そしてえー!」

ジョニー・ブラックは左腕を振るい、袖から新たなナイフを出し、空いてる左手に装備する。

《二刀流》もテメエの専売特許じゃねえ!」

左手のナイフを突き出し、刃がキリトに迫る。

「くそっ……!」

やむを得ずキリトは後ろに下がり、ナイフを回避する。

「ひゅ〜!やるねえ、《黒の剣士》!」

ジョニー・ブラックは余裕綽々と言った様子で、ナイフを構える。

(くっ!戦い辛い……!剣の重さを感じれないだけで、ここまで戦闘に影響があるなんて……!)

手にした《フォトンソード》を見つめ、キリトは歯噛みする。

(早く情報をカイ達に伝えないといけないのに!)

焦りばかりが募り、キリトの動きが鈍くなる。

「おいおいどうした?さっきまでの勢いはどこ行ったんだ?」

ジョニー・ブラックの言葉を無視し、キリトは必死に打開策を考える。

(一旦退くべきか?いや、あいつは絶対に逃してくれない筈だ……。何か方法はないか?)

キリトが再び考え始めたその時、銃声が聞こえた。

(今の銃声、カイのだ！)

銃声を耳にしたミトは、直ぐに動いた。

ミトは、ポーチから出したスモークグレネードを取り出し、コユキへと投げつける。

狭い廊下に白煙が焚かれるのを横目に、ミトは一目散にコユキとは反対方向に向かう。

(銃声が聞こえた方から考えると、恐らくカイが居るのは！)

ミトの目の先には、窓があった。

ミトは《ベレッタ》を抜き、窓に向けて発砲する。

銃弾は窓を破壊し、粉々になったガラスと共に、ミトは窓から飛び降りる。

そして、飛び出した先の真下には、ジープが止まっていた。

「ミトー！」

ジープの後部座席にいたカイは、手を広げる。

ミトは躊躇なくその腕の中へ飛び込んだ。

ミトがビルから飛び出したのと同時にキリトは、ジョニー・ブラツクに背を向け走り出し、そのまま屋上から飛び降りた。

そして、ジープの助手席へと落下する。

「出せー！」

ミトとキリトの2人がジープに乗ったのを確認すると、カイは運転しているプレイヤーに向かって命令する。

「分かってるー！」

プレイヤーは、そう言いアクセルを全開にし、勢いよくジープを前進させた。

ジープは、勢いよく道路を走り抜けていく。

「カイ、何があったんだ！」

「カイの銃の発砲音が聞こえた時は驚いたけど、何があったの？」
銃を3回発砲した後、一拍置き、再度3回発砲したら、戦闘中であってもすぐに集まる緊急時の合図。

それが聞こえた為、ミトとキリトはコユキとジヨニー・ブラックとの戦闘を中止し、こうして集まった。

「詳しい事は後だ！簡潔に言うよと、シノンが死銃に襲われた！そして、リヒターは死銃の仲間だ！」

「……マジかよ」

「そんな……」

2人は信じられないといった表情を浮かべる。

「とにかく今は、この場から離れるぞ！」

カイはハンドルを握るプレイヤーに指示を出す。

ジープはそのまま猛スピードで街中を駆け抜ける。

しかし、

「……もう来たのか」

後方から死銃が、金属フレームとギア類をむき出しにしたロボットホースに乗り追って来た。

更に死銃だけでなく、ジヨニー・ブラックとコユキ、そしてリヒターがサイドカー付きのバイクに3人乗りで、追いかけて来た。

「くそっ！ミト、キリト！応戦するぞ！」

「ええー！」

「ああー！」

カイとミト、キリトの3人は銃を抜き、後方に向けて撃つ。

だが、銃の扱いに不慣れな3人では、当たる筈もなく全て外れてしまふ。

「このままだと追い付かれる！」

カイは《コルト・パイソン》をリロードしながら、焦った声で言う。
(カイ達が戦ってる……私も……戦わないと……！)

戦うカイ達を見て、シノンは震える身体を無理矢理起こして、《カートII》を構える。

距離はおよそ、200m。

不安定なジープの上からでも、普段のシノンの腕なら決して外す事は無い距離。

「え……なんで……」

だが、シノンはトリガーが引けなかった。

何度やっても、どれほど力を込めてもトリガーが引かれることは無かった。

「……引けないよ……なんでよ……トリガーが引けない……!」

その事に困惑し、動揺している内に、死銃たちとの距離は詰められる。

距離が100mまで縮まると、死銃は《黒星》^{ヘイシン}を抜き、シノンへと狙いを定める。

そして、銃口からオレンジ色の炎が吹き、死の弾丸がシノンへと放たれる。

だが、銃弾はシノンに当たらず、シノンの横を通り過ぎる。

「嫌あああ!」

シノンはとうとう悲鳴を上げた。

「やだよ……助けて……助けてよ」

赤ん坊のように体を縮めて弱々しい声を上げる。

「ちっ、しっこい連中だな」

すると、運転していたプレイヤーはハンドルから手を離れた。

「おい、お前。運転代われ」

「はっ!? アンタ、急に何を!?!」

そのプレイヤーはキリトに運転を強引に変わってもらい、ジープの上で立ち上がる。

そして、脇に置いてあって自身の銃《三八式歩兵銃》を構え、そのプレイヤー、リンクスはスコープを覗き込む。

「揺れが酷いが、まあいいか」

リンクスはニヤリと笑うと、銃口を死銃に向ける。

そして、怯えるシノンへと声を掛けた。

「なぜ撃たない?」

リンクスの言葉に、シノンはビクツと反応する。

「そのままじゃ殺されるぜ？なら、なぜ撃たない？」

「だって……だって……！怖い……！あいつが怖くて……！」

「怖いか……なら尚更だ。なぜ撃たない？」

シノンに声を掛けながら、リンクスは狙いを定める。

「逃げて、怯えて死ぬぐらいなら、最後まで立ち向かうんだろ？なら撃て」

リンクスの言葉にシノンは覚悟を決めたのかのろろとした動作でヘカートを構え、スコープを覗く。

トリガーガードの中の指を動かし、トリガーを引こうとするがやはりトリガーは引けなかった。

「撃てない……撃てないの。指が動かない。私……もう戦えない」

「できる。その銃はお前自身だ。お前が撃つと決めたら、引き金は引ける。今のお前に、まだ狙撃手としてのプライドが少しでもあるなら………決めろ」

そして、リンクスは引き金を引いた。

放たれた弾丸は、死銃ではなく、ロボットホースへと向かう。

しかし、《三八式歩兵銃》程度の弾丸では、ロボットホースを破壊することはできない。

破壊するなら高威力の銃、それこそシノンの《ヘカートⅡ》並みの代物が要る。

だが、《三八式歩兵銃》の弾丸が当たった瞬間、ロボットホースはバランスを崩し、そのまま火花を散らして転倒した。

リンクスは、剥き出しになっている部分からギアを撃ち抜き、ギアを破壊してロボットホースを内部から破壊した。

騎乗していた死銃は驚きながらも、転倒の直前にロボットホースを飛び降り、無傷だった。

続けて、リンクスは発砲する。

今度は、サイドカー付きのバイクのタイヤに命中し、バイクが横転する。

「やれ、シノン！」

リンクスが叫んだ。

その瞬間、殆ど反射的にシノン引き金を引いた。

そして、放たれた弾丸は夕闇に螺旋の渦を穿ち突進する。

弾丸は死銃にも、誰にも当たらない。

右側に逸れる。

外した。

マガジンに弾はまだ残ってるが、シノンにボルトハンドルを引く気力はもうない。

だが、《冥界の女神ヘカートⅡ》がミスショットを許しはしなかった。

弾丸はアスファルトに穴を開ける代わりに、横転してる大型トラックの腹を貫いた。

そして、そこから小さな炎が漏れ、トラックは爆発炎上した。

「お見事」

その光景を見て、リンクスはシノンに向けて優しく微笑み、言った。

第17話 エゴ

「ここで次のスキャンを回避しよう」

死銃たちを撒くと、カイたちは砂漠エリアにある洞窟に身を隠し、スキャンをやり過ぎすことになった。

「そう言えば、どうして死銃はスキャンに映らず、そして、川も潜らないでシノンに接近出来たんだ？」

回復キットでHPを回復しながら、キリトが尋ねる。

「《メタマテリアル光歪曲迷》オプティカル・カモよ。一部の大型ネームドMobが持つ能力。そう言った効果を持った装備があってもおかしくない」

まだ震えの治まらないシノンは洞窟の中で、蹲り、自身の身体を抱きしめながら言う。

「なるほどな。なら、ここは安全だろう。下は荒い砂だから足音が分かるし、足跡も残る。音に注意してれば大丈夫だな。リンクス、念のために洞窟内から周囲を警戒しておいてくれ」

「分かった」

カイに言われ、リンクスは洞窟から出ない程度の位置で、双眼鏡を使い、外を監視する。

「シノン、大丈夫か？」

カイはシノンの前でしゃがみ、視線を合わせて尋ねる。

「……大丈夫、とは言い難いかも」

「そうか……そんな状態でよく頑張ったな」

そう言い、カイはシノンに微笑む。

「ほら、回復しとけ」

シノンの分の回復キットを渡し、シノンはHPを回復させる。

「ねえ、どうしてあの時、早く私の下に来れたの？」

回復していくHPを見ながら、シノンがカイに尋ねる。

「リンクスのお陰だ」

カイは、入り口で外を見張ってるリンクスを見る。

「《銃士X》の所へ向かう途中に、リンクスと会ってな。リンクスから、リヒターが死銃と思しき奴と接触していることを聞いて、急いで戻っ

たら案の定、シノンが撃たれる直前だった。後は知つての通りだ」
「……そっか」

それだけ言うと、シノンは再び黙り込んでしまう。

「リンクス、外の様子はどうだ？」

「近くに接近する人影はない。足跡も見えないし、奴らはここまで追つて来れてないはずだ」

「なら、当面の間は大丈夫か」

そう言い、カイは銃の残弾とサーベルの耐久値を確認する。

「俺たちは行く。シノンはもう少しここで休んでろ」

立ち上がり、そう言うカイにシノンは驚く。

「え……アイツらと戦うの？」

「ああ、彼奴の銃や、装備、ステータス以上に彼奴自身の力が突き抜けてる。さつき逃げ切れたのも半分奇跡だ。これ以上、シノンを付き合わせるわけにはいかない」

「それもそうね。彼奴等にこの場所がバレてないなら、暫くは安全だし」

「元々は俺達の因縁みたいなものだしな。ここまでありがたいな、シノン」

カイ達3人からそう言われ、シノンは思った。

（この3人……どうしてこんなに強いんだろう……相手は、人を簡単に殺せるような奴なのに……どうして立ち向かえるの……）

そう思った瞬間、恐怖を押し黙らせ、シノンは口を開く。

「私、逃げない」

「え？」

「逃げない。隠れない。私も外に出て戦う」

横に置いてあって、《ヘカートII》を手にし、シノンはそう言う。

「ダメだ。あいつに撃たれれば本当に死ぬかもしれないんだ。俺たちは近接戦闘タイプで、防御スキルも色々ある。だが、シノンは違う。姿を消せる死銃に零距离から不意打ちされたら危険は俺たちの比じゃない」

「死んでも構わない。……さつき、凄く怖かった。死ぬのが恐ろし

かった。5年前の私より弱くなっていて、情けなくて、悲鳴を上げて……でも、それじゃあ駄目なの。そんな私のまま生き続けるなら死んだ方がいい。もう、怯えて生きるのは疲れた」

「随分と様子が変わったな」

恐怖を押し込めて立ち上がろうとするシノンに、監視をしていたリンクスが言う。

「さっきまで怯えていた姿が嘘みたいだ……だが、所詮はハリボテ。簡単に壊れる見せかけの物だ」

シノンに近付き、リンクスはシノンの前に立ち塞がる。

「お前の本音を言ってみろよ。死んでも構わないってのは嘘だろ？」

「嘘なんかじゃ……無い。逃げて、怯えて死ぬぐらいなら、最後まで立ち向かって死ぬ。あの銃口に向かって死んでやる。別に付き合ってくれなんて言わない。1人でも戦える」

「1人で戦って、1人で死ぬ気か？」

「……そうね。それが、私の運命なのよ」

何処か諦めきつたように言うシノン。

そんなシノンに、リンクスは前髪を掻き上げる様に撫で、溜息を溢す。

「そうかい……なら」

そう言うと、リンクスは腰のホルスターから《南部式大型自動拳銃》、通称《グランパ・ナンプ》を抜き、シノンの額に合わせる。

「ちよっ!?あなた!」

「お前!何を!」

行き成りの行動に、ミトとキリトはリンクスに武器を向けようとするが、それをカイが制する。

「カイ!」

「なんで止めるんだ!」

「いいから黙ってみてろ」

そう言い、カイはリンクスとシノンを見る。

銃口を突き付けられたシノンは、思わずリンクスの目を見る。

そして、戦慄した。

自身を見つめるリンクスの目が、死銃と同じように見えた。気が付けば、リンクスの手にした銃も《黒星》^{ヘイシン}に見え出す。

呼吸が速くなり、目の焦点も合わなくなり始め、身体も震え出した。

「今この場で、死ぬか？」

「え……し……死……！」

「死んでも構わないんだろ？」

「そ、それは……！」

「話が違うつて？死銃に撃たれて死ぬのは本望、それ以外で撃たれて死ぬのは御免つてか？くだらないな」

リンクスは吐き捨てる様に言い、笑う。

「この世に運命なんてもんは存在しない。あるのは、人のエゴさ。お前がどんな死に方を望もうと、俺の行動一つでお前の最期は決まる」
「あ……ああ……」

シノン目は見開き、掠れた声を漏らす事しか出来なかった。

「キリト、それとミトだったか？お前たちはどうだ？これまでの人生、全てが自分の望んだものだったか？」

リンクスは、シノンに視線を向けたまま、キリトとミトに問い掛けた。

しかし、リンクスの問いにキリトとミトは答えれなかった。

「沈黙は是と捉えるぞ。分かったか？お前が強いと思ってるこいつらも、望んだ結果を得られ続けられなかったんだ」

「なら……どうしたらいいのよ……！」

すると、シノンは声を振り絞って、叫んだ。

「彼らが、私と同じ望んだ結果を得られなかったなら、私はどうしたらいいのよ!?カイもミトも、キリトも立ち向かおうとする力があるのに、私にはそれが無い！私は……人殺しの私は、一生あの亡霊に怯えて、過ぐすしか出来ないの!？」

シノンの言葉を聞き、リンクスは呆れた表情を浮かべた。

「まだ少しだが、ようやく本音を出したな」

リンクスは銃を下ろし、銃を持っていない手で頭を搔く。

「どうしたらいいか、だったな？簡単な事だ。この世が、人のエゴで

回ってるって言うなら、お前もお前自身のエゴを貫けばいい」
「え？」

「お前は どうしたい？ 死銃相手に戦って死ぬのか？ それとも………その銃と共に、自分の過去テメーの亡霊とやらを撃ち抜くのか？」

リンクスの言葉に、シノンはずかず《ヘカートⅡ》を見る。

「……………生きたい」

シノンの口から、そう言葉が漏れた。

「私は……弱いまま、怯えて、逃げ続けたくない………強くなって、胸を張って、堂々と生きて居たい……………！」

涙を流し、シノンはそう言った。

逃げて、怯えて死ぬぐらいなら、最後まで立ち向かって死にたいと言っていたシノンが、口にしたのは生きたいと言う言葉だった。

紛れもない、シノンの心からの本音だ。

「それでいいんだよ」

リンクスは、穏やかそうに笑い、シノンの頭に手を置く。

「他人のエゴに振り回されて生きて行くななんて、真っ平御免だろ？ こっちだって多少のエゴを振りまいたって、誰も文句は言わねえさ。それで、誰かが文句言うようなら、俺が言わせねえ」

不敵に笑い、リンクスは言う。

「文句言う奴は、その口を片っ端から撃ち抜いて喋れなくしてやるよ」

リンクスの言葉を聞いて、シノンは笑った。

物騒ながらも、リンクスの言葉はシノンを思いやっつての言葉だからだ。

「……………ありがとう」

「俺が勝手にやることだ、気にすんな。ま、俺のエゴって奴だ。それに、ガキは大人の好意に甘えるもんだぞ」

「え？」

聞き覚えのある台詞に、シノンは思わず驚いた。

「それでこれからどうするよ、カイ？」

リンクスは《グランパ・ナンブ》を仕舞いながら、カイに尋ねる。

「そうだな。とりあえず、一旦全員の持つてる情報を出し合って、作戦

を立てよう。ミト、キリトもそれでいいか？」

「あ、ああ、それはいいんだが……………」

「その前に、1つ聞かせて」

そして、ミトとキリトはリンクスを指差した。

「なんでカイはソイツと親し気なのよ（なんだよ）!？」

ミトとキリトは、同時にそう叫んだ。

「なんだよカイ、まだ言ってなかったのか?」

「そう言えば、言う時間なくて言ってなかったな。丁度いいし、今説明する」

カイはそう言って、リンクスを紹介する。

「名前は知ってるだろうけど、リンクス。俺の、現実リアルでの高校時代の親友だ」

「どうも、カイの親友のリンクスだ」

「……………」

「親友うううううううううううううううううううううう!!?」

第18話 真相

「と言うわけで、GGOをやってるリンクスに、GGOで情報を集めてもらったり、BOBに参加してもらって死銃へ対抗するための戦力になつて貰った」

カイはたんたとミトとキリトに、リンクスの事を説明した。

だが……………

「おい、カイ。この2人、思考が停止してるぞ」

リンクスの言う通り、ミトとカイは突如現れたカイの親友「リンクス」の存在に、情報を処理しきれず、思考停止に陥った。

「そんなに驚くのか？」

「驚くだろ？俺だつてお前に彼女が出来たつて聞いたときは驚いたんだからな」

「そうだったのか？」

暢気そうに話すカイとリンクス。

そして、唐突に登場したリンクスに困惑するミトとキリト。

そんな中、シノンが口を開く。

「ねえ、こんな時になんだけど……………貴方達に聞いてほしい話があるの。私の……………過去の話」

シノンの言葉に、全員がシノンの方を向く。

ミトとキリトも、困惑から回復し、そちらを見る。

「シノン、その、いいのか？別に無理しなくても……………」

なんとなくシノンの様子から、シノンがただならぬ過去を持っていると察していたカイは、シノンにそう言う。

「別に無理をしているつもりはないわ。ただ、貴方達を見ていると、自分の過去を隠していたくないって思ったの。それに、弱いまま過去に怯えて、逃げたくない……………強くなつて、胸を張つて、堂々と生きてい。そのために今一度、自分の過去と向き合いたい。だから……………聞いて」

シノンの決意に、4人は頷く。

「わかった。なら、聞かせてくれ。シノンの、過去を」

「ありがとう」

シノン は、自分の過去を語った。

幼い頃、交通事故で父親を失った事。

その父親の死を間近で見ていることで、精神を病んでしまった母親の事。

そんな母を守るために強くなろうと決めた事。

そして、5年前の郵便局強盗事件と、その結末を。

カイたちは口を挟まず、黙って聞き続けた。

「これが、私の過去……向き合わなければいけない過去よ」

やはり話すのが辛いらしく、郵便局強盗事件辺りを話し始めてからシノンは体を震わしていた。

「……………シノン、俺も人を殺した」

そんな中、カイがそう言いだした。

「俺は、家族を殺されてる」

カイは淡々と過去を語った。

カイの過去を聞くのはミトとキリトは二度目であるが、やはり辛そうな表情でカイを見ていた。

「その話、久しぶりに聞いたな……………」

リンクスは髪を撫で上げながらそう言う。

「そんな殺人を嫌悪する俺が、人を殺した。……………《ソードアート・オンライン》で」

《ソードアート・オンライン》の名に、シノンは反応する。

「それって!？」

「ああ。HPが尽きれば現実でも死ぬ、最低最悪のデスゲーム。俺はそこから帰って来た、《SAO生還者^{サバイバー}》なんだ」

カイの言葉に、シノンは信じられないと言った表情を見せる。

カイが人殺し。

その事に驚きを隠せなかった。

だが、シノンはカイが自分の悦のため殺人を殺すような人ではないと確信があった。

出会ってまだそんなに月日が経ってない。

にも関わらず、シノンはカイの事を信頼していた。

「何が、事情があったのよね」

シノンは確信を以って尋ねた。

「事情なんてもんはないよ。ただ、誤って人を殺して、自棄になって殺しをした。それだけなんだ」

カイは悲しそうに呟く。

「それでも……私は、貴方が自分のエゴで人を殺したとは思えない」

「シノン？」

「そんな辛そうに、そんな目をして……人を殺した過去を吐露する貴方が、自分のエゴで人を殺すとは思えない。……私の勝手な想像だけ」

「そっか……そう思ってくれるなら嬉しいよ。ありがとう」

シノンの言葉を受け、カイは微笑む。

「いい感じに空気が温まったな。そちらさんも、だいぶ思考は回復したみたいだし、本題に入らないか？」

リンクスがそう言いだし、5人は本題へと入る。

「謎は色々山積みだが、一番に考えないといけないのは、死銃への対抗だと思う」

キリトが顎に手をやって言う。

「まず、死銃はどうやってプレイヤーを殺すのかから考えよう。そこから対抗策を考えるんだ」

「と言っても、今の所、対抗策はあの銃に撃たれないぐらいしかないわね」

「でも、アミユスフィアはナーヴギアほどの出力は出せない様になつてるはずよ」

「そういえば2人には言っていなかったな。《ゼクシード》と《薄塩たらこ》は脳の破壊じゃなく、心不全で殺されたんだ」

カイが言い忘れていたことを伝えるとリンクスは不思議な顔をした。

「心不全？VR関係だから脳かと思たんだが違うのか。なら、原因はVRゲームでも、アミユスフィアでもないのか」

「まさか、本当に超能力……………とか？」

シノンは声を少し震わせて言う。

「仮想世界から銃を撃って、生身の人間を殺す方法なんて存在しない
と思いたいが、こればっかは犯人を捕まえて直接聞くしかないな
……………いや、待てよ」

すると、カイは何か気づく。

「あの銃で、現実の人間も殺せるなら、どうしてあの時、死銃はあの銃
で俺を撃たなかった？」

「あの時？」

「シノンを助けた時だ。あの時、俺はシノンとシノンの銃を抱えて逃
げてた。それほど速くないし、距離も100mもなかった。有効射程
距離つてのがどのぐらいか分からないけど、ジープに乗ってるシノン
を、馬の上からあの銃で撃てるだけの技術はあるんだ。なんでわざわざ
弾を当てれば確実に葬れる銃じゃなくて、ライフルの方を使ったん
だ？」

「そう言えば、ペイルライダーを殺した時、近くにダインもいたのに殺
さなかったわ。アバターは残ってたし、HP関係なく殺せるならHP
が無くても殺せるはず……………」

カイとシノンの言う通り、何故死銃はあの時カイをあの銃で撃たな
かったのか？

どうしてダインを撃たなかったのか？

「シノン、リンクス、《ゼクシード》《薄塩たらこ》《ペイルライダー》そ
してシノンの4人で共通してることってないか？」

「共通……………しいて言うなら全員《AGI特化型ビルドじゃない》つ
てぐらいだ」

「でもちよつと無理があるわ。STRに偏ってたり、VITに偏って
たりするし」

「なら、《ペイルライダー》は初出場だから除いて、《ゼクシード》《薄
塩たらこ》の2人と話したことあるか？」

「俺はどちらともないな」

「《ゼクシード》と話したこと無いわ。《薄塩たらこ》とは少し話したところあるけど」

「どんな話だ？」

「別に、ただB○Bの上位入賞プライズに何を貰うかって話よ」

「俺は前回には参加してないが、確か、ゲーム内でのアイテムか現実でモデルガンを貰うかって選択式だったな」

「現実で貰う？まさか運営体から贈られるのか？」

「ええ、国際郵便でね」

そこでキリトは宙の一点を見つめ何かを考えた。

「でも、俺がアカウントを作った時、リアル情報なんてメールアドレスか性別年齢しか要求されなかったぜ。住所はどうやって？」

「キリト、忘れたのか？B○Bにエントリーする時、住所を入力する欄があつただろ」

「ああ、そういえばそうだった……シノン！前の大会では誰が賞品に何を貰ったか分かるか!？」

キリトが真剣な表情となり、シノンに聞く。

「えっと、ダインはゲーム内での装備。《ゼクシード》《薄塩たらこ》はモデルガンだと思うわ。《ゼクシード》は効率主義だし、《薄塩たらこ》は本人が言ってた。」

「シノンは!？」

「私もモデルガンよ。まあ、引き出しにしまえばなしだけど」

シノンが、付け加えるように言うが、キリトはもう聞いていなかった。

それどころかブツブツと何か言い始めた。

「ああ！そうか、そうだったのか!!」

急に立ち上がり声を上げた。

「俺たちは、とんでもない勘違いをしていたんだ!」

「キリト、誤解って?」

「VRMMOは、プレイヤーの意識を切り離し、現実世界から仮想世界に行く。プレイヤーはそこで喋り、走り、戦う。だから、死銃はこの世界から殺してると思った」

「違うのか？」

「違う。プレイヤーの身体も、心も、移動なんてしちゃいない。現実世界と仮想世界の違いは脳が受け取る情報量の多寡の違いだけ。アミュスフィアで、電子パルスに変換された映像を見て、音楽を聴いてるだけだ」

「何を、言ってるの？」

「死銃、奴には現実世界での共犯者がいるんだ！死銃がGGO内でプレイヤーを撃つ。それと同時に、ターゲットの部屋に侵入した共犯者が、プレイヤーを殺す。これが、この事件の真相だ！」

第19話 礼

「確かに、可能性としては高いな」

キリトの推理にリンクスはそう言う。

「だが、家はどうかやって突き止める？住所が分からなければ、共犯者は殺すこともできないぞ」

「エントリーの時だ。エントリーの際、プレイヤーは端末を使って本名や、住所を入力する。その時に、後ろから覗き見たんだ。遠近エフェクトも、スコープや双眼鏡越しに見れば無効化できる」

「でも、そんなことしたらGMに突き出されてアカウント抹消されかねない。アメリカのゲームだからハラスメント関係はかなり対処が厳しいわよ」

「《メタマテリアルオプティカル・カモ光歪曲迷》……なるほど。そう言うことか」

リンクスはそれに気づき、にやりと笑う。

「ああ。もし、あのアイテムが街中でも使えるところなら……総督府も薄暗いし、物陰で透明化したら誰も気づかないはずだ。そして、あとはスコープや双眼鏡で情報を盗み見る」

「とりあえず、情報を盗んだ方法は分かった。なら、家の鍵はどうだ？」

「《ゼクシード》も《薄塩たらこ》も1人暮らしよ。それも、セキュリティの甘い初期型の電子錠の古いアパート。住人はGGOにダイブ中で無防備。多少の知識があれば破るのは容易だろうし、住人に気づかれる心配もないはずだわ」

「心不全は？」

「心不全の方も、何か薬品を使ったんだろう。体は発見が遅れて腐敗してたから、注射痕は見つけにくいだろうし、VRMMOプレイヤーが心臓発作で死ぬ例は少なくない。最初から、薬品での殺害と疑って掛からないと分からないだろう」

「少しずつ真相が分かってく中、リンクスは何かを考える。」

「その推理、会ってるとしたら相当まずいな」

「え？」

「つまり、死銃のターゲットは住所が分かっている、尚且つ一人暮らしのプレイヤーだ。そして、アイツ等はシノンを狙った」

「そうか!」

リンクスの言葉に、カイは声を上げる。

「シノンをあの手で撃とうとしたってことは、今、シノンの側には死銃の共犯者がいる!」

「う、嘘……!?!いいいや……嫌!」

シノンは恐怖から体を強張らせ、悲鳴を上げそうになる。

「落ち着け」

そんなシノンに、リンクスが声を掛ける。

「大丈夫だ。お前はまだ、死なない」

リンクスはまるで子供に言い聞かせるように、ゆっくりと言う。

「あの銃で撃たれない限り、共犯者は何もして来ない。それがアイツ等が決めたルールだ。むしろ、今この場で自動切断になんてなったらそれこそ危険だ。分かるな?」

「う、うん……」

「なら、ゆっくり呼吸をしろ。今は、落ち着け」

リンクスの言葉に、シノンはゆっくりと深呼吸をする。

「落ち着いたか?」

「……ええ、少しは」

少しばかり落ち着きを取り戻したシノンは、リンクス、カイ、ミト、キリトを見る。

「取り乱してごめんなさい。少し冷静じゃなかったわ」

「いや、無防備な自分の側に見知らぬ誰かがいるなんて、誰だって取り乱すさ」

「ともかく、共犯者に手を出させないためにも、死銃を倒す必要はあるな。それに、リヒターもだ」

「でも、敵は死銃だけじゃない。J・B、ジョニー・ブラックがいる」

「それだけじゃない。スノウ、彼女はコユキだった。私への歪んだ執着に、カイへの憎悪。はつきり言ってかなり質が悪いわ」

「ジョニー・ブラックに、コユキ。どちらも一筋縄じゃ行かないな」

カイはそう言つて、少し何かを考える。

「まさか……………」

「カイ？」

何かに気づいたカイに、ミトは声を掛ける。

「いや、なんでもない。……それより、敵はそいつらだけじゃないはずだ。他の参加者だつてまだいる。大変な戦いになるだろうな」

「死銃にゲーム内での仲間もいる以上、残り6人になったら、奴1人を残して全員自殺するつて手段も使えないか」

「それに、この洞窟に隠れてかなり時間が経つてゐるわ。勘のいいプレイヤーなら、私たちが衛星スキャンの届かないところにいるつてのは分かつてるだろうし、スキャンの届かない場所は限られてくる。いづれ見つかるわ」

「つまり、ここでの籠城ももう終わりつてことだな」

そう言い、リンクスは《三八式歩兵銃》を担ぎなおし、立ち上がる。「この先に、軍事工場跡地つてフィールドがある。高台も多く、狙撃手には絶好のポイントだ。おまけに中も入り組んでるし、会敵のリスクも低い。そこで待ち構えよう」

「そうだな。こちらから攻撃を仕掛けるよりは、向こうから来てもらう方が罨も張りやすいかもな」

カイも頷き、立ち上がる。

「シノン、このまま1人にする訳には行かないから一緒に来てくれ」

「ええ、元からそのつもりよ。奴を倒して……正々堂々と生きるんだから」

まだ体を震えさせているも、強い決意を胸にシノンも立ち上がる。

「よし。それじゃあ、シノンとリンクスで狙撃。俺とミト、キリトの3人で死銃たちを倒す。いいな？」

「ああ」

「ええ」

「了解だ」

「OKよ」

全員が頷き合い、洞窟から出る。

カイが先に出て、周囲の安全を確認すると、全員出てくるように
ジェスチャーをする。

「なあ、キリトとミト、だったか？」

すると、洞窟から出ようとする2人をリンクスが呼び止める。

「なんだ？」

「どうかした？」

「いや、今の内に礼を言っておこうと思ってな」

リンクスは2人をまっすぐ見つめ言う。

「アイツの過去、知ってるんだろ？……カイの奴、SAOから帰って
来てから変わった。憑き物が落ちたって言うか、少なくともあいつ自
身、過去と折り合いを付けたんだと思う。お前らのお陰だ。アイツ
の親友として、礼を言いたい。カイの側にいてくれてありがとうな」

リンクスはそう言って、頭を下げる。

「ちよ、ちよつと……やめてよ……そんな頭を下げるなんて」

「そ、そうだぞ。それに、俺たちもカイには結構助けられたし、むしろ
そんなことしかできなくて申し訳ないって言うか」

「それでも、アイツには大きなキツカケだったんだ。だから、ありがと
うな」

リンクスは優しく笑う。

「これからもアイツと仲良くしてやってくれ。それだけだ」

そう言い、リンクスは洞窟を出る。

「……………」

そんなリンクス見送り、ミトとキリトは息を吐く。

「なんか、カイとの仲の良さを見せつけられた気分だな」

「そうね。流石はカイの親友って所ね。カイの事、よく見てるわ」

「……言われなくても、カイは俺の相棒なんだ。相棒なら、当然のこと
だつての」

「そうね。私だってカイの彼女なんだから、言われなくても当然よ」

2人は笑い合い、3人の後を追うように洞窟から出た。

向かうは。軍事工場跡地……………決着の舞台だ

第20話 3人の所へ

アスナが、菊岡を呼んでから5分ほどで菊岡もといクリスハイトが来た。

ひよろつとした長身にマリンプルーの長髪、毒気の無い細面に銀縁の丸眼鏡を掛けた水妖精族^{ウンデイナーネ}で、アスナと同じ魔法使い職だ。

「いや、遅くなってすまないね。これでも、セーブポイントから急いで飛んできたよ。ALOに速度制限があつたら免停確実だ」

惚けたセリフを言うクリスハイトに、その場にいた全員がイラつとした

「クリスハイト、貴方が知ってること全部教えて」

雑談をする暇もなく、アスナはクリスハイトにそう切り出した。

「いや、知ってることって言っても、まず何から話せばいいのか」

誤魔化す気であるクリスハイトに全員が苛立ちを見せた。

「ならその役は私達が引き受けます」

「この5分の間で情報収集は済んでます」

ノアとユイが現れ、いつもの笑顔ではなく厳しい表情をしてる。

そこから2人は、GGOと死銃の事件を解説し、それにより2人のプレイヤーが死んだこと、そして、先程死銃に撃たれたプレイヤー《ペイルライダー》が死んだことも説明した。

ネットに出回る情報や憶測などを引き出し、それを処理する能力と、正確な日本語にまとめ上げる言語化AIの完成度は圧巻だが、2人にはかなりの負荷が掛つたらしく、説明が終わると疲れたのか2人は互いに体を預け合うように寄りかかった。

アスナはお疲れ様と言って2人を手の平に乗せる。

「これは驚いたな。この短時間でそれだけの情報を集め、その結論を出すとは。どうたい君達、ラー……いや、《仮想課》でバイトしてみないかい？」

とぼけたように言うクリスハイトに全員が睨みつける。

「あ、いや、すまない。誤魔化すつもりはない。御チビさんたちの説明は事実だよ」

「じゃあ何か、クリスの旦那よ。テメエが彼奴らのバイトの依頼主だつてんなら、テメエはそこに殺人事件の犯人がいると分かつて彼奴らを送り出したつてののか!？」

「落ち着けクライン。ここで、こいつを責めても何も変わらねえだろ」
今にもカウンターから飛びかかりそうなクラインをトバルが制し抑える。

だが、やはりクリスハイトに対し怒りがあるらしく、刀を持つ手には力が入ってる。

「待ってくれ、クライン氏。殺人事件ではない。それが僕とキリト君とカイ君の三人でたつぷりと話し合つて出した結論なんだ」

「どういうことだ?」

「考えてみたまえ。アミユスフィアはナーヴギアじゃない。あらゆるセーフティが設けられ脳には毛ほども傷を付けない。ましてや直接機械と繋がってない心臓を止めるのは不可能だ。それが話し合つた結論だ」

クリスハイトさんの冷静な結論にクラインは「んぬぬ……」と引き下がる。

「クリスハイト、死銃は私達と同じSAO生還者よ」
サバイバー

「それは……本当かい?」

「名前までは分からないけど、それは確かよ。《笑う棺桶》ラフィン・コフィン所属だった殺人者プレイヤー。当時のメンバーを全員リストアップして、自宅からGGOにログインしてるか、契約プロバイダに照会すれば「いや、すぐにはできない」

アスナが言い終わる前に、クリスハイトはそう言う。

「そんなことをしようとするなら、裁判所に令状を発行してもらふ必要があるし、その手続きに時間もかかる。捜査当局への事情説明も必要だから、そんなすぐには無理だ」

クリスハイトは俯いて言う。

「結局はお役所仕事つてことか。めんどくせえ……」

「トバル君の言うことはご尤もだ。だが、そうやって世の中は回ってるんだ。それに、仮にできたとしても、仮想課のデータベースにある

SAOプレイヤー諸君のデータは本名とキャラネーム、最終レベルぐらいだ。所属ギルドやSAOで何をしていたかまでは分からない。元ラフィン・クライン《笑う棺桶》所属と言う情報だけで、現実の住所氏名を突き止めることはできない」

クリスハイトの言葉に、全員が沈痛な面持ちになる。

誰も、カイたちの援護にもいけないこの状況に、苛立ちと無力さを実感していた。

「バ……ツカ野郎どもが!!彼奴ら、水くせえンだよ! 一言言ってくれりや、俺もどこにだつてコンバートしたつてのによ!!」

「師匠たちの事です……きつと、俺たちを危険な目に合わせないために黙ってたんだと思います。師匠もキリトさんも……そういう人です」

「他人が犠牲になるのは嫌がるくせに、自己犠牲は厭わない……本当に自分勝手にもほどがあるぞ……!」

クライン、レオ、トバルの3人は悔しさをにじませそう言う。

「クリスハイトさん、本当に何もできないんですか?」

ジークはクリスハイトにそう尋ねると、クリスハイトは首を横に振る。

「すまないが、こちらができることは何も無い。僕にできたことなんて、GGO内部に協力者を送つて、武器の提供をした事と、彼らの身体に危害が起きないように、常にモニタリングをしてるぐらいさ」

その言葉に、アスナが反応する。

「それって、貴方はキリト君たちが今どこからダイブしてるか知ってるってこと?」

「ああ。知ってるよ。というか、僕が用意したんだ。セキュリティは鉄板、モニタリングも盤石。そばに人もいるし、3人の現実身体の安全は保障「どこですか?」え?」

「3人は何処にいるんですか?」

「……………悪いが、教えられない。これでも、この話はかなり危険なんだ。ここまで話して挙げただけでも十分サービスだ」

「危険って……………これだけ話したんだから、今更危険も無いでしょ!!」

「…………とにかくこれ以上は教えれない」

そう言つてクリスハイトは立ち上がろうとする。

「待てよ」

だが、それをトバルが止めた。

「そうやって俺らを子ども扱いして、危険から遠ざけるのが正しいと思つてんのか？なら、随分と見くびられたもんだな！」

そう言うと、トバルは持つていた刀を抜き、クリスハイトに攻撃をする。

「うをつ!？」

クリスハイトは後ろに仰け反り、トバルの攻撃を躲すもそのまま後ろに倒れこむ。

その瞬間を逃さず、レオも動き、腰の短剣を抜いてクリスハイトの背後へと回り、組み付いて、ナイフを喉元に充てる。

「ちよつ!?!まつ!?!「待たねえぞ」

何かを言いかけるクリスハイトに、トバルはドスの利いた声で、刀の切っ先を向ける。

「喋る気になれないなら、その気にさしてやろうか？死ななくても、恐怖を刻むことはできるぞ?。」

「死ねない戦闘つて、意外と精神的に疲れるし、恐怖の度合いも凄いですよ」

トバルとレオの2人に脅され、更に周りのメンバーからのキツイ視線に、クリスハイトは溜息を吐く。

「わかった、降参だ。トラウマになってALLOができなくなるのは僕も不本意だ。教えるよ」

クリスハイトがそう言い、トバルとレオは武器を下ろす。

「3人がいるのは千代田区お茶の水の病院、キリト君がリハビリで入院してた病院だ」

それを聞き、アスナは近いと思った。

キリトがリハビリ入院してた病院は、アスナがログインしてる《ダイシー・カフェ》からタクシーを使えば5分も掛からない。

「私、行ってくる。現実世界のキリト君たちの所に」

アスナはそう言つて、ログアウトをしようとする。

「待てよ、1人で行く気か？」

だが、トバルがそれを止める。

「俺らも行くぞ」

そう言つて、全員が立ち上がる。

「アイツ等が心配なのは、お前だけじゃねえんだよ」

「そうよ。それに、何も言わずに勝手に行ったんだから、一言文句言わないと気が済まないってもんよ！」

「俺もです！師匠はいつもいつも、肝心なことを俺に話もしないで、1人で決めて……………今日と言う今日こそは許しませんから！」

「そこは、キリトさんとカイさんの優しさで、良い所だと思います。でも、やっぱりあたしたちに心配を掛けさせたんですから、そこは許しません！」

「私も！お兄ちゃんは大丈夫だとか言つて、全然大丈夫じゃないし！妹として、ガツンツとお説教なんだから！」

「そう言う訳です。ここにいる全員、キリトさんとカイさん、それにミトさんにも言いたいことがあるんです。それなら、全員で向かうのが一番でしょう」

「俺も行くぞ！今度こそは、アイツ等に財布の中身が無くなるまで飯奢らせるぐらい、ド叱つてやるんだからな！」

トバル、リズ、レオ、シリカ、リーファ、ジーク、そして、クラインがそう言う。

そんな7人を見て、アスナは笑う。

「うん、わかった。全員で行こう。キリト君にカイ君、ミトにお説教よ！」

「おう！」「はい！」「ええ！」

第21話 軍事工場跡地

カイたちは隠していたジープに乗り、軍事工場跡地へと向かった。工場や倉庫などが高いフェンスで囲まれた場所に、5人は踏み入れる。

「中々に広いな……」

「B○Bでも屈指のフィールドだ。様々なギミックがあつて、見ごたえのある戦いができる。プレイヤー側も、視聴者側も楽しめる所だ」
「前の大会でも、『B○B見どころランキング』だったので、一番人気はここでの戦いだったわ」

「それなら隠れる所もあるだろうし、奇襲には打って付けね」

ミトはそう言うと、カイたちに向き直る。

「悪いけど、ここからは私は別行動をするわ」

「なっ!?!ミト、急にどうしたんだ!?!」

突然、別行動をしようと言い出すミトにカイは驚く。

「コユキは必ず、私を狙ってくる。あの子、カイを狙っているけど、もし私が1人でいれば確実にこっちに来る。死銃にジョニー・ブラック、リヒター、コユキの4人相手にするのは私たちでもキツイわ。なら、少しでも相手側の戦力を分散させましょう」

ミトの言い分に、カイは納得した。

だが同時に、ミトをあの特異人と戦わせることに嫌悪感を覚える。

「心配しないでカイ」

するとミトは、カイの手を取り握りしめる。

「私は大丈夫だから。それに……これは私のケジメでもあるの」

ミトからの強い決意に、カイはしばしの沈黙の後、息を吐く。

「わかった。でも、無理はしないでくれ」

「ええ、わかってる」

「なら、俺も別行動だな」

すると、キリトもそう言い出した。

「カイ、俺はジョニー・ブラックを相手してくる」

「キリトまで……」

「俺が挑発すれば、奴は確実に乗って来る。伊達にアイツと何度も剣を交えてないからな。止めても無駄だからな」

「止めたところで、お前は聞かないんだろ？」

「よくわかってるな」

「相棒なんだから、当たり前だろ」

カイはどこが呆れたように笑う。

「なら、ジョニー・ブラックとコユキは2人に任せろ。頼んだぞ」

「もちろん」

ミトとキリトはそう言い、その場を離れる。

「JBとスノウ、この2人はミトとキリトに任せよう。俺たち3人で死銃とリヒターの2人を相手する。リンクス、シノンと一緒に狙撃での援護を頼む」

「1人で2人を相手できるのか？」

「なんとかするさ。それに、一番危険なのはあの銃の前にシノンを晒すことだ。それなら、俺が死銃たちを押えつつ、2人に狙撃で援護してもらおうが一番だ」

「わかった。シノン、付いて来い。高台を取るぞ」

「ええ。……カイ、気を付けて」

シノンはカイにそう言い、リンクスの後を追う。

「……………さあ、来いよ。お前は俺を殺したいだろ……………ザザ」

第22話 それぞれの戦い

キリトは軍需工場の東側へと向かった。

神経を張り巡らせ、集中する。

そして、砂を踏む音が聞こえ、目を開ける。

「やっぱり来たか、ジョニー・ブラック」

「こうもあからさまに1人でいられたら、行かないのは失礼にあたるだろ?」

「驚いたな。お前にも、そう言う考えはあるんだな」

「ああん?随分と失礼じゃねえかよ!ええ?《黒の剣士》様よお!」

ジョニー・ブラックはそう言い、ナイフを抜く。

「1人で俺を抑えようと考えてるみてえだけどよお、その余裕がいつまで続くか見ものだなあ!」

曲芸のようにナイフを回転させ、構える。

そんなジョニー・ブラックにキリトは、冷めた目を向け、溜息を吐く。

「その言葉、そのまま返してやるよ。お前の余裕な面、いつまでもつか楽しみだぜ。それと、一つ訂正させてもらおうぞ」

キリトは、光剣のスイッチを入れ、青と緑の光刃を輝かせ、回転させて、構えを取る。

「俺はお前を抑えに来たんじゃない。倒しに来たんだ。お前には、S AOでカイにしたことへの罰を与えないとだからな」

そう言いキリトは、誰にも見せた事のないような獰猛な笑みを浮かべる。

「お前はここで死ね!ジョニー・ブラック!」

「いいねいいね!最っ高だねえ!今まで猫かぶってたのか?いい感じにヒリつくぜえ!キリト!」

ジョニー・ブラックは笑いながらキリトへと突っ込み、キリトは青と緑の光の尾を夕闇に引きながら地面を蹴り、ジョニー・ブラックへと向かった。

キリトと別れたミトは、軍需工場の西側へと来た。

「ミト様あ〜♡」

「やっぱり来たわね……………」

嬉しそうな声でミトの名を呼び、手を振りながらやって来るコユキに、ミトは額に手をやり溜息を吐く。

「ミト様、貴女のコユキが参りました♡」

「別に貴女は私のじゃないわよ」

ミトは冷たい態度で、コユキにそう言う。

「酷いですね、ミト様。でも、そんなミト様も素敵です♡」

コユキは頬に手をやり、身体をくねらせる。

「《SAO》に居た頃はもうちよつとマシじゃなかったかしら？それとも、そっちが素なの？」

「さあ？どうでしょう…………でも、そんなこと愛の前には些細な事です。それよりも、ミト様からの愛のメッセージ、しっかり届いてましたよ。ミト様1人で、こんな所に居るなんて…………私を待っていた以外ないですよね？ようやく私の愛が届いたんですね♡はあく…………嬉しいです♡」

自分の世界に浸かり、妄想を垂れ流すコユキに、ミトはもう飽きれと軽蔑の眼差しを向ける。

「妄想もそこまでいくと賞賛に値するわ。まあ、待っていたってのは間違いじゃないけど」

ミトはそう言い、フォトンサイズを取り出し、紫の光刃を輝かせ、コ

ユキを見る。

「コユキ、貴女はここで私が倒す。あの世界で、貴女を正しく導けなかった者としてのケジメをつける！」

ミトは強い決意を持った眼差しで、コユキを見る。

「ああ……♡その目……最高です♡やつぱり、貴女は私の憧れだ……希望だ……理想だ……愛だ！あの男を殺して、私はミト様を取り戻す！私の……私だけのミト様を！」

コユキは狂喜し、光剣を出し、赤い光刃を怪しく、不気味に輝かせる。

「さあ、ミト様♡たっぷり愛し合いましょ♡」

「その狂った幻想ごと、私が切り裂いてあげるわ」

ミトとコユキは同時に地を蹴り、激突した。

「そろそろか」

カイは時刻を確認し、マップを開く。

監視衛星からのスキャンデータが、マップに転送され、現在残っているプレイヤーの位置が示される。

ミトは工場跡地の西側、キリトは東側、そして、カイは南側に表示される。

シノンとリンクスはカイの背後の建物に入っており、スキャンには

掛かっていない。

ミトに向かう《スノウ》、キリトに向かう《J・B》、そして……

「久しぶりだな……ザザ」

「俺が、分かるか……」

死銃こと《ステルベン》、またの名を《赤目のザザ》。

ザザはマスクの目を赤く光らせながら、カイの前に対峙する。

「対峙した時から予感はしていた……だが、ジョニー・ブラックがいると聞いて、確信に変わった」

カイはサーベルを抜き、ザザへと向ける。

「お前たちのトリックは見破った。後は、お前たちを倒して、現実で捕らえるだけだ」

「できると、思うか？……殺意の牙が、抜けたお前に」

「できるさ。未だに人殺しをしてるお前ら程度に、負ける俺たちじゃない」

「ふん、ほざきやがる……」

そう言うと、ザザは背負っていた《L115》を掴み、本来はクリーニング・ロットを入れる場所に仕込んでいた何かを取り出す。

そのまま《L115》を放り捨て、手にしたそれを構える。

細長く、先端が鋭利に尖った得物。

「エストックか？ま、サーベルが作れるんだから、作れても不思議じゃないか」

「《ナイフ作製》スキルの、上位派生《銃剣制作》で、作れる。長さや、重さは、この辺が、限界だがな」

ザザはそう言うと、切っ先をカイへと向ける。

「今度こそ、お前を殺す……あの殺意を、あの憎悪を、この身を焦がす様な灼熱の眼差しを、俺に！向ける！《紅蓮の剣豪》！」

「悪いが、今は《焰の剣聖》だ！《赤目のザザ》！」

2人は同時に走り出し、刃を交え合う。

「戦い始めたな」

建物の窓から外の様子を伺いつつ、リンクスが言う。

「早く狙撃ポイントに向かおう。行くぞ、シノン」

「ええ」

リンクスとシノンは頷き合い、走り出す。

「リヒターの姿が見えなかった。どこに居るのかしら……」

「スキャンでは南側から向かって来ているのが確認できた。この建物に入るにはカイと死銃の戦いの横を絶対に通らないといけない。カイなら、戦闘中でも周りに目を張れる。それに、ビルの入り口には何重にも、トラップを仕掛けた。トラップを解除したら、別のトラップが作動する仕掛けもある。カイの目を潜り抜けたら、トラップで殺せなくても、侵入ぐらいは分か「リンクス！」

唐突にシノンが叫んだ。

それと同時に、リンクスの脇腹に衝撃が走る。

よろめくリンクスに向かって、光り輝く物が一閃される。

それはナイフだった。

リンクスはよろめきながらも、『三八式歩兵銃』を回し、銃床でナイフを弾く。

弾き飛ばされたナイフは、音を立てて階段から階下へと落ちていく。

「その両目を抉ってやりたかったよ……山猫」

狂った笑みを浮かべ、リヒターはリンクスとシノンを見る。

その瞬間、リンクスは動いた。

リヒターへと掴み掛り、壁へと押し付ける。

「シノン！上へ行け！カイの援護を！」

「くっ……ごめん！」

シノンはリンクスを助けようかと思うが、もしリヒターがああ銃を持っていた場合、撃たれた瞬間に自分は死ぬ。

それが理解できていたからこそ、シノンは上へ向かうことに決めた。

「邪魔だよ……どけ！」

リヒターは、リンクスの腕を掴み、捻り上げ、自身から引き？がすと一本背負いをして、リンクスを投げ飛ばす。

「逃げないでよ、朝田さん。待つてよお」

既にリンクスなんか、眼中にないと言いたげにシノンの走り去っていく方向を見るリヒター。

「くっ……させるかよ」

リンクスは床に倒れた態勢で、上半身だけを起こし、《三八式歩兵銃》を構える。

引き金を引き、放たれた弾丸は天井にあたる。

そして、分厚い鉄の塊が通路を遮断した。

それは防壁で、リンクスは頭上に合った防壁のロック機構を破壊し、防壁を下ろした。

「良くも邪魔してくれたな……山猫！朝田さんの前に、お前を殺してやるよ！」

リヒターはそう叫び、《サイガ12》の銃口をリンクスへと向ける。

「やれるもんなら、やってみろ。このボンボンが」

リヒターを挑発しながら、リンクスも銃口を向ける。